

日本美術年鑑

昭和十七年版

美術研究所

序

昭和十一年以來、逐年編纂刊行せる日本美術年鑑は、茲に第七冊、昭和十七年版を世に公にする運に至つた。今や我邦は大東亞建設の大旗を掲げ、内外の風雲、益々急を告ぐるものあり、武備の増強は一億國民の等しく關心する所であるが、之と併行して文化振作の事業又一日も忽にすべからず、本年鑑がこの文化、美術の方面に於ける國民の活動を卜する指鍼として、幸に逐年刊行して、年鑑の意義を全からしめつゝあることは、尤も欣快とする所である。現に今回の如き、戦局の進展と共に、用紙並に印刷に於て幾多の制約を蒙つたに拘らず、縮少減頁等のこともなく、例年と變らざる内容を盛り得たことは、そこにも旺盛なる國力の支援を感知して、大方諸賢と共に、我等の且つ悦び、且つ心勇む所以である。

本年鑑の編纂に當つては、各方面の懇篤なる協力に待つ所が甚だ多い。殊に文部省教化局、其他の諸官廳、帝室及び公私諸博物館美術館、學校、公私の研究諸機關、雜誌社並に個人として研究家及び美術家等から多數資料の提供、寫眞の贈與等を受けた。茲に特記して深厚なる謝意を表する。

猶本年鑑の編纂執筆に就ては、主として所員隈元謙次郎、助手倉田平吉、同河北倫明、同黒川光朝をして之に當らしめ、現代建築の部門に關しては囑託山田智三郎に其分擔を委賴した。

本年鑑の一層の改善は、常に本所の苦心努力する所であり、専ら記事の正確と、内容の充實とに留意してゐるが、若し江湖諸賢にして、或はあり得べき脱漏、誤謬、其他不備の點を指摘し、示教を垂るゝに吝ならずんば、洵に本懷の至である。

昭和十八年三月

美術研究所長事務取扱 田 中 豊 藏

凡例

一、本年鑑はその内容を「本欄」「挿圖」及び「附録」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般につき、昭和十六年度即ち同年一月から十二月に至る一箇年間に現はれた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、附録は便覧として行政、教育、觀覽等に關する官公施設の重要なもの、美術家團體一覽、定期刊行物一覽、美術家及美術關係者名簿を便宜上輯録した。記事中「本年」とあるは昭和十六年を指すもの、月日のみを舉げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫のうちで「日本畫」及び「洋畫」の區別は、嚴密には困難の場合もあり、又その稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜のため姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つてはこれを美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意をひくものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合には敬稱は一切これを省いた。

一、本欄、現代美術の中、美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上茲に含めて取扱ふこととした。

一、同、展覽會以外の作品に就いては、その範圍を擴げる時は際限なきため、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於いては、これに關する彙報的な記事若干を輯録するに止めた。普通教育に於ける圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外はこれを取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、同、國寶略説の欄に於いては美術關係の作品の解説のみに止めた。

一、挿圖として掲載した現代美術作品の寫眞は、年度内に製作、若くは新作として發表されたものに限つた。その撰擇は、大體各分野における製作活動を代表せしむるを旨とし必しも傑作のみを選出した譯ではない。古美術に關しては、年度内における新指定の國寶の一部を載せた。

一、附録は、昭和十六年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、その後の消息をも例外的に記載、若くはこれによつて訂正した部分もある。

一、本欄中美術文獻目錄、竝に附録中美術家及美術關係者名簿に就いては、夫々その項の初に凡例を記した。

目次

序	一
凡例	二
目次	三
挿圖目次	五

本欄

美術界彙報	六
美術展覽會	一〇

一月	一〇
----	----

一水會展—小村雪岱遺作舞臺美術資料展—大阪新洋畫協會遺作展—
和田英作近作個展—松本葵水個展—春臺美術展—白日會展—油繪四
人展—書鈴會展—等

二月	一一
----	----

朱玄會展—萩須高德滯歐作品展—園丘會展—光風會展—吳建遺作展—
古賀春江遺作展—大平洋畫會展—産業工藝品展—竹内豐滯歐作品
展—白御會展—等

三月	一二
----	----

案本一洋個展—園外社展—新美術家協會展—旺玄社展—獨立展—中
村葵回顧展—上社會展—田崎草雲記念展—現代名作繪畫展—三井洋
畫コレクション陳列—兒玉畫塾展—東光會展—連袖會展—獨立小品
展—春季大幅展—東京美術學校春季特別展觀—春の青龍社展—邦畫
一如會展—尙綱會展—煌土社展—國畫會展—等

四月	二一
----	----

三果會展—全關西美術展—綠巷會展—木島櫻谷遺作展—新興美術院
展—日本畫院展—瑛友會展—塊人社展—美術創作家協會展—春陽會
展—猪熊弦一郎歸朝發表展—讀畫會展—青丘會展—造型版畫協會展—
日本水彩畫會展—構造社展—贈農村造場繪畫展—高間惣七個展—

目次

第一美術協會展—美術文化展—等	二八
-----------------	----

五月

小出梢重遺作展—朱葉會展—日本漆藝院展—橋本關雪聖戰記念展—
大阪女流畫家展—日本美術協會展—京都市展—新美術人協會展—清
水正太郎陶磁展—新古典美術協會展—綜和工藝戰時文化工藝展—心
印畫塾展—若葉會展—東丘社展—大日美術院展—一水會小品展—靜
岡美術協會展—正統木彫家協會展—双臺社展—大阪市展—創元會展
—白閃社展—大日本海洋美術展—新制作派協會春季展—現代美術協
會展—汎美展—東邦彫塑院展—三春會—日本彫刻家協會聯合展—等

六月	三三
----	----

朝鮮美術展—現代陶藝美術展—珊々會展—野間仁根新作展—青甲社
海軍獻納畫展—直土會展—川島理一郎蘭花個展—清光會展—貿易局
工藝品輸出振興展—藤田嗣治個展—等

七月	三五
----	----

聖戰美術展—九元社展—川端龍子四連作展—歷程美術協會展—工藝
美術作家協會ガラス部展—新美術人協會小品展—等

八月	三七
----	----

山南會展—青龍社展—等

九月	三八
----	----

國風彫塑會展—院展—二科展—アイヌ工藝文化展—明朗美術聯盟展
—川島理一郎泰國風景展—航空美術展—三井コレクション陳列—大
輪畫院展—朝倉塾展—小村雪岱追悼展—九室會航空美術展—現代大
家新作展—乾坤社展—尙耀會新作展—美術新協展—一水會展—新制
作派展—獨立秋季展—日本油繪會展—日本畫名幅展並明治洋畫回顧
展—東京工藝綜合展（美術工藝部）—等

十月	五四
----	----

野口謙藏作品展—貿易局輸出工藝圖案展—東京工藝綜合展（産業工
藝部）—關口俊吾滯歐作展—田邊至近作展—小村雪岱遺作展—方君

壁個展——東陽會試作展——京都美術館秋季陳列——建築展——文展——中村
彝造作展——蔣兆和作品展——菅野圭介洋畫展——河合寛次郎新作展——正
宗得三郎日本畫展——等

十一月

六七

黑門會展——涼晨會展——岡本太郎滯歐作展——渡邊大虛水墨畫展——春陽
會秋季展——濱田庄司近作展——村上華岳追悼展——兵庫縣美術家聯盟展——
茶わん創刊十周年記念現代大家新作日本畫展——牧野虎雄近作展——
忠愛美術院展——大東亞共榮圈報導展——青々會展——新梅造社展——美術
工藝作家協會染色部展——日本版畫協會展——新關西美術協會展——日東
美術院展——七絃會展——等

十二月

七〇

石川滋彦個展——新生活美術展——福田惠一個展——新東亞美術工藝展——
鬼頭颯二郎個展——岡田謙藏新作展——新日本美術聯盟展——美術文化小
品展——北島淺一個展——等

展覽會以外的作品

七三

日本畫——洋畫——彫刻——挿繪——建築

物故作家及美術關係者

七六

美術行政・教育

八〇

美術講演・講義

八二

古美術關係彙報

八四

古美術展覽會・展觀

八五

博物館・美術館新收品

八七

美術市場

八八

東京——名古屋——京都——大阪各美術會館賣立

古美術保存

八九

昭和十六年度國寶指定、御料歸屬及所有者變更等

八九

國寶修理補助金交付額

九八

重要美術品等認定、御料歸屬、資格消滅及改正

九九

附昭和十五年度朝鮮寶物古蹟指定

一二

昭和十六年度指定國寶略說……………一一四
同 國寶建造物維持修理實施狀況……………一二二
同 朝鮮寶物古蹟維持修理實施狀況、朝鮮總督府發掘事業……………一二三
昭和十六年度美術文獻目錄……………一二五

凡例・目次

一二五

現代美術關係文獻

一二七

定期刊行物

一二七

單行圖書

一三八

古美術關係文獻

一四一

定期刊行物

一四一

單行圖書

一五三

挿圖

日本畫

一一

洋畫

二一

版畫

四二

彫刻

四四

工藝

五二

建築

五八

新指定國寶

六一

物故作家及美術關係者

六六

附錄

國寶保存會——重要美術品等調査委員會——帝室技藝員——帝國藝術院——文部

省美術展覽會——貿易局工藝品輸出振興展覽會——貿易局輸出工藝圖案展

覽會——美術研究所——東京美術學校——工藝技術講習所——東京高等工藝學

校——京都高等工藝學校——京都市立繪畫專門學校——京都市立美術工藝學

校——工藝指導所——陶磁器試驗所——帝室博物館——恩賜京都博物館——大禮

記念京都美術館——大阪市立美術館——奈良帝室博物館——朝鮮總督府博物

館——李王家美術館……………一九

美術家團體一覽(五十音順)……………五一

定期刊行物一覽(五十音順)……………五一

美術家及美術關係者名簿(五十音順)……………五五

挿圖目次

日本畫

青衿會展(一).....	一	東京會新作展(一三三).....	一九
白御會展(二、三).....	一	忠愛美術院展(一三四).....	一九
兒玉塾展(四).....	一	日東美術院展(一三五).....	二〇
春の青龍社展(五一九).....	一	七絃會展(一三六—一四〇).....	二〇
春虹會展(一〇—一三).....	二	新日本美術聯盟展(一四一).....	二〇
新興美術院展(一四—一七).....	二		
日本畫院展(一八—二二).....	三	洋畫	
讀畫會展(二二—二六).....	四	和田英作個展(一).....	二一
橋本關雪聖戰記念展(二七).....	四	光風會展(二).....	二一
京都市展(二八、二九).....	四	太平洋畫會展(三).....	二一
新美術人協會展(三〇—三二).....	五	新美術家協會展(四).....	二一
南畫展(三三、三四).....	五	旺玄社展(五).....	二一
大日美術院展(三五—三九).....	五	獨立展(六一—七一).....	二一
翔鳥會展(四〇).....	六	上杜會展(一八).....	二三
大日本海洋美術展(四一).....	六	東光會展(一九—二二).....	二三
珊々會展(四二—四四).....	六	國畫會展(二二—二六).....	二四
清光會展(四五、四六).....	七	三果會展(二七).....	二四
聖戰美術展(四七—五〇).....	七	美術創作家協會展(二八—三一).....	二四
山南會展(五一).....	八	春陽會展(三二—三八).....	二五
青龍社展(五二—六五).....	八	日本水彩畫會展(三九—四〇).....	二六
院展(六六—八九).....	一〇	美術文化展(四一—四三).....	二六
佛印巡迴展(九〇—九三).....	一三	童林社展(四四).....	二七
明朗美術展(九四).....	一四	創元會展(四五、四六).....	二七
航空美術展(九五、九六).....	一四	海洋美術展(四七—五一).....	二七
美術新協展(九七).....	一四	川島理一郎個展(五二).....	二八
文展(九八—一二二).....	一五	清光會展(五三—五四).....	二八
		藤田嗣治個展(五五).....	二八
		三宅克己個展(五六).....	二八

版畫

彫刻

聖戰美術展(五七—七二).....	二九
二科會展(七三—九一).....	三一
航空美術展(九二—九四).....	三四
九室會展(九五).....	三四
一水會展(九六—一〇一).....	三四
新制作派協會展(一〇二—一〇六).....	三五
佛印巡迴展(一一七—一二九).....	三七
關口俊吾個展(一二〇).....	三八
文展(一二一—一四三).....	三八
菅野圭介個展(一四四).....	四一
霜林會展(一四五—一四七).....	四一
岡本太郎個展(一四八).....	四二
忠愛美術院展(一四九).....	四二
新日本美術聯盟展(一五〇).....	四二
美術文化小品展(一五一).....	四二
展覽會以外的作品(一五二).....	四二
國畫會展(一一五).....	四二
文展(六).....	四三
日本版畫協會展(七一—九).....	四三
塊人社展(一、二).....	四四
構造社展(三一—六).....	四四
正統木彫家協會展(七、八).....	四四
東邦彫刻院展(九—一四).....	四五
日本彫刻家協會展(一五—一七).....	四五
直土會展(一八—一九).....	四六
九元社展(二〇—二二).....	四六
國風彫刻會展(二二—二四).....	四六

工藝

建築

院展(二五—三三).....	四七
二科會展(三四—三九).....	四八
新制作派協會展(四〇—四四).....	四八
文展(四五—六四).....	四九
京都市展(一).....	五二
清水正太郎個展(二).....	五二
文展(三一—四二).....	五二
石原産業海運株式會社(一一—四).....	五八
ペリアン女史創作品展(五).....	五八
日光龍頭山の家(六).....	五八
京都陽明文庫(七—九).....	五九
一日本小住居(一〇—一二).....	五九
名井アトリエ(一三、一四).....	六〇
長谷川鏡次商店(一五).....	六〇
某邸(一六).....	六〇
青木邸(一七、一八).....	六〇
新指定國寶	
繪畫.....	六一
彫刻.....	六三
工藝.....	六四
建築.....	六五
物故作家及美術關係者	
山本瑞雲、鹿子木孟郎、佐藤功一、	
田崎延次郎、八木岡春山、宮永東	
山、足立康.....	六六

美術界彙報

一月

横山大觀日本美術新體制に關する意見書を發表 横山大觀は昭和十六年々頭に際しその抱懷する美術界革新の意見書を「畫壇新體制理念」と題して發表、政府の文化擔當者に送達參考に供した。その要は國家施設としての展覽會の革新、私塾的機構の解消と國民美術道場の建設、東京美術學校を中心とする美術教育の刷新改善等であつて、美術界に於いても在來の放漫なる自由思想を戒飭し、各自が職分に於いて日本精神の顯揚に力め奉公の誠を致すべきであるといふにある。

青年彫塑家聯盟結成 東邦彫塑院、新制作派協會、日本彫刻家協會その他各團體並に無所屬作家により結成された青年彫塑家聯盟の發會式は、一月十二日丸の内鐵道協會に於いて舉行され、百餘名が出席した。

大阪美術團體聯盟結成 新體制に即應し協力すべく關西の洋風畫家を結合して新しく結成された大阪美術團體聯盟は、一月十五日發會式を舉行、東京の美術團體聯盟と連絡をとること、なつた。

朝日文化賞贈呈式舉行 昭和十五年度朝日賞の贈呈式は一月二十日東京朝日新聞社貴賓室に於いて行はれた。美術部門に於いては川合玉堂、佐藤清藏、瀧精一が選ばれた。即ち玉堂は紀元二千六百年奉祝記念美術展覽會に出品せる「彩雨」により、佐藤清藏は大日本護王會の委嘱

に依り製作せる「和氣清麿朝臣像」によるものであり、又瀧精一は美術雜誌「國華」による東洋美術の宣揚に生涯を捧げ來つた功績によるものである。なほ同日夜同賞記念講演會が羣衆會館講堂に於いて行はれた。

九曜會解散 關長次郎の斡旋に依り文展系並に院展系作家十三名により結成された九曜會は、七周年に當り新體制下の情勢に鑑み解散に決定、一月三十日の總會に於いて發表した。

二月

泰國美術品を獻上 泰國皇帝陛下には我紀元二千六百年の祝典に際し、我皇室に深甚なる御慶祝の意を表せられ、同國の美術品の數々を御贈進あらせられた。即ち二月八日皇帝陛下の御意を受けて同國駐日公使ビヤ・シー・セナは宮中に參入、祝意表彰のメツセージ並に贈呈の寶物を捧呈した。

國防文化協會結成 國防總力戰に強力なる文化の力を致す機關として詩人、畫家、彫刻家二十餘名により國防文化協會が結成され、結成式が二月十一日舉行された。その綱領として一、文化革新とその國防的統一、二、國民活力の涵養と教化、三、傳統精神の知的建設を挙げた。

大日本海洋美術協會發會式 新日本海洋畫の創建と海洋精神の昂揚を主旨として、海軍省、海軍協會後援のもとに「大日本海洋美術協會」の創立發會式が十二

日芝水交社に於いて行はれた。同協會は昭和十二年結成された海洋美術會がその組織を擴充し、從來洋畫家のみであつたものに新たに日本畫家を加へたものである。今後毎年一回五月二十七日の海軍記念日を中心に海洋美術展覽會、研究會、洋上觀察等を行ふ。

國民總力朝鮮美術家協會 美術を通じて朝鮮總督府學務局長を會長とし、國民總力朝鮮美術家協會が創立された。同會は美術を通じて思想の善導及統後愛國運動、講演座談會、展覽會を開催する。

日本女子美術院結成 女子美術家の利協一致に依り日本美術文化興隆の一翼たらんが爲、日本女子美術院が垣見泰山を幹事として結成された。展覽會及研究會を開催する。

建設漫畫會設立 漫畫家として新しき日本漫畫藝術建設の爲の理論及技術の研究その他の主旨により建設漫畫會が結成された。

三月

長流畫塾の獻畫 陸海軍傷兵慰問の爲過去二回に亘つて大量獻畫して來た川合玉堂門長流畫塾では、第三回獻畫として三月一日兒玉希望以下の作品五十五點の獻納式を神田如水會館に於いて行つた。

表慶館開館 昨秋以來館内修理のため一般觀覽を中止してゐた表慶館は整備漸く成り三月八日より開館、明治、大正、昭和の美術品を陳列すること、なつた。

全日本彫塑家聯盟創設 昭和十二年創立された日本彫塑家聯盟は、彫塑界の一

元化を期し發展的解消を遂げ、三月十五日新しく全日本彫塑家聯盟の發會式が行はれた。今後その事業として、彫塑研究の爲の各般の施設、彫塑各般に付當該官廳への建議又はその諮問に對する答申、製作資材等に付關係官廳との連絡等を行ふ。

帝國藝術院總會開會 帝國藝術院は創立以來最初の總會を三月二十七日上野帝國學士院に於いて開催、清水院長以下會員五十名(缺席者十三名)文部省より橋田文相、菊池次官、永井專門學務局長、本田學藝課長等出席、帝國藝術院會則要綱、帝國藝術院授賞規則要綱、同會員補充、第四回文展出品要綱を決定した。(本欄八〇頁參照)

イタリア文化會館開館式 日伊親善増進の爲東京市麹町區三番町に建設中のイタリア文化會館は、工事成つて二十九日三笠宮、梨本宮兩殿下の臺臨を仰ぎインデルリ伊大使、日伊關係官民多數列席して開館式が舉行された。同會館は男爵三井高陽の敷地寄附と原田積善會及長尾欽彌の寄附金を以つて成つたもので、在留獨逸人建築家アルヌルフ・ベツォルドが設計監督に當つた。因に開館式に引續きチロ・ラグラザ等の「イタリア現代畫展」が催された。

山形縣美術協會創立 山形縣出身の根上富治、菊池華秋、石山太柏、椿貞雄、土田文雄、新海竹藏、結城哲雄等六十餘名の美術家により山形縣美術協會が結成された。尙その第一回は六月山形市縣會議事堂に於いて開催された。 璞友會結成 日本美術院々友の藝術研

究機關として組織されてゐる院友俱樂部は毎月研究会を催し、又毎春院友展を開催し來つたが、組織上不備の點が多々ある爲此の度總會を開き、決議により院友俱樂部は社交機關としてのみ存置して、研究發表會の名を璞友會と名付け展覽會を開催することゝなつた。

四月

日本漆文化協會創立 漆工藝の作家、指導者、原材料業者及各團體、組合等全國的關係者を網羅する日本漆文化協會の創立總會並に發會式が四月四日比谷松本樓に於いて開催された。

ブラジル兒童圖畫手工展 日本橋三越に於いて、國際文化振興會主催、外務省、拓務省、文部省、情報局並に伯國大使館後援によりブラジル兒童圖畫手工展が開催された。三年前日本兒童の作品を送つた答禮であり、伯國文部省より兒童作品四千點が送られたもので、その中四百點が陳列された。

日本畫家聯盟結成 京都各塾の日本畫家は大同團結をはかるべく舊臘來協議中であつたが、四月十日京都帝國大學學友會館に於いて第一回理事會を開催、竹内栖鳳、菊池契月、西山翠嶂、橋本關雪、川村曼舟を顧問とし、竹杖會、西山塾、早苗會、菊池塾、堂本塾、農島社、中村塾等より選出せる理事を決定した。

大阪彫刻家聯盟創立 大阪を中心とする彫刻家により大阪彫刻家聯盟が結成され、四月二十日大阪市立美術館に於いて總會及結成式を舉行了。同會は大阪彫刻會、大阪彫塑會、大阪木彫作家協會、

彫光會及無所屬の作家を含むものである。三果會結成 寺內萬治郎、阿以田治修、佐竹徳次郎の三洋風畫家は、新文化建設の理念に基き研究團體三果會を結成し、四月中旬その第一回展覽會を開催した。伊太利亞政府日本現代美術品買上文化提携の爲、昭和十四年伊政府は我が國畫境より毎年一點を買上げることを決定してゐるが本年より實施することゝなり、川合玉堂、鍋本清方、石井柏亭、中澤弘光、安田毅彦等十名の銓衡に依り過去二年分の買上作品を決定した。即ち居串作一の「弓」、眞下慶治の「最上川の雪景」で、いづれも新人の作品である。

五月

「華國創業繪卷」公開 紀元二千六百年奉祀會が同會總裁秩父宮殿下の御休徳を奉謝する爲横山大觀、菊池契月、安田毅彦、前田青邨、中村岳陵、長野草風、吉村忠夫、服部有恒、岩田正巳等をして執筆せしめた天孫降臨及神武天皇御創業より御即位までの繪卷「華國創業繪卷」は、秩父宮殿下の思召により五月六日より二十日まで帝室博物館表慶館に於いて初めて一般の觀覽に供された。

大日本航空美術協會結成 航空報國の大任を全うする爲大日本飛行協會副會長堀丈夫中將を會長に、手島航空局長官、陸海軍航空本部長を顧問として五月九日飛行協會に於いて大日本航空美術協會の發會式が行はれた。同協會は公募展を開催し或は航空畫を製作して一般國民に航空知識を普及せしめるほか、航空美術館の建設、軍用機の迷彩の研究等にもたづ

さはる筈である。青甲社作品海軍へ獻納 西山翠嶂、青甲社に於いては、五月十六日海軍各艦へ獻納する爲、塾生七十餘名の作品内示展を京都市公會堂に開催、同日同所に於いて獻納式を舉げた。

双臺社發會 石井柏亭の指導を受けた畫人によりその研究及發表の機關として双臺社が結成された。

帝國藝術院總會 帝國藝術院に於いては、三月末の第一回總會に續き、會員補充の件に就き總會を五月二十日上野帝國學士院に於いて開催した。清水院長以下會員四十七名出席、文部省より永井専門學務局長、本田學藝課長等出席し、新會員を第一部(美術)に於いて上村松園(日本畫)藤田嗣治(洋畫)小林萬吾(洋畫)六角紫水(工藝)佐藤功一(建築)と決定した。因に新會員の發令は七月四日附を以て行はれたが、佐藤功一は六月二十二日逝去の爲自然消滅となつた。(本欄八〇頁參照)

六月

新興岐阜美術院結成 岐阜在住畫家に依り六月五日新興岐阜美術院が結成された。陸軍々醫中將島居百三外三十一名を賛助員、川崎小虎、水田竹園を顧問、小鹽美州を主宰とし、春秋二回公募展を開催する。

皇國藝術京都聯盟結成 國畫の傳統的的精神に立脚し、新時代の繪畫藝術を創建せんが爲、京都市在住無所屬作家によつて皇國藝術京都聯盟が創立され、六月六日京都平安神宮に於いて發會式を舉行し

た。聖戰畫を天覽並に御覽 天皇、皇后兩陛下におかれられては六月二十九日皇太子殿下、照宮内親王殿下をはじめ奉り各皇子殿下御同列にて宮中千種の間並に豐明殿に於いて、從軍畫家が皇軍將兵の活躍を描いた陸軍省所藏戰爭畫十五點を天覽並に御覽あらせられた。

北白川宮兩殿下聖戰展へ御成り 北白川宮大妃、故永久王妃兩殿下には六月三十日上野公園日本美術協會陳列場に開催中の聖戰美術展覽會に成らせられ、約一時間にわたり御巡覽あらせられた。

七月

朝香大將宮殿下聖戰美術展へ御成り 朝香大將宮、同湛子女王兩殿下には七月二日聖戰美術展覽會に成らせられた。

閑院元帥宮殿下聖戰美術展へ御成り 閑院元帥宮、同若宮妃兩殿下には七月四日聖戰美術展覽會に成らせられ、約五十分にはわたり御巡覽された。

美術工藝品の價格制限撤廢 商工省は七月十二日「藝術保存のため七・七禁令並に公定價格制の特例に關する」次官通牒を發した。これは七・七禁令と公定價格制のために束縛を受けてゐた藝術品に最少限度の除外例を認め、藝術の維持保存を圖らんとするものである。而して藝術家の資格として、一、帝國藝術院會員にして美術關係會員、文展第四部に於いて審査員たりし者及無鑑査の者にして現に藝術家として活動をなしつゝある者、二、文展第四部に二回入選したる者にして現に藝術家としての活動をなしつゝあ

る者、三、前各項に準ずる實力を有する者である。

橋本關雪作品獻上 橋本關雪は昭和十四年第一回聖戰美術展覽會へ出品した「江上雨來る」を七月十五日竹田宮殿下へ獻上した。

第三次近衛内閣成立 七月十七日後繼内閣組織の命を拜せる公爵近衛文磨は十八日第三次近衛内閣を組織し、同日親任式が舉行された。

伊太利亞傷病兵の爲に日本畫を贈る

日本畫家岩崎清峽は伊太利亞傷病兵慰問の爲荒鷲、菊花、鶯等を描いた花鳥畫を伊太利亞大使館を経て伊國衛戍病院に贈った。

美術雜誌の統合 都下美術雜誌は從來三十八種に上つたが、内務省警保局企畫掛に於いてその統制が行はれた。即ち七月二十一日全誌廢刊届を提出、七月三十一日新しく當局より八誌が指定され、各誌は題號を改めて九月より發行した。その新題號、主宰者等は次の通りである。

「國畫」専門日本畫誌(舊「塔影」齋田元次郎)「新美術」専門洋畫誌(舊「みつゑ」大下正男)「國民美術」日本畫大衆誌(舊「美術」岩佐新)「生活美術」洋畫大衆誌(舊「アトリエ」山口寅夫)「畫論」綜合評論誌(舊「造形藝術」藤本詔三)「季刊美術」季刊誌(舊「美の國」石川幸三郎、美術日本「廣橋喜司」美術評論「藤森順三」)「旬刊美術新報」旬刊(舊「日本美術新聞」猪木卓爾)「美術文化新聞」週刊通信(舊「美術通信」佐久間善三郎)。尙これと同時に八主宰者により日本美術雜誌會が創立された。

八月

大東南宗院結成 南宗畫家が一致團結し繪畫を通じて日、滿、華の親善融和並に文化交流を圖らんが爲に新しく大東南宗畫院が結成され、八月八日帝國ホテルに於いて委員長小室翠雲、幹事長岩切重雄、學藝研究所長河野桐谷等二百名の畫家の外來賓として帝國藝術院長清水澄、頭山滿、大政翼賛會事務總長石渡敏一、同文化部長岸田國士等列席のもとにその結成式を行つた。同院は日滿華三國畫家と提携し、毎年一回三國の重要都市に於いて展覽會を開催し、又國體精神作興の爲隨時勸皇先覺志士の事蹟顯彰並に遺墨展覽會等を開催する。なほ東洋文化並に藝術の開明の爲學藝研究所を置いた。

忠愛美術院結成 日本畫、洋畫、彫刻各團體の中堅人より成る忠愛美術院が結成され、總裁に八角八郎中將が推された。

九月

「佛印巡回日本畫展覽會」内國展示會 國際文化振興會に於いては、帝國藝術院の後援の下に、現代日本藝術の紹介を通じて日本佛印兩國文化交流の爲佛印巡回日本畫展覽會を企劃しつゝ、あつたが、その出品作品日本畫、屏風、版畫等百六十二點の内示會を九月九、十の兩日日本橋三越に開催した。尙佛印に於ける展覽會は十月十七日ハノイ市安南クラブに於いて開催されたのはじめ、次でハイフオン、サイゴン、ユエ等に於いて展覧された。特に藤田嗣治は日本繪畫紹介の爲帝國藝術院及國際文化振興會から派遣された。高松宮同妃兩殿下「佛印巡回日本畫展覽會」内國展示會に御成り 高松宮、同妃兩殿下には九月九日「佛印巡回日本畫展覽會」内示會に御成り遊ばされ、出品作品を順次台覽あらせられた。

紀元二千六百年奉祝展圖録を伊太利亞に贈る わが國現代美術の粹を紹介する爲、日伊協會に於いては紀元二千六百年奉祝美術展覽會の作品より日本畫、洋畫各約五十點を選び、日伊兩國語の解説を添へて編纂中であつたが、完成したのでムツッリーニ首相をはじめ伊太利亞宣傳省、各文化團體、大學、美術館、圖書館等に寄贈した。

大阪美術懇話會結成 大阪市立美術館を中心とし京阪神在住の美術同好者に依り大阪美術懇話會が結成され、九月十六日同美術館に館長上野直昭、主事望月信成をはじめ田萬清臣、野田吉兵衛、水野萬之助等會合し第一回發起人會を開催、會長に上野直昭を推し、毎月一回鑑賞、講演、研究會等を開催すること、なつた。因みにその第一回例會は十二月四日大阪市美術館に於いて催された。

日佛印親善洋畫展示會開催 國際文化振興會、日本印度支那協會主催、帝國藝術院後援に依り、佛印に送り現代日本洋畫を紹介すべき作品五十七點が日本橋三越に於いて内示された。尙佛印に於ける展覽會は、十一月二十四日ハノイ百貨店グラマンカザンに於いて開かれた。

高松宮同妃兩殿下日佛印親善洋畫展示會へ御成り 高松宮、同妃兩殿下には九月二十七日より二日間日本橋三越に開かれた日佛印親善洋畫展示會へ御成り遊ばされ、出陳作品を順次台覽遊ばされた。

十月

東條内閣成立 第三次近衛内閣の後を承けて後繼内閣組織の命を拜した東條陸相は、十月十八日組閣を完了した。

上村松園渡支 上村松園及三谷十糸子は支那風物と風俗描寫のため十月二十九日京都出發渡支、上海、杭州、南京、鎮江、蘇州等を旅行した。尙十一月十三日汪首席を訪問、十二月一日歸朝した。

十一月

東京市日本近代美術館建設案發表 東京市に於いては皇太子繼宮明仁親王殿下の御誕生を壽ぎ奉るにふさはしき記念事業を企畫しつゝ、あつたが、十一月十三日「皇太子繼宮明仁親王殿下御誕生記念日本近代美術館」をその事業に決定、その計畫案を發表した。即ち建設費約七百萬圓、敷地坪數四千坪乃至七千坪、建坪二千坪、延坪五千七百坪の建築を豫定し、明治以降現代及將來に亘る美術及藝術工藝品を蒐集陳列し、わが近代美術の精華を顯揚すると共に國民文化の向上に資するものである。

東洋文化研究所新設 文部省は東洋文化を綜合的に研究するため、東洋文化研究所を東京帝國大學に附置するに決定、十一月二十七日の官報で官制を公布した。

十二月

第二回中央協力會議に於ける高村光太

郎の發表 第二回中央協力會議に於いて
各界代表高村光太郎は「全國の工場施設
に美術家を動員せよ」との議案を提出し
た。即ち國民士氣の源泉たる健康なる精
神生活向上の爲美術家を動員し、大工場
の食堂、休憩室、合宿所、病院等に合理
的美を與へるのみならず、壁面に彫刻或
は繪畫を活用すべきであるとの主旨であ
つた。

米英兩國に對し宣戰布告 十二月八日
米英兩國に對する宣戰の大詔渙發され、
わが國は米英兩國と交戰狀態に入つた。

野間美術賞の設定 わが國文化の進展
に寄與せんとする故野間清治の遺志に依り
今回學術、文藝、美術各文化方面に野間
賞の設定を見たが、第一回野間美術賞は
帝室技藝員、帝國藝術院會員、日本美術
院同人たる安田毅彦に決定、十二月十七
日大日本雄辯會講談社講堂に於いて授賞
式を舉行、賞及副賞一萬圓が授與された。
尙各部門獎勵賞が授與されるが本年度美
術獎勵賞はこれを缺いた。審査關係者は
次の通りである。(顧問) 清水澄、細川
護立(委員) 横山大觀、竹内栖鳳、川合
玉堂、鏑木清方、安田毅彦、小林古徑、
藤島武二、安井曾太郎、梅原龍三郎、高
村光太郎、田中豐藏、兒島喜久雄、矢代
幸雄。

横山大觀獻納 第二十八回日本美術院
展覽會に繪卷「耀く大八洲」を出品した
横山大觀は、帝室技藝員として渡部帝室
博物館總長を通じ、天皇陛下に獻上方手
續中のところ、十二月十八日御嘉納あら
せられた。

美術展覽會

一月

全日本國策漫畫展 四日—九日 大阪

・三越 大政翼賛會主催

建築展—東京都市計畫私案 九日—十

四日 銀座・紀伊國屋

會員は内田祥文、楠瀬正太郎、佐川正等。

第一回三人展 (日) 十日—十五日 銀

座・松坂屋

會員は岩橋英遠、丸木位里、船田玉

樹

報知—この三人は日本畫におけるいはば前衛派だ、丸木位里も岩橋英遠も胡粉を多く用ひて作のマチエールが美しいのは注意すべきところ、この點船田玉樹は細工が小さすぎるが手際はよい、總じて物に即した作品は常凡の感があり、各自一點づゝ出している大作もよい出来ではない、丸木のものでは「雌阿寒」の色感がよく、岩橋の「景色 (二)」船田の「月明」等舉げうる作品である。

一水會第四回展 (洋) 十日—十九日

大阪・朝日會館

陳列數百六十五點

小村雪岱遺作舞臺美術資料展 十日—

三十一日 早大演劇博物館

同館主催。遺族及劇界各方面より故人の遺作を蒐集して陳列した。

溝口桐油繪個展 十一日—十五日 銀

座・菊屋

田中行一個展 (洋) 十四日—十八日

銀座・青樹社

近江美術人會第二回新作畫展 (日) 十

四日—十九日 大阪・大丸

阪本繁二郎作品鑑賞會 (洋) 十五日—

十九日 大阪・關西畫廊

都筑眞琴第三回個展 (日) 十七日—二

十二日 日本橋・高島屋

大阪新洋畫協會遺作展 十八日—二十

日 大阪市立美術館

故會員中村良明上等兵の遺作を陳列

和田英作近作畫展 (洋) 二十一日—二

十四日 日本橋・三越

報知—出陳十八點、今更説くまでもない英作の畫風で、富士山や薔薇を描いた作品の中には通俗的性格のものもある。然し銀へあげた筆技は確かに洋畫壇元老の貫録であり「神の森」の眞卒、「蘭花」の艶やかさ「清水湯」の鍊達など見るべきものだ。かうした即物寫形が現代の感

覺乃至理念には縁遠いともいへようが、我國官學洋畫の正統を示して熄まぬその嚴しさの意義を思はなくてはならない。

松本泰水第一回個展 (日) 二十一日—

二十四日 日本橋・三越

玉堂門下の老將で昨年一年間の精進の

成果は相當に見應へがある。いづれも花

鳥畫であり感覺の新鮮なことは文展系作家としてはむしろ意外なほどだしその多彩も賢實な描寫と相俟つて左程うるさく感じられない。撫子を配した「常夏」など氣品もあり佳作である。

磯田蓉工戰線畫展 (洋) 二十一日—二

十四日 日本橋・三越

高澤圭一戰爭畫大陸風物畫展 (洋) 二

十一日—二十四日 日本橋・三越

羊和會彫金展 二十一日—二十六日

日本橋・三越

丸儀太郎個展 (日) 二十一日—二十六

日 上野・松坂屋

前田謙四郎個展 (版) 二十一日—二十

六日 大阪・松坂屋

春臺美術第十六回展 (洋) 二十一日—

二月六日 東京府美術館

東日—(前略) 本年度鑑査員中、比較

的い、のは石川滋彦、有岡一郎、緒方亮平の諸作で、一方評議員とかの中では黒田頼綱の「室内」、森田元子の「静物」が小品ながら佳作といへる。一般出品はいつたに不振だが、常連のなかでは笹岡了一の「黄河附近」が力作であり、西村喜久子の四點中では「池のほとり」が色

感に潤ひがあつていゝ。顧問辻永は二點の風景を出陳してゐるが、「夏の朝」における點景人物を樹間に融合させたあたりさすがに老巧。參與中村研一の「朝」もまづまづといふところである。

〔搬入〕一二一六點〔入選〕一〇二點〔岡

田賞〕岩崎勝平〔春臺賞〕笹岡了一、田

村一男〔日氏賞〕中島晋次郎、西村喜久

子、田邊穰

白日會第十八回展 (洋・彫) 二十三日

—二月五日 東京府美術館

〔搬入〕繪畫二五五四點、彫刻七三點

〔入選〕繪畫二四一點、彫刻二〇點〔新

會員〕刑部人、廣本了、關口誠、古川弘

山道榮助、島田四郎〔新會友〕丸樹長三

郎、前林章司、草刈二郎、畔上眞雄、藤

江志津、鹽澤詳悟、金子富藏、江口賢一

安部七郎、西山閣二、坂手讓、竹内貞太

郎〔客員推舉〕三浦忠軒、香山蒼、三井

高維、金子日久連、富岡東四郎、高木背

水〔白日賞〕安次嶺金正、矢戸章、三保

義一、坂手讓〔獎勵賞〕廣岡正道、東理

仁郎、芥川義基、佐藤辰男、大嶺正敏、

遠藤智、三橋ふじ、竹内貞太郎

油繪四人展 二十五日—二十九日 大

阪・天賞堂畫廊

會員は田中秀宣、島常武、岡田弘文、

故田中角治郎

晨潮會第三回展 (洋) 二十五日—三十

日 新宿・三越

青衿會第二回展 (日) 二十六日—三十

日 日本橋・三越

讀賣—題材や制作態度は堅實になつた

がこの會の主目的たる人物描寫に於てま

だゝ個性の把握が足りない、中では今

尾津屋子の「母」の細密描寫が畫品に缺

けるところなき佳作で、高田南三の農婦

は鋭いが稍軽く渡邊幸雄は色調その他に

缺陷はあるにしても雪に遊ぶ子供の情景

を活寫し得た點をとる。主宰伊東深水は現代美人を雄勁な線に託した一種理想畫で水指を持つ腕の描寫など流石にうまい。

倉員辰雄個展(洋) 二十六日—三十日

大阪・美術新論社畫廊

壁面への工藝美術展 二十八日—二月

二日 日本橋・三越 蒔利會主催

五々會第二回展(洋) 二十八日—二月

二日 大阪・松坂屋

堂本畫塾東丘社第二回春耀會展(日)

二十八日—二月二日 大阪・大丸

二月

朱玄會第四回展(洋) 一日—五日 日

本橋・三越

東日—二科の中堅作家栗原、田村、宮本の三人によるこの會の第四回展である。今回はなか／＼の勉強で昨春秋の大陸旅行の收穫をそれ／＼に出陳して賑やかなこと満點ではあるが、質的には前回に劣る。宮本三郎も田村孝之介も人物が比較的よく、前者の「少年」、後者の「支那の女」は佳作といへる。大陸風景は三人とも出色のものなく、栗原信も十號の「果物」をのぞいて生彩がない。

歷程美術協會第五回展(日) 一日—七日

日 大阪・そごう

商工省陶磁試験所製作品展 一日—八

日 日本橋・三越

原勝四郎個展(洋) 一日—九日 大阪

・阪急

高山超陽個展(日) 四日—九日 大阪

・三越

九品庵日本畫展 五日—七日 芝・東

京美術俱樂部

桑原實個展(洋) 五日—九日 銀座・

資生堂

邦畫莊日本名山展(日) 五日—九日

上野・松坂屋

萩須高德第一回瀟歐作品展(洋) 六日

—十一日 日本橋・三越

報知—瀟歐十三年、昨夏歸朝して新制作派會員に迎へられた作者の第一回個展大部分が好みのバリ風景いはゆる「癩病やみの壁」の情趣を主題とした作品である。骨組のがつしりした地味な畫風で、新制作派の底流にある構想色彩のモダニズムとは對蹠的なもののだが、その點安心して見られると同時に幾分の退屈さがないではない、しかし線の太い強健なリズムは近頃珍しく、殊にその繪具の付きのよさは注目し値しよう、さうした意味で「リュウデベルチュー」「ジブシーの車」など場中での優作だ、蓋し今後日本の風物をいかにこなすかは興味ある課題といへる。

彩交會第四回展(日) 七日—十三日

名古屋・松坂屋

木燭會工藝展 八日—九日 京都・朝

日會館

東山魁夷「旅の寫生展(日)」 八日—十

二日 銀座・菊屋

里見宗次歸朝第一回産業美術展 八日

—十二日 銀座・松坂屋

三味會第二回日本畫展 十一日—十四

日 銀座・資生堂

石川欽一郎水彩畫展 十一日—十五日

大阪・青樹社

更路社第二回日本畫展 十二日—十六

日 大阪・大丸

國丘會第一回展(日) 十二日—十六日

日本橋・三越

讀賣—御舟門下九氏の旗上展で大作、力作ぞろひと見えたが河村良孝と吉田美彦あたりがともかくも質のよさを示してゐる。河村の裝飾主義は「松」で一應成功してゐるが筆の硬軟、賦彩の濃淡にもう少し變化が欲しい、これでは折角の構圖の妙味も淺薄さを免れない。吉田の「牡丹」は重みもあり先づ難のない佳作であらう。

青山熊治遺作展(洋) 十三日—十六日

大阪・三角堂

光風會第二十八回展(洋・工) 十四日

—三月一日 東京府美術館

讀賣—特に嚴選の故もあり一定の水準は保つてゐるが文展系の堅實さと退屈さを併せもつてゐる。風景畫が目立つて多く、見るべきは辻永、川合修二、杉村淳、石川滋彦、山下忠平、土橋醇一など。太田三郎の「多産讃仰」は絢爛豐饒の趣きには富むが主要人物が浮き上つて來ず聊か散漫である。

〔陳列數〕繪畫二八五點、工藝四六點〔岡田賞〕遠山清〔光風特賞〕渡邊武夫

〔光風賞〕三輪孝〔光風工藝賞〕河内三郎〔工藝賞〕巽勇、片岡英樹、中村俊介〔F氏賞〕金子德衛以下授賞略〔新會員〕

岩船修三、中田滿雄〔新會友〕藤江理三郎、藤本東一良、妹尾壽信、伊藤應九、辻光典、大富準雄、巽勇、森棟澄子

故吳建遺作展(洋) 十五日—十七日

東京府美術館

陳列品は油繪八十點をはじめ水彩畫約二十點、高等學校時代の水彩畫二十點、歐米旅行スケッチ百五十枚、他に色紙、幅物、畫帳等多數に上つた。

古賀春江遺作展(洋) 十五日—十八日

銀座・資生堂

東日—異色あるこの作家が逝いてもう七年、これは夫人愛蔵の諸作の展觀であるが「素朴な月夜」「觀音像」「ピクニック」「海女」などのすぐれた作品に接すると、今更ながら故人の畫才を惜しむ感が深い。ほかに水彩畫の小品が十點ばかりあるが「抽象」を始め、いづれも洗煉された佳品である。

富本憲吉近作陶器鑑賞會 十五日—二十

十日 大阪・阪急

中島東洋乾漆工藝展 十五日—二十一

日 大阪・阪急

太平洋畫會第三十七回展(洋、彫) 十

五日—二十八日 東京府美術館

讀賣—一體に色感粗野なのは不折老の影響であらうか。石川寅治、鶴田吾郎、奥瀬英三などが上の部に屬する。布施信太郎の時局畫「恩師佛蘭西に捧ぐるの詩」

は空疎な觀念畫となり終つてゐるが「銃後の春」は先づ見られる。

〔搬入〕一四二三點〔入選〕一九九點〔陳列數〕繪畫二五〇點、彫刻一三點、特別陳列小野田元興、小野田光典の作品合計二五點〔太平洋畫會賞〕中田信〔獎賞〕鈴木滿〔會員獎勵賞〕關口文雄〔太平洋畫會獎勵賞〕佐藤武雄、半田圭治

文展十人展 (洋) 十七日—二十一日
大阪・美交社

大野麥風個展 (日) 十八日—二十一日
日本橋・高島屋

東風會日本畫展 十八日—二十二日
日本橋・白木屋

船川華洲日本畫個展附青榕社第五回日本畫展 十八日—二十三日 大阪・大丸

催青會第二回繪畫彫塑展 十九日—二十三日 銀座・養生堂

人形彫刻美術展 十九日—二十五日
上野・松坂屋

橋本關雲近作書畫展 二十日—二十三日
大阪・高島屋

横山大觀作品鑑賞會 (日) 二十日—二十三日
京城・三中井

新體制下に於ける産業工藝品展示會
二十日—二十七日 日本橋・三越

主催東京府立工業獎勵館、後援企劃院情報局、商工省

種目は、第一部新國民生活必需産業工藝品、第二部輸出向新研究工藝品で、ほかに參考品として同館工藝部指導製品及び海外蒐集品等を陳列した。

川西英創作版畫展 二十二日—二十八日
大阪・阪急

竹内豐滯歐作品展 (洋) 二十四日—二十八日 銀座・青樹社

裸婦を主とした油彩と素描三十餘點を展示したもののだが、不思議な魅力をもつてゐるのは素描で、「寫生をする娘」「クララ」などは特に面白い。油彩はそれに比して趣味的な乃至は病的な要素が多過ぎ、しかも顏料の混濁が目立つ。小品「デブシーの顔」あたりを佳作とすべきであらう。

白御會第五回展 (日) 二十四日—二十八日 東京府美術館

都一院展系京都派の帝都進出展であるが聊か新銳の氣分に乏しい、佐野光穂、中島榮刀、北澤映月あたりはよいとして色感の非常に悪いものが少くない中に演孤嘯が素質の良さを示してゐる。東京派の贊助出品では島田訥郎と横田仙章をとる。小島一谿は達者だが新鮮さを缺く。

小森達也第一回展 (洋) 二十五日—二十七日 銀座・菊屋

冬柏會繪畫展 (洋) 二十五日—二十八日 日本橋・高島屋

三浦竹軒陶藝展 二十五日—三月二日
大阪・大丸

河口樂土武藏野風景日本畫展 二十六日—三月二日 上野・松坂屋

八明會南畫試作展 二十八日—三月二日
大阪・大丸

三月

漆原本木滯歐作品展 (版) 一日—四日
日本橋・三越

同調會佳展會合同日本畫展 一日—四日 銀座・紀伊國屋

窠本一洋個展 (日) 一日—五日 日本橋・三越

中商一故山元春舉氏の山水門に在つて一人たゞ大和繪基調の人物を能くする、松本一洋氏が初めての個展で、「不動明王」「朝霜」「西行法師」「小町」「鶴の丸」等約十點ばかりを見せてゐる。二三年氏は只管筆道の鍛錬に懸命したやうであつたが、その効は幸にして、其「畫」に全體の安定を與へた。つまりその點における自己の再勘がこの個展でもあつたのである。でこの上の欲求はその自己人生の嚴重な再勘で、若しそこに自得する所があれば、この畫はぐつと人間的にしつかりした言葉を出すやうになるであらう。即ちその自己をいかに體驗的に學問するかといふ工夫、これが欲しいと思はれるのである。

園外社第二回展 (日) 一日—七日 日本美術協會

〔搬入〕一二七點〔入選〕三六點〔陳列總數〕五五點〔推薦〕ナシ〔第一賞〕藤間春輝〔第二賞〕荒川晃雲
新美術家協會第十三回展 (洋) 二日—十日 東京府美術館

都一二科の精銳を集めたこの會は、さ

すがに皆揃つて巧みな技術を見せてゐる目立つ作もない代りにひどい繪もない。全體に靜かな落ちつきが溢れてゐる。ただ然しかう云ふ世代の作家達が、この様な靜けさの中に沈んでゐるのに物足らぬ思ひを抱くのは筆者のみではあるまい。

數點の小品を器用にまとめて陳列するよりも、一點でいゝから傾倒的な作を見せて貰ひたい。尤もこの會が第二義的に輕い意味しか持たぬとならば論外であるが——松本弘二、瀧川太郎、中村善策、大澤昌助を擧げて置く。

〔陳列數〕一三八點。

旺玄社第九回展 (洋) 二日—十六日 東京府美術館

東日一 (前略) 場中比較的出來のいゝ作品は第一室に多く、宮芳平の「山重る」坂田虎一の「鷺と菖蒲」、齋藤英太郎の「船と子供」など。他の室では三好俊一の「子供と犬」、川越國司の「斑牛」の二點が取上げられるほか、會員水戸範雄の諸作が一應注目される。水戸の技法は古めかしいが、その精力は驚くべきもの、作品としては金剛山を描いた「巖」が出色で、二曲屏風まがひの大作「梅」は努力のわりにつまらない。時局的な作品は橋作治郎の「戦線」と岩井彌一郎の「突撃」その他があるが、ともに賞感のない駄作。牧野虎雄の「庭前五月」は絢爛だがあまりに裝飾的で、むしろ「綠蔭」の方が好ましい佳品。

〔陳列數〕二九〇點〔旺玄社賞〕原創三郎

〔社友奨励賞〕保科米三、齋藤英太郎
ガートラマルティン油繪個展 三日—
九日 銀座・交詢社

第四回如水遊心畫展(日) 四日—六日
銀座・三越

正宗得三郎新作日本畫展 四日—六日
京城・三井

小林徳三郎個展(洋) 四日—九日 大
阪・松坂屋

獨立美術協會第十一回展(洋) 五日—
二十五日 東京府美術館

讀賣—一見畫面のエネルギーの強いこ
とは、この展覽會の主流となつてゐる作
風の特徴であるが、同時にそのエネルギ
ーの浪費が畫面に露出して、作品を傷け
てゐるものも少くない。例へば菊地精二
居串佳一の作品など、その作家精力の長
所が同時に作品の長所になつてゐない。

清水登之の今年の仕事は、この人として
例年よりいゝ方だが、さういふエネルギ
ーの重さは出てゐるけれど、單調な筆觸
が寧ろ重苦しい感を強くさせる。これは
技術的な問題といふよりは、作者の表現
慾望の焦點がどれだけ醗酵してゐるかと
いふ點にかゝつてゐるのであらう。然し
又一方には、調子だけでまとめたやうな
作品も少いわけではない。中村節也の
「大陸風景」には精力的な重さが乏しく
繪が瘦せてゐる。海老原喜之助の作品
は、畫面の調子に少年の皮膚のやうに柔
い美しさを持つてゐるが、畫面の中核に
もつと彈力が欲しい。この畫家が構圖に

企て、ある才智は、未だ設計圖の面白さ
のやうなもので、表現の壓力を避け過ぎ
てゐる。小林利作の甘美な色調も造形的
な重さが缺けてゐるので、甘美なだけに
終つてゐる。油繪には油繪獨特の造形的
な「重さ」に似た性格があつて、それは
旺盛な作家精力の馬力によつても、徒ら
にどきつい色彩や筆觸によつても統御出
來るものでないことは、畫家達の一歩よ
く自覺してゐることではあるが、我々民
族の傳統と體質が、なか／＼思ふやうに
はそれを體得させないのである。林武の
仕事は、形の歪みも色彩も曖昧でない決
斷的な力はあるが自分の頑固さに酔つて
ゐるやうなところがあつて、畫面のニュ
アンスが深くならない。川口軌外の抒情
的な色調も筆觸が單調なせるか畫面が淺
い感じ。中山鐵の大同石佛を描いた繪は
畫面の一隅にこの畫家独自の緑色が覗い
てゐなければ、この人の作品とも氣がつか
ない程獨自の解釋のない描寫で物足り
ない。事變以來隨分大同の石佛は描かれ
たが、この石佛が倅いせるかどの畫家の
個性も壓倒して了つてゐるかたちであ
る。田中佐一郎の進軍を扱つた大作は、こ
の畫家の倦まない追究を示してゐるが、
未だ前景などに描き足りない破綻が目立
つてゐる。今年は高島達四郎と松島一郎
が様式的に動いてゐるやうだが、二人と
もいゝ方に向つてゐる。松島一郎のものは
色彩が冷たいといふよりは筆觸が冷たい。
會友の作では齋藤長三、富樫寅平が

佳かつた。菅野圭介のものでは「磯」と
いふ作品だけが面白い。一般出品の中
でも夫々、資質の畫家も少くないが秀作
が比較的少い。小出三郎、松島正人など
格別様式的な新味はないが、暢々した技
法の作品でよかつた。(今泉篤男)
〔搬入〕三九七一點〔入選〕四二八點
〔陳列總數〕五一八點〔會員推薦〕齋藤
長三、藤岡一、熊谷登久平、居串佳一
〔會友推薦〕豐藤勇、加藤陽、常安靜人
小出三郎、赤星孝、島村三七雄、佐川敏
子、竹中三郎、山道榮助、志村計介〔獨
立賞〕松島正人、岡本芳男、宮島佐一郎
齋藤求、齋田武夫、小原雄二〔I氏賞〕
菅野圭介〔岡田賞〕富樫寅平

出品目録(○會員、△會友)

聽音 足達 憲	田岡小春	飛驒地方	山 △佐藤 英男
老梅 山道 榮助	○小島善太郎	△菅野 圭介	風景△中尾 彰
竹林 同	K夫人像	靜物 同	靜物 同
ピアノクツション	庭樹 大内のぶ子	山桃の木	雪 藤田 水祥
と狸々木	庭樹 同	藤井 正俊	南國の家
山ふところ	落社人物	自畫像大沼亮之助	矢崎 牧廣
熊代 駿	樋口 勝三	南の女 ³	殘雪 豊田 逸二
早春の山	同	齋田 武夫	港 山内 邦義
高原 今井 憲一	アネモネの花	同 同	淡水の丘
山 同	赤星 孝	りんご賣り	吉浦 鈴子
入江 常安 靜人	新緑 同	小川マリ子	靜物 小山 柳子
冬木立	靜物 同	水邊 同	野々 木島 眞二
○小島善太郎	十一面觀音像	農家 小出 三郎	初夢 菅野由慶子
春庭 同	金 晩 畑	伊豆の山麓	雪の鋪道
麥踏み同	磯 △菅野 圭介	同 同	松島 正人
		深田の石佛	窓から同
		小原 雄二	山田の冬
		群像 同	西條 茂
		野良に出て	風前 松崎 眞一
		△鳥居 敏	しめす金本 旭奎
		ともだち	室内 渡邊 保
		同 同	冬谷 斑目 秀雄
		避難訓練	高原 同
		松尾 敬一	おしどり
		帽子を被る人	鶏川 誠一
		長島 常吉	食卓の子供
		無花果と子供	吉岡 憲
		同 同	拓人 篠原 邦夫
		建物 大石 七鳳	T少女原 達夫
		ベンキ工	放牧日本
		中川 光延	宮島佐一郎
		高原(秋)	少年滿洲
		伊藤 和義	同
		チロルのコスチ	牧場(夕)
		ニーム	寺坂 正信
		△佐藤 英男	

平塚海岸	堀内 明	納屋 齋藤 雪枝	駒ヶ岳新雪	函根秋晴	大陸 (春) 五大	松島 山岸富五郎	山 吉村 勇	冬 梅原 茂
小きき店	井上 稔	風景 野尻ミカ子	峠路 同	寒空 同	連池 ○中村 節也	雄阿寒岳	街 牧野 静夫	山頂ノ歡喜
樹陰 田中 厚巳	春 ○小林 和作	洗濯女片山 公一	海邊にて	虞美人草 同	同(冬)流水・凍結・積雪	服部 木村	す・き境田 繁	寺口 重美
春光 村中 正	伯耆の大山の秋	盤谷驛の賣店	盤谷驛の賣店	婦人肖像 同	同	太鼓△熊谷登久平	閑白 玉城 實	安住 島村三七雄
風景 村上 正中	林檎樹小川 信一	母の像石川 清	山と家 同	○野口彌太郎	漢谷 廣田 勝夫	笛 同	建設 同	シヌロのある風景
紫陽花佐藤九二男	樹木 木村 成美	集ひ 趙 東 壁	軍人肖像 同	庭 磯谷 三三	きやうだい	收獲 鎌田 知路	同	發掘 行木 正義
風景 平沼 淳	飛ぶ 高橋竹三郎	農家○松島 一郎	庭 同	藻と魚織田 彩子	秋 服部 勳	鶯 實本 仙	谷中村風景	竹 中村 善種
靜物 永井 宏	庭の雜草	梅 同	庭 同	遺跡○中山 巍	花キヤベツ△	夏目 井口宗保江	△大野 五郎	玩具露店
南京通濟門附近破壊の跡(出征記念)	高原に春來る	富士 同	風景 吉田 務	殘雪○鈴木 保徳	水禽の檻	畫室ノ一隅	故郷 同	大野下風景
サーカス 井上 寛信	靜物 横山 精一	栗畑 坂本 善三	藻と魚織田 彩子	靜物 渡邊 希望	同	天眞名井(比婆山)	相澤 義二	温縣附近ニ於ケル部隊ノ奮戰
流浪 長 秀彦	圓柱のある建物	波(天草)	子供 大 久一	雁 同	同	同	靜物 谷川 歷男	ル部隊ノ奮戰
サーカス 渡 洋一	舟場 飛田 文一	廢墟の樓門	秋の路桑原 清	公園 内尾 雅恵	同	同	風景 高木 四郎	森島源之介
大田子風景	山の親爺	寧古石窟壁	風景 藤井 汪	たき火神津 隆一	祖國なき民	神窟(比婆山)	油田 諏訪 邦一	黃河第二渡河點
諏訪 正雄	自畫像 同	平山恵多路	諏訪早春影	勤勞二木村 忠太	同	同	同	同
黄土○中間 冊夫	待機○菊地 精二	漁夫A	大貫 悌二	同	同	同	同	同
冬の山村	畫 直村のぶ子	○川口 軌外	靜物 兒玉 範子	同	同	同	同	同
大島 正	白い帽子と女	ガリヤ 同	カナリヤ 鳥田 正次	同	同	同	同	同
岩山 梅津 泰助	麗日展望	漁夫B 同	風景 同	雲雀 末永 胤生	同	同	同	同
女 森安 安子	同	柘榴 同	裡西湖風景	小綾兒 同	同	同	同	同
風景 高畑 正明	同	H子像根守 悦夫	池畔の松 石田 英吉	松ノ木妹尾 正雄	同	同	同	同
竹 平田 市郎	齋藤 紅一	蟲 井上 妙子	雪國の少年達	靜なる冬の日	同	同	同	同
佛像 河村はる子	林中冬日	木立B 鬼木 成人	岩月 清	著壺 緑川廣太郎	同	同	同	同
卓上靜物1	同	戸外靜	雪國の少年達	生菴 同	同	同	同	同
○林 武	山雨來る	同	櫻井 濱江	雪山 關口 誠	同	同	同	同
竹像 同	太湖秋色	同	阪神風景	金魚鉢と子供	同	同	同	同
卓上靜物2	同	同	同	蓮 志村 計介	同	同	同	同
蓮 鯛天 淨成	○鈴木 亞夫	同	風景 同	室內 木村 孝三	同	同	同	同
お父さん	海濱の午後	同	風景 同	窓 吉野 公修	同	同	同	同
遠藤佐和子	同	同	風景 同	同	同	同	同	同

信濃野面一	二月の風景	雲仙岳并川	湖畔	村	廢墟A	沼邊	上海の兒童
△齋藤 長三	田代 忠藏	釣魚 青木善太郎	宮下 廣吉	淺田 欣三	小宮山 筋	須永 靜策	高橋 弘二
同二 同	夜勤 岡本 芳男	紅頭嶼飯田 實雄	青赤城齊藤藤太郎	山容 小川 文雄	ひまわり風景	海濱夕景	中村 辰巳
誕生 菅原 俊	蔗の檻 同	臺灣家禽	高崎山山村 猛猪	風景 佐分利良雄	李田たけを	林道 岩岡 貞美	上海公園
はせを山内 義藏	野原 川戸 二郎	同	矢倉下風景	病院のある風景	女 長島菊次郎	ゼイランジヤ城	同
三人の少女	輯安の想出A	受粉 吉川 尙平	島本徳三郎	磯松 小雪	S嬢像高見 寛	久保田明之	雪の庭太田 芳朗
花屋 成清眞璃子	山城 竹次	花と少女	工場風景	早春庭山口 義朗	庭 長尾 完二	寫眞室吉田 宗一	苦力 同
冬 矢野 徳一	風景 金田 健吉	不破 正彦	小泉 信夫	金魚と裸婦	藍壺の瀧 齋藤 準兄	尾道風景	同
子供 西村健次郎	木 新倉 利夫	冬 田村 雅則	憩ひ 札本武三郎	二人 鐵指 公藏	畫(騎)	同	同
標識燈寺島 春雄	後庭 森永 一握	樹間 伊藤 彪	村藤風景	黒猫のゐる風景	豊年祭森 常次	風景 大野 徹三	土 鎌田 功治
鈴羊 澤 健太郎	球戯 下郷 羊雄	花と少女	野づら松原 久明	同	牛 宋 惠 秀	風景 神谷 嘉利	河原の景
由貴子の像	河畔暮色	小倉かね子	風景 芹澤 龍吉	ゆふぐれの間	ゼクチオン(死	舞 同	玉置 正敏
○高昌達四郎	加賀美義之	部屋 武智 肇	水邊 久保 一雄	同	體解剖)	同	西湖風景B
泰野 同	黃土ノ道	花賣 高橋 忠彌	支那服	佃島 望月 鏡一	小谷 勉	乳 同	正木 智海
漁村 同	田中安太郎	胡弓 同	△藤岡 一	桑部山風景	ベリカン	火山と北人	海邊ノ國技
二人 古川 盛雄	殘雪 廣原長七郎	赤峰にて	同	山本 正道	守本 桎	矢橋 尙武	山田房之介
雪景色遠藤 正三	池 加藤 文生	△宮樫 寅平	樹林 字根元 警	編物をする女	山 米田 弘	寺院 橋本 春光	技 矢田 千秋
街 川俣 偉目	黍と女	小鳥を賣る	濱邊 同	井上 孟	山 演野 金平	びわ 岸本 桃三	白い海川戸 傳
風景 木村 武男	△青柳 暢夫	二人 氏原 忠夫	岩 佐藤 眞	八手 佐藤 登	舞樂 演野 金平	雲 橋本 春光	曇り日の港
ガリヤ森竹 五郎	野と少女	ばら 佐藤眞佐子	海邊 内田 梅吉	風景 氏橋 靜一	少女と鳥	陋屋 中島美砂繪	大庭東洋夫
歸漁 豐藤 勇	小鳥と母娘	裸婦 奈知安太郎	村の午後 高原 政孝	睡蓮 上野 榮喜	婦人像赤木蘇夫二	家鴨 田中 太	波狀岩地帶
大漁 同	同	室内裸婦	中神風景	竹林 竹花 忍	花 森 兵五	池畔 野村 正二	岡 周末
朝鮮風景	風景 荒井不可志	同	川上善四郎	夕陽 村田 東作	安南の人	港風景島 良一	忍びよる秋
家鴨 同	菊 郡山 三郎	雪 近藤 了義	亂石と泉	長島風景	新羅 笙介	紫陽花久保 正一	萩原 曙兒
廢墟 守住 健邦	海濱 二階堂顯藏	小學校の風景	山D 四十塚 勤	花菖蒲光盛清五郎	温室 影山 靜子	かいゆの花	紫衣 鯨津 政男
靜物 高澤 忠平	自畫像大久保 泰	寺院 松隈 龍介	汽車汽車ぼつぽ	黄水仙山田 榮二	占ひ 菊地 洋平	耕馬 岡部文之助	馬糞 同
濱に働く	冬の耕地	風景C白石 嶋	岡田 勝	子供と食卓	占ひ 大庭 京子	次高山宮田 金彌	庭 山中 徳次
清水 鍊徳	雪原 鶴見重太郎	庭 松田 春雄	ごようじん(子	土(中央)壇輪	黄服の少女	殘雪 山岸 竹雄	庭 苦力 健一
磯 同	ランブに少女	鏡臺 長谷川久子	供)	△池田金之助	奇岩とコロンケ	關宿開門風景	苦力 老 健一
殘雪 江口 美春	村本 榮二	大園院外五大力	金子 斗煥	土(左)小鳥	ツト	染谷 葵一	松
都會風景	海邊 佐藤 洋	吼像ニヨル	田園 村上 益子	同	空野洲繪人	二月堂金 海	荷揚場中津瀬忠彦
小春日佐藤 昇	花えんどう	△森 有村	北方に生く	土(右)土器	薄暮 渡嘉敷唯信	池 北島 大飛	

熱海梅園

開間 久

風景 持田 徹
靜物 添田 定夫

庭 藤江 倚久

友 岡崎 兼文

冬ノ池畔

川原 宮崎 精一

所 輝夫

草叢 鷹嘴 直治

湖畔 三村 行雄

銚後の人々 石井 國義

故郷 梁 達 錫

風景 久保田久一

溪流 錦織 恭一

農夫 同

早春 秋山ミチ子

藤 門脇 耕

枯れた芭蕉

五月 同

人首 慎藏

冬田 木村 正夫

牧場 島田 穂美

カンナ荒濱 榮悦

苦力 村島 鐵雄

壁 大森 太一

棉花峠 初冬

あそび池野 清

矢澤 義龍

歴史 入 來 天

千魚エチユード

春の前奏曲 (古利根水邊)

流旅 内島 流行

利根水邊 大谷 幸一

初冬 伊藤 鎌

青年

花のある庭

〇海老原喜之助

農家 岡部 繁夫

人形使同

かれ木の有る風景

水遊び同

富岡 賢二

日本民藝品展 五日—四月二十七日

駒場・日本民藝館

三春會第二回展 (日) 六日—九日 日

本橋・三越

朱玄會洋畫展 七日—十一日 大阪・

三越

勝谷木鐸繪畫展 (日) 七日—十一日

大阪・三越

開發芳光木彫展 七日—十三日 大阪

・阪急

中村葵同顧展 (洋) 八日—十二日 銀座・青樹社

東日・明治、大正年間の天才畫家として青木繁とならび稱せられる中村葵の遺作卅餘點を年代順に展示したもの。作品の數としてはすくないが、初期の印象派に學んだ風景からルノアールを経てセザンヌにいたるかれの藝術的追求の過程を知るに足る代表作は一通りあつめられてゐる。甚だ興味ぶかい。作品としては晩年の「エロシエンコ氏の像」「老母像」がさすがに立派であるが、立體派風の靜物及びエスキース「血を吐く男」も小品ながら注目し値する。

藤田隆治個展 (日) 十一日—十三日 銀座・資生堂

河合卯之助陶器展 十一日—十五日 日本橋・三越

國畫院作品展 (日) 十一日—十六日 上野・松坂屋

里見勝藏個展 (洋) 十二日—十六日 大阪・阪急

爽々會美術工藝展 十二日—十六日 日本橋・白木屋

神光會第二回展 (日・洋) 十二日—十八日 神戸・畫廊

上社會第十四回展 (洋) 十二日—二十日 東京府美術館

東日・今回は特に猪熊、荻須、高野の三人の新歸朝者を迎へたため、どこことなく新鮮な空氣がみなぎつてゐる。荻須のも

のでは「トリエルの古寺」「靴屋」がよく、猪熊は「ヴァイオリン」を持てる肖像が無難、高野は油繪小品より水彩によるフランス風景十八點のなかに見るべきものがある。小磯良平は婦人の立像及び坐像の二點を出陳してゐるが、ともに生氣に缺け藤岡一も精力的な點では感心するが、佳作なく、大月源二も奇麗事に終つてゐる。大館健三の技法はすぐれてゐるが、感覺的に新鮮さがなく、小堀四郎の象徴的な大作もつまらぬもの。牛島憲之の「蓮」染木照の石版三點はちよつと面白い。

鬼面社第三回油繪展 十三日—十六日 銀座・三越

生田花朝塾繪畫展 (日) 十三日—十六日 大阪・三越

澤田宗山作陶展 十三日—十六日 大阪・三越

新樹社第一回展 (日) 十四日—十七日 大阪市立美術館

維新畫會第三回展 (洋) 十四日—十八日 銀座・青樹社

田崎草雲贈位二十五周年紀念展 (日) 十五日—十七日 芝・東京美術俱樂部

幕末、明治初期に於ける南畫家として著名なる田崎草雲の贈位二十五年を記念し、小室翠雲、草雲會主催によつて開催された。主要作品及び遺品を併せ二七三點、草雲の全貌を知り得る大展開であつた。作品中主なるものは次の通りであつた。玉堂富貴圖 (金光庸夫) 三白圖 (渡邊政四郎) 濠梁逸趣 (足利川島藤左藤門)

蕉蔭睡禽 (丸山源八) 花鳥十二幅 (野口信太郎) 十指春風 (足利萩野萬太郎) 寛に小禽 (足利田村彦七) 白石山房即目 (東京林莊治) 朔風飄雪 (東京渡邊善十郎) 秋山晚暉 (足利柳田武一郎) 秋江獨釣 (東京石井太吉) 山市雪霽 (足利原田金三郎) 松溪載鶴 (東京河西豐太郎) 風雨歸舟 (太田中村儀一) 行道山 (足利萩野萬太郎) 淺間山麓軍議、昇天龍 (東京鹽谷恒太郎) 秋山幽隱 (東京日本美術協會) 白雲紅樹 (東京金光庸夫) 遷都祭禮 (東京南條金雄) 勿來關 (足利殿岡利助) 花卉畫冊 (東京小室翠雲) 天變地異卷 (東京石井郡司) 悠久會第一回展 (日) 十五日—十八日 銀座・菊屋

東海輸出工藝第七回展 十五日—十九日 四日市・市公會堂

現代名作繪畫展 (日・洋) 十五日—二十五日 京都大禮記念美術館

日本畫

島二作 作者 所藏者

辻説法 小野 竹倚 京都 吉田 忠

溪四題 野田 九浦 文部省

漁村返照 (瀟湘八景の内) 寺崎 廣業 同

黃昏 横山 大觀 男爵 大倉喜七郎

赤松に鷹 荒木 十畝 東京 野間佐衛子

墨田川舟遊 柳原 紫峰 京都 飯田 新七

飼はれたる 田川 清方 文部省

猿と兎 竹内 栖鳳 同

鐵葉蜻蛉 菊池 契月 同

海寧觀潮	小室 翠雲 東京 利光 鶴松
朝	川村 曼舟 作 者
茄子	福田平八郎 大分 福田馬太郎
風神雷神	安田 毅彦 男爵 大倉喜七郎
荒磯	平福 百穂 東京 別府哲二郎
日照雨	西村 五雲 東京美術學校
長門峽	松林 桂月 作 者
耕牛	山口 華揚 文 部 省
南嶽	案本 一洋 作 者
山高水遠	池田 桂仙 文 部 省
鹽原の奥	山元 春舉 同
みづく	小林 古徑 男爵 大倉喜七郎
玄猿	橋本 關雪 文 部 省
積雨收	小川 芋錢 兵庫 西山 亮三
女人像	中村大三郎 京都 圓城留二郎
牛買ひ	西山 翠嶂 文 部 省
宿雪	川合 玉堂 同
花の傍	速水 御舟 東京 速水 彌生
菖蒲	徳岡 神泉 文 部 省
潮騒	川端 龍子 京都 飯田 新七
草紙洗小町上村	松園 東京美術學校

新月	吉田 博 文 部 省
山湖	辻 永 兵庫 山口吉郎兵衛
裸婦結髮	梅原龍三郎 東京 西村總左衛門
ボスケ・デ・コロナ	川島理一郎 兵庫 白杉 龜藏
編物	岡田三郎助 大阪 黒川福三郎
法親寺塔婆須田國太郎	京都 作 者
裸女	安井曾太郎 京都 門 上河源右衛門
猫をあや	熊岡 美彦 大阪 岸本兼太郎
す小女	大橋 孝吉 大阪 小澤龜三郎
橄欖樹の花國枝	金三大 大阪 作 者
雪の追憶	中澤 弘光 東京 作 者
關門	大橋 孝吉 大阪 小澤龜三郎
淨瑠璃人形新井	完 兵庫 岩田 希芳
熟稻	坂本繁二郎 同 山口吉郎兵衛
羅摩物語	小杉 放庵 兵庫 山口吉郎兵衛
秋近き演	牧野 虎雄 同 岩田 希芳
刈田の雨	鍋井 克之 大阪 作 者
西瓜と百合黒田重太郎	京都 作 者
裁縫女	小磯 良平 東京美術學校
三井洋畫コレクシヨン第二回陳列	十五日—九月十二日(毎土曜午後) 麹町平河町・同邸

冬	庭の菊黒田 清輝
ブリュッセル	ブルターニユの少女(水彩)
ベン卿の令嬢	シモン
アラビヤの女	マチス
レイトン	少女の顔
讀書の友	キヤリエール
石橋 和訓	孤獨 ルヘーブル
ヴァンス風景	坂本繁二郎 兒獅子ボンヌール
高原 青山 熊治	風景 岸田 劉生
海邊早春	稚き日井垣 嘉平
和田 英作	靜物 遠山 五郎
少女 岡田三郎助	窓際 有馬さとえ
四行會第十一回展(洋)	十七日—十九日
銀座・養生堂	山口南草個展(洋)
山口南草個展(洋)	十七日—廿一日
大阪・關西畫廊	青山熊治遺作素描展
大阪・天賞堂	十七日—二十一日
松坂康、石川重信二人展(洋)	十八日
二十日 銀座・三越	兒玉畫塾第五回展(日)
三日 日本橋・三越	十八日—二十三日

して強い「殘照」とは互ひに長短を逆の形で示してゐる。森正元の「雪後」と多田瓊林の「芭蕉」は共に裝飾性を強調したモダン派だが、かうした方法は兎もすれば繪が平板になる點に注意が要る。海野旭世の「濱」も近代派の意圖だが、その近景、中景、遠景の布置はまだ渾然と融合するに至つてゐない。北村明道の「白鷺陣」は武者と鷺に一段の緊密さが愆しく、太田樺江の「大海」は遠い海の色に難がある。その他佐藤藤太清の「曉陽飛雪」三上博の「清宵」田坂顯の「冬日」熊島康明の「早春」等が挙げられる。

〔長流賞〕村松乙彦〔遺賞〕多田瓊林、海野旭世

京都工藝美術協會第十回展 十八日—二十二日 日本橋・三越

加藤靜兒近作風景畫展(洋) 十八日—二十三日 上野・松坂屋

堂本畫塾如月會展(日) 十八日—二十三日 京都・大丸

第二回尺蠖堂文景道人日本畫展 十八日—二十三日 日本橋・高島屋

京都染織繡藝協會作品室内調度と服飾品展 十八日—二十三日 京都・大丸

東光會第九回展(洋) 十九日—三十日 東京府美術館

都—會員では石本秀雄の炭鑛もの三點が目につく、題材の浮き上る危險性を或る程度抑へ得た力作。野口謙藏は「夕月」の抒情に甘いやうで溺れぬものあり、佐藤一章の「秋色」も出色だ。熊岡美彦は

氣負つた大作よりも「碓氷早春」の小品に充實感があらう。齋藤與里の四點、孰れも取り立て、言ふ程のものなし、岩下三四の大島ものも低調。その他では山本日子士良の「或る老技師の像」林綾子「人物」水野一好「素燒窯」、徳永富士子の童女群など、特別出陳としてゼザンヌの中に、ルノアール、ピッサロの三點がある。こゝには一切の不純な動機や配慮の入る餘地の無い靜謐が漂ひ、勿論この會ばかりではなく、展覽會作品への示唆を孕んでゐるやうだ。

〔搬入〕一五七四點〔入選〕一八七點〔陳列總數〕二九三點〔會員推薦〕故岸田淑子、河原修平、河井達海〔會友推薦〕八藤勲人、鹽津誠一、藤岡慎治、熊岡正夫、大寄丹次郎、野澤寛、徳永富士子、山本貞子、井手祐子、清原武則、後藤愛彦、川本浩三、〔東光賞〕山本日子士良

川端龍子展(日) 二十日—二十三日
大阪・高島屋

連袖會第四回展(洋) 二十日—二十四日
銀座・青樹社

報知—安井曾太郎の門生等によるこの會の第四回展、まだ師風の末梢を徒らに追つてゐる作品が目につくが、これは己れを高からしめるものではない、片多三吉の軽い筆觸の「早春」と中村琢二のきれいな「風景」は共に手際がよく、場中では出色の方だ、その他では高田誠の貼紙のやうな點描の「黒姫山」丸野豊司の「びわ」等が擧げるに足りる。

多摩帝國美術學校卒業成績品展 二十一日—二十二日 世田ヶ谷・同校
小城基近作洋畫展 二十一日—二十三日 銀座・菊屋

東京高等工藝學校造型工藝部生徒作品展示會 二十一日—二十三日 銀座・三越

獨立美術協會會員友小品展(洋) 二十一日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊
東朝—海老原喜之助の「人形使ひ」に示した色彩の組合せは作家の才能を知らしむるもので清水登之が「ねむれる牛」を克明につくり上げて効果をあげ得たものとよき對照をなす。齋藤長三の「家」富樫寅平の「冬日」は同傾向のものであるが前者が平板になつてゐるのに對して後者は量を持つ、その他居串佳一、鳥居敏、中村節也など若手に佳品がある。

第三回春季大輪展(日) 二十一日—二十五日 日本美術協會

東朝—現代の若い日本畫家が本質的な修業を経ずに形式のみにとらはれてゐる傾向はこの會にも多分にあらはれ、高橋光輝の「冷晨」松山廣幸の「初冬」など一應の雰圍氣と形式美を傳へ得ても内容は空虚である。篠田忠康の「鯉」諸藤英世の「閑鷄」は寫生力に一段の研究を要し「吉祥天女」を描いた吉田新の作品は美的なるものを考慮に入れぬ品のないもので作畫態度の再檢討を要する。小林彦三郎の「和光」は組立てに失敗し穂坂光希の「女形」は生硬さに難があり渡邊太

子の「ヘッドライト」はその着想が目につく。

〔搬入〕一五七點〔入選〕六一點〔陳列總數〕七一一點〔佳作賞〕吉田新〔研究賞〕篠田忠康

鍛金協會工藝展 二十一日—二十六日 日本橋・三越

國外社第二回展(日) 二十一日—三十日 大阪市立美術館

松村巽油彩邦畫個展 二十二日—二十六日 大阪・美交社

女子美術專門學校卒業成績品展 二十四日—二十五日 杉並・同校

東京美術學校春季特別展觀(日・工) 二十四日—二十六日 上野・同校陳列館

春季特別展觀として同校收藏狩野芳崖筆「悲母觀音」橋本雅邦筆「白雲紅樹」川端玉章筆「荷花水禽」小堀朝音筆「武者」下村觀山筆「天心先生像」等十七點及び元校長正木直彦遺族より寄贈された工藝品二十餘點が展觀された。

東京美術學校卒業製作陳列會 二十四日—二十六日 上野・同校

小川芋錢遺作展(日) 二十四日—二十八日 大阪・天賞堂畫廊

吉川靈華遺作展(日) 二十五日—二十八日 小石川・護國寺

明絃會第一回展(日) 二十五日—二十八日 銀座・資生堂

春の青龍社第九回展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・三越

東日—日本畫の團體中もつとも進取的

である筈の青龍展としては、今回の展觀など相當低調になつてきたことを感ずる。全體に華かさはあるが、突つ込みの足りない奇麗だけの仕事が多く、取材も花鳥風月的なものが大部分なのかどうかと思ふ。なかで比較的に、のは市野亭の「冬日」、坂口一草の「紅椿」、福岡青嵐の「モリス道人」など。龍子の愛犬と愛禽による「春綠二題」は佳品とはいひがたいが、いつもに似合はぬ穩かな畫境で、その點むしろ親しめる。

〔陳列總數〕三六點〔青雲賞〕市野亭、中川喜舞、松宮左京

邦畫一如會第一回展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・三越

東日—その名の如く邦畫一画をめざす洋畫家と洋畫出の兩棲作家たち十一人によつて結成された會の第一回展、放塵、青楓は例外として、さすが手馴れてゐるのは一政、莊八のふたりで、前者の二曲半双「萬葉屏風」後者の「躑躅椿」は注目され、面白さのあるのは中川紀元の「慈容三現」と牧野虎雄の麻紙による「芥子」。石井柏亭の紺本山水は水彩に比して色調鈍く、藤田嗣治の二曲一双「港」も要領だけのもの。鍋井、東郷は凡調。

金澤三匠會新作工藝品展 二十五日—三十日 大阪・大丸

岡部光成新作日本畫展 二十五日—三十日 上野・松坂屋

松柏會第一回展(日) 二十五日—三十

日 大阪・松坂屋

早川國彦個展(洋) 二十五日—三十日

神戸・大丸

端館九阜個展(日) 二十六日—二十八

銀座・鳩居堂

山本倉丘個展(日) 二十六日—二十九

大阪・高島屋

佐野光穂個展(日) 二十六日—三十日

大阪・阪急

奥瀬英三洋畫展 二十六日—三十日

大阪・阪急

狩野晃行第三回個展(日) 二十六日—

三十日 日本橋・白木屋

洛西畫家隣組作品研究會第一回發表會

二十六日—三十日 京都・丸物畫廊

古家新個展(洋) 二十六日—三十日

銀座・青樹社

清風會竹器展 二十七日—三十日 日

本橋・三越

尚絅會第一回展(日) 二十八日—三十

日 日本橋・東美俱樂部 關尚美堂主催

報知—(前略)山口蓬春の「春沼」は

手際がよく、小林古徑の「かまきり」は

栗の青毯がきいてすつきりした畫面、吉

岡堅二の「丹頂」は鶴の様式化は面白い

が多きこちなく、山口華楊の「春舞」

は軽すぎる。

礪原始更個展(日) 二十八日—三十日

京都・朝日會館

煌土社第六回展(日) 二十八日—四月

四日 日本美術協會

報知—野田九浦畫塾の第六回展だが、

美術展覽會(三月)

作家が成長してその傾向が異つてゐる處

著展としては風變りな方である。安藤富

次郎の「兎」は平凡な圖柄だが感觸が柔

かく、工藤紫煙の「老梅」はや、くどい

がガツシリした力がある。吉岡堅二、藤

田隆治等はモダン派の本領を發揮してゐ

るが、前者の「馴鹿」の擬古拙主義は未

完の味にたよりすぎ、後者の「逆光の瑠

璃門」は洋風描寫への進出が着實であ

る。荻長九浦の「鎌足公」は妙に力んだ

感じで餘韻に乏しい。その他では瀬尾南

海の「海邊」藤田復生の「雪斑」柴田耕

洋の「濱の松」等が挙げられる。

國畫會第十六回展(洋、工) 二十八日

—四月九日 東京府美術館

報知—(前略)梅原の「花」は流露と

して澄んだ強さがある。青山義雄の「靜

物」は色感に美しいが、色彩にもつと彈

力が欲しいと思ふ。喜多村知、中村好宏

三崎六郎、山田千秋、濱田直記、土井六

郎、杉山一正、松田正平、小林邦報の諸

君の作品がそれ、の興味で面白かつ

た。概して畫面に破綻は少いが構想のス

ケールが何か内輪な感じである。同人で

は香月泰男の作品が作意だけ目立つて畫

面がやせてゐるのが残念に思はれた。久

保守のものは、作意が沈潜して來てゐる

のはよいが、繪にもつと氣魄が通つてゐ

ればい、と思ふ。さういふ氣魄の點で

は、庫田發と版畫の棟方志功がこの會の

新しい世代を代表する作家としてその將

の作品から概念的な味噌の味噌臭い感じ

が抜けたら、と思ふ。棟方の版畫は、

さういふ概念的なところがなく感覺的で

智慧深くて面白い。工藝と寫眞の出陳が

あるが、工藝は、模様や上繪の興味に専

らで、寫眞は技術の興味に専ら中心が置

かれてゐるやうで傾向としてはあまり感

心出來なかつた。(今泉篤男)

〔搬入〕繪畫一六二二點、版畫二七三點

工藝三〇九點、寫眞二三八點〔入選〕繪

畫九九點(六四名)、版畫二一點(十九

名)、工藝一〇五點(七〇名)、寫眞四三

點(三三名)〔陳列數〕繪畫一五九點、

版畫三一一點、工藝一二八點、寫眞五一

點、〔新同人〕(繪畫)喜多村知、養田つ

や子、小林邦報、(工藝)平野利太郎、

稻垣稔次郎、(國畫獎學賞)(繪畫)山田

千秋、島内キミ、鈴木正二、尼川尙達、

(工藝)廣本長子、鈴木清、(寫眞)鈴木

幸子、(F夫人賞)喜多村知(褒賞)松木

滿史、國松登

出品目録(○同人)

繪畫

子供達B 靜物 中村 好宏

喜多村 知 晉陀宗乘廟 尾田 龍

同A 同 I 嬢○中村 鐵

三侯山赤 宇治山哲平 白いコート

戶外靜物 海川 博一 池 ○中村 博

机上果物 中村 好宏 梅林○庫田 發

ミモザ同

靜物A ○山崎 隆夫

同B 同 青い窓山口 正雄

城趾の森 鈴木 清

游魚 三崎 六郎

草上靜物 同

枝、山脈 ○香月 泰男

門、石垣 同

波切風景 龜井 貞雄

三角帽齊藤 英一

ひまはり 同

秋の葉山田 千秋

籠の椿同 木蓮の桃 同

寢園歌走 國松 登

アラベスクな風景 同

黒い帽子 大石 照子

畫室內の靜物 同

船渠 齋田 順

落葉の頃 遠藤 滿男

蝶と芒同 紅い手袋 同

内本 寛一

湖畔紅葉 湖内 寛一

早春○藤田 太郎

苔寺林泉 同

西行庵の秋 同

淺深船濱田 直記

平礎(室戸岬) 同

夜の街多田 倍正

雪の日小館善四郎

靜物○村上 巖

緋の男同 茶房にて 同

名久井由藏

秋庭 伊藤 彌太

漁村 吉田 虎夫

猫と紫陽花 同

内ヶ崎光枝

娘 松本 滿史

室 同

苑池晚秋 ○益田 義信

室生○辻 愛造

小豆島風景 同

朝影○山村 誠

軍鶏圖同 花 柿野 平太

幽谷(物部川原 流)

○眞垣 武勝

土佐上輩生 同

暮色 服部 邦行

ボーゲン
村林 忠
百合 村林 忠
花 齋木 幸子

同	同	川面	杉並	場
		北角	永福町	附近之景
		玄三	養魚	

幻想競泳 同
風 光村 利弘
竹見 義雄

樹裝	同
蟬蛻	紅谷吉之助
交錯	同
人形連作	(過渡)

期) 長濱 慶三
影 安藤不二夫

刺繡ハンドバツ
ク
安藤富美子

大前 岩崎 眞也
染、刈安 井上 秀雄
紅) 同

野草（染小屏風）
稲垣稔次郎
澁染ハンドバツ

白鷺（澁染小屏風）同
澁染テールセ
ンター

と同時に安心して観られる近頃での展覧
 での一つと云へよう。阿以田治修は漸く
 澄んだ厚みを示し「澹春」に見る日向の
 温さは快いもの、「静物」の色彩計劃も
 面白く柿は成功と云へよう。しかし意圖
 としては「秋果」をとる。寺内萬治郎の
 「樂器を持つ少女」は見事だがこの畫家
 の作品が常に持つ何か肌の冷たいものが
 こゝにもあり、むしろ蒼い調子の軟かさ
 に於て「青い服」をあげたい。佐竹徳次
 郎は「疎林」が拙で、よくこの方向に今
 後の仕事を期待したい。

武内鶴之助バステル展 一日—五日

大阪・美交社

青桃會第二回展(日) 一日—六日 大

阪・松坂屋

春虹會第七回展(日) 一日—六日 日

本橋・三越

故旭谷左右遺作洋畫展 一日—六日

大阪・三越

藤岡紫峰個展(日) 一日—六日 銀座

渡邊畫舖

第十五回全關西美術展(洋) 一日—十

日 大阪市立美術館

〔搬入〕三—一八點〔入選〕一九〇點〔全

關西朝日奨勵賞〕小林武夫・井上賢三〔畫

人賞〕上島龍・田川覺三〔會友賞〕下高

原龍己〔會友推薦〕田中修・江川平三・

福井勇・青野馬左奈

綠巷會第三回展(洋) 一日—十五日

東京府美術館

東日—構造社繪畫部が獨立して出來た

この會も、今年は三回展でやゝ一本立ち
 の展覧會らしくなつて來た。會員中やゝ
 清新なのは小林三郎と上田久之で、とも
 にハルビンあたりに畫因をもとめたらし
 い一聯の作品だが、前者の「着衣座像」
 後者の「放浪人」など佳作といふべく、
 いつたいに質のよくない出品畫のなかで
 は花摘幹夫の「静山閑湖」近藤博之の
 「話」などいゝ方だらう。神津港人は中
 支各地の風景五十餘點で一室を埋めてゐ
 るが、この種の御土産風景に食傷してゐ
 る爲か特に感銘なく、肖像畫も陳腐。

〔陳列數〕一八六點〔會員推舉〕久光茂

〔綠巷會賞〕近藤博之

木島櫻谷遺作展(日) 二日—六日 大

禮記念京都美術館

櫻谷文庫主催によつて開催され、主と

して文展及帝展出品作品が陳列された。

陳列目錄(文・文展 帝・帝展)

久邇宮家御貸下

獅子之圖

畫題

憶景年先生 絕筆

大塔宮 二七歳作同

日蓮上人尊影

時雨 文一

釋尊 文三

利樂 文二

勝乎敗乎 文二

奔馬之圖 同

水墨山水 同

夕照 同

秋晴 京都 大橋彌兵衛
 楠久 同 松本 さだ
 薄 同 秋山覺治郎
 春晴 同 大橋彌兵衛
 瀑布 同 秋山覺治郎
 群芳之圖 同 大橋松治郎
 寒月 文六 東京 酒井伯爵家
 たけがり 文五 三重小津與右衛門
 涼意 文八 大阪 住友男爵家
 燕子花之圖 同 同
 柳櫻之圖 同 同
 菊花之圖 同 同
 苔むす庭 同 同
 望郷 帝一 京都 櫻谷文庫
 驛路の春 文七 三重小津與右衛門
 港頭の夕 文一〇 同 同
 運日 帝七 京都 田附政治郎
 懷舊 同 大橋松治郎
 猛虎之圖 帝八 三重小津與右衛門
 灰燼 文二 同 同
 暮雲 同 同
 春の山 帝一三 京都 井上 利助
 角とぐ鹿 同 大禮記念京
 孔雀圖 同 都美術館
 孟宗數 文一一 京都 大橋松治郎
 獅子 帝九 同 同
 うまや 文九 同 同
 松上ノ鷹 同 京都 鈴木孝次郎
 老松之圖 同 大橋直之助
 教育歴史畫 同 明倫小學校
 婦女四趣 帝三 三重小津與右衛門
 松嶺 帝一 同 同

行路難 帝四 同 小津與右衛門
 畫三昧 帝二 京都 櫻谷文庫
 春秋狐狸之圖 同 東京 川崎 克
 峽中の秋 帝一四 京都 櫻谷文庫
 皆春帖 同 田附政治郎
 閑適帖 同 大橋松治郎
 寫生帖 同 櫻谷文庫
 吉野懷古詩畫 同 同
 赤城泰舒富士山展(洋) 二日—六日
 大阪・天賞堂畫廊
 新興美術院第四回展(日) 二日—十三
 日 東京府美術館
 報知—日本畫院に比し、こゝは同人一
 同大作を出陳しての奮闘だが、全體とし
 ては遺憾ながらまだ作品の粗さが目立
 つ。田中案山子の「日光街道」茨城杉風
 の「雲影」など畫面が大き過ぎたために
 情趣が逃げたかたちである。中では小林
 巢居が好調で、童話による「やまなし」
 は明るい色彩が效果的だ。保章良朔では
 「あぐり船」がよく、吉田澄舟の「夕月
 の丘」は色調は面白いが鹿と秋の關係が
 わるい。小林三季の「たけくらべ」は味
 に溺れ過ぎ、芝垣與生の「訓練」は形象
 化が犬を弱めてゐる。岡田魚降林の諸作
 も努力は認められるが、色面の組合せ未
 だしの感がある。

〔搬入〕二五〇點〔入選〕五五點〔陳列
 數〕七三點〔新興美術院第三賞〕眞島元
 枝・三好光志・瀬良林一郎・福島秀行・
 淺香金四郎〔平野賞〕渡邊正光
 田中忠雄個展(洋) 三日—五日 大阪

・朝日會館

日本畫院第三回展 三日—十四日

東京府美術館

報知—昨年よりは作品の粒が揃ひ、緻密な展覽會面となつてゐるが、同人の不勉強は依然たるもので、その半数が不出品なのは團體結成の意義に係る問題として考へさせられる。川崎小虎の「雪の朝」は洋風描寫をよしとしても、胡粉の付きに一段の工夫が欲しく、野田九浦の「見性寺の蕪村」は人物に造型性が足りない。松本姿水の「雪旦」は溫和な綺麗さだが聊か弱く、穴山勝堂の「白壁に描く」は肝腎の樹影がまだ壁にビツタリしてゐない。望月春光の「麥の花」と岩田正己の「忠盛」は各々その持味を發揮してまづ佳品といへよう。一般出品では東山魁夷の「自然と現象」三點が一頭地を抜く勉強ぶりで、形彩ともに落着いた把握を示してゐる。その他では佐藤正衛の「糸撚り」久連石雨童の「冬海」山本瑛幾の「山」瀬川艶久の「小孩」等に追求のよさが見られる。

〔搬入〕三七五點〔入選〕一一七點〔陳列數〕一二六點〔日本畫院賞〕東山魁夷・太田歳夫・月岡榮吉・佐藤正衛・宮澤鐵夫〔無鑑査推薦〕東山魁夷

鹿子木孟郎作品展〔洋〕五日—八日

岡山・金剛莊

武藤躬行第一回個展〔日〕八日—十日

銀座・鳩居堂

松島畫舫春季新作展〔日〕八日—十日

美術展覽會〔四月〕

日本橋・東美俱樂部

野口彌太郎個展〔洋〕八日—十二日

大阪・松坂屋

環友會第一回作品展〔日、彫〕八日—十二日 銀座・松坂屋

讀賣—東都在住の院友を以て組織した第一回展であるが全體に少しく因循な感がなくもない。畫題畫因もありふれたものが多く感觸の織美はとるとしても生々してゐるわけではない。二曲半双の屏風を描いてある莊重味を出した鈴木大廩、優雅な「門」の鹽田英雄、造形感にある新味を出した四田觀水の「遊魚」など、後藤芳仙の「牛」も悪くない。彫刻は小品のみの小味に盡き、中では岡村進の「ひよこ」が面白い。

太田三郎洋畫展 八日—十二日 名古屋・丸善

小林彦三郎個展〔日〕八日—十二日 銀座・三越

春の青龍社第九回展〔日〕八日—十三日 大阪・三越

黒田重太郎個展〔洋〕八日—十三日 大阪・阪急

岸田文象作陶展 八日—十三日 大阪・三越

春虹會第七回展〔日〕九日—十三日 大阪・三越

三浦竹泉初代二代遺作陶磁展 九日—十三日 日本橋・高島屋

東西大家新作畫展〔日〕十日—十七日 名古屋・松坂屋

塊人社展〔彫〕十日—二十日 東京府美術館

讀賣—安藤照は謹嚴な肖像よりも未完成だが立膝する裸女を簡潔に扱つたものが美しく、松田尚之の「少女」は變化あるポーズを示してゐるが稍力に乏しい。河内山賢祐にはアカデミックなよさがあるが硬い感じが残り、むしろ村田勝四郎の柔軟なタッチをとる。長谷川塊記の「坐像」や李國銓の「トルソー（一）」などもよい方だ。なほ堀江尚志と兒島矩一の遺作があり、堀江の「女の首」は相當大きなもので、少し弛緩したところも見えるが表情豊かな佳作。兒島の絶作その左側に重心を置いた男の立像は、これも未完成であるが右の腰の邊りから足へかけて美しい線を示してゐる。

〔陳列數〕五三點 別に故堀江尚志、兒島矩一兩氏遺作計十點。授賞、推薦等なし。

美術創作家協會第五回展〔綜合〕十日—廿一日 日本美術協會

讀賣—同じ前衛藝術團體でも「美術文化」とは對照的な位にまでこの會の空氣は沈鬱を極めてゐる。濃青を基調とする荒井龍男や朱で大地を塗り潰した山口薫の作品等がその代表といへよう。同じく朱で杉林を染めた矢橋六郎や、褐色を偏愛する難波田龍起、濃緑の小山昇など一群の色の幻想畫家の中で、小松義雄の「承德」がその明るく美しい空によつて目立つ位であるが、然しこの作品は空だ

けが描けてゐる建築や大地は少しも描けてゐない。荒井のほの／＼と明けそめた「寒梅」今井繁三郎の濃く光つた「流」など佳作であるが、李仲燮の神話的幻想を古拙調に盛つた二作も獨自の持味が面白い。その他植木茂等の抽象木彫、寫眞、コラージュなどあるが、寫眞では辻潤之助、久野久、馬場類三などが挙げられよう。

〔搬入〕一〇一六點〔入選〕一四六點〔陳列數〕二五八點〔獎勵賞〕坂野耿一、石原裕清、和田喜一、小谷博貞、久野久、大家吉也〔新會友〕清水七太郎、李仲燮、鈴木重太郎、橋上善兒、菊池稔〔新會員〕馬場類三、山口正城、富岡宏資

尚綱會第一回展〔日〕十一日—十三日 京都・岡崎公會堂

茉莉會第二回洋畫展 十一日—十五日 銀座・菊屋

村雲大撰子近作小品展〔日〕十二日 神田・如水會館

第一回東條光高、山下昌風日本畫展 十二日—十四日 銀座・鳩居堂

造型新現實第四回展〔洋〕十二日—十六日 銀座・紀伊國屋

春陽會第十九回展〔洋〕十二日—廿五日 東京府美術館

帝大—〔前略〕中堅以下が些して見ばえしないのに較べて今年は會員の勉強は相當のものであつた。さうして中川一政、石井鶴三、島海青兒、水谷清等はその亞流者に比べてまともに「繪畫」しようと

する氣持が看取せられる。その成果の如何は別問題であるが今年などと共にその意味での努力が見える。又昨年新に加つた高田力藏と岡鹿之助はなほこの會に一種清新な感じを與へて好感を以て見られた。殊に高田力藏の諸作は力作である。

中川一政の畫風は冒頭にいつた意味で春陽會の典型的なものだと思ふ。しかも餘りその弊に陥つて居ない。近來一政の繪が厚塗りの度を加へ、殊に動的な構圖を取つて來た所には、氏が單に詩情に頼らないで、本格的な畫を描かうとする意向が端的に見られると思ふ。そしてその精進には敬服してゐる。今年の「安良里」

は同じモチーフの昨年の作より遙かに凝結し、作品である。又「椅子の女」も決して悪い作でない。たゞ残念なことは繪具や筆觸の一種の生硬さは畫にしつとりした雰圍氣を與へないので看者も亦畫の中に十分に入り得ないことである。氏の美術批評は常に殆ど全く私を承服させるのに、その作品はそこまで行かないのが私には残念でならぬ。

石井鶴三は近頃珍しい程多く繪畫を陳べたが、中で「夜汽車」はこの人特有のよさを持つてゐる。しかし氏の色彩感には直ちに賛成し得ない。その色彩は親し味がなく、又積極的に冷たいのでもない。私には氏の彫刻の方が數等によい。木村莊八の作品は挿繪や水彩の方が面白く、油繪、殊に樹木を描いたものなど

は一向感心しない。繪具が少しも對象化

されずに、平板に、堅く、機械的に畫布に塗られてゐる感じが多く、「パンの會」のやうな十分に描き込んだもの、方がよかつた様に思はれ、近頃の傾向は理解に苦しむ。

鳥海青兒の諸作では最も力を入れたといはれる長城圖よりも「アカシヤ」「アマリ、ス」などの方がよく、しかも今年度の作品は從來のもの程不當に混濁することもなく、情趣も籠つてゐて一進境がある。

水谷清の作品では大作「阿國に扮せる壽美女像」よりも結局「南鮮漁村」がいろいろではないかと思ふ。しかし私にはその繪に調子がないことが不足である。色彩を羅列する形式をとる場合でも調子の階調がほしい。それがなないために畫の空間が確定されない。

高田力藏と岡鹿之助は夫々歸朝後日本に取材した作品も出してゐるが、一寸こなし切れない憾がないでもない。しかし對象のために自分の立場を捨てない態度は賛成で、今後を期待したい。高田の「白杵の石佛」は調子のと、のほはない所もあるが、忠實に描いて人を惹ける所がある。岡の作品では「富士山麓水源地」を面白く見た。この人にはもつと對象を描破する氣力を持つて欲しい。

以下目録順に、注目した作者を挙げよう。青木達彌―目標がはつきりしない爲か、作品にムラがある。「花」「卓上貝殻」の傾向の方がよい。原精一―素質のよさ

が窺はれる。新會友本莊起―觀照が明晰

になつて來たのはよい。石井光風―もつと氣分の餘裕が出る一層いゝ。栗田雄一―田川勤次と共に平凡な自然主義的な傾向であるが好品。川端彌之助―「琉球ガデマルの道」が面白い。春陽會賞北野萬平―あまり賛成出來ない。中で「蘭を見る人」を探るべきか。南條一夫―「靜物」は佳作。津田正周―「猫」面白し。和田

歳―この「朝鮮風俗」は伸びやかで緊りもし會友作中でも注目作であらう。吉田達磨―會友賞は當然「牡丹」は手なれた確かさがあるが「竹林」の傾向に期待する。（大口理夫）

〔搬入〕二〇二二點〔入選〕一八八點〔陳列數〕三一八點〔春陽會賞〕北野萬平、山田義夫、加賀孝一郎〔會友賞を本年より設く〕吉田達磨〔會友推薦〕本莊起

出品目録（○會員 △會友）
穗高三越（冬） 廻廊の見える風景
○足立源一郎 雨宮 勝
同（初夏） 花 青木 達彌
同 綠衣 同

同（新秋） 卓上貝殻
同 同
藏王山の樹水 貝殻ト布 同
同 同
雪と蠟燭 北京の少女 旭 泰宏
東 晴司 同
高壓線のある風景 長城圖 同
明石 眞三 ○鳥海 青兒
椅子ニヨル女 北京天壇 同
秋口 保波 同

アカシヤ
○鳥海 青兒
花圖 同
アマリリス 同
きりぎりし
△遠藤 典太
山村 同
シマツイとヤナ
ギノマイ 同
北の國の景 廣
△二見 利節
男鹿の景 同
門前の景 同
庭 福迫 徹郎
小犬 古淵 啞草
大波月の風景 藤野 龍
船 同
赤いリボン 同
△原 精一
綠の支那服 同
婦人像 同
支那少女 同
顔 同
夏 原田 武男
道 同
張り物林 淳夫
木立 原田平治郎
東鹿城外 花岡 萬舟

山西廢墟 花岡 萬舟
乾物とコップ 春山久仁夫
冬日 本莊 起
裏の丘 同
小菊 同
菖蒲 同
靜物 廣瀬 一郎
門アル風景 長谷川堯春
肖像○石井 鶴三
人體習作 同
夜汽車 同
中支スケッチ（素描淡彩） 同
山と海 ○今關 啓司
斷崖と海 同
雨中白牡丹 同
姑娘○伊藤慶之助
花束 同
牡丹ニ猫 同
花鳥圖 同
太廟 同
風景△岩田榮之助
小松ノ丘 同
伊豆早春 伊川 鷹治

魚と野菜	伊川 鷹治	浅春 岩崎又二郎	秋 ○加山 四郎	きくえ像	阿國に扮せる壽美女像	紅木蓮松田 種次	客席野崎新右衛門	三時 大久保一郎
樹間新緑	石田 正典	静物 同	琉球ガデマルの道	蘭を見る人	○水谷 清	枯木 松尾醇一郎	裸婦 同	甲板 同
臺灣風景	入江 令一	○小杉 放庵	琉球絲満	研究所へ来る男	琉球の魚市場	風景 同	帽子の男	鑓場 大嶺 政寛
崖下の果樹園	庭樹 同	莊八	葉鶏頭 同	同	○前田藤四郎	秋景 宮田 熊雄	同	海の見える風景
石黒平三郎	椿開く 同	三番叟 1	砂丘へ木下 公男	女の 同	琉球の青物市場	安良里	月夜 同	壺屋市場
田園の少年	同	同	塔 同	冬の肖像	市場附近(琉球)	椅子の女	踊るニンフ	同
人物 稻蕉 賢一	同 2 同	同	アマリス	南伊豆ノ春	同	九州の春	中村 伸	港 小野 忠弘
静物 同	毛刺元船	同	△兼平 英示	蓮池 兒玉 彦三	老婆 同	△新沼 杏一	山峽古刹	海の見える風景
上野風景	天誅組挿繪	同	オルガン弾き	首飾りの女	魔除けのある屋根	△中谷 泰	能戸 幸	同
石井彌一郎	野菊○國盛 義篤	同	燈下 木下 克巳	同	首里展望	同	庭○岡 鹿之助	居留地界限
アツコ・デイオ	野菊○國盛 義篤	同	土間 同	野榮 木村 勝	板塀 村田三千子	立秋 同	富士山麓水源地	小川 緑
伊東 忠子	牡丹 同	同	暖日 小柳秀太郎	風景 賀茂牛之輔	馬槌 同	外人墓地	同	山ノ手二十一番
門 井上 重生	江の浦 同	同	南豆早春	静物 同	初冬静物	同	寺院(巴里郊外)	同
魚 同	花 ○栗田 雄	同	仁王(朝鮮洛山寺にて)	爽のある静物	雨後の港	花 △南城 一夫	支那人形	夕暮 岡本 保
朝顔 伊藤 祝三	○倉田 三郎	同	金 敏 龜	水浴 加賀孝一郎	宮田清之助	釣の静物	○小穴 隆一	女三人
鶏舍 伊藤 敏博	少女 同	同	南佛の秋	野良猫 同	沖繩風景	静物 同	アネモネ	△柴田 恕夫
白毫寺村淺春	窓 同	同	上永井 正	田舎藝者	櫻堀秋色	青い本野村	同	母子像 同
飯田 衛	休息 同	同	ビレネー風景	三番叟 同	同	冬景 同	T君 同	畫家 同
朝顔 乾 久雄	山村 同	同	海邊にて	漁村風景	同	聴音 同	つゝじ	室内男 同
松のある庭	庭隅 同	同	同	笠松 春彦	風景 森田 秀	集花 長岡 民子	△大澤鉦一郎	静物 志村 一男
今竹 七郎	みかん	同	同	けしとあざみ	食事 宮脇 晴	庭 長岡 一敏	志摩の漁村	T君 佐藤 篤郎
梅 同	○小林徳三郎	同	夏的車内	通行止川島昇太郎	少年の構圖	中田 政夫	同	親子馬澁谷 修
石組の圖	黄菊の束	同	北岡 文雄	丘のけむり	後向きの二人の踊り子	濱波太中村 萬平	静物△鬼塚 金華	葉牡丹 同
畫室の正月	河口湖 同	同	岩吉君坐像	同	同	同	花 同	あぢさる
石井 光風	河口湖夕照	同	加藤 青	同	同	同	おてだま	砂上裸形
裏町のアパート	同	同	マサ半身像	同	同	同	同	同
公園に憩ふ	白椿とみかん	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
カンナ岩崎又二郎	薄の庭	同	同	同	同	同	同	同
同	○加山 四郎	同	同	同	同	同	同	同

は特別陳列として「日本の銅版、石版畫の歴史展」が行はれてゐるが、司馬江漢、亞歐堂田善等から現代作家までの作品を蒐めたもので、貴重な資料といへる。現代作家では裕伊之助の石版「朝顔」がガツシリした作品だ。

〔陳列數〕八八點、別に日本銅版畫、石版畫の歴史的陳列一四八點〔會友推舉〕東一雄、大久保一、大道寺達、松下義雄、伊東健乃典、飯野農夫也、角野誠治、淺野榮二、出雲大雲〔新版畫賞〕なし

尚美會第一回展(日) 十七日—十九日
名古屋・丸善

日本水彩畫會第二十八回展 十七日—
廿日 東京府美術館

東日—この會も年とともに間口ばかり廣くなつて、今回なども作品が多いわりに佳作が少い。古い會員の中では石井柏亭の「秋田路をバックの少女像」が出色であり、若手では新制作派の脇田、中西など比較的良好、小山良修も二點のうち「花の靜物」は無難。會友級には齋藤求をのぞいて佳作なく、むしろ一般出品の吉松眞司「壺」古川又治郎「池」飯田虎雄「聲の通り」などが注目される。

〔搬入〕七二〇點〔入選〕一三二點〔陳列數〕三五七點〔日本水彩賞〕齋藤求〔第一賞〕古川又次郎(みづゑ賞)飯田虎雄

柏舟社新作展(日) 十八日—廿日 京都・靈山畫廊

大山八大道人南畫展 十九日—廿一日

美術展覽會(四月)

日本橋・東美俱樂部
紅騎會彩色工藝展 十九日—廿四日

日本橋・三越

第三回現代水彩畫會展 廿日—廿四日
日本橋・三越

關谷雲涯個展(日) 廿一日—廿三日
虎ノ門・華族會館

石川欽一郎水彩展 廿一日—廿五日
銀座・青樹社

七鳳會第五回展(洋) 廿二日—廿四日
銀座・菊屋

伊藤慶之助油繪展 廿二日—廿六日
名古屋・丸善

大井基個展(洋) 廿二日—廿六日 大阪・三角堂

平田松堂繪畫展(日) 廿二日—廿七日
大阪・三越

陶華會第三十四回新作陶藝展 廿二日—廿七日 大阪・大丸

尚工會作品展(工藝) 廿二日—廿八日
銀座・服部時計店

漆原木虫版畫展 廿二日—廿日 大阪・三越

林重義新作展(洋) 廿三日—廿七日
神戸・畫廊

第一回光和會洋畫、彫刻展 廿三日—廿七日 上野・松坂屋

本間國生「朝鮮畫觀」展(日) 廿三日—廿七日 日本橋・高島屋

東光會第九回展(洋) 廿三日—廿九日
大阪市立美術館

第十四回構造社展(彫) 廿三日—五月

四日 東京府美術館

都—齋藤素嚴の薄浮彫の肖像は微細な陰翳の調子ある練達の技法で暢びやかな繪畫的雰囲気は漂はせてゐるが、觸覺的な峻潔さが乏しいので其雰囲気はたゞ彫刻の外皮に止つてゐる像の中核に滲透してゐない。この會では、瀬戸園治の作品が技法に少し暢々しないところが缺點だと思ふが、質實な觀照で仕事に實があつて面白い。暢々しないのは、その觸覺的感銘が指や掌の觸感の表現に頼りすぎて身體全體の觸感といふやうなものが等閑にされてゐるからではないかと思ふ。番外に出てゐる利田垣良雄といふ盲人の作品を見ると、これは全然指や掌の觸感に頼つてゐるので、眼開きみると非常に畏縮した感じがあるのは、技術が幼稚といふばかりでなくさういふ理由もあるのではあらう。

分離派風の構成を狙つてゐる安永良徳や宮地寅彦の作風は低俗な甘つたるさから脱却し得ず、眞實の新鮮さを失つてゐる。それに較べると井手則雄の抒情的作風の方が若々しさがあつて、いゝ意味の「あまさ」があるけれど造形の緊迫感が足りない。堤達男の「うすれ陽」といふ作品も、光の解釋など抒情味のある滑らし方だが、同じ様に緊迫感が足りぬ。賞を貰つてゐる佐藤仁宗の「男習作」はアクセントがなくて退屈だ。(今泉篤男)〔搬入〕百五點〔入選〕一般九〇點番外二點〔陳列數〕九二點〔構造賞〕佐藤仁

宗〔研究賞〕井手則雄、原田新八郎、堤達男、佐野信雄、清田清也〔會友推舉〕

原田新八郎、佐藤仁宗、清田清也

贈農村道場繪畫展示會(日、洋) 廿四日—廿七日 新宿・伊勢丹 主催・農村更生協會、東京日日新聞社 贊助・農林省、作品寄贈・新日本美術聯盟

古賀春江遺作展(洋) 廿五日—廿九日
大阪・朝日會館

現代彫塑家新作展 廿五日—廿九日
日本橋・三越

綾岡會第十回彫金展 廿五日—卅日
日本橋・三越

高間惣七個展(洋) 廿六日—廿九日
銀座・資生堂

東日—例によつて溫室の蘭に小鳥を配した綺麗事の畫面ではあるが、今回展示された三十號の「初夏の庭」は色調豊かなうちに清楚な感覺があつて佳作といへる。その他小品ながら「赤いインコ」に構圖の面白さがある。

燦本社第十六回日本畫展 廿六日—卅日
銀座・菊屋

小西謙三油繪展 廿六日—卅日
青樹社

第二回園外社展(日) 廿六日—五月二日
廣島縣立産業獎勵館

第一美術協會第十三回展(洋) 廿六日—五月十日 東京府美術館

東日—會員のなかでは松坂康、濱地清松の二人が注目される。前者のハノイ風景二點、後者の「潮岬」はまづ佳作とい

美術展覽會 (五月)

へよう。會友では高橋賢一郎がちよつと面白く、特に廣東の大通りと裏通りを描いた小品はいゝ。一般出品には佳作は少く、わづかに大澤絹治の人物二點、出雲林次郎の版畫「客席」が辛うじて取上げられるのみ、授賞の中野うめよは素描力が足りない。

〔搬入〕二二八一點〔入選〕二二八點〔陳列數〕三三四點〔授賞〕中野うめよ、田中進、岡村三夫〔新會員〕山口美勇〔新會友〕木下正治〔新客員〕深谷栖州

第二回美術文化展(綜合) 廿七日—五月六日 東京府美術館

讀賣—福澤一郎の「風景」は茫洋たる大きさをたゝへてゐる然も清新な色感高い秀作であり、吉井忠の北歐風な寫實精神は「女」屋外」の佳作を生み、米倉壽仁のセビヤによる日本畫風の裝飾感を出した「時雨」は一つの試みで、輕薄ではないが重厚さが加はると一層よくなるだらう。井上長三郎では「ローマ」の柔かく暖かな色感がよく、小原川修の「開發」や三水公平の「化石」等には部分的に難があつても先づ肯けるし、金子英雄などの任意な配列による克明な花卉の細部描寫は、新しい花鳥畫として一つの行き方を示唆する。その他麻生三郎、土屋幸夫、寺田政明、小牧源太郎等個性的作家の多いのもこの會の特色である。日本畫の部はまだ一體に若く將來を待つが面白いものが生れさうな氣配はする。

〔搬入〕八二五點〔入選〕二〇九點〔陳

列數) 一九一點〔授賞・推薦〕なし

クロツキ—研究所第十一回所員作品展

廿八日—卅日 銀座・紀伊國屋

玉村方久斗個展(日) 廿九日—五月四日

日 上野・松坂屋

屋彩會第一回展(洋) 廿九日—五月四日

日 大阪・大丸

高澤圭一戰爭畫大陸風物畫展(洋) 廿九日—五月四日 大阪・三越

金澤工藝六耀會新作工藝品展 廿九日—五月四日 大阪・大丸

會津八一水墨展 卅日—五月二日 銀座・鳩居堂

座・鳩居堂

五月

小出橋重遺作展(洋) 一日—四日 上野・松坂屋

報知—二科の異才小出橋重遊いて十年、その畫業を回顧する展覧だが「Nの家族」「帽子を冠れる肖像」「支那寢臺の裸婦」等の代表作や特色ある素描、ガラス繪があり、ほゞ彼の風貌を知るに足りる、その精確なデッサンと大膽な單純化による主體の實在性の把握は晩年に至つて益々圓熟し、就中裸體畫は彼ほどに描きこなす畫人の乏しいことをしみゝと感じさせるものだ。

芝浦美術會第一回展(洋、彫、工) 一日—四日 日本橋・高島屋

日本陶磁彫刻作家協會第二回展 一日—四日 日本橋・三越

現代大家新作日本畫展 一日—四日

名古屋・松坂屋

朱葉會第二十三回展(洋) 一日—四日 日本橋・白木屋

〔陳列總數〕一五〇點〔入選〕六五點

兒玉希望門下鍊社第二回展(日) 一日—四日 上野・松坂屋

日本漆藝院第五回展 一日—四日 日本橋・三越

〔搬入〕一一七點〔同人出品〕六八點〔入選〕三三點〔推賞〕増田敬象、河合靜山、山田豊、三宅廣周

橋本關雪聖戰記念畫展(日) 一日—四日 日本橋・三越

東日—彩管報國として、さきに軍馬圖その他を獻納したこの作家が最後に納める大作「兩面愛染明王」を中心に、奉祝展に間に合はなかつた二曲一雙「玄猿白鶴」ほか八點をあはせて展示したもの、前者は幅六尺に堅一丈二尺といふ大畫面で、大日即ち愛染で日の丸を象徴し、その下に皇軍奮戰の圖を描いてゐるが、難をいへば不動と戰鬪圖の間に緊密さが足りない。後者の猿を描いた半双は流石にうまいが、左半双の紅梅はともかく、鶴はあまり感心できない。

石山太柏第十一回個展(日) 一日—四日 日本橋・高島屋

大阪女流畫家第八回展(日) 一日—五日 大阪市立美術館 女人社主催

〔搬入〕二二六點〔入選〕四八點〔授賞〕葛目弘花、藤田利子、岡田芳子、川田三保子、堀江きぬ、田中明子、佐々木志

津、中村幸子、若林陽子、平澤都規子

二科西人社第七回展(洋) 一日—五日 福岡・縣公會堂

一水會會員春季展(洋) 一日—六日 大阪・美交社

井上良齋作陶展 一日—六日 大阪・三越

新燈社春の小品展(日、洋) 一日—六日 大阪・三越

日本美術協會第百十三回展(日、彫、工) 一日—十五日 日本美術協會

〔陳列總數〕六五二點〔入選〕二八六點

〔無鑑査〕六三點〔二等賞〕繪畫) 大紫丹溪(彫刻) 翁朝盛(工藝) 須田桑月、小川英風、茅野黎明、中野惠祥、林萬壽人、中谷喜男、加藤一、井上良齋、増田敬象、伊東サイワヒ(三等賞) 繪畫) 稻川光風、五十嵐久利、樋田五峯、岩崎湖堂、森田菁華、石川美峰、吉住節朝(彫刻) 綿引弘、石田文之助、吉川不二雄(工藝) 飯塚小玗齋、石川照雲、小林親光、福田三郎、飯田喜代鏡、河内宗明、香川勝清、帖佐美行、大關勝盛、小川友衛、大谷玲石、高島弘雅、加藤忠三郎、木村庄太郎、山本龍民、土屋宗益、利泉湧清、岡本爲治、加賀月華、森三樹、岩下紅陽、伊藤得眞、鈴木晴江、矢島親山、村田半七、渡邊伊川

第六回京都市美術展(綜合) 一日—二十日 大禮記念京都美術館

〔審査委員)(日本畫) 橋本關雪、西山翠嶂、徳岡神泉、小野竹喬、川村曼舟、宇

田萩邨、上村松篁、山口華楊、窠本一洋
 福田平八郎、菊池契月（洋畫）太田喜二
 郎、大橋孝吉、鹿子木孟郎、田中善之助
 黒田重太郎、須田國太郎（彫塑）大西三
 四郎、矢野判三、松田尙之（工藝）堂本
 三五良、岸本彦太郎、清水六兵衛、清水
 正太郎、皆川月華、平館衛

搬入數 入選數 陳列數

日本畫 二二八 一二五 一四九
 洋畫 四一八 二〇一 二二六
 彫塑 五三 二九 三八
 工藝 二九五 一二四 一四四
 合計 九九四 四七九 五五七

右の内容審査委員の出品は日本畫七、洋
 畫七、彫塑五、工藝七、合計二六點で、
 委員の出品は日本畫一七、洋畫一九、彫
 塑四、工藝一三、合計五三點であつた。

〔授賞〕（日本畫）暮雪 三本文夫、「春
 曉」川邊華堂、「南島春日」川島浩、「秋
 齋藤猪三夫、「霜」中島榮治、「春」多田
 敬一、「風」黒木亮、「森ノ中」秦昌（洋
 畫）「風景」三水公平、「メザシ」大沼亮
 之助、「冬ノ海」岩崎又二郎、「春ノ光」水
 清公子、「コスチューム習作二」柴田又太
 郎、「遊童」由利明、「冬陽の杉」福井勇
 「殘月」津田周平、「花菖蒲」藤井義明、
 「椿花」琴塚英一（彫塑）「神前」芹田岳
 堂、「立女」山本節郎、「若い女」峰孝、
 （工藝）「麥文陶箱」米澤蘇峯、「磁製花
 模様大鉢」中島清、「手織錦乳牛圖壁掛」
 中村鵬生、「刻花菱型花瓶」堀岡道仙、
 「鶯鶯圖二枚折屏風」森元伊造、「古陶よ

りの試作糊拔蠟染屏風」楠田撫泉、「彩漆
 隅屏風」尾關成章

新美術人協會第四回展（日）二日—十

二日 東京府美術館

讀賣—吉岡堅二の「群」は去年同様馴
 鹿に取材したものでアルタミラの原始様
 式の近代化もまた顯著である。そして去
 年に比べると鹿群の運動感は頗る輕快で
 あるが、去年ほど構想力の逞しさを見な
 いのはこの人として物足りない。福田豊
 四郎の「冬漁」は八郎湯の行事を取扱つ
 て久しぶりに得意の童心で郷土色を娛し
 んでゐる。それだけに破綻はないが、ま
 たそれだけに手馴れて迫力の乏しい感じ
 である。藤田隆治は美術文化の福澤を思
 はせるが、藤田復生、米田莞爾、海老原
 南夷等もそれぞれその意氣なかに旺盛な
 盛な力作である。併し概しては技法がや
 や粗雑で表現内容の充實しない憾みが多
 い。岩崎鐸は構成が微温的ながら色感が
 洗練されてをり間宮正は更に甘い色調
 は一層生新である。柴田安子の「搗杵」
 は技の確かな點で注目される。たゞ少々
 固くなり過ぎなかつたか。これらよりも
 今年場中で異彩を放つてゐるのは堀文子
 の「結實」と「穀物」である。そのルン
 ー張りも去年より一層身について磁味が
 出て來た。

〔搬入〕一〇七點〔入選〕二一點〔陳列
 總數〕三六點
 熊谷九壽個展（洋）六日—十日 銀座
 資生堂

南薰造個展（洋）六日—十日 大阪・
 寄樹社

加藤靜兒近作風景畫展（洋）六日—十
 日 名古屋・丸善

道林俊正作陶個展 六日—十一日 京
 都・大丸

丹丘會京都展（日）六日—十一日 京
 都・丸物

早苗會第四回小品畫展（日）七日—十
 日 名古屋・松坂屋

皇陶會第二回展（工）七日—十一日
 日本橋・三越

西澤笛畝門下朝陽社第三回展（日）七
 日—十一日 新宿・三越

現代巨匠作品展（日、洋、彫）七日—
 十一日 上野・松坂屋 同店主催

清水正太郎新作陶磁展 七日—十一日
 日本橋・高島屋

東日—草花文大皿のやうに大きくまと
 めたものはよいが、舊微文壺その他の作
 品に描かれた文様は余りに寫實に偏り過
 ぎ、十九の華文皿は釉藥と便化した文案
 に歐洲もの、やうな薄い感じを與へる。
 しかも赤三鳥花瓶は形に創案があり、發
 色の具合も殊によろしい。軟い調子の華
 文壺や柿形の黒釉壺などは佳品だと思
 ふ。

創造美術協會洋畫展 七日—十一日
 大阪・阪急
 庚辰會第二回工藝展 七日—十四日
 銀座・松屋
 綵尙會第三回展（日）八日—十日 日

本橋・東美俱樂部・關向美堂主催
 庭山耕園社中第十三回繪畫展（日）八
 日—十一日 大阪・三越

松平康南油繪個展 九日—十三日 銀
 座・寄樹社

新古典美術協會第六回展（洋、版、彫
 工）九日—十九日 東京府美術館

讀賣—この會の油繪は先づ高橋貞一郎
 の「山の池」と「梅ヶ丘風景」が觀賞に堪
 へる佳作で他には内藤健一あたりに見ど
 ころがある位なもので岡崎桃乞の油で宋
 元をねらつた行き方も限界性あることを
 知るべきだらう。版畫の松田侯三は一寸
 棟方志功に似てゐるがもつと品がよく味
 が細かで技巧もまづくない。金子九平次
 の彫刻は暢達なところがながい。「小楠公
 像」は無難、土方久功の南洋もの（木彫）
 は少し形が崩れてきた。他に工藝があり、
 プールデルやピカソも並んでゐて總
 體に小粒ながら去年より活氣を帯びてき
 た。

〔搬入〕繪畫四一八點、彫刻二七點、工
 藝一五六點〔入選〕繪畫一一七點、彫刻
 一三點、工藝一三一點〔新會員〕土田實
 「新會友」松田侯三〔新古典獎勵賞〕内
 藤健一
 綜和工藝戰時文化工藝展 九日—十八
 日 新宿・伊勢丹
 〔入選數〕三三八點〔陳列數〕同上〔東
 京府工藝協會賞〕三名〔綜和工藝賞〕七
 名
 甲斐莊楠音・土橋醇一兩人展（日、洋）

美術展覽會（五月）

十日—十二日 銀座・菊屋

第十九回表装展 十日—十六日 東京

府美術館 東京表装師組合主催

心印畫塾第一回南畫展 十一日—二十

二日 東京府美術館

東日—小室翠雲の率ゐる心印畫塾主催の第一回展、復古的な時代の波に乗つて衰微しかけた南畫が漸時息を吹きかへしてきたためか、はずみがついた感じで、全體に活氣がある點は認める。型通りの運筆、生氣のない墨色の作品が多いなかで比較的清新なのは高島祥光の琵琶湖あたりに取材したらしい「簀立」及び空白の面白さをねらつた濱崎左斐子の「藝南春秋」、また小川千麿の「白河派帆」は構圖の奇智を探る。委員ではまづ翠雲だが「佳麓庵即目」と題する夕月の海景には一應畫品はあるが特に秀作とはいひ難く、鐵山、魯牛、半圓いづれも凡調。田岡春徑の六曲一双も力作だが畫品に缺ける。

〔陳列總數〕九一點〔美術振興會賞〕横内大明、仙田菱畝、栗飯原大醒子〔獎勵賞〕戸田浩堂、峰村北山、降旗竈岳、松尾徑成、高島祥光、湯田眞砂緒、河村李軒、碓南嶺、濱崎左斐子、多田頌生
古賀春江遺作油繪水彩展 十二日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊
清流會第二回展（日）十三日—十六日 銀座・松坂屋
水彩聯盟第一回大阪展 十三日—十六日 大阪・三越

石川滋彦個展（洋）十三日—十七日

大阪・美交社

鬼頭鍋三郎洋畫展 十三日—十七日

名古屋・丸善

堂本畫塾若葉會第三回展並東丘社第四回展（日）十三日—十八日 大阪・大丸

東丘展に於ては塾長堂本印象の觀世音及び新しき試みとして行つた門下生の共同制作を陳列した。

邦畫一如會第一回展（日）十三日—十八日 大阪・三越

塚本繁新作品展（工）十三日—十八日 京都・大丸

日本畫新作展 十四日—十六日 芝・東京美術俱樂部 東京會主催

國風彫塑會小品展 十四日—十八日 日本橋・高島屋

田邊穰個展（洋）十四日—十八日 銀座・菊屋

大日美術院第四回展（日）十四日—二十五日 東京府美術館

都—美術學校の結城素明、川崎小虎と大阪の青木大乗とが委員で美術學校系の洋風日本畫家が活躍して居る。没骨厚塗の畫面は多彩で明るく、まばゆい程の會場である。しかし内容的にそれ程光彩を放つ作品が少いことは淋しい限りだ。新美術家協會でもさうであつたが、創造意慾の旺盛な管の作家群にしては不當に題材の範圍が局限されて居る。五彩に彩る海濱風景と白灰色の山岳風景とが十點に近い授賞作をはじめとして多數録合せし

て居るのは、さういふ題材を描くことが直ちに何か新しい方向のやうに誤解されて居るのではないか。油繪のやうな明暗を求めようとして日本畫の顏料を油繪風に厚塗りしたのでは、光は鈍くしか現はし得ないで、單に色彩の羅列となつてしまふ。又若し光を色彩に置換へるつもりならば、それに備へるに充分なだけの抽象とマチュエルとに對する周到な用意に缺くる所はないか。これらは洋風を追ふ日本畫が等しく突當る問題で、今後の研究に俟つ所多いが、この作家群はかうした問題に就いて殆んど無神經であるかの様に描きまくつてゐる。結果を急がずに、その道程でもつと／＼苦しんでい

のだ。川崎小虎はさすがに苦勞して居る。「砂濱」には内面的な憂愁がたまつてゐる。しかしそのザラついたマチュエルと機械的な刷毛使ひとは所詮粗糲の難を免れないもので、これが追隨者に影響しては更に形骸化されてゐる。青木大乗の「海驢」は大作といふ以外に評の言葉がない。委員以外では、裝飾的傾向に清田聖二「雪消水」平口勝雄「初夏」福田鑒治「冬暖」抒情的傾向に寺田六華「桃」櫻井香具皆「おもひでの春」自然主義的傾向に長嶺雅男「岩と砂」菅澤幸司「森ヶ瀧」東山魁夷「京の家」一噌青水「小松」が目目される。東山魁夷の「京の家」は佳作であるが、獨逸に取材した諸作は異つた題材と恰度ガツシユの繪を見るやうな畫面効果とで目を惹きながら、脆弱

三〇

なデッサンのために稀薄な印象しか残らないのは惜しい。（大口理夫）

〔撤入〕二〇五點〔入選〕九九點〔陳列總數〕一一五點〔新院僚〕三河義太郎、菊澤榮一、寺門彦壽、沖中陽明、山本瑛幾〔大日賞〕三河義太郎、菊澤榮一、寺門彦壽、沖中陽明〔大毎東日賞〕山本瑛幾〔獎勵賞〕近藤總、月岡榮吉、山田皓齋

宮田重雄新作油繪個展 十五日—十八日 銀座・資生堂

一水會第五回小品展（洋）十五日—十九日 銀座・青樹社

報知—會員全部が出陳し、例の如く各各築き上げた畫技に安住した境地を見せられてゐるが、この保守精神が中村善策、安宅虎雄、高野三三男等の若い會員層を退嬰的にするまでしみてゐるのは疑問といふべきだ。場中では碓伊之助の「矢車草」の溫雅さがまづ擧げるべきもの、安井會太郎の「三寶柑」の鋭い技法も至形が趣味に偏してゐるのが目障りだ。山下新太郎の「薔薇」石井柏亭の「風景」は月並の出来。

林雲鳳日本畫個展 十六日—十八日 名古屋・松坂屋
青甲社海軍獻納畫展（日）十六日—十八日 京都・市公會堂
靜岡縣美術協會第七回展（綜合）十六日—二十日 靜岡・商工獎勵館及教育會館

〔陳列總數〕一九〇點〔審査員〕牧野虎

雄、石川欽一郎、中村岳陵、澤田晴廣、
芹澤銈介

正統木彫家協會第一回展 十六日—二
十四日 東京府美術館

讀賣—傳統の重壓に氣息奄々としてゐ
たわが木彫界に對して新たな旗印を押し
立てたこの會に先づ要求されたのは寫實
精神である。從來の主題を開放して塑像
と競ふほどの自由な選擇、動きある姿態
の研究が少くない。澤田晴廣の傳説や幻
想による造形表現はそのまゝでは必ずし
も賛し難いが鍍金の阿彌陀佛は立派な仕
事である。三木宗策の「萬葉想華」もわ
るくないが西村雅之と橋本高昇の二作は
佳作といつてよく、圓鈴勝二の個性的な
二作も注目され、その他尾形喜代、宗像
庄一郎、大隈義夫、本田得世志、立川金
縁などが挙げられる。

〔搬入〕六點、〔入選〕六點、〔陳列總數〕
五八點〔授賞〕無

翔鳥會第四回展(日) 十七日—二十一
日 銀座・松坂屋

龍駿介富士油繪展 十七日—二十二日
日本橋・高島屋

日本女子美術院第一回展(日、洋) 十
七日—三十日 東京府美術館

〔陳列總數〕五四點

双台社第一回展(洋) 十八日—二十五
日 東京府美術館

東日—文化學院から離れた石井柏亭氏
を中心に會つてその指導を受けた、また
現在指導されつゝある作家百餘名で結成

美術展覽會(五月)

された團體の第一回作品發表展であるが
この會の出品畫として特に制作する餘裕
がなかつたためか、ただ一通り顔をそろ
へたといふ感じになつたのは遺憾だ。従
つて、全體に穩健なだけでこれといふ佳
作はないが、中で田坂乾、渡邊正一など
比較的よく、納富進も小品には清新さを
認める。龍川太郎の海景は船のある方
に面白さがあるが粗く、岡田行一の肖像
二點はまだまだ畫面に厚味が足りない。
水彩では荒谷直之介と不破章の作品を採
る。

〔陳列數〕一九五點
童林社第九回展(洋、彫) 十八日—二
十六日 東京府美術館
第一回大阪市展(綜合) 十八日—六月
一日 大阪市立美術館

大阪市は昨年奉祝市展を開催したが、
今後綜合美術展を定期的に開催すること
となり、本年第一回展を開いた。陳列作
品は公募とし前回の奉祝市展の審査員及
び推舉せられた者は無鑑査とした。

〔審査員〕(日本畫) 北野恒富、菅桁彦、
天野知道人(洋畫) 赤松麟作、齋藤與
里、林重義、小磯良平(彫塑) 上田曉、
保田龍門、佐伯量良(工藝) 越田尾山、
杉田禾堂、中島豐次、山本笙園〔搬入〕
日本畫二一六點、洋畫八〇四點、彫塑一
五三點、工藝三一五點〔入選〕日本畫七
七點、洋畫一二二點、彫塑四七點、工藝
六九點〔陳列數〕日本畫八〇點、洋畫一
二八點、彫塑五二點、工藝八一點〔無鑑

査推舉〕(日本畫) 岡茂以、直原放青(洋
畫) 辻利平、家永麒三郎(彫塑) ナシ

〔工藝〕小林美春、羽原秋芳(市長賞第
一席)(日本畫) 仲本玄同、原田美智恵

(洋畫) 小松益喜、林綾子(彫塑) 清水
要、大西金次郎(工藝) 山本竹龍齋、日
比野近三(市長賞第二席)(日本畫) 田
場笙月、北村千枝、月居偉光(洋畫) 工
藤正義、徳永富士子、藤尾龍四郎(彫
塑) 日高正法、木下正彦、野呂天潤(工
藝) 芳武茂介、川口虛舟、楠正多(大阪
毎日新聞社賞)(日本畫) 坂口瀧太郎(洋
畫) 松野太郎(彫塑) 池田秀風(工藝)
中條義男(朝日新聞社賞)(日本畫) 山
口聰鳳(洋畫) 梅澤靜雄(彫塑) 井上重
四郎(工藝) 廣瀬公舟

鹿兒島二番第二回個展(日) 十九日—
二十一日 銀座・鳩居堂
東西大家新作繪畫展(日) 二十日—二
十二日 大阪・三越

春草會第二回日本畫展 二十日—二十
三日 大阪・大丸
綏尚會第三回展(日) 二十日—二十三
日 京都・岡崎公會堂

田中行一油繪個展 二十日—二十四日
大阪・阪急
堂本印象畫塾東丘展(日) 二十日—二
十五日 神戸・大丸

青甲社海軍獻納畫展(日) 二十日—二
十七日 大阪・高島屋 主催大阪地方海
軍人事部
東葉染織技藝展 二十一日—二十四

日 日本橋・高島屋
白宏會第一回日本畫展 二十一日—二
十五日 名古屋・松坂屋

二科五人展(洋) 二十一日—二十五日
大阪・關西畫廊 主催草人社
撰美畫展(日) 二十二日—二十三日

京都美術俱樂部
創元會第一回繪畫展(洋) 二十二日—
六月一日 日本美術協會
讀賣—文展系の無所屬作家十一氏結成
の第一回公募展で場中では中野和高が清
新な色調、構圖によつて目立つが畫面構
成の意圖が見え過ぎ、阿以田治修の「娘
二人」は聊か漫畫調だが無駄がなく樂し
める佳作。大久保作次郎は堅實といふだ
けで感觸が古い、いつそつと裝飾畫風
にしたらどんなものか。會員外では大貫
松三、倉員辰雄、牛島憲三などがよく一
體に穩健であるが相當によくセレクトし
てある。

〔搬入〕一一二九點(四三二名)〔入選〕
一二二點(九七名)〔陳列數〕一四一點
〔會員推薦〕大貫松三、倉員辰雄、山下
大五郎〔會友推薦〕飯島一、圓城寺昇
〔賞〕牛島憲之、榎戸庄衛、小野彦三
郎、川村精一郎、金田新治郎、笹岡了一
須田壽、長屋勇、樋口一郎、李石樵
日本エツチング作家協會第二回展 二
十三日—二十六日 銀座・資生堂

環友會第一回展(日、彫) 二十三日—
二十七日 大阪・松坂屋
白閃社第四回展(日) 二十三日—六月

二日 東京府美術館

〔搬入〕四五點〔入選〕二點〔授賞者〕大森湖山人

軍事保護院獻納畫展 (日) 二十四日—三十一日 上野・松坂屋

早川國彦個展 (洋) 二十五日—三十一日 大阪・阪急

第五回大日本海洋美術展 (日、洋) 二十五日—六月五日 東京府美術館 主催 大日本海洋美術協會、海軍協會、朝日新聞社 後援海軍省

東日—今回はどちらかといへば海軍省

貸下の作戦記録畫と參考畫が中心になつてゐる。前者のなかでは、嚴密には海洋美術といへぬものではあるが、中村研一の「柳州爆撃」藤田嗣治の「南昌飛行場の焼打」などがよく、後者で注目されるのは松方コレクションのヘミ晩年の作「水雷發射」日本畫では司馬江漢の「捕鯨圖」がある。出品畫の佳作はやはり授賞作品で、安田豊の「北洋の幸」白石隆一の「鯨」、日本畫では笠松紫浪の「鯨漁」、村松乙彦の「山原船」などそれ々に努力してゐる。招待出品中出色のものは鶴田吾郎の大作「黒潮寄する處」で、難をいへば人物が多過ぎる點だが、背景、前景の處理など並ならぬ苦心が窺はれる。

〔審査員〕石井柏亭、長谷川昇、中村研一、山下新太郎、南薫造、石川寅治、田邊至、中澤弘光、藤田嗣治、伊東深水、川端龍子、川崎小虎、野田九浦、矢澤弦

月、安田毅彦、松林桂月〔搬入〕七〇〇

點〔入選〕九八點〔海軍美術協會員及招待者出品〕六八點〔海軍作戦記録畫〕一

二點〔參考畫〕一五點〔陳列總數〕一九三點〔海軍大臣賞〕安田豊、笠松紫浪〔海軍協會賞〕岡本貞四郎、久間光一〔朝日新聞社賞〕白石隆一、村松乙彦

海軍作戦記録畫 (洋畫)

畫題 作者 所藏者

南京空襲 田邊至 海軍省

南支某基地 中村研一 同

虎門要塞攻撃 熊岡美彦 同

南支飛行場の焼打 藤田嗣治 同

鎮江攻略 石川寅治 同

上海油公司の戦 石井柏亭 同

柳州爆撃 中村研一 同

軍艦出雲 石井柏亭 同

珠江口掃海 熊岡美彦 同

武漢進撃 藤田嗣治 同

渡洋爆撃 石川寅治 同

上海崇德女子小學校の戦闘 田邊至 同

洋畫

時化 英ブランギン某氏

日露海戦直前 英ワイリー 海軍省

海軍の威容 英ジェーン 軍人會館

軍艦發射 英ヘミ 水交社

日露開戦直前 伊ラゴリオ 海軍省

旅順口 川村清雄 石田雄二

日本海海戦に於ける三笠艦橋の夕 黒田清輝 女子學習院

軍艦扶桑航海 伊マルチノ 水交社

扶桑、金剛、比叡 獨ベンネル 水交社

三艦天覽之圖 日本畫

御物黃海海戦 (其一、其二、其三) 村田丹陵 宮内省

蒙古襲來圖附屬頼支峰筆詩 菊池容齋 岡田寛

千里一望 田崎草雲 石井郡司

捕鯨圖 司馬江漢 平尾贊平

蒙古襲來繪詞 東京帝國博物館

東都名家新作畫展 (日) 二十六日—二十八日 芝・東京美術俱樂部 角谷二葉堂主催

後藤碩二第一回個展 (洋) 二十六日—三十日 銀座・菊屋

鈴木信太郎個展 (洋) 二十六日—三十一日 大阪・美交社

柏舟社日本畫展 二十七日—二十九日 京都・大丸

新制作派協會春季展 (洋、彫) 二十七日—三十日 銀座・資生堂

讀賣—萩須高徳の建築風景と小磯良平の婦人像は共に寫實力のすぐれた佳品であるがいつもと同じ調子のもの。猪熊弦一郎は垢ぬけた線と色の好みにより明快な近代調を出し、内田巖の「コスチューム」は手ぎはのよいところはないが人物にふくらみが出て來た。彫刻の本郷新は木と石の素材を生かしながら仕事をすゝめてゐる點が買はれ、佐藤忠良の女の顔も表現的確な佳作といへる。

筑前美術會第八回展 (綜合) 二十七日—三十日 銀座・松坂屋

芋錢・恒友・林響小品遺作展 (日) 二十七日—三十一日 上野・松坂屋

新興美術院展 (日) 二十七日—六月一日 大阪・阪急

和土苑同人第二回新作陶藝展 二十七日—六月一日 大阪・大丸

石川縣工藝獎勵會新作工藝品展 二十七日—六月一日 大阪・大丸

現代美術協會第三回展 (日、洋) 二十七日—六月五日 東京府美術館

〔搬入〕日本畫一五三點、洋畫二〇〇點〔入選〕日本畫八〇點、洋畫四五點〔陳列總數〕日本畫一五三點、洋畫二〇〇點〔美術賞〕和高節二、長谷川優策、西村愿定〔特選〕川崎省三、石塚青我、櫻田精一、倉橋英男、橋本三郎

第七回汎美展 (日、洋) 二十七日—六月五日 東京府美術館

〔陳列總數〕九五點

東邦彫塑院第五回展 二十七日—六月五日 東京府美術館

東朝—北村西望等官展系有力作家を持つこの内容は遺憾ながら感服しない。中島東洋の「磯の焚火」をはじめ多くの作家は殊更な形をもつて觀者に迫らんとし、不安定な立像、表面的なねらひにのみ終始して内面への追求が不足してゐる。長谷川榮作の「Y嬢像」がや、救はれ、關野聖雲の「中江藤樹先生」森山朝光の「東湖先生」安一の「戰友道」等時

局的な材あるが注目すべきであり、白衣勇士の作品に敬意を表す。

〔陳列數〕一二五點、別ニ特別陳列白木勇士作品(會員推薦)大橋清、織田一市、小野哲子、隈本二郎、兒玉賢市、小松宏次、佐藤助雄、城戸直山、水野善次郎、日高正樹、茂木弘次、鈴木利一(會友推薦)稻垣勝美、外十名(東邦彫塑院賞及南條氏獎勵賞)高橋英吉、有地滋勉、北村治禱

新挿繪第四回展 二十八日—六月一日
日本橋・白木屋

イタリヤ現代繪畫展 二十八日—六月二日
銀座・青樹社

絲尚會第三回展(日)二十九日—三十一日
大阪・そごう

麻田辨次新作畫展(日)三十日—六月一日
京都・大丸

日本南畫松聲會第十六回展 三十日—六月一日
神戸・大丸

三春會、日本彫刻家協會聯立展 二十九日—六月五日
東京府美術館

〔三春會陳列數〕六〇點〔日本彫刻家協會搬入〕三〇點〔入選〕一四點〔陳列數〕六二點〔會員推薦〕金谷不二彦、小寺昌三(會友推薦)國領辰彌、石田清、陳夏雨、松村禮一(武井直也賞)國領辰彌〔獎勵賞〕石田清、陳夏雨

六月

青樹社第七回展(日)一日—三日
名古屋・鶴舞公園美術館

美術展覽會(六月)

舊我會展(日)一日—三日
大禮記念
京都美術館 水田竹間塾主催

廣橋環響、菅田剛吉、土味川獨甫三人集(日)一日—三日
銀座・菊屋

松平齋光澤歐作品展(洋)一日—三日
銀座・日動畫廊

染織藝術展 一日—四日
大阪・そごう

京都染織藝術協會主催
荻須高德澤歐作品展(洋)一日—六日
名古屋・松坂屋

美友會第十八回工藝品展 一日—七日
大阪・三越

宮永東山作陶展 一日—七日
日本橋・三越

第二十回朝鮮美術展覽會(綜合) 一日—十二日
京城・總督府美術館

朝鮮總督府主催による第二十回朝鮮展の審査員は結城素明、田邊至、岡野聖雲、六角紫水の四名で鑑査の成績は左の通りであつた。

搬入 入選

第一部東洋畫 一四三點 五四點
八四名 五三名

第二部西洋畫 八六三點 一五〇點
四九八名 一四七名

第三部 彫塑 一五五點 九名
工藝 一七七名 六三名

〔陳列數〕東洋畫六六點、西洋畫一七九點、彫塑一點、工藝七六點〔歷代審査員特別出陳〕三六點〔昌德宮賜賞〕(第

一部)今田慶一郎(第二部)川原隆夫(第三部)金景承(總督賞)(第一部)

鄭末朝、張遇聖(第二部)金重鉉、岡田清一(第三部)曹圭奉、李世榮(朝鮮總力聯盟賞)(第三部)瀨尾孝正

日本壁畫會第五回展(洋)三日—七日
銀座・青樹社

和田香苗近作油繪展 三日—八日
上野・松坂屋

第一回現代陶藝美術展 三日—八日
日本橋・高島屋

出品作家は富本憲吉、清水六兵衛、河井寛次郎、濱田庄司、板谷波山の五名

岩田藤七新作硝子器展 三日—八日
日本橋・高島屋

珊々會第七回展(日)四日—八日
本橋・高島屋

讀賣「翠嶂の「霧の海」は霧のたちこめた大氣と落日の殘照を眞正面から描いた苦心の作で光線と空氣の表現は日本畫としては破格の面白味あるものであるが波の把へ方は稍行きすぎであらう。放庵は「六歌仙」を、松園は「夕べ」と題する美人畫を、素明は忠實な寫實に五穀豐稔をたへてゐるが、契月の「郭公」は灰色を基とした色調が落ちつきと品格を加へた佳作であり、清方は「築地川」連作に若き日の明治情調を回想してゐる。

石井彌一郎個展(洋)四日—八日
本橋・白木屋

東北美術第六回展(綜合)五日—十五日
日 仙臺・齋藤報恩會館

東丘社展(日)六日—八日
大禮記念
京都美術館

陶磁研究作品展 六日—八日
大禮記念
京都美術會館

兼重暗香社中展(日)七日—九日
銀座・鳩居堂

小林剛佛印アンコールの古跡寫生展(洋)七日—十一日
銀座・銀座畫廊

栗田九品庵新作日本畫展 九日—十一日
芝・東京美術俱樂部

辻愛造第四回個展(洋)九日—十三日
大阪・美友社

谷口仙花個展(日)十日—十四日
大阪・朝日ビル

大朝會春季展(日・洋)十日—十四日
銀座・三越

野間仁根新作油繪展 十日—十四日
數寄屋橋・日動畫廊

報知「昨年之二科制作も交へた個展、童畫に似た新鮮さがこの作者の身上で、その反面にもろいものがあるのは否めないが、感性のまゝの作畫態度を愉しむことが出来る。場中では「鮎釣場」が形色ともに優れてゐるが、文人畫のやうな「花實と白鷺」「炭焼く煙」「八ヶ嶽」等も擧げてよい作品である。

大亦觀風萬葉集畫撰展(日)十日—十五日
大阪・三越

山本紅雲個展(日)十日—十五日
大阪・阪急

丸岡比呂史個展(日)十日—十五日
大阪・高島屋

小川眞吉ノモンハン戦闘記録スケッチ展 (洋) 十日—十五日 日本橋・白木屋
軍事保護院後援

草原社新作工藝品展 十日—十五日
大阪・大丸

辻工房展示會 十一日—十四日 銀座
・資生堂

西山塾青甲社海軍獻納畫展 (日) 十一日—十五日 日本橋・高島屋 海軍協會主催 海軍省後援

東日—京都の西山翠嶂畫塾青甲社がその創立貳拾周年を記念するため、熟關係の新舊作家を動員して、帝國軍艦の艦名に因んで製作された一種の課題七十數點を獻納の前に一般に展示したもの。畫幅を一定したため展觀としての變化には乏しいが、翠嶂の「日出る處」(軍艦扶桑)印象の「住吉神社」(軍艦長門)はじめ仲たぐみに課題を處理してをり、單に艦名の地を風景として扱つたものにも秋野不矩の「天龍川二題」、西山英雄の「妙高」などの佳作がみられる。

〔陳列數〕八〇點
近東工藝美術展 十一日—十五日 日本橋・高島屋

直土會第一回彫塑展 十一日—十九日 東京府美術館

東朝—長い官展形式が生んだボーイズ尊重の惡例はさきの東邦彫塑院において最も著しいものであるが、この會は同じ官展系にしても技は拙いながら對象を忠實につかまんとする傾向は見える。すなは

ち上體に難ある山根八春の「大いなるものへ」の下部は安定し、建昌大夢の「井原氏の體」も難が少い。山本稚彦の「女立像」は腰のあたりがくづれ下部は浮き安達貫一のそれは上體が悪い。その他例するものは多々あるが、要は先づ安定あつて後理想を表現すべきである。白井謙二郎の「青年」は確實な研究がよく、これに授賞したはよいが、總體にねらひは表面的である。

〔搬入〕七五點 (入選) 六三點 (直土會賞) 白井謙二郎、酒見恒 (獎勵賞) 廣井吉之助、長谷川正雄、建昌覺造、曹圭奉、今村輝久晃、峯孝、伊藤芳雄 (會員推薦) 杉本三郎、木下繁、分部順治、長谷川正雄、三木凱歌、酒見恒、廣井吉之助、白井謙二郎、伊藤芳雄、木内五郎、江川治中野昂、安田周三郎、峯孝、明珍勝友 (會友推薦) 荒木光子、佐野文夫、長嶋利雄、木村石斧、野口晴朗、曹圭奉、今村輝久晃、建昌覺造、田淵勝章

北川民次、東本春水諸國祭禮風俗小品展 (洋) 十二日—十四日 名古屋・丸善
日本民藝館内外工藝比較展 十二日—八月十五日 駒場・同館

中村大三郎畫展 (日) 十三日—十五日 大禮記念京都美術館

大森久彦作陶展 十三日—十八日 日本橋・三越

大日美術院第四回展 (日) 十三日—十二日 大阪市立美術館

関人社第三回展 (日) 十四日—十八日

銀座・菊屋

第三回クレータム線水彩展 十五日—十八日 銀座・青樹社

川島理一郎蘭花圖展 (洋) 十五日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊

讀賣—蘭と共に十年のこの作者がその研究過程である淡彩素描四十點をはじめて公開した。入念な寫生によりよく各種蘭花の絢爛たる特質を再現し香氣を放つてゐる。別に並べられた油のタブロオ七點はこれらの蘭を組合せたものだが(1)と(2)が特にすぐれてゐる。

昭和萬葉會々員作品展 (日) 十六日 銀座・交詢社 堀口蘇山主催
清光會第八回展 (日、洋) 十六日—十九日 銀座・資生堂

東朝—取材としては手練れた梅原龍三郎の「バラ」「北京長安街」中、後者「北京長安街」の雲の描法は、さきの奉祝展出陳の缺陷を改め畫の中心を生かして量を増し、安井會太郎の圓卓上の「果物」は複雑な對象を簡略化した佳品である。

安田叔彦の「すまふ」に示された線描、小林古徑の「瓶花」における行き届いた注意による清楚感など近頃見應へのする展觀である。

兵庫縣美術家聯盟展 (綜合) 十七日—十九日 神戸・大丸

橋本邦助新作日本畫展 十七日—十九日 京城・三中井

小早川清第三回個展 (日) 十七日—十九日 銀座・松坂屋

山口玲戀第二回個展 (日) 十七日—二十日 大阪・松坂屋

大澤海藏油繪近作展 十七日—二十一日 名古屋・丸善

佐原蓬菴個展 (日) 十七日—二十二日 京都・丸物

横尾龍芳鑒國聖地日本畫展 十八日—二十二日 上野・松坂屋

松林桂月門下天香畫塾試作展 (日) 十八日—二十二日 日本橋・白木屋

名古屋屋展俱樂部第二回展 (日) 十八日—二十二日 名古屋・松坂屋

第五回大日本海洋美術展 (日、洋) 十八日—二十七日 名古屋市公會堂 朝日新聞社主催 海軍省後援

戰時下に於ける第十回商業美術展 日本産業美術協會第一回作品發表展

十九日—二十三日 大阪・そごう

加藤士郎萌新作陶展 十八日—二十四日 銀座・服部時計店

福陽美術會第十三回展 (日) 二十日—二十二日 銀座・松坂屋

久保守近作油繪個展 二十日—二十三日 銀座・資生堂 石原求龍堂主催

第三回貿易局工藝品輸出振興展 二十日—二十七日 日本橋・高島屋

〔審査員〕石黒武重、藤島亥治郎、霜島正三郎、豐田勝秋、六角注多良、和田三造、高村豐周、山崎覺太郎、秋月透、國井喜太郎、太田誠二、長島喜三、飯野逸平、河井寛次郎、川勝堅一、各務鐵三、龍村平藏、大隅爲三、山脇巖、明石國助

七月

中野秀人作品展(洋) 一日—四日 銀座・養生堂

林俊衛新作油繪展 一日—四日 數寄屋橋・日動畫廊

荻野康兒朝鮮風景水彩畫展 一日—五日 京城・三越

三宅克己水彩畫展 一日—五日 日本橋・三越

二葉會第五回展(日) 一日—六日 大阪・松坂屋

高岡富也新作彩色硝子展 一日—六日 日本橋・高島屋

天野知道人十畫十陶展 一日—六日 大阪・三越

第二回聖戰美術展(日、洋、彫) 一日—二十日 上野・日本美術協會

東日—聖戰四年を記念するこの第二回展の中心をなすものは、陸軍省貸下の作戦記録畫十六點(内日本畫三點)で、藤田嗣治の「哈爾哈河畔之戰闘」はじめ宮本三郎、田村孝之介、小磯良平などそれぞれ力作を示してゐる。たゞ問題はこれらの記録畫にもとめられる寫眞性を、作者がどこまで藝術的感動に高めてゐるかどうか、その點で斷然成功してゐるのは藤田だけであらう。審査員の出品で注目されるのは藤島武二の「黃浦江を望む」(博物館貸下)及び小杉放庵の事變三春の戦線スケッチ。招待出品では鳥村三雄の「星の夜」などいゝ方であらう。南政善

を施した水彩の心憎い感覺等々——だが恐らくその後の藤田にはこれらには見出せぬ新しい要素が加へられたに相違ない。その發表の機が待たれる。

蒼穹會第三回展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・高島屋

現代工藝巨匠作品展 二十五日—二十九日 上野・松坂屋

庫田毅個展(洋) 二十五日—三十日 大阪・美交社

興亞南畫院第一回展 二十五日—七月一日 大禮記念京都美術館 河野秋郎主催 京都市教育後援

愛知社同人近作展(綜合) 二十六日—二十八日 名古屋・丸善

直原放青江南風趣日本畫展 二十六日—二十九日 大阪・松坂屋

清光會大阪展(日、洋) 二十六日—二十九日 大阪・美術新論社

青山熊治遺作展(洋) 二十六日—二十九日 數寄屋橋・日動畫廊

清々會第二回油繪展 二十六日—三十日 新宿・東陽畫廊

田村一男第一回個展(洋) 二十六日—三十日 銀座・青樹社

齊々會第五回彫刻展 二十六日—三十日 銀座・菊屋

東丘社共同壁畫內示會(日) 二十八日 東京府美術館

彩駐會第二回展(日) 二十八日—三十日 日本橋・東美俱樂部 鈴木東光主催

伊藤慶之助新作展(洋) 二十四日—二十六日 神戸・畫廊
青丹會第八回洋畫展 二十四日—二十六日 銀座・養生堂
工藤正義・小關利雄・富田民治油繪展 二十四日—二十八日 大阪・三越
濱田庄司近作陶器の會 二十四日—二十八日 銀座・鳩居堂
小川七五三・泰・佛印・新嘉波洋畫展 二十四日—二十九日 大阪・大丸
涼々會第五回展(日) 二十五日—二十七日 芝・東京美術俱樂部
矢野知道人小品展(日) 二十五日—二十八日 大阪・朝日ビル
藤田嗣治個展(洋) 二十五日—二十八日 日本橋・三越
都—歸朝後の藤田の仕事は寧ろ軍關係に没頭し、最近の作を發表してゐない。この個展にそれを期待したかつたが、矢張り滯佛當時のもののみ、然し二五號から一號に至る二一點の油と、素描、水彩を交へた賑やかな過去二ヶ年程の藤田の一時期を俯瞰するに足らうし、これだけの數を一枚々々丹念に眺めて倦きさせない技と力は洋畫壇に藤田を除いて求め難いのも事實だ。
例へば「蚤市の床屋」の左半面へ調子を高めた面白さや「戦時下の巴里」で街路の一角に焦點を求めた角度の妙など、作の悉くが確かな畫因の上に確かな技を示してゐる。「雨のモンマルトル」や「巴里の屋根と鳩」に漂ふ抒情、何気ない色

淺見五郎助、北原千祿、島野新太郎(搬入) 第一部機械的工藝品六七五點、第二部手工的工藝品三三四四點(入選) 第一部二〇六點、第二部九一七點 (無鑑査出陳) 二三點 (商省工藝指導所及陶磁器試驗所出陳) 八〇點 (メキシコ陳列會出陳選定品) 二八五點 (商工大臣賞) 「裝身具組宮(漆) 石川縣輸出工藝振興會(一等賞) 雜草盛鉢(陶) 德田魁星、(裝身具宮、卷煙草宮(漆) 理研電化工業株式會社、(綴織天主教大禮祭服(染) 武部祐五郎、(飾釧(綜合) 島津製作所 マネキン部(二等賞) 「大皿(陶、硝) 降旗正男

晨鳥社第一回展(日) 二十一日—二十三日 大禮記念京都美術館

青驪社 第二回邦畫展 二十一日—二十四日 銀座・菊屋

日本木工藝家協會第一回展 二十一日—二十四日 日本橋・高島屋

六朋會第四回展(洋) 二十一日—二十五日 銀座・青樹社

東北民藝品展 二十一日—二十八日 日本橋・三越

瀧野川彫塑研究所第四回試作展 二十一日—三十日 東京府美術館

月岡芳年十年忌記念展 二十二日—二十四日 三田・慶應義塾圖書館

筆谷等觀紙本水墨展 二十三日—二十五日 名古屋・丸善

田中繁吉近作油繪展 二十三日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊

の「放列布置(陸軍大臣賞)」は色感暗いのが惜しく、熊野禮夫の「兵器整備(協賞)」も技巧としてうまいが取材平凡。一方現地將士の作品のなかでは松岡寛一(中支)の淡彩畫「朝の英靈」が出色。

實感を傳へてゐる點では今回の展覧會一であらう。新たに加へられた彫塑部では中村直人、畠村直久が小品ながら面白く、一般出品では中野四郎の「從軍看護婦」が授賞に値する佳作。長沼孝三の「英靈」(大臣賞)は兵士の下半が硬いの

が難である。
〔審査委員長〕藤島武二〔審査員〕石井柏亭、伊原宇三郎、鹿子木孟郎、川島理一郎、川端龍子、熊岡美彦、小磯良平、小杉放庵、小林萬吾、清水登之、鶴田吾郎、中澤弘光、中村研一、中村直人、橋本嗣雪、長谷川榮作、日名子實三、藤田嗣治、南薫造、向井潤吉、横江嘉純、吉岡堅二、吉田三郎、吉村忠夫〔搬入〕日本畫八六點、洋畫五三一一點、ポスター一二點、彫刻九二點〔入選〕日本畫四點、洋畫七四點、ポスター一點、彫刻二三點〔作戰記録畫〕日本畫三點、洋畫一三點〔招待畫〕日本畫四點、洋畫一二點〔陳列總數〕繪畫二一五點、彫塑三二點〔陸軍大臣賞〕南政善、長沼孝三〔陸軍美術協會賞〕熊野禮夫、松岡寛一〔朝日新聞社賞〕山本日士良、中野四郎

陸軍作戰記録畫(陸軍省貸下)

洋畫

蘆溝橋(宛平縣城攻撃圖) 田村孝之介

臨安攻略 杭州南星橋碼頭に於ける鹵獲品陸揚 征く光 轉進(南支龍州公路北江郷附近) 南苑攻撃圖 居庸關戰鬥圖 蒙古軍民協和之圖 蒙疆機械化部隊 哈爾哈河畔之戰鬥 娘子關を征く 佛印サイゴンに於ける艦上 停戰協定 古北口總攻撃(滿洲事變)

日本畫 八達嶺長城線攻撃圖 突擊路(折口鎮攻撃圖) 南口攻略戰圖 九元社第七回展(彫) 二日一十日 東京府美術館 〔陳列數〕三五點(九元賞) 森大造〔白根賞〕中野四郎(努力賞) 石塚貞男 華畝會第二回洋畫展 三日一七日 大禮記念京都美術館 川端龍子「太平洋」「大陸策」四連作展 觀(日) 三日一十三日 日本橋・高島屋 情報局、大政翼賛會後援 東日一事業記念日とむすびつけて、川端龍子が前後八年の間に青龍展で發表して來た二つの連作「太平洋」「大陸策」各四點を、情報局及び翼賛會の後援で再陳したものの、いづれもわれわれの記憶に残つてゐるものではあるが、今改めて一堂に集められたところはまさに一休觀たる

を失はない。超大作八點の比較において、昭和九年の「波切不動」が無理の無い佳作といへるほか、昨年の最終作「花摘雲」が案外よくみえる。だからといふわけではないが、今回の展示方法に拂はれた苦心は相當高く買はれていゝ。 歴程美術協會第六回展(日) 三日一十四日 東京府美術館 〔陳列數〕六九點〔入選〕二四名(協會賞) 丹生きみを(光洋賞) 佐々木勝磨 〔光洋次賞〕松岡正〔研究賞・新會友〕 八木虛平 足立源一郎山嶽畫展(洋) 六日一十九日 數寄屋橋・日動畫廊 鬼面社第三回油繪小品展 八日一十二日 日 銀座・銀座畫廊 田口省吾新作油繪展 八日一十二日 日本橋・高島屋 戸島光阿彌鯉魚漆畫展 八日一十二日 日本橋・高島屋 宮尾光峯個展(日) 八日一十三日 大阪・三越 工藝美術作家協會ガラス部會新作展 八日一十三日 銀座・松屋 工藝美術作家協會の部會として東京在住の硝子工藝作家を糾合し硝子作家東京會を結成、最初の展覽會を開いた。 煙雲會第三回日本畫展 九日一十三日 上野・松坂屋 齋藤八十八・大塚金吾遺作展(洋) 九日一十三日 新宿・三越 三宅克己歐米巡遊風景寫生畫展(洋)

十一日一十五日 數寄屋橋・日動畫廊 興亞美術協會第一回展 十二日一十六日 大阪・そごう 第五回大日本海洋美術展(日・洋) 十二日一二十五日 大阪市立美術館 朝日新聞社主催 海軍省後援 田村一男個展(洋) 十三日一十七日 大阪・朝日ビル 石川欽一郎水彩畫近作展 十四日一十八日 大阪・美安社 新虹會第四回展(日) 十五日一十七日 銀座・紀伊國屋 西澤笛畝編東北の玩具原畫展(日) 十五日一十九日 澁谷・東横百貨店 小川芋錢遺作展(日) 十五日一三十日 大禮記念京都美術館 同館主催 中谷ミユキ個展(洋) 十六日一十八日 銀座・資生堂 小川千璽新作畫展(日) 十六日一二十日 日本橋・高島屋 中村貞以門下春泥會第七回展(日) 十七日一二十二日 大阪・松坂屋 栗田九庵展新作畫展 十八日一十九日 芝・東京美術俱樂部 辻愛造新作油繪展 十八日一二十一日 神戸・畫廊 渡邊大虛第六回個展(日) 十九日一二十二日 銀座・資生堂 南洋美術協會展 二十日一二十四日 銀座・三越 福岡青嵐個展(日) 二十三日一二十六日 大阪・高島屋

堀柳女人形整展 二十三日—二十六日
日本橋・高島屋

牧野正吉大陸風景水彩畫展 二十三日

—二十七日 上野・松坂屋

新美術人協會小品展(日) 二十四日—

二十六日 銀座・資生堂

東朝—まづ地塗りを厚くほどし、紙

か絹か判然せぬやうにし、洋風を十分に

取入れたこの手法は餘程取材に對しての

研究を必要とする。その見地から吉岡堅

二の「苔庭」は未研究であり、藤田の山

村の農家を描いたものは泥くさく、福田

豊四郎の「竹」はこの手法を逃けたため

に難が少い。たゞこの方法は決して捨て

たものでなく今後への期待は持ち得る。

南畫鑑賞會第八回展 二十五日—三十

日 日本美術協會

百彩會第一回展(日) 二十六日—三十

日 日本橋・高島屋 日本百貨店通信社

主催

關西水彩畫協會小品展 二十六日—三

十一日 大阪・阪急

福田翠光滑空機獻納畫展(日) 二十九

日—八月三日 名古屋・三星

池野禎春木彫作品展 二十九日—八月

三日 京都・大丸

八月

壯潮會第一回展(洋) 一日—五日 名

古屋・松坂屋

岩手美術聯盟第一回東京展(綜合) 五

日—八日 銀座・三越

美術展覽會(八月)

工藝美術作家協會ガラス部東京會關西

展 五日—十日 神戸・大丸

二六〇〇年會第三回油繪展 五日—十

一日 東京府美術館

山南會第二回展(日) 六日—十一日

東京府美術館

都(前略)こ、には現代日本畫壇の

寵兒福田豊四郎(不出品)小松均の名を

見出すが、麥僊の藝術的素志は、舊國展

同人吹田牧草その他の人々に見出され

る。牧草の素朴な自然觀照、萩原涌石の

暖色に包まれた詩趣、小野晃光の清新な

形式、江龍白岑の色彩的表現など夫々麥

僊の造型と詩心と、そして靜謐な畫境を

受繼ぎ、それらの清純な畫格は確かに長

所だ。併し麥僊がその形式の裏に潛めた

熱つばさに缺けてゐるのは喰足らない。

旺盛な創作精神を顯示せよ。

これに較べて、小松均の作に溢れる野

心は麥僊の貪欲な藝術慾に脈をひくかも

しれないがなほ數歩畫面への沈潜を望み

たい。(大口理夫)

〔陳列數〕同人作三六點〔大原獎學賞〕原

田美知恵〔永昌堂獎學賞〕岩崎巴人、松

本晃光〔會員推薦〕岩崎巴人

荻生天泉作品展(日) 九日—十日 福

島・福ビル

日本産業美術協會第一回産業美術作品

展 十二日—十七日 日本橋・白木屋

松田黎光遺作展(日) 十四日—十九日

京城・三越

日本バステル作家協會展 十五日—二

十日 銀座・三越

里見米山人南支及海南島現地報告畫展

十五日—二十一日 京都・丸物

美術創作家協會大阪小品展(洋) 十九

日—二十四日 大阪・高島屋

陽光社第十二回洋畫展 十九日—二十

四日 大阪・大丸

大塚金吾遺作展(洋) 二十一日—二十

五日 銀座・資生堂

多摩帝國美術學校第六回圖案科展 二

十二日—二十六日 銀座・三越

青龍社第十三回展(日) 二十七日—九

月七日 日本橋・三越

東朝—この緊迫せる時局下、秋ともな

れば青龍社、二科、院展、國風會と、つ

づいて大小の公募展が群立開催されるは

外観の殷盛を傳へ得ても臨戦の構へでは

ない。もちろん作家の制作態度には眞摯

さを認めるが依然たる自由な展覽會機構

には整理統合を要する。

青龍展もまた他展と同様その對象とし

て考へるべきであるがそれはさて置き、

今回の展覧會においてはまづ川端龍子の鯉

に取材せる佳作「曲水」に注目する。幾

度か手掛けた鯉を曲溪に躍らせ、岩石の

布置はよく四曲一雙の屏風畫を觀め上げ

澄い色調は心奥への響きを與へる。たゞ

岩法の整理缺如を來し、折角の色調も視

覺への亂れを呼ぶは遺憾である。

連作「日本六十餘州」の第一作たる墨

畫「伊豆の國」は難澁の構圖は經らず、

墨氣は逃避して煩雜なる描線に觀者を悩

ます失敗作と見るべきである。

坂口一草、山崎豊はともに滿洲畫旅の

收穫を傳へ、前者坂口は熱河承德にある

「大佛寺」の威容を奔放な筆致によつて

量感をも出し、後者山崎は同じく「彩院」

「琉璃塔」の一角を寫し、その自在な手

法には作家の手腕を認めるが、前者に比

して色彩の調整が足りない。

福岡青風の「明恵」は顔貌俗氣をおび

て觀者より遊離し、家庭婦人防護班に取

材せる森省三の「防毒班」は人物描寫の

技法に難多く逼迫感なく、利谷双樹の

「霧」につゝまれた母子馬はたゞ空圍氣

を傳へるのみ。

その他市野亨の「秋」龜井藤兵衛の

「溪」に見るけれどもなき態度などあるが、

概して青年作家にさしたる進境を認めら

れない。

〔搬入〕八七點〔入選〕三三點〔新入選〕

三點〔陳列數〕四〇點〔Y氏賞〕森省三

〔獎勵賞〕利谷双樹〔推舉〕〔社友〕森省

三〔社子〕琴塚英一、佐々木邦彦、丸山

峻、依田季夫、高山晴雄、古野新生、中

川佐風路

出品目録

入選作品

彩橋 大塚 榮治

紫薰圖渡邊不二根

雄姿 河野 正長

松苑 佐藤 正一

祿一線上條 靜光

柳 内池 星子

濕原に咲く 鐵冶

海雪

巖

岡部建一郎

防壽班森	省三	團舞	依田	季夫
午憩	小川茂麻呂	獅子	池田	洛中
溪	龜井藤兵衛	藤塔	柳	道成
寒霞溪晚秋		七面鳥入江	臥水	
琴塚	英一	出品		
名樹惜春	佐々木邦彦	「國に寄する」		
爽朝	丸山	連作ノ一「伊豆の國」		
公孫樹高山	晴雄	川端	龍子	
海村女景		曲水圖同		
花と女性	古野	大佛寺坂口	一草	
葱響	細野	黃鳥彩啼		
洋蘭	水野	同		
錦鯉	西條	揆果	加納	三樂
綠蔭	須藤	明惠傳（完）		
陶工	伊東	福岡	青嵐	
サボテン	佐藤	熱河	山崎	豐
	博	「彩院」		
		「琉璃塔」		

九月

桑重清近作日本畫展 一日—三日 銀座・資生堂

新浪漫派美術協會第三回展（綜合） 一日—四日 銀座・菊屋畫廊

國風彫塑會第七回展 一日—十七日 東京府美術館

東朝—國風彫塑會には、單に技術としてみれば一種の匠氣を持った達者な人もあるが、その技術が彫塑の本質的な意味で少しも深まつて行かなければ、單に鬼面素人を惑はすだけに過ぎない。石川確治の胸像は温順な風格を持った作品では

あるが、彫塑の表皮の觸覺的な壓力が弱過ぎるやうに思ふ。この展覽會で鈴木賢二が今年は石材に彫つてゐるが、例年の石膏のものよりすつと面白くなつてゐる。

一體に油土の柔軟な抵抗性を甘く見て却つてその素材感到復讐されてゐるやうな作品が多いのである。（今泉篤男）

〔搬入〕二四九點〔入選〕三〇點〔新入選〕二三點〔陳列數〕七〇點〔會友推薦〕石塚裕康、瀧川藤一郎、田村辰治、成田政男〔研究賞授賞者〕新關國臣、名久井十九三、田村辰治（以上會友）館野親光、福岡日秀〔國風會賞〕授賞該當者無

日本美術院第二十八回展（日、彫）一日—二十日 東京府美術館

〔日本畫〕東朝—非常時の心構へとは畫家の間だつて誰も言つてゐることであるが、仕事でぐんぐん實現してゆくこと横山大觀に及ぶものはあるまい。いや生得の皇國ぶりは昔から變りはないのだが、御時世で特別に目立つのだといつた方がい。それが今畫壇精神の指導になつてはならぬものになつてゐること、近い過去はいはず、またこの「耀く大八州」が實證してゐる。

高千穂に始つて近畿におよび、蓬萊山をもつて來て富士の雪に映える大内山の稜威を畏む、日月ではさみ、四季に配し氣象の變化で味をつけるのは定型だといつても、外に途がありさうにもなく、な

ある思想の自在な展開ではなく、伊勢といひ概原といひ現實に即してゐる以上理想化にも限度がある。

そこで個々の風物を設けつないでゆくに於けるのだけれども、當套だとけなして見ても、ではどうすればいい、のか見當はつくまい。

難關がこゝにあるのは事實だが、水流れるところ、鳥飛ぶところ、少しでもそれを切抜けようとする努力を私は善意に解釋した。墨氣は秀潤といふよりも枯淡である。硬直に陥りさうになる筋肉の動きに對處する特別な用意がほの見えるところなどでは、思はず襟を正さしめるのであるが、態度は飽くまで積極的で、拮据は北畫の強さに轉化し、周文の香氣漂ふところもある。

その他何でも消化しようとする氣勢であり構圖に型を破らうとする意氣である。一切の浮動を抑へつけてゐるのは大觀一流の松と水との描法で、波の一部では新意に成功してさへもゐる。そして畫面から迫るものは某處の情趣ではなく大日本を象徵する精神である。古稀を過ぎてこの壯行、至誠の發露に敬意を表さざるを得ない。

大智勝觀の「暗香」は目立たない作ではあるが夜梅はそれらしい氣分が少しは出てゐる。しゆろは扱ひ方によつては面白い結果になつたかも知れないが、かう律氣に列んでゐるだけでは曲がない。もう少しの働きでよくなるものと思ふのだ

が、謙讓はこの人の美德で野心を起すと破綻が来る。ともかくも憤しく幽かな清純さを知り分相應にそれを現はし得ることだけは認められる。

酒井三良の「風」雪「雪」もどうにかなりさうでならぬものである。この流儀では人間の持前が出るところで光るのだが、半銭の詩と飄逸味とをいふのは無理だとしても何かありさうなものではないか。いや少しはあつても時々出るのだ。この一皮を破るのにはもつと思ひ切りがなくてはならぬ。

小林柯白は雪解の「龍安寺の庭」を描いてゐるが、鈍い腕でこなせる相手ではない。氣の毒なほどにぢぢむさい。小鳥一谿の型もどうやら決つたやうである。

「溪間淺春」「山邨錦秋」で見ると、畫力の技法をまねしても顔料に腰がないからたゞ平べつたく、水彩畫の印象をうける。三宅さんの繪を三年程日向に干しておいたらこんなものになるかも知れぬ。厄介なものを背負込んだものである。

片隻の頼朝が出來て安田靫彦の「黃瀬川の陣」は完成した。義經のことは昨年いつた通りであるが、頼朝は帷幕の中にある。高麗縁の疊の端に立烏帽子を被り右手扇子の頭を抑へ、左手は膝へ伸ばして端然と坐り、正面切つて義經をみつめてゐる。絶えて久しい弟との對面といふこの瞬間の氣持が眼目なので、義經の姿勢といひ頼朝の態度といひ、この大切な瞬間を現はす用意に一分の隙もないか

ら、描かれてゐるのは二人だけでも、張切つた静けさの物凄いい力に押されて、気分は後に控えた五六十騎、關八州の大名小名の肅然たる光景にまで擴められる。

いはゆる目頭があつくなるといふ劇的な感情は、背後を大きく包括しながら、特に頼朝の顔にあり／＼と現はされてゐるやうに思ふ。身に備はる威嚴、漲る若さ、不敵な面だましひ、そして烈しい感情の動きが、この場の頼朝になり切つてゐるのは顔に神護寺像が參酌されてゐるからといふばかりではない。

絢爛たること無類である。疊の青と天幕の白との清々しい諧調の中に、唐草模様の青地の直垂が黄朱で隈取られてゐるので、左手につけた射籠手の白に強く反映してゐる。

ガランとした背後は緋威の具足や太刀弓矢で締めつけ、鈍色に光る金銀形が重味をつける。これが義經の紫裾濃の鎧と赤地錦の直垂とに照應する色の配合の可なり華美なことが想像されるだらうが、しかもそれを俗っぽくさせないばかりか、美しさに恍惚させてしまふ手腕には驚く。

なほ細かく見ると兜の吹返しや蝶金具をうつた鳩尾の描寫など技術もこゝまでやれるものかと嘆息をついてしまふ。頼彦は日本畫の描寫と表現力とに確信を與へてくれた。實に三聖代を通じての傑作である。

これに比べると鈴木大麻の「雄叫」や

守屋正の「繼信忠信」などは影が薄いが常人達にとつては相應以上の出来なのだらうと思ふ。中島清の「演舞」も服飾の描寫になか／＼骨を折つてもをり、いゝところも少しはあるが、上には上があるものだ。いゝお手本が出たのだから、精々勉強し給へといふより外はない。

北野恒富の「幾松」は幕末史を飾る一女性だが、事件よりも風俗畫的に、また肖像畫のやうな意味で扱はれてゐる。薄い夏衣から透けて見える紅い蹴出しの描き方などはうまいものである。線にも寂びがついて貫祿が増した。顔も髭つぼさではなくてこの年輩の女性のほんとうの美しさが清々しく出てゐる。すゞしい眸や締つた口元など、聰明と俠氣とであるべき性格のさもありさうに思はせるものである。

京風であるせいかどこか圓山派の面影も見えるがそれより含蓄があり、むやみに上品ぶらずに生きた人間の美しさを描いてゐるのが特色である。恒富はこれで統後の女性といふやうなことを考へてゐるらしいが、考へも眞面目になり筆もかれ、作は近來の秀逸である。

中村貞以の「吉野」は振はなかつた。新井勝利の「各行」の第一段は一寸いゝが後段は研究を要する。北澤映月の「靜日」はうすばやけてしまつてゐる。植草實の「吉田松陰」は筆はとても達者だが畫格が低い。（春山武松）

都—この稿を書く時私は未だ頼彦の黄瀬川の陣を見なかつたが、本年の院展繪畫室は大觀の「耀く大八洲」がひとり輝いてとかく全體の調子の揃はない憾がある。

ことしは歴史畫、殊に上古風俗と佛畫の輸入が多かつたと齋藤隆三博士にうかがつたが一般出品の佛畫は入選おぼつかなかつたと見えて、佛畫はたゞ同人の聽雨と遊龜との作あらばかりである。

聽雨の「壁畫」は若し之が法隆寺金堂壁畫の氣分を傳へようとするならば論難が豫想されるが、朱裾の量感や佛手の美しさなどはめてよい。遊龜の觀音は古徑の謹直な體裁を取りながら、之を露骨な微笑によつて破る不思議なもので、かつての看經の女とか浴女とかを思へば諒解出来ないでもないが、故溪仙の如き天衣無縫の所がないので所詮無理な畫である。

歴史畫は例年以上に目立つ。そして頼彦風と青邨風とが畫題手法を通じて餘りにも歴然と見られるのに色々な意味で驚く。その中で眞野滿の「七を」とめ」は頼彦の天鈿女命や孫子と類似甚だしいが、模倣以上のものがある。

青邨風の武者繪（青邨の描く武人畫は上古、中古を問はず新形式の武者繪といつてよからう）の類では羽石光志の「阿部比羅夫」が構圖表情等に引緊つた力が現はれてゐる。

孰れにせよこれらの一群は取材の歴史的な上に手法また師の舊作に倣ふ。し

かしその他の作品についても、今年は妙に先人の作を想起さすものが多い。

泥牛の「溪流」は春信、歌麿の海女や汐干狩を、水明の「春桃」は御舟の翠苔を、嘉三の「蓮池」は宗達、歌麿の翠苔を、勝利の「各行」は信貴山縁起や玉蟲厨子の施身聞傷圖を、貞以の「吉野」は溪仙の紙漉きを、と數へ来ると切りがない。

尤もこれは必ずしも非難の言ではない。泥牛の才、勝利の堅實は認めてよい。貞以の「吉野」は本年度院展の收穫と稱したい程だ。この貞以の描く女は冷酷とさへ思ふ程冷たい肉體を持つが、その中につゝ、美しい女性らしさがほのかに動くのをみつける。漆黒の髪を描法も厚味があり、またこの繪山地の朝涼を思はせるのも佳い。

右の外、同人作では千毅、等親、恒富三良等が注目されるが、一般出品では、久保清子の「繩飛」、島田訥郎の「柿」、狗卷南雄の「初夏」、松阪冬佐の「餌」などを拾ふ。訥郎、南雄は三良の田園趣味と通じるがもつと印象主義的である。冬佐の「餌」は極めて平凡な、才氣なき畫面の如くで、實は畫面計畫があり、畫心のこもる良作と感じた。

兎に角本年の院展繪畫部の第一印象は主題、手法ともに同調色濃いことである。大觀の「大八洲」はやがてその尤なるものだ。

大觀の「耀く大八洲」には舊作の面影がチラ／＼見え、大觀畫法集成の感があ

る。それだけに繪卷としての結構には「生々流轉」の如き一貫性に乏しく名所繪卷に類した題材上謹直に傾く制約もある。

しかし全卷に動く眞摯な運筆には自適の風韻が窺はれ、殊に二三個所、例へば春日、宇治の敍景と能阿觀瀑僧圖を思はせる蓬萊境等には滾々と滋味湧いて此畫大觀の記念的作品として恥ぢない。

寂彦の「黃瀬川の陣」は延著したが、昨年の「義經參著」に對する左一雙を完成して左右揃へて出品された。期待以上の出来栄である。

この左雙は陣所に於ける頼朝で、彼は絞り上げた幔幕の中に上げ疊に安坐し、従者は居ない。著衣鎧の丹朱と幔幕武具の白黒との二群の色を疊の白緑や金具の金を以て結合して居る感じで、義經の濃艶な單一な色彩に對して瀟散な美しさがある。

しかし義經の賦彩と同様に、精到な賦彩法から来る手厚さはよく畫面を引緊め、顏料の量で厚味をねらふ群小作家を瞠若たらしめる。巧な空間計畫にも感心する。

この一作は義經の一雙だけでは平板に過ぎるが、頼朝の一雙に作られた奥行ある裕やかな空間は、頼朝を源家の大将として端坐せしめ、また參著の義經をふんわり待受ける。それについては幔幕を前方で絞り上げて背後を開放した構想ことに面白く、また遠い程淡くする墨描の支

柱が、この陣屋に大伽藍の趣を與へ、或は等伯の描く水墨松林圖の爽やかな深さを思はせるのも心にいく。頼朝の背後にグサと置いた獅鬘付きの兜と朱絨の大鎧とは頼朝の影武者の如く、隠然と戰陣の動きを象徵してゐる。寂彦と古徑とは畫境に於て相當相重なる所多いが、思索に於て寂彦により多く柔軟性が認められ、この畫のためたつた大きさには最上級の讃辭を呈したい。（大口理夫）

〔彫刻〕東朝（前略）現在の彫塑界は、西歐彫塑の觀照と技法による造形感覺の訓練を、吾國彫刻の傳統とどういふ風に意識的に結びつけて、民族様式としての結實を示さうかと模索してゐる體である。院展の彫塑の作風なども、さういふ問題に對して着實な精進を示してゐる。

院展の彫塑には、一種の氣格を重んじる古風な精神主義のやうなものはあるが現代彫塑に對する思想の視野は狭い。

平櫛田中のやうな江戸時代からの傳統を忠實に墨守して技法を進めてゐる作家は、その傳統的な視覚偏重から脱せないし、西歐彫塑の技法的訓練を経てゐる石井鶴三のやうな作家も、繪畫的な印象に接近し過ぎる印象派彫刻の影響を脱しない。だから彫刻の本質のもつてゐる一種の冷い美しさが稀薄である。

石井鶴三の「外姑八十壽像」は彫塑としての表情より繪畫的な相貌の表情が出過ぎてゐる。それより「農村青年」とい

ふ等身の半分大位の作品の方が、この位の寸法のものに對するこの作者獨得の力の抜き方が巧に出てゐる佳いと思ふ。少し光に淫し過ぎた見方であるがタツチも煩しくなく的確である。

光の美しい作品では山本豊市の「女の顔」がある。これは圓味といふものに對する解釋が實に肌理こまかに出てゐる作品である。

時局柄青銅に仕上げた作品は、殆ど見當らず、石膏の外にいろ／＼の石材や木材やセメント材など用ひた作品が多くなつた。院展では木彫が目立つて多くなつて來てゐるが、わが國の裸體や着衣人物の表現に就ては、現代彫刻の觀點からは、まだ／＼日本の木彫の問題は何も解決されてゐないと言つてよい。

木材の素材感のもつてゐる一種の氣品がもつと深く生かされなければならぬし、また例へば着物の處理などについても、もう少し新鮮な表現技法が発見されなもののかと思ふ。

中村直人の「草薙劍」は商切れのいゝ觸感のある作品で、硬い木質を生かした鎧の表現には成功してゐるが、顔や手足の表現に俗臭あつて、折角の力作がと惜しまれる。木彫ではないが、新海竹藏の「兵士像」の作調には溫雅な氣質は出てゐるが、胸と腕の間に圍まれた空間が整理されない煩雜な印象を與へて面白くない。

一體に、彫塑の塊でない虛な空間の示

す表情については無頓着すぎる様に感じる。（今泉篤男）

都一繪畫に較べて彫塑の部には仲々活氣がある。同人では石井鶴三の「外姑八十壽像」が好品であるが、若手の同人に力作が揃つてゐるのは頼もしい。觀像では山本豊市、村田徳次郎、松原松造の諸作がある。殊に山本の作品は肉付けの渾然たる所に寫實の成功と彫塑の滋味とが潜む。

木彫では關谷充の彩色肖像は兎に角その苦心を買ふべきであり、中村直人の「草薙劍」は力作であるが、「鴨」の小品に却つて才能を示してゐる。一般出品中、辻晋堂の二作と菅原安男の「傳書鳩」とは同人諸作に伍して場中光彩を放つてゐる。その他村上丙、武末與吉、矢崎虎夫、寺瀬山等を注意した。（大口理夫）

〔搬入〕繪畫六四四點、彫刻一四二點
〔入選〕繪畫七二點（七〇人）、彫塑五二點（四〇人）〔陳列數〕繪畫九四點、彫塑七四點
〔同人〕〔繪畫〕新井勝利、北澤映月〔院友〕〔繪畫〕吉川朝衣、熊坂東夷、松坂冬佐、船田玉樹、吉田善彦、木村武夫、相原萬里子、長谷川朝風〔彫塑〕菅原安男、小柳津三郎、板倉白龍〔院賞〕〔繪畫〕第三賞、新井勝利、北澤映月、眞野滿〔彫塑〕第二賞、辻晋堂、眞野滿、中島清、佐野光穂、中庭煖華、高橋周桑、木下春〔彫塑〕辻晋堂、古藤正雄、小柳津三郎、菅原安男、宮本理三郎

出品目録(○同人)

繪畫

八仙花綿谷行四郎	春桃	松山	木村	武夫	○荒井	寛方	鹿	菅原	安男	N君安坐	天鋼女命
繩飛 久保 清子	柿干し樹下孝太郎	吉野	○中村	貞以	夏草	田中	廣	大自在天	村田德次郎	山口眞一郎	山口眞一郎
花 高山 公子	蓮池 田中 嘉三	菜園二題	○小山	大月	琉球二題	長谷川朝風	木花開耶姬	○大内	青岡	喜多武四郎	○喜多武四郎
雄叫 鈴木 大麻	演舞 中島 清	巴 木下 春	水蓮 小松 均	白日夢	市舖、びんがた	○田中	青坪	良寛	横田 七郎	鷹	同
山かひ上垣 候鳥	溪間淺春(采會族)	かいどり	持田 卓二	初夏 狗卷南名雄	其一、其二、	其三	松阪 冬佐	結城豐太郎氏像	同	奇術師大野 隆一	S子像田中 太郎
溪流 村田 泥牛	山郷錦秋(同)	耀く大八洲	○横山	大觀	小宰相最後	村田 閉	城 内田 青薫	牧草 鈴木麻古等	梅雨頃上田 畦草	舊微 野村 孝	岩間 佐藤金一郎
竹叢 三石 紅樹	同	山の春齋藤 龍江	花野 川手 青郷	靜日 北澤 映月	薰庭 齋藤倭文緒	夏日 吉川 朝衣	雜木○小山 大月	淨雪(上代出陣式)	○眞道 黎明	清輝 松本 大字	吉田松陰
秋聲 筆谷 等觀	臥龍(月を配す)	岩橋 英遠	花と實中庭 媛華	暹日○奥村 土牛	山頂の春	○郷倉 千靱	親世音菩薩	○小倉 遊龜	暗香○大智 勝觀	平日○富取 風堂	潮騒 同
秋深候鳥	丸 儀太郎	草土の塔	鹽出 英雄	七をとめ	眞野 滿	甲州路の秋	山羊○橋本 永邦	雪後 横田 仙草	瀧 吉田 善彦	草上 岩崎 巴人	萌芽 岸原 仲
雨季 樋笠 數慶	壁畫○太田 聰雨	信樂懷古	○長野 草風	新涼○堅山 南風	琴 岡 茂以	阿部比羅夫	鶴三種熊坂 光志	日照雨佐野 光穂	龍安寺の庭	○小林 柯白	守屋 正
松山 木村 武夫	吉野 中村 貞以	菜園二題	○小山 大月	水蓮 小松 均	巴 木下 春	かいどり	持田 卓二	耀く大八洲	○横山 大觀	花野 川手 青郷	靜日 北澤 映月
夏草 田中 廣	琉球二題	長谷川朝風	木花開耶姬	○大内 青岡	良寛 横田 七郎	鷹 同	森蘆親氏像試作	○關谷 充	結城豐太郎氏像	同夫人像	同夫人像
N君安坐	村田德次郎	胸像 同	黒キ猫柏木 康兵	茶入ヲ持ッ婦人	同	老婦人像	岡田泰魚子	奇術師大野 隆一	S子像田中 太郎	山口氏像	高橋 友武
天鋼女命	山口眞一郎	○喜多武四郎	兵士像	○新海 竹藏	少女像岡長 造	鷹 岡村 進	試作 同	從軍婦森 豊一	裝ひ 矢形 勇	一茶像寺瀬 默山	K氏 黒崎 弘
兒童角力	石井 鶴三	妙寛老長野 英夫	叔父の首	矢崎 虎夫	藤田かめ刀自	同	話してゐる	山友達	加藤 泰三	少女の首	同
二科會第二十八回美術展(洋、彫)一日二十一日 東京府美術館	東朝一巡すれば如何にも穩かな場内	で、別して氣にかゝる作品もなければ、	また取立て、推賛したい作品がある譯で	もない。定量の技巧と、ある種の習性	と、幾許かの繪畫常識とを兼ね備へて、	小がらに纏めた制作が五百點近くつらりと	と打並んでゐる。これだけ多數の勞力が	集積してゐるならば、もつと直接に壓倒	して來る迫力が當然あつてよい筈なのだ	が、到つて場内は平靜である。大部分の	作品が、手頃に仕事を濟ませて黙々としてゐる。

あるでもない。何のためにこれ程おとなしいのか不思議な位である。

展覧會も長くなるといつか知らぬ間に氣壓が低くなつてしまふのかもしれない。併し一年一回の待望の制作發表の機會であつて見れば、已むに已まれぬ制作慾が、地を裂き、天を穿つ氣概を以つて奔流して來ない筈はないのである。餘りにも作家は描く手業に小心に執着して、繪畫表現の本格にまともによつつかる熱意を置去りにしてしまつたのではなからうか。出來榮え見事な作品をわれ／＼は常に期待してゐる譯ではなく、熱實な追求に没頭する健氣な心構へや、豊かな自然觀照、生活感情を直接の相手とする赤裸裸な態度を作品に求めてゐるのである。

出來榮えの効果は行届かずともこの意氣込に壓倒されるのを待つてゐるのだが、この場内の隨所から發散される氣力は凡そ消極的で繪畫の本體に切り込む勇斷に乏しい。

第一に先輩作家の畫風の引き寫しがおびたゞしい。作家の影響を受ける事自體が悪いのではもとよりないが、徒らに表面的模倣に終始してゐるのでは、何のための制作かわからない。かういふ因習は先輩作家自身が後進畫家を戒めるべきでこの種の作品は入選を斷る方が、どの位親切であるか知れないのである。第二に繪畫表現のむづかしさに對して、四方八方手を盡す苦心の粘りが薄いのではないか。自然描寫でも人物構成にしても觀照

が餘りに氣樂で手輕い。複雑な現實感には安易な觀照の網では到底確實には捉提出來ないに違ひない。密度の細かい、粘りの強い追求だけが實在の眞意を會得するであらう。

かういふ底知れぬ表現のむづかしさと痛切に取組む氣力が露ほに欲しいのである。かういふ心意氣を少しでも嚙みしめてゐる作品や何かの氣色を持つ作品を次ぎに出来るだけ拾つて見たい。

岡田謙三の「森」は從來畫風の繼續ではあるが、構圖の引締め方や描寫の丁寧さにおいて一段と厚みを加へてゐる力作である。しかし、かういふ夢幻的な乃至は空想的要素が徹底的に割りきれるところまで行つて居ない。何か人物の描寫にしても寫實的なものと空想的なものととの混雜がある。「曲藝師」もなか／＼神經が行き届いた作品で作家の意圖がよく出てゐるせいかこの方が素直にうけ取れる。野間仁根の「山湖の夜明」や「山花野草」にはきび／＼した張りがあるし齒切れない、色捌きも悪くない。

坂本繁二郎の「甘藍」はます／＼枯淡をねらつたものであらうが、よほど工面して見ないと要領を得ないあいまいな表現である。中川紀元の「菩薩像」の二點は小作ながらこなれた色感を快くみせてゐる。ねらひが只味にむかつてゐる點が弱い感じである。

宮本三郎の「白衣」には品のいい、色感や特有な才筆を見るが「待機」の方は人物

が小さくかたまつて調子の低いものとなつた。栗原信「金剛山の秋」山の描寫は氏獨特な輕妙なものであるが、前景邊りは抽象的な色分けに止つてゐる充實してゐない。もつとも期待していゝ田村孝之介も、今年は二點とも調子が出てゐる水彩「和服の女」にむしろ氏の片鱗をうかがふ。

鳥崎鶴二は例年の大作をやめて小品五點に草花をかきつけたが、細部的には面白味があるが全體的に表現の氣力が弱い。高岡徳太郎も五點に及ぶ風景に努力の跡を見せてはゐるが、いづれも平面的な表現で充實したものが感じられない。これは一つには繪具の使ひ方によるものかもしれない。

滿々たる制作慾をもつて獨自の表現に精進してゐるのは北川民次と岡本太郎である。北川民次の「學習」と「勤勞」にはねばり強い線描と、量のある陰影とから來る底の深い表現力があつて面白いが「舞子」では一層徹底した氏の觀照が畫面に溢れてゐる。赤裸々な追求心が逞しく躍動して奇怪なまでに鋭い描寫を仕上げてゐる。多少荒くれた筆勢ではあるが感覺描寫に徹してゐる。

岡本太郎の四點は繪畫傾向としての善惡は別としこゝでも熱實な表現慾が旺盛である。「腕」にしろ「リボン」を結んだ女にしろ描かれてゐる内容は案外單純なものではあるが、存分にやり上げるところまで切り込んでゐる力癪を認めねば

なるまい。「コントロールボーン」や「リボン」の方は調子が低い。

藤井二郎、吉井淳二、田中忠雄のやうな若い中堅作家が一向思ひ切つた活躍をせず、有合せの手法になじんではゐるのは残念である。（富永惣一）

東朝（前略）二科會の彫塑には、從來西歐彫塑の技法を眞正面に咀嚼しようとして、一般に伸々とした新鮮な雰囲気を持つた作風が見られたが、近年はいさゝか振はない。停滯してゐるのは技術的なことよりも、技術を進展させてゆく目標の問題なのであらう。泉二勝麿の「東郷大將」は素直に伸々とした品もあるが、人間形態の中に含蓄された動勢といふやうなものが、如何に靜的な姿態にも沈潜してゐるところがなければ面白くない。

松村外次郎の「東天紅」は、彫塑の姿態の表情だけが大き袈裟に出てゐても、眞の彫刻的表現は却つて忘れられてゐるかの感がある。かういふ傾向の作品はどの展覧會にも甚だ多いので、一般の鑑賞もなか／＼幼稚な段階から脱けることが出來ないのである。笠置季男の「家族」は群像の立體感が概念的に構想されて居り個々の像の接觸感の解釋が淺いので群像としての表情が深まらない。

首は多く列んでゐるが、面白いものは少い。一寸俗な癖があるが八柳恭次の「首」だの、弱いけれども素直な村田虎次の「首」など注目された。（今泉篤男）
〔搬入〕洋畫二五八六點（九六三人）、彫

聖一六二點(八五人)〔入選〕洋畫三四
八點(三四〇人)、彫塑四一點(三八人)
〔陳列數〕洋畫四九五點、彫塑四七點、
別に渡邊小五郎遺作五點〔會友賞〕田中
忠雄、柏原覺太郎、榎倉省吾 〔二科賞〕
〔洋畫〕岡本太郎(彫塑)長野隆業、乗松
巖 〔岡田賞〕宮川仁、能間弘〔會員推
舉〕吉原治良、福島金一郎、伊谷賢藏、
松井正、服部正一郎、錦義一郎、伊藤久
三郎、峰岸義一、古屋新、藤井二郎、酒
井亮吉、松本弘二、故渡邊小五郎〔會友
推薦〕〔洋畫〕村田貴史雄、雜賀文子、伊
藤研之、野村守夫、鶴田宏、篠原乘介、
山本不二夫、松本俊介、津田周平、旭亮
弘、原勝四郎、佐藤吉五郎、高井貞二、
米良道博、佐野繁次郎、北島達夫、藪野
正雄、丹下富士男、井上覺造、神保俊子
尾澤辰夫、坂宗一、安部次郎吉〔彫塑〕
柳田昌、中堀正孝、野水信吉〔會友辭
退〕竹谷富士男、松下義雄、山口長男、
雜賀文子

出品目録(○會員・會友)

繪畫

大同石佛
ハルビンの庭
高井貞二
松花江の船出
同
朝顔 米倉 兌
鳥の人々
近藤長三郎
天橋小鳥の市
(北京)
伊谷賢藏
寺田竹雄

子供と山羊 寺田 竹雄
二人 川北 信三
樹間山村 北川 實
坑底の人々
○向井 潤吉
洋装店青山 龍水
廢船と女達
ハ谷谷富士雄
猫を抱く婦人
同
秋郊 池田 兼徳
室内 加藤 雪子
海女 藪野 正雄
海濱 同
田園母子
△服部正一郎
初夏水邊
同
初秋ノ砂原岳
佐藤 登
田植△小出 卓二
農夫 同
南方植物室
伊勢雄次郎
湖畔の午後
金宗 燦
故郷の風景
同
遊童 朴 商 玉
庭の椿早川 貞明
虫追ひ伊東 靜尾
窓 谷出 孝子
アトリエの静物

ハーバート・ワグナー
讀書 前川 尙子
母子○吉井 淳二
馬 森 繁
水邊 田中 一郎
花と少女
富家 貞男
崖下 田邊榮次郎
赤松の林
岩月 信澄
病院にて
佐々木宗一郎 仁
海女 宮川 仁
雜草の丘より
高瀬 勝男
北國の少年
内海 九郎
花と子供
猪瀬 正
大河邊辻 茂
遠足 大越 正美
金剛山の秋
○栗原 信
酪農部落(北滿)
同
樵夫 安達 實夫
子供 名久井由藏
七面鳥小鳥眞佐吉
春淺き村
三芳 悌吉
花 梅原 英子
ゆり其他
田中 太郎
伊豆風景
長谷川三千春

勢揃(少年群)
桑原 實
夕月 高井壽三郎
風景 齋藤 勢七
少女像小田 正春
黃衣立像
同
大陸にて(濟南城外風景)
棟方 寅雄
菩薩像一
○中川 紀元
同二 同
アトリエにて
ニタ・マリ・サンチラン
少年 淺井 康男
緑の道土岐 國彦
グリヤ和田 徹郎
白い花
○島崎 鶴二
蔬菜 同
桔梗 同
山百合 同
菊 同
初冬○國枝 金三
聖母像の朝
中田 秀利
畫室 佐野繁次郎
部屋 同
扇 ○東郷 青兒
紺と紫同
舊微 石丸 一
早春 藤井 八郎
梅雨晴れの野尻湖
○鍋井 克之

太陽の昇る海岸
○鍋井 克之
夏季静物
同
三笠山
○濱田 葆光
奈良公園
同
走馬燈櫻井 三郎
綠蔭 御供 長夫
鷗 出口 實
紫陽花
○鈴木信太郎
奈良の秋(鶯池の道)
同
静物 同
古風な人形
同
堂内 遠藤 了敬
林檎もぎ(夏)
葛西 康
家(信州)
井上 賢三
支那家屋の風景
増永 壽美
少年像
○田村孝之介
小憩 同
廢園の春(獅子林)
横田 之子
森の子供
岡田 芳三
海の見える叢
△福島金一郎

山の家
△福島金一郎
伯耆大山
元川嘉津美
麥莉○田口 省吾
ウクライナの少女 松田 豊
さてつ小西 光雄
訪問 西阪 修
芝生 伊川 寛
風景○高岡徳太郎
梅雨の頃
同
木立 同
農家 同
水邊 同
ロープを染める
岩下 資治
晩秋岡仲野 俊正
湖畔の朝 山本 秀臣
嵐山 堀澤 好一
國上山
○正宗得三郎
五合庵 同
牡丹 同
磯馴松 同
山中湖の秋
同
蛙 ○横井 禮市
揚げ雲雀
同
蔬菜と蠶蠟
同
蟬 同
森 ○岡田 謙三

曲藝師岡田 謙三
小供 同
甘藍○坂本繁二郎
桃 ○熊谷 守一
山湖の夜明け
○野間 仁根
稻子居渡瀧泉
道の子供
同
山花野草
同
ある日の港
大矢 悦好
初夏の溪流
辰巳 義人
牡丹一
○黒田重太郎
同二 同
殘菊 同
養魚場風景
三栗 參平
森 花井 信雄
波切の人々
小島 大輔
南紀ノ早春
村尾 克巳
庭の静物
田中 修
大行山脈(百花山を望む)
早川 貞誠
漁人 太田 四郎
仕事場中村徳次郎
季節 西村千太郎
ガラス工場
酒見 敏雄

魚賣（南國） 有隅 善郎	窓より鶴岡 政男	瓦焼小屋 官野 進	老父座像 佐藤 八郎	ミールング工 遠藤倫太郎	のぼりがま（瀬戸） 東本 春水	丘の子達 田邊徳三郎	雪の上 △松本 弘二	△松本 弘二	ゲレンデ・スキー 同	佛像 瀬尾 暹	祿の中の母子 小林 武夫	黄色い花 宮城三喜子	易断所河野 道紀	窓邊 佐藤 陸郎	笛吹く男 安波 新吉	童女と白犬 花谷 時子	人形遊び 中出とみ子	北支の農家 清水 茂郎	南の女大城 皓也	山羊 岩本 恒三	落下傘 △酒井 亮吉	記念撮影 細田 浩		
炭礦風景 加藤 尙義	猫の居る静物 渡邊 澄子	観音堂川内 親	「サンコウ」の行水 篠原 来介	鮎解禁同 なぎさ下高原龍己	壺屋 大嶺 政敏	朝 森島 包光	午睡 西山一三男	主人を失つた犬 澤田 哲郎	青物市鈴木 幸雄	河岸 安藤 幹衛	鳥の漁場 田中 嘉三	生活三題のうち 學修、勤勞、舞妓	〇北川 民次	早春 安部治郎吉	雨後（金剛山） 同	橋材 三保 義	北支の農家 清水 茂郎	南の女大城 皓也	山羊 岩本 恒三	落下傘 △酒井 亮吉	記念撮影 細田 浩			
工房と少年 小川 末吉	紡織作業 岡田八三郎	鯉節を造る女 田中 秀宜	秋の日芝野 武男	山竹を伐る人 中野安治郎	泊風景河本 一男	人々△松井 正	風景 同	街道市米良 道博	室田に於ける黒川健二	黒川 健二	笹 伊藤 泰造	かき篋物 鈴木 猛人	親類の家 今長谷 巖	戦陣訓服部 義夫	蘭印の生活 △山尾 薫明	室内△藤川 榮子	室内の一隅 同	山 和田 三郎	熱河 伊東市太郎	風景 加藤 丈策	濱の子供 萬 勳	庭B 桑野 孝一	鳥を聴く 玉澤 潤一	河邊の家 河邊 潤一
中野 亨	津田沼附近 加賀美幸直	獨樂と子供 永井 武夫	田園の夕 太田章太郎	南洋みやげ 曾我 芳子	ヤシ林吉野 正明	サーカス 角野 毅	アバイ内部（ヤツブ島） 小谷野半二	水浴 北島 達夫	南 △峰岸 義一	江 伊藤 研之	鳥 村田實史雄	連繋者の不安 難波架空像	歸順者たち 同	鳥民の家族 能間 弘	コントルボアン（對位法） 岡本 太郎	リボン同 腕 同	リボンを結んだ 女 同	顔 松本 俊介	畫家の像 同	驛站△浪江湖治郎				
飛行機新井ふみ子	戦士讃花 同	作品2鈴木 進平	弘安四年 △伊藤久三郎	夕立に翔ぶ飛行艇 △吉原 治良	くちなしの花と貝殻 同	牡丹△桂 ユキ子	麥 同	花 菅能由爲子	静物 田中 君子	習作 阿部 金剛	同 練習船にて △橋本 敬郎	流れ（石） 井上 覺造	同（洲） 同	松間より大洋を望む 雑賀 文子	リボンと娘達 同	晴れ間青木 壽	壁頭 藤田金之助	防空 稻垣 志行	加島宿の骨董屋 岡本 耕介	鋪道の初夏 松永 保雄	少女△岡部 邦香			
母 △松村 綾子	ベンチ木村 俊雅	少さい船着場 田川 豊三	正坐せる婦人像 金 斗 煥	海 吉武 友樹	川口湖小川 勝藏	高原の夏 野村百合子	二人 遠山 陽子	簾 川有智良三	老樹のある庭 南出 嘉章	梅雨 十龜廣太郎	子供 森本 秀雄	大内提灯 △椎塚猪知雄	猫 同	さつきの頃 柴田又太郎	支那の橋 武田 二郎	六月の田園 君家 三郎	山麓 兒玉 勝次	市川河口 山口 南草	花火線香 戸田 忠良	水蓮 木庭 密樹	古代静物 松本 正子	大原女 △伊庭傳治郎		
日時計のある庭 田中田鶴子	入堂（行鉢） 黒瀧 大休	花 高木 壽子	雪景 清水源太郎	寺の入口 朴 成 煥	椽側 杉原 美佐	晩春の南伊豆 清水 富久	にはか雨 成井 弘文	童女 山中 菊代	牧舍 木村 二郎	洗濯湯渡邊 義雄	町角 長谷川勝人	飾棚 小柴 静子	幻想曲村田 耕	洋蘭の花 加藤タキノ	僻村一隅の晩秋 奥村 謹爾	枯れ草と水たまり 伴 敏子	森の徑高山 道雄	ラフカ（哈爾濱） ヨットクラブ（ハルビン） 小谷 良徳	水車 中西 欽三	壬生狂言（桶取り） △藤井 二郎	夕闇 同			
満洲風景 濱野 長正	早春の増炭 古屋 盛壽	鹽を製る家 井寄 武夫	炭焼キ川合喜二郎	溪流 小山 良藏	安南部落 森 英	山麓櫻花 多木 達哉	御堂ノ一部 松見 秀子	北海の魚市 齊藤 清	朝の棚田岡 正人	驟雨舞れゆく 堀井 文雄	あけび棚 小泉 秀松	ハルビンヨットクラブにて 坂本 益夫	襲 竹内 健	頭飾り △松下 義晴	カナカ同 門のある風景 川田 茂	暮色の庭 澁谷千代子	海女の居る風景 渡邊造酒三	道化 原 勝四郎	番所鼻同					

居留地杉山 榮美	海見ゆる丘 島 太郎	茶室 西山 閣二	畫室 岩月 光金	踏切 石川 新一	リアの石像 今村 泰吉	だいたば濱田 正二	Fの頭部 今 ヤヨ子
濱寄せ上山 哲夫	淀城址の松 西田 秀雄	野良蒼土野與一郎 貞	懶く蘭印の女 山田 等	和服の女 ○田村幸之介	櫻と城址 △古家 新	やすみ場 赤松 俊子	女 乗松 巖
蘆笛 池上 丁一	草。 栃木宗三郎	土器と石器 濱田 英一	山麓の春 平川 要	陽氣な女車掌 山本不二夫	紫陽花 同	朱い佛像 松下 氏紀	國盛氏頭像
幼女 下條 國男	海苔とり	鹽を運ぶ苦力達 尾崎悌之助	山麓の村 遠藤 君雄	佐原の跳橋 同	草刈り和田久通子	網上げ幸田 榮枝	○水野欣三郎
浚泄 矢野 徹	熊野 俊市	「さむい頃」 岩月 虎雄	秋草 木村 光江	愛馬の日 三橋兄弟治	青葉ノ八瀬路 戸嶋 幸雄	瀬田川の月 △加藤 敏子	遺作特別陳列
風景 相馬 鳳三	残月 津田 周平	池と女同	憩ひ 西田 靜子	綿羊放牧 △早川 國彦	スケッチする子 供	水邊の初夏 同	えんばくがら
母子像久保 進	白い岩橋野 松惠	南国情緒 水清 公子	二人 小杉 勇一	夏の日 同	入陽 吉田 一雄	江崎鹿之助	丹下富士男
淡水風景 大野 捷吉	南國情緒 水清 公子	牛と少年 河野 芳紀	鳩 井上 幸治	夏の日 同	静物 西村 五郎	冬の山形 三澤喜之助	早春 加藤 英男
竹林 寺田清四郎	女子青年勤勞團 森谷讓太郎	鏡の前近藤 歌子	南の畑早川 守	清戸の並木 前林 章司	村の情景 坂 宗一	龍城の跡 △榎倉 省吾	室の内 白井 惇
百姓の娘 佐藤直紗子	天磐盾中田 豊	石切山伊藤 信夫	丸樹長三郎	白樺 小林 新吉	龍城の跡 △榎倉 省吾	北京の秋 同	若い人々
濱邊△飯田 清毅	教室清掃 原 覺	田園 我部 政達	ブタ小屋 久野 修男	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	漁捕り市野長之介	彫刻
雨の日同	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
活花 高須 操	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
田植 船橋 治彦	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
小屋 佐藤吉五郎	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
叢 同	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
池畔 定方 希一	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
初夏の山容 △田邊三重松	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
船 同	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
葡萄の收穫 鶴田 宏	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
讀書 同	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
ハッ等野々口 重	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
或る午後 上野山 充	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
風景 太田 多美	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
僕の結婚 鶴岡 義雄	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞
炭礦風景 熊坂 太郎	雪オロン 旭 亮弘	馬蹄屋鳥取 敏	春の古光山 山本 直治	夏の日 市原 義夫	北京の秋 同	登り道星野 弘	枯運 谷 貞

阿部氏像

再起 松下 隆治

赤塚 秀雄

羊 唐木 政一

牛 小倉 清谷

犬 大西金次郎

首習作植木 力

少女の首

唯一なる現貨

日高 正法

鶯 泰次郎

爪 道下 長七

胸像 中堀 正孝

習作辻合喜代太郎

首 村田 虎次

日ノ顔水町 義雄

篝火 加藤 隆

或拓士の像

習作 水野 英夫

楡皮 清光

女の首長谷川雅司

アイヌの女

女的首松木 章

竹下 慶一

首 山本 博一

休め！西井 龜治

盲 伊藤 清芳

女(座像)

習作ノ首

高須賀 桂

飯田 艇三

現代美術九月陳列

一日—二十四日

大禮記念京都美術館

日本南宗畫會展 二日—七日 大阪・

大丸

アイヌ工藝文化展 二日—十月三十一

日 駒場・日本民藝館

杉山壽榮男蒐集のアイヌ工藝品一千點

を陳列、木工、染織、金工、漆器等各種

類に亘る綜合文化展であつた。

三浦竹軒、竹泉新作陶藝展 三日—六

日 日本橋・高島屋

春臺美術第二回小品展(洋) 三日—七

日 銀座・青樹社

第一回明治初期洋畫回顧展 四日—七

日 銀座・資生堂 明治美術研究所主催

久松會第一回展(日、洋、彫) 五日—

七日 銀座・松坂屋

宮崎豐遺作展(洋) 六日—八日 銀座

・菊屋

山喜多二郎近作小品展(洋) 八日—

十一日 銀座・資生堂

佛印巡迴日本繪畫展內示會(日) 九日

—十日 日本橋・三越

泉州白水新南畫展 九日—十二日 日

本橋・高島屋

村川彌五郎日本畫展 九日—十四日

上野・松坂屋

三友會油繪展 九日—十四日 大阪・

大丸

朋友會第一回展(洋、彫) 十一日—十

四日 銀座・菊屋

芝野川第一回個展(日) 十一日—十五

日 銀座・紀伊國屋

明朗美術聯盟第八回展(日) 十一日—

二十九日 東京府美術館

報知—狩野晃行は「聖觀音」六曲一双

の他に「大和遊双」及び舊作洋畫數點を

陳べてゐるが見るべきものなく、木利村

創爾郎の「愛郷紙芝居物語」も低調であ

る。また東條光高の「俱利伽羅谷火牛夜

襲圖」も物が描けてゐない等々、寥々た

る展示だが、總じてちよつとした思ひつ

きで繪を作らうとするこの會の傾向を遺

憾とする。

〔搬入〕一〇七點〔入選〕一九點內新入

選一三點〔陳列數〕二五點別に狩野晃行

洋畫舊作一〇點陳列、又小品室を設く。

〔推舉〕(同人) 東條光高(盟友) 松本晃

養、青柳定義 (盟員) 小川晃古、廣瀬太

晃、内田光胤、中野瑞草、稻田玉穂〔調

花賞〕吉田錦穂〔研究賞〕青柳定義、小

川晃古、廣瀬太晃〔朗賞〕近藤鏗

川島理一郎泰國風景作品展(洋) 十三

日—十六日 銀座・資生堂

讀賣—泰國風物に取材したものはまだ

我々の前には現はれなかつた。これらは

作者が今春同國訪問の所産で、一定の速

度感と幅のある筆觸により、清爽高雅な

畫趣を示してゐるが、特に「金とモザイ

クの廻廊」や「ワッシー・ボー寺院」など

節約した配色の妙あるものである。機上

より寫した「雲海の日出」も珍しいもの

であるが、強ひて云へば全體に少しくさ

ばさばしすぎてゐる點が氣になつた。

第一回航空美術展(日、洋、彫) 十三

日—二十一日 日本橋・高島屋 主催大

日本航空美術協會、朝日新聞社 後援陸

軍省、海軍省、逓信省、情報局、大日本

飛行協會、大日本防空協會

報知—總體に航空といふ素材の把握が

深くない作品が多いやうだが、第一回と

しては止むを得まい。場中では藤田嗣治

が實際に研究してゐるだけに、習作にし

る飛行機や空が本物の感がある。向井潤

吉の「影」伊東深水の「窓望」は共に視

角の選擇が變つてゐるが氣がきいてゐる

程度、飛行士を扱つたものでは宮本三郎

のスケッチ、吉岡堅二の「群像」がよく、

大臣賞の山本日子士良の「機還へらす」

は情感を一應遂者にこなしてゐる。大澤

昌助「先驅者の夢想」婦人像」に觀照の

確かさがあり、鶴見武長はあまりに海老

原調なのが氣になる。

〔審査員〕藤田嗣治、宮本三郎、向井潤

吉、水全清、中山巍、栗原信、島海青兒

山口蓬春、伊東深水、吉岡堅二、澤田晴

廣、加藤顯清、等〔陳列數〕洋畫一二二點

(入選五七點)、日本畫二五點(入選八點)、

彫刻二一點(入選六點)、ポスター一七點

(入選一六點)、合計一八五點〔陸軍大

臣賞〕山本日子士良〔逓信大臣賞〕大石

哲路〔大日本飛行協會賞〕妹尾健太郎、

洗春海〔大日本防空協會賞〕小柳實、

菅井波〔大日本航空美術協會賞〕北野萬

平、細田浩、大西金次郎、藤田隆治〔朝

日新聞社賞〕高山道雄

三井コレクション第三回陳列 十三日

—十二月二十日

陳列目錄

Lord teach these

Souls to Fly

(版畫)フランク

Christ riding on

a Lamb (版畫)

ブランク

The Dream of

Tristana (版畫)

ブランク

オスニーの寺

佐伯 祐三

遊鯉 權藤 種男

讀書 清水多嘉示

女の顔コラン

羊飼(バスデル)

ミレ

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

尾瀬沼(水彩)

大下藤次郎

水邊の牛(水彩)

マリヌ

清水寺(水彩)

中澤 弘光

針仕事白龍機之助

顔 シヤガール

桃 國吉 康雄

女 ロセツチ

ブルターニユの

景(水彩)

ベルナール

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

裸婦(バスデル)

藤島 武二

母性

スタンラン

日本の女

アスラン

海邊 ブーダン
菊花 金山 平三

読書 山下新太郎

卵賣 リー

ばら 青山 熊治

農家(水彩)

習作 青山 義雄

浅井 忠

桃(水彩)

女の顔神津 港人

春 ボナール

とるす太田 三郎

月夜 ビサロ

千鳥のベニ鱈

小泉菱巳男昭和東京百景展

上野山清貢

六日—二十一日 上野・松坂屋

神原浩海南海島風景展(洋)

十六日—二十一日 大阪・大丸

小西謙三個展(洋)

十七日—二十四日 大阪・高島屋

大輪畫院第四回展(日)

十七日—二十一日 日本美術協會

東朝—昨年よりも数も内容も多少の進境を見せたが道は遠しの感、佐々木順の「興亞觀音」は顔が下品であるが、小品とともにこの會では群を抜いてゐるもの

小林彦三郎の「春苑廻廊」は山氣のない畫材がこの作家に適し、難なく、それに

反し楠本白光の「乳牛」は成功すればよいが折角ながら畫技はぬ。その他渡邊

太子、松山廣幸が目につく。

報知—小林彦三郎の六曲一双「春苑廻廊」は量質感共に缺け芝居の背景を思は

せる駄作、佐々木順の「興亞觀音」は圖柄はまだしも色感鈍く、その他の同人作

も概ね低調だが、中では楠本白光の「乳牛」がや、見られる。一般出品では近藤

鑑、松本紫岡、花輪玉市等が目につくが、

相當に程度度の低い公募展といはざるを得ない。

〔搬入〕二六點〔入選〕八九點〔陳列數〕九八點〔院友推舉〕廣井陵雲、西之坊水聲、篠田忠康 授賞略

柏舟社第三回繪畫展(日) 十八日—二十一日 名古屋・松坂屋

日本山岳畫協會第六回展(洋) 十八日—二十一日 日本橋・高島屋

第二十三回朝倉彫塑展 十九日—三十日 東京府美術館

東朝—朝倉文夫の「大隈老侯」は兎に角「森本氏像」や「猫」はこの作家として決して會心のものではあるまい。伊藤

鉦次、長谷秀雄はともにこの塾中もつとも奮闘してゐる作家で、後者長谷の「録成十題」の取材はよく、殊に矢を射る女性

性は色付けを除いて難が少い。たゞこれらをはじめ多くの作家が立體寫實的な

ひにのみはしる結果内容の空虚さを思はす。その他目につくのは朝倉鈴子のセメントによる「首」等による素質と、米林

玄陽の「支那服」の男である。

新生彫刻家協會展 二十日—二十二日 銀座・紀伊國屋

小村雲岱追悼展(日) 二十日—二十三日 銀座・資生堂

東朝—來る十月十日からの遺作展を前にして、吉村忠夫、岩田正己等國畫院の作家、錦木清方、小杉放庵、山口蓬春等

故人の知友がそれらの小品を以て、僅かばかりの遺作「おせん」「雨月物語」「西遊記」のさしゑ「觀世音」を圍んだものにして、たゞ美はしき友情を知るのみである。

九室會航空美術展示會 二十日—二十四日 銀座・三越

繪畫、ポスター等の外に、會員合作の「試作・飛行機迷彩案」立體試作品・迷彩、擬裝、遮蔽等を陳列した。

聖戰美術展 二十日—十月三日 大阪市立美術館 陸軍美術協會、朝日新聞社主催

奧瀬英三油繪新作展 二十三日—二十五日 京城・三井

現代大家新作展(綜合) 二十三日—二十六日 日本橋・三越 嶽陽會主催

〔陳列數〕二百余點

岡崎桃玄油繪個展 二十三日—二十七日 名古屋・丸善

乾坤社第三回展(日) 二十三日—二十八日 上野・松坂屋

報知—主宰矢野知道人以下各自大作を出陳、努力見るべきものがあるが、神經の粗い繪が多くなつた傾向は幾分警戒を要しよう。知道人の「涼」は朝顔に秋海棠を配し手際も涼し氣だが、畫面の餘白にや、間延びの感があり近景の綠題も説明が強すぎた。弟、鐵山の「楚歌」は形色共に氣品に富んでゐるが、その舞妓を思はせる人物の描寫にもう一つアクセントが欲しい。その他の作では河口樂土の「龍ヶ淵」の水の見方が面白く、清水石溪の「大峰山」の布置の大きさがよい。

直原放青の「石人」は距離感が足りず、鈴木樂浪の「白藤」は色調が鈍い。

〔搬入〕三三點〔陳列數〕五四點〔社人推薦〕直原放青、河口樂土、村上景雲、清水石溪〔華社人推薦〕二十名 授賞略

堂本印象新作日本畫展 二十三日—二十八日 京城・丁子屋

尚輝會第一回新作畫展(日) 二十三日—二十八日 大阪・大丸

北野恒富門下の作家十一人が十三點を出品し、これに恒富の贊助出品があつた。

荒井龍男洋畫展 二十三日—三十日 大阪・阪急

美術新協第七回展(綜合) 二十三日—十月四日 東京府美術館

東日—この會も今年で七回展になるが、彫刻部を除いて今までのうちで最も充實してゐる。日本畫部では芹川和光と橋原始光が面白く、前者の「石佛」、後者の「秋丘斜陽」は注目される。主宰の玉村方久斗は例の惡達者なところが「綠地帶風景」にはみられず、庭の樹による勉強よりも悪くない。洋畫部では大久保實雄の「座像」が光つてをり、新人石井玲一の三點も、山田稔のルオー風の「犧牲」、關謙二の「山嶽」なども一すい。その他工藝、圖案、彫刻と仲々賑かで、最後は舞臺美術部があるが、見て面白い點ではこれが一番で、十點近い模型舞臺をはじめ、衣裳考案、照明計畫など豊富な列品である。

〔搬入〕約六五〇點（入選）約一五〇點
 〔陳列數〕日本畫三八點、圖案一七點、
 工藝三四點、彫刻二二點、洋畫六四點、
 舞臺美術二八點、模型舞臺三七點（新同
 人）樟原始更、小林良曹、關謙二、淺川
 藤治、東宣正（授賞）鈴木夢名子、村上
 柁夫、關謙二、木村章平、松竹正也、内
 海九郎、淺井行雄、伊藤健之典
 一水會第五回展（洋）二十三日—十月
 四日 東京府美術館

東朝—この會場のもつ特徴は、一口にいへば上品な風趣である。これはこの展覽會がいつとなく身につけた肌合であるが善惡其々問題はこゝにある。慌しい表現感にかられて無難な制作にふみ迷ふ心配はなく、いづれもある境涯に安住して技巧の樂しきを持つてゐるのは結構な事に違ひないが、又一方余りに華奢な、余りに上品な體質になつて逞しい追求や健氣な發意を忘れ勝ちになるのは多少心もとない。

繪畫の氣品は單なる繪具の仕業でなく、畫格全般で充實してはじめて込み上つて來るものであつて見れば、嚴しい畫格の構成が基本的要件であらう。なめらかな筆勢の誘惑にも警戒が肝要である。常にこの警戒に身を碎いて畫格の充實を冷徹に追求してゐる作家は安井曾太郎である。今年も風景二點において並々ならぬ苦心を示してゐる。殊に「燒岳」の念の入つた構成には複雑な取計ひが氣苦しいまでに隅々に行渡つてゐる。各部分

の手堅い配置、不拔の構圖も嚴として透徹したものであるが、それだけ自由に遊動してみたい觀照のゆとりが與へられない。氏の精密な繪畫的測量がもつと朦漠とした廣りに渾然と融合して行つたら愈々達人至藝の域であらうか。

碓伊之助も配色の苦心を怠らぬ作家だが、今年の作品は拘泥しすぎてひどくごちないものになつたのは残念である。

石井柏亭「遼西古都「如意湖」」ともに大陸のせるか、畫面が緩漫に放散して集中せず例年の風趣がない。有馬生馬「三姉妹物語」は畫意達せず明截を缺くが風景二點には獨特の滋味横溢する。山下新太郎の舊作十九點を展覽した一室は場中の塵卷である。ウエラスケスの模寫はじめ滯歐作品等に投げこんだ往年の製作力は今日もなほ潑刺と迫つて來る。讀書、裸婦、供物など、とりわけみづ／＼しく精緻である。のび／＼としかも的確に充實した色調のこまやかな効果は見事なものである。

木下孝則は今年も思ふ存分美しい筆觸を流通自在にこなして支那服の婦人を描いた。悪くすると表面的に流れやすいこの筆勢も、こゝでは程よい彈力を以て表現の厚味をつけてゐる。木下義謙は手堅い手法と健康な色感の作家であるが今年出品二點とも精彩がない。殊に「夏服」は畫因が平俗で描寫も硬い。

小山敬三「山間新緑」には新しい意圖があり新鮮な配色の工夫もあるが効果は

熟し切らず、それより「甲斐胸ケ岳」や「海」の方に行届いた豐麗な描寫が實つてゐる。高野三三男は數點に及ぶ「闘牛」の圖を輕快に描き分けてゐるが、何れも不健康な感傷が表現を脆弱にしてゐる。一般出品の中では矢野雄藏の努力を特に注意したい。（富永徳一）

讀賣—相變らずおとなしい展覽會である。大して嚴しい造形的追求があるわけはないし、さらばといつて格別新しい構想があるわけでもない。無難といへば無難に違ひないけれども餘りに靜穩で物足りないことは事實である。扱はれたテーマの上からいへば、風景と、婦人を主とした肖像と、靜物以外には殆んどこれといふやうな新發見がないやうで、しかもそれが一定の限度を越えないお上品な技術でまとまつてゐる。野心のないこの靜的な會はその點お隣りで同時に開かれてゐる動的な新制作派展と面白い對照をなしてゐる。

風景では石井柏亭の「如意湖」と安井曾太郎の燒岳と穩高を遠望した小品二點がやはりよい。石井のものはこの人獨特の淡雅靜利な感じが出て親切に描いてあるし、安井の圖には水彩風の輕快さで構圖の上手さが示されてゐる。風景のうちでは、なほ小山敬三の山と海がある。ぬるりとした色彩は天鵝絨のやうな溫い感傷を有つてゐるし氣品も卑くない。これについては田崎廣助、瀧川太郎、中村善策といつたところだらうが、中村はい

つも程よくない。また、コンラッド・メイリは輕いものだが、スイス人らしい澄んだ色感をもつてゐる。

人物畫には特にすぐれたものがないやうだ。仲田菊代も感心しないし、その他肖像にしても、風俗畫傾向のものにしても、扱ひ方が凡庸で調子が低い。中で佳作を拾つてみると、山下新太郎の「香夢」や中村琢二の二點があげられるに過ぎない。松田文雄は眞面目に研究してゐるが、少しあまくなつて來たことを注意したい。

たゞこの會でちよつと風變りは矢崎重信の村童と、林鶴雄の土手の子供と、金子博信の遊戲の圖である。

山下新太郎の回顧作品の特別陳列は、なか／＼立派である。スペイン風の模寫は殊にいゝが、作者自身にとつてはこれが苦心のコピーであるばかりでなく、今日に至るまでの研究過程の重要な契機となり、出發點となつてゐることを注意しなくてはならないだらう。

この會もすでに回を五回重ねた。積極性には乏しいが畫壇では穩健派として信用をから得てゐる。そしてとにもかくにも性格もはつきりして來たやうだ。併しどの會も五六回あたりが中だるみの時期だから、これからが特に警戒を要する時だらうと思ふ。（荒城季夫）

〔搬入〕一三二四點（入選）二〇〇點
 〔陳列數〕二三七點、別に山下新太郎回顧陳列一九點（一水會賞）深澤紅子、近

岡善次郎、矢野雄藏、(岡田實)木村辰彦

〔具方賞〕木下壽々子

出品目録(○會員)

春雨○有島 生馬

三姉妹物語

秋露 同

野尻湖を監視する土屋さん

○安宅 虎雄

薄氷はる池

朝倉 力男

外金剛山(三仙岩)

安西 恒男

吾野風景

荒井 一郎

自畫像荒谷直之介

婦人像同

遼西古都

○石井 柏亭

如意湖同

伊豆の海

○池部 釣

温泉場同

枯野 同

風景 石川眞五郎

與瀬風景

同

山並 池谷 寅一

房州とうろく姿

猪俣 克史

いんげんの庭

一本萬壽三

山小舎の室内

大橋 文子

花かこを持つ少女

大橋 文子

縁がわ奥田郁太郎

五色沼と磐梯山

同

櫻の園尾澤 勝朗

航空機岡田 行一

初夏の午後

岡見 第三

煙製ト果實

尾崎 正章

椰の森岡野 計子

溪谷 小野藤一郎

奈良公園の夏

同

老婦 大館 健三

コーカサス料理

店の玄關先

大月 源二

街角 同

笠間 小野 末

丘 同

磐梯高原初秋

小竹 義夫

雨後の桂川

岡崎 祇容

こむら河上 一也

森の流れ

同

金子 博信

弟の像川瀬 すみ

農家の裏手口

金丸 直衛

鶏舎 同

雨後 角江 重一

庭園 狩野 壽一

松林 同

庭先 勝間田武夫

山の宿にて

川名 博

四月の燒岳

加藤 水城

飛火野のいちろ

樞 片多 三吉

鹿の子百合

同

鹿曲川邊り

片山 芳樹

朝 〇木下 孝則

支那服のN嬢

同

夏服〇木下 義謙

山中湖風景

同

秋晴れ北尾 修一

耳飾り同

白磁ノ壺ニカゝ

ネーシヨン

木下壽々子

四阿山同

浴衣 黒田外喜男

晩秋 畔柳 興二

嵐山の赤松林

久野 昌康

梅雨期の最上川

同

山間新緑

〇小山 敬三

木曾駒ヶ嶽

同

甲斐駒ヶ嶽

同

海B 同

海A 同

〇高野三三男

エチユード

同

關牛D 同

關牛C 同

關牛B 同

關牛A 同

松本城小平 鼎

高原遠望

同

唐松の林

小木曾 精

高遠の家

窓 近藤 光紀

緑のリボン

同

港 齊藤 大

べんけい草と手巾

佐々木園子

夕焼の雪山

笹野順太郎

エブロン

酒見 恒平

輕井澤の庭

酒井 精一

婦人像坂本 正春

花を挿す

同

つるばら咲く

繁野 三郎

庭の一隅

鳥 あふひ

自畫像柴田左千雄

K子 菅野 矢一

初秋 鈴木 良三

牡丹 同

池畔 同

渡舟 末松 勇

雨 同

宿驛 須山 計一

町會のM君

菅沼 金六

林と古墳

〇田崎 廣助

松と朝顔

同

初秋武蔵野

同

松林の秋

同

花 同

憩ひ 谷内 俊夫

かばちや

同

支那美人

田中 清汾

浦安 多和 與三

川上の夏

高橋 卯八

洪水の後

竹内梅治郎

夏空の下

瀧澤 清

蘭倉 田中 梯六

羽後の山

高田 誠

中綱湖のほとり

同

少女 田代 光

標 高森 捷三

イタリーの町

門のある町

瀧川 太郎

同

淺間の眺め

同

北京風景A

同

支那美人B

同

松 高橋 庸男

百合 同

金魚 同

長湖 千頭 清策

野邊山原

同

肖像 近岡善次郎

殘照 同

造船場岡田三郎

水邊 寺島 貞志

野尻湖出開美千子

鏡の前の稽古

同

多摩川の夕景

同

北海蓮花

待合室にて

富樫 正雄

夏 〇中村 善策

棉花の春

白馬岳みち

同

菅平の午後

鍋谷傳一郎

高原の六月

同

朝 中川郷一郎

正子さん

永井 潔

肖像K永見 讓治

同

燈下〇裕 伊之助

石神井池

同

故郷の夏

納富 進

踏切(青梅街道)

同

牧場の夏

野崎利喜男

牧草地同

樹園一隅

同

能勢 眞美

カラサワ

野口 道方

野尻湖の夏

同

傾田 朋子

青い上衣

同

静物・中西倪太郎

丘の家中畑 幸夫

グラジオラス

日塔 笑子

同

アトリエの女

同

六月の庭

同

中村 琢二

木蓮と女

同

殘雪 長田 健雄

室内 名取 明德

婦人像同

讀書するN氏

仲田 菊代

静物 中村三樹男

コステューム

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

萩原 實	森 松本 透	初夏 矢崎 重信	ノラ、フアルク
スベリ臺	○夫人像	峠から矢野 雄藏	三井高太藏
林 鶴雄	松村 三冬	漁村 同	中村英吉藏
土手 同	曇り日 同	新雪の山 同	靴の女
朝露 平井 武雄	鶏舎の子等	湖畔 山中仁太郎	三木國太郎藏
炭坑内の人々	松田 忠一	湖畔 山口 敏男	讀書の後
日笠 薫	青衣坐像	夏の臺灣	男爵住友家藏
婦人像深澤 紅子	松田 文雄	藍蔭 鼎	洛東西行庵
コロンボ部落の女	萩咲く庭	S嬢像渡邊 サチ	反町茂作藏
夏の人街	同	樹葉 渡部 千鶴	習作 作者 藏
同	初秋の高原	向日葵渡邊 宗一	金閣寺林泉
同	牧野 正吉	晩夏 渡邊 正一	同
娘	人物 源川 雪	畫の高原	ブルトンス
同	上牧風景	娘 同	同
爽竹桃古川 環	ヴェールの女	渡邊 鎮信	セーヌ河畔
T女 同	三澤 邦雄	特別陳列	同
人形のある室内	立像 宮下 琢郎	山下新太郎	あみもの
不破 章	ゆり 三浦 俊輔	回顧作品	同
海の祭別軍 博資	赤岳 三角嘉壽男	ブレダの開城	小劇場 同
竹林 本郷 惇	ハッ岳 同	(模寫) 山崎たね藏	顔(バステル)
八重櫻 同	小庭雨日	(模寫) スベイン皇后像	同
多摩山莊より	村上鐵太郎	(模寫) 鈴木忠治藏	端午 同
漁村風景	黃色い帽子	讀書 原良三郎藏	シユザンス
細島 昇一	森 寅雄	裸婦三木國太郎藏	同
紫陽花丸野 豐司	奈良公園の藤	新制作家協會第六回展(洋、彫) 二十	像(模寫) スベイン王女の
風景 眞下 慶治	同	三日—十月四日、東京府美術館	同
最上川遶春	燒岳○安井曾太郎	報知—一頃アカデミックといふ言葉が	盛にいはれて恰も平凡なつまらない繪といふことの代名詞みたいに用ひられてゐた。所が日本に本當のアカデミシアン等一人もゐないといふ人など現れ、アカデミックもなま易しいことじやないといふ
熊川の朝	池と穂高	同	同
同	同	同	同
秋川の山	春日野安井 隆	同	同
同	黒蝶 山崎 稜	同	同
池 松田 康一	山村初夏	同	同
木立 同	早春 同	同	同

だしものこと、抹殺される畫家は氣の毒である。凡才ならば止むを得ぬが、あた有爲の才能を持ちながら何等その才能を發揮することの出来なかつた畫家は尙更浮ばれない。時代の風は仲々強い。畫家としてこれに煽られまいとする途は「自然」に學ぶ他ない。

次に彫刻であるが、自分は何時も帝展の彫刻を見て鼻先に小便をひつかけられてゐるやうな感じで不愉快に思ふのであるが、此處ではさうした不愉快さはないけれど繪を見る邪魔になる。彫刻といふものは難しいものらしい。こんな程度では繪の方を皆が見て彫刻は忘れて行つて了ふ。

最後にこの展覧會は一見努力とエネルギーとで張切つてゐる様に見えるが、その努力とエネルギーは外面的である。ルーベンスは見上げるやうな大作を、高林が繪葉書を作るみたいにやつてのけた。併しイサベラ・ブランドやヘレン・フォルマンを描いた小品により以上の努力と月日を費してゐる。(木下孝則)

東朝—心理的にいへば今日は文化の各面で、動性のものが強く求められてゐる時代である。また、それに魅力を感じる時代でもある。この會が新生活派だとか、新感覺派だとか呼ばれて若い層のうちに人氣を博してゐるのも、要するにこゝにはつねに何か動きを求める作家の心理があらはれてゐるからであらう。たしかにこゝには生活と時代の匂ひが

ある。時にはどうなることかといふやうな不安と希望が同席してゐるけれども、どうにもならないといふやうな固定感や消極性はない。たゞ問題となるのは、物の考へ方や感じ方に、西歐的な偏向が少し多すぎるといふ點である。

今度の出品には文學的な意圖と古典的な構想によるものが少くないやうだ。文學と古典を結びつける着想は別に新しい試みではないが、この會ではこの兩つのもが郷愁といった様な思慕の感情や空想と結びついてゐるところに特徴がある。

繪畫から文學を追放するのとは逆に、文學を繪畫の中にもち込もうとするこの行き方は、もちろん多くの危険を伴ふに違ひないが、内容のある物語風の繪といふものが再び問題になつてゐる今日、それはいろいろな意味をもつてくる。

一内田武夫の三部作や荻太郎の二部作や或は手島守之輔の三部作は、それが成功であるか否かは別として、この困難な仕事に立ち向ふ冒險心と旺盛な意欲は相當高く買はれてもよい。たゞ内田の場合でも他の二君の場合でも、その構成や感性が如何にも西洋古典風で、東洋的な深さと神秘感に乏しい。その點は内田巖の東洋畫による試作の方がはるかに獨創的である。

猪熊弦一郎、脇田和、佐藤敬あたりにも若干の文學性がある。この場合は、前の場合ほど意識的ではないが、たとへば

猪熊の支那の子供達の圖にしても、脇田の幼児にしても、佐藤の小鳥と女にしても、フランスの近代畫から脈をひく色や線の抒情味が基調になつてゐることを見のがすわけにはゆかない。また伊藤繼郎や三岸節子などのうちにも前の人々と同様、生活を愛する明るい詩感がもられてゐる。

文學的要素のないのは小磯良平と荻須高德である。そして水彩の方では中西利雄である。併し寫實とはいひながら、これらの人達もいはゆるレアリストではなく、近代風の新鮮な感覺を有つてゐる。

一般出品のうちから佳作と思はれるものを拾つてみると、若松光一郎、關口俊吾、小松盛義、古茂田公雄、太田忠、工藤正義などあり、水彩では石川菊壽がある。

彫刻の方では本郷新、山内壯夫、早川巖一郎、明田川孝、佐藤忠良、吉田芳夫などといふ會員の出品がやはりこの會獨特の氣品と理想主義の研究態度を示してゐる。(荒城季夫)

都一新制作派展の特別陳列の中にブルードルの彫刻が出てゐる。小品だが、大まかで力が籠つてゐる無愛想で魅力がある。新制作派の彫刻は近年よく勉強もしてゐるし、伸びても來てゐる。

本郷新の「端坐」といふ大作は、體軀に埃及彫刻のやうな強固な單純さを狙つてゐるが、觀念的なものが充分醗酵してゐない感がある。顔面と體軀との様式統一といふことも問題であらうが、埃及彫

刻が一つの塊から彫り(カーヴェイング)起してゐる様式を、塑像の肉付け(モデリング)でやつてゐるところに根本的な無理があるのだと思ふ。「S嬢」といふ首は緊つた美しさがあり、「青年座像」は少し肉付けが煩しいが、像の軸の周りの空間を表現してゐる。

佐藤忠良の「青年」は固陋な癖のない素直な伸々とした仕事であるが、もう少し凝集感が欲しい。凝集感と云へば、此度の會に加はつた早川巖一郎の「裸婦」は、量感がだらけてゐて、却て輕くなつてゐる。凝集力が乏しいのである。

舟越保武の首と胸像は、大理石の持つてゐる素材感の雰圍氣を抒情的に生かした作品であるが、面の商切れが何だか曖昧で大きさが充分出てゐない感じがする。

菊池一雄は石の胸像と塑像の「裸婦」を出してゐるが「裸婦」の方は仕事半ばで公用の爲充分完成をみないで中絶しなければならなかつたといふ話だが、製作過程の一步步に愛情の籠つた觸感の感じられる作品で、觀てゐて愉しい仕事である。背中が殊に美しい。彫刻の觀念が作品の中で空轉してゐないので、噛みしめるやうに一つ一つの觸感が觀る者の心に傳つて來る。(今泉篤男)

〔搬入〕六六六點〔入選〕洋畫一四九點(八六名、新入選三名) 彫刻十三點(十名、新入選四名) 〔陳列數〕洋畫一九三點、彫刻二四點、特別陳列十一點〔新會員〕伊藤繼郎、菊池一雄、早川巖一郎、今村俊夫、内田武夫、小松益喜

出品目録(○會員)
船 若松光一郎 村尾 紬子
巖 同 關北の屋根
石の村同 同
アトリエ 小田 晴子
庭にゐる父 同
デッサンD 伊藤 繼郎
同C 同
同B 同
同A 同
室内の女 同
森と少女 同
同 同

静物と子供 同
小供の國 同
デッサンF 同
同E 同
馬車上河邊みち子 同
ニコライ堂 同
福原 俊二
幼兒と子守 同
○脇田 和
母への繪 同
子供 同
いらいしやん 同
閑庭 田淵 巖
裏街 野口佐武郎
草上 梅澤 靜雄
庭球場ニテ1 同
静物1今村 俊夫
母子 同
静物2 同
拓けぬく土地 同
十河 眞一
養鶏場の裏 同
風景 椿堂芳三郎
森と雲大住 閑子
閑庭 田淵 巖

千田大尉像
田畑 一作
ひかり
○明田川 孝
青年座像
○本郷 新
S嬢 同
端坐 同
畫家の像
○吉田 芳夫
浮彫試作
三宅 常夫
特別陳列
デュフィ「港」、ユ
トリヨ「道」「エグ
リーズ」「サクレキ
ユールの邊り」「雪
のモンマルトル」
「廣場の人々」、ド
ラン「婦人像」、ド
ガ「婦人像」、ヴ
ラマンク「風景」
「河」、ブルデル「サ
フオ」
日一十月五日 大
展 二十四日—二十
續展 二十四日—二十
日—二十六日—二十
動畫廊
展(洋) 二十六日—

美術展覽會(十月)

松岡 壽	中澤岩太博 士像	京都中澤 岩太
飯田雄太郎	竹像	同 飯田 清毅
渡邊文三郎	若き武士の 坐像	同 寺松國太郎
伊藤快彦	男子像	同 作 者
作者不詳	三宅八幡風景同 窗	杉浦三郎兵
山下久馬太北垣男爵像	同	同 京 都 市
寺松國太郎食後	同	同 作 者
吉益耳童	靜物	同 作 者
同	年中行事十 二ヶ月ノ内 四月釋尊 降誕之圖	同 同
川村清雄	破船	同 吉益 耳童
同	松竹梅	同 同
飯田清三	御茶之水風景同	飯田 清毅
淺井 忠	中澤岩太博 士像	同 京都高等工 藝學校
同	風景	同 小山米太郎
同	グレーの柳	同 遺 族
同	八瀬秋景	同 湯淺七左衛 門
同	少女	同 飯田 清毅
作者不詳	富士遠望	同 辻 重彦
前田吉彦	竹像	同 柴原 希祥
中川堅一	竹像	同 同
川村清雄	竹像	同 吉益 耳童
作者不詳	海之圖	同 辻 重彦
牧野克次	海邊風景	同 同
川村清雄	風景	同 同
田村宗立	畫帖	同 吉益 耳童
小山正太郎畫帖	同	同 永益
加藤源之助秋郊	同	同 京 都 中 澤 岩太
同	八瀬の秋	同 同
牧野克次	奈良二月堂	同 同
食堂	同	同 作 者
一部陳列替アリ		

佛印巡回日本油繪内示會 二十七日—
二十八日 日本橋・三越
長谷川利行遺作展(洋) 二十七日—二
十九日 銀座・資生堂 明治美術研究所
主催

日本美術院第二十八回展 二十八日—
十月十二日 大禮記念京都美術館

太田三郎作品展(洋) 二十九日—十月
一日 數寄屋橋・日動畫廊

井上良齋作陶展 三十日—十月三日
日本橋・三越

川端龍子畫心應召第二回展 三十日—
十月五日 大阪・高島屋

東京工藝綜合展美術工藝部(第一部)
三十日—十月五日 日本橋・高島屋

東京府は工藝振興の一方策として逐年
開催し來れる展覽會を一元的に統合し、
新に東京府主催の下に東京府立工業獎勵
館、府立東京商工獎勵館並に東京府工藝
協會を動員して本展を開催した。展覽會
は第一部美術工藝部、第二部産業工藝部
及び第三部輸出工藝部とし各部會場を別
にして開いた。美術工藝部の鑑査の成
績は左の通りである。

〔審査員長〕津田信夫〔審査員〕香取正
彦、豊田勝秋、山崎覺太郎、高井白陽、
北原千鹿、海野清、河村靖山、宮之原謙
岩田藤七、各務鐵三、廣川松五郎、木村
和一、堀田恵、飯塚瑠玖齋〔搬入〕五九
六點〔入選〕一五一點〔賛助出品〕四點
〔審査員出品〕一五點〔招待出品〕六二
點〔推薦出品〕五三點〔陳列總數〕二八

五點〔二等賞〕概當者なし〔二等賞〕森
田一靜、武植貞波留、辻光典、大谷春彦
〔三等賞〕島村慶二、田村千恵子、渡邊
あき子、帖佐美行、降旗正男、下暢、近
藤實〔褒狀〕二十名

十月

野口謙藏作品展(洋) 一日—四日 銀
座・鳩居堂

報知—東光會々員たるこの作者の東京
進出個展、素朴な田園詩を思はせる畫風
で、繪具の付きが荒々しいやうでも好み
は平明である。時には感興に負けて布置
の怪しくなつた作もあるが、「湖の夕日」
は靜和な詩情の佳作といへる。その他
「雪後風景」「虹の風景」等面白いが、特
異性に安住しないことが必要だ。

平田俊三油繪展 一日—五日 大阪・
三越

八炫社陶藝展 一日—五日 大禮記念
京都美術館

京都名家日本畫展 一日—五日 京
都・大丸

第三回貿易局輸出工業圖案展 一日—
五日 日本橋・高島屋

〔審査員〕石黒武重、向井寛三郎、宮下
孝雄、津田信夫、和田三造、水谷武彦、
松田權六、水町和三郎、國井喜太郎、宇
都宮誠太郎、濱田泉二、堀口捨己、狩野
秀峰、木下勝次郎、日野厚、芹澤銈介
〔搬入〕第一部四五二點、第二部七四點
〔入選〕第一部七四點、第二部一八點

〔二等賞〕(婦人服地) 福永俊吉、(竹製
造花)加藤清澄、(婦人服地) 清水正、(三
等賞)(婦人服地) 須藤雅路、(ベリーセ
ット) 伊良皆宣勝、(ケーク皿) 日根野
作三、(盛皿と小皿)大橋正、(服地)石井
輝彦〔褒狀〕十名

巴會第五回日本畫展 一日—五日 銀
座・菊屋

第十二回東京みづえ會展(洋) 一日—
五日 新宿・三越

東京工藝綜合展産業工藝部(第二部)
一日—七日 日本橋・三越

〔審査員〕國井喜太郎、木暮謙三郎、木
年恕一、日野厚、今井兼次〔搬入〕六四
九點〔入選〕三八七點〔一等賞〕大倉陶
園、大野木昇一〔二等賞〕武内重雄、株
式會社塚三織物工場、株式會社竹興社、
八王子輸出織物株式會社、株式會社松崎
東京營業所〔三等賞〕千葉虎男、吉田吉
藏、長谷川合名會社、合資會社丸信織物
工場、合名會社佐々木硝子店、岩城硝子
株式會社、小光社、株式會社壽商店、横
田峰齋、渡部七郎〔褒狀〕十七名

北海道美術展 一日—九日 札幌・丸
井デパート

木下孝則作品展(洋) 二日—四日 數
寄屋橋・日動畫廊

關口俊吾滯歐作品展(洋) 三日—七日
銀座・青樹社

讀賣—作者は日佛交換學生として渡佛
しバリ國立高等美術學校一等賞を獲得し
今春歸朝したのであるが今回の展示は如

佐伯 祐三	風景	宇野 三吾
青山 義雄	靜物	同
梅原龍三郎	花	高尾菊次郎
藤田 嗣治	巴里風景	初瀬川松太郎
會宮 一念	海	高尾菊次郎
里見 勝藏	女	宇野 三吾
川島理一郎	ナポリ公園	内貴清兵衛
里見 勝藏	紅海	同
須田國太郎	アの首	作者
三岸 節子	室内	宇野 三吾
岸田 劉生	靜物	山本 隆三
中川 一政	風景	内貴清兵衛
關根 正二	小供	同
中村 彝	婦人	山田孝三郎
正宗得三郎	風景	内貴清兵衛
小林 利作	瀬戸内海風景	宇野 三吾
小澤 秋成	公園	内貴清兵衛
中澤 弘光	舞妓	古橋彌市郎
都島 英喜	山村	作者
黒田重太郎	平安春色	作者
大橋 孝吉	溪流	笹田淺次郎
田中善之助	風景	福井 嘉一
坂本繁二郎	馬	高尾菊次郎
東郷 青兒	ペランダ	初瀬川松太郎
舟川 未乾	靜物	西久久壽馬
霜島 之彦	緑のステター	作者
鹿子木孟郎	奉天入城圖	畫稿 稻畑勝太郎
同	アヴエニユ・ド・	同
同	ベルサイユ	同
同	ルサンプー	同
同	公園	同
太田喜二郎	臥婦	内貴清兵衛
中川 八郎	日本アルプス	湯淺七左衛
満谷國四郎	風景	内貴清兵衛

河合 新藏 竹藪 六鹿 清治

乾坤社第三同展(日) 十五日—十九日

名古屋・松坂屋

建築第十五同展 十五日—十九日 日

本橋・白木屋

日本建築學會の主催になる恒例の展覽會は、その第一部の主題を「日本民家」とし四十一點を陳列、日本の民家の傳統と改善の狀況を示し、第二部には會員の作品四十五點を、第三部に於ては「將來の國民住宅」なる課題のもとに募集した入選案及佳作三十六點を展覧した。

池上秀畝傳神洞畫塾藝納畫展(日) 十五日—十九日 銀座・松屋

神庭白梨新作日本畫展 十五日—十九日 日本橋・高島屋

青龍社展(日) 十五日—二十六日 名古屋・十一屋

白聖會第十九同展(洋) 十六日—二十日 大禮記念京都美術館

第四回文部省美術展(綜合) 十六日—十一月二十日 東京府美術館

【第一部】東朝・帝國藝術院會員たる横山大觀、川合玉堂、竹内栖鳳をはじめ安田靉彦、小林古徑、前田青邨なども出品しない今年の文展は定めて低調なものであらうと、一般に想像されてゐるが、行つて観ると少しも例年に比べて淋しくない。一體文展に關係しながら年にタツタ一度の出品が出来ぬといふのは意氣地のない話で、それに今年はどうやら無鑑査級の出品も少いたためか、場内は却つて清

新の氣に満ちてゐるやうな氣さへする。文展を單に青年作家の登龍門にして終ふか、それとも從來の如く大家中家小家總掛りの大興行にするかは至急決断を要する問題で、私などは寧ろ近年は前者を選んだ方がよい、さうして大家中家即ち無鑑査級以上のために三年に一度位の別の展覽會を催すべきだと考へてゐる。この頃文部省の學藝課で編んだ「無鑑査名簿」を貰つて、洋畫の無鑑査人員二百九十二に對して、日本畫のそれが百七十二の少數なるを知つて、寧ろ事の意外に驚いたが、それでも今年は非番といふ制度によつてそれだけの大人數が一遍に押寄せなかつたのは幸ひだ。すなはち無鑑査級に藝術院會員を加へても六十人しか出品しないから、總陳列數二百二點の中無名作家が三分の二を占めることになつた。しかしいつそ來年から思ひ切つて純登龍門とした方が面白くないか知らん。

さうなれば無能の無鑑査級ももう「文展の癌」ではなくなつて来る。さて場内清新といつたが、それは無鑑査級の陳腐な作品が少いといふ意味で、無名作家が打揃つて大飛躍を示してゐる意味ではなく、何故かうも日本畫の行く手が分らぬのかと齒痒い氣がする。委しくいふと大多數は洋畫に頭を下げたもので、日本畫家としての誇らしいものは何處にもない。四十年も昔、大觀などが「朦朧派」と稱せられた時代があつたが、今の朦朧たる無名作家の態度は「逃げ」で、微塵

の「意氣」を見ない。「淡々しい畫は描き易い」明治第一の天才作家菱田春草が斯う喝破したことがあるが、實際その通りで、今の無名作家は正面から題材にぶつつかる前に、卑怯にもいかに逃げ込まうかを思案しながら畫面に對してゐるやうに見える。逃げ込みの手段の一、二を指摘しようなら、朦朧化を第一として、縹緗化、硬直化、それから沒線化など様々である。一つ朦朧化の標本でこれとは思はれる無鑑査の作品がある。それは例年藝術院會員室の別稱ある第三室にも失望し、第四室の望月春江の「蓮」をチラと眺めたばかりで、第五、第六の兩室も飽つ氣なく過ぎ、あゝと漸く歎聲を發しようとする第七室の入口だけにハッと眼が覺める。福田惠一の「愛撫狗兒」は恐らく名ある將軍の閑散の一時を捉へたものらしいが、捉へ得て妙、藻掻きに藻掻いた福田も到頭一作を送り得たわいといふ感想を禁じない。澄んでゐる。支那建築の柱の朱と劍はすてた長身軍服のカーキ色との間に、チヨコナンとあらう向きにおとなしく坐つて餌を見上げる狗ころの白毛。大將の禿げ頭は特に面白い。朧化も朧化、以前彫塑によく見掛け手手段の應用で、眼口の在り所さへ定かならず、さながらハムレット劇の亡靈を聯想するが、それを帳消しする好趣があり、若し何とも知れぬ左端庭上の一物を裂き去つたら、畫面は一段と冴え渡らう。福田に拮抗する作品に、手法はや、古い

第十三室に徳田陸齋の「月明」がある。濱千鳥の生簾を活寫してこれ以上のものはまだ文展に出なかつた。しかし福田も徳田も未だし、昭和十六年度の最優秀作は第十一室の西壁中央に掛つてゐる。審査員野田九浦の「武人武藏」や無鑑査島田墨仙老人の「塙保己一」は性格描寫としてある點まで成功してゐるのではないかといふ説があらう。況んや女性として始めて藝術院會員に迎へられた上村松園の「夕暮」の清純に對しては「長夜」又は「月かげ」以後の佳作との評も出さうであるが惜しや針箱の色調の取扱に工夫を缺いた。無鑑査伊東深水の「現代婦女圖」は例によつて平俗。會員小室翠雲の「九方臯」は久々の人物畫ながら、同じ會員松林桂月の七面鳥をかけた「晩秋」、橋本關雪の「夏夕」、ともに遂に佳處を見ず、殊に後者が狐に添ふる夕顔に示した没骨墨描の手法は俗臭紛として近づくべからず、一日も早くかゝる畫境にさよならをすべきである。審査員兒玉希望の「淡川」の楠公と同じく堂本印象の埴輪風人物「戰機」とには全く失望した。見渡すところ戰爭畫は甲冑や馬とともに今年さすがに少くない。長期戰爭によつて畫壇人も眼を覺ましたかと一應は嬉しくならぬでもないが、たゞ戰爭畫題といふだけで、畫家自身心の底から動いてをらねばこそ、正成の腰が抜けるのである。江崎孝坪の「撃て」も特選の中ではまだしも、方であらうけれども、構

圖としては平出品濱田豪兒の「黃風」ほどの新味もなく前田青邨張に大眼玉を列べただけのものである。ただ武者繪中暢越をかけた平出品森戸果香の「つはもの達」は湯中の異彩宜しく特選の筆頭に擬すべきだ。序に特選についていひたいのは寺島紫明の半裸女「寸涼」でかゝる卑猥の作を知らず顔に入選せしむることは審査員會の大恥辱、いな文展の神聖を汚すものと呼號したい。特選向井久萬の「男兒生る」も單に命題を買つたとしか思へない。穴山勝堂は無鑑査級中雄々しい景趣を選ぶ點において同感を禁じないが、今年の「晴れたる空」も兵法は判つてゐない。無鑑査島山錦成の「松」に至つては全然松の特性を無視してゐる。かう評して來ると藝術院會員も無鑑査も平出品も全滅で、どこが清新だと反問されることにならうが、一概に眺めて文展も變つたものだといふ感想は誰もが禁じないであらう。畢竟時代は移らうとしてゐるのだ。會員結城素明が例の日本繪具で大威張で「馬の湯」といふ洋畫を出品してゐるに見ても趨向は知られる。縹緗化とか、沒線化とか、朦朧化とかいふつたが、それらのものが皆多少なりとも洋畫の影響で、これでは文展の指導性が怪しいものになつて來る。線ばかりが東洋畫の長所ではない。しかし前記徳田隣齋の「月明」や、無鑑査山本紅雲の「築の鮎」を見ると、線は線で威力あることが判らう。「築の鮎」は觀察と意氣を示す佳作

で、様式は違ふが無鑑査大木豊平の「長者婦女之圖」などとあはせて好感がもてる。平出品今津屋屋子の「カナリヤ」は女の繪らしくてよい。同丹羽阿樹子は女流作家か否か知らぬが「精靈の花」の蓮花賣は人物を女一人と子供だけに整理してほしかつた。平出品下川苔地の「苔寺」と無鑑査山ノ内信一の「東大寺南大門」は眞面目な態度を喜ぶ。さていよいよ第十一室西壁の名畫を眺めることになつたが、それは無鑑査廣島晃甫の「赤装女」といふ不思議な畫題の繪である。見るからバツチリと眼の大きな、櫻町公子といふには少しうら若過ぎる女性の立姿である。嘗て廣島の「白鳥」の前で故大塚保治博士が「この作家にはフアンタジーがある」と囁かれたのを想起するが、現代日本畫壇でこの人ほど「詩」をもつ作家は無い。私が「この畫こそ吾々が久しく求めてゐたものだ」といつたら、或る有名な洋畫家が、「都會人は皆偽善家ですよ」と事もなげに答へた。笑ふべし、この畫は斷じてその種の類廢畫ではない。底光りする刺繍の支那服、これに包まる細腰、手、眼、心の輝きを見よ。洋畫的とも見られる、背景に破綻もあるが、綫手の描寫など如何だ。行き方は違ふが、精技々々、日本美術院展覽會における安田靫彦の「黃瀬川の陣」と相對して、眼が覺めるではないか。（脇本樂之軒）

（第二部）東朝「文展は藝術院に返すのが一番いい」といふのは私の最近の持論であつた。藝術院の美術家達の中にはさうなることを面倒に思つてゐる人もあつたかも知れない。然し今の世の中は、「文化は政策なり」などといふ淺薄な結果論を振廻してあらゆる文化施設を擧げて政策遂行の具に供しようとするやうな無責任な短見者流の多い時代なのである。その實は政策こそ國家百年の文化のための政策でなければならぬ筈なのである。

文展は差當り藝術院に委ねて置きさへすれば藝術院の美術部は何といつても美術家の集りなのだから文展が甚しい傾向的なものに墮する危険だけは避けられるだらうと考へてゐたわけであつた。

現在の藝術院は勿論色々な缺點を有つてゐる。然しそれは自發的にも次第に改良出來る。昔の帝國美術院のまゝだつたら改良は覺えないが松田改組以來在野の眞面目な人達が加はつて來てゐるから期待し得る。もちろん、改良は徐々に行はれるより仕方がない。たとへ徐々の改良でも門外漢の亂暴な改惡に勝ること萬々である。必要あれば再び會員を審査に加へることも出來るのである。

今度の第一部（日本畫）の審査員の顔觸れには大分芳ばしくないとこがあるが第二部（油彩畫）の方はあくどい人物がゐるだけでなく、それよりはすつといふ。差當り文展としてはまづこんなところであらう。會場も便乗戰時色などが無くつて大體感じがいい。會場の空氣を惡

くしてゐるのは例によつて無鑑査連中である。今度から無鑑査の出品は隔年に分けられてゐるわけだがそれでも尙且つあの通りの有様である。癌といふものは少しあつても結局致命的である。切開するに限る。

あの會場から厚顔な無鑑査の作品を取拂つたらどんなに見よくなるかわからない。癌は既にいはゆる「臭いもの身しうず」になつて了つてゐるのである。遠慮なんかしつこはしない。だから是非ともどうにか始末しなければならぬ。文展としてはもう幾度かの切開の時期を逸して來てゐる。

さて先づ審査員の作品から概評を始めさせて貰ふ。第三室、足立源一郎の「初夏の八甲田山」、足立君の官能はもう全く萎縮して了つてゐるから評なし。小磯良平の「齊唱」、小磯君の作品としては或は佳作に屬するものかも知れないが私にはちつとも興味が無い。ドガの或時期のものを追つてゐるやうな趣味はいゝとして寫實が如何にも通り一遍で銳いところがちつとも無い。丸で機械的である。

小磯君は一體何處に藝術的感興を有つてゐるのだ。唯同じやうな顔並べてひと通りに寫生してゐるだけぢやないか。手に持つてゐる紙にさへ感興が感じられるやうな繪を描いて貰ひ度いものである。背景などは胡麻化しものである。とび出して來てゐるさくつて仕様が無い。下部もいゝ加減なものである。

寫實なら寫實で藝術的な感興を有つてやつて貰ひ度い。寫眞見たいな機械的な寫實で然も胡麻化しのある通俗なのは眞平である。

足立君と小磯君の間に中澤弘光、中村不折兩會員の力作がある。中澤老は尙多少昔日の官能の餘蘊を止めてゐるが時代の藝術的教養の隔絶を如何せん。中村老に至つては元來卑俗だつた官能が老衰枯朽して全く如何なる描寫の用をも爲さなくなつてしまつてゐる。もう油繪は描かない方がいゝ。足立君の繪なども稍これに近くなつてゐるのは早老過ぎる。

齋藤與里の「山村朝色」、表題のごとく朝色の空は美しいが山から下は甘過ぎて淺薄だつた。子供の「エホン」を飾るべし。

山下新太郎の「少女坐像」、益々年寄らしい細かさを加へて來た。陰影の美しさが全く無くなつて了つたのはこれも官能の潤滑を告げてゐるのである。藤田嗣治の「少女」は流石にフランス風の味を有つてゐるが藤田は何處？といひたい作である。小山敬三の「中國風景」は眞面目な工夫があつて兒島善三郎のやうな間に合せ物ではないが工夫不足。近景の明るい松の葉も粗雑過ぎるし、夫から一足飛びに中景の横引きの葉描きに移るのは安易過ぎる。そのために明るい松葉に残した畫布が效無くして寧ろ有害な破調を作つてゐる。

青山義雄の「海邊の夏」は退屈。青山

君何ぞ小成に安んずることの久しきや。マイヨー時代の雄心を振起すべし。辻永の顔は中味を壓して立派だが結果は日本木工の不能を示してあはれである。繪は評なし。

會員石井柏亭の「朝陽城外」無造作過ぎる。土色殊に單調。會員南薫造の「月」筆は強ばり色は濁つて昔日の情操跡方もなし。木下孝則の「N嬢像」現代味ある通俗畫。背景は例のごとく浮いてゐるが同君最近の佳作に相違ない。私は以前はもつと畫格の高いものを同君に期待してゐただけれども一と頃のソルンめいた繪から遂にこんなことになつて了つたのは残念である。

尤も人は生來持つてゐないものを出すことは出来ないのだから是非も無い。然し今度の素直で末技の氣取りに拘泥してゐる小磯君などより遙かに氣持がいい。長谷川昇、會員有島生馬共に評無し。

中村研一の「坐像」は同君近來の佳作、小幅で十分に描いてゐる。いつものやうにがさつなところが無くつてすつとよろし。但し背景は不必要にうるさく右下の丸椅子は粗略で弱い。あゝなつて來ると人體描寫の密度の不足が目立つて來る。兩乳や腹部の略寫ももつと考へてやらなければならぬ。黒を基本とするのもいいが、夫には一通りの黒でないことが肝要であらう。

審査員の作品はこの外第四、第十の兩

室にもある。奥瀬英三の「山村麗日」は奥行なく一面の灰紫色が淺く穢い。花の描寫拙劣。こゝらで一考しないといふ萎靡沈滞して了ふであらう。寺内萬治郎の「婦人像」卑俗感興なし。山本鼎の「霧の湖畔」山本君の佳作。あゝ、いふ淺い觀照で濟ませるならばあんなものであらう。左端の柳の木から釣人までの距離は表現不足。中川一政の「新劇女優」無理にも一興あらしめようといふ繪である。追感なし。

無鑑査は癌だと言つてもそれは専ら舊來の大多數の無鑑査群を指していゝので、無鑑査の中にも少數の生氣ある畫家が介在してゐることもろんである。宮坂勝の「路傍群像」は例によつて單なる下繪に過ぎない。私はまだ同君の下繪以上ものを見たことがない。久保守の「石庭」は救ふ可らざる作。恩地孝四郎の「切通坂」(版畫)は右半面の粗雑なりしため失敗。

近藤光紀の「少女像」、畫品凡なれども感興の動いて居るところを探るべし。池邊鈞の「鳥の女」、同君の佳作。唯桶はもつと簡潔に行きたかつた。生まなかの丸味があつて人物と合はない。小早川篤四郎の「秦准涼風」、人物の描寫不足ながら同君の佳作であらう。

特選は總花式で佳品少し。文展が各派綜合を主義として捨てない以上餘儀ない結果であらう。特選の數をもつと減じ度いものである。中村琢二の「女集團」あの大膽には描寫力大に不足。遠はかな

作品である。僅に新鮮味を探るべし。渡邊武夫の「老圖書館長」、力作。色にも素描にも強調無く生氣を缺くを憾みとす。特選の首席とすべし。喜多村知の「仁王像」古色に隠る。南政善の「霜蟹」穢濁暗晦牢獄の如し。惡趣味。木下克巳の「夏の夜」面白くも美しくもなし。

青木達彌の「薄」若黒い山色と枯色との單純なる諧調はあれども退屈なり。薄とは感じ難し。田代順七の「九州の山」に類するもの。その他の特選ならびに岡田賞は無用。特選ならざるものに特選中のものより興味あるもの無きしも非ざれども特に揚げて云々する程でもない。

(兒島喜久雄)

〔第三部〕讀賣—文展の彫刻を一番から二〇七番まで丁寧に見たのち、慨然として心に湧き起つた想念は、「これではならぬ」といふ事であつた。制作意慾にもつと藝術的積極性を持たねばならぬと第一に思つた。

この會場の彫刻全體から受ける感じは、外から寒く固まりかけてゐて、内から熱く充ち溢れてゐない。今日のやうな精神昂揚の時代に、これでは何だか逆のやうな氣がした。若しこの會場から受ける感じだけが日本彫刻の全部であると假定したら、日本彫刻は今日の生きてゐるわれわれ民族の成長感、内壓感を十分代表してゐないといはねばならぬ。そのわけを技術的方面から述べてみよう。

總體に彫刻の具體的表現への探求意慾

美術展覽會 (十月)

が足りない。具體的といふのは、彫刻を或る形態の説明に終らせずに、その彫刻の彫刻的表現の具體的緻密性獲得の方向を指すのである。人體ならばそれが人體であるといふ説明だけでなしに、その人體が具備する彫刻的おもしろさともいふべきものを的確に、緻密に、しかも内から溢れるやうに表現する意慾の強さが欲しいのである。その上に日に新たに進む意慾が欲しいのである。それが總體に不足してゐる感じをうけた。

彫刻の意義は人體を人體らしく作り、情景を情景らしく表現する程度のところには斷じて存在しない。もつと深い彫刻美の、のつびきならぬ、みつちりした有機的つながりを主題と表現との間に持つ特質の中にある。この突き進み、創り生む意慾が彫刻に張りのある、充溢した、湧き上る感じを賦與するものとなる。それがどうも缺けてゐる。

出品の中には例へば肉づけからその動勢まで、ロダン風の、或はブルデル風の追及で出来てゐるものもあつて、中にはオリムピックに於けるコルベの彫刻の模寫さへあつて、その苦心には敬意を表したいが、かういふ主題と表現のつかみ方が既にわれわれ今日の魂には十分訴へて來ない。ロダンやブルデルの諸形態はあの當時の社會意識の底に流れる暗流を微妙に把握してゐて、いきいきとわれわれに迫るのであるが、その形骸を今日隔世の感のある日本で再生してみたとく

意味がない。ロダンの女體の懊惱をわれわれが今日繰返すいはれない。ブルデルの嗜癖であるあの特色ある面貌のやうなものをわれわれが今日日本で作つたところではやうがない。ブルデルの髪や衣裳はフランスのモンテオパンから生れた一つの氣質であつて、それをわれわれの氣質が鵜呑みに出来る筈がない。

日本彫刻は今日かういふ弛緩狀態から敢然と立上るべきだ。もつと彫刻そのものについて切實な意慾を逞しくすべきだ。浮彫なら浮彫の嚴格な技法を持て。木彫は博多人形になるべからず、其他各自自己の殻に妙に安住してゐるこの狀態を速かに革めなければ、どうかすると現代日本彫刻は機能的に頓死する。(高村光太郎)

報知—繪畫殊に油繪の方面では明治年代以後迂餘曲折はあつたにしても、それなりに何か新しい展開を折々に見せて來たものだが、彫塑の方は今日に至るまで舊態依然、十年一日の如き運歩を以て停滞してゐるのはどうしたことだらうか。それにはそれだけの理由があるに違ひない。先づ第一に彫刻といふ立體的構成の裡に伏在する技術上のむづかしさが思ふまゝに彫技を進捗させないこともあらうし、またそれにもまして物體の立體的觀照とか量的把握とかいふ純粹に彫刻的な課題に對する習練が薄弱なため制作する作家も、また鑑賞する側のものも造形的要求を持たずいつまでも因習的手法に甘

んじてゐるからであらう。しかしこれ等はまだ藝術の範圍内の問題として恕すべきものであるとしても、最もいけないことは、今日の彫刻界の在り方である。こゝでは甚だしい封建的因習が若い作家の純心な努力を埋没させる狹隘な袋路が入り込んでゐる。藝術的視野が一向與へられずに作家はむしろ繁雜な世俗的配慮に勞れるといふ狀態である。このまゝでは彫刻界の成長も覺束ない始末である。

文展にしても四、五の主流が多數の作品を鼓べたもの、本格的に彫刻と取組んでまともに立體構成に骨身をやつす作家は寥々たるものである。錚々たる大家にしてすが、造形の眞意を顧みようとせず區々たる指先の手業を見せるに終つてゐる。ひどくなると繪畫的表現と彫刻的手法とを取り違へて「彫刻する」ことを忘れ去つてゐる。多くの作品に共通してゐる造形的要求の稀薄さが最も反省されなければならぬ。即急に仕上げの效果のみを求める結果單なる工藝的手法の過程を示すに止り彫刻體としての充實がないのである。人物の首にしてもたとひ眼鼻が磨滅しても嚴然と彫刻的體質が充滿してゐれば千年の後でも立派な首としての壓力を持ち得るものであるが、こゝに見る多くの作品は表皮の細工を剥げば何等の體質を残さない。従つて小さく硬く縮んで、空間の廣がりにて伸びて行かうといふ力なぞは一向に見えない。

朝倉文夫「再起の跡」、小倉右一郎「白

壁の家附邊の戰闘」いづれも作因を時局に仰いでゐるが、觀照にも構成にも何等の根元的追求がなく、微弱な表現に終つてゐる。山崎朝雲「建國」も平易な手業でまじめな造形意志がある譯ではない。これ等諸大家の永年の技巧的收獲がかういふ方向に依然沈澱してゐるといふことは慎重に反省されねばなるまい。かういふ中にあつて藤井浩祐「腰かけた裸婦」は格段の相違である。こゝでは明確な造形意志が細かい神經を以て人體の構成を仕上げてゐる。多少硬くなつたのが難だが、行届いた感覺が横溢してゐる。加藤顯清「コタンのアイヌ」、清水多嘉示「投擲」、建昌覺造「獸」等は、まだ不足な部分はあるが、何れも熱意のある制作である。

〔富永惣一〕

〔第四部〕東日—文展本年度の作品は概して低調凡作、しかし陶磁のなかでも比較的佳品として觀るべきものは小出塔次郎の悠久で牛の壁面裝飾パネルである。勿論九谷研究から出發したものであらうが地色は稍寒いけれども佳作のうちに數へることが出來、富本憲吉の飾函はよろしい。清水正太郎の陶器、紅彩文壺を見ては氏の近來の進境を窺ふべく、鑄造では豊田勝秋の「花器」にその構成美をとるべく、山室百世の進駐置物は天馬に爆撃機を寄せたものであらうが、可なり力強くは出來てゐる。

染色、綴、刺繡の部では稻垣稔次郎の菩薩譜染屏風をとりた。東亞共榮園内

の風物を巧みに組合せたもの、佳作の一つといへよう。矢部連光の松竹梅、染屏風もこの種のものだ。廣川松五郎には染色松藤友禪二曲屏風がある。先づ第一に友禪の名前は除いたがよからう。構圖は兎に角、技術的に研究の要があり、木村和一の和染、梅之屏風も調子が低い。山鹿清華の織簾、舞姫屏風はタイ國への輸出物程度であり、岸本景春の水簾譜、刺繡屏風は結局竹屋町を荒つてく抜つたに過ぎないもので構圖も拙い。中村鵬生の手織錦萬葉草氈は勞作だが、實用價値の少ないものだ。

木工には大島五雲の木彫草花紋手許簞笥がある。船簞笥を聯想するほどのもので、草花紋は至つて月並、彫りの技術は拙劣だ。染色の無鑑査、大坪重周の家具セツトがある。クツションとセンターは兎に角、家具は家具屋の仕事。問題になる作品で、善例か惡例かを將來に残した。那智瀧子のセメントを主材とした衝立。新資材を利用したつもりであらうが意味を持たない。この種の構圖は先年にも出品したことがあつて、すこしも新しい構成とは思へぬ。

漆の部は大體平凡、松田權六の漆器簞の卓は技術を弄んでゐるものであり、吉田源十郎の海、漆皮衝立がある。君は漆皮といふものをこの作品のやうに扱ふ限りは材料を別途に考へてゐるものであり、君のみではなく魚貝圖の多きに疲れた吾人は本品によつて終止符を打ちた

い。山崎覺太郎の漆、休翼屏風。技術の上では問題ないとして、肝腎の覺に難點を持つてゐる。實物に當つての研究が必要であると考へる。(大隅爲三)

撤入 入選 無鑑査 陳列數

一部 一九四一三五 六七 二〇二
二部 一六二〇二三 一〇〇 三三〇
三部 二八五一七 九〇 二〇七
四部 一〇七三一七〇 六三 二三三
〔特選〕(第一部)江崎孝平、橋田永芳、寺島紫明、向井久万(第二部)青木達彌、喜多村知、木下克己、胡桃澤源人、中村琢二、林鶴雄、南政善、渡邊武夫(第三部)兒島正典、佐藤仁宗、菅沼五郎、建昌覺造、松浦良、水船六洲、利田金剛、渡邊徹(第四部)伊藤宜宏、稻垣稔次郎、鴨幸太郎、河合秀甫、木村庄太郎、北出塔次郎、鈴木清、高橋節郎、谷澤不二松、森野嘉光、山室百世、芳武茂介、渡邊春男

〔政府買上〕(第一部)「晩秋」松林桂月「塙保己一」島田墨仙(第二部)「靜思」中澤弘光「マンドリンを持つ女」鬼頭鍋三郎(第三部)「コタンのアイヌ」加藤顯清、「立てる男」進藤武松(第四部)「初秋屏風」渡邊春男、「漆木瓜の圖屏風」高橋節郎、「鳳鈕香爐」香取秀貞、「黃銅壺」北原千鹿
〔黒田子爵記念美術獎勵資金委員會買上〕「小女像」近藤光紀

出品目録 (帝國藝術院會員)

▲審査員(無鑑査)

第一部

出雲の村	河原	悦人	現代婦女圖	▲伊東	深水
黃風	濱田	泰兒	造像拆伏	今野	可啓
室戸岬澤	宏毅	丹羽阿樹子	精靈の花	西山	英雄
夏野	山田	申吾	火山の夕	良坂	鈴木
露れ間立石	春美	日本書紀泉津比	深澤南歌	橋田	永芳
山脈(福田豐四郎)	元子	暮色	濱崎左斐子	春告魚田中	針水
蕉菜島の朝	久万	夕櫻	磯田又一郎	咆嘯	西村
男兒生る	向井	佛法守護	加藤	恒久	武雄
熱河の丘	藤田	備後表家本	武雄	細雨流水	▲白倉
六月の頃	隆治	臨喜(常岡)	文龜	林泉(宇田)	萩郎
火牛	奥田	晚秋(松林)	桂月	滋雨(案本)	一洋
山頭の池	元宋	武人武藏	▲野田	九浦	馬の湯
池田勝之助	須賀川の牡丹	○結城	素明	塙保己一	▲島田
中田	草春	三月堂秋葉	長生	カナリヤ	今尾津屋子
嬰粟	山田	朝露	松久	休光	樂人
群羊	池田	伊東	伊東	滿	
南朝の井	尙志				
風景	須田				
翠巒	齋内				
母子像	一秀				
瀧々しき大利を	隆志				
とめ	隆志				
小車	岩淵				
岩庭	吉岡				
山羊	笠原				

山麓春來る 愛撫狗兒 入江 丈子 臺灣の花 陳 進 共立巖多田 院大 山の朝宮澤 鐵夫 下田港
 綠蔭 村山三千男 春雪△松本 姿水 實る秋 △堀井 香坡 露店 鄭末 朝 黃昏 山田 武嗣 加茂茄子 房野 德夫
 豐穰 大日三世子 降る雪木村 廣吉 晴れたる空 △穴山 勝堂 彩雪 小松 均 野駝 市原 壽一 太閤明を怒る 父とゴムの木
 早秋△上村 松篁 鱗角斜照 △水田 硯山 犬陣 天昌 芳登 少年 井上 通世 僧正△石渡 風古 信長公之裝甲艦 夕月 小坂 勝人 神樂奏人 武藤 嘉門 猿芝居堀内 東正 岩礁 久本 春雄 谷間の秋興 阪本 音彦 女工員五十嵐 幹 綠蔭嬉戲 遠藤 金坪 甲冑頭谷野 圭一 夏日小集 八幡 白帆 天草風景 海野 旭世 廣澤夕迫る 谷口 英雄 多治見國長 林 雲鳳 ずるき冬木 遊鹿 花村 晃觀 第二部 コスチューム 中村 全 女集まる 中村 琢二 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 蓮 ▲望月 春江 九方阜 翠雲 山下 竹齋 午後 荻田 東嶺 隊 △太田 天洋 神樂奏人 武藤 嘉門 猿芝居堀内 東正 岩礁 久本 春雄 谷間の秋興 阪本 音彦 女工員五十嵐 幹 綠蔭嬉戲 遠藤 金坪 甲冑頭谷野 圭一 夏日小集 八幡 白帆 天草風景 海野 旭世 廣澤夕迫る 谷口 英雄 多治見國長 林 雲鳳 ずるき冬木 遊鹿 花村 晃觀 第二部 コスチューム 中村 全 女集まる 中村 琢二 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 喜農 矢野 香蘭 夕暮○上村 松園 彩葉 藤谷 雅春 午後 荻田 東嶺 隊 △太田 天洋 神樂奏人 武藤 嘉門 猿芝居堀内 東正 岩礁 久本 春雄 谷間の秋興 阪本 音彦 女工員五十嵐 幹 綠蔭嬉戲 遠藤 金坪 甲冑頭谷野 圭一 夏日小集 八幡 白帆 天草風景 海野 旭世 廣澤夕迫る 谷口 英雄 多治見國長 林 雲鳳 ずるき冬木 遊鹿 花村 晃觀 第二部 コスチューム 中村 全 女集まる 中村 琢二 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 水邊△吉田 秋光 雄飛△川崎 小虎 時雨△林泉 山郷將雨 △福田 秋濤 赤裝女 △廣島 晃市 八幡岬田岡 春徑 長者婦女之圖 △大木 豐平 樹海龍宮 伊藤 響浦 水光 多田 敬一 竹信 川村 憲邦 之許の御楯 △鴨下 晃湖 清曉の靈峰 △山元 櫻月 玄豹△勝田 蕉琴 山波 山口 實 月明△德田 隣齋 かひこ場 前原豐三郎 林家 許 林 神津島的女 門井 掬水 浴光 戸田 北邊 薄暮 長谷川路可 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 南天 渡邊三重子 芽吹く頃 舟山 三朗 遊鹿 神谷 光徑 赤裝女 △廣島 晃市 八幡岬田岡 春徑 長者婦女之圖 △大木 豐平 樹海龍宮 伊藤 響浦 水光 多田 敬一 竹信 川村 憲邦 之許の御楯 △鴨下 晃湖 清曉の靈峰 △山元 櫻月 玄豹△勝田 蕉琴 山波 山口 實 月明△德田 隣齋 かひこ場 前原豐三郎 林家 許 林 神津島的女 門井 掬水 浴光 戸田 北邊 薄暮 長谷川路可 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 砂丘 高村 正之 白川の朝 樋口富麻呂 築の鮎 △山本 紅雲 矢おもて 小堀 安雄 長者婦女之圖 △大木 豐平 樹海龍宮 伊藤 響浦 水光 多田 敬一 竹信 川村 憲邦 之許の御楯 △鴨下 晃湖 清曉の靈峰 △山元 櫻月 玄豹△勝田 蕉琴 山波 山口 實 月明△德田 隣齋 かひこ場 前原豐三郎 林家 許 林 神津島的女 門井 掬水 浴光 戸田 北邊 薄暮 長谷川路可 ばせうの窓 静思○中澤 弘光
 金魚すくひ 堂本 亮 芍藥 望月 定夫 夏日 森 正元 つはもの達 森戸 果香 靈夢△荻生 天泉 片時雨 △池上 秀畝 董形八幡 △服部 有恒 秒秋△安田 半圓 聽講 高田 那美 風 川崎 雅 水車 戸島 光雄 裁縫 太尾 美夫 啊り 川邊 華堂 白砂青松 △磯部 草丘 白藤△榎本千花俊 淨晨 武藤 章 花菖蒲濱田 觀 筑立 濱倉 清光
 野田村所見 外山 德松 芍藥 望月 定夫 夏日 森 正元 つはもの達 森戸 果香 靈夢△荻生 天泉 片時雨 △池上 秀畝 董形八幡 △服部 有恒 秒秋△安田 半圓 聽講 高田 那美 風 川崎 雅 水車 戸島 光雄 裁縫 太尾 美夫 啊り 川邊 華堂 白砂青松 △磯部 草丘 白藤△榎本千花俊 淨晨 武藤 章 花菖蒲濱田 觀 筑立 濱倉 清光
 高原 池田 輝治 市の日妹背 平三 黑部の奥 △野添 平米 爽晨△森 守明 珊瑚礁の渚 村松 乙彦 石切の丘 前田 賢 小憩 朝倉 攝 植輪 鈴木由太郎 秋△加藤 榮三 奉苑△永田 春水 靜と山法師 北村 明道 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 波濤 藤田 復生 秋△加藤 榮三 奉苑△永田 春水 靜と山法師 北村 明道 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 海の子河瀬 恭之 奉苑△永田 春水 靜と山法師 北村 明道 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 鷺山 古市麻佐緒 靜と山法師 北村 明道 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 蓮月△佐藤 光華 北村 明道 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 松 △畠山 錦成 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 紅蓮△板倉 星光 東大寺南大門 △山ノ内信一 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 放牧 山下 薰 白夜 大藪 春篁 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 苔寺 下川 苔地 峽雨△赤松 雲嶺 映立 濱倉 清光
 干潮 森口 百餘 小屋の前 映立 濱倉 清光

仙果○中村 不析	戸津 文雄	△熊岡 美彦	大和 義男	故郷雨季	鐘樓の朝(水彩)	(エッチング)	婦人半像
齊唱▲小磯 良平	婦人像	△野口 謙藏	若き男	湖南の春	△長坂 春雄	武藤 完一	保田 善博
山村朝色	▲寺内萬治郎	豊穰△中村 善策	須田 剋太	矢野 雄藏	△前田藤四郎	水天夢麗太平洋	窓際△河井 清一
▲齋藤 與里	雨の上高地	山、水、空	紀州の濱	松林小徑	筑面の溪流	(テムベラ)	雨後 原本 虎雄
少女坐像	△北島 朝一	△森脇 忠	矢野 雄藏	松林小徑	伊藤 立己	△平澤 大暉	射手△池田治三郎
○山下新太郎	憩 △光安 浩行	琉球△川端彌之助	松林小徑	オホクワサン	静物 金 在 善	(水彩)野澤潤次郎	赤岩外科
少女○藤田 嗣治	高原の夏	草と子供	佐伯 久	△關口 隆嗣	岩の上中田 信	小梨咲く頃(水彩)	△片岡 銀藏
中國風景	△大澤 海藏	外誌より得たる	久	少憩 野村 隆雄	妹の像中川郷一郎	△宮部 進	農夫の像
▲小山 敬三	モティフ	石庭△久保 守	山の幸	△關口 隆嗣	麗日 足代 義郎	ろくろの窓(版畫)	收獲△土田 文雄
海邊の夏	△有岡 一郎	秋の静物	△清原重以知	集荷場の女達	花二題(版畫)	△織田 一磨	松 曾根 徹
▲青山 義雄	番兵のゐる廣場	水色のスエーター	藥水を汲む	夏の夜木下 克己	山(版畫)	畦地梅太郎	△牧野 司郎
華麗上の静物	川端 實	鶴見 守雄	△岩崎 勝平	工作 熊野 禮夫	向日葵と玉蜀黍	秋苑 胡桃澤源人	淡水風景
▲辻 永	立秋△遠山 清	静物 久門 元夫	夏井川山川 忠義	暮の港田邊 謙輔	(版畫)	友達 大嶋 士一	△多々羅義雄
朝陽城外	盛夏静物	子供達(於上海)	眞夏の庭	信濃路の秋(水彩)	山口 源	夏景名城(版畫)	大漁の日
○石井 柏亭	△渡邊 浩三	松尾 正己	△田中 繁吉	新羅佛(毘盧舍)	静物(版畫)	橋本 興家	△跡見 泰
月 ○南 薰造	少憩 伊藤 悌三	郊外の庭	R嬢像	△山田 新一	那佛(水彩)	切通坂(版畫)	午後 山村 愿定
N嬢像	奈良博物館	飯島 一次	△山田 新一	青布卓上	奥信濃路(水彩)	山道(版畫)	△恩地孝四郎
湖畔朝晴	西瓜畑の朝	登山具	青布卓上	小川 智	河ぞひの村(水彩)	早春(版畫)	六月の日
▲木下 孝則	高宮 一榮	窓邊 小貫 綾子	早春 斧山萬次郎	少女像妹尾 壽信	△石川欽一郎	山道(版畫)	パイプを持つ男
裸婦▲長谷川 昇	山頂の巖	静物 中谷 泰	老樂師土佐林豊夫	新秋 黒田 頼綱	初秋の山(水彩)	早春(版畫)	△笹鹿 彪
妻の肖像	白石 隆一	庭にて庄司 榮吉	麓の朝大谷 房吉	猫を抱く小孩	風景(水彩)	加藤 弘之	不空絹索頌・摩訶般若波羅密多
座像▲中村 研一	仁王像喜多村 知	△高野三三男	山肌 清原 武則	喇叭を配す	中田林五郎	心經版畫鏡(版畫)	鏡と少女
山羊と子供	池畔雨日	山肌 清原 武則	喇叭を配す	鏡 杉村 惇	北洋の黎明	北満の農夫たち	城隍祭の娘
市川 勉	坂田 虎一	山肌 清原 武則	喇叭を配す	鏡 杉村 惇	北洋の黎明	北満の農夫たち	城隍祭の娘
池畔雨日	坂田 虎一	山肌 清原 武則	喇叭を配す	鏡 杉村 惇	北洋の黎明	北満の農夫たち	城隍祭の娘
山村麗日	▲奥瀬 英三	初夏の果物	△松郷 巽	路傍群像	△宮坂 勝	武生風景	△辻 愛造
マンドリンを持	つ女△鬼頭鍋三郎	白樺林森 桂一	窓から来る陽	本莊 赴	水邊雨意	山の娘	

塔 △二見 利節	急降下爆撃	江幡 潤	水碓 樋口 一郎	甲斐胸ヶ岳春	端座 瀧川 太郎	△行田 泰英	婦 菅沼 五郎	胸像 森本 清水
M氏肖像	△吉田 博	坐像 和田 清	唐招提寺 入江 令一	△山下 品茂	休息 刑部 人	手榴彈羽田 千年	投擲 △清水多嘉示	綠陰 △奥山 泰堂
△橋本 邦助	テラスにて	石狩川 西村 計雄	黒松の林 近藤 洋二	乙女 △坪井 徹夫	男の肖像 勝間田 武夫	秋 横山 五郎	女 今村 輝久晃	使命を擔ふ者 上田 蕉
新劇女優	静物 鈴木 俊雄	茶の間の母 藤岡俊一郎	午下りの庭 千代崎保雄	朝の牧場 △梶原 貫五	御願所安次嶺金正	海を護る男 中川 爲延	振袖 北村 治福	女性 相曾秀之助 龍興
▲中川 一政	山村 武男	静物 佐野 猛	厨にて白井きよ子	子と母 西川 高次	妹の肖像 鈴木 満	空 松本 庄吉	裸婦 矢崎 虎夫	池上先生像 △宮本 重良
朝 △山喜多二郎 太	馬 花野 三雄	静物 依田 泰八	紙 依田 貞子	草の上 松居 爲信	婦人像 田中 爲信	阿修羅王 奥山 一正	三ノ塔 松山 一正	鶏と女 △荒居 徳亮
生きてゐる街	裏の木戸 高野 富吉	東北風景 小泉 富司	流れに戀ふ 家永 三郎	或る日の傷兵 △安田 稔	國土 橋尾 整八	白挽き 伴 庄兵衛	千九百四十一年 △油谷 達	牧場の初夏 椿 悦三
水谷ひろ子	奥日光 △金子 保	男鹿の漁村 山下 忠平	鹽鮭 瀧江 勘二	線陰 山本 道乗	秋景 西村 静子	ツクツクポーシ	の鳴く頃 本間 博	漁村の雨後 日下昌三郎
草原静物	大塚平八郎	冬の子供 浩藏	糸まき 南大路 一	鶏舎 後藤 愛彦	沖繩風景	せんだんの花咲	く頃 △松原 益太	木蔭 大古田 艶子
青衣婦人	瀬戸千代三	或る男根津 莊一	地下鐵 高橋 正人	魚港の午後 小柳秀太郎	甲賀ノ濱	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
少年 富樫 正雄	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
冬嵐 池上 恒春	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
春陽圖 坂戸 庄衛	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
梅林 佐野 久	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
眞葛 柳瀬 彌生	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
薄 青木 達彌	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
厨 金子 徳衛	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
甲賀ノ濱	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
布を持つ女	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
寛彩 △安達 眞太郎	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
谷澤 一郎	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
伊勢 △安達 眞太郎	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
九州の山	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
田代 順七	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
巖 △服部 亮英	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
初秋 松岡 正直	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
母と娘 河野 通暢	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
忙中の食事	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
川邊 外治	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
紫衣 須田 壽	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎
馬排する人々	厨の一隅 幸市	志村 一男	着物の女 中村 萬平	梅林 佐野 久	眞葛 柳瀬 彌生	薄 青木 達彌	厨 金子 徳衛	伊勢 △安達 眞太郎

△梁川 剛一	坐像△國方 林三	葵上△畑 正吉	鈴木 國策	菊地教士の體	壺 鴨 幸太郎	紫陽花文象候花	樂 喜慶
一佛徒の頭像	鼓 後藤 光行	増田先生像	海女 横山 文夫	太田 良平	茄子之圖大鉢	瓶 小川 英風	四方形白瓷牡丹
△中島 東洋	梅里先生	△杉本 宗一	爽かな生	水邊 澁谷 田海	鈴木 清	青銅水盤	文花瓶
裸女△石原 哉	△森山 朝光	開ひ 鈴木 仁亮	△長澤 幸夫	タイブ練習	漆喜鵲之圖雙色	△長野 坪志	△河村 蜻山
まごころ	六兵衛さん	創世 須賀 東三	空の殉難者に捧	△三木 凱歌	紙笥△磯井 如眞	漆器四季草花欄	鶯汀手匣
潮田 皓島	國領 辰彌	女性△清水三三三	眞海徳太郎	女立像長谷川正雄	鑄銅皿中村 薫一	△福澤 健一	飛鳥置物
△宮地 寅彦	青葉の笛?	第六動(角力)の型	龍蟠る金保 正智	地海を旋る	モザイク飾 板谷 梅樹	野薔薇之圖象嵌	芳武 茂介
山麓△大島 駒藏	(敦盛の菩提なる須磨寺を弔ふ蓮生法師)	丘 中島 快彦	海 大立日琢郎	△田村 審火	△板谷 梅樹	花瓶△近藤 悠三	清宵蟬蛸
山麓△大島 駒藏	△太田 重範	地軸を据る	陽利 岡 正敏	撃 尾形喜代治	青銅二重挿花瓶	抑條游禽漆器文	平蜘蛛
コタンのアイヌ	鎮(八紘一字)	△星野 健一	女立像第二	立てる女	戸谷純之助	機 △本間 薺華	△山脇 洋二
△加藤 顯清	靴下を穿く	青年△片山 義郎	習作 清水禮四郎	待機 一、神器	鑄銅花瓶	櫛目文花瓶	△根来 實三
新秋 堤 達男	△安 一	立女 岡本 庄三	習作 清水禮四郎	一、神器	伊藤 宜宏	清水 祥次	炭汁△飯塚琅玕齋
故中村泰君像(習作)	楯澤 伸行	解放 今域 國忠	習作 清水禮四郎	日月 一、神器	變壺形生果紋花瓶	瓶 梶谷 竹塘	萌春爐屏
建國△山崎 朝雲	母子 久原 濤子	姉妹 本田 徳義	習作 清水禮四郎	△大内 青岡	潮風晴る漆二曲	屏風△島野 三秋	鳥文花瓶
以露葉	たばこ松浦 良	大地 渡邊 玆二	習作 清水禮四郎	思ひ△中野 昂	花籃 坂口宗雲齋	花籃 坂口宗雲齋	須賀 松園
△長谷川 榮作	胸像 大屋 義昌	牝牛△岩田 千虎	習作 清水禮四郎	銚後の老人	悠久(牛)壁面 裝飾パネル	窓變磁花瓶	進駐置物
澄心△橋本 高昇	望洋 水野 徳二	途上△圓鋸 勝二	習作 清水禮四郎	△山内 倉藏	北出塔次郎	○板谷 波山	山室 百世
立てる男	鐵路を守る人	座せる女	習作 清水禮四郎	知智乃實	北邊夜猫子鑄金	鳳鈕香鑑	夏草花文飾壺
△進藤 武松	靜 榎山 三穀	△安藤 達亥	習作 清水禮四郎	△上條 俊介	北邊夜猫子鑄金	○香取 秀眞	齋藤 銈一
希望 兒島 正典	夕映 山下 寛治	△倉澤 興世	習作 清水禮四郎	安南 鈴木 達	北邊夜猫子鑄金	漆器鴛の卓	青銅耳付水盤
みのり矢野 秀徳	雄視△太田 南海	男之像	習作 清水禮四郎	明星△西田 明史	北邊夜猫子鑄金	△松田 權六	彫金手長海老皿
ヴィナス	後庭探果	△分都 順治	習作 清水禮四郎	銚後の力	芍薬蒔繪手箱	歌川 黎明	△介川 芳秀
△安永 良徳	佐藤 助雄	田岡△古川 順三	習作 清水禮四郎	△小川 大系	漆器長手御簾塗	青磁花瓶	魚金具中村 泰利
腰かけた裸婦	黒潮 瀧川 美一	感 △野々村 一男	習作 清水禮四郎	漁夫像	手宮 奥澤 鮎練	○清水六兵衛	さんしよ金具
青年胸像	蔵王忿怒	學童に贈る銀鍔	習作 清水禮四郎	初秋屏風	アルミニウム	善隣譜染屏風	有田 利章
△石井 鶴三	清田 清也	石橋 古鈴	習作 清水禮四郎	漆木瓜の圖屏風	製蘆に波文様彫	篋刺繡屏風	蟬金具大木
△後藤 清一	厚生の輪	群像試作	習作 清水禮四郎	漆木瓜の圖屏風	金手宮後藤 學一	由井 康陽	西瓜文香合
座せる女	小倉 一利	△河内山賢祐	習作 清水禮四郎	高橋 節郎	菜之花圖大鉢	海漆皮衝立	△吉田源十郎
△建昌 大夢	尾白鷺	地軸△三國 慶一	習作 清水禮四郎	鑄銅花瓶	眞鍮果物皿	黒四方茶盤	三連魚耳花瓶
護り△熊谷幸太郎	△吉開伊喜藏	荷揚人夫 大村 清隆	習作 清水禮四郎	獅子文鍔金香爐	千秋萬歳蒔漆	樂吉左衛門	△山本 安曇
昭利十六年研究	さざれなみ	阿良志乎	習作 清水禮四郎	○清水 南山	繪手箱	油滴天目茶碗	松ノ圖彫金小屏
△安藤 照	坂手 讓	阿良志乎	習作 清水禮四郎		△梅澤 隆眞	田邊 武夫	風 金森 榮一
早春 山田 忠治			習作 清水禮四郎			赤釉茶盤	斜交文乾漆花瓶

田中 健智	ろり染屏風	細谷 好衛	染付蕪蘭圖花瓶	彩紅乾漆喰籠	萬里長城和染屏	あみ文花瓶	濱口 廣氏
梅月相思(平脫手筥)	佐野 孟	蝶文様花瓶	松本 佩山	中川 哲哉	八田 泰造	村井 瓶生	
△内藤 四郎	雲文陶花器	中村 秋塘	松竹梅染屏風	香華紋花瓶	横山 玉抱	湯紋手箱	硝子鉢
春秋の圖兩面小屏風 佐藤 尙現	彫金象嵌花器	保谷 美成	矢部 連兆	山澤 松篁	横山 玉抱	魚野 自醒	▲各務 鏞三
竹文模様の口釜	△三井 義夫	津島祭染色屏風	錫打込魚文花瓶	昆虫文小函	染色松藤友禪二曲屏風	鑄銅花瓶	空の音鳴置物
菅原 無大	南庭出現の菅公	楠田 撫泉	練上流線文花瓶	栗田 雪雄	△廣川松五郎	中谷 喜男	漆器平和
夜學釜	眞紙塑像置物	銀銅葉紋壺	宮永 友雄	百合手箱	曲屏風	鴉の衛立	打出孔雀塙置物
大西清石衛門	殘雪人形	△寺田 龍雄	鷹四分一置物	音丸 耕堂	木彫草花紋手許	池田 旺弘	織部木瓜文花瓶
霰釜 吹田平兵衛	落合彌壽世	唐金サハリ三味	松原 春男	若原 英正	簞笥 大島 五雲	青銅鳥置物	八田 龍昭
竹木瓦文撫肩釜	雄翔萬里	銅水指中川 淨益	硝子河豚置物	雙峰略駝	横山 一夢	清水 青巖	加藤 華仙
加藤忠三郎	石田來之助	神鹿硯箱	小畑 雅吉	久保駒太郎	榑漆棚多畑 宗哉	青銅洗北村 一朗	
蘆雁透手筥	青銅盛花器	△越田 尾山	鑄銅魚花器	七寶貽銀板草花	風車草蒔繪飾棚	杉花器小林 親光	
野口 景國	三好 弘	陶彫山羊	宮川 祿郎	會田 祐宣	工藤喜代志	蘭文透彫軸箱	
秋野駝驅香爐	福魚圖二枚折小	草加 春陽	陶友どち(仔馬)	花と實漆器手筥	豆莢之圖飾棚	龜倉 宇吉	
今大路長光	屏風△大下 雪香	竹編盛器	△小川 雄平	片山美智雄	藤岡 研齊	堆朱菓子鉢	
窓變小筥	晴秋平脫文硯箱	田邊竹雲齋	鑄銅花瓶	染付鐵繪花ノ圖	手織錦萬葉華麗	增田 敬象	
鈴木 青々	伊藤 隆光	御座の新人形	伊藤 忠雄	花瓶 岡本 爲治	京極子夜櫻書棚	中村 鵬生	
八仙花風呂先	春ノ水硝子吹込	ねぎの圖小屏風	小原千波	牛祭圖染色屏風	鈴木 貞路	彩漆盛器	
新敷 晃仙	水盤 宮代 健三	稻塚 芳郎	鑄銅伏香爐	野村 蝶二	衛立 那智 瀧子	唐銅鳥耳花瓶	
鑄銅ジラフ置物	岩わらび長方形	青銅蜻蛉紋花器	松沼 源吉	染色花園二枚屏	家具セツト	△山本 純民	
武藤 太朗	手宮 島田 春光	中村 義一	長方形蘭圖手箱	風△櫻井 霞堂	△大坪 重周	草彫漆箱	
木目込屏風	大鐵鉢原 三郎	玉蟲象嵌麻朱染	森 象堂	唐草紋宮	彫漆棉花様手箱	谷澤不二松	
横山 白汀	白銅鶴置物	鑄銅華箱	梶田 惠	梶田 惠	中村 大禾	向日葵日時計置物	
立葵模様の二枚折小屏風小森 克己	△磯崎 美亞	漆器秋苑書棚	直樹	黃銅豹置物	八井 孝二	鈴木 昇一	
菊菊花瓶	軍馬と銀翼・海	山崎 立山	布帛新秋譜蕪蘭	杉之圖和染二枚	乾漆花瓶	三井安蘇夫	
清流漆器小屏風	唐吳須釉彩瑞圓	三曲 山岸 堅二	瑞蓮染色二曲屏	みのり綴織壁掛	高木 敏子	紫紅窯花瓶	
シルシフロラム	文花瓶鈴木 黄哉	風 成竹登茂男	銅打出花瓶	溫室草花刺繡壁掛	宮下 善壽	猿置物岩田 良二	
のある綴織壁掛	装耳花瓶	井上 清美	井上 清美	掛 長谷川文平	掛 長谷川文平	花瓶 勝尾青龍洞	
和田 秋野	青銅花瓶	銀銅製鷹置物	△北原 三佳	銀銅製鷹置物	△北原 三佳	銀銅製鷹置物	
蕪蘭三曲屏風	△熊谷重太郎	銀銅製鷹置物	△熊谷重太郎	銀銅製鷹置物	△熊谷重太郎	銀銅製鷹置物	

陶器彩色六方形
飾箱 新開邦太郎
磁器丸形染赤繪
朝顔文飾皿
寺池 旬焄
青華水指
▲楠部 彌次
鐙銅花器
▲豐田 勝秋
秋の野手筥
△竹園 自耕
からたち二枚折
小屏風徳山 嘉明
白磁草花文花瓶
和田三千穂
漆短夜屏風
片岡 茂保
眞鍮花瓶
松原 南海
藥草文飾筥
河合 秀甫
梅花文陶箱
米澤 蘇峯
鶯紋姥口平釜
伊藤 鏝一
葡萄酒文手箱
金田 諒三
ながれ眞鍮花瓶
▲岡部 達男
鹽麩枇杷圖花瓶
森野 嘉光

漆器猿手筥
村山 久
朝顔夕顔圖風呂
先 竹林 鶴南
白銅水盤
西村 英夫
茶果蒔藁小屏風
岡田 章人
鐙銅花盛
木村庄太郎
漆研出手箱
△平館 倉
彩釉三蹄來圖花
瓶 河合榮之助
硝子鉢佐藤潤四郎
彫金花蝶文花器
▲二橋 美術
朱華文小宮
▲高井 白陽
翼のある花瓶
▲内藤 泰治
双馬手筥
中田 滿雄
水簾譜刺繡屏風
▲岸本 景春
和染梅之屏風
▲木村 和一
草ノ譜文様染色
四曲屏風
梶山 伸一

東京美術學校圖案部成績展示會 十八
日—二十一日 銀座・三越
和氣春光婦女風俗畫展(日) 十九日—
二十四日 大阪・阪急
前川千帆個展(日) 二十日—二十二日
銀座・養生堂
第十八回金城畫壇展(日・洋) 二十一
日—二十六日 金澤・大丸
大森光彦作陶展 二十一日—二十六日
大阪・三越
斗牛會第一回日本畫展 二十一日—二
十六日 大阪・大丸
小杉放庵個展(日) 二十二日—二十四
日 大阪・高島屋
美術創作家協會第五回展(洋・彫) 二
十二日—二十六日 名古屋・松坂屋
中村彝油繪遺作展 二十二日—二十六
日 日本橋・高島屋
東日—中村彝の遺作はすでにその一部
が青樹社で展示されてゐるが、これはま
たこれで點數も少く小品ながら一見の價
値はある。大正二年から十年にいたる作
品は殆んどセザンヌの影響の強いものだ
が、中では四年の「大島風景」八年の「河
崎氏肖像」十年の水彩「本と壺」が注目
すべく、特に「本と壺」は光彩を放つて
ゐる。

身につけた異色ある作家の初の發表展。
畫材を多く中國の細民生活に採り、なか
く「追眞力をもつた佳作、例へば算令
(流し易者) 拾煤核(石炭拾ひ) 乞婦、
流浪的小子などがある。素描の大切さを
改めて感じさせられる好展觀。
清瀨社第一回日本畫展 二十二日—二
十九日 上野・松坂屋
第十一回京都工藝美術展 二十三日—
二十六日 大禮記念京都美術館
乾坤社第三回展(日) 二十三日—二十
八日 大阪・松坂屋
福岡美術會第四回展(綜合) 二十三日
—二十九日 福岡・玉屋
山南會第二回展(日) 二十四日—二十
六日 大禮記念京都美術館
國彩會第二回展(日) 二十四日—二十
六日 大禮記念京都美術館
第一回出征軍人美術展(綜合) 二十五
日—三十一日 上野・松坂屋
新制作派彫刻作品展 二十五日—十一
月二日 大阪・天賞堂畫廊
西脇マヨリ作品展(洋) 二十六日
芝・東京美術俱樂部 小林信次郎主催
菅野圭介第二回洋畫展 二十六日—二
十九日 數寄屋橋・日動畫廊
東日—獨立の中堅として將來を期待さ
れてゐるこの作家の第二回展、伊豆の風
景や花を單純化して描いた一聯の作品に
は、一見粗雑のやうで繊細な神經がゆき
とどいてをり、「磯」二點も詩情豊かで
澄明な色感が觀る者の心を愉しませる。

第二十八回二科展(洋・彫) 二十六日
—十一月九日 大阪市立美術館
關龍夫、大山幸雄新作展(洋) 二十七
日—二十八日 銀座・紀伊國屋
庫田發近作個展(洋) 二十七日—三十
日 銀座・養生堂
平塚運一創作版畫新作展 二十七日—
三十一日 銀座・青樹社
鹿子木孟郎遺作滯歐小品畫展(洋) 二
十七日—三十一日 名古屋・後藤版畫店
杉本哲郎宗教畫展(日) 二十八日—三
十日 大阪・大丸
吉田登穀個展(日) 二十八日—三十一
日 銀座・三越
棟方志功第二回作品展(日・版) 二十
八日—十一月一日 日本橋・高島屋、
河合寛次郎新作陶器展 二十八日—十
一月一日 日本橋・高島屋
東日—河合寛次郎のやうに良心的で不
斷の努力を續ける作家はまことにすくな
い。氏の作品は形と釉彩に新しい研究が
あり、文様と形の相關的な効果をねらつ
て、どれにも落着いた感じを與へようと
してゐるところがよろしい。菱文の大皿
角筥扁壺には佳品がある。しかし三百點
といふ多數の作品中には辰砂のあまりに
きき過ぎ、稍品格を落してゐるものもな
いとはいへぬ。
中村貞以整春泥甕小品展(日) 二十八
日—十一月一日 神戸・大丸
正宗得三郎日本畫展 二十八日—十一
月二日 上野・松坂屋

新日本洋畫協會第八回展 十七日—十
九日 大禮記念京都美術館
六南洋展 十七日—十一月二日 日本
橋・三越

報知—二科會の者宿たるこの作家が南畫を描くといふ趣向、一應達者にはこなしてゐるが、うまみといふかうるほひの乏しい内容である。洋畫家らしい陰影の扱ひなどかへつて小うるさく、利洋混淆の感じだ、「國上山」「宇治川」等中では良い方。

現代名家新作風景畫展(日)二十九日

十一月二日 日本橋・高島屋

仙臺日本畫家聯盟展 二十九日—十一

月二日 仙臺・藤崎ホール

石川縣工藝獎勵會二十周年記念展 二

十九日—十一月二日 日本橋・高島屋

十一月

二六會第四回油繪展 一日—三日 銀

座・紀伊國屋

鶴田吾郎素描試作展 一日—四日 銀

座・菊屋

霜林會第四回展(洋) 一日—四日 銀

座・資生堂

萬國カトリック美術展出品展内示會

一日—五日 麴町・日伊會館

關口俊吾歐洲戰線スケッチ展(洋) 一

日—五日 銀座・銀座畫廊

文化學院第十八回展(洋) 二日—三日

駿河臺・同校

文展審査員作品展(洋) 二日—五日

神戶・畫廊

新作日本畫三都表裝研究會展 二日—

七日 上野・松坂屋 宏心會主催

澤口悟一試作品展(工) 三日—七日

日本橋・きん藤漆器店

三宅克巳、石川欽一郎近作水彩畫展

四日—七日 銀座・青樹社

黒門會第三回展(洋) 四日—八日 數

寄屋橋・日動畫廊

東日—有島生馬恩顧の有志で出來たこ

の會も三回展になるが、大體御座なりの

出品で佳作はわづかに野口彌太郎の「西

湖」中川紀元の「熱河風景」といふところ

ろ。高野三三男の「巴里を去る日の新聞」

は畫題は馬鹿らしいが、この作家として

は嫌味のない靜物といへよう。

東風會日本畫展 四日—八日 日本橋

・白木屋

山岸主計東亞風景版畫展 四日—九日

上野・松坂屋

藤田太郎大陸風景展(洋) 四日—九日

大阪・大丸

太田古朴木彫と國寶拓影展 四日—

九日 大阪・大丸

堂本塾燦扇會第二回展(日) 四日—九

日 神戶・三越

田口省吾近作油繪展 五日—八日 名

古屋・丸善

澤田宗山作陶展 五日—九日 日本橋

・三越

東京鑄金會工藝展 五日—九日 日本

橋・三越

小島沖舟日本畫展 五日—九日 日本

橋・高島屋

浪展會第一回展(洋) 五日—九日 日

本橋・高島屋

東日—安井は不出品で金山平三、曾宮

一念が大いに注目を惹き、金山では三點

のうち「芍藥」は奇麗過ぎたが、風景「春

秋」「梨」の二點に近頃の好調を示す。牧

野虎雄は花葵のある庭を描いたものが比

較的無難。

福永晴帆個展(日) 五日—九日 大阪

・三越

第十一回京都工藝美術展 五日—九日

日本橋・高島屋 京都工藝美術協會主催

草合社第四回展(日) 五日—九日 大

阪・阪急

桂庭社第二回展(日) 五日—九日 大

阪・阪急

岡本太郎滯歐作品展(洋) 六日—九日

銀座・三越

東日—この作家の滯歐作はすでに今年

の二科に特陳され、二科賞を獲てゐるが

今回の第一回個展においては一九三三年

から三八年にいたる間の代表的大作を展

示してをりその點興味がある。全作品を

通じて色感が鈍く詩感に乏しいが、構想

に一應の新しさはあり、若いだけに今後

に期待がかけられる。作品としてはむしろ

初期の「空間」二點がいゝ。

松村雄藏中支戰跡風物畫及拓本展(日)

六日—九日 銀座・三越

小島眞佐吉、小竹義夫二人展(洋) 六

日—十日 銀座・銀座畫廊

大沼抱林水墨畫第一回展 七日—十日

銀座・鳩居堂

高須芝山第三回南畫個展 七日—十三

日 新宿・伊勢丹

第一回新興岐阜院展 八日—十五日

岐阜市公會堂

伊藤繼郎作畫展(洋) 九日—十二日

神戶・畫廊

第一回廣島美術人協會展(日、洋、彫)

九日—十二日 廣島・福屋

岡田行一第八回人物畫展(洋) 九日—

十三日 銀座・青樹社

渡邊大虛第五回水墨畫展 十日—十二

日 大阪・堂ビル清交社

山水、花鳥、人物、計十七點を展觀し

た。

關尚美堂新作小品展(日) 十一日—十

三日 銀座・資生堂

春陽會第一回秋季展(洋) 十一日・十

四日 銀座・三越

春陽會の會員、會友による小品展。出

陳數六十八點、主なるものに木村莊八

「菊」畫稿、岡鹿之助「風景」、高田力藏

「ベニスの家」、鳥海青兒「聖堂」、水谷清

「印度の女」、加山四郎「卓上靜物」等があ

つた。

長谷川利行遺作展並明治大正物故名家

洋畫展 十一日—十五日 大阪・朝日會

館 明治美術研究所主催

故土田麥儒素描展(日) 十一日—十六

日 上野・松坂屋

山下驛耶近作日本畫展 十一日—十六

日 神戶・三越

河合志宏佛畫展 十一日—十六日 大

阪・大丸

小城基洋畫展 十一日—十六日 名古屋

屋・松坂屋

新興美術協會第十回記念展(洋) 十一日—十七日 大阪市立美術館

日本畫新作展 十二日—十四日 芝・

東京美術俱樂部 東京會主催

朗峯畫塾スケツ子展 十二日—十四日 銀座・菊屋

濱田庄司近作陶器展 十二日—十六日 日本橋・三越

東日—皿大小、壺蓋物、菓子鉢、茶盤など、約三百餘點の近作展覧。或るものには未だ民藝品らしい形と色とを残してゐるが、全體に見て文様とウオリユームの研究、力強い構造の美を具備してゐるところは確かに氏の誇りだといへよう。

鐵釉草花文水盤、同様な模様の大皿は佳品であり、茶盤、番茶器等によいものがあつた。犬山を想像するやうな赤の色つけものはないともよいと思ふ。

創造美術協會第八回展(洋) 十二日—十六日 大阪市立美術館

維新志士遺墨展 十二日—十六日 日本橋・三越 大東南宗院主催

池上秀敏以心社第二回展(日) 十二日—十六日 日本橋・高島屋

渡邊大虚第五回水墨畫展 十三日—十五日 大阪・天賞堂

明治維新志士遺墨展 十三日—十六日 日本橋・高島屋

赤城泰舒水彩畫個展 十三日—十六日

京城・三越

木芽會第六回展(日) 十三日—十七日 大阪・そごう

日本人形美術院第一回展 十三日—十九日 日本美術協會

新版畫會第二回展 十四日—十六日 銀座・資生堂

五采會第一回展(日、洋) 十四日—十六日 銀座・松坂屋

六日 銀座・松坂屋

橫濱美術協會第十回展(日、洋) 十四日—十九日 橫濱・松屋

村上華岳追憶展(日) 十四日—二十日 大禮記念京都美術館は故村上華岳三週忌に當り、その遺作及び遺品七十餘點を陳列した。これ等の中には未發表の作品二十餘點があつた。

題目 年 代 所藏者

二月の頃 卒業制作 繪畫專門學校

夜 櫻 石崎 次雄

阿彌陀三尊 大正五文展出 櫻井 勘助

日 高川 大正八國展出 某 氏

裸 婦 大正九國展出 中川榮次郎

松山雲煙(卷) 大正十四國展出 村上 家

第一期

橋上二美人 村上 家

鴨渥雨餘 某 氏

灯ともし頃 村上 家

踊 り 同

人 形 同

演劇 櫻と女、關の屏(色紙二枚) 同

演劇 定九郎 同

列仙傳(畫冊)

舞妓(油繪)

第二期

魚と貝

鱸

蝶

蔬菜

味爽の海

海上飛鷺

早春風景

叢

雪解の庭

金棺出現(記憶摸寫)

菩薩半跏(色線稿)

夏 の 山

第三期

轉峯泰山

松轡且雪

放 牛

紅 白 椿

牡丹(色紙)

瀑布(色紙)

潤澤(色紙)

巖屏(色紙)

谿澗(色紙)

冬山(色紙)

櫻柳早春

魔 障

秋 谿

山中朝霧

秋 谿

觀世音立像

土屋 俊彦

某 氏

村上 家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

蓮華一輪菩薩

太子樹下禪那

秋山暮暈

石 峰

原頭朝曦

火中蓮華

菩薩思惟之像

夜 摩 天

秋 山

寒山空林

菩薩半跏

釋迦牟尼佛

秋嶽雲翳

山雨空濛

月

晚 期

不動尊

不動尊

印度聖者

細 瀑

石窟經漢

觀音立像

秋 の 山

杉 の 山

紅葉の山

巖 の 山

牡丹(沒日加筆作)

寫 生

婦女顔(三點)

タゴールの顔(タゴール自署入一點)

學生時代寫生帳(數冊)

遺篋作品(數點)

中川榮次郎

橫山 眞三

中川榮次郎

櫻井 勘助

同

小曾根貞松

山本 倍三

小曾根貞松

渡邊 喜一

山本 倍三

村上 家

小曾根貞松

渡邊 喜一

近藤壽一郎

中川榮次郎

吉原 定藏

石野 貞雄

増成 壽一

石崎 次雄

村上 家

石野 貞雄

村上 家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

資料

畫用具

一揃

畫印 附屬品共

數十個

手記斷片

數葉

華岳氏寫真

數葉

紀元第二回洋畫展

十五日—十九日

銀座・三越

美術工藝作家協會金屬東京部會展

十日

六日—二十二日

銀座・松屋

作陶會展

十七日—十九日

名古屋・丸善

須田國太郎日本畫展

十七日—十九日

銀座・資生堂

兵庫縣美術家聯盟第二十二回展(日、洋、彫)

十八日—二十日

神戶・大丸

(搬入) 日本畫一九點、洋畫一五五點

彫刻六點、版畫二點(入選) 日本畫五點

洋畫三九點、彫刻三點、版畫一點(陳列總數) 一三四點(會員推薦) 前川尙子、高羽敏、平川要、吉田遊龜、笹沼勝太郎、井寄武夫、森崎勇(委員會推薦新會員)

關口俊吾、平田守

茶わん誌創刊十周年記念現代大家新作

日本畫展

十八日—二十一日

日本橋・三越

寶雲舍主催により現代作家の作品二十餘點が陳列された。何れも小品であるが橋本關雪「陽炎」、錦木清方「雪」、松林桂月「野塘秋意」、菊池契月「歌聖人磨」、結城素明「嶺の杉」等が主なものであつた。

三上知治個展(洋)

十八日—二十二日

大阪・美交社

橋本關雪詩書畫鑑賞展

十八日—二十

美術展覽會(十一月)

三日 京都・大丸

中村貞以塾春泥會第四回小品展(日)

十八日—二十三日

大阪・松坂屋

現代名家木彫作品展

十八日—二十三日

上野・松坂屋

六曜會新作工藝品展

十八日—二十三日

大阪・大丸

第三十一回新作日本畫展

十八日—二十三日

兵庫縣美術協會第三十六回展

十九日

二十三日 神戶・大丸

大阪新美術家聯盟第八回展(洋、彫)

十九日—二十四日

大阪市立美術館

三塔會第一回油繪作品展

十九日—二十三日

銀座・銀座畫廊

牧野虎雄近代油繪展

二十日—二十二日

銀座・資生堂

西川武郎主催

東日—近作わづか八點による展覧だがこの作家の好調を示して見應へがある。

「墨栗」は最も手に入つて無難だが、注目すべきは「夕月」と廿號の「芍藥」であらう。邦畫一如の清純な畫境愈々熟して觀る者の心を愉しませる。

小早川篤四郎支那風景及從軍小品展

(洋) 二十日—二十三日

岡山・金剛莊

佐藤眞樹第二回洋畫展

二十日—二十三日

名古屋・丸善

東日—本年八月中島中將を總裁に結成された團體の第一回展、洋畫、日本畫、彫刻の同人十八名、それゝ努力してゐるが、最も充實してゐるのは洋畫で、花岡萬舟の事變に取材した三十餘點が流石南京攻略戰の經驗者だけに實感をもつてゐるほか、山田順治の女工や少年工を描いたものに佳作がみられる。松田康一の大作は色感鈍いが、小品は面白く、津田正周では「バゴダの塔」を探る。日本畫はいつたに不振であり、彫刻も土田實の小品を除いてあまり感心出来ない。

海外蒐集硝子製品展

二十日—二十九日

海立商工獎勵館

府立商工獎勵館

清溪會第六回鑑賞會(日)

二十一日—二十二日

銀座・交詢社

島田忠夫日本畫個展

二十一日—二十三日

銀座・鳩居堂

大東亞共榮圈報道展

二十一日—二十三日

銀座・三越

報道美術協會主催。第一部東亞と世界第二部日本と東亞、第三部我等の覺悟なる主題のもとに壁寫眞、壁新聞、地圖等百餘點を陳列した。

犀彩會第二回展(洋)

二十一日—二十三日

銀座・青樹社、加能越美術協會主催

井高歸山作陶展

二十一日—二十六日

日本橋・三越

福岡縣美術協會第二回展

二十一日—二十六日

福岡・岩田屋

大森光彦作陶新作展

二十一日—二十三日

大阪・三越

青々會第一回展(日)

二十二日—二十四日

日本橋・三越

報知—青龍社社人のみによる會の第一回展、川端龍子は相變らぬ輕爽な筆捌きだが、就中「黒潮」がよい。たゞ鯉のむきもあるが、水の描寫が少し欲しかつた。坂口一草の「神苑の朝」は圖柄はよいが鹿の影が氣になり、山崎豐の滿洲風物「閑日」は部分が面白い。加納三樂、福岡青嵐はあまり振はぬ。

佐藤一章第二回油繪展

二十二日—二十四日

大阪・三越

互陽會第三回洋畫展

二十三日—二十五日

銀座・資生堂

環友會作品展(日、彫)

二十三日—二十五日

名古屋・松坂屋

新構造社第十五回展

二十三日—二十五日

東京府美術館

東朝—農村風景や牡丹などに取材した三村英一を主とするこの會も彫塑、日本畫の一部脱退により油彩が主となり、福崎精哉の「河口」や多賀正の子供を對象としたものに情感はあるが概して洗煉されざる畫技が多い。小田原龍生の風景、石田隆一のハルビン風景、多比羅榮一の「左甚五郎の龍」それゝ熱心に描いてゐるが内容よりもまづ油がうるさく感ぜられる。

大潮會第六回繪畫展(日、洋)

二十三日—二十五日

東京府美術館

石井彌一郎個展(洋)

二十五日—二十七日

東京府美術館

六九

七日 京都・大丸

九品庵新作日本畫展 二十五日—二十

七日 日本橋・東美俱樂部

美術工藝作家協會染色部展 二十五日

—二十九日 銀座・松屋

東日—繪とも圖案ともつかない染織、

いやにくすんだ色合や仕上げの不手際は

素人をはなれない證據ともいへる。それ

でも廣木良子の紅型研究になる四曲小屏

風、姿はよろしい。鹿島英二は技に提は

れ、山形胸太郎はや、遊びが多すぎる形

だ。仕事は兎に角、長安右衛門の明暗な

ど何かを狙つてゐることだけは十分わか

る。

河野鷹思個展（洋） 二十五日—二十九

日 銀座・銀座畫廊

三宅克巳・石川欽一郎近作水彩畫展

二十五日—二十九日 大阪・青樹社

愛知縣出身十六年度二科入選者展（洋）

二十五日—二十九日 名古屋・丸善

霜林會第四回展（洋） 二十五日—三十

日 大阪・松坂屋

國畫工藝協會同人小品展 二十五日—

三十日 上野・松坂屋

河井寛次郎新作陶器展 二十五日—三

十日 京都・高島屋

第十回日本版畫協會展 二十五日—十

二月二日 東京府美術館

東日—第十回の記念展といふにしては

全體に振はないが、會員はそれ／＼努力

してゐる。前川千帆の「赤い手袋」は愛

すべく、ブブノワの「カンナ」、畦地梅太

郎の「淺間」、下澤木鉢郎の「荒川夕陽」

など佳作といへる。十年回顧の會員秀作

再陳では第四回展に出た長谷川潔の三點

がめづらしく、石井鶴三、平塚運一の一

貫した精進のあとを知るにもよい。

獨立美術協會秋季展（洋） 二十六日—

三十日 大阪市立美術館

綠菴會第三回秋季展（洋） 二十六日—

三十日 銀座・青樹社

京都繪畫專門學校研究科作品展（日）

二十六日—三十日 日本橋・高島屋

蛭子屋星徑新作日本畫展 二十六日—

三十日 日本橋・高島屋

新關西美術協會第一回展（洋） 二十六

日—三十日 大阪市立美術館

〔搬入〕一〇—一五點（入選）一三〇點（審

査員）高島達四郎、須田國太郎、鈴木保

徳、鈴木亞夫（協會賞）仲村一男、橘喜

久雄

日東美術院第一回展（日） 二十六日—

十二月六日 東京府美術館

報知—昨年結成したこの會の旗揚げ展だ

が、結果が悪くないと思へるのは畢竟事

前の期待が低かつたゆゑか、主宰園部

香峰の未完三部作「立正安國」は日蓮主

題の象徵畫で企圖に壯なるものを認める

が布置が安手なのは困る。川口春波の六

曲一双「池水薫」は盛澤山な題材で焦點

がぼけた。他に目につく出品を挙げると

西村雨北の「秋趣」武田一路の「樂土」

小柳泰然の「山」等。

七絃會第十二回展（日） 二十七日—三

十日 日本橋・三越

東西五作家いづれも眞面目を示す作品

を發表した。即ち小林古徑「むべ」安田

叔彦「源氏舉兵」前田青邨「靜物」鍋木清

方「雪旦」菊池契月「嚴親」であつた。

眞道泰明日本畫個展 二十七日—三十

日 京城・三越

白西會第一回展（洋） 二十八日—三十

日 銀座・紀伊國屋

石川朝彦・上野米雲繪畫と彫刻併列展

二十八日—三十日 日本橋・東美俱樂部

名古屋屋展俱樂部作品展（日） 二十八

日—三十日 名古屋・松坂屋

丹光會第二回展（日） 二十八日—十二

月四日 新宿・伊勢丹

世紀美術創作協會第二回展（日） 二十

九日—十二月一日 京都・岡崎公會堂

第四回文部省美術展（綜合） 二十九日

—十二月十三日 大禮記念京都美術館

十二月

沼田一郎油繪展 一日—三日 銀座・

銀座畫廊

石川滋彦第一回油繪展 一日—四日

數寄屋橋・日動畫廊

林重義日本畫展 一日—四日 神戸・

畫廊

研究會第三回展（日） 一日—四日 銀

座・紀伊國屋

和風會日本畫展 一日—七日 日本橋

・白木屋

新生活美術第二回展 一日—九日 銀

座・資生堂

讀賣—吉田謙吉氏等のグループが資生

堂でやつた作品展をみたが、生活へ美術

を提供する立場に、ものゝ解らない連中

に低頭平身する立場と、恵まれない人々

へそつと與へる立場とがある事が考へら

れる。新生活美術同人は低頭平身派では

ない。勤勞者の慰樂とは何ぞやといふ相

當困難な課題へ、とにかく突進しようと

いふ態度が見られる。與へる場面を理解

して作家の趣味と技巧をそこへ投げつけ

るのだが、それが的中してゐる場合を見

せられたものはうれしい。誰かの襖紙の

作品等は工場勤務者へならば郷里の風

景寫眞或は木版が至當だつたらう。とに

かく習慣的な美術しか知らない人達が立

ち入るべき領野ではない。

美術之日本社現代名家日本畫新作展

二日—四日 銀座・鳩居堂

柏原覺太郎第四回個展（洋） 二日—四

日 大阪・三角堂

赤堀信平彫刻第二回展 二日—六日

日本橋・三越

三越新作日本畫展 二日—六日 日本

橋・三越

栖鳳、素明、放庵、秀畝、印象、晁勢

等で一點出陳

長谷川白峰陶磁器展 二日—六日 日

本橋・三越

日本彫金會展 二日—六日 日本橋

三越

福田惠一個展（日） 二日—七日 日本

橋・高島屋

東日・西山翠嶂門下の歴史畫家であるこの作家の東都における三回目の個展、相變らず武者繪が多く楠公取材の作が多いのも時局柄だが、佳作はむしろ靜穩な畫材にあり、秀吉を扱った「松の下」「海舟勝安房」などが面白い。京の舞妓を描いた二點はこの作家としてめづらしく、出来も悪くない。

小松義雄油繪個展 二日―七日 大阪

・三越

林司馬個展(日) 二日―七日 大阪・三越

有秋會日本畫展 二日―八日 大阪市立美術館

小野寺梅郎日本畫展 三日―六日 名古屋・松坂屋

七絃會第十二回繪畫展(日) 三日―七日 大阪・三越

京都作家繪畫工藝展 四日―六日 銀座・銀座畫廊「都市と藝術」主催

院展三大彫刻名作展 四日―六日 名古屋・丸善

土佐林豐夫油繪展 五日―八日 銀座・菊屋

田中繁吉油繪展 五日―八日 神戸・畫廊

新東亞美術工藝展(大阪工藝振興展) 五日―十四日 大阪市立美術館

大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會、大阪府工藝協會主催 一般出品約百點、審査員等出品十

一點(一等賞、大阪府知事賞)「鐵製盛器」河合壽成(二等賞、大阪市長賞)「アルミ象嵌櫛大鉢」後藤雅路(二等賞、大阪商工會議所會頭賞)「十王釜」角谷與兵衛(二等賞)「藤瀬染猫柳圖小屏風」高田淑子

輸出工藝品並ニ生活必需品展示會 六日―八日 岡山・金剛莊 岡山縣工藝協會輸出工藝研究會主催

水彩聯盟第二回展 六日―十日 銀座・三越

二科西人社同人第三回小品展 六日―十一日 福岡・岩田屋

傳川白道子日本畫展 七日―九日 銀座・銀座畫廊

吉田觀示陶彫馬百態展 七日―十二日 日本橋・三越

銃後美術文化昂揚展(洋) 七日―十二日 名古屋・松坂屋 北斗會主催

高橋暉山第四回個展(日) 八日―九日 日本橋・東京株式取引所

鬼頭豐二郎第七回油繪展 九日―十一日 名古屋・丸善

椿を主題とする作品二十餘點を展觀した。

神谷万吉聖戰記念作品展(洋) 九日―十二日 名古屋・松坂屋

創元會油繪小品展 九日―十三日 日本橋・三越

新世紀美術協會第四回展(洋) 九日―十三日 銀座・青樹社

眞野紀太郎近作水彩畫展 九日―十三

日 大阪・美交社 瀬戸作陶會展 九日―十三日 日本橋白木屋

第八回京都工藝品展 九日―十四日 日本橋・高島屋

山下竹齋日本畫個展 九日―十四日 大阪・大丸

笠原親日本畫展 十日―十二日 銀座・銀座畫廊

霧林會第四回展(洋) 十日―十三日 神戸・畫廊

岡田謙第三回新作發表展(洋) 十日―十四日 數寄屋橋・日動畫廊

奉天、承德或ハルビンに於て得たる風景畫に、少女像を交へ三十一點を陳列した。

石川確治第四回個展(綜合) 十日―十四日 日本橋・高島屋

矢部友衛滯歐作品展(洋) 十一日―十三日 銀座・交詢社

禾光會洋畫展 十一日―十四日 大阪市立美術館

佐伯米子洋畫個展 十一日―十四日 銀座・資生堂

東西大家新作繪畫展(日) 十一日―十四日 大阪・三越

新日本美術聯盟第一回展(綜合) 十二日―二十日 日本美術協會

昭和十五年八月發會した同聯盟の第一回公募展、繪畫、彫刻、寫眞等百二十二點を陳列した。

京都畫壇各塾代表中堅新進作家展(日)

十四日―十七日 名古屋・松坂屋 朝日新聞社々會事業團名古屋支部主催

林文塘新作鶴二十題展(日) 十四日―十八日 名古屋・松坂屋

尾上篤二郎個展(俳畫) 十六日―十八日 銀座・鳩居堂

菅橋彦個展(日) 十六日―十八日 大阪・大丸

昭和みつゑ第四回展(洋) 十六日―十八日 銀座・紀伊國屋

第二回美術文化小品展(綜合) 十六日―二十日 銀座・青樹社

美術文化協會々員に依る小品展、陳列數三十五點。

ウキリー・ザイラー個展(洋) 十七日―十九日 銀座・交詢社

「昭和日本畫大鑑」完成記念日本畫展 十七日―二十一日 日本橋・高島屋 今福武雄主催

高橋一智新作陶磁器展 十七日―二十一日 日本橋・高島屋

現代名家新作花鳥畫展(日) 十七日―二十一日 日本橋・高島屋

日本畫名家秀作展 十七日―二十二日 銀座・朝日ビル

柳川一鷗日本畫展 十八日―二十日 神戸・畫廊

長谷川耕雨、小林觀雨、吉田觀示三部作展(日、彫、書) 十八日―二十一日 銀座・三越

北島淺一近作個展(洋) 十八日―二十二日 銀座・銀座畫廊

二日 銀座・銀座畫廊

美術展覽會（十二月）

中商—風景を主に、近作十五點をあつめた展覧、何れも眞面目な觀照が畫面ににじみ出てゐる上に、じつくりと落着いた色彩に逞しい量感を盛上げてゐる。一
二や、物足りないものもあるが、總じて老練の貫祿は充分にうかゞはれる。「山中湖」「冬の山」等に於ける色彩的な壓力、「海」に於ける整理の行届いた構圖、殊に「梅園」のもの寂びた華やかさが一際高い境地をあらはしてゐる。

古賀忠雄紙塑展 二十一日—二十三日
銀座・菊屋

檜原益太油繪作品展 二十二日—二十三日
銀座・交詢社

原鼎個人展（日）二十二日—二十四日
銀座・鳩居堂

銀潮會第一回日本畫展 二十三日—二十六日
銀座・銀座畫廊

小島一谿個展（日）二十三日—二十六日
銀座・資生堂 室内社畫堂主催

斑鳩美術展（洋）二十三日—二十七日
銀座・紀伊國屋

萩燒展 二十四日—二十八日 日本橋・高島屋 山口縣工藝協會主催

武藤夜舟「馬に因む」新作畫展（日）二十四日—二十八日 日本橋・高島屋

東京美術學校卒業製作陳列會 二十五日—二十七日 上野・同校

亞細亞第三回油繪展 二十五日—二十九日 銀座・菊屋

展覽會以外の作品

日本畫

小早川秋聲畫國防館壁畫 小早川秋聲

は愛國婦人會京都支部よりの紀元二千六百年慶祝記念獻納畫を執筆、「祖國に祈る」「夢に通ふ」「輝く日本」「銃後の夢」「感謝」の五作を完成、本年一月陸軍省に獻納した。いづれも縦五尺五寸、横七尺九段國防館の銃後室を飾る。

杉本哲郎筆壁畫 杉本哲郎は郷里滋賀縣長濱町の縣社、八幡神社に奉納の大畫を揮毫した。縦九尺、横十九尺、本年一月着手完成。(一月二十五日大毎による)

伊藤素軒筆「遊鯉」 伊藤素軒は、その郷里の南朝の忠臣三隅兼連を祀る三隅神社へ「遊鯉」の繪を奉納した。絹本、縦二尺五寸、横四尺、本年四月完成した。同神社創建當時、郷土出身の小村大雲、田中頼璋と顔面奉納の約をなせしも大雲頼璋はすでに死し、一人その念願を果したものである。

古瀬素石筆「日之丸鯉」 古瀬素石は端午の節句に白根宮内次官から皇太子殿下へ獻上の鯉の繪を謹作、四月三十日に完成した。絹本、縦三尺九寸、横四尺、眉間に日の丸の様な赤い丸紋のある白鯉を中心に、五四の鯉を描いたものである。

磯田長秋筆「教育勅語御下賜之圖」

磯田長秋は朝鮮大邱府の國體明徴館を飾

る壁畫を執筆、本年五月末に完成して發送した。縦四尺五寸、横五尺五寸、明治天皇御自ら教育勅語を授け給ふところを謹寫した。

梶喜一筆「濁流を征く」 聖戰勃發とともに應召、徐州戰に参加、尉氏方面の洪水戰にも活躍した梶喜一は、京都和多田與太郎の援助によつて、黄河決壊治水の狀況を描いた大畫を製作、本年五月に完成した。縦六尺、横十二尺、京都師團を通じて遊就館へ納められた。

武藤夜舟筆「本多兵團嶧縣攻撃之圖」 支那事變に應召、北支方面の戰闘に参加した少佐武藤夜舟は嶧縣城攻略の記念畫を製作、本年六月完成して陸軍士官學校に寄贈した。縦六尺、横七尺。

山川秀峰筆「高砂の圖」 百合子姫三笠宮家へ御輿入れの一品として、高木家からの依頼をうけた山川秀峰は、千歳のめでたきを壽いだ六曲屏風一双「高砂の圖」を謹作、本年九月に完成した。寸法は縦六尺、横四間。

岡本一平筆屏風 三笠宮家へ御輿入れの百合子姫へ高樹町の町會から二曲一双の屏風をお祝品として獻上、岡本一平が謹作した。(十月二日大朝による)

花岡萬舟筆「龜山天皇御尊像」 龜山天皇の御六百年祭にあたり、花岡萬舟は御尊像を謹畫、天皇に緣由深い洛西峽峨

の天龍寺に奉納した。縦七尺、横二尺の双幅である。なほ花岡萬舟は一月には故北白川宮永久王殿下の御肖像を完成、四月には龜山上皇の御尊像を謹寫し奉つて近衛公に贈つた。(十月三日京都日出其他による)

洋畫

能勢龜太郎筆「重慶爆撃三部作」 昭和十五年陸軍航空本部勅託を命ぜられて従軍した能勢龜太郎は、本年二月歸還後記念畫を製作、三月末に「重慶への進軍」「重慶爆撃」の二作を完成、航空美術展に出品の上、所澤の陸軍航空士官學校に納めた。大きさはいづれも百號。あとの一作は遂に未完に終つた。

赤松一作筆「明治天皇大阪陸軍病院傷兵御慰問の圖」 明治十年大阪の臨時陸軍病院に行幸あらせられ、西南役の傷兵を親しく御慰問遊ばされた當時の御狀況を、赤松麟作が謹寫した。同病院にある高寫眞が原圖となつたもので、有志の手で大阪陸軍病院へ納入された。本年五月完成、寸法は縦五尺五寸、横八尺。

成瀬兵曹筆「奥瀬英三、松坂康、石川重信、三上知治は海軍省の依頼により成瀬兵曹の殉職の有様を描いた。大きさは各々百號、本年十月完成。それぞれ吳潛水學校、海軍航海學校、吳下士官兵集會所、及び海軍館に掲げられる。

上野廣一筆「閑院宮妃殿下御肖像」 上野廣一は閑院宮妃殿下古稀の御祝に際

して、御肖像畫揮毫を拜命、四十號の畫布に謹作中のところ、八箇月の苦心によつて本年十一月に完成、同月納め奉つた。なほ同人は昭和十年閑院元帥宮殿下古稀の御祝に際しても同大の御肖像を謹畫申し上げたものである。

中山正實筆壁畫 中山正實はフレスコ・セッコによる壁畫「正義」「平和」の二大作を執筆、本年十一月に完成した。神戸市神戸裁判所調停會館會議室を飾る。大きさは二百五十號。

橋本徹郎筆壁畫「現代日本」 橋本徹郎は國際文化振興會の依頼により、泰國憲法祭記念博覽會の日本館を飾る壁畫を製作、現代日本を象徴的に描いた。本年十一月完成、縦二十尺、横十八尺の大畫面で、カンバス・ブロックの連續組立て構成した。(插图四十二頁参照)

松添健「プリンス・オブ・ウェールズ號擊沈」「ハワイ海戰圖」 海洋畫家松添健は輝かしい帝國海軍の大戦果に感激しプリンス・オブ・ウェールズ號擊沈の光景並びにハワイ海戰の圖を想像によつて描きあげ、早速海軍省に納めた。(十二月十三日東日及び同十九日報知による)

村上松次郎「ハワイ奇襲の圖」 村上松次郎はわが海軍の眞珠灣奇襲の狀況を描いて十二月十五日海軍省に獻納した。(十二月十六日東朝による)

彫刻

長谷川榮作「聖德太子」 長谷川榮

作は奈良縣廳よりの依頼によつて、木彫彩色の若き聖德太子の御座像を謹作、本年五月に完成、橿原神宮へ奉納した。紀元二千六百年を記念して企圖されたもので、同神宮國史館内に安置される。高さ二尺五寸、幅二尺二寸、奥行一尺八寸。厨子は奈良縣廳社寺課にて設計製作された。

中村直人作「勝利」 中村直人は「勝利」と題するコンクリート製の浮彫を製作、六月完成して松岡洋右方へ納めた。高さ六尺、巾三尺。

挿 畫

挿繪専門畫家はもとより、一般畫家でも新聞その他に挿繪を執筆する者も少くないが、それらの活動の概要を記録するために本年度主要新聞所載小説挿繪の一覽を左に掲げる。(新聞名五十音順)

大阪朝日新聞 東京朝日新聞

美しき地 (火野 潤吉) 朝刊 一六・五・
圖 (向井 潤吉) 朝刊 二
南の風 (獅子 文六) 同 一六・五・三
雪 (藤澤 恒夫) 同 一六・二・三
新 (松前 孝之介) 同 一六・二・三
英雄峠 (岩田 孝太郎) 夕刊 一六・二・
梅里先生 (吉川 英治) 同 一六・二・七
行狀記 (石井 鶴三) 同 一六・二・七
高杉晋作 (岩田 孝太郎) 同 一六・二・五
官軍入城 (邦枝 完二) 同 一六・二・六
鴨下 晃湖 同 一六・二・六
大阪毎日新聞 東京日日新聞
花 (吉屋 信子) 朝刊 一六・四
田代 光子 朝刊 二

純情	藤森 成吉	同	一六・四・三
風樹	小磯 良平	同	一六・九・一
男	志村 聖一	同	一六・三・二
天誅組	菊池 寛	夕刊	一六・一・四
通る	木村 莊八	同	一六・二・
春照る國	新報	同	一六・六・三
河北	青嵐	同	一六・三・九
生きたる強	吉田 貫三郎	朝刊	一六・一・
大久保彦	福田 勇	同	一六・二・
左衛門	宮本 三郎	同	一六・一・五
三人姉妹	宮本 三郎	同	一六・一・五
春の原始	松野 一夫	同	一六・一・七
健康な春	廣津 和郎	同	一六・二・八
時代の旗	海音寺潮五郎	夕刊	一六・一・五
大岡政談	木下 大雅	同	一六・一・六
瑞穂太平	白井 喬二	同	一六・四・三
記	矢野 橋村	同	一六・八・七
京城日報	同	同	一六・八・七
世紀の除	都竹 伸一	朝刊	一六・二・
夜	仲小松	同	一六・二・
老	伊勢 良夫	同	一六・二・四
歌はぬ勝	山中 孝太郎	同	一六・九・六
利	高木 清	同	一六・九・六
三國志	吉川 英治	夕刊	一六・九・六
世直し公	小島 井	同	一六・六・
方	香川 芳彦	同	一六・六・
南海俠勇	寶井 馬琴	同	一六・六・
傳	小松崎 恒方	同	一六・七・
新愛知新聞	同	同	一六・七・
三人姉妹	宮本 三郎	朝刊	一六・七・
丹羽 文雄	朝刊	元	一六・七・

春の原始	尾崎 士郎	同	一六・七・三
林	松野 一夫	同	一六・二・六
健康な春	廣津 和郎	同	一六・二・七
時代の旗	海音寺潮五郎	夕刊	一六・一・五
大久保彦	木下 大雅	同	一六・一・五
左衛門	布施 長春	同	一六・三・二
中外商業新聞	日本産業經濟新聞	同	一六・三・二
勝安房	島田 訥郎	朝刊	一六・二・
勝海舟	島田 訥郎	同	一六・二・
三國志	吉川 英治	夕刊	一六・二・
後三國志	吉川 英治	同	一六・二・
福岡日日新聞	同	同	一六・二・
三人姉妹	宮本 三郎	朝刊	一六・一・
春の原始	松野 一夫	同	一六・一・
健康な春	廣津 和郎	同	一六・一・
時代の旗	海音寺潮五郎	夕刊	一六・一・
瑞穂太平	白井 喬二	同	一六・一・
記源平篇	矢野 橋村	同	一六・一・
報知新聞	同	同	一六・一・
彩る野	高井 貞二	朝刊	一六・一・
隱密縁起	中野 胡堂	同	一六・一・
青春紀聞	尾崎 士郎	同	一六・一・
この響き	鈴木 信太郎	同	一六・一・
風雲	丹羽 文雄	同	一六・一・
東京へ	尾形 挿雲	夕刊	一六・一・
花守賦	鴨下 晃湖	同	一六・一・

都新聞

道 (阿部 知二) 朝刊 一六・二・
花は偽ら (藤澤 恒夫) 同 一六・二・
す (志村 聖一) 同 一六・二・
縮 (内田 秋聲) 同 一六・二・
川歌 (林 芙美子) 同 一六・二・
臥牛 (長谷川 三郎) 同 一六・二・
虎彦龍彦 (坪田 護治) 同 一六・二・
西郷隆盛 (林 芙美子) 夕刊 一六・二・
日本航空 (西原 勝少佐) 同 一六・二・
の實力 (福田 豊四郎) 同 一六・二・

讀 賣 新 聞

脂粉追放 (竹田 敏彦) 朝刊 一六・四・
妻なれば (角田 喜久雄) 同 一六・四・
明日の愛 (志村 聖一) 同 一六・四・
情 (岩田 孝太郎) 同 一六・四・
維新前夜 (貴司 山治) 夕刊 一六・四・
玉井 德太郎 同 一六・四・

太閤記

新井 英治 同 十六年中
江崎 孝坪 同
木村 明道 同

建 築 作 品

支那事變も第五年目となり、本年の十二月には大東亞戦へと展開した年であれば、本年度の我國建築界も純然たる戦時體制を整へたのは勿論である。戦争關係ならざる住宅や普通商社の建築に豪華なものが出来なかつたのは、寂しがるよりは、戦時日本の現象としてむしろ喜ぶべ

き事である。純戦時體制版の簡素なる住宅及び官廳、商社建築も優れたる日本的感覺を以てすれば藝術的作品は生れるものであり、事實そうした美しき質實なる作品も本年度に於て少くはないらしいが建築關係の諸雜誌に紹介されたる範圍では、簡素なる材料による純建築美の發揮が充分に行はれたとは云ひ難い。

戦争關係の建築、就中軍需工場建築には壯大なるものは勿論、美しき建築構成に成功した傑作も多い事ではあらうが、一般に發表されぬし、此處に取扱ふ事も許されぬ。

左に建築關係の諸雜誌に發表せられた範圍内に於て、美術的に目立つ建築物を記録し別に圖版にその寫眞を掲載する。

石原産業海運株式會社事務所(村野建築事務所設計) 地階共に三階建、別に屋階を有する總延坪八四七坪の相當の大建築を、鐵使用制限令に従つて、外壁を無筋コンクリート、内部主要構造を木造ラスモルタルを以て耐火的に而も美術的に建造するに成功してゐる。地階もその巧妙なる採光法によつて(斷面圖參照)普通事務所として使用するに快適である。その美しく而も實用的なる設計は正面玄關の取扱ひ方にも見られる。

陽明文庫(長谷部・竹腰建築事務所設計) 近衛公爵家の陽明文庫第二文庫の竣工を機會に、此處に第一及び第二文庫に就いて記す事とする。

數多の國寶重要美術品並びに我が國史

研究上貴重なる書類を藏する文庫だけに特に鐵筋コンクリートを以て建造されてゐるが、而も使用鐵筋量を著しく制限せられた爲、第一文庫に於て採用せられた床下吹放の方法は第二文庫では採られず壁體を地盤面迄下げてあるが、その替り出来るだけ大きな通風孔を設けたと云ふ。

全文庫を一つの大きな建築にまとめず、第一、第二の小建築に分け、事務所も別棟にするなど、日本趣味の小建築に分けてゐるのはいろいろの意味で賢明である。又、建築自體も亦好く鐵筋コンクリートを使ひこなし、木材を裝飾的に使用して日本の傳統的形式の美を出し、第二文庫階上陳列室の天井採光さへ、日本建築の形式を少しも害はずに巧みに解決されてゐる。

長谷川鏡次商店(清水組設計) 昨年度以來多く建てられる木造の準防火建築の、建築主の使用にのみ供せられる小事務所建築の一例である。木材を生かして使ふにはモルタル塗や大理石貼りは理想的ではないが、準防火建築の爲にはモルタル塗も致し方なく、其れを美しく仕上げるには、大理石貼りも止むを得ぬ。特に優れた意匠ではないが美しく小ぢんまりとまとめたものとして、數多く建てられたかかる種類の木造建築の代表的例として記録して置く。

日光龍頭山の家(市浦健設計) 木材を豊富自由に驅使して、而も妙な自然さ

をてらはす、木材の質的、量的美を發揮し、好く細い點に迄注意して、山の家としての機能發揮するやう設計せられてゐる。本年度建設せられたる「山の家」の優れたる例として記録し、内部の一隅を圖版に載せる。

ニューヨーク・ジャパン・インスティテュート内茶室(吉村順三設計) 國際文化振興會が、米國人に日本建築の美を示し併せて茶道を紹介せん爲、十六年春京都で製作、米國に送つて、同年夏設計者の監督下にニューヨークのジャパン・インスティテュートの室内に建造せられた。杉材のみによる本格的茶室建築で、米國人に日本建築の眞の精神と美を教へるに役立つた事と思はれる。

ペリアン女史創作品展覽會 商工省貿易局が輸出工藝振興の目的を以て佛國より招聘したペリアン女史の創作品展覽會は三月二十七日より四月六日迄東京高島屋に於て、五月十三日より十八日迄大阪高島屋で開催された。家具を主とする室内裝飾の展觀である。竹、木材の自然の美を出来るだけ洋風家具に生かそうとしたものであつたが、此の道はタウトの示唆以來日本の建築及び工藝家の既に試みつつあるものではあり、竹のブライウツ的製法による、スチールパイプ家具を凌ぐ優秀家具の如きも既に日本人により發明せられても居り、竹以外の自然材の傳統的用法の近代化も既に種々優れた試みが行はれて居る。出陳の作品には、さ

すがに佛蘭西人らしい明快な感覺による取扱ひが認められはしたが、其等によつて特に我國の工藝家が教へられたとも思へぬ。此の出陳家具の製作には、先づ實物大の模型を作り、それによつて缺點のある所は訂正して初めて實際の製作に取掛かつた由であるが、それだけの贅澤を我國の建築家に許したならば、より優れた作品を作り得る事であらう。商工省が同女史招聘の費用を以て、我國の若く優れた建築家を數人撰んで研究試作せしむる設備を爲したならば、より好い効果が期待出来たのではあるまいか。

益子の一住宅(坂倉準三設計) 近來流行の數寄家風の立體洋式建築とは異つて、細かく氣取らぬ豪快な、立體の洋式建築を取り入れた日本建築である。型こそ小さいが(本屋延坪一〇〇平方米、平家建)、豪壯な氣に溢れてゐる。近時持てはやされる桂離宮の傳統が眞に現代に生かされれば、やはり斯く豪壯なものとなるべきである。唯、此の建物は未だ桂離宮程に洗煉されて居らぬ。

住宅建築は資材制限と坪數制限の爲、質素な小住宅が多數建築せられたが、刊行物に發表せられてゐるものには、そうした小住宅に優れたものが少なく、制限強化以前に着工された比較的大きく、且可なり贅澤な住宅に美しいものが多いのは決して喜ぶべき現象ではない。建築雜誌に紹介された利風住宅では相變らず田五十八の活躍が目立つた。

「物故作家及美術関係者」 ページ (76～79 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.76-79)

Cut for protection of the personal information

美術行政・教育

行政

帝國藝術院會則制定 五月五日文部省訓令を以て左の如く帝國藝術院會則を制定公布した。

帝國藝術院會則

第一條 帝國藝術院ニ左ノ三部ヲ置ク

第一部 美術(繪畫、彫塑、工藝、書道建築)

第二部 文藝

第三部 音樂、雅樂、能樂

各部ノ定員ハ第一部五十名、第二部二十名及第三部十名トス

第二條 各部ニ分科ヲ置クコトヲ得

分科ノ種類及其ノ定員ハ各部ニ於テ之ヲ定メ院長ノ承認ヲ經ベシ

第三條 各部ニ於テ他ノ部ニ屬スル會員ヲ兼屬セシメントスルキハ關係兩部合議ノ上院長ノ承認ヲ經ベシ

第四條 會員ヲ推選セントスルトキハ部會ニ於テ其ノ候補者ヲ選定シ總會ノ承認ヲ經ベシ

第五條 總會及部會ハ院長之ヲ招集ス

第六條 院長ハ會議ノ議長トナリ議事ヲ整理ス

第七條 總會ハ現在會員ノ半數以上、部會ハ現在所屬會員ノ半數以上出席スルニアラザレバ議決ヲ爲スコトヲ得ズ

議事ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第八條 會議ハ之ヲ公開セズ

帝國藝術院實規則制定 五月五日文部省訓令を以て帝國藝術院實規則を制定公布した。

帝國藝術院授賞規則

第一條 帝國藝術院ハ卓越セル藝術作品ニ對シテ賞ヲ授ク

前項ノ外藝術ノ進歩ニ貢獻スベキ顯著ナル業績アリト認ムル者ニ對シテ賞ヲ授クルコトヲ得

第二條 賞ハ賞狀及賞金トス

第三條 賞ハ帝國藝術院會員ニ非ザル者ニ之ヲ授ク

第四條 賞ヲ授ケントスルトキハ部會ノ推薦ニ依リ理由ヲ附シテ總會ノ承認ヲ經ベシ

帝國藝術院新會員發令 七月四日附を以て左記の如く帝國藝術院新會員が發令された。

小林萬吾、六角注多良、上村津彌、窪田通治、正宗忠夫、志賀直哉、北原隆吉、藤田嗣治、山本勇造

第四回文部省美術展覽會審査員委囑文部省に於いては八月二十日左の通第四回文部省美術展覽會審査員を依囑した

伊東一、堂本三之助、奥村義三、小野英吉、吉岡堅二、中村恒吉、宇田善次

郎、野田道三、山口三郎、案本謹之助、福田平八郎、兒玉省三、白倉欣一郎、望月尙、森喜久雄、長谷川昇、奥瀬英三、辻永、中川一政、中村研一、山本鼎、小磯良平、小山敬三、寺内萬次郎、青山義雄、足立源一郎、齋藤與里治、木下孝則、石井鶴三、長谷川榮作、堀進二、小倉右一郎、加藤鬼頭太、吉田三郎、吉田久次、國方林三、後藤清一、安藤照、三國慶吉、毛利敦武、澤田寅吉、豊田勝秋、沼田勇治郎、香取正彦、各務鐵三、高井榮四郎、内藤春治、村越道守、楠部彌一、山崎覺太郎、二橋二平、清水正太郎、北原千祿、岸本彦太郎、木村和一、島野新太郎

日本諸學振興委員會藝術學會並に同公開講演開催

左の要項に依り日本諸學振興委員會藝術學會並に公開講演會が開催された

一學會
(一)會期 十月二十三、二十四、二十五
(二)會場 二十三日、第三高等學校
(三)趣旨 國體の本義に基き藝術及藝術學に關する諸問題を研究討議し以てその發展振興を期せんとす
(四)研究發表主題
イ、藝術學の基本問題
ロ、我が國藝術の特色
ハ、國家と藝術

(五)研究發表並に質問討議
研究發表者數二十二名
研究發表時間一人三十分以内(實演を伴ふものは四十分)

質問討議 一研究發表毎に十分

(六)參加者(略)

(七)傍聴者(略)

二、公開講演會(略)

教育

兒島教授、松本助教授任命 東京帝國大學文學部美術史科に於ては藤懸靜也教授の後任として兒島喜久雄助教が教授に、東方文化研究所員松本榮一が助教に任命された。

田中豐藏教授東大講師兼任 京城帝國大學教授田中豐藏は東京帝國大學文學部美術史科講師を命ぜられ、六月より支那畫論の講義を擔當することになった。

帝國美術學校卒業及入學者 同校では三月十日第九回卒業證書授與式を舉行九、十兩日卒業製作展覽會を開いた。卒業及入學の人員は左の通りである。

三月卒業生

日本 畫科 三 志願者 入學者 五

西洋 畫科 一一 五五 四〇

圖案工藝科 九 一二 一五

彫刻科 一 一〇 二

師範科 一 八 七

計 二三 九五 六九

東京高等工藝學校卒業及入學者 同
校は三月十五日第十七回、十二月二十五日第十八回の卒業證書授與式を舉行、なほ本年度の卒業及入學者人員は左の通りであつた。

十七日第三十八回卒業證書授與式を舉行したが、それらの人員並びに入學者の数は左の通りである。

色染科 三月卒業者 十二月卒業者 志願者 入學者
機織科 二五 二六 五二 二一
圖案科 三四 三五 七三 三三
窯業科 二六 二四 五六 二九
精密機械科 一 三〇 二六 九 六五
人造纖維科 一 三一 八〇 三〇
計 一一二 一三 五九 二五

二十六日第五十一回の卒業證書授與式を舉行した。なほ卒業製作展覽會はそれぞれ二月二四、五、六日、十二月二十五、六、七日の兩度行はれた。本年度卒業及入學者の人員は左の通りである。

日本畫科 三月卒業者 十二月卒業者 志願者 入學者
油畫科 一六 一八 四七 二一
彫刻科 三六 三〇 一五 三二
塑造部 一四 一四 四〇 一六
木彫部 五 六 一六 七

彫塑科 二
速修科 七
計 二〇 一〇 一 四三

工藝圖案科 三月卒業者 十二月卒業者 志願者 入學者
造型工藝科 一七 一七 四八 一九
金屬工藝科 一六 一六 八七 二九
精密機械科 六八 六六 三四 二五
木材工藝科 二六 一八 三九 二三
印刷工藝科 二〇 一七 四二 二一
寫眞部 八 八 三六 一一
計 一六〇 一四六 六〇五 一八四

京都市立繪畫專門學校卒業及入學者

同校においては三月十八日第三十一回、十二月二十七日第三十二回の卒業式を舉行した。なほ三月十七日—十九日には三十一回卒業生の製作展を開催した。卒業及入學者の人員は次の通りである。

日本畫科 三月卒業者 十二月卒業者 志願者 入學者
圖案科 三五 三六 二二 一二
計 三五 三六 七八 三二

文化學院美術部卒業及入學者

文化學院美術部は三月二十日第十四回、十二月二十七日第十五回の卒業式を舉行した。本年度の卒業生は三月、九月、十二月、四月、入學志願者四十七名、入學者は二十七名であつた。

京都高等工藝學校卒業及入學者 同
校では三月二十日第三十七回、十二月二

女子美術專門學校卒業及入學者

同校は三月二十三日第四十五回、十二月二十六日第四十六回卒業式を舉行、三月二十三、四兩日、十二月二十六、七兩日には卒業製作展を開いた。なほ本年度卒業及入學者の人員は次の通りである。

高等科 三月卒業者 十二月卒業者 志願者 入學者
師範科 一〇 二〇 四七 三八
計 九三 九三 三〇 三三

東京美術學校卒業及入學者 同校に
おいては三月二十四日第五十回、十二月

日本美術學校卒業及入學者 同校は
十二月二十七日第二十三回卒業式を舉行したが、本年度の卒業生人員等は次の通りであつた。

日本畫科 十二月卒業生 志願者 入學者
西洋畫科 二 二五 一〇
彫塑科 四 四六 二三
圖案科 三 三〇 一〇
研究科 一
西洋畫科 一

美術講演 講義

講演

日本美術研究所座談會講演 一月十六日
於國民精神文化研究所 「日本文化と美術」 紀平 正美

考古學會講演 二月八日 於東京帝室博物館 「百濟及新羅の遺物と我國の文物」 齋藤 忠

九州國際文化協會講演 二月八日 於福岡日日新聞社講堂 「法隆寺壁畫」 矢崎 美盛

大阪市立美術館講演 三月一日 於同館 「大阪の根付」 上田 令吉

帝國美術學校講演 三月四日 於同校 「繪畫に於ける理論と實際」 須田國太郎

史學會講演 三月十五日 於帝大山上御殿 「宗達を中心とする二三の問題」 福井利吉郎

日本民藝協會講演 三月三十一日 於同所 柳 宗悅、河井寛次郎、濱田 庄司、式場隆三郎

東京美術研究所後援會第一回講演 四月十二日 於東京動産火災保險會社會議室 「石格二祖調心圖に就て」 田中 豐藏

造型版畫協會主催座談會 四月二十四日 於日本橋俱樂部 「銅版畫と石版畫」 石井柏亭外十名

考古學會第四十六回總會講演 五月三日 於東京帝室博物館 「支那古代山水畫と西方の影響」 松本 榮一

建築學會講演 五月四日 於鐵道協會講堂 「中世住宅建築に見られる建具の發展」 關野 克

「東三條殿の研究」 太田 靜六
「名古屋城各殿の造替に就て」 城戸 久

「朝鮮上代の建築と伽藍配置に及ぼせる天文思想の研究」 米田美代治
「河北省順德の元代佛塔」 村田 治郎

「晉北大同城とその門樓」 村田 治郎
東京帝室博物館講演 五月十日 於同館 「具塚に就て」 神林 淳雄

東洋文庫講演 五月二十九日、於同文庫「東京及北安南に於ける銅鼓について」 ウィクトル・ゴループ

日佛會館講演 六月十日 於同館 「クメールの藝術とその起源と發達」 ウィクトル・ゴループ

國際文化振興會講演 六月十二日 於明治生命會館講堂 「佛印の古代藝術」 ウィクトル・ゴループ

考古學會講演 六月十四日 於東京帝室博物館講堂 「支那山東省臨淄曲阜附近的遺蹟」 關野 雄

京都帝國大學樂友會館講演 六月十六日 於同館 「遠東學院とその考古學的事業」 ウィクトル・ゴループ

東方文化研究所講演 六月二十三日 於同所 「王者の記錄としての甲骨文と銅器銘」 平岡 武夫

「關東州史前文化所見（大長山島發掘物展觀）」 梅原 末治

美術問題研究會講演 六月二十八日 於如水會館 岸田 國士
大阪市立美術館夏期講習會 七月二十四日—八月 於同館

「畿内古墳の分布に就いて」 末永雅雄
「宋元時代に於ける我國人の活躍」 赤松 俊秀

「大和繪の風景畫」 源 豐宗
「淨土教と印刷文化」 藤堂 祐範
「水墨畫論」 谷 信一

東京美術研究所講演 七月二十六日 於大日本生活協會 「最近國寶に内定したる彫刻に就いて」 丸尾彰三郎

考古學會講演 九月十三日 於東京帝室博物館 「定案に就て」 小山富士夫

日本民藝館アイヌ工藝文化展講演 九月十五日 於同館 金田 一京助、杉山壽榮男、柳 宗一、式場隆三郎

東京美術研究所講演 九月二十日 於大日本生活協會 「荒彫佛像の諸相」 脇本樂之軒

日伊協會講演 九月二十二日 於學士會館 「日本美術と伊太利美術」 矢代 幸雄

藝術學會講演 十月二十三日—二十五日 於京都帝國大學、公開講演 於京都日出會館

「藝術史的諒解」 井島 勉
「東西庭園の比較」 松田 權六
「藤原行成に於ける日本書道の完成」 伊藤 壽一

「密教美術の傳統と日本の特質」 上野 昭夫
「桃山時代の障壁畫」 土居 次義

「華山初期の作品」 菅沼 貞三
「美術に於ける全體と部分」 上野 直昭
「我國に於ける陶器の起源」 小山富士夫

「上代に於ける神社建築の發展」 福山 敏男
「鎌倉時代の彫刻に就いて」 田澤 坦

「規矩木割より見たる日本建築」 大岡 實
「日本美術の特質」（公開講演） 藤懸 靜也

日佛會館講演 十一月四日 於同館 「ビュグイス・ド・シャヴアンヌ」コンラッド・メイリ

東方文化學院第十四回講演 十一月五日 於同院 「日本美術と支那美術」 瀧 精一

國華社講演 十一月八日 於同社 「浮世繪版畫に就いて」 高橋誠一郎

東方文化研究所創立第十三回記念講演 十一月八日 於同所 「支那建築に就いて」 竹島 卓一

大藏會第二十七回講演 十一月十六日 於京都家政高等女學校 「當麻曼茶羅に就いて」 大賀 一郎

大毎文化講座 十一月二十一日 於大阪毎日新聞社講堂 「日本美の性格」 植田 壽藏

國民精神文化研究所講演 十一月二十四日 於一ツ橋講堂 「日本美術の特性と現代美術」 正木 篤三

東京美術研究所創立五周年記念講演會 十二月六日 於東京帝室博物館小講堂

「爲恭關係の隠れたる二畫人」

脇本樂之軒

「佛印アンコールワットの遺跡を尋ねて」
藤岡 通夫

日佛會館講演 十二月九日 於同館、
「革命以後現在に至る佛蘭西彫刻の瞥見」
コンラッド・メイリ

ラジオ放送

一月 三日 「文化と國運の隆替」

大類 伸

同 十四日 「世界最古の文化」

杉 勇

二月 四日 「アジア文化の二大中心」

橋本 増吉

同 十三日 「古代支那の文化」

出石 誠彦

同 二十七日 「ガンダーラ藝術の東漸」

松本 榮一

三月 十一日 「イスラエルの古代文化」

石橋 智信

同 二十日 「ローマ時代の文化」

小林 秀雄

同 同 「オルデンベルグの佛陀」

高楠順次郎

同 三十日 「法隆寺の金堂の建築と壁畫を語る」

大瀧 正雄 入江 波光

四月 六日 「華嚴宗大本山東大寺」

(東大寺より中繼)

同 十五日 「西歐中世の文化」

山中 謙二

五月 十三日 「元時代の東亞文化の交流」

岩井 大慧

同 三十一日 「ソ聯の最近の文化」

昇 曙夢

美術講演・講義

六月 三日 「文藝復興と西歐文化」

島田雄次郎

七月 二十一日 「戦争と藝術(繪畫)」

小磯 良平

八月 四日 「徒然草その他」

岸田日出刀

八月 七日 「希臘の美術行脚」

富永 惣一

八月 二十四日 「出版と文化」(座談會)

八月 三十一日 「ドイツの美術都市を巡りて」

九月 二十一日 「秋の美術界」

兒島喜久雄

今泉 篤男

各大學美術史講座

〔官立〕

東京帝國大學

「文學部美術史學科」(美學)「美學概論」

「藝術ノ根本類型」「美學演習」教授大西克禮、

「樂曲樣式ノ研究」講師遠藤宏(美術史)「美術史研究方法」

「ヴェキケルマン論」「西洋美術史演習(近代及近世)」

教授兒島喜久雄、「日本美術史概説(上代ヨリ白鳳)」

「東洋美術史(淨土變相圖ニ就テ)」(明清畫人ノ來朝トソノ影響)

助教松本榮一、「東洋美術史史料研究(歷代名畫記講讀)」

講師田中豐藏

京都帝國大學

「文學部哲學科」(美學美術史)「美學序論」

「日本藝術精神ノ研究」「美學演習」教授植田壽藏、

「日本近世繪畫史」講師源豐宗、

「藝術的創造」講師井島勉

「文學部史學科」(考古學)「考古學概論」

「殷代の文物」「演習(西亞細亞考古學ノ諸問題)」

「實習(考古學實習)」教授梅原末治、

「講讀」(王國維、觀堂集林)講師水野清一、

「講讀」(希臘考古學關係英獨書)講師村田數之亮、

「特殊講義」(遠代の社會と文化)助教田村實造、

「飛鳥奈良時代の文化」講師東伏見邦英

「法文學部」(美學)「美學概論」「美學特殊講義」

「美學演習」「同演習」助教村田潔、

「音樂論及音樂史」講師加藤成之(文化史學第二)「日本藝術史特殊講義」

「日本繪畫史演習」「東洋藝術史普通講義」

教授福井利吉郎(史學第五)「考古學」

(史學第五講座ノ一部)講師伊東信雄

九州帝國大學

「法文學部」(美學美術史)「東洋美術史演習」

「美學」(文藝復興期ノ藝術論)「西洋美術史演習」

教授矢崎美盛、東洋美術史(日本庭園)助教永見健一

京城帝國大學

「法文學部」(美學美術史第一講座及第二講座)

「東洋美術史」「日本美術史」「美術史籍講讀」

教授田中豐藏、美學概論」教授矢崎美盛、

「考古學上ヨリ見たル上代文化」

教授藤田亮策

東京文理科學大學

「美學概論」講師大西克禮

大谷大學

「日本近世繪畫の研究」土居次義

高野山大學

「佛教藝術學科」(佛教藝術ノ諸問題)

「密教圖像ノ研究」「佛教藝術學概説」

教授佐和隆研、

「佛像彫刻」「佛教藝術學演習」

「中世の繪畫」教授岡直己

駒澤大學

「日本美術史」笹川種郎

「東洋美術史」脇本十九郎

東洋大學

「美學」大西克禮、

「美學」山際靖同志社大學

「美學概論」「日本美術史論」教授岡頼三

立正大學

「美學」西宮藤朝、

「日本美術史」檜崎宗重、

「佛教美術史」逸見梅榮

龍谷大學

「美學」井島勉

「文學部哲學科藝術學專攻」

「日本美術史」「東洋美術史」

教授會津八一、

「東洋美術史」講師大西昇、

「文學部史學科」

「東洋美術史」教授會津八一、

「考古學概論」教授西村貞次

慶應義塾大學

「文學部」(美學)「東洋美術史(本邦中世漢畫並に近世畫史)」

丸尾彰三郎、

「西洋美術史」兒島喜久雄、

「藝術學(映畫藝術學)」

板垣應穂、藝術學(演劇論)」

七尾嘉太郎

東京美術學校

「東洋美術史」講師正木篤三、

「西洋美術史」教授森田龜之助、

「美術史」教授矢代幸雄、

「東洋繪畫史」講師鎌倉芳太郎、

「西洋繪畫史」教授森田龜之助、

「東洋彫刻史」教授關野金太郎、

助教西田正秋、

講師鎌倉芳太郎、

「西洋彫刻史」講師富永惣一、

「東洋工藝史」講師石澤正男、

教授香取秀治郎、

「西洋工藝史」講師新規矩男、

「日本建築史」講師大澤三之助、

「東洋建築史」講師關野克、

「西洋建築史」講師大澤三之助、

「金工史」教授香取秀治郎、

「漆工史」教授六角注多良、

「日本文様史」講師小場恒吉、

「西洋美術史」講師大澤三之助、

「家具史」講師大澤三之助

古美術關係彙報

二月

大阪市立美術館長に上野直昭就任 前京城帝國大學教授上野直昭は二月一日大阪市立美術館長事務取扱を命ぜられた。

市立長崎博物館開館 長崎文化の保存紹介研究等を目的として一昨年来準備を進めて來た同博物館は、二月十一日紀元の佳節を卜して開館された。

博物館陳列國寶の交流 文部省では二月二十五日國寶關係博物館事務協議會に於て、從來固定的に一つの博物館にのみ陳列されてゐた社寺所有の國寶を、今回三年を一期として全國的に融通し得ることとし、適宜これが出陳命令を發することとを内定した。

三月

藤懸博士還曆祝賀會 東京帝國大學教授文學博士藤懸靜也は本年停年により退官する事となつたので、文學部美學美術史學科關係の人々によつて三月八日還曆祝賀會が舉行され、記念として錦木清方の筆になる同博士肖像畫を贈呈した。

國寶保存會開催 三月十日文部省に國寶保存會を開催、北海道松前町所有「福山城」外九件の建造物、京都府醍醐寺所有「絹本着色大日金輪像」外百三十四件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物の修理費補助の件、國寶建造物「本圓寺經藏」(京都府)外六件の維持修理費を昭和

十六年度に於て補助の件並に國寶建造物「丸岡城天守」(福井縣)外三件、國寶寶物類法隆寺所有「橘夫人念持佛厨子一基」の現状變更の件等を夫々議決した。

定竈址の發見 定竈址の發見を目指して三月一日北支に向つた東洋陶磁研究所員小山富士夫は、河北省曲陽縣靈山鎮の潤磁村に於てそれを發見、實査の結果幾多の貴重な資料を得て同二十日歸還した。

鎌倉國寶館長後任 鎌倉國寶館長清川末吉の同市々長就任により三月鈴木富士彌がその後任に就くこととなつた。

四月

橘夫人念持佛厨子扉の復歸 法隆寺藏橘夫人念持佛厨子の正面の扉は缺失中の處その一枚が藤田男爵家に存することが判明、同家では故平太郎男の一周忌に當る四月十二日これを法隆寺に寄贈した。よつて文部省保存課に於て精細な調査の結果その原位置に復歸せしめ、尙一枚不足の分は奈良藝術院新納忠之介が補作に當り、共に厨子に收められた。(建築史三ノ四による)

五月

松本榮一博士學士院賞受賞 東方文化研究所員文學博士松本榮一はその著「燉煌畫の研究、圖像篇」に對し五月十三日學士院賞を授與された。

陽明文庫發成 公府近衛文府を總裁と

する陽明文庫は、かねて緣由の地京都市右京區宇多野に設工中の所、今般竣成するに至つた。同文庫に於ては五月十六日より三日間それを記念して、重寶類の陳列展覧を行つた。

六月

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 六月十八日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟八件、名勝四件、名勝及天然紀念物一件、天然紀念物十三件の指定を審議可決した。

七月

國寶保存會開催 七月八日文部省に於て國寶保存會を開催、石川縣那谷寺所有「那谷寺大悲閣」外六件の建造物、京都府三寶院所有「木造不動明王像一軀」外三十九件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物「丸岡城天守」(福井縣)外八件、國寶寶物類輪王寺所有「刊本成唯識論述記」外五件の維持修理費補助の件並に國寶建造物「姫路城」(兵庫縣)外三件の現状變更の件等を夫々議決した。

重要美術品等調査委員會開催 七月二十三日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫二十五件、彫刻十七件、建造物十件、文書典籍書蹟百三十四件、刀劍百三十一件、工藝品及考古學資料六十五件、合計三百八十二件の重要美術品等認定の件を議決した。

八月

崇福寺舍利函近江神宮に下附 去る五月大津市崇福寺址塔心礎より發掘された

八月

金銅製外面、銀製中面、黃金製内面及其納入物一具は八月十八日宮内省より近江神宮へ寶物として下附された。同寶物は天津宮を創立された天智帝が鎮め給ふたものと推定される由緒のあるものである。

石田茂作博士號を受く 帝室博物館鑑査官石田茂作は「飛鳥時代寺院址の研究」と題する論文を提出中の處、八月十九日それに對して文學博士の學位が授與された。

十月

華山神社創立認可 昨年渡邊華山百年忌に當り結成された華山神社創建奉贊會は過般出願中の神社創立を十月神祇院より正式に認可された。

十一月

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 十一月十三日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟十三件、名勝三件天然紀念物十四件の指定並に名勝錦帶橋の地域追加の件等を審議可決した。

古美術展覧會・展觀

一月

東京帝室博物館繪畫陳列 一月中
主要陳列品左の如し。御物聖德太子繪傳屏風、國寶維摩圖(東福寺藏)愛染明王像(帝室博物館藏)國寶蓮花圖(本法寺藏)同千手觀音像(永保寺藏)同佛國、佛應禪師像(雲巖寺藏)同松ヶ崎天神緣起繪卷(松ヶ崎神社藏)同達磨臨濟德山圖(養徳院藏)
市立長崎博物館開館紀念展 一月十一日 於同館
佐々木昌興蒐集黃葉僧墨蹟及百川遺作展 一月十五日 於共榮美術俱樂部

二月

東京帝室博物館繪畫陳列 二、三月中
主要なる陳列品左の如し。御物佛畫經切貼交屏風、釋迦六祖像(帝室博物館藏)兜率天曼荼羅(同上)十卷抄(同上)天神緣起(同上)國寶山水圖傳元信筆(靈雲院藏)同高尾親楓圖秀頼筆(子爵福岡孝紹藏)國寶松ヶ崎天神緣起繪卷(松ヶ崎神社藏)
小川晴暁攝影大同石佛展 二月十六日—二十三日 於新宿・伊勢丹

四月

東京帝室博物館陳列 四月中
主要なる陳列品左の如し。國寶十二天像(西大寺藏)同釋迦如來像(神護寺藏)同不動明王像(甚目寺藏)普賢菩薩像(帝

古美術展覧會・展觀

室博物館藏)國寶普賢延命像(松尾寺藏)同山水屏風(教王護國寺藏)同鳥獸戲畫卷(高山寺藏)同車爭鬪屏風傳山樂筆(公爵九條道秀藏)同松林圖屏風等伯筆(子爵福岡孝紹藏)
池長美術館第二回展 四月一日—五月三十日 於同館
時代小袖雛形屏風展 四月十一日—二十五日 於恩賜京都博物館
野村正治郎秘藏のもの百雙を主として出陳した。
新指定國寶陳列 四月十五日—二十五日 於東京帝室博物館
昭和十六年三月文部省に於て國寶に指定することに議決されたもの、中、繪畫は全部、文書典籍書蹟類四十八點、工藝品三點を出陳した。
新指定國寶建造物寫真展 四月十五日—十九日 於東京美術學校
帝室博物館の陳列に呼應しての條として寫眞の外平面圖を併せて展示した。
孔子に關する展覽會 四月十五日—三十日 於名古屋・徳川美術館
岡田米山人及半江展 四月二十日—五月四日 於大阪市立美術館
米山人三十六點、半江六十點を陳列した。

五月

東京帝室博物館繪畫陳列 五月中
主要陳列品左の如し。國寶普賢菩薩像(豐乘寺藏)五大虚空藏像(帝室博物館

藏)國寶經漢像(來迎寺藏)同紫式部日記繪卷(侯爵蛸須賀正氏藏)同俄鬼草紙繪卷(曹源寺藏)同鳥獸戲畫卷(高山寺藏)同益田兼亮像雪舟筆(男爵益田兼施藏)
考古學會總會展 五月四日 於小倉武之助邸
史學會總會展 五月十一日 於上杉伯爵邸
陽明文庫竣成記念展 五月十六日—十八日 於京都・同所
御歴代宸翰をはじめ奉り、國寶、重要美術品等にかゝる文書、筆蹟、典籍類四十六點を陳列した。
大倉集古館能面特別陳列 五月二十五日—六月三十日 於同館

六月

東京帝室博物館繪畫陳列 六月中
主要なる陳列品左の如し。御物聖德太子繪傳、國寶二河白道圖(光明寺藏)釋迦六祖像(帝室博物館藏)國寶十六羅漢像(清涼寺藏)先德圖像(帝室博物館藏)住吉物語繪卷(同上)重要美術品・融通念佛緣起繪卷(大念佛寺藏)同藤原信盈像光琳筆(青柳瑞穂藏)同佐藤一齋像筆(河田烈藏)
漢代畫像石拓本特別陳列 六月一日—十五日 於恩賜京都博物館
アンコール・トンカン・安南博物館並古美術保存事業寫真展 六月十九日—二十四日 於日佛會館

七月

東京帝室博物館繪畫陳列 七、八月中

主要なる陳列品左の如し。國寶最勝王經十界寶塔曼荼羅(大長壽院藏)同十二天像(來迎寺藏)經漢像(帝室博物館藏)琴棋書畫圖任月山筆(同上)清水寺緣起繪卷(同上)草花寫生圖卷探幽筆(同上)國寶波瀾圖應舉筆(金剛寺藏)

九月

東京帝室博物館繪畫陳列 九、十月中
主要陳列品左の如し。御物聖德太子繪傳、國寶孔雀明王像(松尾寺藏)同二河白道圖(光明寺藏)同佛眼曼荼羅(品川寺藏)同如意輪觀音像(金剛寺藏)同十二天像(西大寺藏)同仁王經曼荼羅(醍醐寺藏)同聖德太子勝覺經講讀圖(西來寺藏)同文覺像(神護寺藏)藤原光能像(同上)同紅白芙蓉圖李迪筆(子爵福岡孝紹藏)名利長年像信春筆(同上)
石清水八幡宮資料展 九月十三日—二十八日 於恩賜京都博物館
重寶七十九點を陳列。この中國寶十五點があつた。美術關係のものには石清水八幡宮緣起繪卷、譽田宗苗緣起繪卷、神功皇后緣起繪卷、一遍上人繪傳及び昭乘筆僧形八幡神像等があつた。
大雅筆障壁畫特別陳列 九月十三日—二十八日 於恩賜京都博物館
國寶萬福寺の障壁畫を二十九幅に改装し、その全部を陳列した。

十月

第六回同寶展 十月五日—二十日 於大阪市立美術館
足利期から明治大正時代までの遺品を七十二點陳列した。主要なものに、弘法

大師行狀繪卷(三大寺喜兵衛藏)天神緣起繪卷(山本發次郎藏)琴棋書畫圖屏風友松筆(三大寺喜兵衛藏)山水圖友松筆(南喜三郎藏)犬追物圖(細見良藏)等があり、いづれも國寶重要美術品等であつた。

柿右衛門伊萬里陶器特別陳列 十月五日—十一月二十三日 大阪市立美術館
柿右衛門二十二點、伊萬里及肥前焼を合せて三十六點を出陳した。

東京帝國博物館繪畫陳列 十・十一月中

主要陳列品左の如し。國寶十二天像(西大寺藏)同仁王經曼荼羅(醍醐寺藏)同聖德太子像、天臺高僧像(一乘寺藏)同釋迦如來像(神護寺藏)同普賢延命像(松尾寺藏)同不動明王像(甚目寺藏)同羅漢圖(來迎寺藏)同兩界曼荼羅(子島寺藏)同楊柳觀音像(大德寺藏)同龍虎圖牧溪筆(同上)同華嚴緣起繪卷(高山寺藏)

十一月

國華社茶話會展觀 十一月八日 於同社

支那名畫特別展 十一月十四日—十六日 於京都・藤井有鄰館

當館所有の歴代の繪畫八十二點を陳列した。

第二十七回大藏會展觀 十一月十六日

於京都家政高等女學校

根津美術館第一回東洋古美術展觀 十一月二十八日—三十日 於同館

故根津嘉一郎蒐集品により根津美術館を設立して以來第一回の展觀であつた。

出陳品左の如し。(○印國寶△印重要美術品)

術品)○那智瀧圖(鎌倉時代)○燕子花圖屏風(光琳筆)△鶴圖(傳李安忠筆)△漁村夕照圖(傳牧溪筆)△夕陽圖(馬麟筆)梨花小禽圖(元時代)○繪過去現在因果經(慶忍・聖衆九筆)△天狗草子繪卷(鎌倉時代)布袋蔣摩訶圖(因陀羅筆)△古今和歌集(藤原爲氏筆)○内大臣殿歌合(平安時代)宗峰妙超墨蹟、石室善政墨蹟、一山一寧墨蹟、明極楚俊墨蹟○註釋伽經(奈良時代)○大般若經(奈良時代)○觀世音菩薩受記經(奈良時代)佛本行集經(奈良時代)金光明經(鎌倉時代)金銅釋迦多寶佛像(北魏時代)金銅七佛像(隋時代)金銅鎧錄像(隋時代)石造菩薩立像(ガンダーラ佛)佛頭佛手(天龍山石窟佛)△大名物松屋肩衝、中興名物相坂丸壺△大名物柴田井戸、中興名物長崎堅手△志野茶盃銘山端、黃瀬戸寶珠香合、交趾臺牛香合、△色繪山寺文様茶壺(仁清作)古伊賀耳付花入銘壽老人(江戸時代)硃青磁竹ノ子花入(南宋時代)硃青磁袴腰香爐(南宋時代)金欄手寶相華交下燕花入(明時代)吳須赤繪花鳥文壺(明末時代)名物青磁花入銘夕端山、寶相華銀平文袈裟箱(平安時代)秋野蒔繪手箱(室町時代)△名物花白河蒔繪硯箱(室町時代)△名物春日山蒔繪硯箱(室町時代)春日若宮大般若經入厨子(寛元元年銘)古蘆屋松梅文眞形霰釜(永正丁丑年銘)古天明十玉口釜(室町時代)△龍饗養文罽(周時代)△變様獸面華文鑑(戰國時代)△轡首龍饗養文罽(殷時代)△轡首龍饗養文罽(殷時代)△轡首龍饗養文罽(殷時代)

十二月

東京帝國博物館繪畫陳列 十二月中
主要陳列品左の如し。國寶山水屏風(教王護國寺藏)同孔雀明王像(松尾寺藏)同法華曼荼羅(唐招提寺藏)同十二天像(來迎寺藏)同阿彌陀如來像(報身寺藏)同親鸞上人繪傳(妙源寺藏)華嚴五十五所繪傳(東大寺藏)重要美術品稻川舟遊圖竹田筆(林莊治藏)
支那歴代繪畫展 十二月五日 於如水會館
故佐川喜三郎が支那にて蒐集せるものの中、主要なもの四十七點を陳列した。

博物館・美術館新收品

帝室博物館並に公共博物館、美術館の昭和十六年度に於ける主要な新收美術品（繪畫、彫刻、工藝、考古學資料）の目錄を左に掲ぐ。

帝室博物館

繪畫

唐人物圖二幅 北川寒巖 荒木享吉寄贈
 版畫南國の花八枚 ラッセル 同
 渭川千畔圖 高田忠周 作者寄贈
 奇巖怪石圖 同 同
 水墨山水圖 同 同
 青綠山水圖 同 同
 遠山長水圖 同 同
 米法山水圖 同 同
 水墨山水圖 同 同
 書畫貼交掛軸 四幅 同 同
 老杉之圖 同 同
 松に牡丹圖 同 同
 青綠山水圖 同 同
 淺春山水圖 同 同
 秋景山水圖 同 同
 雪景山水圖 同 同
 清夜山水圖 同 同
 秋林爽霜圖 同 同
 鷹山水圖屏風 狩野種信
 孔雀圖 渡邊農畝 渡邊壽恵子寄贈
 捨體拾髓之圖 山元春舉 山元孝吉寄贈
 阿蘇風景圖 同 同
 大正震災燒跡 田代二見 作者寄贈
 寫生五十四枚 竹堂
 月圖 二幅 岸

博物館・美術館新收品

大正四年大禮圖卷見返圖十二枚 青山操
 八幡大菩薩緣起殘缺
 秋影圖 山口蓬春 作者寄贈
 梅月圖 圓山應舉
 白菊圖 松村景文
 秋景山水圖 狩野勝玉
 十二支圖 渡邊南岳
 若菜摘圖 冷泉爲恭
 壽老山水圖 三幅 岡本豐彦
 車爭圖屏風 狩野山樂
 九段競馬圖 小林清親 溝口禎次郎寄贈
 狹衣物語繪卷
 繪手鑑 二帖
 花鳥圖 藤原勝和
 牧牛圖 渡邊崋山 林督寄贈
 美人撫琴圖 賴山陽
 書蹟
 御製榮國公神道碑拓本 日向俊馬寄贈
 海舟無聊之詩 十一幅
 海舟戊辰作詩
 萬葉歌抄
 梨堂公傳三條實美書
 春畝公傳伊藤博文書
 春畝公傳伊藤博文書
 九條良經消息
 藤原定家自筆申文
 延喜式 二十八卷
 市河米庵筆蹟臨天馬賦
 市河米庵筆蹟扇面
 大久保甲東筆蹟詩稿二帙 林督寄贈

十一面觀音鏡像 傳光忠
 太刀 松文鐵鈔子 長光
 太刀 獅子文鍍金香爐 立松山城寄贈
 青瓷雙耳壺 宋時代 清水龜藏寄贈
 青瓷壺 唐時代 橫河民輔寄贈
 青瓷多嘴瓶 宋時代 同
 白瓷盃 同 同
 青白瓷盒子 同 同
 青白瓷托及盞 同 同
 青花大壺 明時代 同
 青花龍文盤 同 同
 青花小盤十個 同 同
 青花草花文盤 同 同
 五彩繡漢圖盤 同 同
 三彩牛馬圖盤 二個 同
 青花釉裏紅盃 清時代 同
 豆青大盤 同 同
 黑釉堆白文水注 高麗時代 同
 黑釉鳥口水注 同 同
 三島渦文鉢 李朝時代 同
 刷毛地魚文瓶 同 同
 白瓷面取瓶 同 同
 五彩長方盒子 明時代 同
 色繪角形瓶 江戶時代 同
 色繪置物(木白) 同 同
 備前水指 江戶時代 同
 白瓷蝶耳瓶 宮永東山 同
 自然釉象嵌文瓶 高麗時代 同
 色繪飾具足 江戶時代 同
 備前水指 同 同
 備前茶入 同 同
 瀬戸釉水指 岡田久太

備前壺 江戶時代
 色繪蓋物 松濤亭久八 高橋靜寄贈
 色繪大皿 富本憲吉
 漆 工
 楓詩繪耳盃 江戶時代
 櫻詩繪手箱 同
 濃色地寶蓋橫腰卷 江戶時代
 獅子狩模樣錦模造裂 龍村平藏寄贈
 草花模樣描繪紋裂 桃山時代
 カシミヤ裂
 考 古
 遠賀團印
 炭手太刀
 クリス形銅戈 八口
 塙佛 福島縣借宿廢寺出土 香取秀真寄贈
 魚形土製品 北村斌夫寄贈
 經筒 六個 靜岡縣三明寺經塚出土
 大禮記念京都美術館

日本畫

生 暖 松元道夫 (第六回市展) 買上
 草 山口華揚 (第四回市展) 同
 晴日 上村松園 (第六回市展) 寄贈
 月の暈 三谷十糸子 (第三回市展) 同
 芙蓉 澤宏毅 (奉祝展) 同
 閑庭 保岡素堂 (第四回市展) 同
 供饌 石島良則 (第一回市展) 同
 溫泉湯の 川北霞峰 (第十回帝展) 同
 兩面愛染明王草稿 橋本關雪 同
 暮笛 三宅鳳白 (第四回市展) 同
 男兒生る 向井九方 (同) 同
 爽晨 森守明 (同) 同
 明裳 北澤映月 (奉祝日本畫展) 同
 洋畫

十和田湖田中華之助(第六回市展)	買上	銅製 香爐	高麗時代	靜林茅舍賣立	三月 十一日
裸山 今井憲一(同)	同	白磁象嵌淨瓶	同	市島春城并礫川山房賣立	五月 四日
海邊の夏 青山義雄(第四回文展)	同	銀製鍍金藥盒	同	京都伊藤庄兵衛賣立	五月 十九日
霧の湖畔 山本鼎(同)	同	銀製盒	同	舊大名某家賣立	五月 三十日
少女像 近藤光紀(同)	寄贈	三島鉢	朝鮮時代	尾崎樂山堂・此君堂賣立	六月 二十四日
燈下 伊谷賢藏(第二回二科)	同	近代日本美術品		名古屋美術館	
崖 旭谷左右	同	日本畫		彌高亭並某家賣立	二月 八日
風景 十九世紀和蘭古畫	同	紅梅	福田平八郎	村瀬庸庵賣立	二月 二十日
工 藝		緋牡丹	阿部春峰	伊藤香年・吉田寛悟翁	五月 二十四日
黃灼盜靈 芝紋花瓶	買上	ほととぎす	伊藤小坡	方寸庵賣立	十月 十一日
青華水指 楠部彌式(第四回文展)	同	武人武藏	野田九浦	種石庵賣立	十一月 六日
鹽藥枇杷 森野嘉光(同)	同	細雨流水	白倉嘉人	瓢々庵賣立	十一月 十四日
圖花瓶	同	月見の圖	楠木清方	小尾八峰庵、並二正住	十一月 二十九日
大阪市立美術館		西洋畫		京都美術館	
繪 畫		櫻	太田喜二郎	中京區稻垣家賣立	二月 十二日
四季花卉圖册(幸野樸嶺) 橋本喜造寄贈		谷間の藤	河上一也	辻寛治賣立	七月 七日
朝鮮總督府博物館		生花圖	故五姓田芳柳	大阪美術館	
建仁二年銘馬鐙	買入	彦衣の女	岡見富雄	木屑軒賣立	一月 二十三日
金銅馬面	同	婦人像	寺內萬治郎	濤聲館第一回賣立	六月 五日
銅劍鎧范	同	裸婦圖	川島理一郎	寶槌庵並某家賣立	六月 十八日
滑石製子像	新羅時代	岩屋寺經藏	石井柏亭	濤聲館第二回賣立	七月 四日
金銅菩薩 新羅時代	慶尚北道迎日郡杞	彫 刻	平塚運一		
立像 新羅時代	溪面木堂洞洞出土	薰染	後藤清一		
黃褐釉壺	高麗時代	たばこ	松浦良		
灰綠釉寶源庫銘瓶	同	蘭花額	石川確治		
均窰盤 金時代	咸興北道城津郡鶴西面	工 藝	守屋松亭		
三個 塔坪洞字上村古墳出土		蒔繪紅白梅文庫硯箱	宮代健三		
黑花瓶二個	同	春の水 硝子吹込水盤	香取正黑		
白土化粧盤四個	同	釣燈籠			
禾天目盤	同				
綠釉坏	同				
辰砂草花文瓶	李朝時代				
李王家美術館	伊藤樸雄寄贈				
朝鮮古美術品					
東京美術館					
觀空庵賣立					
兩大家賣立					
一月 十八日					
二月 二十二日					

美術市場

古美術保存

昭和十六年度國寶指定

◎文部省告示第六百三十六號 五月八日

國寶保存法第一條ニ依リ左記物件ヲ國寶ニ指定ス

建造物之部

名山

構造

形式

所有者

所在地

福山城(松前城)

天守 三層天守、屋根銅板葺

松前町 北海道松前郡松前町大字松城町

本丸御門東塀

本丸御門 櫓門、屋根銅板葺、延長五十九尺、狭間五ヶ所、屋根銅板葺(現在、執モ屋根、鉛引鐵板假葺)

松前町 北海道松前郡松前町大字松城町

聚光院茶室(閑隱席)

三疊茶室、水屋ノ間三疊、樹床席四疊、六疊二室及縁之ニ附屬ス

京都市 京都市上京區紫雲野大徳寺境内

玉林院南明庵及茶室(蓑庵、假葺床席、附蓑庵露地)

南明庵、六疊敷佛壇及板間等ヨリ成ル、單層、屋根入母屋造、庇附、母屋柿葺(現在銅板假葺)庇棧瓦葺、三疊中板入茶室及水屋等ヨリ成ル、單層、屋根柿葺(現在銅板假葺)

玉林院 同 寺境内

西翁院茶室

三疊茶室及勝手口脇袋櫓ヨリ成ル(水屋ヲ含マズ)、單層、屋根切妻造、柿葺、正面切妻造、杉皮葺土庇附、桁行三間、梁間三間、單層、屋根寶形、木瓦葺

同 西翁院 同左京區黑谷町金戒光明寺境内

大傳法院大師堂

附厨子及佛壇、天守 二層天守、屋根本瓦葺

和歌山縣 和歌山縣那賀郡根來村同院境内

松山城(高梁城)

天守 二層天守、屋根本瓦葺

岡山縣 岡山縣上房郡高梁町

菅田庵及向月亭

附屬ス

松江市 松江市菅田町

向月亭 主室四疊半大目及入側縁、六疊、八疊、くつろぎの間等ヨリ成ル、單層、屋根寄棟造、庇附、母屋茅葺、庇柿葺、くつろぎの間正面切妻

紙本墨畫山水圖(享德四年等連ノ贊アリ)

東京市 男爵 山本 達雄

紙本著色繪過去現在因果經(殘圖)

同 同 同 人

紙本墨畫寒山拾得圖(因陀羅筆) 二幅

同 同 同 人

紙本淡彩高士探梅圖(周璽等六僧ノ贊アリ)

同 同 同 人

紙本淡彩歸鄉省却圖(惠麓等十三僧ノ贊アリ)

同 同 同 人

紙本著色毛利元就像(天正十九年龍喜ノ贊アリ)

同 同 同 人

紙本著色紅白芙蓉圖(慶元丁巳歲李迪畫トアリ)

同 同 同 人

紙本著色十王經(傳教煌出ノ幸末年董文員供養ノ奥書アリ)

同 同 同 人

紙本著色如意輪觀音像

同 同 同 人

紙本著色病草紙(殘圖)(肥滿女)

同 同 同 人

金地著色孔雀圖、葵花圖(衛立、尾形光琳筆)

同 同 同 人

紙本著色桃花小禽圖

同 同 同 人

紙本著色孔子像

同 同 同 人

紙本著色海北友松夫妻像(海北友雪筆、享保九年ノ贊アリ)

同 同 同 人

紙本著色海北友松夫妻像(海北友雪筆、享保九年ノ贊アリ)

同 同 同 人

紙本著色十王像(表稱ノ押紙ニ延徳元年及同二年開眼供養書工左近將監藤原光信トアリ)

同 同 同 人

紙本著色佛眼曼荼羅圖

同 同 同 人

密教圖像 十點

同 同 同 人

紙本著色火羅圖(永萬二年圖寫ノ舊記アリ)

同 同 同 人

紙本墨畫仁王經法本尊像(東西北及中央ノ四幅ニ治承五年寛仁寫、南ノ一幅ニ珍海筆及壽永二年五方諸尊色付寫ノ舊記アリ) 五幅

同 同 同 人

紙本墨畫聖天像(珍海已講筆天下第一繪師ノ記アリ)

同 同 同 人

紙本墨畫大元帥明王像(六面八臂像)(裏ニ心覺阿闍梨本成賢傳得ノ舊記アリ)

同 同 同 人

八九

紙本墨畫大元帥明王像(六面八臂像)	京都府	觀智院	祐經筆夢想記(文永十年十二月八日)	木村德衛
紙本墨畫大元帥明王像(四面八臂像)	同	雲龍院	玄空筆尊勝陀羅尼等(弘安八年卯月廿一日)	牧田環
紙本墨畫大元帥曼荼羅圖(十八面三十六臂像)	同	山中松治郎	證深筆心經(弘安八年卯月十九日)	同
紙本墨畫大元帥曼荼羅圖(四面八臂像)(裏ニ成賢本ノ舊記アリ)	同	野村德七	證深筆心經(弘安八年卯月十九日)	同
紙本墨畫請雨經曼荼羅圖	同	醍醐寺	隆性筆心經(弘安八年卯月十九日)	同
紙本墨畫六大黑天像(此本因幡堂執行在之トアリ)	同	醍醐寺	善策筆心經(弘安八年四月十九日)	同
絹本着色普賢延命像	同	醍醐寺	賴禪筆名號(弘安八年五月廿七日)	同
絹本着色後圓融院宸影(土佐光信筆、後土御門天皇ノ宸翰御贊アリ)	同	醍醐寺	名號(弘安八年五月廿九日)	同
紙本着色樹下人物圖(傳吐魯番出)(裏貼唐戶籍帳故紙)	同	醍醐寺	快園筆梵字真言(弘安八年四月十九日)	同
紙本着色三十六歌仙切(佐竹家傳來、友則)	同	醍醐寺	志願筆結緣記(弘安八年五月二日)	同
紙本淡彩風濤圖(雪村筆)	同	醍醐寺	紫紙金字大方廣佛華嚴經卷第七十(東大寺印)ノ朱印アリ	同
絹本着色大日金輪像	同	醍醐寺	紙本墨書萬葉集卷第十一(嘉曆三年三月十六日相傳ノ奥書アリ)	同
絹本着色彌叔菩薩像	同	醍醐寺	紙本墨書源氏物語(若菜、繪合、行幸、柏木、鈴虫、總角殘卷) 六帖	同
絹本着色大威德明王像	同	醍醐寺	紙本墨書源氏物語抄(卷上)	同
紙本淡彩四季山水圖(海北友松筆、八曲屏風)	池田市	南喜三郎	紙本墨書後伏見天皇宸翰古今和歌集(奧ニ元亨二年仲呂七日ノ御識語アリ)	同
紙本淡彩山水圖(狩野正信筆)	伊丹市	小西新右衛門	宋刊本唐書七十一下(宰相世系表第十一)(金澤文庫本)	同
紙本着色當麻寺緣起(寛永十年ノ奥書ニ狩野山樂等十二筆者名アリ)附蓮花時繪宮(寛永六年寄進ノ記アリ)三卷	奈良縣	慶斗勝一	紙本墨書源氏物語抄(永仁七年二月廿七日書寫ノ奥書アリ)	同
紙本墨畫五大力菩薩像(表精元和八年ノ修理記ニ建久八年豐前五郎爲廣筆トアリ)五幅	和歌山縣	普賢院	紙本墨書細字法華經八卷、附仁和寺任助法親王御讓狀(天正十二年六月廿一日)	同
文書典籍書蹟之部	國(東北帝國大學保管)	上	紙本墨書經平大貳家歌合(應德三年三月十九日)	同
紙本墨書類聚國史卷第廿五	同	上	紙本墨書三朝宸翰(花國天皇宸翰御消息(十二通)後醍醐天皇宸翰御消息(十通)伏見天皇宸翰御消息(二通))	同
紙本墨書史記(孝文本紀第十、延久五年大江家國書寫點了ノ奥書アリ)	同	上	紙本墨書從二位藤原親子歌合(寛治五年十月十三日)	同
紺紙金字法華經(各卷ニ大治四年七月十三日爲藤原清衡書寫了ノ奥書アリ)八卷	栃木縣	輪王寺	紙本墨書破邪論(法琳撰、保安四年五月三日書寫ノ奥書アリ)〔法隆寺一切經ノ黑印アリ〕	同
紙本金字一字寶塔法華經不輕品神力品殘卷	同	同	紙本墨書大般涅槃經卷第十六殘卷(敦煌出)(軸木ニ北魏太和八年ノ墨記アリ)	同
紙本墨書類聚歌合殘卷、附原表紙、目錄等二十五枚 十卷	東京市	霞山會館内 財團法人陽明文庫	金銀繪料紙墨書明全戒牒(正治元年十一月八日)(奥ニ道元ノ識語アリ)	同
紙本墨書歌合目錄	同	同	紙本墨書希玄道元筆普勸坐禪儀(天福元年中元日書寫ノ奥書アリ)	同
彩賤墨書觀普賢經冊子(中一箇所ニ著色下繪、二箇所ニ和歌アリ)	同	同	紙本墨書希玄道元筆普勸坐禪儀撰述記	同
騎獅文殊菩薩像(康國作)内納入造像關係文書 十二點	同	同	紙本墨書孤雲懷英筆正法眼藏佛性第三(仁治四年書寫、正嘉二年校合ノ奥書アリ)	同
經玄筆造像顯文(文永十年十一月晦日) 日書寫ノ奥書アリ、見返シニ絹本着色稚兒文殊出現圖アリ)	同	同	宋刊本玉篇	同
紙本墨書	名古屋市	寶生院		

宋刊本新雕雙金(熙寧二年十月望日ノ刊記アリ)

名古屋市

寶生院

紙本墨書理趣釋(淳祐筆、延喜廿年八月十六日ノ奥書アリ)

京都市

仁和寺

宋刊本僧史略

宋刊本廣韻(上聲)

宋刊本禮部韻略(去聲闕)

宋刊本紹聖新添周易神殺曆等殘卷

紙本墨書古事記上卷抄

紙本墨書扶桑略記(卷第一殘卷、第三)

紙本墨書三寶繪殘卷(八十六枚、保安元年六月七日寫了ノ奥書アリ)

紙本墨書古今和歌集卷第十三殘卷(十五枚)

紙本墨書源氏物語

紙本墨書金葉和詩集(三奏本)

宋刊本太平御覽(李昉等編)

宋刊本中庸說(卷第一、第二、第三、張九成著)

宋刊本義楚六帖(義楚集)附後陽成天皇宸翰題簽並御添狀(慶長十七稔秋)

宋刊本圓悟禪師語錄(紹隆寺編、二部)

宋刊本佛鑑禪師語錄(第四冊ニ淳祐十一年ノ刊記アリ)

宋刊本台宗十類因革論(善月述)

宋刊本四明十義書智禮撰(繼忠述)

宋刊本山家義苑(上下、可觀述)

宋刊本楞伽通義(善月述)

宋刊本楞伽經(蘇軾寫刻本)

宋刊本四分律比丘尼鈔(道宣述、第六帖ニ開禧三年ノ刊行跋アリ)

宋刊本宗門統要集(宗永集、第五冊ニ淳熙六年ノ刊行跋アリ)

紙本墨書元亨釋書

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(正月十一日)

紙本墨書神代系圖

紙本墨書帝系圖(應安四年七月十八日書寫ノ奥書アリ)

紙本墨書後拾遺和歌抄

紙本墨書續詞花和歌集

紙本墨書孔雀經(卷中下)

紙本墨書如意輪儀軌(天正二年五月八日任助法規王ノ御跋アリ)

紙本墨書十地經(並十力經、廻向輪經)

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

太刀(銘家忠)

工 藝 之 部

西宮市 三矢進一郎

品 彫 刻 之 部

目

所 有

者

朱漆金銅製神輿

福島縣 伊佐須美神社

本造大日如來坐像(本堂安置)

千葉縣

妙樂寺

金錯狩獵文銅筒

東京市 男爵 國(東京美術學校保管)

本造不動明王立像(室堂安置)

福井縣

大谷寺

曜變天目茶碗

東京市 男爵 岩崎小彌太

本造藥師如來坐像(本堂安置)

同

明通寺

金錯鳥獸雲文銅盤

同 侯爵 細川 護立

本造深沙大將立像

同

同

文字天目茶碗

大阪市 男爵 鴻池善右衛門

本造不動明王立像

同

同

龍甲手天目茶碗

同 同 人 人

本造手觀音立像

同

同

飛青磁花瓶

大阪府 同 土師神社

本造毘沙門天立像(像内ニ治承二年七月廿四日ノ銘アリ)

同

同

犀角柄刀子

同 同 人 人

本造不動明王立像

同

同

青白磁圓硯

同 同 社

本造毘沙門天、吉祥天、善財童子立像 三軀

同

同

伯牙彈琴鏡(傳管公遺品)

同 同 社

本造慈惠大師坐像(大師堂安置、像内ニ文永十一年十二月九日僧榮盛、佛師法橋ノ快ノ銘アリ)

同

同

〔按散時繪鏡匣〕

高知縣 延光寺

本造妙見菩薩立像(像内ニ正安三年五月廿一日佛師院命ノ銘アリ)

愛知縣

眞福寺

銅鐘(延喜十一年正月彌勒寺ノ銘アリ)

同 同 社

本造聖觀音立像(横川中堂安置)

宇治山田市

中西用康

◎文部省告示第八百二十三號 十一月六日

國寶保存法第一條ニ依リ左記物件ヲ國寶ニ指定ス

本造持國天立像一、多聞天立像一(所在常行堂) 二軀

滋賀縣

延曆寺

名 稱

所在地

本造維摩居士坐像

同

同

那谷寺本堂大悲閣

石川縣 石川縣江沼郡那谷村同 寺

本造慈惠大師坐像(像内ニ弘安九年七月ノ銘アリ)

同

同

同 三 重 塔

同 同 寺 境内

本造慈惠大師坐像(像内ニ文永五年十月三日金剛佛子榮盛ノ銘アリ)

同

同

同 護 摩 堂

同 同 寺 境内

本造不動明王坐像(像内ニ建仁三年五月四日巧匠安阿彌隨佛ノ銘アリ)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造明惠上人坐像(開山堂安置)

同

同

須波阿須疑神社

福井縣 福井縣今立郡上池田村同 社

本造白光神立像(附漆漆厨子)

同

同

金剛寺食堂

大阪府 大阪府南河内郡長野町同 寺

本造阿彌陀如來坐像(像内ニ元亨元年三月日法印堯圓ノ銘アリ)

京都府

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造藥師如來及兩脇侍像(本堂安置) 三軀

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

同 鐘 樓

同 同 寺 境内

本造手觀音立像(本堂安置)

同

同

乾漆聖觀音坐像
木造毘沙門天立像

香川縣
同

願興寺
香西寺

工 藝 之 部

銅鐘(嘉元四年八月十五日大檀那崇演ノ銘アリ)

弘前市

長勝寺

松喰鶴長方鏡(鏡面ニ觀音像ノ線彫アリ)

東京市

大坪 正吉

埴輪鷹狩男子像

同

松原 正業

木造扁額(額文「天滿宮」裏面ニ建治元年六月廿六日書之

東京府

天滿宮

藤原經朝ノ銘アリ)

福井縣

瀧谷寺

金銅寶相華文磬

奈良市

春日神社

金銀裝沃懸地毛拔形太刀

同

社

古神寶銅鏡 十六面

同

社

一、素文鏡 二、(各鏡背ニ春日御料寛弘八年正月八日ノ銘アリ)

一、藤花松喰鶴鏡 三、(内一面一部缺損)

一、瑞花雙鳳八稜鏡 一

一、唐花雙鳳八稜鏡 一

一、牡丹唐草尾長鳥八稜鏡 八(内三面一部缺損)

一、寶相華唐草八稜鏡殘片 一

同 社

昭和十六年度國寶御料歸屬及所有者

變更等

文部省告示第十一號 一月十六日

昭和十五年六月五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

新所有者

台德院(德川秀忠)靈廟

東京市芝區芝公園一號地

舊所有者

東京市

新所有者

崇源院(德川秀忠夫人)靈牌所

東京市芝區芝公園一號地

舊所有者

東京市

新所有者

附、崇源院寶塔、天英院(德川家宣夫人)寶塔、廣大院

同

舊所有者

東京市

新所有者

昌院(德川綱吉)寶塔、桂

同

舊所有者

東京市

新所有者

月光院(德川家繼母)寶塔

同

舊所有者

東京市

新所有者

文昭院(德川家宣)靈廟

同

舊所有者

東京市

新所有者

附、廣德院(德川家慶)寶塔、靜

同

舊所有者

東京市

新所有者

昭德院(德川家茂)寶塔、寶塔

同

舊所有者

東京市

新所有者

有章院(德川家繼)靈廟

同

舊所有者

東京市

新所有者

附、靜信院(德川家重)寶塔

同

舊所有者

東京市

新所有者

嚴有院(德川家綱)靈廟

同

舊所有者

東京市

新所有者

附、淡明院(德川家治)寶塔

同

舊所有者

東京市

新所有者

古美術保存

常憲院(德川綱吉)靈廟
附、有德院(德川吉宗)寶塔、
孝恭院(德川家基)寶塔、溫恭
院(德川家定)寶塔、天璋院(德
川家定夫人)寶塔

東京市下谷區
上野櫻木町九番地

東京市
公爵 德川家達

東京市
公爵 德川家正

品 目

太刀(銘國綱)

東京市

公爵 德川家達

東京市
公爵 德川家正

太刀(銘吉房)

同

同

同

太刀(銘則房)

同

同

同

太刀(銘三條)

同

同

同

太刀(銘助貞)

同

同

同

短刀(銘國光)

同

同

同

刀(無銘、傳貞宗)

同

同

同

太刀(銘備州長船住景光、正和五年十月日)

同

同

同

太刀(銘久國)

同

同

同

刀(無銘、傳正宗(附打刀拵)

同

同

同

刀(無銘、傳義弘)

同

同

同

紙本墨書國信克勤墨蹟(建炎二年二月十二日)

同

同

同

紙本墨書大慧宗杲墨蹟(四月八日)

同

同

同

紙本墨書虛堂知愚墨蹟

同

同

同

紙本墨書南堂欲墨蹟(至正丁亥年)

同

同

同

紙本墨書擬絕道冲墨蹟(淳祐丁未六月庚子)

同

同

同

紙本墨書竺田悟心墨蹟(至順元年佛成道日)

同

同

同

太刀(銘、雲次)

同

同

同

文部省告示第二十號 一月二十二日

東京市

公爵 德川家達

東京市

國寶中左記ハ昭和十三年五月五日御料ニ歸屬セリ

品 目

品 目

品 目

太刀(傳光忠)

同

同

同

文部省告示第三十三號 一月三十一日

東京市

公爵 德川家達

東京市

昭和十五年十二月二十四日國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目

品 目

品 目

銅造菩薩半伽像

東京市

男爵 鄉 誠之助

東京市

文部省告示第三十四號 一月三十一日

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

品 目

昭和十四年十月二十八日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

文部省告示第二百二十號 三月十日
國寶指定告示中左記ハ之ヲ取消シタリ

銅鐘

文部省告示第二百二十三號 三月十二日

昭和十五年八月二十七日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

絹本着色虚空藏菩薩像

絹本淡彩寒江獨釣圖(傳馬遠筆)

絹本淡彩雪景山水圖(梁楷ノ款印アリ)

絹本着色蓮池水禽圖(德謙ノ款印アリ)

太刀(銘正恒)

太刀(銘備前國長船住兼光、元弘三年八月 日)

文部省告示第二百二十四號 三月十二日

昭和十五年十二月四日左記國寶ノ所有者ニ付左記ノ通變更アリタリ

品 目

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

佐伯 外治
外百五十四人

紙本墨書東大寺領周防國宮野庄田畠等立券文(建久六年九月日)(後乗坊重源ノ袖判裏判アリ)

紙本墨書周防國阿彌陀寺田畠注文(正治二年十月 日)

山口縣防府市東佐波令

文部省告示第六百一號 四月二十四日

左記國寶ハ其ノ構造形式下欄ノ通改メタリ

品 目

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

横濱市鶴見區東寺尾町

山口縣防府市東佐波令

同

八角圓堂、單層、屋根寶形造

本堂桁行七間、梁間四間、寄棟造、禮堂舞臺造、桁行九間、梁間四間、寄棟造、相間桁行一間、梁間七間、兩下屋根、前、端千鳥破風、總檜皮葺、

桁行七間、梁間六間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺、

單層、屋根入母屋造、柿葺

三間三層塔婆、屋根檜皮葺

三間三層塔婆、檜皮葺

本殿、幣殿、拜殿、秋殿、左右橋掛、能樂屋、平舞臺、高舞臺、左右内侍橋(總檜皮葺)、

揚水橋、長橋、反橋ヨリ成ル桁行前五間、後七間、梁間六間、重層、入母屋造、柿葺

三間一戶樓門、屋根入母屋造、柿葺

三間社流造、屋根檜皮葺

八角圓堂、單層、屋根本瓦葺

幣殿、桁行六間、梁間四間、單層、屋根切妻造、柿葺

桁行五間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺、向唐門、屋根檜皮葺、渡廊(低屋根)、桁行八間、梁間一間、單層、屋根檜皮葺(高屋根)、

桁行二間、梁間一間、單層、

滋賀縣 寶 嚴 寺

滋賀縣 淺井郡竹生村

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

滋賀縣 同 寺境內

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

品

延曆寺大乗戒壇院(戒壇院)	滋賀縣 延曆寺	同滋賀郡坂本村	方五間、重層、屋根寶形造、桐葺	圓成寺樓門	奈良縣 圓成寺	奈良縣添上郡大柳寺	三間一戶樓間、屋根入母屋造、檜皮葺
宮崎宮樓門	福岡縣 宮崎宮	福岡縣糟屋郡箱崎町	三間一戶樓門、屋根入母屋造、檜皮葺	知立神社塔婆(文庫又神庫)	愛知縣 知立神社	愛知縣碧海郡知立町	三間二層塔婆、屋根柿葺
阿彌陀堂(白水阿彌陀堂)	福島縣 阿彌陀堂	福島縣石城郡內郷村	方三間、單層、屋根寶形造、桐葺	天恩寺佛殿(地藏堂)	同 天恩寺	同額田郡豐富村	桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺
東福寺月下門(月華門)	京都市 東福寺	京都市東山区本町十五丁目	四脚門、屋根切妻造、檜皮葺	金剛寺塔婆(多寶塔)	大阪府 金剛寺	大阪府南河内郡長岡寺	三間二層塔婆、屋根柿葺
和田神社本殿	大津市 和田神社	大津市膳所本町	一間社流造、屋根檜皮葺	平清水八幡宮本殿	山口縣 平清水八幡宮	山口縣吉敷郡平川村	三間社流造、屋根銅板葺
春日神社著到殿	奈良市 春日神社	奈良市春日野町	桁行七間、梁間三間、單層、屋根片妻入母屋造、片妻切妻造、檜皮葺	興隆寺本堂	愛媛縣 興隆寺	愛媛縣周桑郡德田村	桁行五間、梁間六間、單層、屋根四注造、銅板葺
春日神社攝社若宮神社手水屋	同 春日神社	同 社境内	妻造、桐葺	宮崎宮拜殿	福岡縣 宮崎宮	福岡縣糟屋郡箱崎町	桁行四間、梁間一間、單層、屋根切妻造、檜皮葺
極原神社本殿	奈良縣 極原神社	奈良縣高市郡畝傍町	桁行五間、梁間五間、屋根切妻造、桐葺	宗像神社邊津宮拜殿	同 宗像神社	同宗像郡田島村	桁行六間、梁間一間、單層、屋根切妻造、桐葺
藥師堂(國分寺藥師堂)	仙臺市 藥師堂	仙臺市木ノ下	桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺	風浪神社本殿	同 風浪神社	同三瀨郡大川町	三間社流造、屋根檜皮葺
地蔵堂(藤倉二階堂)	福島縣 地蔵堂	福島縣河沼郡日橋村	方三間、重層、屋根四注造、本瓦葺	富貴寺大堂(薩ノ大堂)	大分縣 富貴寺	大分縣西國東郡田染村	桁行三間、梁間四間、單層、屋根寶形造、本瓦葺
妙源寺柳堂	愛知縣 妙源寺	愛知縣碧海郡津作町	方三間、單層、屋根四注造、桐葺	神角寺本堂	同 神角寺	同大野郡西大野村	方三間、單層、屋根寶形造、檜皮葺
慈眼院塔婆(多寶塔)	大阪府 慈眼院	大阪府泉南郡日根野村	三間二層塔婆、屋根檜皮葺	山梨岡神社本殿	山梨縣 山梨岡神社	山梨縣東山梨郡岡部村	一間社春日造、屋根柿葺、本殿、三間社流造、屋根檜皮葺
永福寺本堂(觀音堂)	下關市 永福寺	下關市觀音崎町	桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、檜皮葺	日吉神社攝社牛尾神社本殿及拜殿	滋賀縣 日吉神社	滋賀縣滋賀郡坂本村	拜殿、桁行三間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、後部本殿、三間社流造、屋根檜皮葺
功山寺佛殿	山口縣 功山寺	山口縣豐浦郡長府町	桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、檜皮葺	日吉神社攝社三宮神社本殿及拜殿	同 日吉神社	同	拜殿、桁行四間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、後部本殿、三間社流造、屋根檜皮葺
大樹寺塔婆(多寶塔)	愛知縣 大樹寺	愛知縣額田郡岩津町	三間二層塔婆、屋根柿葺	小野神社境內小野神社本殿	同 小野神社	同同和通村	桁行三間、梁間二間、單層、屋根切妻造、檜皮葺
瀧山寺本堂(藥師堂)	同 瀧山寺	同 社境内	方三間、單層、屋根入母屋造、桐葺	造風神社本殿	同 造風神社	同同社境内	桁行三間、梁間二間、單層、屋根切妻造、檜皮葺
信光明寺觀音堂	同 信光明寺	同 社境内	三間二層塔婆、屋根檜皮葺	天皇神社本殿	同 天皇神社	同同社境内	桁行三間、梁間二間、單層、屋根切妻造、檜皮葺
智恩寺塔婆(多寶塔)	京都市 智恩寺	京都市府與郡吉津村	三間二層塔婆、屋根檜皮葺	東福寺浴室	京都市 東福寺	京都市東山区本町十五丁目	桁行四間、梁間三間、單層、屋根正而入母屋造、背面切妻造、本瓦葺
唐招提寺禮堂	奈良市 唐招提寺	奈良市五條町	桁行十九間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺	西芳寺湖南亭	同 西芳寺	同右京區松尾神ヶ谷町	本家、桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、桐葺待合及廊下、桁行三間、梁間一間、單層、屋根切妻造、桐葺
萬福寺本堂	鳥根縣 萬福寺	鳥根縣美濃郡益田町	桁行七間、梁間七間、單層、屋根四注造、棧瓦葺	最勝院塔婆(五)	弘前市 弘前市	弘前市新寺町	方三間、五層塔婆、屋根銅
松生院本堂(不動堂)	和歌山縣 松生院	和歌山縣片岡町	桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺				
佐竹寺本堂	茨城縣 佐竹寺	茨城縣久慈郡佐竹村	桁行七間、梁間七間、重層、屋根四注造、上層茅葺、下層桐葺				

重塔)	宮城縣	同院	板葺	古熊神社本殿	山口市	古熊神社	山口市上宇野令	三間社流造、屋根銅板葺
阿彌陀堂	阿彌陀堂	同院	茅葺	金色堂覆堂	岩手縣	金色堂	同社	方五間、單層、屋根寶形造、棧瓦葺
黃金堂	山形縣	同院	桁行五間、梁間四間、單層、屋根寶形造、茅葺	法住寺虛空藏堂	長野縣	法住寺	同社	桁行三間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
善光寺本堂	長野市	同院	桁行十六間、梁間七間、重層、屋根鐘木造、檜皮葺	觀心寺書院	大阪府	觀心寺	同社	桁行四間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
西明寺塔婆(三重塔)	長野市	同院	三間三層塔婆、屋根懸板葺	本山寺本堂	岡山縣	本山寺	同社	桁行四間、梁間五間、單層、屋根四注造、檜皮葺
村檜神社本殿	同	同院	三間社春日造、屋根檜皮葺	兵主神社本殿	大阪府	兵主神社	同社	三間社流造、屋根檜皮葺
木幡神社本殿	同	同院	三間社流造、屋根棚葺	本山寺本堂(觀音堂)	香川縣	本山寺	同社	桁行五間、梁間五間、單層、屋根四注造、本瓦葺
木幡神社樓門	同	同院	一間一戶樓門、屋根入母屋造、棚葺	定光寺本堂(佛教)	愛知縣	定光寺	同社	桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、棚葺
玉村八幡宮本殿	群馬縣	同院	三間社流造、屋根銅板葺	大覺寺宸殿	京都市	大覺寺	同社	桁行六十六尺一寸、梁間四十四尺八寸四分、單層、屋根入母屋造、檜皮葺
本願寺浴室(黃鶴臺)	京都市	同院	浴室、桁行十一間、梁間四間、單層、屋根四注造、棚葺	正福寺地藏堂	東京府	正福寺	同社	方五間、重層、屋根入母屋造上層棚葺、下層懸板葺
新長谷寺塔婆(三重塔)	岐阜縣	同院	三間三層塔婆、屋根檜皮葺	瑞龍寺法堂	高岡市	瑞龍寺	同社	桁行十一間、梁間九間、單層、屋根入母屋造、棧瓦葺、向拜唐破風、銅板葺
國分寺本堂(藥師堂)	高山市	同院	桁行五間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、銅板葺	染羽天石勝神社本殿	島根縣	染羽天石勝神社	同社	三間社流造、屋根檜皮葺
大德寺鐘樓	京都市	同院	桁行三間、梁間二間、重層、桁腰、屋根入母屋造、本瓦葺	筑摩神社本殿	松本市	筑摩神社	同社	三間社流造、屋根檜皮葺
福徳庵本堂	長野縣	同院	母屋造、棚葺	大日堂	和歌山縣	大日堂	同社	桁行五間、梁間五間、單層、屋根四注造、本瓦葺
觀智院客殿	京都市	同院	桁行七間、梁間三間、屋根入母屋造、棚葺	伊達政宗靈廟瑞鳳殿	東京府	伊達興宗前	同社	桁行三間、梁間三間、單層、屋根寶形造、銅板葺
五社神社社殿	濱松市	同院	本殿、桁行五間、梁間四間、權幣殿、桁行三間、梁間一間、權現造單層、屋根銅板葺	神明宮社殿	長野縣	神明宮	同社	本殿、桁行三間、梁間二間、中門(前殿)、四脚門、單層、屋根切妻造、檜皮葺
長保寺鎮守堂	和歌山縣	同院	一間社流造、屋根檜皮葺	諏訪神社社殿	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺
勝手神社本殿	滋賀縣	同院	三間社流造、屋根檜皮葺	諏訪神社	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺
常寂光寺塔婆(多寶塔)	京都市	同院	三間二層塔婆、屋根檜皮葺	諏訪神社	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺
普濟寺佛殿(觀音堂)	京都府	同院	桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺	諏訪神社	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺
妙成寺書院	石川縣	同院	桁行七間、梁間七間、屋根四注造、棧瓦葺	諏訪神社	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺
妙成寺經堂	同	同院	正面三間、側面五間、單層、屋根四注造、檜皮葺	諏訪神社	濱松市	諏訪神社	同社	本殿、二間社流造、屋根檜皮葺

皮繪 唐門、平唐門、屋根繪皮葺
附透塀、左右各一間、屋根
繪皮葺
棧門三間、一戸棧門、屋根棚
葺

◎文部省告示第六百三十七號 五月九日

昭和十五年十月七日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

蝶蒔繪螺鈿手篋 東京市 伯爵 松平 直亮 東京市 伯爵 松平 直國

油滴天目茶碗 同 同 人 同 同 人

片輪車蒔繪螺鈿手篋 同 同 人 同 同 人

紙本墨畫遠浦歸帆圖(傳牧谿筆) 同 同 人 同 同 人

◎文部省告示第六百五十六號 五月十六日

昭和十六年一月三十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

薙刀(銘備前國長住人長光造) 東京市 子爵 松平 康泰 東京市 中島喜代一

文部省告示第六百八十四號 六月三日

昭和十六年五月二十五日左記國寶ノ所有者近郷獎太郎ノ住所下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 住 所 新 住 所

太刀(銘則重) 富山市總曲輪 福岡市西高宮

文部省告示第六百九十四號 六月七日

昭和十六年五月二十日左記國寶所有者ニ付左記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

磁製法花蓮梵文壺 大阪市 池戸宗三郎 京都市 富田 熊作

文部省告示第六百九十五號 六月七日

昭和十六年二月三日左記國寶所有者下記ノ通改名アリタリ

品 目 舊 氏 名 新 氏 名

紙本著色三十六歌仙切(順)(佐 京都市 山口 玄洞 山口 三郎

竹家傳來)

文部省告示第七百三號 六月十八日

昭和十六年五月十四日左記國寶ノ所有者男爵團伊能ノ住所下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 住 所 新 住 所

絹本著色地藏菩薩像 東京市澁谷區原宿三丁目 東京市麻布區材木町

紙本著色法然上人繪傳 同 同

絹本著色鄒陽圖(尾形光琳筆) 東京市澁谷區原宿三丁目 東京市麻布區材木町

紙本著色華嚴五十五所繪卷殘欠(十知識第九第十段並ニ彌勒菩薩段) 同 同

紙本著色三十六歌仙切(敦忠)(佐竹家傳來) 同 同

手鑑(二十四葉) 同 同

紙本墨蹟梵琦楚石墨蹟(至正三年冬) 同 同

紙本墨書清正集與風集 同 同

紙本墨書和泉式部續集(殘卷、表題ニ高遠大貳集トアリ) 同 同

白描繪料紙墨書金光明經(卷第二、第四各斷簡) 同 同

絹本著色弘法大師像 同 同

金地著色樓閣山水圖(池大雅筆、六曲屏) 同 同

木造觀世音立像 同 同

絹本著色千手觀音像(像內納入品)二點 同 同

紙本淡彩山水圖(李在筆) 同 同

置龍鏡 同 同

文部省告示第七百三十五號 七月十八日

昭和十六年六月二十五日左記國寶所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

紙本墨書和漢朗詠註略抄 二帖 東京市 黒木 典雄 東京市 小林 正直

文部省告示第七百三十六號 七月十八日

昭和十六年六月二十六日左記國寶ノ所有者子爵伊東祐淳ノ住所下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 住 所 新 住 所

銅鐘(金ノ承安六年ノ銘アリ) 東京市赤坂區一ツ木町 東京市澁谷區松濤町

文部省告示第七百五十九號 八月九日

昭和十六年七月十七日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

紙本墨書金光明最勝王經註釋(卷第四斷簡)(飯室切) 京都市 土橋嘉兵衛 東京市 長尾 欽彌

文部省告示第七百八十一號 九月十五日

昭和十六年八月二十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所有 者 新 所有 者

紙本淡彩納涼圖(久隅守景筆、二曲屏) 東京市 伯爵 牧野 仲顯 飯塚市 麻生太賀吉

文部省告示第七百八十二號 九月十五日

昭和十六年八月二十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
紙本着色弘法大師繪傳 東京市 池田 成彬 兵庫縣 小河謙三郎

文部省告示第七百八十六號 九月十六日

昭和十六年四月二十八日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
紙本着色三十六歌仙切(佐竹家 傳來)(是則) 東京市 津村 重舍 東京市 津村基太郎

文部省告示第七百八十七號 九月十六日

昭和十六年五月十四日左記國寶ノ所有者下記ノ通改名アリタリ

品 目 舊 氏 名 新 氏 名
紙本着色三十六歌仙切(佐竹家 傳來)(是則) 東京市 津村基太郎 津村 重舍

文部省告示第七百九十五號 九月二十七日

昭和十五年十二月十一日左記國寶ノ所有者男爵川崎武之助ノ住所下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 住 所 新 住 所
絹本着色千手觀音像 神戸市神戸區加納町一丁 兵庫縣武庫郡魚崎町

絹本着色桓野王圖(「錢選之印」ノ印アリ)

同 同 同

絹本着色寒山拾得圖(傳顏輝筆)

同 同 同

紙本墨畫豐干寒山拾得圖(因陀羅筆)

同 同 同

文部省告示第八百十號 十月十五日

昭和十六年七月七日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
木造天部形像 滋賀縣蒲生郡鏡山村藥師 滋賀縣蒲生郡鏡山村藥師 正念寺

文部省告示第八百九號 十月十五日

昭和十六年二月六日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

名 稱 舊 所 新 所 所有者
阿彌陀堂 宮城縣伊具郡西根村 宮城縣伊具郡西根村 阿彌陀堂

阿彌陀如來坐像 同 同

文部省告示第八百十二號 十月十五日

昭和十六年九月二十四日左記國寶ノ所有者伯爵勸修寺末雄ノ住所下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 住 所 新 住 所 所有者
紙本墨書大御記 六卷 東京市麴町區九段四丁目 京都市上京區小川通中立賣上ル小川町

文部省告示第八百二十一號 十一月四日

昭和十六年九月二十九日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
白描繪料紙墨書金光明經(卷第二斷簡) 東京市 池田 成彬 東京市 小林 一三

文部省告示第八百四十三號 十一月二十八日

昭和十六年十月二十四日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
木造藥師如來坐像 滋賀縣蒲生郡岡山村 藥師 堂 滋賀縣蒲生郡岡山村 善性寺

文部省告示第八百四十四號 十一月二十八日

昭和十六年十一月一日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
銅鏡(秋草松喰鶴文) 大阪府 山川七左衛門 大阪府 池田庄三郎

銅鏡(梅樹双雀文)

同 同 同

銅鏡(松喰鶴文)

同 同 同

文部省告示第八百五十四號 十二月五日

昭和十六年十一月二十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
太刀(銘、備州長船住國宗) 東京府 赤星 鐵馬 東京市 中島喜代一

文部省告示第八百五十七號 十二月九日

昭和十六年十一月十八日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
紙本着色不動利益緣起 大阪府 戸田 彌七 東京市 鹽原 千代

文部省告示第八百六十八號 十二月二十三日

昭和十六年十一月二十八日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 舊 所 新 所 所有者
太刀(銘不明、傳則房) 新潟市 風間 要吉 東京市 篠原三千郎

昭和十六年度國寶修理補助金交付額

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶維持修理ニ對シ補助金ヲ交付セルモノ左ノ如シ

建造物之部

府縣 件 名

修理費豫算額

補助額

京都 本圀寺經藏

二、一六四、九六

一〇、八〇〇、〇〇

同 高臺寺傘亭及時雨亭

九、八〇八、八〇

九、七二〇、〇〇

同 十八神社本殿

六、五九九、五七

五、三〇〇、〇〇

同 淨土院養林書院

一四、〇八九、四二

八、五〇〇、〇〇

奈良

昭和十六年度法隆寺國寶保存工事費(舍利殿、繪殿及傳法堂、北室院本堂及唐門、五重塔、伽藍保存施設)(金堂壁畫保存)

一四五、〇〇〇、〇〇

一三五、〇〇〇、〇〇

滋賀 大寶神社境内追來神社本殿

四、五一五、〇〇

一、〇〇〇、〇〇

同 小田神社樓門

二二、八八六、〇〇

一五、〇〇〇、〇〇

同 丸岡城天守

六四、五〇二、四三

一五、八〇〇、〇〇

京都 妙心寺浴室

二二、五九一、八七

一一、三〇〇、〇〇

同 岩船寺三重塔

四三、九九二、二七

四、〇〇〇、〇〇

兵庫 一乘寺(塔婆、妙見堂)

五一、四八〇、〇〇

一五、〇〇〇、〇〇

奈良 靈山寺本堂

六三、三七四、九九

一五、〇〇〇、〇〇

同 吉水神社書院

五九、一八二、七四

二一、二〇〇、〇〇

同 國分寺本堂

五八、一七〇、〇〇

二〇、〇〇〇、〇〇

奈良 圓福寺本堂

三三、八六八、〇〇

四、〇七六、〇〇

計

六二三、二二五、三三

二八二、九四八、〇〇

府縣

所有者

修理費豫算額

補助額

栃木 輪王寺

一、五九〇、〇〇

九九〇、〇〇

山梨 願成寺

四、六七九、六七

三、七〇〇、〇〇

京都 高山寺

五九七、五〇

五一〇、〇〇

同 知恩院

九六九、〇〇

六〇〇、〇〇

同 妙法院

二〇、九〇八、四九

一二〇〇〇、〇〇

香川 觀音寺

一、六四九、〇〇

八二五、〇〇

滋賀 延曆寺

三三八、〇〇

一九〇、〇〇

兵庫

藥仙寺 木造藥師如來坐像

一軀

八四七、七四

三四〇、〇〇

兵庫

一乘寺 木造法道仙人立像

一軀

三六三六、二六

二、九〇〇、〇〇

奈良

東大寺 木造十二神將立像

十二軀

四、六三一、三七

二、八〇〇、〇〇

同

金剛山寺 木造司錄坐像

一軀

一、三七一、二三

一、〇〇〇、〇〇

同

三本松區 木造地藏菩薩立像

一軀

一、七五七、三三

一、四〇〇、〇〇

計

四二、九五五、五九

二七、二五五、〇〇

昭和十六年度重要美術品等認定

文部省告示第四百八十八號 四月九日

昭和八年法律第四十三號(重要美術品等ノ保存ニ關スル件)第二條ニ依リ左ノ物件ヲ認定ス

繪畫之部

品

目

所

所有者

絹本淡彩賣茶翁圖(渡邊崋山筆、天保八年ノ年記アリ)

青森縣

佐々木嘉太郎

絹本著色松崎懷堂像(渡邊崋山筆)、附紙本墨書松崎懷堂自筆添幅二幅

同

瀧澤 靜雄

絹本著色溫澤琴嶺像(渡邊崋山筆、天保七年ノ年記アリ)

同

小室貞次郎

紙本淡彩立原翠軒像畫稿(渡邊崋山筆)

同

柳原 義光

絹山手錄「萬繪堂日錄」

同

前山 宏平

絹本著色山水圖(六曲屏)

同

岩崎小彌太

絹本著色溪山煙雨圖(渡邊崋山筆、天保九年ノ年記アリ)

同

男爵 柳原 義光

絹本著色春日宮曼荼羅圖

同

平福 元一郎

紙本墨畫渡邊巴洲像畫稿(渡邊崋山筆)

同

渡邊 元一郎

渡邊崋山印(牙一、劍二、陶三、木四、石十一) 二十一顆

同

反町 茂作

紙本墨畫十二天圖像(珍海樓本) 十二幅

同

同 上

紙本墨畫騎牛讀書圖(仲安貞康筆)

同

同 上

紙本墨畫四睡圖(默庵筆、紹密ノ贊アリ)

同

侯爵 後藤 末雄

紙本著色神寶圖卷(内一卷ニ應永十七年書寫ノ奥書アリ)

同

同 上

絹本著色清原宣賢像(弘治二年惟高妙安ノ贊アリ)

同

子爵 舟橋 清賢

崋山手錄「客坐錄」(一冊ニ天保二年他ニ天保六年ノ年記アリ) 二冊

同

山口八十八

崋山手錄「客坐縮寫」(文政八年ノ年記アリ)

同

同 上

嶺山手録「辛巳畫稿縮本」

東京市

山口八十八

東京市 伯爵

渡邊 昭

嶺山手録

同

上

同

上

紙本着色過去現在因果經卷二(建長六年ノ本奥書及永正十三年智祥書寫ノ奥書アリ)

同

中澤 義一

同

上

嶺山手録「客坐掌記」(天保九年ノ年記アリ)

同

鍋木 武輔

同

上

紙本着色貓圖(渡邊嶺山筆)

同

原 良三郎

同

上

紙本淡彩松崎憐堂像畫稿(渡邊嶺山筆、文政九年ノ年記アリ)

同

下村 仙

同

上

紙本淡彩松崎憐堂像畫稿(渡邊嶺山筆)

同

上

同

上

紙本淡彩市河米庵像畫稿(渡邊嶺山筆)

同

上

同

上

紙本淡彩佐藤一齋像畫稿(渡邊嶺山筆、第二トアリ)

同

上

同

上

紙本淡彩佐藤一齋像畫稿(渡邊嶺山筆、第十一トアリ)

同

上

同

上

嶺山手録「嶺山先生謄錄」(二冊)

濱松市

大谷喜太郎

同

上

嶺山手録「客坐掌記」(天保三年ノ年記アリ)

同

高林 泰虎

同

上

嶺山手録「壬午畫稿」

同

方 廣 寺

同

上

紙本着色無文元選像(應安六年智納ノ贊アリ)

同

淺井 岩次

同

上

嶺山手録「客坐掌記」(天保九年ノ年記アリ)

同

上

同

上

嶺山手録「客坐縮臨」(天保三年ノ年記アリ)

同

上

同

上

嶺山手録「毛武遊記」

同

上

同

上

紙本着色ヒボクラテス像(渡邊嶺山筆、天保二年ノ年記アリ)

同

小島和四郎

同

上

紙本淡彩異魚圖(渡邊嶺山筆、天保十一年ノ年記アリ)

同

淨 福 寺

同

上

紙本着色十王圖(延徳元年土佐光信筆ノ押紙アリ) 十幅

同

海北正之助

同

上

紙本着色海北友松夫妻像(海北友雪筆、享保九年ノ贊アリ)

同

藤堂 祐範

同

上

紙本墨畫石雲清事圖(冷泉爲恭筆、跋ニ安政四年ノ年記アリ)

同

同 上

同

上

紙本着色忘形見圖(冷泉爲恭筆、附紙本墨畫忘形見圖畫稿(冷泉爲恭筆、二卷) 二卷)

同

田中忠三郎

同

上

紙本墨畫諸親音圖像(承暦二年定深書寫ノ奥書アリ)

同

上

同

上

木造男神半跏像

大阪市

田万 清臣

同

上

銅造如意輪觀音半跏像

姫路市

慶 雲 寺

同

上

文書典籍書蹟之部

紙本墨書後撰和歌集卷第一斷簡(白河切)(たいしらす、ひとこゝろ)

東京市

伯爵 渡邊 昭

同

上

紙本墨書後撰和歌集卷第八斷簡(白河切)(五葉半) (第一葉ニ「後撰和歌集第八」トアリ)

同

上

同

上

紙本墨書後撰和歌集卷第九斷簡(白河切)(すみよしのきしのしらなみ)

同

上

紙本墨書後撰和歌集卷第十斷簡(白河切)(いまはといふまのを)

同

上

紙本墨書千載集卷第十一斷簡(日野切)(待賢門院のほりかは、あらゐそのれふり)

同

上

紙本墨書源賴朝筆消息(文治三年十一月九日山城介宛)

同

上

紙本墨書源賴朝筆消息(天保十二年五月一日光明皇后御願經)

同

上

紙本墨書策彦周良墨蹟(雪履)

同

上

紙本墨書源賴朝筆消息(文治三年十一月九日山城介宛)

同

上

紙本墨書大寶積經卷第八十一(神護寺)ノ朱印アリ)

同

上

紙本墨書源氏物語(桐壺)嘉祿二年藤原爲經書寫ノ奥書アリ)

同

上

紙本墨書藤原雅經筆熊野懷紙(行路水、暮炭竈)

同

上

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(いか計)

同

上

紙本墨書手鑑翰墨帖(中ニ伏見天皇宸翰(廣澤切)、後奈良天皇、後陽成天皇、後西天皇ノ宸翰アリ)

同

上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息(孟夏望日御花押、式部少輔宛)

同

上

紙本墨書御注字經殘卷(紙背ニ文書アリ)

同

上

紙本墨書古文孝經(延文元年十月廿三日清原教氏傳授ノ奥書アリ)

同

上

紙本墨書論語(天文庚戌夏四月日清原枝賢ノ奥書アリ)

同

上

紙本墨書論語義疏(卷第二、第四、第五、第六、第七、第八、卷第八奥ニ清原良兼ノ花押アリ) 六冊

同

上

紙本墨書中庸(朱熹章句、弘利二年榮山寺行宮ニ於テ隱士禪惠書寫ノ奥書アリ)

同

上

紙本墨書大學(清原宣賢筆、永正十一年十月廿二日書寫ノ奥書竝ニ大永天文年間講義ノ記アリ)

同

上

紙本墨書左傳聽座(清原宣賢筆、卷第廿九、第卅ニ抄出加點ノ記アリ) 十二冊

同

上

紙本墨書尙書聽座(清原宣賢筆) 五冊

同

上

新潟市

侯爵 前田 利爲

上

上

[illegible]

上、

上 上 同 同

上、下、中、下

同 上

同 根岸綱吉

同 齋藤茂一郎

同
子爵
吉川
元光

同
篠原三千郎

同上

侯爵 池田 仲博

同上

池田龜三郎

武富邦茂

同 司 木村篤太郎

司 同

久 呆 或 夫

同	同
三夫	久保 威夫
隆夫	

新潟市

金澤市 男爵 本多 政樹

名古屋市中川 茂雄

同
熱田神宮

滋賀縣財團法人下郷共濟會

京都市
吉田 由道

大阪市
花崎源次郎

同 石倉 保介

神戸市
池田
友助

西宮市
三矢國夫

兵車縣	可頼亮三郎
-----	-------

河津虎三郎
吉屋鼎
吉屋市
頼田呆太郎

芦屋市
瀬戸保太郎

短刀(銘備州長船兼光、延文[年十一月 日]
刀(銘井上眞改、延寶五年八月 日)
刀(銘守次)

兵庫縣
同
福岡市
木村巳之吉
伊藤 文一
福本 誠一

工藝品及考古學資料之部

銅鐘(正平十一年六月廿四日大工左衛門大夫景弘ノ銘アリ)

山形縣
龍興寺

磁製赤繪牡丹獅子文大皿(「陳文呈造」ノ銘アリ)
銅鉢(口ニ奥州近津宮御鉢大檀那沙彌道久大工沙彌勝
阿彌應永十八年十月十日ノ刻銘及三口ニ近津宮御鉢聖
越後律師長榮大工沙彌勝阿彌ノ刻銘アリ)五口

同
井上 庄七

銅製御正體鏡板(背面ニ奉鑄奥州一ノ宮御寶前石河安養
寺大檀那源朝臣清光天正十年九月吉日若城大工長山對
馬守重吉造之ノ刻銘アリ)

同
都々古別神社

銅製松喰鶴鏡(鏡背ニ大元明王永仁三年七月十日ノ墨書
アリ)

同
都々古別神社

鐵鉢(外側ニ奉鑄大鎗大神御鉢文明十九年六月一日大工
秀次ノ鑄銘アリ)

同
大鎗矢神社

銅鐘(應永廿三年十一月廿一日大工性壽ノ銘及大永二年
元和十年ノ追銘アリ)

同
足利市

板石塔婆(來迎三尊像及寶篋印塔アリ)(下部缺損)

同
栃木縣

板石塔婆(貞永二年正月七日ノ銘アリ)

同
埼玉縣

板石塔婆(各ニ正安三年月日ノ銘アリ)二基
板石塔婆(德治二年結制日淺羽行成供養ノ銘アリ)

同
同

銅鐘(文應二年三月日大工物部季重ノ鑄銘アリ)

同
同

板石塔婆(元弘三年五月廿二日無學祖元乾坤無卓ノ偈アリ)

同
同

板石塔婆(二聯形)(曆應四年十月日ノ銘アリ)

同
同

板石塔婆(來迎三尊像及嘉元四年二月日ノ銘アリ)

同
同

板石塔婆(貞和二年十月十三日爲日蓮大聖人六十五年忌
辰云々ノ銘アリ)

同
同

板石塔婆(永仁四年二月日ノ銘アリ)

同
同

板石塔婆(三聯形)(正嘉二年二月廿日ノ銘アリ)

同
同

同
同

板石塔婆(一面ニ善光寺三尊一面ニ釋迦如來ノ像アリ)

同
同

壇輪男子坐像(群馬縣群馬郡澗川村八幡原出土)

同
同

壇輪短甲着像(群馬縣群馬郡澗川村八幡原出土)

同
同

板石塔婆(延慶四年三月八日眞佛報恩ノ銘アリ)

同
同

板石塔婆(俱利迦羅ノ像アリ)

同
同

同
同

銅製孔雀尾長鳥文簪

同
同

銅製孔雀文簪

同
同

銅製孔雀文簪

同
同

銅製孔雀文簪

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

東京市
前山 宏平

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

石器玉器類(長崎亭目筆圖卷附) 四十六點

段威六段草摺腹卷

鐵製松竹梅文眞形釜(傳古蘆屋作)

鐵製竹梅文眞形釜(傳古蘆屋作)

朱漆金銅瓜文軍陣鞍

黑漆螺銅尾長巴文鞍

竹製華籠(櫃付)(櫃蓋裏ニ文明十四天壬寅孟秋十九日ノ墨書アリ) 十九枚

乾漆製蓮花文華籠(櫃付蓋ヲ缺ク) 六枚

袈裟襪文銅鐸(傳愛知縣寶劔郡八幡村千兩出土)

滋賀縣大津市崇福寺出土品

白綾包腹卷(附鍍銀籠手金具一隻、同歸當一隻、烏帽子一頭、刻鞘腰刀一口、扇殘闕一本)

長門國鑄錢司遺物(利同錢範片 十二箇、埴塼片 二箇)

土偶(茨城縣稻敷郡大須賀村福田貝塚出土)

土偶(千葉縣海上郡海上村余山貝塚出土)

土偶(千葉縣印旛郡安食町龍角寺貝塚出土)

土偶(茅城縣稻敷郡大須賀村福田貝塚出土)

銅製飛禽花枝八花鏡

平安京大内裏古瓦

裝飾付高坏(大阪府中河内郡高安村出土)

磁製赤繪龍文筒茶碗

磁製綠地金欄手牡丹文盤 五箇

磁製赤繪金欄手孔雀牡丹文盛鉢(有蓋)

磁製赤繪刀馬人飛馬文鉢

磁製赤繪蓮菊文大皿(陳文呈造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

磁製赤繪唐子遊菊唐草文平鉢(方志文造ノ銘アリ)

岐阜市 二本長右衛門

沼津市 原田 準一

名古屋市 森川勘一郎

同 森川 馨

同 三浦 助市

愛知縣 性海寺

同 萬德寺

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

同 犬頭神社

磁製玳瑁花瓶

樂燒黑茶碗(銘東陽坊「利休銘七種ノ内」、長次郎作)

陶製井戸茶碗(銘松永「大名物」、附屬品共)

陶製井戸茶碗(銘坂本「大名物」、附屬品共)

飾太刀

玉造遺材(大阪府堺市西通四丁出土)

袈裟襪文銅鐸(兵庫縣川邊郡津村大字中村出土)

銅鐸(弘安六年二月十八日ノ鑄造銘及永正十六年六月十五日ノ追銘アリ)

鐵造寶篋塔(文保二年八月日ノ銘アリ)

蒔繪人麿獅子山水圖茶筥

青白磁割花唐草文餅

福岡縣福岡市姪濱町

五島山古墳出土品

銅製二神二獸鏡(一部破損)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

銅製二神二獸鏡(破損鉅失)

大阪市 男爵鴻池善右衛門

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

石造寶篋印塔（正中二乙丑正月日
ノ刻銘アリ）愛媛縣 西原外百五名
石造五輪塔（傳岡部十郎夫妻墓）二
基 同 上 同甲七百六十一番地

石造五輪塔 同 上 同甲二百七十九番地

石造寶篋印塔（嘉曆元年七月ノ刻
銘アリ）同 藥師堂 同宮窪村藥師堂境内

石造五重塔（相輪ヲ缺ク）（傳田原
直平墓）大分縣 田原 房美 大分縣西國東郡田原村大字

石造三重塔（貞和四年戊子二月下
旬ノ刻銘アリ）基壇四隅ニ梵字 同 野瀬作外二十一名 同速見郡中山香町大字内河

ヲ刻セル小石柱ヲ具フ）同 河野瀬作外二十一名 同速見郡中山香町大字内河

文部省告示第七百三十四號 七月十七日 六十四番地

品 繪畫之部

書蹟之部

刀劍之部

紙本書色北野天神緣起繪卷

工藝品及考古學資料之部

紙本書後西天皇宸翰御懷紙（詠古寺杉利哥、附常修院宮
御添狀）

太刀（銘、月山）

太刀（菊御作）（燒身）

鍍銀鳩神彫文長覆輪太刀

銅製桐文方鏡（附沈金彫桐文宮 一合）

銅製御正體（一面ニ長祿二年、一面ニ文安二年ノ銘アリ）

銅製蓬萊文鏡

銅製梅樹雙鳥鏡

銅製唐草文獸足釣燈籠 二箇

板石塔婆（俱利迦羅不動種子及弘長二年十一月廿日ノ銘
アリ）

鉦鼓（延慶元年十一月一日ノ銘アリ、長野縣下高井郡夜間
瀨村堂平出土）

手焙形土器（靜岡縣駿東郡須走村西澤出土）

硬玉（勾玉 八 九箇）

蒔繪龜甲繫手篋

古美術保存

同 大字野間甲二百九十番地

同 同甲七百六十一番地

同 同甲二百七十九番地

同 同宮窪村藥師堂境内

同 大分縣西國東郡田原村大字

同 杏掛字坂水二千一百一十番地

同 同速見郡中山香町大字内河

同 六十四番地

同 京都府

蒔繪秋草手篋（附屬品共）奈良市 春日神社
蒔繪松喰鶴散末街重（應仁元年十一月日ノ銘アリ） 同 上 同 水主神社

螺鈿雷文鞍 同 同 岡田 唯吉

袈裟褌文銅鐸（香川縣綾歌郡綾川東山麓出土） 同 同 宮小路賀雄

石造臺座 同 同 觀世音寺

石造寶篋印塔（貞和二年十月二日ノ刻
銘アリ）岡山縣 鼓神社 岡山縣吉備郡岩田村

石造鳥居（應永廿八年辛丑十一月
吉日ノ刻銘アリ）同 本莊八幡宮 同兒島郡本莊村

石造寶篋印塔 三基 愛媛縣 大山祇神社 愛媛縣越智郡宮浦村

文部省告示第七百九十二號 九月二十四日 同 社境内

品 繪畫之部

絹本墨畫雁圖（立原杏所筆、立原翠軒ノ贊アリ）、附立原
杏所書狀（五月十三日木村源六宛）

紙本淡彩觀瀑圖（學史眞藝五十歲トアリ、周鏡、景濂、景
三ノ贊アリ）

紙本墨畫駿牛繪詞斷簡

紙本墨畫戒境院屏繪（圖像）（各幅ニ「高山寺」ノ印アリ）

紙本墨畫火羅圖（圖像）

紙本淡彩山水圖（與謝燕村筆、六曲屏、内一隻ニ寶曆十三
年ノ年記アリ）

紙本淡彩春景山水圖（與謝燕村筆）

紙本墨畫山水圖（賴山陽筆、文政十年ノ自贊アリ）

板繪着色三浦屋圖（繪馬）（有賀常近筆、享保十五年ノ年記
アリ）

紙本墨畫山水圖（岡田半江筆、自贊及享和三年ノ岡田米山
人ノ贊アリ）

紙本淡彩四季山水圖（與謝燕村筆、安永二年ノ年記アリ）

紙本淡彩四季山水圖（漁菴ノ贊アリ）

絹本著色願海上人壽像（冷泉爲恭筆、表襖ニ爲恭自筆自詠
ノ和歌アリ）（附奉慶塗箱、願海ノ自題アリ）一合

紙本墨畫猿猴圖（二日記アリ、六曲屏）

同 同 湯淺七左衛門

同 同 藤堂 祐範

同 同 末次 喬

同 同 木村傳兵衛

同 同 根津美術館

同 同 瀨津 寛

同 同 松田福一郎

同 同 外山 知三

同 同 阪田八十郎

同 同 常樂寺

同 同 長野縣

同 同 靜岡縣

同 同 愛知縣

同 同 京都市

同 同 湯淺七左衛門

刀(無銘傳直次)

太刀(銘、國宗)

刀(無銘傳正宗)

太刀(銘、備州長船住兼光、曆應四年十一月日)

太刀(銘、備州長船住兼光)

刀(無銘傳助貞)

刀(無銘傳兼永)

太刀(銘、來國光)

刀(無銘傳正恒)

太刀(銘、長光)(名物遠江長光)

刀(無銘傳一文字)(名物南泉一文字)

太刀(銘、吉用)

太刀(銘、國俊)(名物鳥飼國俊)

短刀(銘、吉光)(名物後藤藤四郎)

短刀(無銘傳正宗)(名物一庵正宗)

短刀(銘、吉光)(庖丁吉光)

短刀(無銘傳貞宗)(名物物吉貞宗)

短刀(無銘傳正宗)(名物庖丁正宗)

刀(無銘傳青江)

太刀(銘、來國俊正和四年)

刀(無銘傳國俊)

刀(無銘傳志津)

刀(無銘傳國安)

劍(銘、國吉)

刀(折返銘、備中國青江住吉次)

太刀(銘、備前國住雲次)

刀(銘、以南蠻鐵於武州江戶越前康繼、慶長十九年八月吉日)

刀(無銘傳吉家)

刀(無銘傳來國俊)

太刀(銘、備前國友成)

短刀(銘、國吉)

刀(無銘傳志津)

刀(無銘傳來國光)

刀(無銘傳來國俊)

短刀(銘、相州住秋廣)

東京市財團法人

尾張 德川黎明會

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

刀(無銘傳吉包)

刀(無銘傳來國俊)

太刀(銘、備前國友成)

刀(銘、津田越前守助廣、延寶八年八月日因源弘光望造之)

刀(銘、於南紀重國造之)

太刀(銘、備州長船住近景、元亨三年十月日)

太刀(銘、包永)

太刀(銘、守利)

太刀(銘、國宗)

太刀(銘、順慶)

太刀(銘、備前國長船兼光、康永三年六月日)

太刀(銘、光忠)

太刀(銘、國資)

太刀(銘、定利)

刀(無銘傳正恒)

太刀(銘、正恒)

太刀(銘、國安)

太刀(銘、守家)

刀(額銘、備前國住雲次)

太刀(銘、雲次)

太刀(銘、合田口等利傳國永作)

太刀(銘一)

短刀(銘、來國俊)(名物結城來國俊)

刀(銘、長曾彌興里入道庸徹)

刀(銘、奥州仙臺住山城大掾藤原國包)

刀(銘、肥後大掾藤原越前康繼)

刀(銘、和泉守藤原國貞)

刀(銘、山浦環正行、武器講一百之一、天保十年八月日)

刀(銘、繁慶、惡馬危哉無誠兵惡馬安神器精)

刀(銘、出羽大掾藤原國路)

劍(銘、國吉)

刀(金象嵌銘、當摩本阿彌又三郎磨上之(花押、天正十一霜月日)

刀(無銘傳當麻)

刀(無銘傳千手院)

刀(無銘傳定利)

名古屋市

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

下出 義雄

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

工藝品及考古學資料之部

同上

黑草威肩紫紅白胴丸(大袖付)
銅鑄出藏王權現懸佛(奈良縣吉野郡金峯山出土)
銅毛彫藏王權現懸佛(奈良縣吉野郡金峯山出土)
鍍金錫杖(木瓜形四鎖付)
鍍金塔鈴

大阪市 上田綱治郎
同 今城 鋤治
同 池田庄太郎
同 上

二十四間四方白星兜鉢

同 東 八千代
同 上

陶製安南染付蓮花口龍文花入(銘白衣)

池田市 南 喜三郎

鐵製船濱松發文蘆屋釜(鎖付鬼面)

山田多計治

播磨國一乘寺出土磚佛

小谷 安治

黑漆平文冠笠(蓋後補)

大東 延篤

三十二間二方白星兜鉢

武田甲斐人 上

黑草威副紫紅白腹卷(附總覆輪兜鉢 一頭)

同 中村 隆燈

銅製瑞花雙鷄八棱鏡(鏡面ニ大日如來等五尊ノ毛彫、背面ニ「永延二年八月廿七日辛巳檀越刑部氏願也」ノ銘アリ)

廣島縣 中村 隆燈

陶製黃瀬戸梅花唐草文瓶子

飯塚市 麻生太賀吉

彌生式龜貝形土器(福岡縣嘉穂郡桂川村出土)

福岡縣 田中 幸夫

彌生式革袋形脚付土器(熊本縣下益城郡隈庄町宮地出土)

熊本縣 小林 久雄

建造物之部

名

稱

所有者

所在地

石造九重塔(「文永七庚午八月日」ノ刻名アリ)

滋賀縣 松尾 寺 滋賀縣坂田郡醒井村 寺境内

石造燈籠(「元亨元年九月日」ノ刻銘アリ)

京都市 知恩 院 京都市東山區新橋通大和路 院境内

石造燈籠

京都府 淨瑠璃 寺 同相樂郡當尾村 同寺境内

石造鳥居(永正六年再興ノ刻銘アリ)

大分縣 宮成 龜松 大分縣大野郡千歲村 新殿宇

石造率塔婆(各ニ「延文二年十一月十五日」ノ刻銘アリ) 二基

大阪府 細見 亮市 大阪府泉北郡大津町助松八 百三十三番地

昭和十六年度重要美術品等御料歸屬

文部省告示第六百五十五號 五月十六日

重要美術品等認定物件中左記ハ昭和十六年三月五日御料ニ歸屬セリ

品

目

所有者

銅製十一面觀音像懸佛(裏ニ嘉祿三年二月二十五日奉鑄ノ銘アリ)

靜岡縣 窪野恭一郎

文部省告示第八百七十五號 十二月二十七日

古美術保存

重要美術品等認定物件中左記ハ昭和十六年九月八日御料ニ歸屬セリ

品

目

所有者

刀(無銘、傳光忠)

東京市 伯爵 伊東 治正

昭和十六年度重要美術品等資格消滅及改正

文部省告示第七百二十三號 七月三日

重要美術品等認定物件中左記ハ嗣實保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

品

目

所有者

紫紙金字光明最勝王經卷第二

東京市 長尾 欽彌

短刀(銘、筑州住左)

同 加藤 正治

太刀(銘、吉家)

同 赤星 鐵馬

太刀(銘、備州長船住國宗)

同 細川 護立

銅製金錯流

同 關戶 守彦

彩霞墨書三寶繪(殘卷)(保安元年六月七日書寫ノ奥書アリ)

名古屋 子爵 關戶 守彦

陶製曜變天目茶碗(大人物)(附屬物共)

東京市 子爵 稻葉 正凱

太刀(銘、備前國長船住景光、元弘四年二月 日)

同 土屋 正直

太刀(銘、備前國長船住景光、裏不明)

大阪市 黒川福三郎

太刀(銘、安藝國入西、永仁五年閏十月三日)

東京市 中野 喜咲

太刀(銘、守家)

同 篠原三千郎

太刀(傳國俊)

同 團 伊能

絹本着色如意輪觀音圖

同 杉山 茂丸

太刀(無銘傳光忠、高麗鶴ト金象嵌アリ)

同 加藤 正治

太刀(銘國包)

同 内田 良平

太刀(無銘傳國俊)

同 野村 德七

紙本着色風濤圖(雪村筆)

同 團 芳子

紙本金字大方廣佛華嚴經卷第七十、(表紙ニ東大寺印アリ)

東京市 團 芳子

紙本墨書亭子院歌合

同 木村 德衛

短刀(銘、信國、貞治五年十月)

兵庫縣 河瀬虎三郎

太刀(銘、則宗)

東京市 男爵 三井 高公

短刀(無銘、名物日向正宗)

同 男爵 三井 高公

刀(金象嵌銘、本多中務所持、正宗本阿「花押」名物中務正宗)

同 公卿 德川 家達

紙本着色孔雀立葵圖(尾形光琳筆、荷立)

絹本着色白桃小禽圖

短刀(銘、筑州住行弘、觀應元年八月日)

太刀(銘、國行)

紙本着色過去現在因果經殘闕

飛青磁花生

紙本着色當麻寺緣起繪卷(狩野山樂等十二人合筆、寛永十年ノ奥書アリ) 三卷

附時繪蓮花圖(宮二合) 寛永六年三月十四日寄進ノ銘

紫紙金字金光明最勝王經卷第三

太刀(銘、正恒)

太刀(銘、正恒)

太刀(銘、來國俊)

太刀(銘、豐後國行平作)

紙本着色毛利元就像(天正十九年龍喜ノ贊アリ)

太刀(銘、家忠)

絹本着色佛眼曼荼羅圖

絹本着色普賢延命像

紙本墨畫五大力菩薩像

(各幅表精元和八年ノ修理記ニ建久八年四月日豊前五郎爲廣筆トアリ) 五幅

太刀(銘、五月六日友成)

太刀(銘、豊後國行平)

太刀(銘、爲清)

紙本着色高士探梅圖(周璽等六僧ノ贊アリ)

紙本墨畫寒山拾得圖(因陀羅筆) 二幅

紙本着色十王經(敦煌出土) 辛未年董文員供養ノ奥書アリ

彩箋墨書觀音經(八張) (中一箇所ニ著色下繪、二箇所ニ和歌アリ)

紙本墨書與義抄卷上(片假名本)

紙本墨書萬葉卷第十一(嘉曆三年三月十六日相傳ノ奥書アリ)

絹本着色十王圖(延徳元年土佐光信筆ノ押紙アリ) 十幅

紙本着色海北友松夫妻像(海北友雪筆、享保九年ノ贊アリ) (附紙本墨書朴大根尺牘萬曆三十六年)

文部省告示第七百八十八號 九月十六日

横濱市 原 富太郎

同 原 善一郎

東京市 子爵 土屋 正直

金澤市 石黒 久吉

東京市 前山 久吉

大阪府 男爵 鴻池善右衛門

奈良縣 殿斗 勝一

大阪市 黒川福三郎

東京市 子爵 小出 英延

大阪府 笠原 忠美

名古屋 岡島 太一

富山市 近郷 之孝

東京市 公爵 毛利 元昭

西宮市 三矢進一郎

京都市 敦王護國寺

同 觀 智 院

和歌山縣 普 賢 院

東京市 男爵 岩崎小彌太

同 公爵 徳川 家達

新潟市 風間 要吉

東京市 前山 安平

同 同 上

長尾 欽彌

同 前山 安平

同 侯爵 中山 輔親

同 同 上

淨 福 寺

同 海北正之助

重要美術品等認定物件中左記甲號ノ品目ハ之ヲ下段ノ通改正シ乙號ノ認定ハ之ヲ取消シタリ

消シタリ

甲 號 上 段 下 段 目 所 有 者

革履(附黑漆矢、六隻)

錦包(附底裏ニ大永四年卯月廿七日作之ノ墨書アリ) (附黑漆矢、六隻)

白綾包腹卷(附鍍銀籠手金具 一隻)

鍍銀籠手(附鍍銀籠手金具 一隻)

黒漆烏帽子(附鍍銀籠手金具 一隻)

一領、萌黄地白茶格子生絹給小袖

付一領、黒漆刻鞘腰刀(斧)

一本、唐櫃、蓋裏ニ觀應二年九月四日ノ墨書アリ(合) 一領

刺繡三昧耶幡(附幡殘片 六枚、幡頭金具 八箇、木箱 一合、蓋裏ニ天正三年六月日修幅ノ墨書アリ) 十七號

白綾包腹卷(附鍍銀籠手金具 一隻、同脇當 一隻、烏帽子 一頭、刻鞘腰刀 一口、扇殘闕 一本) 一領

乙 號 滋賀縣 兵主神社

文部省告示第八百二十四號 十一月六日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

品 目 所 有 者

四面線彫石佛(天治二年七月十三日ノ銘アリ)

埴輪鷹狩男子像(群馬縣佐波郡采女村大字淵名出土)

昭和十五年度朝鮮寶物古蹟指定

朝鮮總督府告示第八百八號 昭和十五年七月三十一日

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存令第一條ニ依リ左ノ通指定ス

指定番號 名 稱 所 在 地 所 有 者

三三六 懷徳同春堂 忠清南道大徳郡懷徳面宋村

三三七 金山寺彌勒殿 全羅北道金堤郡水流面金山寺境内

三三八 陶山書院教典堂 慶尙北道安東郡陶山面土溪洞六八〇

三三八 陶山書院教典堂 陶山書院

三三九	陶山書院尙德祠 附正門及四周土塼	慶尙北道安東郡陶山面土溪洞六八〇	陶山書院	三六三	完州三奇里石燈	全羅北道沃溝郡開井面鉢山	鳥谷八十吉
三四〇	觀龍寺大雄殿	慶尙南道昌寧郡昌樂面觀龍寺境內	觀龍寺	三六四	莊義寺址幢竿支柱	京畿道京城府新營町二八八ノ二堡ト界由トノ間ノ道路	國
三四一	三陟竹西樓	江原道三陟郡三陟邑城內里	觀龍寺	三六五	彌勒寺址幢竿支柱	全羅北道益山郡金馬面箕陽里七九、九三	國
三四二	江陵文廟大成殿	江原道江陵郡江陵邑校洞里	江陵校	三六六	法住寺石蓮池	忠清北道報恩郡俗離面法住寺境內	法住寺
三四三	北漢山舊基磨崖釋迦如來坐像	京畿道高陽郡恩平面舊基里	江陵校	三六七	銅鐘	忠清北道報恩郡俗離面法住寺境內	法住寺
三四四	法住寺磨崖如來倚像	忠清北道報恩郡俗離面法住寺境內	法住寺	三六八	淳化四年銘陶壺	京畿道京城府南山町本願寺	京本願寺
三四五	大鳥寺石造彌勒菩薩立像	忠清南道扶餘郡林川面舊校里七六一	大鳥寺	三六九	青磁麒麟鈕蓋香爐	京畿道京城府漢江通一一	伊東橫雄
三四六	灌燭寺石造彌勒菩薩立像	忠清南道論山郡恩津面灌燭里二五四	灌燭寺	三七〇	青磁象狔柳竹蓮鶯鶯養文水瓶	京畿道京城府漢江通一一	伊東橫雄
三四七	開泰寺址石佛像 三軀	忠清南道論山郡連山面天謨里一〇八、一〇九	灌燭寺	三七一	青磁象狔寶相花文盤	京畿道京城府旭町一、一八二	阿川重郎
三四八	榮州北枝里石造如來坐像 二軀	慶尙北道榮州郡浮名面北枝里一七九	國	三七二	鐵彩白繪唐草文瓶	京畿道京城府城北町七五	全鑒
三四九	榮州可興里磨崖佛像 三軀	慶尙北道榮州郡榮州面可興里二六四、二	國	三七三	白磁博山香爐	京畿道京城府日之出町二五	內藤定一郎
三五〇	到彼岸寺鐵造毘盧舍那佛坐像	江原道鐵原郡東松面到彼岸寺	到彼岸寺	三七四	白磁透彫牡丹文壺	京畿道京城府南米倉町三六	新田留次郎
三五二	到彼岸寺三層石塔	慶尙南道陝川郡加耶面縮仁里一、一	到彼岸寺	三七五	白磁透彫牡丹文壺	京畿道京城府城北町七五	全鑒
三五三	庇仁五層石塔	忠清南道舒川郡庇仁面城北里一八三	國	三七六	象嵌寶珠文文字入合子	京畿道京城府漢江通一一	伊東橫雄
三五四	神勒寺多層石塔	京畿道驪州郡北內面神勒寺境內	神勒寺	指定番號	名	所	在
三五五	神勒寺多層磚塔	同右	神勒寺	一一八	咸安道項里古墳群	慶尙南道咸安郡伽耶面道項里	慶尙南道咸安郡伽耶面道項里
三五六	昌寧塔金堂治成文記碑	慶尙南道昌寧郡昌寧面校洞二九四	國	一一九	咸安宋山里古墳群	慶尙南道咸安郡伽耶面宋山里	慶尙南道咸安郡伽耶面宋山里
三五七	神勒寺普濟尊者石鐘	京畿道驪州郡北內面神勒寺境內	神勒寺	一二〇	星州星山洞古墳群	慶尙南道咸安郡星州面星山洞	慶尙南道咸安郡星州面星山洞
三五八	神勒寺普濟尊者石鐘碑	同右	神勒寺	一二一	富居古墳群	咸鏡北道富寧郡富居面富居洞	咸鏡北道富寧郡富居面富居洞
三五九	神勒寺大藏閣記碑	同右	神勒寺	一二二	益山雙陵	全羅北道益山郡八峰面石旺里	慶尙北道慶州郡慶州邑城東里
三六〇	神勒寺普濟尊者石鐘前石燈	同右	神勒寺	一二三	慶州城東里殿廊址	慶尙北道慶州郡慶州邑城東里	慶尙北道慶州郡慶州邑城東里
三六一	灌燭寺石燈	忠清南道論山郡恩津面灌燭里二五四	灌燭寺	一二四	扶餘石城山城	忠清南道扶餘郡石城面縣內里、縣北里	忠清南道扶餘郡石城面縣內里、縣北里
三六二	無量寺石燈	忠清南道扶餘郡外山面無量寺境內	無量寺	一二五	大興仁存城	洪城郡金馬面月岩里	洪城郡金馬面月岩里
				一二六	星州星山城	慶尙北道星州郡船南面新夫洞、星元洞、梨谷洞、星州面星山洞	慶尙北道星州郡船南面新夫洞、星元洞、梨谷洞、星州面星山洞
				一二七	益山土城	全羅北道益山郡金馬面西古都里、龍居里	全羅北道益山郡金馬面西古都里、龍居里
				一二八	富居土城	咸鏡北道富寧郡富居面富居洞	咸鏡北道富寧郡富居面富居洞

昭和十六年度指定國寶略説

繪畫之部

大日金輪像 一幅 醍醐寺

竊勒菩薩像 一幅 同

彌勒菩薩像 一幅 同

金剛夜叉明王像 一幅 同

大威德明王像 一幅 同

大威德明王像 一幅 同

大日金輪像(挿圖一圖)及び彌勒菩薩像

は何れも鎌倉時代の製作で、描寫纖美、

殊に前者は猶前代の古様を存して居る。

金剛夜叉明王像はもと五大明王五幅中の

一幅と思はれるが、大威德明王像は單獨

の像か或は五幅中の一か明らかでない。

しかし本寺には今此等夫々一幅を存する

のみである。何れも作風に藤原様式を窺

ふべく、製作も鎌倉初葉を下らぬであら

う。

佛眼曼荼羅圖 一幅 教王護國寺

普賢延命像 一幅 觀智院

密教圖像 十點 教王護國寺

(1)火羅圖 一幅 横一尺五寸四分

裏書(今表面に貼換)には永萬二年筆寫

の旨を註してあるが、製作は永萬までは

廻り難い。然しこの註により本圖は圖像

研究の先覺者慈尊院學講興然阿闍梨の本

に依つたことを知り得る。火羅圖として

は高山寺玄證本より更に精細で、著色の

點も珍しく、此種星宿圖の古本として貴

い。(挿圖三圖)

(2)仁王經法本尊像 五幅

東西北中各豎五尺三分横三尺二寸三分

南 豎五尺三分横二尺七寸六分

この圖様は又五方曼荼羅と云ひ、古く

傳弘法大師筆の本があつたが、南方一幅

を缺くが故に、醍醐の玄海僧都が珍海已

講をして補寫せしめたことが覺禪鈔に見

えてゐる。圖像としては醍醐寺所藏の五

幅と同本で而も醍醐寺本に無き裏書(今

の畫名は古來喧傳されてゐるが、その筆

様を窺ふべきものは前述仁王經法本尊像

の南方圖等の二三に過ぎぬ。本圖の如き

は就中注目すべき作で、聖天圖像として

も珍しいものである。

(4)大元帥明王像(六面八臂像) 一幅

豎一尺六寸四分 横一尺五寸九分

豎一尺三分 横一尺六寸七分

何れも鎌倉時代の圖寫で、圖様は共に

圖像抄本に常曉請來の所謂小栗栖様とし

て屢々登載されてゐる像に近い。座前に

二獅を配する一幅には成賢の裏書がある

が、蓋し舊記を寫したもので圖像も亦成

賢以後の寫しであらう。

(6)大元帥明王像(四面八臂像) 一幅

豎一尺七寸一分 横一尺八分

鎌倉時代の圖寫であるが、斯くの如く

この圖様は類例を見ぬ珍奇なもので、

側に「此本因幡堂執行在之」と註がある。

室町時代の圖寫と思はれる。

五大力菩薩像 五幅

金剛孔 豎十二尺四寸一分

豎七尺四寸三分

外四幅 豎十尺四寸六分

横五尺四寸八分

五幅夫々に元利八年表具調製の際に書

かれた同文の裏書があり、建久八年豊前

五郎爲廣の筆なること、天文九年裏打修

覆のことが知られる。筆致練達、眼に朱

を點する外は素描で、描直しの跡もあり

佛畫の畫稿かと思はれる。爲廣の畫歴は

未詳なるも、また鎌倉初葉に於ける繪佛

師の作として貴重な一資料である。

如意輪觀音像 一幅 男爵團 伊能

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

普賢院

たことが知られる。而して本圖第二幅は

實隆公記延徳元年九月十八日の條所見の

ものに當るかと思はれるが、實隆の記録

は今見當らない。猶、實隆公記、御湯殿

上日記、般舟三昧院記等によれば同じく

光信の謹寫した後土御門天皇御壽像の供

養が同じ延徳元年十二月廿三日に行はれ

てをり、本圖も或はこれに關聯した製作

かとも思はれる。兎も角光信にかかる佛

畫の製作を見るのは頗る珍しい。

後圖融院宸影(土佐光信筆) 一幅

雲龍院

實隆公記明徳八年四月の條によれば、

延徳四年後圖融院百年聖忌の爲、畫所預

土佐光信の謹寫せる宸影が雲龍院に安置

され、後土御門天皇が實原利長の草進し

た梵文を圖上に御染筆あらせられたとあ

る。而してその梵文は本圖のものと同文

である。且實隆公記所録の女房奉書に徴

するも正しくこの圖である。猶本圖には

實隆筆の銘文及び裏書があつた筈である

が現在は見當らない。光信の肖像畫とし

ては、桃井直詮像(帝室博物館)がその作

と傳へられて居り、本圖はそれと相近

い。

孔子像 一幅

安田新三郎

豎二尺九寸五分 横一尺四寸五分

圖は普通の立像と異り、珍らしく几座

の像で、上に色紙形を劃し略傳を記して

ある。像容は玄證本先德圖像中にあるも

と云はれてゐる。
過去現在因果經變闕 一卷 前山 安平
豎九寸三分 横一尺四寸五分

天平繪因果經は上品蓮臺寺、醍醐報恩

院、東京美術學校等の各一卷が既に國寶

となつてゐるが、この一卷は上品蓮臺寺

本に接續すべき一殘闕で、可意事如所思

惟具」より「言答能破結賊不受」までの二

四行。流布本では卷二の上半の一部に該

當するものである。(挿圖五圖)

病草紙殘闕(肥満女) 一幅松永安左衛門

豎八寸四分 横一尺四寸九分

病草紙は關戸家に一卷あり、その殘闕

としては原家の白子を初め二三段世に知

られてゐるが、本圖は近來發見のもので

ある。詞書は「ちかころ七條わたりに」

身こえし、あまりて行歩たやすからず

……くるしむつきぬものなり」の七行で

ある。畫致書體等より見ても鎌倉初頭を

下らず、正に關戸家のものと同本と思は

れる。

三十六歌仙切(友則) 一幅 野村 徳七

豎一尺二寸 横一尺九寸四分

佐竹家舊藏三十六歌仙繪卷下巻中の一

圖である。この繪卷は繪藤原信實、詞後

京極良經の筆と傳へられ、古くは下鴨の

神庫に在つたものと思はれる。近年歌仙

毎に切斷せられたが、數多き歌仙繪遺品

中最古にして最も優れた作である。

高士探梅圖 一幅 前山 安平

て聞え、而して惟竹得嚴、玉腕梵芳以外
は寂年が詳らかで、その中仲方圓伊は最
も早く應永二十年に歿して居るから、本

圖はそれ以前の作なること明かである。

應永詩畫軸の遺品中でも比較的古作であ

り、圖様も普通の山水とは異り特殊な趣

がある。(挿圖一三圖)

歸郷省親圖 一幅 小倉 彰

豎二尺七寸七分 横八寸四分

圖上に惠巖、周璽、周賀、法闍、中珊

龍派、清播、周曼、會秀、澄義、等連周

鳳、宗釋の五山禪僧等十三人の贊詩があ

る。最初に惠巖は「初趨送人歸郷省親」

と題し他の贊詩にも皆其意が汲まれる。

所謂送別圖の一種としても珍重すべき作

例である。畫者年代を確かめ難いが十三

僧中寂年不明なるものを除いては惠巖、

周賀の二人が最も早く應永三十二年に歿

して居るから、本圖の製作もそれを下ら

ざること明らかである。

山水圖 一幅 男爵 山本 達雄

豎三尺一寸二分 横一尺一寸三分

本圖には竺雲等連が享徳四年(康正元

年)相國寺鹿苑院で書した贊がある。即

ち昇童なる者が嚴君筑州公の命を奉じ、

この畫軸を携へ來つて等連に題詩を乞ふ

たといふ。昇童は弟子晋叔等昇のことと

思はれるが、嚴君筑州公は誰人か不詳で

ある。本圖の筆者も亦明かでないが、室

町中葉の詩畫軸として屈指の一作であ

て居る。圖中の「雪村」の白文方印は往々
その畫中に見るものである。

山水圖狩野正信筆) 一幅 小西新左衛門

豎三尺一寸六分 横一尺一寸七分

狩野派の祖正信の畫蹟としては、栗山

家の布袋と小倉家の周茂叔との二幅が藝

に國寶となつて居るが、本圖にも同じく

「正信」の鼎印がある。作風殊に精緻で、

山水畫中の代表作と認められる。(挿圖

一二圖)

四季山水圖(海北友松筆) 八曲屏風一雙

豎三尺七寸 横十二尺一寸四分

海北友松筆の數多い屏風中、水墨山水

畫としては慶長七年の款記ある帝室博物

館所藏の一雙のみが知られてゐるが、近

年世に現はれた本圖は筆致頗るこれに近

く、友松山水畫の代表作である。一隻

に「友松圖之」他隻に「友松筆」と款し、共

に「海北」友松」の二印を捺してゐる。

毛利元就像 一幅 公爵 毛利 元道

豎三尺 横一尺四寸六分

藝に指定された鰐淵寺の元就像とは稍

々形式を異にする圖である。圖上には天

正十九年五山の禪僧として聞えた熙春龍

喜が元就の菩提寺たる洞春寺の住持嘯岳

禪師の請により長文の贊語を識してゐ

る。元就の肖像畫としては由緒最も正し

く、描寫も殊に優れてゐる。

海北友松夫妻像(海北友松筆) 一幅

海北正之助

豎三尺七寸五分 横一尺四寸五分

附朴大根尺牘 一幅

豎一尺一寸 横一尺六寸五分

友松の子友雪の筆で「海北」及び友雪

の諱「道輝」の二印を捺してゐる。此圖と共に傳來せる由緒記に徴すれば、本像の製作は恐らく元和元年友松の歿後程經たる頃かと思はれる。圖上には友松の歿後孫友竹が享保九年に長文の友松傳を識してゐるが最も信據すべき資料である。

猶、文中に記す處の朝鮮朴大根の書翰は原本が併せて現存し、萬曆三十二年（慶長十三年）の年紀がある。（挿圖一圖）當麻寺緣起 三卷 慶斗 勝一 堅一尺一寸七分 長上七三尺五寸七分 中七二尺二寸二分 下七二尺六寸八分

附蓮花詩繪宮 一合

各卷に寛永十年曼殊院良想法親王が當麻寺念持院の住僧慶譽の請によつて執筆せられた奥書があり畫・詞の筆者を明細に録してゐる。更に各段にも夫々貼紙あり、筆者名を記してゐる。此等によれば畫者は狩野山樂光頼、其子光孝、休白長信、縫殿助山雪、興意綱義、采女守信（探幽）主馬一信（尙信）、右京安信、友親等當代狩野一門の諸家に、土佐光則を交へ、佛像には春日繪所の竹坊正秀、同榮秀を加へてゐる。就中狩野友親の描く所が最も多い。然し友親は本卷に於て初めて名を知られた畫人であり、春日繪所の兩者も亦他に所見なきものである。斯く逸傳畫家の作も交へてゐるが、寛永畫壇の名家を揃へた點に於て殊に貴重な作である。詞書も當代堂上諸家の寄合書で、上卷は良恕法親王以下七筆、中卷は青連院尊純法親王以下七筆、下卷は知恩院良純法親王以下八筆である。笥は蓋裏に慶譽の記した朱漆の銘によれば寛永六年京

都八文字屋庄右衛門等の寄進である。孔雀圖 衍立（尾形光琳筆） 一基 莖花圖 原 良三郎

堅四尺八寸五分 横五尺七寸 「法橋光琳」の落款、「方祝」の圓印があり、書政華麗また光琳の一佳作に屬する。小西家傳來の寫生帖中にこの圖に近い孔雀を見出すのも興味深い。もと九條家の傳世品であつたが、故あつて圖の周縁がやや縮減されたと云ふ。樹下人物圖 一面 山中松治郎

堅四尺六寸五分 横一尺八寸五分 本圖は吐魯蕃三保破城殘堀と傳へられてゐる。紙三枚半綴ぎ、描寫や、粗略ながら畫樣古致に富み、蓋し唐畫と鑑せられ、數少き當代人物畫の一例として貴重な遺品である。紙背は戸簾帳の故紙を以て二重に裏打を施し、今見える七枚半の中には數箇所に開元二年の年號がありこの年を遠く距らざるものと思はれる。又高昌柳中縣の官印と認めらるる一印あり、此の地方の戸簾帳たるを知る。因に本願寺大谷家にも亦吐魯蕃出土の樹下婦人圖一面があり、畫致相近く、同じく唐代の戸簾帳を裏貼りにしてゐる。

十王經 一卷 長尾 欽彌

堅九寸六分 全長二二尺七寸 敦煌發見と傳へられ、卷首に地藏菩薩經、次に十王經を書寫してゐるが、十王經には十王十圖の外、前に釋迦說法、六菩薩、閻羅王使騎馬像の三圖、卷末に地獄圖を挿入、更に卷尾に一佛と供養者像並に奥書を添へてゐる。奥書によれば辛未年に六十八才の董文員が圖寫したもので

あるが、畫風筆致等より蓋し宋初を下らぬ作であらう。（挿圖六圖）桃花小禽圖 一幅 原 壽枝

堅八寸六分 横八寸一分 本願寺舊藏、東山御物と傳へられてゐる。卷止に「花鳥徐熙左」とあるから、もと双幅の一であらう。描寫精緻、宋代院體花鳥畫中の一秀作である。（挿圖七圖）紅白芙蓉圖 二幅 子爵 福岡 孝紹

堅八寸四分 横八寸六分 兩幅共圖中に「慶元丁巳歲李迪畫」とある。李迪は南宋畫院の一名手であるがこの款識については猶考究の余地があるが、然し描寫優秀、宋代院體花鳥畫中の注目すべき一作である。（挿圖八圖）塞山拾得圖（因陀羅筆） 二幅 前山 宏平

堅二尺二寸四分 横一尺八分 元の梵僧因陀羅の塞山拾得圖中の優秀な一作である。圖中に「釋氏陀羅經余玄墨」「兒童不識天邊雪犯作楊華一例看」の二印を捺し、またこの人特有な難讀の款識があるがその一に「王舍城」の文字あるは他に所見なき資料である。

彫刻之部

不動明王坐像（快慶作） 一軀 三寶院

像高一尺六寸五分

寄木造、内刻、玉眼嵌入、彩色の坐像で、今同院本堂裏堂に安置されて居る。像内一面に標書の銘記があり、建仁三年五月四日安阿彌陀佛快慶の作なるを知る。快慶作中東大寺南大門の二王と同年同寺僧形八幡神像の翌々年の製作に當り快慶の技術最も圓熟せる時期の製作であ

る。彼としては類例なき不動明王像たることも珍しい。猶頭上の蓮華、條帛の一部、持物、座光の後補である。（挿圖二一圖）龜山天皇御坐像 一軀 南禪院

像高二尺八寸六分 同院は龜山天皇の御廟所で、天皇を御開基と仰ぎ、本像を御靈殿に安置し奉つてゐる。倚子に坐し給ふ御法鉢の姿で、寄木造、玉眼嵌入、金泥を以て御衲衣に飛雲、御袈裟に花鳥の文様を現はしてある。御在世の時、或は崩御の嘉元三年を餘り距らぬ頃の作と拜せられる。猶、南禪寺第卅二世天境靈政の遺稿「無規矩」によれば靈政は貞治五年四月八日本寺に入り、翌日天皇の御像の前に拈香し奉つてゐるが、即ち本像であらう。

明惠上人坐像 一軀 高山寺

像高二尺七寸四分

寄木造、玉眼嵌入、彩色。開山堂（禪堂院）の本尊で、容姿は國寶樹上坐禪畫像等に酷似して居る。その練達せる手法には此寺に活躍せる運慶一派の作風も看られるが、鎌倉初世の竹像に比して稍々類型化の感があり、鎌倉後期の作と思はれる。

善妙神立像 一軀 高山寺

像高一尺三分

附髹漆厨子 一基 白山寺

像高一尺三寸九分

附髹漆厨子 一基 白山寺

狛犬 三對 高山寺

高九寸乃至一尺五分

兩神像 高山寺緣起西經藏條の次に、

鎮守社壇四字として大日光神、春日大明神、善妙神、住吉明神を擧げてゐる内の二神と推測され、共に寄木造、玉眼嵌入彩色。小像ながら精巧なる表現に練熟せる技倆を示して居る。白光神は雪山神として蓮座迄すべて白色に塗られ、形相服装は建仁二年在銘の定慶作興福寺梵天像に類似し、作風も亦相近い。善妙神は女神像で、高山寺所傳華嚴緣起繪卷義湘の巻に見ゆる善妙神に外ならず、姿態もそれに類し、筥を捧持して岩座に立つ敬虔可憐な麗姿を寫したもので、作風は白光神に近く、衣の彩色、文様等精緻華麗を極めてゐる。兩像の製作年代は高山寺緣起に嘉祿元年奉納の記事あり、略その頃と思はれる。然るに善妙神に就ては、高山寺緣起に平岡善妙寺の鎮守の本尊も同神が勧請されて貞應三年安置され、高山寺の像と同様小形の像であつたことが見える。而して一説にはこの像も高山寺に移されたと云ふが、現在は一軀を存するのみである。孰れにせよ兩神像共に鎌倉初世の形像で、破損箇所はあるもののすべて補修を加へられてゐない。(挿圖一四圖、一五圖)

厨子は共に所謂春日厨子であるが幾分形式を異にしてゐる。白光神厨子は猫脚形の四脚を附し、鎌倉後期の作と思はれ善妙神厨子は香狹間入の方座を有し、扉は布張朱漆塗の格子戸を用ひてあり、屋根、香狹間等の形より見て、室町時代に入つて作られたものであらう。

狛犬は銘文により嘉祿元年法印行寛が沙汰せる白光、春日、善妙の三社の狛犬と推定される。六軀何れも同時の製作で

小形ながら夫々變化があり神像に併せて重すべきである。猶此等と同様小形の狛犬が同寺に傳存し既に國寶に指定されてゐるが、作風を異にする故或は四社の内嘉禎四年遷宮の住吉明神のものであらうか。

線彫四面佛石 一基 今宮神社

石高一尺九寸五分

幅一尺九寸及一尺四寸一分

略四面形自然石の各面に線彫で坐像の

如來形三、菩薩形一を現はし、一如來形

像の側に「天治二年七月十三日爲」の刻

文がある。印相は刻文の面のは定印

其の反對面の如來形は右手を立て五指を

開き、左手を腹前に置く。損傷のため印

相不明であるが掌上に持物あるかに見ら

れる。此面に向つて右の如來形は說法印

左面の菩薩形は右手與願の印をなし、左

手には五輪塔を載せた蓮花を持つてゐ

る。斯くて此等は彌陀、藥師、釋迦、彌勒

諸尊を現はすかと思はれる。この佛石は

近年迄本社境内に放置されてゐたため、

藥師像と思はれるものの面部は著しく磨

減して凹状をなしてゐる。

藥師如來及兩脇侍像 三軀 圓頓寺

像高藥師三尺七寸九分

日光四尺五寸二分

月光四尺六寸

中尊は坐像、脇侍は立像。共に寄木造

漆箔(後補)、彫眼。温秀なる相貌姿態、

流麗なる衣紋、淺き彫法等藤原後期の特

色を示して居る。中尊左手、兩脇侍兩手

先、兩脚先、天衣の大部分、座光等は後

補である。

千手觀音立像 一軀 緣城寺

像高五尺三分

部分的に寄木を加へた一本造で、合掌

手及び持鉢手は凡て本鉢と共木彫出に成

る。一本彫成の像に共通な堂々たる體軀

を有し、衣紋の彫法も所謂續波式を示し

てゐるが、平安初期の像に比して彫法概

ね淺く面相等も穩かで、恐らく藤原期の

製作であらう。元來彩色像であつたのが

現在は黒色を呈して居る外、脇手及び持

物、兩脚先、座光は後補である。

阿彌陀如來坐像 一軀 醫王寺

像高二尺三寸四分

寄木造、玉眼嵌入、肉身粉溜塗、袈裟

には粉溜地に盛上の蓮華文、龍文等があ

り、鎌倉後期の精緻な作風を示して居

る。像内背面に「元亨元年三月日法印堯

圓(花押)」と墨書がある。堯圓に就ては

大佛師系譜等に所見なく、三千院文書、山

門根本中堂本尊事により、三條佛所の

佛師たるを知るのであるが、本像以外に

作品は知られて居ない。裳先、座光のみ

が後補で、兩手、彩色等凡て當初のまま

である。

聖觀音立像 一軀 延曆寺

像高五尺六寸三分

横川中堂の本尊。一本造、内刻、像身

は素地であるが、條帛、天衣並に紺衣に

華麗な截金文様がある。像の様式及び截

金文様よりして藤原期の作とは思れる。

(挿圖一七圖)

持國天立像 二軀 延曆寺

多聞天立像 二軀 延曆寺

像高各四尺九寸八分

常行堂の壇上にあり、四天王像の内二

軀のみを存してゐる。寄木造、彩色の像

で、藤原期の製作と思はれるが、形式手法等に前期の遺風を存し、堂々たる風姿を現はしてゐる。唯近世の補色のため大に美觀を損じてゐる。

吉祥天立像 一軀 滋賀院

像高三尺三寸七分

一本造。姿態、手法共に平靜、當初の

彩色文様が剥落しながら散見してゐる。

藤原期の作である。

維摩居士坐像 一軀 青龍寺

像高一尺一寸五分五厘

像身より袂帙まで全くの一本彫出で、

僅に遺る彩色は當初のものかと思はれ

る。刀技峻嚴、古維摩像として貴重な作

例で、藤原初頭の製作であらう。(挿圖二二圖)

慈惠大師坐像 一軀 青龍寺

像高二尺五寸五分

寄木造、玉眼嵌入。像内の墨書は靈喰

のため判讀し難いが、「弘安九年七月云々」の文字が認められる。同じく寂山の

本覺院等に遺る榮盛發願の大師像とは別

手に出るものであらう。弘安の頃に於ける

肖像彫刻として注意すべき作品である。

慈惠大師坐像 一軀 本覺院

像高二尺八寸三分

慈惠大師坐像 一軀 曼殊院

像高二尺七寸八分

慈惠大師坐像 一軀 眞福寺

像高二尺八寸四分

共に寄木造、玉眼嵌入、膝裏に墨書銘

あり、比叡山横川住侶榮盛の發願造立せ

るものである。銘は何れも甚だ長文で本

覺院と曼殊院の分は願文は同一であるが

前者は文永二年十二月十八日造立供養を畢り五度目の大師像であるのに對して、後者は九度目の造像であり終りに文永五年十月三日とある。眞福寺のは願文が異り、文永十一年十二月日とあつて、他に「佛師法橋快」と作者銘もある。慈惠大師像は國寶に、比叡山求法寺像（文永三年）、金剛輪寺像二尊（蓮妙作、弘安九年、正應元年）、觀音寺像（觀應二年）、八角院像、玉泉寺像等數體を數へるが、此等榮盛立願のものは作も優れ、また銘記によりこの頃に於ける大師信仰の一事を知り得る點、寔に貴重な像である。

藥師如來坐像 一軀 明通寺

像高四尺七寸七分

降三世明王立像 一軀 明通寺

像高八尺三寸三分

深沙大將立像 一軀 明通寺

像高八尺四寸七分

藥師像は本寺本堂（國寶）の本尊。一木造。今は全く素地を露して居るが、藤原中期の製作で端嚴な形相を有してゐる。

降三世明王（挿圖一九圖）、深沙大將の兩忿怒形像はこの半丈六の藥師像の左右に安置され、何れも巨像である。兩像は作風酷似して同時の造像と思はれ、同じく藤原期の製作である。各一木造、彩色剥落。降三世明王足下の大自在天、同妃も同時のものである。深沙大像像は髪髪、頭上に鬘髻を刻し、斜左方を向き、口を堅く閉ぢ、上體裸形、腹部に童子面（後補）をつけ、左手に蛇を持ち、右手に戟を執つた姿で、岐阜縣横藏寺、京都府金剛寺の國寶深沙大將像とはまた異つ

た形相を示してゐる。

不動明王立像 一軀 明通寺

像高五尺三寸四分

千手觀音立像 一軀 羽賀寺

像高四尺四寸七分

毘沙門天立像 一軀 羽賀寺

像高五尺二寸五分

この三尊は千手觀音を中尊とした一組で、もと羽賀寺の末寺松林寺にあり、明治初年松林寺廢寺の際、兩寺に分置されたのである。毘沙門天像は一木造、彩色剥落。像内に金剛界五智如來の種子並に治承二年七月廿四日僧靜秀の墨書あり製作銘と思はれる。下半身には一木造の風を見るが、細妙な彫法には明かに藤原末期のものと思はれる所がある。不動明王像は一木造、銘記の有無は不明であるが前者と同時の作と考へられる。本寺移置後の古色塗と描い彩色でいたく尊容を損じてゐる。千手觀音像は寄木造、像高が前二者より低く中尊として適はしくない上、作風も異り、面部には鎌倉期の作風が看取される。彩色の剥落を除いては頂上面、脇手、臺座等保存良好である。

不動明王立像 一軀 圓照寺

像高五尺一寸七分

寄木造、卷髮、一眼を半閉して斜下方を視、左足を踏出し足指を爪立ててゐる。製作は藤原末期と思はれ、形態は整ふが、近世の拙惡な補色に蓋はれてゐる。

男神坐像 二軀 神宮寺

像高男神一尺六寸五分

女神一尺六寸三分

若狭國一宮神宮寺奥の院にあつたもので、若狭彦命、若狭姫命の像と傳へられてゐる。各寄木造、彩色。肉身衣裳等に當初の彩色が残り、殊に女神の衣裳には優しく細かな鶴の金泥文様が散見する。鎌倉期の作風による神像中注目すべき作で、製作年代は室町初期を下るまい。

吉祥天 立像 三驅 清雲寺

像高毘沙門天三尺三寸三分

吉祥天 一尺九寸一分

善膩師童子 一尺五寸四分

何れも寄木造、玉眼嵌入、當初の彩色を存し、緻美な文様もよく保存されて居る。鎌倉期の作と認められるが、手法溫和である。而して吉祥天（挿圖一六圖）は淨瑠璃寺吉祥天像を、毘沙門天像は同寺四天王像中の廣目天像を範とし、鎌倉期の作風を以つて造像して居るのは興味深い。

不動明王立像 一軀 大谷寺

像高三尺九寸

本寺は泰澄草創と傳ふる越前の古刹で多くの古像を存してゐる。本像は室堂に安置され、藤原期の製作と認められる。相好柔和、手法また穩健である。岩座は像と一木彫出になり、又當初の彩色は多く剥落してゐる。

大日如來坐像 一軀 妙樂寺

像高九尺二寸

胎藏界の像で寄木造の丈六佛である。藤原後期の像形整美せる製作で肉身は今古色塗になつて居る。光背は飛天光で果して本像のものか疑問もあるが、同じく藤原期のものと認められる。（挿圖一八圖）

妙見菩薩立像 一軀 中西用康

像高五尺一寸二分

寄木造、玉眼嵌入、髪を美豆良に結ぶ童子形の像で、身に甲を着け、右手に劍を執り、左手は第二、第三指を立てゝゐる。先年修理解體の際、像内に妙見菩薩の梵字種子、眞言並に正安三年佛師法印院命等の墨書を發見した。鎌倉期の妙見像としては未だ他に遺例を聞かず、渡會氏の誤持した傳來にも注意すべき點がある。彩色は現在剥落してゐる。

聖觀音坐像 一軀 願興寺

像高二尺六寸七分

所謂脫沙活の法による造像で漆箔を置く等身の坐像である。上半身は兩手臂より先が後補なる以外に著しい修補の痕なく、奈良時代乾漆像の特色を具へ、特に天平風の華麗な璣珞は見事である。唯結跏の脚部に甚しい修補あり、裳先の部分も木製の補作であるのは惜まれる。乾漆像として大和を中心とせる地方以外には美濃美江寺十一面觀音立像があるが、四國の地に斯る優作の傳存するのは誠に珍しい。（挿圖二〇圖）

毘沙門天立像 一軀 香西寺

像高三尺三寸

一木造、彩色。平安初期の重厚味を保存せる藤原初期の佳作である。彩色は殆ど剥落し僅かに裳に丸紋が残つてゐる。

左手先、右手上膊部より先、右足先、臺座（邪鬼以下）は後補である。

工藝之部

囉變天目茶碗 一口 男爵 岩崎小彌太

高二寸三分 口徑四寸

古來稻葉家傳來の大名物として著名な名器である。胎土は鐵氣色を呈し、口縁の下に僅かの括りがある。高臺は低目で外面には漆黒の釉薬が豊かに施され、殆ど星紋を見ぬが、内面には大小無數の彩暈が現れてゐる。宋代の製作にかゝる華麗鮮美なる稀有の名品である。(挿圖二六圖)

文字天目茶碗 一口 男爵 鴻池善右衛門

高二寸一分五厘 口徑四寸一分

胎土は白色にして稍黄味を帶び、稍厚手の茶碗で外面は黒釉地に細かき淡黄釉の斑甲斑が現れ、内部は一面に梨子地目の斑文ある地に「金玉滿堂」「福壽康寧」「長命富貴」の文字を夫々菱形中に配し、上部に模様入の帶文を繞らしてゐる。龍甲斑文の美麗、文字の鮮明なるは類品中に冠絶する。恐らく宋代の作と認められ、雲州松平家傳來の國寶玳瑁皮盞天目と相並ぶ名品である。

龍甲手天目茶碗 一口 男爵 鴻池善右衛門

高一寸七分五厘 口徑五寸

胎土は文字天目に比し稍細かく、又薄手であり、形も淺手で、口縁には眞鍮の覆輪が施され、高臺は平らかである。外面は一面黒釉を施し、口縁に近く僅かに龍甲斑を見るが、内面は漆黒の地に黄色の龍甲斑が現れてゐる。色調光澤鮮麗、また宋代の製作であらう。

飛青磁花瓶 一口 男爵 鴻池善右衛門

高八寸九分 口徑二寸二分

山崎一保藏の國寶飛青磁花瓶と同形で頸細く胴の張つた形態はよく整ひ、豆青色の青磁の色調も極めて鮮麗である。鐵

釉の飛文様は二十を數へる。恐らく明初龍泉窯の所産であらう。(挿圖二八圖)

金錯狩獵文銅筒 一管

國(美術學校保管)

長八寸三分 徑一寸

青銅鑄成の圓筒形金具で、木柄の飾金具と思しき内部に木柄の接合部分が遺存して居る。筒は三つの節飾りにより四區に分たれ、各區に細線の金象嵌の精緻な技法を以て山岳、樹木、鳥獸等を描き、第二段には騎獵を圖してゐる。樂浪の古墓より出土のもので漢代工藝品中稀見の優作である。(挿圖二四圖)

金錯鳥獸文盤 一口 侯爵 細川 護立

徑一尺二寸一分 高二寸九分

青銅製。口邊は廣平縁とし、底に低い臺脚があり、内外共に特異な象嵌技法による華麗な圖文で飾られてゐる。文様は道家の思想により構想せられ、幾重かの圓帶に區分した中に四神、靈獸、奇鳥、瑞雲等を主として、鋸齒文、菱雲文等が布置されてゐる。内面には四神を、外底には盤龍を中心に配してゐる。漢代工藝美術品の代表的遺物の一である。(挿圖二五圖)

犀角柄刀子 一口

青白磁圓硯 一面

牙笏 一枚

伯牙彈琴鏡 一面

(傳管公遺品)

犀角柄刀子(全長一尺七分身長四寸八分五厘柄長五寸八分五厘幅九分)鞘を佚してゐるが、犀角柄の柄頭には銀裝の飾金具を被せてあつたらしく、其の留銀を存する。平安初期の製作と認められる。

青白磁圓硯(徑八寸九分高二寸一分)

池を周圍に作り、二十箇の脚を胴に附けてゐるが、脚の下部は缺失してゐる。當時支那より舶載のものであるが、傳世品として稀有である。(挿圖二七圖)

牙笏(長一尺二寸頭部幅一寸九分)象

牙製。頭部に圓味なく直頭で、正倉院御物の他に類品を存しない。

伯牙彈琴鏡(徑四寸八分)八花形、鈕

は荷葉に乗る龜を現し、上部に日、雲、山、鳥等を、下部に蓮池を描き、其の間左右に鳳鸞、竹林、人物等を圖し、所謂伯牙彈琴の様を現したもので、唐式鏡であるが、鑄成は良好でなく、恐らく踏返してあらう。

以上は何れも平安時代初期以前の製作にかゝり、國寶玳瑁裝牙櫛、銀裝華帶と共に菅原道真と最も因縁の深い本社に菅公遺品として傳へられたものである。

簪散雙雀鏡 一面

簪散雙雀鏡匣 一合

鏡徑六寸六分

匣徑七寸

總高一寸九分

匣は甲盛印籠蓋、錫置口、塵地。蓋表は中央横に三線の帶を引き、その上下及び蓋裏と身の外側には竹枝を、身の底裏には丸に笹文を蒔繪で置いてゐる。身の下角二ヶ所には金銅の複瓣蓮華座付鈎環がある。(挿圖二九圖)

鏡は截頭圓鈕、蒲鉾縁で圓縁があり、圖文は蓋裏と殆ど同一の意匠に相對した双雀を配してゐる。鏡面は蓮座上に大きく大日の種子を安じた圖で、截金線の中に黃土を塗つてゐる。もとこの鏡は鏡面を表として匣に納められたまゝ、神前に

奉懸された御正牀であつた。製作優秀、鏡面種子の御正牀に截金を使用した例は稀であり、製作年代は鎌倉時代と認められる。(挿圖三〇圖)

銅鐘 一口

全長一尺一寸一分口徑七寸六分

頗る小型の鐘で、乳三列三段、池の間大きく、撞座はない。池の間各區に「延喜十一年歲次辛未正月九日甲午鐫彌勒寺鐘」と鐫出銘がある。斯る一尺前後の小鐘は宇治町正念寺の「井手寺」銘のものと、伊勢國出土の貞元三年在銘のものと二口があるのみである。

朱漆金銅裝神輿 一基

總高(露盤上端迄)三尺七寸五分

柱真々一尺八寸

屋根は寶形造銅板張、隅棟先の嵌手に燕飾があり、組物は三斗組、本葺股、圓柱は腰に格狀間を附し、廻縁を繞し、四方階の下に鳥居を立て、正面には扉を設け、三方の壁は銅板張すべて朱漆であるが、鳥居、柱其他金具類は金銅を用ひてゐる。正面扉には蘆名氏の紋所たる豎二つ引と三つ巴の金銅丸紋を打ち、三方壁、屋根板には輪寶紋を打つてゐる。この神輿は社傳に大永六年八月蘆名氏奉獻と云ひ、略同時代の特徴を示し室町時代神輿中注目すべき作である。因に軒四隅の環珞は江戸時代の後補である。

猿轡狩獵男子像 一軀

全高二尺五寸

上野國佐波郡采女村淵名の一古墳より出土したもので、脚部を佚つた他殆ど完全である。頭成りの帽を被り、鉢巻様の飾をつけ、盤領の短衣を左衽に着し、腕

に籠手をつけ、足結をした禪を着け、大刀を佩き、左腰に鞘を下げ左腕を折曲げ尾に鈴をつけた鷹を据えてゐる。即ち上代鷹廿部の姿で、植輪土偶中稀に見るものである。(挿圖二三四)

松喰鶴長方鏡 一面 大坪 正吉

堅四寸一分五厘 横六寸五分五厘

大形長方鏡で蒲鉾縁、截頭方鈕、圖文は松枝と松喰鶴を配し、鏡面には來迎彌陀の脇侍觀音像が線彫にされてゐる。恐らくもとは三面一具の御正鉢であらう。藤原末期或は鎌倉初期の製作で長方鏡中の優品である。

木造扁額 一面 谷保天満宮

堅二尺二寸五分 横一尺六寸五分

表面總黒漆で、葉形猪目付の飾縁を附し、三重の條線で圍つた額面の中央には堅に「天満宮」の三字を筆意彫にし、裏面には「建治元年六月廿六日書之藤原經朝」と陰刻がある。經朝は行成八代の孫行能の子で世尊寺流の書を能くし、所々の扁額を書してゐるが、これは六十一歳の時の書で、伊勢國伊奈宮神社の國寶局額に次ぐものである。

金銀装沃懸地毛抜形太刀一口 春日神社

全長三尺二寸

金具は鍍金又は鍍銀、柄は白鯨皮包、毛抜形は透しとせず中板を存し、水煙鐔で、鞘は沃懸地、足金具、責金具及び鐙の各間には佩表裏とも獅子の蒔繪がある。本社國寶金地螺鈿毛抜形太刀に次ぐ、毛抜形太刀拵中の尤品で、鎌倉時代の製作である。尙この太刀は本社寶庫天井上に納置されてゐたが、昭和十一年寶庫修理の際に見出されたものである。

古神寶銅鏡 十六面 春日神社

素文鏡 二

藤花松喰鶴鏡 三

瑞花双鳳八稜鏡 一

寶相華唐草八稜鏡殘片 一

牡丹尾長鳥八稜鏡 八

唐花鸞鷟八稜鏡 一

何れも略一尺の大鏡で、圓鏡五面、八稜鏡十一面である。圓鏡中二面は圖文なく段圍を現し、内區圓鈕上下に「春日御料寛弘八年正月八日」の鐫出銘があり、他の三面は直線花窓屋圓鈕、藤花に松喰鶴を配し、一面には更に蝶を配する。何れも藤原期の製作と認められる。八稜鏡中一面は蒲鉾縁で段圍を附し、瑞花双鳳文があり、一面は直線花窓の圓鈕、中に寶相華唐草文を現した殘片であるが、恐らく双鳳が配されてゐたと思はれ、何れも藤原期の製作と認められる。又三面は直線縁、圓鈕を附し、花窓座圓鈕の上部に雙對の尾長鳥、下部に牡丹を現した鎌倉期の製作である。又一面は直線縁、八葉座鈕、圓鈕を附し、鈕の左右に鸞鷟、上下に唐花を配し、鎌倉後期の頃のものと認められる。他の四面は直線縁、花窓座鈕、圓鈕があり、牡丹唐草を全面に、鈕の上下に相對の尾長鳥を配した圖文で、鎌倉末期の製作と思はれる。更に一面は直線縁花窓座鈕、圓鈕があり、鈕の左右に尾長鳥、上下に牡丹を現した室町初期頃の製作である。

此等十六面の中室町初期製作と思はれる一面以外は何れも火中し、中には鏡口置口の錫が溶け附着したものがある。恐らく永徳二年正月廿三日の火災後、何れ

の頃から寶庫天井上に納めてあつたのが、昭和十一年寶庫修理の際見出されたもので、室町時代に屬する一面は撤下後寶物として傳へられたものである。斯く古神寶鏡が多く保存された例は頗る稀で甚だ貴重な遺品である。

藤花松喰鶴鏡 一面 春日神社

徑七寸八分

大形儀鏡で蒲鉾型細縁内に圓圖を繞らして内外二區に分ち、鈕は縁に近く設けられ、細長の異色あるもので、圖は外區に松を、内區に松喰鶴と藤の一株を現してゐる。而して内區圓圖に添ひ墨書の願文があり、最後に永治元年十月十七日亥修敬白とある。藤原時代和式鏡で背圖文中に紀年銘のある唯一のものである。

金銅寶相華文鑿 一面 龍谷寺

鏡間八寸九分 縁厚二分五厘

表裏共同一意匠で中央に大きな撞座を鑄出、左右には魚々子地に線彫で寶相華唐草文がある。而して片面には撞座の左に「奉施入」右に「文殊寺」の後銘がある。藤原末前後頃の作と認められ頗る優作である。銘文の文殊寺は福井市の南に白山權現を祀る文殊山あり、もと上下二院あつたが現在山頂の一堂を存するのみである。

銅鐘 一口 長勝寺

全高四尺三寸 口徑二尺五寸三分

常形の鐘で上下帶に文様等もないが、池の間四區に陰刻された銘文中に「嘉元四年八月十五日大檀那相模州菩薩戒弟子黃演」「沙門德經謹書」等とあり、平高直、沙彌道性、源光氏等結縁者の名が見える。即ち圓覺寺銅鐘と同じく北條貞時

が大檀那となつて造られたもので、銘文の筆者德經は圓覺寺銅鐘銘文中に「西堂德經」として名を連ねて居り、銘文の最初の二行は圓覺寺の鐘と同一である。平高直は大佛高直、沙彌道性は曾我太郎兵衛入道道性かとも思はれ、源光氏は中津輕郡船澤村中別所官領の板石塔婆郡中の正應元年七月在銘のものに同名が記されてゐる。

建造物之部

福山城(松前城)(北海道)

慶長五年松前慶廣は曾祖父光廣建造の徳山館の南に福山城を起し、同十一年竣工、これが福山城の創めで、後寛永十四年祝融の災を蒙つたが同十六年復興された。嘉永二年幕府は北海防備の爲、松前氏に築城を命じたので、松前崇廣は兵學者市川一學を聘し、舊地について新城を經營、安政元年竣工したのが現存する福山城の建物である。明治八年開拓使の爲建物は多く毀れたが、幸ひ天守、本丸御門及びその間の塀は破壊を免れた。天守等の規模は壯大ではないが、構造意匠に設計者の特別の工夫が認められ、その建造の由緒を考へ合はすとき城郭史上興味ある遺構である。(挿圖三七圖)

聚光院茶室(閑隱席)(京都市)

聚光院は三好義繼が父長廣の菩提を弔ふため、永祿九年笑嶺を開基として建てたもので、笑嶺に參禪した利休もここを一門の菩提所とし、特に關係が深かつた。閑隱席は幽玄の裡に簡勁の風格ある三疊の茶室で、作者及由緒は未詳であるが、手法材料より見て、江戸中期を遡る

ものと認められる。席に隣る水屋は文化七年新築で、押入換に「新規水造文化七年年初冬 浪華山中了壽寄附之 宗左

(花押)」の墨書がある。水屋の間の東に連る樹床席は、四疊半の中に所謂樹床を配した茶室で、不審庵覺々齊好みと傳へる。(挿圖三二圖)

玉林院南明庵及茶室(義庵、霞床席)(京都市)

玉林院は慶長初年、養安院曲直瀬正琳が月岑を開祖として創建し、南明庵は住持大龍のとき、大阪山中石窓了瑛(鴻池氏)の歸依と懇望とに依り、寛保二年山中氏の祖、鹿之助の牌堂として建立した庵室で、義庵及霞床席は牌堂の西及東に併せて營まれた数寄屋及鐘之間である。棟札によれば「寛保二年戊辰四月廿二日

落成 大檀那山中石窓居士 住持比丘大龍叟宗丈 化主大塚常夢 本堂工匠林重右衛門宗友 数寄屋鐘之間工匠遠藤庄右衛門隆明」なることを知られる。義庵は三疊中板入の茶室で、中板を有する遺構

としては古いものに屬し、霞床席は四疊半で霞床を配する。南明庵と共に概ね建立當初の儘能く保存され、義庵露地も亦舊態を改めず、全體を通じて清閑の趣致極めて豊である。

西翁院茶室(京都市)

席は藤村庸軒が祖翁の創立した西翁院内に、延寶貞享の間建立した茶室で、もと紫雲庵と號し、庸軒好宗貞小座敷として知られてゐた。爐邊の窓から淀川を望み得たので、また漱看席の名がある。所謂宗貞園を設けた平三疊の茶室で、壁隅を塗廻しとし、天井を土で塗上げた板床

を配してゐる。全體に亘り能く古趣を存し、庸軒の好尚を窺ふべき茶室として、また宗貞園の形式の遺構として注目すべきものである。

大傳法院大師堂(和歌山縣)

當堂はその建立の由緒を詳にしないが本尊の胎内銘によつて明徳二年入佛供養を行つたことが知られる。堂は形式手法より見て室町中期を降らぬものであらう。舟肘木一軒の比較的簡単な建物ではあるが、全體の均衡優れ、各細部の比例も整ひ、落着のある建物である。内陣には建物と同時の作と思はれる美しい春日厨子と佛壇があり、内外共當初のままよく遺存し、室町時代に於けるこの種の堂の形式を見る上に好箇の遺構である。

松山城(高梁城)(岡山縣)

松山城は臥牛山の南峰小松山上に、天和初年城主水谷勝宗が築造した近世式山城で、今尙城址を存し、天守、二重櫓及一部土塼を保存する。此地は備中の地理的中心で、備中峡谷交通の要衝を扼する天險を占め、鎌倉時代以降波瀾に富む戦史展開の地である。勝宗築城前の規模は未詳であるが、現存の遺構は孰れも天利造營のものとして認められ、天守は二層で本丸の上段に西南に面して屹立し、山城天守の特質として、其規模は比較的小さいが構架極めて堅牢、初層兩側面及脊面に夫々張出の間を有し、外觀は頗る變化に富んでゐる。二重櫓は天守の脊後にあり、三ノ丸三ノ平櫓東方に遺る土塼と共に山城の舊態を窺ふべき遺構として興味深い。(挿圖三八圖)

菅田庵及向月亭(松江市)

菅田庵は寛政初年、松江藩主松平不昧公の指圖により、有澤宗意の山莊内に營まれた著名な茶室で、向月亭に接續して建つ閑雅な座敷である。向月亭(挿圖三一圖)は四疊半大目の茶室と附屬の諸室から成る茅葺の決瀾な建物で、山莊の臺地中最も形勝の地を占め、其の庭と共に不昧の弟飄庵の作といふ。是等は江戸末期の建立ではあるが、うちに清秀の氣品を有し、作者の風格を偲はれる。猶御風呂屋は菅田庵の上方に在り、同じく不昧の好みといはれ、中に簡素な蒸風呂の設備を有し、腰掛待合を兼ねた建物である。

天満宮本殿(京都府)

本殿は桁行約八尺三寸、梁間七尺二寸餘の流造社殿で、棟札によれば、貞利四年十一月十六日上棟、大工藤原宗光權大工定望とあるが、その細部手法より見れば室町中期頃に相當の改造が行はれたらしい。本建物の身舎前面に吹寄菱格子の透障子を張出したのは珍しく、又透障子上部の透彫及妻飾の構造が同郡相樂村の相樂神社本殿のそれと類似してゐるのは頗る興味があり、相樂地方の神社建築遺構として注目し値する。(挿圖三五圖)

梅田神社本殿(京都府)

棟札により建武五年正月晦日棟上、大工藤井重宗同景友なることが知られる。繪様彫刻を用ひず、三斗組の簡勁な手法になる社殿で、鎌倉頃に行はれた比較的大ならざる流造の典型的遺構と認められる。然も軸部は勿論、軒廻破風等に至るまでよく遺存し、當時の建築細部を見る上に貴重な資料である。

長野神社本殿(大阪府)

本殿は桁行九尺二寸 梁間六尺九寸餘の流造社殿で、千鳥破風及軒唐破風を附し、細部には隨所に奇形な木鼻及び繪様肘木等を用ひ、異色ある手法を示してゐる。その細部彫刻繪様等の形式は室町末期の系統に屬すが、曲線の性質等は桃山風で、恐らくは桃山初期の建立であらう。(挿圖三三圖)

那谷寺本堂大悲閣 三重塔、護摩堂、鐘樓(石川縣)

當寺は白山三ヶ寺の一として、古くより加賀の名刹であるが、現在の堂塔は緣起によると前田利常の建立で、現に三重塔には寛永十九年九月利常建立の旨を記した露盤銘があり、又當時の名工山上善右衛門の作と傳へてゐる。

大悲閣(挿圖三六圖)

は本殿を岩窟内に造り、前面に舞臺造の拜殿を建ててゐる。本殿は隨所彫刻を以て裝飾し、厨子は柱嵌板一面に薄肉彫を施し、虹梁の繪様及び扉の嵌板には獸角を嵌入する等贅を盡したものである。拜殿は唐様の手法に成り、形が整ひ、又三重塔、護摩堂は共に唐様の手法に、鐘樓は和様の手法に成つてゐる。是等はその形必らずしも完好ではないが、斯く同時に建立された一群の建築の遺存する例は珍しく、北陸地方に於ける江戸初期の代表的建築として重要である。

須波阿須疑神社本殿(福井縣)

三間社流造社殿で、社記によれば延徳三年の造營になつたらしい。江戸時代數度の修理により多少の改變された所も見られるが、なほよく舊手法を残し、殊に

永祿年間造督の能登、氣多神社攝社若宮神社本殿の手法と類似するのを考へるとき、北陸地方の室町末期の形式を見る一例として重視すべき遺構である。

金剛寺食堂(天野殿)(大阪府)

當寺は承安年間僧阿觀の開基で、創立當初から皇室と深い關係を有し、後村上天皇は本寺を皇居とされ、食堂及び摩尼院を御座所となし給ふた。食堂は即ち當時の假政廳であつたと傳へる。現存の食堂は慶長元祿の修理により、斗拱以上軒廻等が改造されてゐるが、軸部には猶よく舊材を残し、大體の形態は舊制を踏襲してゐると思はれる。本堂はその貴き由緒を持つと同時に、數少き食堂の遺構としても大いに尊重すべきものである。

(挿圖三四圖)

祥雲寺觀音堂(愛媛縣)

此堂は純唐様の建築であり、安永六年修築に際して奉行に差出した願書の棟札寫により、永享三年四月十九日の上棟、大工は藤原重安と知られるが、形式手法より見ても正に當時のものである。後世外廻り建具を變へ、内部を板敷にする等多少の改造が行はれてゐるが、軸部、斗横、軒廻等は大部分建立當初のままで、殊に内部斗拱、天井等に彩色文様を残してゐるのは珍らしく、室町時代單層唐様佛殿の典型的遺構の一として貴重である。

文書典籍書蹟之部(抄)

觀善賢經冊子 一帖

前山 宏平

觀善賢經を書寫した粘葉綴冊子の殘闕である。料紙は片面に布目を捺し、その

上に雲母摺の文様がある。全八丁の内第三丁裏と第四丁表にかけて「あさぼらけ」云々の歌(古今集卷六坂上是則)第七丁表と第八丁裏にかけて「ふゆごもり」云々の歌(同紀貫之)を散らし書にし、第五丁裏と第六丁表に涉つては冬籠の光景を描いた着色の大和繪がある。(挿圖九圖)經文は一面七行宛、押界中に書かれてゐるが、和歌を書した部分のみは筆寫されてゐない。書寫年代は平安時代末期と推せられる。

騎獅文殊菩薩像(康國作) 納入造像關係文書 十二點

前山 宏平

興福寺僧經玄の大施主で法眼康國の製作した渡海文殊菩薩群像(國寶中野孝次藏)の獅子像内に納入されてゐるもので

昭和十六年國寶建造物維持修理實施狀況

昭和十六年維持修理竣成建造物 昭和十六年中に於て維持修理の竣成せる國寶建造物は左の通りである。(竣工順)

名 稱 所在 工 費

春日神社寶庫・祭器藏 奈良 壹、〇〇〇

車舎・攝社若水神社手 愛知 七、〇〇〇

水屋(解體十八箇月) 愛知 七、〇〇〇

性高院表門(解體移轉八箇月) 愛知 七、〇〇〇

姫路城口ノ櫓・はノ門 兵庫 四、〇〇〇

口ノ櫓東方及西方土塀 兵庫 四、〇〇〇

はノ門東方西方及南方土塀(解體十二箇月) 兵庫 四、〇〇〇

興福寺本堂(解體十八箇月) 長崎 四、〇〇〇

ある。願文には經玄造像の由來と夢想の告によつて童子及び神人を圖繪せること等を記し、奥に文永十年十一月晦日記之とある。金剛般若經は文永十一年八月同じく經玄の書寫にかかり、表紙の見返(挿圖一〇圖)には經玄の夢想を示した童子一昧、神人三人と經玄自身かと思はれる僧形一昧が春日社景に配して彩繪せられ、軸首中には佛舍利を能めてゐる。祐繼の記は同じく童形夢想の由を記したものである。玄空筆尊勝陀羅尼等以下は弘安八年四五月に亘るもので、この年は康圓七十九歳、猶在世中かと思はれるが或は後納かも知れぬ。併せて鎌倉時代彫刻史上貴重な資料である。

(以上文部省の解説に依る)

三間、單層、屋根切妻造、柿葺若宮水屋は桃山時代、他は文久年間の再建になるものであるが、今回解體修理の結果舊規が判明したので左の如き現狀變更が行はれた。

元竈殿

一、外開の扉を内開とし、扉構を整備す。

二、板床の一部を土間に、土間の一部を板床に改む。

一、外開の扉を内開とし、定規縁を整備す。

二、間仕切を整備し、板床の一部を土間とす。

三、内法貫下の明窓を廢す。

手水屋

一、明治初年撤去された背面一間通の廂間を復原して建物本來の姿に復した。

二、西妻腰長押上方の明窓を廢す。

三、棧瓦葺を柿葺に改む。

性高院表門

名古屋市千種區田代町 性高院 大正九年四月一五日指定、構造形式・四脚門、屋根切妻造、本瓦葺

本表門は清須城遺構と傳へる桃山時代の建物であるが、今回寺院の移轉に伴ひ中區門前町より現在地に移轉したものである。

春日神社寶庫・祭器藏・車舎 奈良市春日野町 春日神社 明治三四年八月二日及三五年七月三一日指定

構造形式・祭器藏(元竈殿) 桁行五間 梁間二間、單層、屋根切妻造、檜皮葺

同(元酒殿) 桁行五間、梁間三間、單層、屋根切妻造、檜皮葺、車舎、桁行五間、梁間三間、單層、屋根切妻造、檜皮葺、攝社手水屋、桁行五間、梁間

姫路城はノ門・ロノ櫓・ろノ門 西西南方土塀兩端部・ロノ櫓東方及西方土塀・はノ門東方西方及南方土塀

兵庫縣姫路市本町 姫路城 昭和六年二月一四日指定 構造形式 はノ門

ろノ門、屋根切妻造、本瓦葺、ロノ檜
單層折櫓、屋根本瓦葺

昭和十年より毎年四萬三千圓の工費を
以て修理續行中の姫路城は、昭和十五年
四月より同十六年三月までの間に於て上
記の建造物の修理が行はれたが、このう
ちの櫓については内部に間仕切を設け
土間を板床とし、これに伴ふ出入口の整
備が行はれた。

興福寺本堂

長崎縣長崎市寺町 興福寺 昭和八年
一月二三日指定 構造形式 桁行五間
梁間六間、重層、屋根切妻造、四方腰
屋根附、本瓦葺

本寺は元和六年明僧眞圓の開基になり
現本堂は明治十五—十六年に再建され
たものである。この時の大工は今回發見さ
れた墨書銘によれば「大工頭長崎王銅座
町古賀七五郎」なることが知られるが、
近世南方支那建築の様式を示すその特異
な手法より考へると、その計畫は支那人
工匠の手に成つたものではないかと考へ
られる。國寶建造物中最も新しいもので
あるが、近年著しく頽廢し、今回の修理
を見るに至つたものである。

高臺寺時雨亭並傘亭附廊下

京都市東山區八坂島居前下ル下河原町
高臺寺 昭和十一年四月二〇日指定
構造形式・傘亭、桁行二間 梁間三間
下屋桁行一間、梁間一間、單層、屋根
寶形造、茅葺、時雨亭、桁行四間、梁
間二間、重層、屋根入母屋造、茅葺附
土間廊下、桁行四間、梁間一間、屋根
兩下造 杉皮葺

傘亭及時雨亭は靈屋の上方山の中腹に
南北に配し、繋ぐに兩下杉皮葺の土間廊
下を以てした素朴且雅趣ある茶亭で、千

利休好みと古くから傳へられ、建築の形
式意匠に若干の後補があるがよく古趣を
存し、慶長十一年高臺寺建立の際、共に
營まれたものと考へられる。

時雨亭は先年慎重に取解いて保存して
あつたものを組立て、傘亭は腐朽破損が
甚しかつた爲解放して根本修理を行つた
ものである。

この建物は江戸末及明治年間に姑息的
な補修を受けてゐたのであるが、この工
事に當り、部材に遺る痕跡及古繪圖によ
つてその舊規が判明したので、左の如き
現状變更が行はれた。

傘亭

- 一 折廻六帖の床板を榑板、竹打交ぜ
に改む。
- 二 上段に設けられた水屋欄を撤去し
榑板張の床を疊敷に改む。
- 三 下屋の間の手摺を撤去し、火鉢、
竈、押込戸欄を設く。
- 四 北側開口を撤去し、窓の中敷居下
塗壁なるを堅板張に改む。
- 五 西側入口の引戸を上部小竹結打突
上戸、下部引戸とす。

時雨亭

- 一 初層東側外部の腰板及上層南側東
柱間外部の板張を撤去す。
- 二 初層内部西方の腰掛を三帖の板敷
に改む。
- 三 上層茶點所の丸爐を竈に改む。

本園寺經藏

京都市下京區柿本町 本園寺 大正一
四年四月二四日指定 構造形式・桁行
三間、梁間四間、屋根寶形造、本瓦葺
本建物は慶長十二年太田資高の再建に

係り、もと境内南端にあつたが、明治十
五年現地に移轉した。併しながら現位置
は他の建物と軒を接し、保存上好しから
ざるにより、今回の修理を機として、仁
王門北方に移し、保存の完全を圖ること
となつた。

なほ解體修理の結果、次の各部は後世
改變の痕が明瞭に認められるので、それ
ぞれ舊規に復された。

- 一 一切縮められた柱をもとに復し、こ
れに伴ひ板嵌及建具を整備す。
- 二 土間床を板床に改む。
- 三 背面頭貫飛貫間の縦櫓を、外面壁
内面板嵌に改む。

常樂寺本堂並塔婆

滋賀縣甲賀郡石部町 常樂寺 明治三
一年二月二八日及三四年三月二七日
指定 構造形式・本堂、桁行七間、梁
間六間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺
塔婆、三間三層塔婆、屋根本瓦葺
本建物はいつれも明治三十五—三十八
年に大修理が行はれたのであるが、本堂
檜皮葺屋根の破損が昭和九年風水害の後
急速に進行し、塔婆瓦屋根の凍損も甚し
かつたので、今回これが修理を行ふこと
となつた。

本堂は延文五年、塔婆は應永五—七年
再興されたものであるが、今回の修理調
査の結果、本堂は現在地再建後、幾何な
らずして大改造が行はれ、當初三斗組で
あつた斗拱を二手先とし、地杓勾配を急
としそれに伴ひ外陣天井等にも改變が行
はれたことが判明した。

中島神社本殿

兵庫縣出石郡神美村 中島神社 明治

四五年二月八日指定 構造形式・二間
社流造

本社殿は應永三十一年の建造になり、
元祿十二年に大修理が行はれたものであ
るが、近年軸部は弛緩傾斜し、小屋組及
屋根を失ひ、葺葺葺葺により辛うじて雨
露を凌ぐ状態であつたが、その葺葺も亦
朽損するに至り、今回の解體修理が行は
れるに至つたものである。

昭和十六年維持修理中建造物 十六年
中に於て維持修理を繼續し或は維持修理
に着手し未だ竣工せざる建造物は左表の
如くである。

名 稱

所在

着工

法隆寺舍利殿繪殿及傳 法堂	奈良	一三・三
靈山寺本堂	同	一四・一
諏訪神社社殿	静岡	一四・一
丸岡城天守	福井	一五・六
北室院本堂及表門	奈良	一五・七
一乘寺三重塔	兵庫	一五・二
國分寺本堂	香川	一六・二
吉水神社社務所	奈良	一六・三
姫路城いノ門、ろノ門 にノ門、にノ門東方上 下土塀、いノ門東方土	兵庫	一六・四
堀西部	京都	一六・七
十八神社本殿	京都	一六・七
淨土院客殿	同	一六・七
大寶神社攝社追分來神 社本殿	滋賀	一六・七
小田神社樓門	同	一六・七

昭和十六年度朝鮮寶物
古蹟維持修理實施狀況

十六年度に於て根本的修理を施工せる

寶物古蹟は

指定番號 名稱 所在地 施行費

寶物第二 成川東 平安南 約 200,000 圓

五〇號 明館 道 約 200,000

寶物第二 開心寺 忠清南 約 300,000

九三號 大雄殿 道 約 300,000

寶物第一 長安寺 江原道 約 47,000

二〇號 四聖殿 約 47,000

であり、總て前年度より繼續中にして竣

成せるもの無く、其他には水原城廓（古

蹟第一四號）蒼龍門甕城に修理を加へ、

慶州南山僧燒谷に倒壊しありし三層石塔

を總督府博物館慶州分館庭に移建、新に

發見せられたる扶餘雙北里窯址（古蹟第

一四四號）同じく中和眞坡里古墳群（古

蹟第一三五號）中壁畫を有するものにそ

れぞれ保存施設をなせり。

昭和十六年度朝鮮總督府

發掘事業

十六年度に於て發掘調査せる主なる古蹟左の如し

樂浪古墳

朝鮮古蹟研究會事業として、今年春より

貞柏里一三五號墳、同一二六號墳、同一

三四號墳、石岩里五九號墳、同一二四號

墳、城東國民學校庭所在石槨墳を、小泉

顯夫、榎本龜次郎、鏡山猛、小野忠明、

大島瑞穂諸氏の手により發掘調査した。

主なる出土品は、石岩里二一四號墳の巨

王銘漆盤一箇、巨信私官銘漆耳杯一箇、

漆塗木弓殘欠一箇、漆匣一箇、陰刻文金

銅馬面一箇、金銅轡一箇、青銅鑽一箇、

青銅鐙斗一箇、青銅盤二箇、日光鏡（鈕

帶附）一箇、絹大帶一箇、玉鼻塞及充耳

各一對、白樺製筒形容器一箇、龜鈕銅印一箇、鼻鈕木印殘欠一箇等である。

高句麗古墳

同じく研究會事業として同年春壁畫の

存在を發見せられた平安南道中和郡東頭

面吳收里所在の高句麗古墳群を小泉顯夫

澤俊一、米田美代治、大島瑞穂諸氏の手

により發掘調査した。主なる出土品は第

七號墳の金銅透金具（玉虫翅嵌入）一箇

である。猶第一號墳及第四號墳に壁畫を

存し、小場恒吉氏の手により模寫、並に

別項の如く保存工事を施した。

百濟窯址

扶餘神宮造營工事に伴ひ忠清南道扶餘

郡扶餘面雙北里に百濟時代の窯址發見せ

られ、野守健氏の手により發掘調査し

た。

昭和十六年度美術文獻目錄

凡例

一、茲に採録する文獻は我が國に於いて昭和十六年中に發行された單行本、定期刊行物及び諸新聞掲載のものである。但し古美術文獻に於ては昭和十六年中に刊行せるもので前年度收録洩れになつた分をも適宜收めた。

一、東洋古美術（西方アジアを除く）文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理その他のものについても美術に關係あるものは適宜之を採録した。

一、現代美術文獻目錄は明治大正以後の美術に關するものを輯めた。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及びその他外國美術の二項を設けて採録した。尙滿、支、南方諸國に關するものは別に一項を設けた。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。竣工建築物報道の記事は工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたものは省略し、紹介批評の記事あるもののみを採録した。

一、物語作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

一、現代美術文獻目錄に於て各項目内の配列は、單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十六年度物故作家評傳は雜誌別によらずして題目別にまとめた。

一、古美術文獻に於ける各項目内の配列は、雜誌名五十音順によらず、類似の項目をなるべく同一箇所に收めた。

一、本目錄作製の爲採録せる定期刊行物及び新聞紙は左の通りである。

現代美術關係

アートリエ 浮世繪界 改造 造 教育美術
畫 說 畫 論 建築雜誌 建築世界
工 藝 工藝ニュース 國 畫 國民美術

昭和十六年度美術文獻目錄

思想	新建築	新美術	生活美術
造形教育	造形藝術	茶わん	中央公論
圖畫工作	塔影	南畫鑑賞	日伊文化研究
日本建築士	美術	美術	美術研究
美術新報	美術	美術	美術之國
みづゑ	文部時報	美術	
同新聞			
大阪朝日	大阪毎日	帝大新聞	中外商業
東京朝日	東京日日	京都日の出	福岡日日
報知	都	讀賣	
古美術關係			
浮世繪界	漆と工藝	鳴臺史報	畫室
畫說	畫論	回教園	改造
京都美術青年會々誌	藝術日本	建築雜誌	建築史
建築世界	工藝	考古學雜誌	國華
國畫	國史	國史	國民美術
史迹と美術苑	史蹟名勝天然記念物	史學雜誌	史觀
書苑	書道	思想	史林
新風土記	生活美術	新建築	新美術
大正大學々報	茶わん	中央公論	造形藝術
陶磁	東方學報(東京)	東方學報(京都)	塔影
南畫鑑賞	日本美術協會報告	美術研究	東美
美之國	文化	美術	美術日本
三田評論	三田文學	賣雲	星
燒ものの趣味	歴史地理	みづゑ	文部時報

目次

現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說

雜誌別五十音順

一三七

日本畫

//

一三七

洋畫

//

一三八

彫刻

//

一三八

工藝

//

一三八

建築

//

一三八

作家論

人名別五十音順

一三〇

物故作家及美術關係者

雜誌別五十音順

一三三

時評

雜誌別五十音順

一三三

身邊雜記

//

一三三

雜

//

一三三

明治大正以降美術

//

一三三

滿・支・南方諸國

//

一三三

外國現代美術

//

一三三

繪畫

//

一三三

彫刻

//

一三三

工藝

//

一三三

建築

//

一三三

其他外國美術

//

一三三

展覽會記事及批評

題目別五十音順

一三五

日本畫展覽會

題目別五十音順

一三六

洋畫展覽會

//

一三七

彫刻展覽會

//

一三七

工藝展覽會

//

一三七

行政及教育

雜誌別五十音順

一三七

行政

//

一三八

教育

//

一三八

現代美術關係單行圖書

總說

書名五十音順

一三八

日本畫

//

一三八

洋畫

//

一三八

版畫

//

一三八

工藝及圖案

//

一三八

建築

//

一三八

教育

//

一三八

外國美術

//

一三八

雜

//

一三八

古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總說

一四一

繪畫

一四一

彫刻

一四一

建築及庭園

一四一

工藝

一四一

書蹟・印章・文書

一四一

歷史・考古學・地誌

一五二

古美術關係單行圖書

總說

一五三

繪畫

一五三

彫刻

一五三

工藝

一五三

建築及庭園

一五三

書蹟

一五三

歷史及考古學

一五三

其他

一五三

商工省分館（横河工務所設計）	長谷川英三	建築世界	三五ノ三	警視廳武道場得剛館（岡山覺太郎設計）	水谷 武彦	建築世界	三五ノ一	新しき都市（持軒）一試案	新建築	一七ノ四
水神八百松家（石間桂造設計）	同	同	同	川崎市市民館（川崎市役所營繕課設計）	同	同	同	岸記念體育會館（前川國男建築事務所設計）	同	一七ノ五
静岡市の復興	勾坂 弘美	同	三、五ノ四	今村邸（川畑整理、阿部新吉設計）	同	同	同	社會事業會館（前川國男建築事務所設計）	同	同
社會事業會館（前川國男建築事務所設計）	同	同	同	イタリー文化會館（アルスルフ・ベッオード、橋本岩雄設計）	同	同	一三五ノ一	生駒山の航空道場（石川純一郎設計）	同	同
静岡の復興建築	同	同	同	日光親光ホテル（清水組設計）	同	同	同	F氏邸（ベッオール建築事務所設計）	同	一七ノ六
裝飾のメカニズム	川本 釣一	建築世界	三五ノ五	政治表現としての建築佐藤武夫	國民美術	一ノ二	一七ノ一	N氏のアトリエ（吉原慎一郎設計）	同	同
滿洲帝國神武殿（宮地二郎設計）	同	同	同	山口畫伯邸（吉田五十八設計）	同	同	同	F氏邸（大熊喜英設計）	同	同
某氏邸（渡邊仁建築事務所設計）	同	同	同	日光親光ホテル（清水組設計）	同	同	同	乙部組假事務所（中西六郎建築事務所設計）	同	同
岸記念體育會館（前川國男建築事務所設計）	同	同	三五ノ六	日光親光ホテル（清水組設計）	同	同	同	東京市立芝商業學校營繕課設計	同	一七ノ七
某氏邸（佐々木建築事務所設計）	同	同	同	I氏邸（松田建築事務所設計）	同	同	同	東京市設板橋大和寮（東京市財政局營繕課設計）	同	同
昭和十六年度各學校卒業計畫圖案	同	同	同	茶房「三茶」小崎修設計	同	同	同	T氏邸離家（海老原一郎設計）	同	同
日光龍頭山の家（市浦健設計）	同	同	同	住吉某氏邸（長谷部、竹腰建築事務所設計）	同	同	同	神戶外人海濱俱樂部（宇田忠弘設計）	同	同
日光湯元山の家（志村建築事務所設計）	同	同	三五ノ七	I氏邸（清水一設計）	同	同	一七ノ二	アバイとその繪模樣	山本 祐弘	新建築
石原産業海運株式會社（村野建築事務所設計）	同	同	同	日電化學研究所（土浦龜城建築事務所設計）	同	同	同	傷痍軍人溫泉療養所（軍事保護院工營課設計）	同	一七ノ七
如意庵（川尻新吉設計）	同	同	同	長谷部竹腰建築事務所（同事務所設計）	同	同	同	傷痍軍人結核療養所（同前設計）	同	同
外人海濱俱樂部（宇田建築事務所設計）	同	同	三五ノ八	鈴木氏邸（岡田哲郎設計）	同	同	同	傷痍軍人精神療養所（同前設計）	同	同
栃木農學校（栃木縣廳營繕課設計）	同	同	同	竹内工場（川島定雄設計）	同	同	一七ノ三	失明傷痍軍人寮（同前設計）	同	同
K・K邸（白井建築事務所設計）	同	同	同	石原産業海運株式會社（村野建築事務所設計）	新建築	一七ノ三	同	A製作所厚生施設（同營繕課設計）	同	同
明治初期獨逸留學當時の思出（市河 佐々木兩翁談）	湯目 甫	同	三五ノ九	K氏邸（大倉土木株式會社設計）	同	同	同	B製作所從業員集合所（大倉土木株式會社設計）	同	同
電通映畫製作所（横河工務所設計）	同	同	同	環堺としての建築	佐藤 鑑	同	同	C自動車製造會社青年學校（C鐵工所建築事務所設計）	同	同
若狹邸（堀口捨己設計）	同	同	同	都市計畫雜感	上田 通夫	同	同			
建築と形態	水谷 武彦	同	三五ノ九、一〇	大都市の改造	内田 祥三	同	一七ノ四			
				埋もれた伽藍	坂倉 準三	同	同			
				子供の計畫	同	同	同			

阿部七五三追悼	三苦 正雄	圖畫工作	一五ノ二	現代作家に寄す	外狩素心庵	國畫	一ノ二	戰爭繪畫偶感	田近 憲三	美術新報	五
木子幸三郎略歴及作品	上甲 二郎	美 育	一七ノ三	創作心理の開放を望む	鹽田 力藏	同	同	時局と美術	植村鷹千代	同	同
佐藤功一追悼		日本建築士二八ノ四		佛印巡回展第一信	佐波 甫	同	一ノ四	時局と美術實踐を語る(座談會)	秦 一郎	美術日本	七ノ六
大熊喜邦、今和次郎、今井兼次	同	建築雜誌	六七八	美術家の隣組常會	上田 俊次	國民美術	一ノ一	畫壇の現狀	三輪 鄰等	同	同
佐野利器、内藤多仲、吉田享二、大河内正敏、田邊泰	同	建築世界	三五ノ九	國民美術と新しきデヤリナリズムの方向	荒城 季夫	同	同	聖紀の美術界を回顧して	田近 憲三	美之國	一七ノ一
大河内正敏	同	茶わん	一一ノ八	新生活美について	今和次郎	同	同	皇紀記念邦畫壇回顧	川路 柳虹	同	同
略歴及作品	大藏 雄夫	日本建築士二九ノ二	一一ノ八	世上美術	石井 柏亭	同	一ノ二	二千六百年下の畫人の印象	山口 玄珠	同	同
山本瑞雲追悼(座談會を録す)		美之國	一七ノ七	政治の現段階私見	植村鷹千代	同	同	去年活躍した日本畫家吉副禎三	今井繁三郎	同	同
時 評				生活文化を語る(座談會)	平 貞藏	國民美術	一ノ二	美術時評	大藏 雄夫	同	同
青年美術家に訊く(座談會)	太田 耕士	アトリエ	一八ノア	政治の現段階私見	吉田 謙吉	同	一ノ三	世は新體制になつて!彫刻界の動き	今井繁三郎	同	同
近代造型の反省—西ヨーロッパの偏向批判	武内 満男	同	同	文化的新美術批評	相良 德三	同	同	青年彫塑家聯盟結成を祝ふ	今井繁三郎	同	一七ノ一
美術家の藝術的態度とその新體制	長谷川如是閑アトリエ	同	一八ノ二	建築新體制	尾川 多計	新建築	一七ノ一	日本美術新體制の提案横山	大觀	同	同
個展への期待	植村鷹千代	同	一八ノ六	中だるみの一年—十六年度美術界の回顧	植村鷹千代	生活美術	一ノ一	大觀氏の提案をみて	川路 柳虹	同	同
藝術文化の建設と美術批評の問題	江川 和彦	同	同	フォームの發見	植村鷹千代	造形教育	七ノ七	國家と美術を語る(座談會)	伊東 深男	同	一七ノ三
現代造型の前提	長谷川七郎	同	一八ノ七	美術と指導性	富永 惣一	同	同	私達に與へられた任務	船田 玉樹等	同	同
藝術統制に應じて	須田國太郎	畫 論	同	美術時論	石井 柏亭	同	同	大政翼賛會文化部への希望注文	鈴木千久馬	同	一七ノ四
超非常時局と美術家の役割	笠原 輝次	同	三	便乗と舊體制	柳 亮	造型藝術	三ノ一	時局美術の方向	柳 亮	中央公論	五六ノ三
美術文化建設のために	村田 良策	同	同	「新しい造形」文化座談會	今泉 篤男	同	三ノ二	國防國家と美術(座談會)	秋山 邦雄	みづゑ	四三四
思想國防と美術	荒城 季夫	教育美術	七ノ四	横山大觀氏の畫壇新體制提案	西川 友新	同	同	新文化形態に就て	林 壽郎	同	同
兒童美術文化を語る(座談會)	波多野完治	同	七ノ五	「龍子應召畫」海軍獻納畫「共同製作」に關する雜感	谷田 吉郎	同	同	美術界の皇紀二千六百年を顧る	江川 和彦	同	同
美術と指導性	富永 惣一	同	七ノ六	時局と美術	神崎 憲一	塔 影	一七ノ七	梅原龍三郎氏に團體聯盟不参加の辯を訊く	尾川 多計	みづゑ	四三五
宣傳と藝術の提携	古田 達贊	同	同	新體制下の美術と美術人	上田 俊次	同	同	生活と美術(對談)	喜多壯一郎	同	同
「日光美の再發見」に就て	藏田 周忠	建築世界	三五ノ九		吉田 機司	南畫鑑賞	一〇ノ一		荒城 季夫	同	同
最近十年の色彩學	山上 謙一	工藝ニユ	一〇ノ五								
戰爭と藝術	關口 俊吾	國 畫	一ノ二								

岡倉天心の支那古美術踏査 清見 陸郎 造型藝術 三ノ六、七

田崎草雲先生と遺墨展石川幸三郎 美の國 一七ノ四

外國現代美術

雅邦と玉章

清見 陸郎 茶わん 八ノ四

木島櫻谷氏の藝術

吉副 積三 同 同

精神の不思議さに就て佐藤 敬 アトリエ 一八ノ一

本朝畫人傳

村松 梢風 中央公論 五ノ六、八

木島櫻谷氏の事ども

森 源之助 同 同

カミュー・コロの藝 内田 巖 同 一八ノ二

竹内栖鳳、吉川靈華

田崎草雲先生と遺墨展

櫻谷道墨展に就て

石川幸三郎 同 同

衛に就いて

同 同

本内家三代の藝術

添田 達嶺 塔 影 一七ノ二

櫻谷畫伯を憶ふ

上田 萬秋 同 同

レオナルド・ダ・ヴ

同 同

日本南畫と鐵齋の藝術

神崎 憲一 同 同

想ひ出

中村 繁三 同 同

レオナルド・ダ・ヴ

同 同

讀書生としての自負

淺野 晃 同 同

中村 繁三 同 同

今村 繁三 同 同

レオナルド・ダ・ヴ

同 同

鐵齋翁の「近古賢哲畫像」とその思想的

關聯

青木繁畫無背寫藏

高島 宇朗 同 同

就いて

同 同

鐵齋先生賢哲圖像の

示唆

品附說

新美術 一四四二

レオナルド・ダ・ヴ

同 同

鐵齋先生の人と藝術

正宗得三郎 同 同

佛印の美術

植村 鷹千代 同 同

モデルニズム及び傳

同 同

柴田是眞舊藏十六羅

桑原 雙蛙 同 同

現代支那美術の一端

土方 定一 同 同

統に就て

同 同

漢圖の行方

添田 達嶺 同 同

佛印美術の現狀と我

小松 清 同 同

諷刺畫家シャルル・

同 同

田崎草雲特輯

河野 桐谷 同 同

が文化工作

梅原龍三郎 同 同

クラナツハの周圍

同 同

略年譜

同 同

支那芝居

改 造 二二ノ一

ルカス・クラナツハ

同 同

遺墨展出陳目錄

同 同

滿洲國規格型住宅に

就て

に就て

同 同

木島櫻谷遺作展

神崎 憲一 塔 影 一七ノ六

國神武殿

建築雜誌 六七三

ルカス・クラナツハ

同 同

草雲先生の遺風

小室 翠雲 美術街 八ノ五

滿洲國規格型住宅に

就て

ルカス・クラナツハ

同 同

ア・ネスト・エフ・

小高根太郎 美術研究 一〇ノ二

獨逸ルネッサンスの

素描畫

素描畫

同 同

黑田清輝中期の業績

隈元謙次郎 同 同

南洋の土人藝術

大塚 正雄 建築世界 三五ノ一

スロバキアの現代美術渡邊

同 同

田崎草雲翁遺作展

小室 翠雲 美術日本 七ノ三

佛印紀行

佛印紀行

パオロ・ウツチエツロ

同 同

幸野株嶺翁と京都畫

神崎 憲一 同 同

アンコール紀行

小林 剛 同 同

バオロ・ウツチエツロ

同 同

勤王畫家田崎草雲

河野 桐谷 美之國 一七ノ四

南方アジアの二大藝術干渴

龍祥 福岡日々 一八・五

ヴァン・ゴッホと日

同 同

株嶺遺墨集と草雲遺

田澤 田軒 同 同

殿建築

同 同

クロード・モネと日本荒城

季夫 同 一ノ三

西班牙繪畫の永遠的
價值
ボオル・ギ 新美術 一

伯林の戦争畫展覽會
スーラ 柳 亮 同

スーラのエチュード
に就いて 阿 鹿之助 同

キスリングに就て 瀧川 太朗 同

波斯、印度のミニ
アチール 森田龜之助 生活美術 一ノ一

コヴァルビアスの諷
刺性 龜倉 雄策 同 一ノ二

フアン・アイク兄弟
ラブラードに就て 嘉門 安雄 造型藝術 三ノ七

ラブラード
ルイズ・デエ同 中川 一政 同 三ノ一

セザンヌ回想斷片
後藤 頼二譯 同

セザンヌの思ひ出
エー 同

レオナルド・ダ・ヴ
インチの「聖アンナ」 益田 義信譯 同

ビイター・ブリウゲル
ドボツシ 同

ブリウゲル作品目録
久保貞次郎 同

ビエロ・デラ・フラ
ンチエスカをたづねて 大久保 泰 同

ブリユウゲルの二元
性的性格とその史的評
價の變遷 同

ジャン・フリーケエ
田近 憲三 同

レオナルド・ダ・ヴ
インチ(臨時増刊) 同

レオナルド・ダ・ヴ
インチとの一時間 フレデリツク 同

スーラ 山中 散生譯 同

彫 刻

獨逸初期ルネサンス
の彫刻 テオドル・アトリエ 一八ノ三

モニユマンタル彫刻
とコルベの位置 吉田 次郎譯 同

ゲオルグ・コルベ雜考 本郷 新 同

George Kolbe 木村 章平 同

大畫家・マチスの彫刻 古川 達雄譯 同

コンスタンタン・ム
ニエの藝術 ユーゼニス・生活美術 一ノ三

ザツキンに會ふ 植村 鷹千代譯 同

工 藝 瀧川 太郎 教育美術 七ノ五

バビロニアのテラコ
ッタ 江川 利彦 アトリエ 一八ノ五

建築 ヴトルヴウスの建築 足立 一郎 建築世界 三五ノ一、
六、九

建築海外圖譜 同 三五ノ一

獨逸の農民家屋 同 三五ノ二

ヒトラーの住宅政策 藤田 五郎譯 同

海外圖譜 佐川 正譯同 三五ノ三

海外建築グラフ 同 三五ノ六

獨逸に於ける模範的
住宅地 早川 文夫譯同 六七

書齋 板垣 鷹穂 思想 二二五

茶室 同 二二六

僧院 同 二二八

禮拜堂 同 二二九

イタリヤ新建築の印象谷口 吉郎 造型藝術 三ノ三

ナチス黨の建築 ヒン デル 同 三ノ七

ヒットラー親衛隊の宿舍 同

ロシアの建築 岸田日出刀 報 知 八・一九
一・二一

其他外國美術

美術と思考と技術 相川 春喜 アトリエ 一八ノ一

ルネサンスへの反省 文藝復興期の技術傳統田近 憲三 同 一八ノ一、
二

西洋及び極東に於け
る再現について マンドレ・同 一八ノ三

津田 逸夫譯 同

ケイテ・コルヴィツ
ツの生涯 宮本百合子 アトリエ 一八ノ三

アメリカ現代美術の
遠望 瀧口 修造 同 一八ノ四

ビエル・ロチクとお
つがさん 岡 鹿之助 畫 論 一

滯米畫帖抄 有島 生馬 改 造 二二ノ六

東地中海 荻須 高德 同 二二ノ二

伊太利美術漫筆 吉浦 盛純 教育美術 七ノ五

畫聖雪舟・畫聖セザ
ンヌ 岡見 富雄 國民美術 一ノ二

モスクワの文化を語る
尾瀨 敬止 同

モスクワとレニング
ラードの美術館 宗川 仙吉 同

ドイツの美術館を語る
森田龜之助 同

ハンス・テイツエ
(墳墓隨筆) 兒島喜久雄 思想 一ノ三
二二八、
二二二

造型藝術

三ノ三

三ノ七

八・一九

一・二一

一八ノ一

一八ノ一、
二

一八ノ三

一八ノ三

一八ノ四

一

二二ノ六

二二ノ二

七ノ五

一ノ二

同

同

同

同

同

造型藝術

三ノ三

三ノ七

八・一九

一・二一

一八ノ一

一八ノ一、
二

一八ノ三

一八ノ三

一八ノ四

一

二二ノ六

二二ノ二

七ノ五

一ノ二

同

同

同

同

同

[illegible]

[illegible]

今秋の文展審査員へ
切望する
田澤 田軒 美之國 一七〇七

文部の思ひ出―主として美術行政に關する
牧野 伸顯 文部時報 七三〇

美術館の問題
荒城 季夫 朝日(東) 五・二一

美術院への希望
兒島喜久雄 同 同

美術家の活動
岸田日出刀 同 同

國家興隆と建築
豐島與志雄 同 同

美術館の機能
高村光太郎 同 同

帝國藝術院の活用
木村 莊八 東 日 三・一六

現代美術館
有島 生馬 同 同 一・一七、

近代美術館の問題
今泉 篤男 都 一・一六

帝國藝術院の總會に際して
藤島 武二 讀 賣 三・二七

純粹藝術で行け
北村 西望 同 同

適在適所に應じて
北村 西望 同 同

藝術院の活動
檢討解決すべき問題
田中 一松 同 五・二二

近代美術館の希望
横川毅一郎 同 一・一七

現代美術關係單行圖書

總 說

院展の研究
國民美術研 究所編 同 上

海軍館大壁畫史
山田 米吉 東亞振興會 同 上

繪事美工卒業制作圖錄
前田喜一郎 芸 艸 堂 同 上

行政としての美術新體制私論
川路 柳虹 國民藝術研究 所 同 上

藝術日本の探求
鼓 常良 創 元 社 同 上

近代唯美思潮研究
益田 道三 昭 森 社 同 上

教 育

觸覺教育より視覺教育へ
英賀 重雄 アトリエ 一八〇七

藝術科の指導理念
上甲 二郎 教育美術 七〇一

美術教育に於ける根本的誤謬
柳 亮 同 七〇六

造形教育の倫理
今泉 篤男 造形教育 七〇一

藝術科工作に於ける機械教材の選定
隈部 一雄 同 七〇九、

圖書教育家の回想
霜田 靜志 同 一〇、三

科學、技術教育としての造形教育
倉橋 惣三 同 七〇九

藝術科圖畫の進むべき道
須田國太郎 外 同 七〇九

工學技術と圖畫教育
多賀谷健吉 圖畫工作 一五〇一

十二賢哲像と國民學校教科書の挿繪
藏田 周忠 同 一五〇六

圖畫科に於ける毛筆畫松垣
深水 正策 塔 影 一七〇四

現下の圖畫教育
鶴雄 美 育 一七〇三

國民學校藝術科圖畫指導の要諦
角南 元一 同 一七〇二

現代產業美術
皇紀二千六百年奉祝美術展覽會繪畫選集圖錄
多賀谷健吉 文部時報 七一八

國風美術論(全)
長谷川七郎 東和出版社 同 上

新制作派作品集 第六回
生活と造型(アトリエ特輯)
摩壽意善郎 日伊協會 同 上

生活文化と美術
津田 敬武 アトリエ 社 同 上

大日本海洋美術展集
朝日新聞社 同 上

第四回文展集
第四回文部省美術展覽會原色畫帖
長谷川一躬 美術工藝會 同 上

第四回文部省美術展覽會輯錄
文部時報第七百四十三號附錄
文部省 審美書院 同 上

第四回文部省美術展覽會圖錄 全四冊
日伊文化交渉史
文部省 審美書院 同 上

日本美術年鑑昭和十五年版
美術研究所 同 上

美術(現代哲學叢書)
山際 靖 朝倉書店 同 上

美術及藝術學講義
金子 馬治 理想社出版部 同 上

美術の秋 昭和十六年
朝日新聞社 同 上

美的文化
森口 多里 東京堂 同 上

美乃本體
岸田 劉生 河出書房 同 上

美術と文化
相良 德三 中央公論 同 上

白衣畫集
三上卯之助 教育 同 上

文展の日本畫
國民美術研 究所編 同 上

明治・大正・昭和挿畫文化展圖錄
不破曉磨太 日本電報通信 同 上

日本畫
逸老庵畫集 第一
本間 國生 芸 艸 堂 同 上

印象佛畫集
山田 繁治 芸 艸 堂 同 上

辛錢子畫冊
青 果 堂 同 上

小川辛錢翁草畫帖 第四輯
西澤 信敏 崇 文 堂 同 上

花鳥畫の描き方
神崎 憲一 美術春秋 社 同 上

金鳥桂華
案本 一洋 芸 艸 堂 同 上

桐ノ戸帖 辛巳ノ卷
福田 翠光 同 上

現代名家自選素描集
中村 岳陵 同 上

同
前田 青邨 同 上

同
西澤 信敏 同 上

同
近藤浩一路 同 上

同
木島櫻谷名畫集 櫻 谷 文 庫 同 上

同
五山四谷正美作品集 大 宮 康 資 大 宮 家 同 上

同
香森莊畫帖 大 宮 康 資 大 宮 家 同 上

挿繪節用
四天王寺寶塔壁畫
昭和日名山圖會
墨畫の技法

山本 古洞 芸 堂
堂本 印象 立命館出版部
矢野 文夫 邦 畫 莊
遠藤 敦三 綜合美術研究

栖鳳逸品集 二ノ四一七
聖戰餘塵
素描集 第二輯

山本 倉丘 芸 堂
小室 翠雲 青山道之助
齋藤 隆三 創 元 社
大野 麥風 西 宮 書 院

第一回雙社展覽會圖錄
朝鮮畫觀
月岡芳年五十年忌記念展覽會圖錄

天泉畫集 八
東洋畫題綜覽 一—四
日本畫傑作年鑑 昭和十五

波光、竹喬、紫峰三人展畫集
梅軒展畫集
風俗畫技法

福田豐四郎畫集
邦畫一如 石井柏亭監修
本朝畫人傳 二、三

松岡映丘畫集
森白甫
夜江人作品集

山口玲照作畫集
良寬並雲坪展圖錄

洋 畫

赤松麟作素描集
梅原龍三郎畫集
畫集・堀越コレクション油

解剖應用人物畫法
岸田劉生
近代日本洋畫史 美術叢書一

熊谷登久平畫集（繪と文）
兒島善三郎畫集（二六〇〇
年作品）

須田國太郎作品選集
須田國太郎作品選集
須田國太郎作品選集

素描の實技
第十一回獨立展集
第二回聖戰美術展集

風景畫の描き方
前田寛治
牧野虎雄畫集 自選の決定版

明治大正の洋畫
安井曾太郎肖像畫集（造形
藝術特輯號）

夜の歌（長谷川利行とその
藝術）

慈容三態
橋本襄作花鳥十二月畫集

工 藝 及 圖 案

研祿
聚古文様 四、五
藝染

工藝意匠圖案集
染織文化展秀作圖錄
染織文化展圖錄 一、二

同
第一回染織繡藝展圖錄
朝鮮工藝展覽會圖錄

堆朱陽成 昭和美術百選
民藝とは何か 民藝叢書一
むすび雛形

伊東忠太建築作品
草屋根 建築家隨筆評論集九 今 和次郎
建築と文化 科學文化叢書四 藤島亥治郎

建築年鑑 昭和十六年版
建築より見たる日本國民性
新國民文化叢書二

現代住宅 一九三三—四〇國際建築協會
全四輯
現代日本住宅各部構成集

工作文化 近代工作文化特
輯
住宅臺所集 建築寫真類聚
第十一期十三

小商店圖集 建築寫真類聚
窓の研究（採光篇）
武者憲

前川 千帆 アオイ書房
加藤版畫研究所

高野 善三 芸 堂
河原崎晃洞 同
奥村忠二郎 同

東京府立工
業獎勵館
伊藤太一郎 芸 堂

伊藤太一郎 同
小川雅治郎 同
伊藤太一郎 同

山鹿 清華 同
朝鮮工藝研究會 文 明 商 店
美術日報社 同

柳 宗悅 昭 和 書 房
河原崎晃洞 芸 堂
下村秀治郎 同

城 南 書 院
相 模 書 房
誠文堂新光社
建築學會

伊 東 忠 太 目 黒 書 店
同 上
須原屋書店
相 模 書 房

同 上
同 上
同 上
同 上

伊 東 恒 治 弘 文 堂 書 房
同 同
佐 藤 武 夫 相 模 書 房

古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總 說

美術史の時代區分に就いて 大口 理夫 畫 說 五四

體感——氣韻 金原 省吾 南畫鑑賞 一〇ノ三

書畫一致論の檢討 笹川 臨風 書 道 一〇ノ一

書畫骨董道の成立 谷 信一 國 寶 四ノ二

寶馬廬雜筆 一、二 田中倉琅子 畫 說 五二・五三

やまぐり抄 一五一 樂之軒生 同 五〇・五一

擁爐雜筆 青木 正兒 南畫鑑賞 一〇ノ四

麗澤抄 一 藪田苞桑子 史迹と美術 一三二

藝術に現はれた蛇 金井 紫雲 塔 影 一七ノ一

日本文化の歴史的性質 肥後 和男 文部時報 七二・二三

日本美術の性格に關する考察 渡邊 護 畫 說 五〇

床の間藝術の問題 秋山 謙藏 國 畫 一ノ一

日本文學と美術の交流 田中 一松 國民美術 一ノ一

日本藝術が歐洲繪畫に示唆せるものに就いて 水野 駒雄 みづゑ 四四〇・四四二

國寶保存の事業 小林太市郎 思想 二二・二

飛鳥時代雜感 瀧 精一 文部時報 七三〇

奈良時代的美術について 東伏見邦英 寶 雲 二七

正倉院御物の豊さ 高柳 光壽 茶 わん 一二七

正倉院と勅封 蓮實 重康 南畫鑑賞 一〇ノ一

聖武天皇と天平文化 入田 整三 新風土記 一〇

室町時代的美術について 井上 清純 新風土記 一四

高柳 光壽 茶 わん 一二一

桃山藝術の成生と其經濟的社會的要因 横川毅一郎 造形藝術 二〇

本朝金石文について 田中倉琅子 書 苑 五ノ七

日向紀行 田口 信行 畫 說 五四

吉野宇陀飛鳥巡禮 丸尾彰三郎 同 四九

若狹路 上、下 同 五六・五七

奈良(藥師寺) 同 杉太郎 三田評論 五二五

奈良(唐招提寺) 同 同 五二六

當麻寺考 利島 芳男 歴史地理 四九二

神護寺文書 五―七 史 林 二六ノ一

フエノロスト・エフ・動 一―三 小高根太郎 美術研究 一一〇

朝鮮・印度・支那 長廣 敏雄 東方學報 一一ノ四

古代支那藝術の抽象性 奧村伊九良 寶 雲 二七

支那風の美術思想 唐代的古美術探訪 小林太一郎 茶 わん 一二五

東埔菜の絃耀 植村鷹千代 生活美術 一ノ二

アンコールの藝術 繪 畫

繪畫の倫理性 金原 省吾 塔 影 一七ノ四

東洋畫の品質の問題 熊代 莊蓬 畫 說 五五

東洋畫 鷗飼壬子郎 南畫鑑賞 一〇ノ六

東洋の壁畫とその技 川路 柳虹 美術日本 七ノ七

法 藍田 美之國 一八九

東洋繪畫の農村畫的 仲田勝之助 畫 說 五二

クレマチス文様の認識 金銀と繪畫に就て 吉村 忠夫 茶 わん 一二五

自然と人間とを描いた繪畫 奥平 英雄 浮世繪界 六七

表具の様式 楠瀬 日年 造形藝術 一七

對幅の様式 一、二 同 一九・三

表具の寸法 同 二三

日本藝術における繪畫の位置 岡崎 義惠 國 畫 一ノ一

日本の畫論に就て 坂崎 坦 國 華 六〇二・六〇三

日本畫の超脫精神 相良 德三 南畫鑑賞 一〇ノ七

日本畫に於ける表現 金原 省吾 美術日本 七ノ六

日本の風土と繪畫 同 國民美術 一ノ二

日本繪畫に於ける庶民風俗の畫に就て 藤懸 靜也 浮世繪界 五九・六〇

足利時代の繪畫鑑賞 同 國 寶 四ノ一〇

屏風繪の史的鑑賞 秋山 光夫 塔 影 一七ノ七

浮世繪以外の風俗畫 藤懸 靜也 國 華 六一・六二

上・中・下 大串 純夫 浮世繪界 五九

浮世と浮土 奧平 英雄 同 五九

繪卷と浮世繪に於ける庶民描寫 湯淺 半月 茶 わん 一二五

京都畫壇展畫 多賀 畫 說 五九

金澤文庫文書繪畫資料(素描篇) 藝術資料 四ノ一一

蜻蛉と蜂の繪 同 同 四ノ一二

貝の繪畫 柳田 國男 造形藝術 二一

板繪沿革 板繪沿革 福井利吉郎 聖德太子奉讚論文集

法隆寺壁畫主題續攷 同 同 一七ノ三

法隆寺壁畫の主題に就て 同 同 一七ノ三

法隆寺金堂壁畫の様式的年代 金原 省吾 同 一七ノ三

法隆寺金堂壁畫解説 田中 一松 塔 影 一七ノ三

藥師寺吉祥天畫像雜感 野間 清六 國 寶 四ノ八

正倉院山水圖の研究	松本 榮一	國 華	六〇二・六〇四・六〇六・六〇八・六一〇	春日曼茶羅 解説	國 華	六〇九	神護寺藏山水屏風 解説	美術研究	一一八
四一八				能滿院藏	同	六〇四	中世繪畫の技法について	下店 靜市	八ノ二一・四七九・二〇
天平の繪ころゝ正倉院の繪畫資料	秋山 光夫	影	一七〇・二	春日宮曼茶羅 解説	同	六一二	繪卷物の話	同	一九二
戒檀院屏繪に就て	田中 一松	國 畫	一ノ二	熊野曼茶羅圖 解説	同	六一二	日本繪卷の特性	奥平 英雄	四九
釋迦涅槃圖 解説		國 華	六〇五	内田孝藏氏藏	龜田 孜	一一九・一二〇	繪卷物の坊主頭と手	渡部 美津丸	五六
男爵三井高陽氏藏				聖皇曼茶羅圖說	大串 純夫	一一九・一二〇	己止點の圈(素描篇)	田口 信行	四九
大日金輪像 解説		同	六〇七	十界圖考 上、下	龜田 孜	一一九・一二〇	信貴山緣起の劔蓋童	井上 信行	四三六
醍醐寺藏		同	六〇八	上代唐繪考 上、下	家永 三郎	一一一・一一三・三ノ六	信貴山緣起繪卷再檢	井上 三郎	四三六
來迎藝術論 三一五	大串 純夫	同	六〇四・六〇五・六〇八	倭繪發生年代小考	同	一一一・一一三・三ノ六	高山寺繪本に就て	宮崎 友夫	一〇ノ一
聖衆來迎の信仰	佐藤 賢順	國 寶	四ノ八	大嘗會屏風について	秋山 光利	一一八	鳥獸戲畫(人物篇)	井上 三郎	四三五
來迎圖について		同	四ノ八	平安時代の「やまと繪」研究の一節	同	一二〇	再檢討	田中 喜作	一一六
阿日寺の彌陀聖衆來迎圖に就て	大串 純夫	美術研究	一一五	平安時代の「唐繪」と「やまと繪」上	同	一二〇	住吉家傳來高山寺戲畫模本に就いて	同	一一六
地藏菩薩圖 解説		國 華	六一〇	上代倭繪風景畫の研究 一―三	家永 三郎	四九八・四九九・五〇二	病草紙殘闕 解説	飯島 勇	六〇
男爵三井高陽氏藏				究 上、下	同	五九	松永安左衛門氏藏	同	六〇
觀智院の普賢延命菩薩圖 解説		同	六一三	弘仁期の白描畫 上、下	同	六〇	粉河寺緣起に就て	仲田勝之助	五六
文殊渡海	田中 喜作	畫 說	五八	平安朝の墨繪	下店 靜市	一二七・一二八・一二九	隨身庭踏繪卷に就て	同	五六
「文殊渡海」追記	同	同	六〇	墨繪つくりゑに關聯して	奥平 英雄	五四	年中行事著座圖卷 解説	同	六〇八
五臺山文殊の展開(素描篇)	下店	同	六〇	平安時代の畫の殘存と歌	尾上 柴舟	四ノ五	松崎天神緣起	福山 敏男	四ノ六
稚兒文殊出現圖に就て	松下 隆章	日本美術協會報告	六〇	平安時代の畫の殘存と歌	尾上 柴舟	四ノ五	伊保庄本並に津田本	梅津 次郎	一一四
虚空藏菩薩、明星、毘沙門天圖 解説	男爵三井高陽氏藏	國 華	六〇六	扇面寫經畫と物語繪 一―五	吉澤 義則	一〇	伊保庄本地野天神緣起繪卷詞書(校刊)	同	一一四
圓城寺不動明王八大童子畫像	龜田 孜	清 閑	九	二 平家納經考證 一、	同	六〇二・六〇三・六〇五・六〇七・六〇八・六〇九	光明眞言功德繪詞書(公刊)	梅津 次郎	一一二
高野明王院の赤不動(名品小解)	わきもと	畫 說	五〇	平家納經雜俎	龜田 孜	一一四	光明眞言功德繪詞書(公刊)	同	一一二
大威德明王像 解説		國 華	六〇二	嚴島神社藏平家納經嚴王品見返	同	一一二	八幡宮緣起畫卷 解説	同	六〇四
當麻曼茶羅レントゲン寫眞撮影の記	渡邊得之助	同	六〇九	目なし經	相澤 春洋	一二五	石清水八幡宮藏	田中 一松	一八八
光臺院藏章曼茶羅圖 解説	美術研究	一一一		法隆寺藏蓮花水禽圖 解説	相澤 春洋	一一一	當麻寺緣起に就いて	史蹟名勝天然記念物	一八八

佐竹本三十六歌仙畫卷について 堀部 正二 清 閑 一一
歌仙小大君像 解 國 華 六一
前山宏平氏藏 解 國 華 六一

弘法大師の畫像と傳記とに就て 魚澄惣五郎 國 寶 四ノ九
神護寺藏眞言八祖像 解 美術研究 一一〇
後鳥羽天皇御影に就て 圖版解説 寶 雲 二七
若宮八幡神像 解 國 華 六〇三

加藤正治氏藏 森 暢 畫 說 五一
傳空達上人の畫像に就いて 同 南畫鑑賞 一〇ノ一
二つの草稿影 同 記者 星 岡 一二三
永久寺亮惠上人畫像 一 記者 星 岡 一二三
一休宗純像 解 美術研究 一一三
岡崎正也氏藏

水墨畫 青柳 正廣 南畫鑑賞 一〇ノ八
「相國寺前住持」附載 玉村 竹二 畫 說 五九
の畫贊資料 前山宏平氏藏高士探梅圖に就て附點點考 松下 隆章 三田文學 一六ノ一
圖に關する二三の點 漁庵題詩山水圖 解 國 華 六〇八
男爵山本達雄氏藏

傳周文寒山拾得圖 (名品小解) わきもと 畫 說 五九
雪舟の作品に就て 田中 一松 國民美術 一ノ二
雪舟問津 田中倉琅子 畫 說 五七
田中氏の「筆受」說 仲田 同 六〇
に關聯して(素描篇)

西湖圖 解 畠山 清氏藏 美術研究 一一三
宗淵洛室神圖(名品小解) わきもと 畫 說 五三
小解)圓覺寺藏 國 華 六〇五
宗祐筆山水圖 解 國 華 六〇五
加藤正治氏藏 道安瓜圖(名品小解) わきもと 畫 說 五五
ポストン美術館藏

雲谷等顏筆樓閣山水圖 解 國 華 六一三
佐々木昌興氏藏 雲谷等益筆春秋白鷺圖 解 國 華 六〇三
北村房吉氏藏 友松の山水圖屏風 解 國 華 六〇二
南喜三郎氏藏 海北友松筆琴棋書畫圖 解 國 華 六〇七
三大寺喜平氏藏 宮本二天の畫蹟と其師矢野三郎兵衛國寶屏風の訛傳に就て 甲木 道雄 塔 影 一七ノ六
寒山拾得圖 山口雪溪筆 澤庵贊月夜柏鷹圖 解 國 華 六〇七
前山宏平氏藏

雲龍院藏光信筆後圓融院宸影 解 美術研究 一一七
土佐光信筆十王圖 解 國 華 六一〇
淨福寺藏 正信筆山水人物圖 解 美術研究 一一七
藤原銀次郎氏藏 重信筆若竹芥子圖の印影 國 華 六〇二
帝室御物既圖屏風に就て 瀧 精一 國 華 六〇二
古狩野四季山水圖屏風 解 國 華 六〇六
布施亮延氏藏

永德筆洛中洛外圖屏風(名品小解) き 畫 說 五八
伯爵上杉憲章氏藏 梅津天神社の繫馬圖 土居 次義 清 閑 一〇
繪馬と狩野山樂 森脇家の桃稚子圖と 同 南畫鑑賞 一〇ノ四
狩野三市に就いて 同 史迹と美術 一三〇
狩野永納筆賀茂義馬圖 解 國 華 六〇八
武内金平氏藏 四季花鳥圖屏風と筆 秋山 光夫 畫 說 五七
者元秀に就いて 元秀の問題(素描篇) 田中 同 美術研究 一一六
探幽筆琴棋書畫圖、四季花鳥圖 解 國 華 六一三
名古屋城上洛殿

狩野探幽筆家康天海問答圖 解 國 華 六〇二
青龍院藏 田園畫家守景 蓮實 重康 南畫鑑賞 一〇ノ六
守景筆交書き六曲屏風 解 國 華 六一五
男爵山本達雄氏藏 清原雪信筆清少納言鶉圖 解 同 六〇五
英一蝶の洋風畫 一 山本 辰一 茶わん 一二一
南疊屏風の異國的内容 岡本 良知 史 學 一九ノ三
南疊屏風雜感上、下 永見德太郎 浮世繪界 六一・六
近時發見の帝王圖に就いて 隈元謙次郎 美術研究 一一九
秋田系洋畫遺品一・二 太田 桃介 南畫鑑賞 二ノ五
ビボクラテスの世に 出るまで 望月 克二 茶わん 一二五
宗達の藝術性 渡邊 護 造形藝術 一八
依屋宗達 廣谷 錦堂 茶わん 一二九
少庵書狀 解 長尾欽彌氏藏 美術研究 一一一
宗謙筆住吉明神圖 解 國 華 六一二
東京美術學校藏 光琳紅白躑躅圖(名品小解) わきもと 畫 說 五二
光琳遺聞其他(素描篇) 田中 喜作 同 五九
山本素軒並びに山本家の歴代を録す 相見 香雨 日本美術協會報告 五九
南畫の畫境上・中・下 山際 靖 南畫鑑賞 一〇ノ七
南畫放談 續南畫放談 勝本 正晃 改 造 二二ノ三
池大雅評傳 十三 人見 少華 南畫鑑賞 二二ノ三
遍照光院藏大雅筆山水人物圖解 美術研究 一一三
大雅の二作(圖版解 菅沼 貞三 三田文學 一六ノ一
說) 燕村繪畫に於る二重岡 直己 南畫鑑賞 一〇ノ一
燕村筆奥の細道野晒紀行圖 解 美術研究 一一一
橋本辰二郎氏藏

燕村華山行圖 解説	國華	六二二	我が國民精神と華山先生	大島 正徳	東 美 七	浮世繪の一つの性格に就て	近藤市太郎	浮世繪界	六二・六
大島文義氏藏			郷土の先輩華山先生	大島 喜六	同	浮世繪の境界	椅崎 宗重	南畫鑑賞	一〇ノ八
興謝燕村「竹溪訪隱圖」(名品鑑賞)	村田 良策	一〇ノ七	華山先生は生くる	笹川 臨風	同	浮世繪と自然觀照	同	同	一〇ノ五
燕村と竹	堂谷 憲男	一二九	尊き哉華山先生	松林 桂月	同	鎮國經濟と浮世繪版畫	高橋誠一郎	三田文學	一六ノ一
柳里恭傳資料	相見 香雨	六〇	渡邊華山の人格と畫境(隨筆)	横山 健堂	同	浮世繪の佛畫	古堀 榮	浮世繪界	六七
柳里恭筆花鳥圖 解説	國華	六一〇	先覺者としての華山先生	太田鐸太郎	同	浮世繪を語る座談會	奥村 廣	同	六三
帝室博物館藏			人間渡邊華山	外狩素心庵	國民美術	平民畫家としての自覺	藤懸 靜也	同	六四
兼葭堂と里恭大雅燕村	神山 白士	一〇ノ一	江戸人華山先生	井上 昇三	南畫鑑賞	飯畫家としての菱川師宣	同	同	六七
兼葭堂と賣茶翁	同	一〇ノ五	渡邊華山と疊社の獄	森 銑三	塔 影	祐信と語る	椅崎 宗重	茶わん	一二九
臺山詩稿(校刊)一・二	樂之軒生	五二・五三	晩年の華山先生	大口 喜六	同	宮川一笑筆節分圖	玉林 晴朗	浮世繪界	六〇
高久露屋雜俎 下ノ二・四	人見 傳藏	一〇ノ四・一〇ノ一	椿椿山の田原訪問	森 銑三	國寶	勝川春章を扱つてゐる黃表紙	森 銑三	同	六七
華山先生の藝術	瀧 精一	七	櫻間青崖のこと	原風庵主人	南畫鑑賞	泰朗の相撲繪	長瀬 武郎	同	六〇
華山の特質	菅沼 貞三	七	中林竹洞「荻渚郡鷺圖」	村田 良策	同	平野女史の清長に漏れた作品 上、下	同	同	六三・六
華山先生と科學的精神 特に透視圖學取の經路に就て	横川毅一郎	七	高橋草坪	外狩素心庵	造形藝術	歌麿私抄	加藤 一雄	寶 雲	二七
續華山の肖像畫	菅沼 貞三	一一四	豊後日田の長者森家と畫僧平野五岳一六	山本 辰一	茶わん	歌麿疑義數項と其解説	滄洋 學人	浮世繪界	六七
華山先生の人物畫と肖像畫とを巡る	素心 菴生	一七ノ一	應舉の別號(素描篇)田中	喜作	畫說	雪麿の浮世繪師傳	仲田勝之助	同	六二
渡邊華山の紙摺畫と指頭畫	山田萬吉郎	一二〇	芦雪筆吳夫人圖 解説	國華	六〇九	歌麿の居た新吉原の家と其後の葛屋	滄洋 學人	同	六〇
華山の俳畫觀	杉浦 冷石	一七ノ一	爲恭の藝術を語る	叔山 櫻華	茶わん	耕書堂葛屋重三郎	木村 捨三	同	六六
華山先生の傑作	鈴木 進	一七ノ一	冷泉爲筆恭子の日遊圖 解説	蓼庵 主人	茶わん	東洲齋寫樂論	椅崎 宗重	國寶	四ノ一〇
華山の四州眞景	菅沼 貞三	一一〇	前山宏平氏藏	逸木 盛照	畫說	米國で發見された寫樂の役者繪	木村 捨三	浮世繪界	六七
華山翁蘭竹畫譜小疑	森 銑三	五一	爲恭の歌	逸木 盛照	畫說	安田雷洲の肉筆とパリ版上、下	小野 忠重	同	六二・六
渡邊華山筆鳥鷺圖双幅 解説	國華	六〇五	職人畫繪の形態に就て 上、下	椅崎 宗重	國寶	葛飾地齋	鍋井 克之	南畫鑑賞	一〇ノ五
全樂堂遺墨淺說	相見 香雨	一七ノ一	風俗圖屏風 解説	武内金平氏藏	國華	北齋の勝景奇覽	長瀬 武郎	浮世繪界	六七
渡邊華山の守困日歴	菅沼 貞三	五二〇	曾我屏風雜感	柳 宗悅	工 藝	北齋の健康に就て(下)	同	同	六三
一・四	相見 香雨	五二三	曾我屏風の頭末	柳 宗悅	同	北齋の義太夫趣味	木村 捨三	同	六四
華山の名字號考	同	七	曾我屏風挿繪小註	椅崎 宗重	同	風景版畫家北齋	古堀 榮	浮世繪界	一〇ノ三
渡邊登のノボリとノボルの說	同	四ノ四	浮世繪本質論	椅崎 宗重	浮世繪界	豐清	外山卯三郎	南畫鑑賞	五九
華山覺書	菅沼 貞三	一七ノ一	近世畫派の成立に於ける浮世繪派の概念	同	同	豐國國定落款集	築比地仲助	同	六四
華山雜考	森 銑三	七	浮世繪に於ける形態的小の原理 上、下	同	同	狂歌と歌川國丸	津金巨摩雄	同	六七
渡邊華山雜俎	同	一〇ノ四			五九・六				

二代國直の考察	津金互摩雄	浮世繪界	六二	支那山水畫論講話	河野 桐谷 同	一〇ノ一・二・六・九	李迪筆紅白芙蓉圖 解說	美術研究	一一四
安藤廣重(本朝畫人傳)村松 梢風	中央公論	六四四	清代南畫の問題	佐藤 良 同	一〇ノ五	黃鶴山樵王蒙 堂谷 憲勇 寶 雲 二七	馬場 春吉 星 岡 一二三・一二四		
繪本江戸土産と初代 鈴木 南陵	浮世繪界	六二・六	支那繪畫史の創始者 (中)故内藤湖南博士の一遺業	伊勢專一郎 寶 雲 二七		鄭板橋の遺跡を訪ふ 一、二	外狩素心庵 畫 論 三・四		
廣重筆江都八景帖に 就て	同	四ノ七	衛協研究	米澤 嘉圃 (東京) 畫 一二ノ三		天池道人徐謂上・下 華畠の山水人物畫冊 阿部孝次郎氏藏 王石谷筆青綠山水圖 武田憲治郎氏藏 達長老私考	解說 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同	六〇五 六〇四 六〇五
廣重筆富士十二景帖 就て	同	四ノ九	顧愷之女史箴圖卷解 說	原田 尾山 國 畫 一ノ一		壁畫に於ける盛上げ 描法	同	同	一一ノ三
雪嶺	長瀬 武郎	浮世繪界	六六	顧愷之の維摩 堂谷 憲勇 南畫鑑賞 一〇ノ二		南滿州營城子古墳の 漢代壁畫	熊谷 宣夫 畫 說 五一		
田沼時代の板木繪	澁井 清	三田文學	一六ノ二	南唐の落墨花 田中倉琅子 三田文學 一六ノ二		北京夕照寺の壁畫 西抄佛畫の二三の描 法	小野 勝年 老古學雜誌三一ノ三 熊谷 宣夫 畫 說 五九		
役者繪に於ける判じ 物模様の一考察	木村 拾三	浮世繪界	六二・六	徵宗皇帝筆桃鳩圖解 說	田中 一松 國 畫 一ノ四	キジール紅縫洞—そ の復原圖の作成—	岡田芳三郎 (京都) 東方學報 一二ノ二		
判じ繪	古堀 榮	同	六三	牧溪子母猿圖 (名品小解)	わきもと 畫 說 六〇	上、下、	吉川 逸治 國 華 六〇七 六〇九		
繪曆雜觀	古堀 宗重	同	六四	大德寺藏牧溪筆龍虎圖 遠清歸帆	蒼沼 貞三 三田文學 一六ノ二	彫 刻			
繪曆雜觀其二、宗理 問題の新展開と百琳 宗理の屏風	同	同	六五	傳牧溪筆遠浦歸帆圖 伯爵松平直國氏藏	美術研究 一二〇				
繪短冊と銅版畫	森 繁夫	南畫鑑賞	一〇ノ四	傳牧溪筆遠寺晚鐘圖 男爵益田太郎氏藏	美術研究 一一六				
刷物と押繪	山田徳兵衛	浮世繪界	六二	傳牧溪筆遠寺晚鐘圖 侯爵前田利爲氏藏	同 一一八				
和合神	古堀 榮	同	六〇	傳牧溪筆芙蓉圖 (名品小解)	同 一一八				
朝鮮・支那・印度	西丸 小園	書 道	一〇ノ一	雙鳩圖 解說 長尾欽彌氏藏	國 華 六一一				
漢代の繪畫	西丸 小園	書 道	一〇ノ一	宋畫玄沙大師接僧圖 傳真元吉筆聚猿卷	同 六一一				
漢代畫の筆力主義	奧村伊九良	南畫鑑賞	一〇ノ二	宮素然筆明妃出塞圖 阿部孝次郎氏藏	同 六一一				
六朝の繪畫 上、下	西丸 小園	書 道	一〇ノ二・四	孫氏家牒中の畫像 藤井有鄰館藏	美術研究 一一〇				
顧愷之の畫論と風風	鎌倉芳太郎	造形藝術	一七	因陀羅筆寒山拾得圖 石格の二祖調心圖	國 華 六一〇				
琴附屬琴臺に就て	西丸 小園	書 道	一〇ノ五・七・一二	長尾欽彌氏藏	同 六一二				
唐朝の繪畫 一―三	今村 龍一	東方學報 (東京)	一一ノ一	宋迪と瀟湘八景	南畫鑑賞 一〇ノ四				
唐代に於ける繪畫の 鑒賞に就て	米澤 嘉圃	同	一一ノ一	烏田脩二郎	日本 源 豐宗 美之國 一九二				
唐集賢殿書院の作畫 機能とその畫家	今村 龍一	國 華 六〇三							
張彦遠の繪畫史觀(下)	田中倉琅子	畫 說 四九							
歷代名畫記、宣和畫 譜の事ども	瀧 精一 (東京學報)	一一ノ一							
文人畫と南畫	下店 靜市	南畫鑑賞	一〇ノ一						
南畫起源の新研究(完)	大口 理夫	同	一〇ノ七						
南北山水畫の特色									

奈良彫刻の基調の問題	金森 遼	建築史	三ノ四	興福寺東金堂發見の銀腕に關する疑(資料)	黒田 昇義	建築史	三ノ二	淨發願寺の出山釋迦(素描篇)	西田 正秋	畫說	五五
東大寺の四方五佛像(資料)	足立 康	同	三ノ四	奈良般若寺の藥師像について	榎本 龜生	史迹と美術	一三三	假面の問題	佐藤 良	茶わん	一二五
平安彫刻の精神	孝橋 謙二	南畫鑑賞	一〇ノ七	藥師寺金銅佛の問題(小評)	足立 康	建築史	三ノ三	伎樂面源流小考——三鶴飼壬子郎	南畫鑑賞	一〇ノ六	一〇・二
荒彫像の問題	田中 喜作	畫說	六〇	金銅菩薩像	長尾欽彌氏藏	美術研究	一一三	舞樂の傳承と舞樂面の遺品に就て	野間 清六	國寶	四ノ一二
法眼定朝と定家記(素描篇)	藤田 經世	同	五八	百濟觀音像	鶴飼壬子郎	南畫鑑賞	一〇ノ四	朝鮮・支那・印度			
猪熊白記の運慶史料(素描篇)	同	同	五五	(名品小解)	おほぐち	畫說	五七	李朝釋迦像	大藏集古館藏	國華	六〇三
沙門運慶の願經に就いて	景山畔四郎	國史學	四三	法華堂不空絹索觀音像	金森 遼	國寶	四ノ五	滿洲發見古銀銅面に	島田	國華	三ノ三
懸佛起源攷	森岡 美子	考古學雜誌	三一ノ六	山口市長谷觀音堂十一面觀音像	矢代 幸雄	美術研究	一一二	武陵の精華	景山畔四郎	清閑	九
難讀銘三則	藪田嘉一郎	史迹と美術	一二八	弘明寺銘本尊の測定と考察	西田 正秋	畫說	五〇―五	雲岡石窟の發掘	伊東 忠太	史蹟名勝天然紀念物	一八八
特異な佛像納入品(素描篇)	丸尾	畫說	五九	執金剛	内田 誠	三田文學	一六ノ二	雲岡石窟の保存に就いて	小野 勝年	考古學雜誌	三一ノ一
考古夜話	平林 悅治	星岡	一二九	東大寺戒壇院の四天王像	蓮實 重康	造形藝術	一八	付法藏傳と雲岡石窟	水野 清一	美術研究	一〇九
已年に因む宇賀神と辨才天	川勝政太郎	史迹と美術	一二二	峯定寺不動明王及二童子像	金森 遼	國寶	四ノ九	大同雲岡石佛攝影記	小川 晴暘	清閑	九
東大寺藏誕生釋迦佛像並浴盤	美術研究	一一六		三寶院の快慶銘不動明王坐像	赤松 俊秀	史迹と美術	一二二	龍門石窟	大川 理夫	國民美術	一ノ三
藥師寺佛足石の造顯年代	足立 康	考古學雜誌	三一ノ二	十二神將の已神將	龜田 孜	星岡	一二二	開皇二年四面十二龕像に就いて	水野 清一	東方學報(京都)	一一ノ一
武藏野の白鳳佛	吹本 喜一	茶わん	一二五	興福寺羅漢像の名稱(素描篇)	大口 理夫	畫說	五八	健駄羅式的金銅佛	矢代 幸雄	美術研究	一一七
橋夫人念持佛とその厨子	國寶	四ノ七		叡山青龍寺維摩居士像に就いて	丸尾彰三郎	三田文學	一六ノ一	北宋の一石彫について	村田 治郎	國寶	四ノ一
運慶作大日如來像	國寶	六〇四		十大弟子	大口 理夫	畫論	二	劉宋元嘉年間の金銅佛	矢代 幸雄	美術研究	一〇九
廣隆寺講堂の三尊像	足立 康	建築史	三ノ五	藥師寺藏僧形八幡像	赤松 俊秀	美術研究	一一五	建築の國寶指定について	足立 康	茶わん	一二〇
清淨心院阿彌陀如來像考	直己	三田文學	一六ノ二	高山寺の善妙白光兩神像に就いて	川勝政太郎	史迹と美術	一二八	金銀と古建築	同	同	一二五
和田氏藏阿彌陀如來像	國寶	四ノ三		近江日吉神社發見の懸佛	太田 古朴	同	一二五	伽藍御堂廢寺塔婆趾考	太田 靜六	新風土記	七
極樂院彌陀三尊像の造顯年代に關する考	米山 徳島	史迹と美術	一三〇	金峰山寺聖德太子立像	金森 遼	國寶	四ノ六	流盃渠・境・春葦水窗の制度	竹島 卓一	建築史	三ノ六
鎌倉大佛の丈量	足立 康	建築史	三ノ三	唐招提寺鑑真利上像	金森 遼	美術研究	一一八	蠟石と門枯限・地獄	同	同	三ノ五
ガウンを著けた鎌倉の大佛(素描篇)	岡田 章雄	畫說	五八	橋寺藏日羅像	福山 敏男	建築史	三ノ三				
法隆寺金堂藥師如來像管見	東伏見邦英	紀元二千六百年記念京大史學論文集		源賴朝像北條時賴像上杉重房像について(資料)	福山 敏男	建築史	三ノ三				

層と簷(資料) 竹島卓一 建築史 三ノ二
支那建築の日本建築 飯田須賀斯 國華 六一〇
に及ぼせる影響上・下 六一一
特に虹梁に就て 史蹟名勝 一八二
庭園の破壊せらるる 天然紀念物
原因

日本

美術品の保存と校倉 一樹悦三郎 畫說 五八
屋垂みについて 大岡 實 建築史 三ノ六
正倉院と甲雙倉 足立 康 同 三ノ一
(資料)
迎講と婆娑屋 藤田 寛雅 同 同
鎌倉時代に於ける茅 大岡 實 同 三ノ四
負曲線の一性質につ

いて
神社本殿の形式 阪谷良之進 史迹と美術 一二三
神明造と大社造との 足立 康 建築史 三ノ二
關係

權現造と石間造 足立 康 建築史 三ノ三
匠家の傳書と權現造 大熊 喜邦 同 三ノ五
宇治上神社本殿につ

いて
談山神社權殿の再建 黒田 昇義 建築史 三ノ五
年代

池田素盞鳴神社本殿 堀山彦太郎 史迹と美術 一二二
勝尾寺の大鳥居 谷 重雄 建築史 三ノ六
最近發見された山形 佐藤 榮太 史迹と美術 一二六
縣の石鳥居

斑鳩宮の遺址につい 足立 康 聖德太子奉讃論文集
て

大津宮址の位置 同 新風土記 六
大津宮址と勸學堂廢 同 史迹と美術 一二八
寺址附載再び行

基建立四十九院に就 同 史迹と美術 一二八
いて
恭仁京及び恭仁大宮 由井喜太郎 同 一二四
の址について

由義宮とその經營 大井重二郎 史迹と美術 一二五
上、中、下 一二七

藤原宮御井につき齋 足立 康 建築史 三ノ二
藤茂吉博士に答ふ 福山 敏男 同 三ノ四
平城京及び平安京の 一條一坊(資料) 寶 雲 二七
平安京宮城指圖に就 同 建築史 三ノ五
いて
平安京及び宮城の指 同 建築史 三ノ五
圖(資料)

法隆寺新非再建論の 足立 康 建築史 三ノ四
新證據
法隆寺若草伽藍址の 石田 茂作 聖德太子奉讃論文集
發掘に就て 猪熊 兼繁 史迹と美術 一三〇
法隆寺西院伽藍と所 謂若草伽藍址

法隆寺西院廻廊 藤原 義一 聖德太子奉讃論文集
法界寺阿彌陀堂の再 田中 重久 考古學 三一ノ一
建時代 山田寺講堂平面の實 大岡 實 建築史 三ノ二
測に就いて

大安寺僧坊の配置 同 同 三ノ一
現存する行基建立寺 田中 重久 史迹と美術 一二七
院上、下 足立 康 建築史 三ノ一
高野山根本大塔とそ

の本尊 足立 康 建築史 三ノ一
東寺講堂の平面につ 大岡 實 史蹟名勝 一八二
いて

平等院と其の阿彌陀 田中 重久 史迹と美術 一三一
堂の莊嚴 續平等院阿彌陀堂と 同 同 一三三
其の莊嚴

田中重久氏の「平等 源 豐宗 史迹と美術 一三二
院と其の阿彌陀堂の 莊嚴」を讀みて 中尊寺金色堂に就て 六角 紫水 茶わん 一二五
尊勝寺の伽藍配置 足立 康 建築史 三ノ三
(資料)

東大寺南大門の再興 中上川彦一郎 同 三ノ一
當麻寺と證空上人柱 土井 實 新風土記 一七
の銘文 新藥師寺の南門と東 關野 克 國 寶 四ノ二
門の形式に就いて

圓覺寺舍利殿の建築 太田博太郎 建築史 三ノ六
年代
妙光寺と印金堂 川勝政太郎 史迹と美術 一二七
本願寺本堂 大岡 實 建築史 三ノ一
妙樂寺明通寺の建築 同 同 三ノ三
大福光寺本堂及多寶 同 同 三ノ五
塔

備後の利生塔(資料) 太田博太郎 同 三ノ五
太山寺本堂再建年代 望月 信成 同 三ノ二
に關する文獻
觀心寺本堂と立掛塔 足立 康 同 三ノ六
建仁寺の伽藍配置に 太田博太郎 同 同
ついて

古建築巡禮三、圓成 川勝政太郎 史迹と美術 一二五
寺樓門
神宮寺本堂及仁王門 大岡 實 建築史 三ノ四
京都大佛殿の間尺覺 大熊 喜邦 同 三ノ六
書附 京都御所延 寶皮御進覺書(資料)

東大寺三昧堂の建築 黒田 昇義 國 寶 四ノ一〇
年代

公家住宅の發展とそ 太田博太郎 建築史 三ノ三
の衰退
工匠より見たる藤原 太田博太郎 建築史 三ノ一
建築界

我が寢殿造の源流に 駒井 利愛 東方學報 一一ノ一
就いて 源氏物語繪卷に見え 關野 克 建築史 三ノ一
る寢殿造細部(資料)

立部と透垣 同 同 三ノ二
泉殿釣殿の研究 下 森 蘊 寶 雲 二七
釣殿に就いて

釣臺と水閣(資料) 足立 康 建築史 三ノ二
紅梅殿と菅家廊下 桃 裕行 史蹟名勝 一八二
一四 天竺紀念物 一八五
東三條殿の東對につ 關野 克 建築史 三ノ四
いて

京極土御門殿の東對 同 同 三ノ三
に就いて
藤原道長の邸宅に就 太田 靜六 考古學 三ノ四
いて上、下

主殿造迷子窓の源流に就いて(資料)	關野 克	建築史	三ノ六	瓦大工橋吉重	黒田 昇義	同	一二九	金陵所見磚瓦錄	保坂 三郎	史學	一九ノ四
塀重門の形式について(資料)	同	同	三ノ五	石造美術の作者に就て上、下	淺田 芳朗	同	一三二・一三三	遼中京城址の大塔	竹島 卓一	國華	六〇六
樓閣建築に關する一考察	太田博太郎	同	三ノ四	石の藝術と長崎	林 源吉	茶わん	一二八	金代の一經幢	村田 治郎	國寶	四ノ三
鹿苑寺の金閣と庭園	森 久	美術研究	三ノ一	松石遺物の造作年代上、下	田中 重久	史迹と美術	一二三・一二四	宋代に於ける石工法と柱礎の制度	竹島 卓一	建築史	三ノ二
名古屋城本丸殿舎建築私考	城戸 久	美術研究	一一六	本朝石造橋梁譚	田邊 泰	國寶	四ノ六	宋代の基壇に關する石材	同	同	三ノ三
一古圖に據る江戸城天守私見上、下	藤岡 通夫	畫說	四九	石燈籠新講一—三私の考へ	川勝政太郎	史迹と美術	一二九・一二二	宋代の石造勾欄	村田 次郎	考古學雜誌	三ノ四
茶室の發達とその基本的要件上、下	西堀 一三	畫說	四九	TÔRÔに寄する	杉山 信三	同	一二五	河北省順德の石經幢	島田 正郎	同	三一ノ八
茶室建築の性格	田邊 泰	新建築	一七ノ二	鴻池別邸の嘉禎三年銘石燈籠	佐々木利三	同	一三二	河北省順德の石經幢	村田 次郎	同	三一ノ八
金地院茶室の建築年代及作者(資料)	森 建	建築史	三ノ三	庭燈籠	龍居松之助	國寶	四ノ一	吉林の宗教建築一、二	大塚 正雄	建築世界	三五ノ四
龍光院密庵の席に就いて	澤島英太郎	畫說	五三	高槻天満宮の石燈籠	大脇 正一	史迹と美術	一二九	喇嘛廟とその文獻	長尾 雅人	東方學報(京都)	一一ノ二
西行庵	萩 すみと	清閑	八	清崗寺の石燈籠	川邊 賢武	同	一二九	喇嘛廟と精舎建築	飯田須賀斯	東方學報(東京)	一一ノ一
作庭記に就て	龍居松之助	國寶	四ノ一	備後寺町廢寺址の塔中心礎石(補遺訂正)	猪原 薰一	同	一三〇	古代印度及び錫崙の塔婆	佐原 六郎	史學	二〇ノ一
善阿彌の作庭	森 建	建築史	三ノ三	續紙屋川礎石に就て(野寺の再檢討)	川井銀之助	同	一二二・一二五	工 藝			
小堀遠州の造庭	同	同	四ノ四	馬町十三重石塔と納入遺物	川勝政太郎	同	一二六				
銀沙灘と仙草壇(資料)	同	同	三ノ一	大庭來迎寺十三重石塔(資料)	同	同	一二八	正倉院御物展觀と奈良朝工藝	吉野 富雄	漆と工藝	四五九
高陽院の造庭工事に就いて(資料)	同	同	三ノ四	筑後御幸村の寶篋印塔	鹿毛倭文枝	同	一二二	正倉院御物活用と模造の問題	同	茶わん	一二一
室町時代に於ける西芳寺庭園の修理	同	同	三ノ四	播磨國阿彌陀の古石塔上、下特に五輪塔の一形式に就て	淺田 芳朗	史迹と美術	一二四・一二五	展覧の起源とその發展上、下	石田 茂作	考古學雜誌	三一ノ七
龍安寺と大仙院の庭園	同	造形藝術	二一	神戸市にある應安の寶篋印塔(資料)	坪井 良平	同	一二七	元の搏換に就いて	吉野 富雄	畫說	五五
大仙院庭園の作者(資料)	同	建築史	三ノ二	下總の寶篋印塔	篠崎 四郎	同	一三一	物と文化	脚 宗悅	工藝	一〇五
遍照心院の庭園(資料)	同	同	三ノ五	朝鮮・支那	印度	同	一二三	用と美術	同	同	一〇五
金地院の庭園	同	同	三ノ二	支那に於ける建築藝術	伊東 忠太	茶わん	一二三	民藝學と民俗學	同	同	一〇四
桂御別業に關する一考察	同	同	三ノ五	支那建築の拱に關する一考察附雲岡第九窟門形は問か	飯田須賀斯	東方學報(東京)	一一ノ三	郷土藝術を語る	井上吉次郎	茶わん	一二八
庭園論争(資料)	同	同	三ノ三	王莽錢と漢の尺度	竹島 卓一	建築史	三ノ五	陶磁器發相の分岐點	鹽田 力藏	茶わん	一二一
光壽庵址發見の奈良時代戲畫瓦(資料)	史迹と美術	一二二	查記略	河北省西部古建築調查記略	劉 郭楨	建築世界	三五ノ六・七・九	點 釉藥の發達概觀	同	同	一二七
					藤浦邑雄譯			金・マンガン・アンチモニー 釉の話九	内藤 貧狂	趣味の味	七九
								陶磁の金彩	久志 卓眞	茶わん	一二四

日本美術史上の日本 陶器 七—一〇	久志 卓眞	焼も 味の	七二—七	淺草寺に納めた乾山 の茶碗	高野 純三	焼も 味の	七四	井戸異聞 三島源流考	山田萬吉郎	同	一二四
日本陶磁と其源流 二、三	茶器名物集(校刊) 一、二	焼も 味の	一一二—一	乾山自筆の資料に就 いて	芳賀 喜清	同	七八	禮賓三島の窯跡三島 刷毛目の變遷	同	同	一二六
香合の話	笠井周一郎	焼も 味の	一二七	京都御役所向大概覺 書の樂燒京燒乾山資 料	同	同	七七	朝鮮三島の語る	廢 白 陶	同	一二三
やきもの香合小考 其三	鈴木智足堂	焼も 味の	七六	備前燒とその胡麻 始めて發見された紀 念銘舜民燒	宗田 克巳	同	七八	李朝陶磁の輪廓	鈴 木 生	同	七九
形物香合 三 交趾 青磁、染附、好み物	京都市美術 青年會誌	焼も 味の	二一	豊前上野燒の研究 一〇—一七	井上 圓藏	焼も 味の	二一〇	李朝染附に就いて 李朝染付の美しさ	梅澤彦太郎	同	一二二
享保時代の茶陶器の 値段	芳賀 喜清	焼も 味の	七三	梵舜記に見る唐津上 野燒考證資料	木村 捨三	同	七五	朝鮮釜山對州窯の一 資料 上、下	水島萬久男	同	一二八
郷土の陶藝	太田 一彩	茶わん	一二八	古伊萬里の染附	久志 卓眞	茶わん	一二六	續説々中國陶器 字藏と陶磁片工藝	尙 志 怡	同	一二四
秘藏の茶わん	三井 高陽	茶わん	一三〇	唐津燒の起源に就て 上、中、下	吉村茂三郎	焼も 味の	七二—七	林東所見—遼三彩の 確認と一古窯地の發 見	太田 陸郎	同	一二七
南滋賀出土三彩陶の 紹介	滿岡 忠成	陶 磁	一三〇—一	波多三河守と岸嶽 薩摩燒異聞 一—四	桂 又三郎	同	七三	鷄冠壺	齊藤菊太郎	陶 磁	一二〇四
出湯經澤出土の陶器	同	茶わん	一二一	肥後の一勝地燒	前田幾千代	茶わん	一二七—	滿洲の古陶	鳥田 貞彦	茶わん	一二一
古瀬戸の名稱に就て	料治 朝鳴	同	一二一	柳原燒	梅野 満雄	同	一二二	遼開泰七年在銘石棺 に伴出の青釉瓶に就 て	小村 俊夫	陶 磁	一二〇四
越中瀬戸古窯址發掘 について 二、三	鷹巢 豊治	同	一二二—	攝、河、泉、古陶磁 窯聚賢(攝津) 一—二	保田 憲三	焼も 味の	七八—七	越州窯太平戊寅銘劃 文盒子	三宅 宗悦	同	一二〇四
瀬戸水滴考	料治 朝鳴	同	一二六	堀・谷燒の小研究	同	同	八二	定窯々址に就て	小山富士夫	美術研究	一一七
繪瀬戸の話	同	同	一二五	水戸景山公の陶道と 其作品 三	陶中庵主人	同	七二	定窯々址の發見に就 て	同	同	一三〇二
織部茶入と織部正	松庵 主人	焼も 味の	七四	會津本郷の土燒もの 其津古本郷燒の横顔	鹽田 力藏	同	七二	金花の定柿	ジョーン・フ アイガスン	同	一三〇二
繪志野と繪瀬戸	料治 朝鳴	茶わん	一二三	新編會津風土記に見 る本郷燒	豐田 實也	同	七四	黒花牡丹文辨 解説 侯爵細川護立氏藏	小山富士夫	美術研究	一〇九
瓶子窯の意義—志野 發見の一見解として	同	同	一二〇	琉球南壁と泡盛	山里 永吉	焼も 味の	七四	影青模記	同	同	一二〇三
伊賀燒を語る	菊山當年男	同	一二八	琉球陶藝の南方系	同	同	一二二	明初の景德鎮窯器 一—六	同	同	一二〇三
色繪古九谷	佐藤 功一	同	一二〇	朝鮮陶磁の研究に就 いて	山田萬吉郎	同	一二〇	赤繪の話 一—二	鷹巢 豊治	同	一二四—
古九谷の繪に就て	長谷川 昇	同	一二四	朝鮮陶磁の見方、考 へ方	奥平 武彦	同	一二一	支那の赤繪	小山富士男	造形藝術	一二六
九谷宮本屋窯に就て	井上 銈次	焼も 味の	七二	會寧窯と明川窯	水島萬久男	同	一二〇	天啓赤繪の羅漢皿	梅澤彦太郎	茶わん	一二七
下九谷坂燒私考 一 —三	同	同	七四—七 六—七七								
丹波の徳利	杉本 捷雄	茶わん	一二三								
乾山陶法書(校刊)	樂元軒生 畫 説	六〇									

滿洲熱河省大名城發見の近代石棺等についで	島田 貞彦	紀元二千六百年記念京大史學論文集	高野山に於ける聖德太子傳の古鈔本に就いて	水原 堯榮	同	揚州大明寺と棲雲寺の關係	安藤 更生	史 苑	一四ノ一
滿洲國奉天省燕京城九連洞の遺跡に就いて	三上 宏	考古誌 三一ノ一	法隆寺聖靈會の沿革に就いて	野間 清六	畫 說 五四	葡萄の支那傳來時期について	板橋 倫行	史 觀	二五
支那郡の屬縣高顯の遺址	池内 宏	同 三一ノ二	大佛師記	今 春聰	茶わん 一二七	高橋景保と萬國全圖に就いて上・下	鮎澤信太郎	歴史地理	四九六・四九七
石家莊近在の古蹟(上)	小野 勝年	史 林 二六ノ二	觀勒と鑑真	藤浪 剛一	國 寶 四ノ六	床代の地圖とその特色	青山 定雄	東方學報 (東京)	一一ノ二
前漢魯國靈光殿の遺蹟	關野 雄	考古誌 三一ノ九	主上人	川勝 政太郎	史迹と美術 一三一	南床淳祐の石刻墜埋圖について	同	同	一一ノ一
武州川の火井をたづねて	日比野丈夫	東方學報 (京都) 一一ノ一	青蓮院について	東伏見邦英	史 林 二六ノ一				
河北省邯鄲に於ける遺蹟調査	駒井 知愛	考古誌 三一ノ六	常行堂と阿彌陀堂	藤田 寛雅	大正大學 報 三二				
河南彰德古物保存會收藏遺品の一・二	駒井 知愛	同 三一ノ一	上代末期熊野信仰の問題	和歌森太郎	史學雜誌 五二ノ二				
浙江省紹興出土の遺物と其の遺跡	梅原 末治	紀元二千六百年記念京大史學論文集	信濃國鹽田庄とその文化鹽田氏及當樂寺安樂寺その他	多賀 宗牟	歴史地理 四九七	法隆寺壁畫模寫に用ひられた螢光放電燈	關 重廣	建築雜誌	六七二
南京中華門外兩花台の古朝古墓	岡田芳三郎	史 林 二六ノ三	東野州	今 春聰	茶わん 一二九	江戸初期に關東へ活字版を傳へし人	藤堂 祐範	清 閑	八
考古學の豐富な新分野としての福建	澄田 正一	茶わん 一三〇	五山研究史概觀	玉村 竹二	歴史地理 五〇〇	弦袋色草なりといふ説に就いて	關 保之助	考古誌 三ノ三	一七ノ六
支那上代の火器及祭器一・二	M・F・フアーレイ	考古誌 三一ノ一	禮僧稱號考 一・二	鈴木 泰山	史學雜誌 七二ノ六	馬形考	渡邊 素舟	塔 影	一三〇
說文より觀たる夔の形態	後藤朝太郎	同 三一ノ一	中世に於ける臨濟禪の地方發展 上・下	竹内 秀雄	國史學 四三	舞樂について	野間 清六	茶わん	一一ノ一
王者の記録としての龜甲文と銅器銘	原田 淑人	同 〇	大座神人の活動	魚澄惣五郎	史迹と美術 一二八	筆の起原	瀧 遼一	東方學報 (東京)	九
戈戟考	平岡 武夫	東方學報 (京都) 一二ノ一	顯如上人とその時代	池田谷久吉	史蹟名勝 一九〇	槐記雜考 二	水谷川紫山	清 閑	五五・五九
日支交渉の文化とその保存 上・下	駒井 知愛	東方學報 (東京) 一一ノ二	史蹟百濟寺陸上・下	赤松 俊秀	同 一八六	茶會の花と花入	桑田 忠親	畫 說	二二・二五
桶作、盾縫に就いて	田山 信郎	史蹟名勝 一九一・天然記念物 一九二	山城園堤寺に就いて	舟越 康壽	文部時報 七二四・七二九・七三〇・七三三・七三九・七四三・七四五	北野大茶會と山里の茶亭	桑田 忠親	畫 說	五二
扶桑略記の所謂繼體天皇十六年佛教傳來の記事に就いて	關口 亮仁	歴史地理 四九二	東南アジア文化圖史 一・一〇	茂樹 (京都)	東方學報 一一ノ一	奈良と茶道 一・三	井川 定慶	星 岡	一二六・一二八・一三〇
扶桑略記の所謂繼體天皇十六年佛教傳來の記事に就いて	同	同	殷末周初の東方經略に就いて 上・下	小川 茂樹	同	物語の誕生 中・下	神藤 豐文	文化 化	八ノ二・三
太子資料の二三に就いて	萩野三七彦	聖德太子奉讃論文集	大食と唐との交渉に關する一史料	田坂 興道	回教園 五ノ八	大倉集古館に就いて	今村 龍一	畫 說	五三
			床代に於ける土作制度	竹島 卓一	建築史 三ノ一	家寶の保存に就いて	三井 高陽	茶わん	一二五
						滿洲雜錄 六	石原 純思	想	二二八
						春竹紙語	宮田 三郎	清 閑	八

古美術關係單行圖書

總 說

東洋美術 自第一號至 金原 省吾 河出書房
美術研究索引 美術研究所 美術研究所

根津美術館第一回展觀目録 根津美術館 根津美術館
東京帝室博物館講演集一三 山際 靖 朝倉書店
美學—日本美學への理念— 金原 省吾 教育美術振興
日本の表現 會

藝術日本の探求 鼓 常良 創元社
紀元二千六百年記念日本文 朝日新聞東 便利堂
化史展覽會圖録 京本社 誠文堂新光社

日本文化史大系第二、大和 西村 眞次 厚生閣
日本文化論考 國際文化振 興會 日本評論社

日本文化の特質 東京考古學 葦芽書房
日本文化の黎明 會 河野 省三 地人書館

神道文化史(大觀日本文化 吉田 覺順 法相宗勸學院
史) 日本上代文化の研究(聖德 同窓會
太子奉讀論文集) 堀 一郎 大東出版社

上代日本佛教文化史 石井 櫻樹 大日本法令出
日本文化と墳墓 版株式會社
日本新文化史 鎌倉時代 龍 肅 内外書籍株式
會社

建築と文化 藤島亥治郎 新光社
日本切支丹文化史 新村 出 地人書館
中宮寺の諸問題 鷗 故郷舍 鷗 故郷舍

聖武天皇と正倉院 野口米次郎 教文館
中世の社寺と藝術 森末 義彰 誠傍書房

地藏尊の研究 日本美術資料第四
日本美術年鑑 昭和十五年
版

日本美術大系 彫刻篇 佛教の傳説と美術
紀元二千六百年奉祝神道美
術展覽會圖録

大和の史蹟と古美術 大和路
大和古寺
京都史蹟古美術提要

京都古銘聚記 法隆寺を拜觀する人々のた
めに(法隆寺美術讀本)
正倉院考古記

正倉院御物圖録 神宮御物圖録
神宮御物陳列品圖録
中尊寺大鏡

アイヌ藝術 一、二 朝鮮美術史
朝鮮の建築と藝術
滿洲の美術

支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)

支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)

支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)
支那美術史(支那地理歴史 大系)

眞鍋 廣濟 磯部 甲陽堂
美術研究所 美術研究所
美術研究所 美術研究所

小林 剛 誠文堂新光社
高田 修 三省堂
齋藤 忠郎 大倉集古館

奈良縣觀光 桑名文星堂
新井 和臣 近畿觀光會
井上 政次 日本評論社

京都市觀光 京都市觀光課
川勝政太郎 スズカケ出版
佐々木利三 部

鶴 故郷舍 鶴 故郷舍
傳 藝子 文求堂
帝室博物館 帝室博物館

神宮御物圖 便利堂
石田 茂作 大塚巧藝社
金田一京助 第一青年社

久志 卓眞 文明商店
關野 貞 岩波書店
中村 亮平 寶雲舍

白 揚 社
白 揚 社
白 揚 社

白 揚 社
白 揚 社
白 揚 社

於東京美術會館

一月 觀空庵

二月 兩大家

三月 靜林茅舍

四月 某家

五月 市島春城并磯川山房・某家・舊大名某家

六月 尾崎樂山堂・此君堂

十一月 某家・某家

於名古屋美術會館

一月 某家・某家

二月 彌高亭並某家・村瀬庸庵・某家

三月 某家・某家

五月 伊藤香年・吉田寛悟翁

十月 方寸庵

十一月 種石庵、飄々庵、某家

小尾八峰庵、並ニ正住庵

於京都美術會館

二月 中京區稻垣家

七月 辻寛治

於大阪美術會館

一月 木屑軒

三月 某家・某家・某家・當市某家

四月 某家

五月 某家・某家・某家

六月 濤聲館第一回・某家 寶槌庵並ニ某家・某家

七月 濤聲館第二回

十一月 某家

繪 畫

東洋畫題綜覽 三 金井 紫雲 藝 艸 堂
日本畫の精神 坂崎 坦 東京 堂
日本古畫大系 一、二 美術 社 美術 社
原色古今名畫譜 藤井 忠雄 明治 書房
鑑賞日本名畫集 結城 素明 審美 書院

奈良帝室博物館繪畫圖錄

奈良帝室博物館

第五回名展展覽會圖錄

大阪市立美術館

近世日本繪畫史論

谷 信一

新撰名品綜覽 近世篇一

臨本十九郎

本朝畫人傳 三

村松 梢風

法隆寺の壁畫

夢殿論誌編

京都佛畫圖說

京都觀光課

京都の佛畫

森末 重久

國史肖像大成二一五

森末 義彰

能惠法師繪詞

美術研究所

石山寺緣起

武田 清吾

一遍上人繪傳及詞書

野中 一松

續日本繪卷物集成 一、因幡堂緣起、大江山繪詞、北野本地

京都の障屏畫

恩賜京都博物館研究報告第一、狩野山樂と狩野山雪に就いて

土居 次義

宗達伊勢物語圖帖

藤本 詔三

乾山妙蹟譜

藤原 楚水

池大雅研究發表第五

人見 少華

玉堂琴士畫譜第三・四・五輯

秋葉 啓

田能村竹田筆茶人三十六歌仙

岩佐 新

米山人及半江展覽會圖錄

大阪市立美術館

巖山全集

巖山叢書出版

渡邊巖山 創元選書

石川 淳

渡邊巖山 創元選書

森 銑三

渡邊巖山 創元選書

赤沼 智善

渡邊巖山先生錦心圖譜下

鈴木榮之亮

薩摩燒の研究

田澤 金吾

浮世繪類考 岩波文庫

仲田勝之助

唐物茶碗

小山富士夫

浮世繪版畫名作選

長瀬 武郎

朝鮮陶磁圖說

佐々木三昧

浮世繪師歌川列傳

飯島 虛心

說瓷新説 支那陶磁

小林太市郎

歌麿全集

吉田 映二

時代蒔繪漆集

許之衡

近世日本洋畫史

土方 定一

堆朱楊成

許之衡

日本の銅版畫と石版畫

小野 忠重

金工史談

香取 秀真

繪馬の國

荒井とみ三

和鏡粹聚

廣瀬 都美

西域畫集成 八十三

堂谷 憲勇

日本裝劍金工史

桑原羊次郎

弘明寺十一面觀世音菩薩像

堀口 蘇山

紡織界二千六百年史

中島勝二郎

龍門石窟の研究

金剛 巖

誰が袖百種 一三

野村正治郎

大同の石佛 アルス文化叢書一四

水野 清一

日本建築 一ノ二・三

田邊 泰

世界原始民藝圖集九・一〇

宮武 辰夫

國寶建造物目錄

文部省宗教局保存課

重要美術品圖錄 工藝篇

關 宇一郎

藤原宮跡傳説地高殿の調査

足立 康

日本工藝史

瀧岡 忠成

大津京址、下 滋賀縣史蹟

名勝天然記念物調査會

日本民藝圖錄

柳 宗悅

國寶建造物法隆寺大講堂修理工事報告

法隆寺國寶保存事業部

民藝とは何か

柳 宗悅

國寶寺再建非再建論爭史

足立 康

琉球の文化

柳 宗悅

國寶唐招提寺禮堂修理工事報告

國寶唐招提寺禮堂修理事務所

大正名器鑑

式場隆三郎

國寶普門院本堂維持修理報告

國寶普門院維持修理事務所

形物香合考

高橋 義雄

國寶大傳法院多寶塔修理工事報告書

國寶大傳法院多寶塔修理委員

三・四

加藤義一郎

國寶大傳法院多寶塔修理工事報告書

國寶大傳法院多寶塔修理委員

彫刻

工藝

建築及庭園

國寶白山社奥社本殿修理工事報告書

國寶白山社奥社本殿修理工事事務所

歷史及考古學

内外土俗品圖集

東京人類學會 寶雲舍

國寶建造物中島神社本殿維持修理報告書

國寶中島神社本殿修理事務所

佛教考古學論叢三
紀元二千六百年紀念史學論文集

坪井 良平 桑名文星堂
京都帝國大學文學部

朝鮮考古圖錄、一、白神壽吉氏蒐集考古品圖錄

朝鮮考古學會 朝鮮考古學會

國寶建造物定光寺本堂維持修理報告書

國寶建造物定光寺本堂修理事務所

史蹟名勝天然記念物一覽

文部省宗教保存課
文部省宗教局

古銅器形態の考古學的研究

同 東方文化研究所

國寶妙成寺經堂維持修理工事報告書

國寶妙成寺經堂修理事務所

奈良帝室博物館歷史圖錄

奈良帝室博物館

其他

日本出版文化史

茶室建築

北尾 泰道 鈴木書店

日本風俗史

江馬 務 地人書館

日本出版文化史

日本出版文化史刊行會

慈照寺庭園の變遷を論ず

小島源治郎 大塚巧藝社

有緣故實圖譜

關根 正直 林平書店

平安朝摺經の研究

川瀬 一馬 坂本 猷

吉備古瓦圖譜 二

吉永 義信 吉永義信家刊行會

福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書

福岡縣 人文書院

金刀比羅宮圖書追加目錄

金刀比羅宮事務所文書課

支那建築裝飾

伊東 忠太 東方文化學院

和歌山縣史蹟名勝天然記念物調査報告書

和歌山縣 和歌山縣

尾張石文

坂 重吉 飯島書店

日本書道新議

吉澤 義則 白水社

五山文學史稿

井川 定慶 河原書店

掛物と日本生活

西堀 一三 河原書店

日本書道アルス文化叢書

桀本 白雲 アルス

大德寺派本末寺院歷代去譜

北村 深吉 三笠書房

茶人系譜

鈴木 惠一 學藝書院

草假名帳アルス文化叢書

三條西公正 同

東山時代に於ける一縉紳の生活

川那邊觀風 田中平安堂

茶と美

柳 宗悅 牧野書店

古今和歌集總覽

久曾神 昇 七條書房

鹿島香取の研究

宮井 義雄 山岡書店

かうやがみ

中川 善教 便利堂

古今和歌集抄上(紀貫之筆)

會 七條書房

虛心文集第五 古文書學概論

黑板 勝美 吉川弘文館

京都產業部觀

光課

和漢朗詠集上、下及釋文(藤原公任筆)

同

日本文化と京都

中村 直勝 京都寫真文化協會

京都寫真文化協會

弘文堂

元曆万葉抄

羽田 泰堃 同

紀伊國名所圖繪

岡本 東洋 協會

朝鮮總督府中樞院

朝鮮總督府中樞院

三寶繪詞 下

江馬 進 芸 堂

高麗以前の風俗關係資料排

末永 雅雄 弘文堂

石田幹之助 創元社

白鳥 庫吉 岩波書店

松本 信廣 三田史學會

妙法蓮華經法師品

鴨下 政愛 泰東書道院出版部

長安の春

江南踏査

考古學入門(創元選書)

濱田 青陵 創元社

影本古經

比田井 洵 書學院

西域史研究 上

松本 信廣 三田史學會

桑名文星堂

濱田 青陵 創元社

濱田 青陵 創元社

插

圖

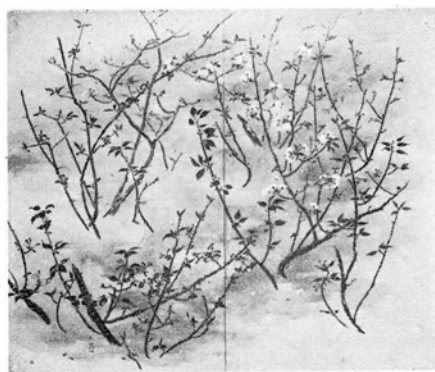
一 若 水 (青衿會展) 伊 東 深 水



四 忠貞双絶(右) (兒玉畫塾展) 兒 玉 希 望



五 朧 (春の青龍社展) 加 納 三 樂



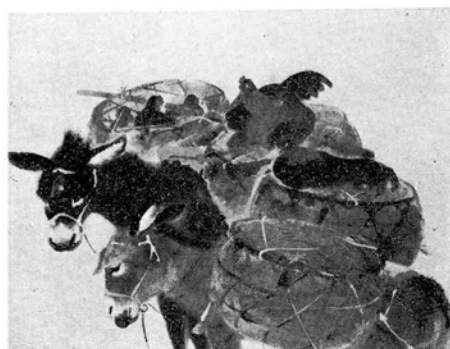
二 櫻 稚 (展會御白) 穂 光 野 佐



六 女 川 白 (展社龍青の春) 豐 崎 山



三 泉 林 芳 西 (一の其) (展會御白) 刀 菜 島 中



七 日 市 (展社龍青の春) 京 左 宮 松

八 洋蘭圖(春の青龍社展) 濱出青松



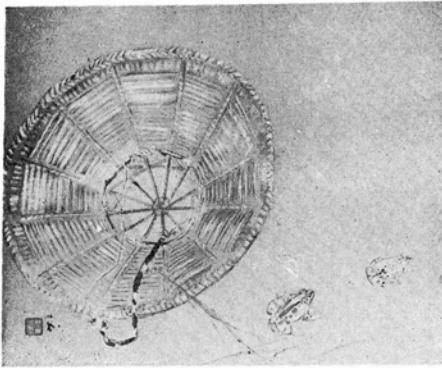
九 冬日(春の青龍社展) 市野 亨



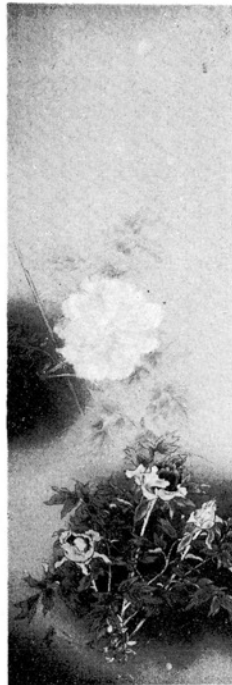
一〇 新月(春虹會展) 川村 曼舟



一一 田植時(春虹會展) 竹内 栖鳳



一二 薰 園(春虹會展)



石崎 光瑤

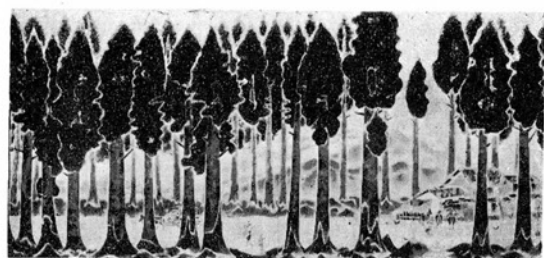
一三 花に詠ず(春虹會展)



上村 松園



俊泰原鬼(展院術美興新) 族家く焼炭 四一



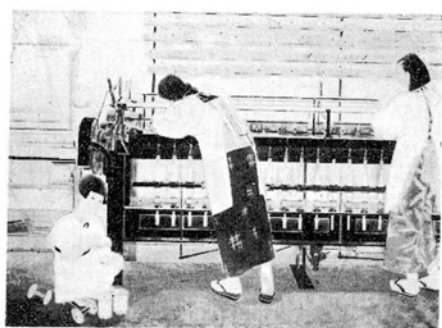
田中案山子 (新美術院展) (右) 日月光街道 六一



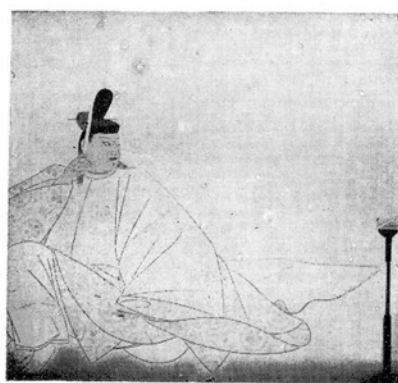
右 (新美術院展) 苺木吹風 五一



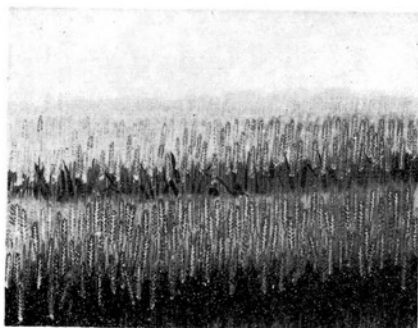
小林集居 (新美術院展) (分) 夜まな巻 七一



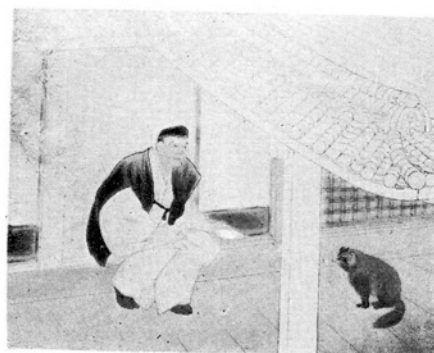
佐藤正衛 (日畫院展) 糸燃り 〇二



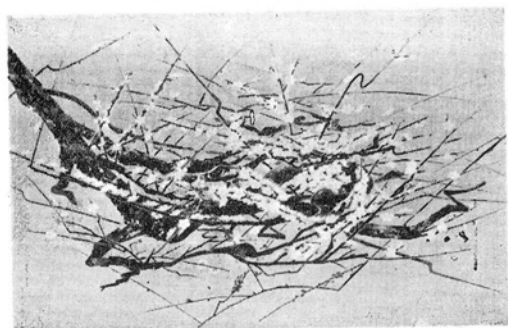
田岩正己 (日畫院展) 忠盛 八一



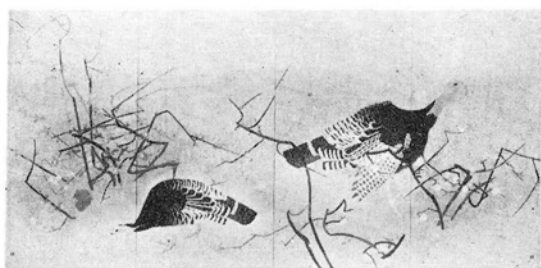
江春月望 (日畫院展) 麥花 一二



宮崎清正 (日畫院展) 見性寺の燕村 九一



羊 草 山 新 (展會畫讀) 梅 三二



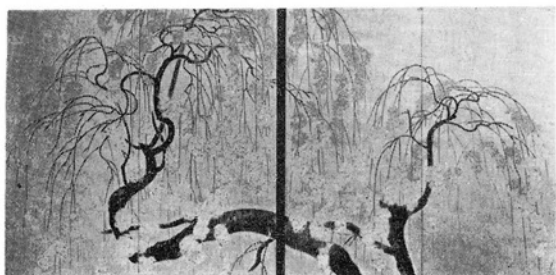
甫 白 森 (展會畫讀) 彩 春 二二



畝 十 木 荒 (展會畫讀) 題二夏 五二



畝 笛 澤 西 (展會畫讀) (二其) 譜花國南 四二



志 隆 割 龜 (展會畫讀) 春 淨 六二



二七 兩面愛染明王 (橋本關雪聖戰記念畫展)
橋 本 關 雪



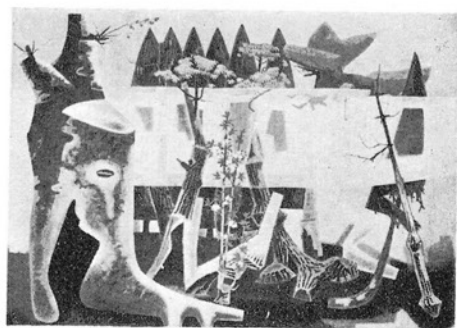
二八 紅 梅 (京都市展)
福 田 平 八 郎

二九 晴日 (京都市展)
小野竹喬



三三 蟻池朝 (南畫展)

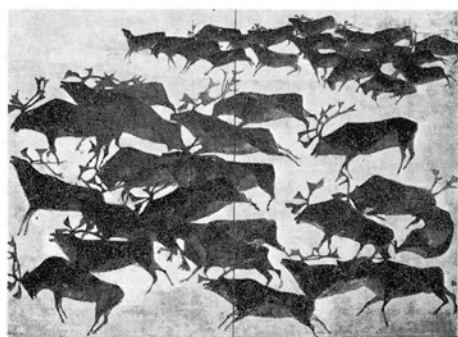
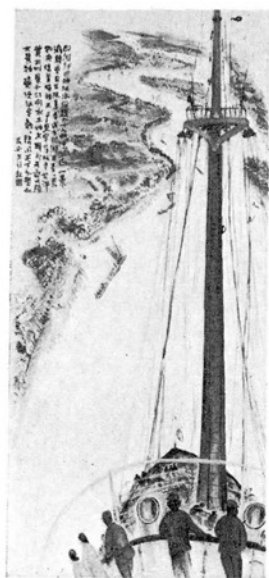
水田竹圃



人亞井酒 (展會協人術美新) 春 〇三

三四 白河沅航 (南畫展)

小川千甕



二堅岡吉 (展會協人術美新) 群 一三

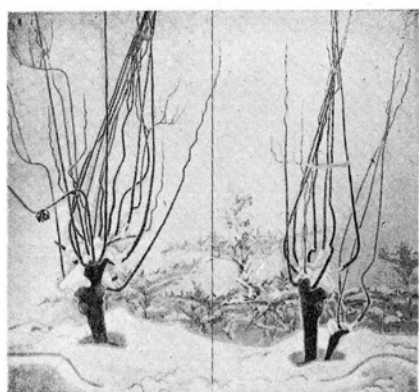
五



乘大木青 (展術美日大) (左) 驢海 五三



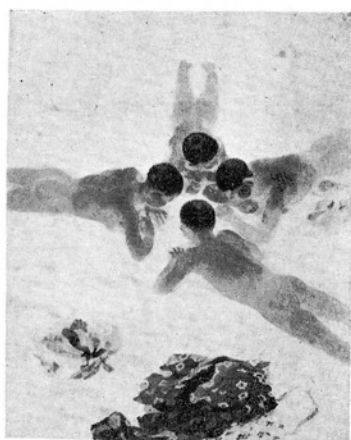
郎四豐田福 (展會協人術美新) 漁冬 二三



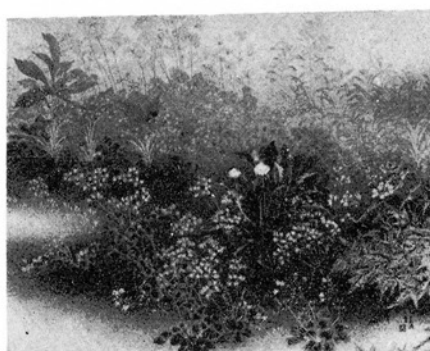
(昌桑) 題二摩多 七三
一 榮 澤 菊 (展院術美日大)



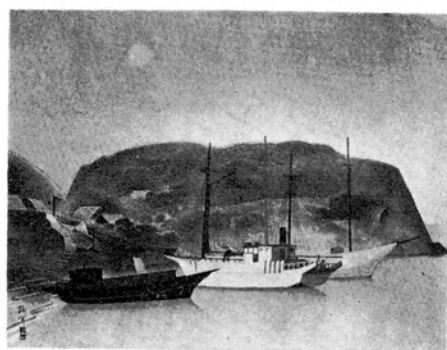
虎小崎川 (展院術美日大) 濱 砂 六三



(展院術美日大) 地 砂 九三
壽 彦 門 寺



明素城結 (展院術美日大) 遍 春 八三



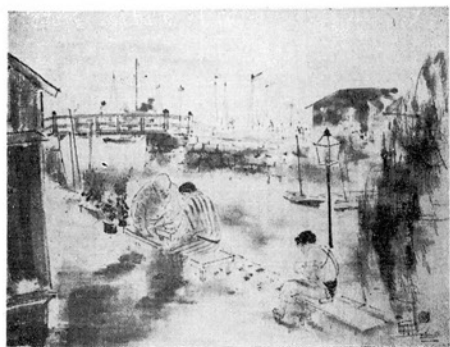
内之景勝二十州八關(原大總上) 明 月 〇四
可路 川谷長 (展會鳥翔)



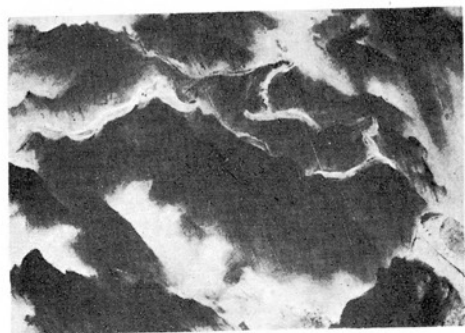
(展術美洋海本日大) 漁 鯉 一四
浪 紫 松 笠



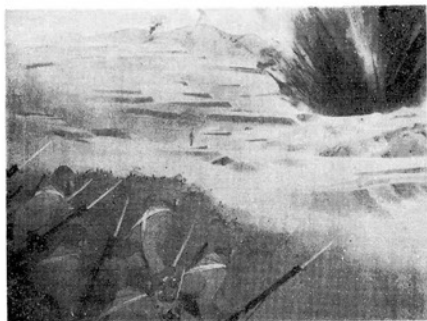
庵 放 杉 小 (展會々珊)(平業) 仙歌六 二四



四四 築地川(其四) 鐵砲洲
(珊々會展) 鎚木清方



四七 八達嶺長城線攻擊圖
(聖戰美術展) 川端龍子



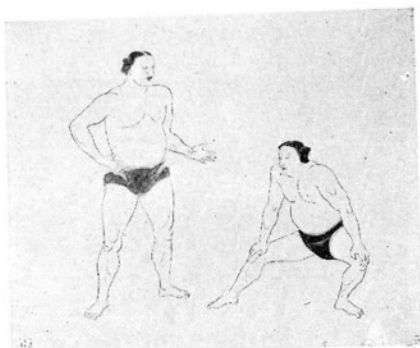
四八 突擊路(忻口鎮攻擊圖)
(聖戰美術展) 吉村忠夫



四九 雨中急追(聖戰美術展)
吉岡堅二



月契池菊(展會々珊)公郭三四



彦叔田安(展會光清)ふます 五四

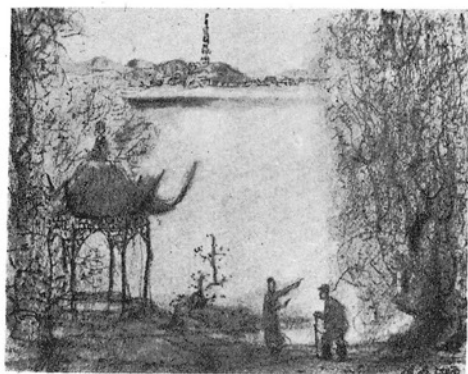


四六 瓶花(清光會展)

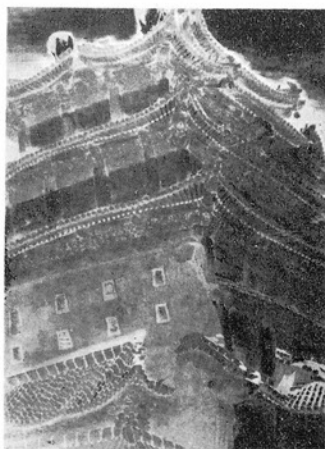
小林古徑



五四 明惠傳（青龍社展） 福岡 青嵐



五〇 戦線スケッチ
（聖戦美術展） 小杉 放庵



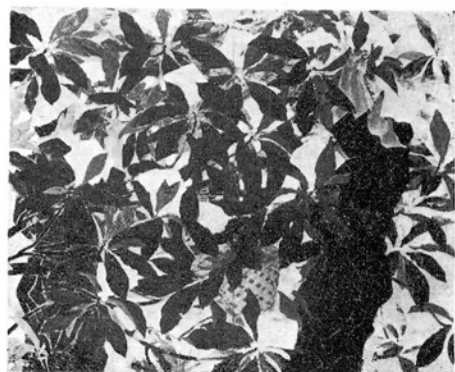
寺佛大 五五
草一口坂（展社龍青）



均 松 小（展會南山） 蓮 睡 一五



子 鼎 昌 小（展社龍青） 風 海 二五



樂 三 納 加（展社龍青） 果 採 六五



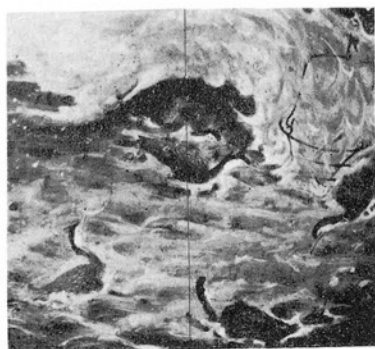
五三 秋（青龍社展） 市野 亨



川 端 龍 子



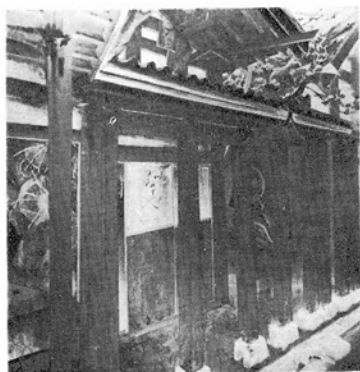
(展 社 龍 青) 水 曲 七 五



六〇 鶴 飼
(青龍社展) 安西啓明



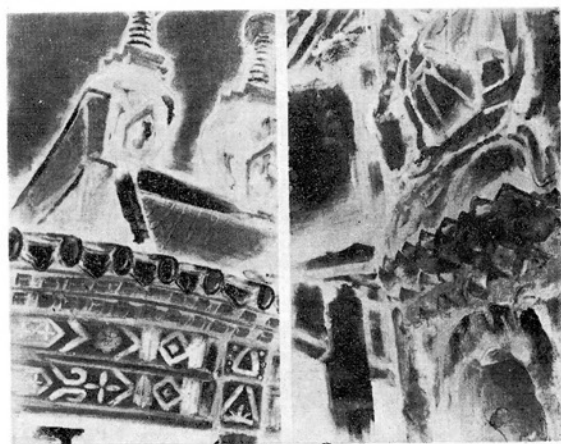
五八 伊豆の國 (青龍社展) 川端龍子



六一 桐の町
(青龍社展) 木村鹿之助



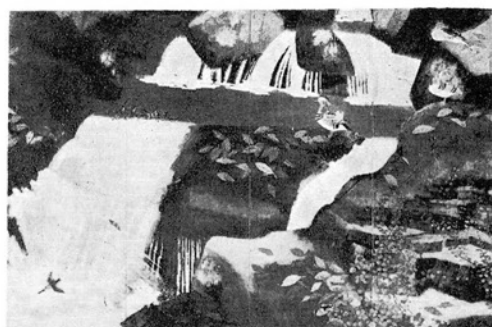
六二 防毒班
(青龍社展) 森 省 三



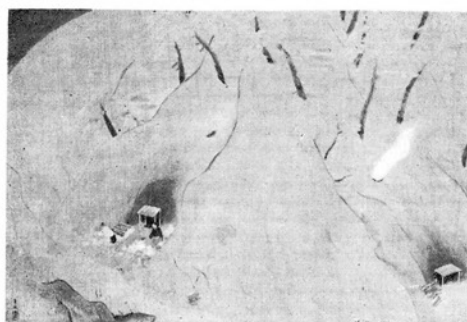
豐 崎 山 (展社龍青) 河 熱 九 五



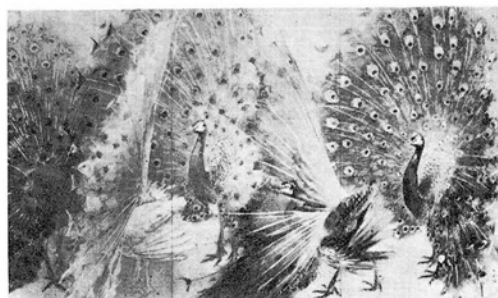
六四 霧 (青龍社展)
利谷双樹



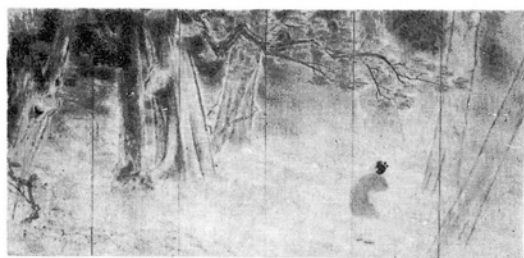
衛兵藤井龜 (展社龍青) 溪 三六



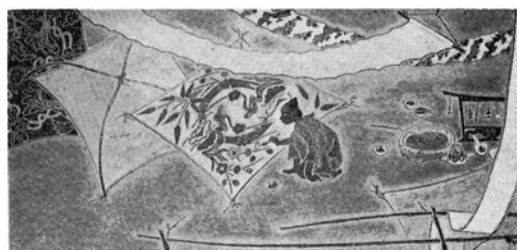
風草野長 (展院) 古懷樂信 六六



善直田時 (展社龍青) 圖冠王 五六



觀等谷筆 (展院) 聲秋 八六



(内の題二球琉) たがんび 七六
風朝川谷長 (展院)



満野眞 (展院) めとを七 〇七

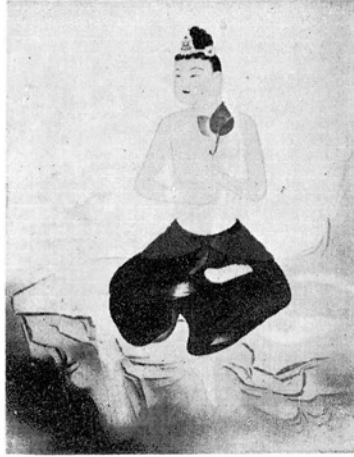


六九 摩利支天 (院展) 荒井寛方



七五 幾松 (院展)

北野恒富



七二 觀世音菩薩 (院展) 小倉遊龜



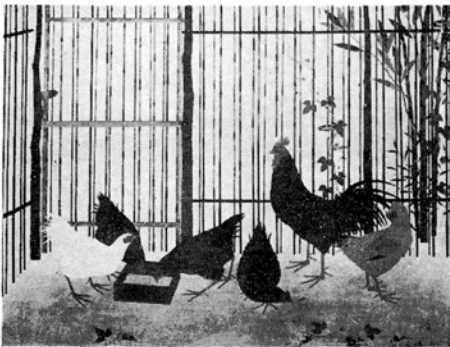
雨聽田太 (展院) 畫壁 一七



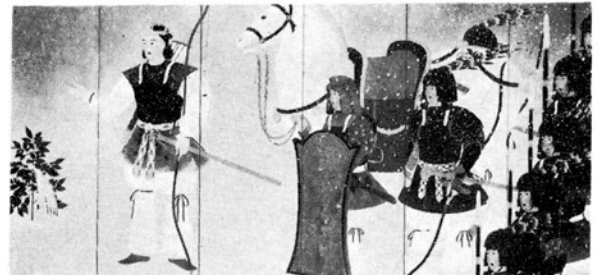
良三井酒 (展院) 風六七



觀大山橫 (展院) (十其・九其) 洲八大く耀 三七



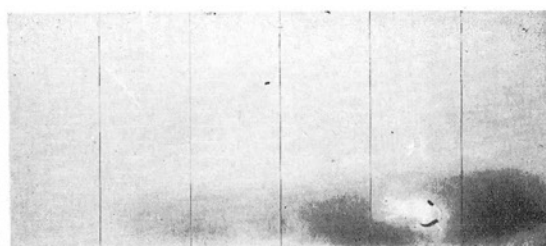
七七 餌 (院展) 松阪冬佐



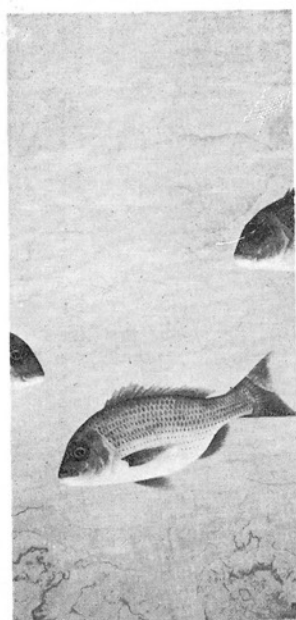
明黎道眞 (展院) 一其 (式の陣出代上) 雪淨 四七



風 南 山 堅

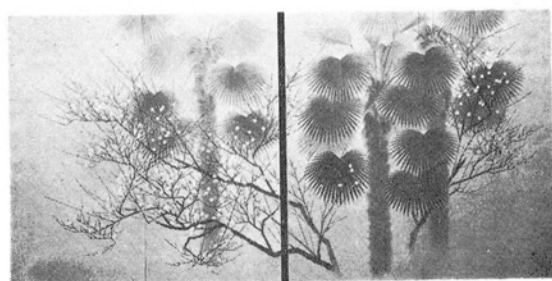


(展 院) 涼 新 八七



八二平
日 (院展)

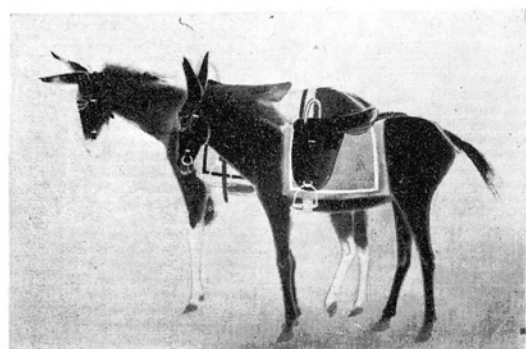
富
取
風
堂



觀 勝 智 大 (展院) 香 暗 九七



月 大 山 小 (展院) 木 雜 〇八



牛 土 村 奥 (展院) 日 遲 三八



谿 一 島 小 (展院)(集旅曾木)秋錦邨山 一八



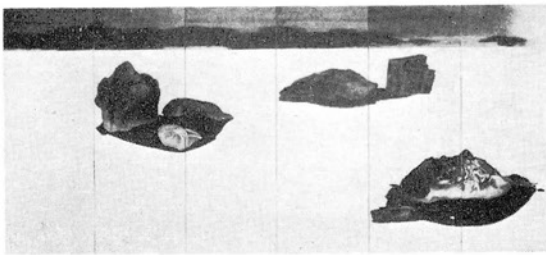
彦 叔 田 安 (展院) 陣 の 川 瀬 黄 七 八



八 四 吉 野 (院展) 中 村 貞 以



叔 千 倉 郷 (展院) 春 の 頂 山 八 八



白 柯 林 小 (展院) (一其) 庭 の 寺 安 龍 九 八



月 映 澤 北 (展院) 日 靜 五 八



月 契 池 菊 (展回巡印佛) 菊 ○ 九



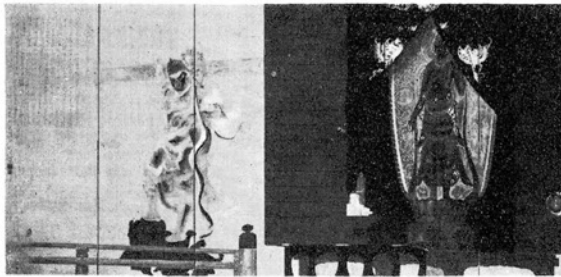
利 勝 井 新 (展院) (二其) 行 谷 六 八



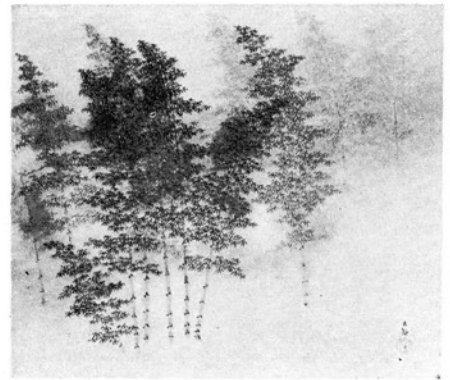
九三 晩 歸 (佛印巡回展)
川合 玉堂



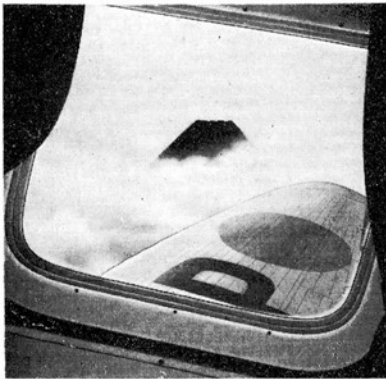
九一 觀世音菩薩
(佛印巡回展) 安田 靱彦



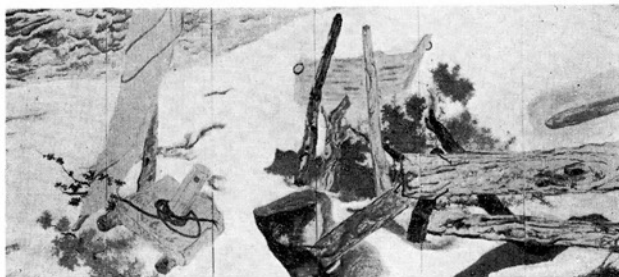
行 晃 野 狩 (展朗明) 音 觀 聖 四九



觀 大 山 横 (展回巡印佛) 月 の 林 竹 二九



九五 窓 望 (航空美術展)
伊 東 深 水

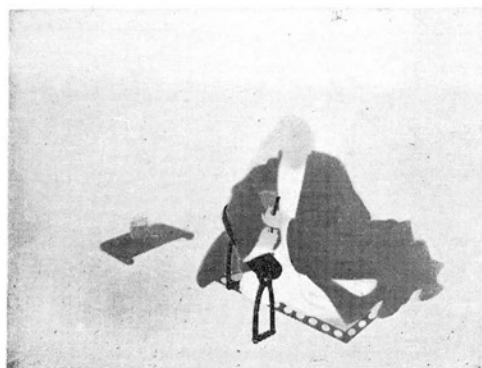


斗 久 方 村 玉 (展協新術美) (左) 垣 る す 面 に 洋 大 七九



九六 飛行雲 (航空美術展) 大石 哲路

九八 塙保己一(文展) 島田墨仙



九九 林泉(文展) 宇田萩邨



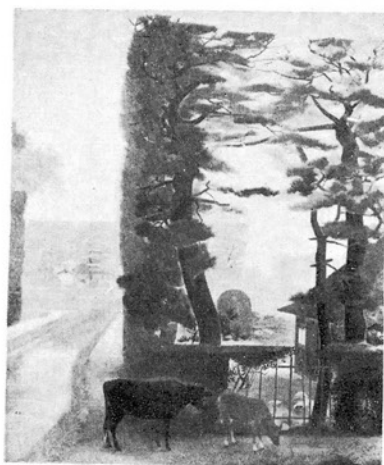
一〇一 愛撫狗兒(文展) 福田 恵一

市見島廣 (展文) 女裝赤 ○○一

一〇二 現代婦女圖(文展) 伊東 深水



一〇三 出雲の村(文展) 河原悦人

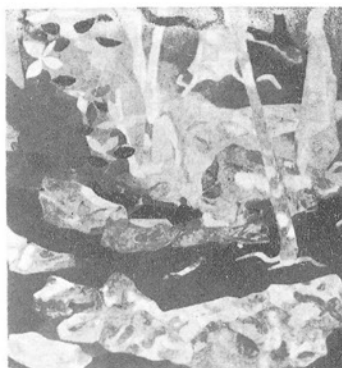


一〇四 山脈(文展) 福田豊四郎





一一〇 實る秋(文展) 堀井香坡



二堅岡吉 (展文)庭苔 八〇一



象印本堂 (展文)機戦 五〇一



一一一 深潭雨歇(文展) 橘田永芳



一〇九 つはもの達(文展) 森戸果香



一〇六 寸涼(文展) 寺島紫明



一二二 男兒生る(文展) 向井久万



山硯田水 (展文)照斜角轡 七〇一



一一八 早秋 (文展) 上村松篁



一一六 蕉菜島の朝 (文展) 福田元子



三一一 三王子南漢 阿木二不 (展文)



一一九 撃テ (文展) 江崎孝坪



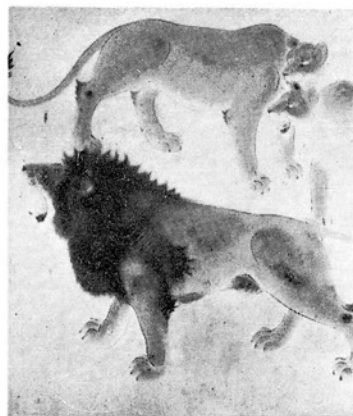
一二七 黄風 (文展) 濱田台兒



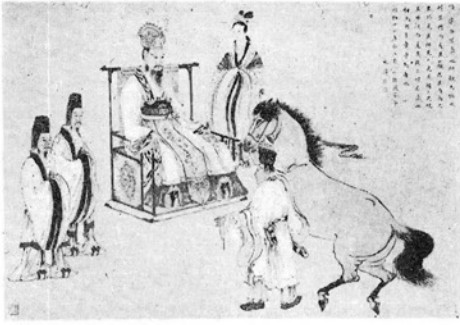
一二四 細雨流水 (文展) 白倉嘉人



〇二一 秋抄 (展文) 安田半圃



一二五 咆嗥 (文展) 西村卓三



雲翠室小 (展文) 卓方九 四二一



一二一 夕暮 (文展)

上村松園



一二五 高遊外 (文展) 矢野橋村



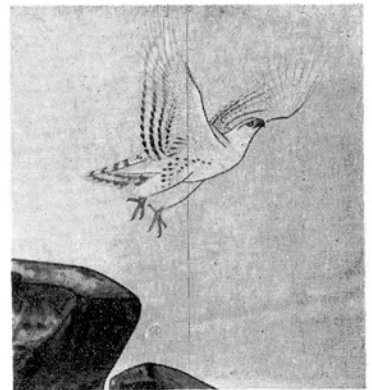
雪關本橋 (展文) 夕夏 二二一



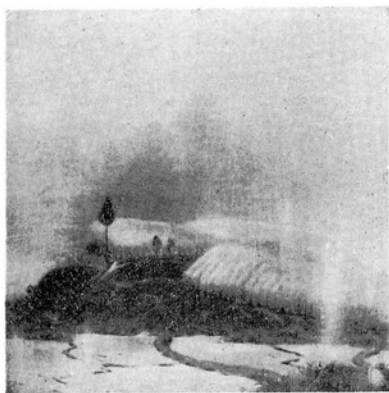
一二六 湊川 (文展) 兒玉希望



一二七 六月の頃 (文展) 東山魁夷



虎小崎川 (展文) 飛雄 三二一



一三二 滋雨(文展) 案本一洋



明素城結 (展文) 湯の馬 八二一



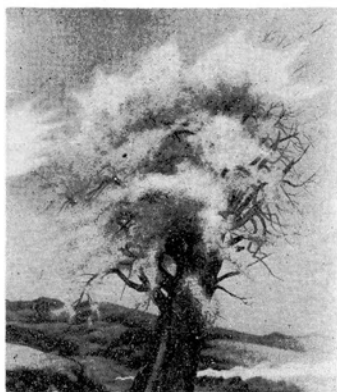
一三三 聖徳太子
(東京會新作展) 菊池契月



畝秀上池 (展文) 雨時片 九二一



一三四 清晨(忠愛美術院展) 益田柳外



空るたれ晴 一三一
堂勝山穴 (展文)



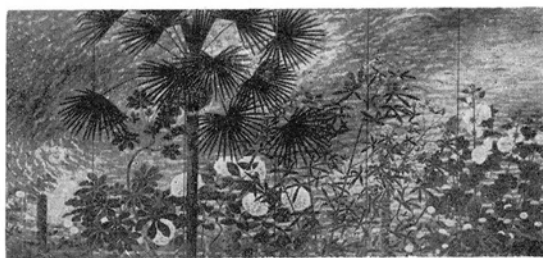
月桂林松 (展文) 秋晚 ○三一



一三九 雪

且 (七絃會展)

鎗木清方

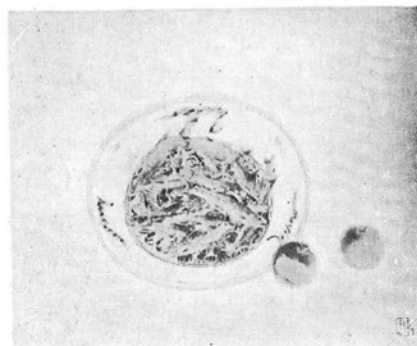


波春口川 (展院術美東日)(左・双一曲六)薰水池 五三一



一四〇 源氏舉兵 (七絃會展)

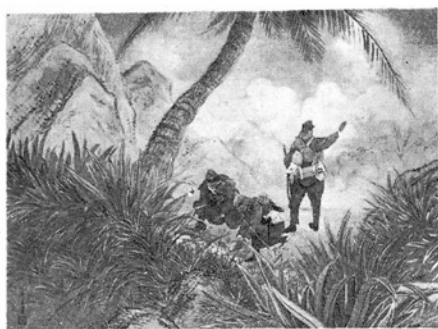
安田 靱彦



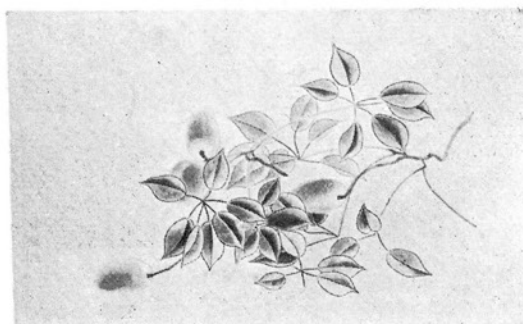
邨青田前 (展會絃七)物靜 六三一



月契池菊 (展會絃七)親嚴 七三一



水の蔭木 一四一
舟夜藤武 (展盟聯術美本日新)



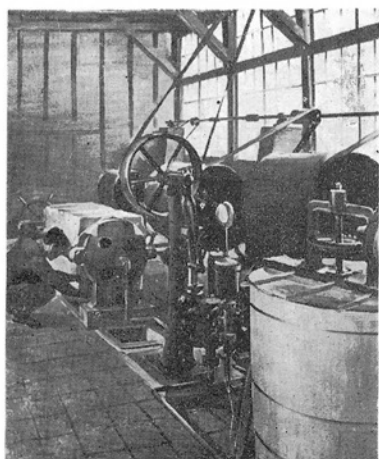
徑古林小 (展會絃七) べむ 八三一



三裸婦 (太平洋畫會展) 石川寅治



一龍膽花 (個展) 和田英作



四フェルタープレス (壓縮機) (新美術家協會展) 新海覺雄



雄良水清 (展會風光) 花の上机 二



徳保木鈴 (展立獨) 檻の水禽 六



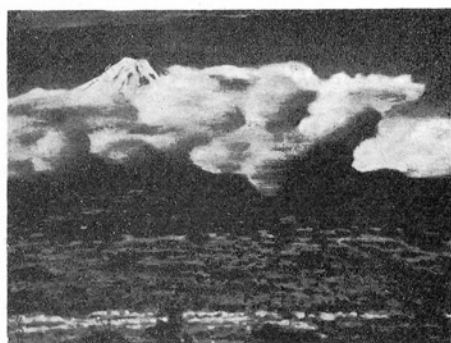
五庭前五月 (旺玄社展) 牧野虎雄



七月 (獨立展) 須田國太郎



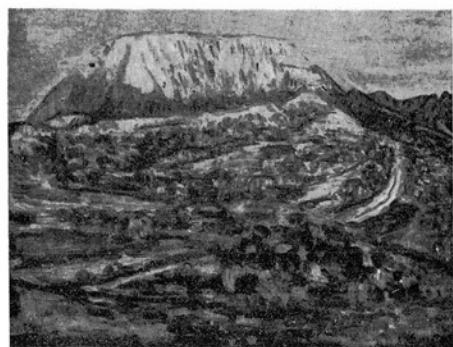
郎太善島小 (展立獨) み 踏 麥 一 一



郎 一 島 松 (展立獨) 士 富 二 一



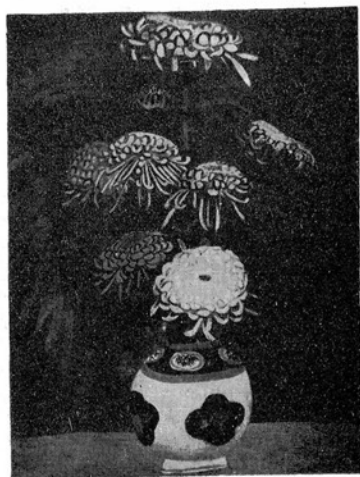
夫 亞 木 鈴 (展立獨) 后午の邊海 三 一



一 四 伯耆の大山の秋 (獨立展) 小林和作



八 軍人肖像 (獨立展) 野口彌太郎

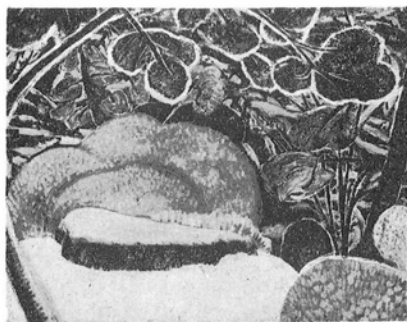


九 菊 (獨立展)

兒島善三郎



一〇 桌上靜物 (獨立展) 林 武



一 岡藤 (展會杜上) 池 八一



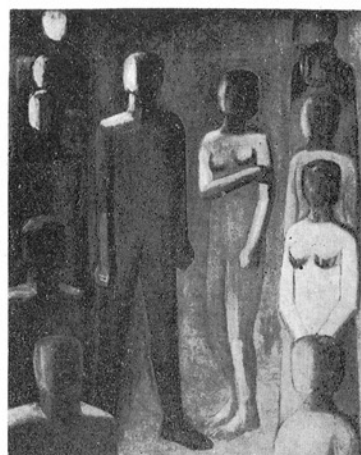
藏謙口野 (展會光東) 朝る凍 九一



(展會光東) (椿) 景風島大 〇二
四 三 下 岩



二一 盛華 (東光會展) 熊岡美彦



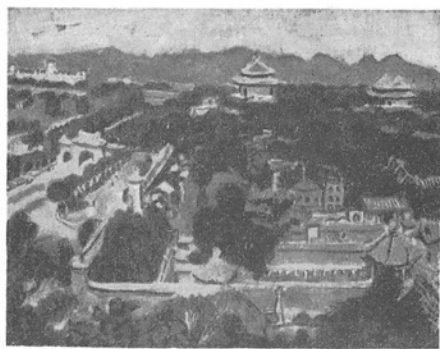
一五 青年 (獨立展) 海老原喜之助



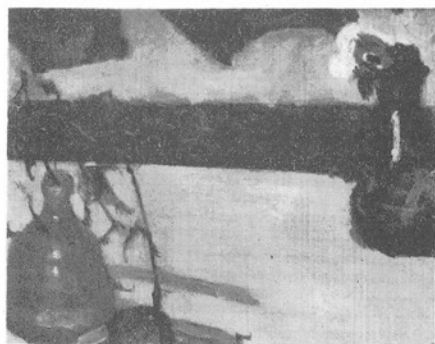
一六 遺跡 (獨立展) 中山巍



一七 由貴子八歳の像 (獨立展) 高畠達四郎



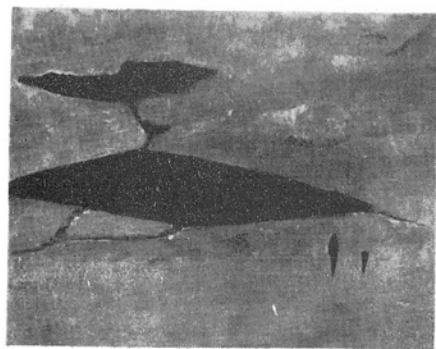
郎三龍原梅 (展會畫國)街安長京北 五二



雄義山青 (展會畫國)(一)物靜 六二



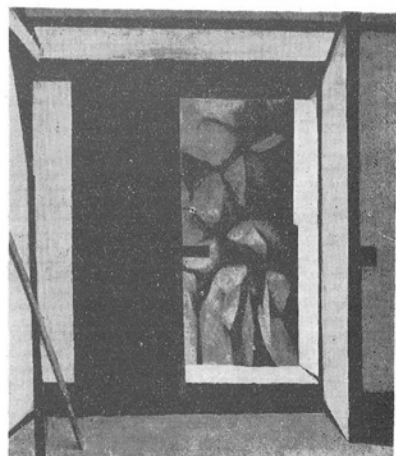
修治田以河 (展會果三)信春 七二



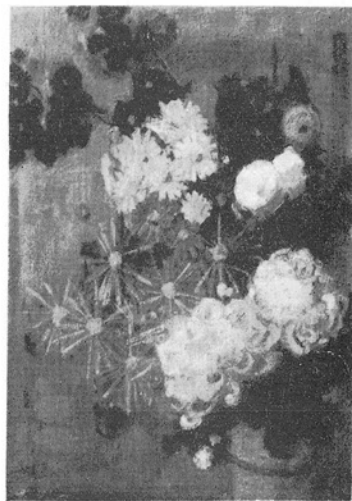
二八 水 三
(美術創作家協會展) 山口 薰



三二 池邊晩秋(國畫會展) 益田 義信



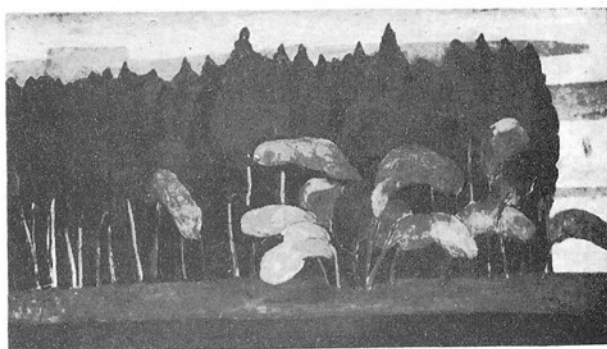
男泰月香 (展會畫國)垣石門 三二



二四 菊(國畫會展) 大森 啓助



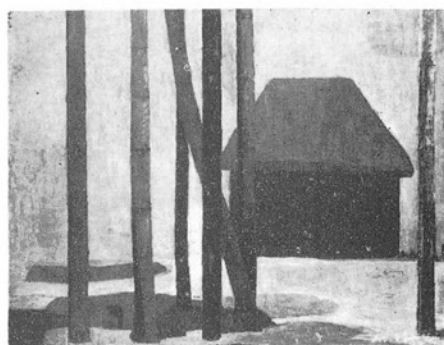
助之鹿岡 (展會陽春) 庭三三



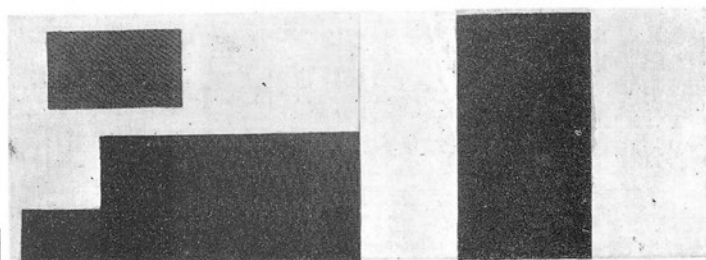
(展會協家作創術美) 林杉冬野藏武 九二
郎六橋矢



藏力田高 (展會陽春) 佛石の杵白 四三



雄芳森 (展會協家作創術美) 竹寒 ○三



郎三川谷長 (展會協家作創術美) 成構 一三



政一川中 (展會陽春) 女の子椅 五三



三三 故郷の春 (春陽會展)
横堀角次郎



四〇 研究室に於けるM博士
(日本水彩畫會展)

南 薰 造



八 莊 村 木 (展會陽春) 樹 庭 六三



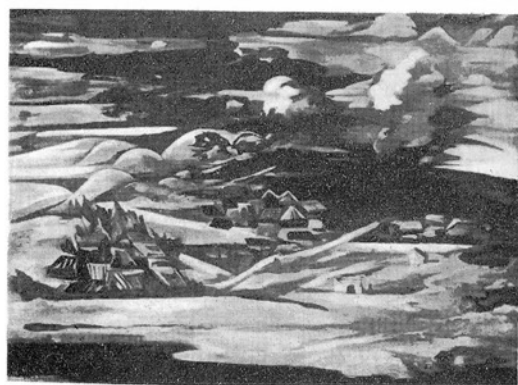
庵 放 杉 小 (展會陽春) 記事古 七三



仁 壽 倉 米 (展化文術美) 雨 時 一四



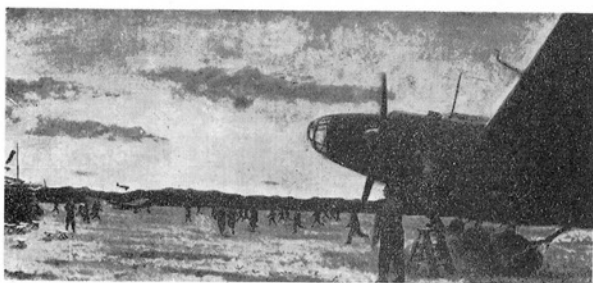
雄 田 栗 (展會陽春) 春早豆南 八三



郎 一 澤 福 (展化文術美) 景 風 二四



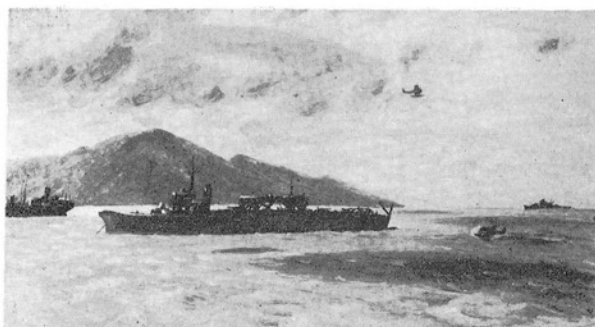
三九 夜汽車
(日本水彩畫會展) 石井鶴三



(展社林章) 備整上地 四四
作製同共納獻校學官士空航軍陸



脩原川小 (展化文術美) 道海北大 三四



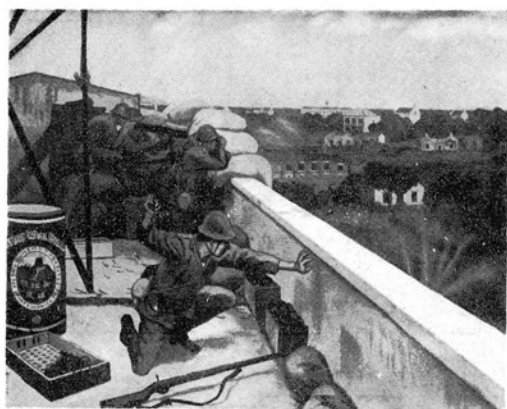
一研村中 (展術美洋海) 地基某支南 八四



治嗣田藤 (展術美洋海) 撃進漢武 七四



治重澤金 (展會元創) 庭く吹芽 五四



四九 上海油公司ノ戦闘
(海洋美術展) 石井柏亭



四六 丘 (創元會展)
吉村芳松



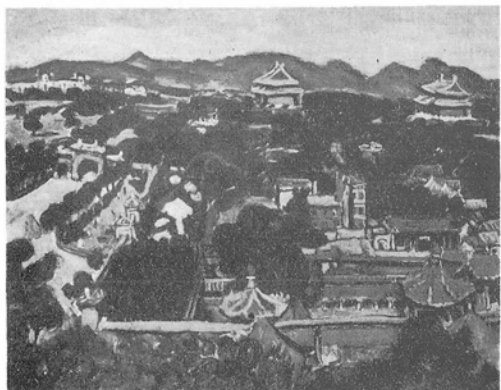
豊田安 (展術美洋海) 幸の洋北 一五



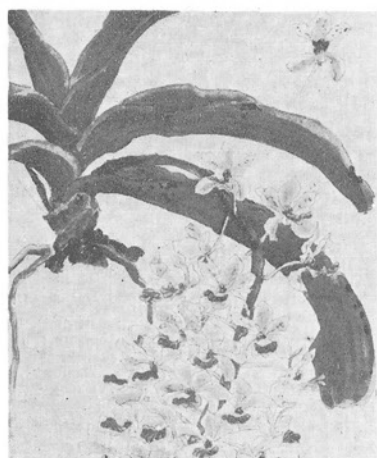
郎吾田鶴 (展術美洋海) ろことるす寄潮黒 ○五



郎太曾井安 (展會光清) 圖物果 三五



郎三龍原梅 (展會光清) 街安長京北 四五



五二 蘭花 (個展)

川島理一郎



五六 相州眞鶴の櫻 (個展) 三宅克巳



五五 召集令と野の花 (個展) 藤田嗣治



治嗣田藤 (展術美戰聖) 闘戰之昨河哈爾哈 七五



定協戰停の上鑑るけ於にンゴイサ印佛 ○六
郎三字原伊 (展術美戰聖)

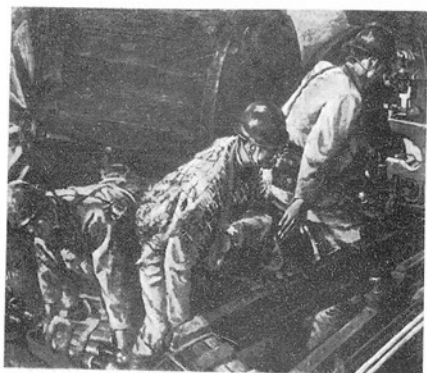


五八 娘子關を征く
(聖戰美術展)

小磯良平



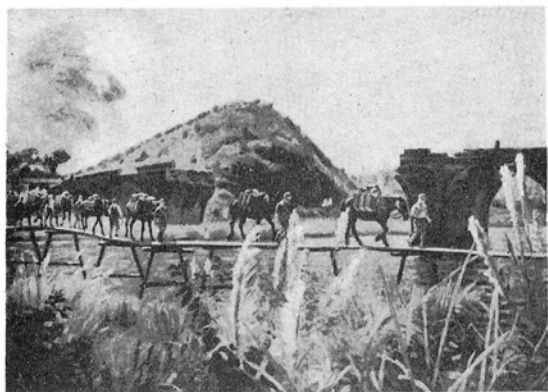
圖之戰奮隊部田津ルケ於ニ嶺孤東山盧 一六
之登水清 (展術美戰聖)



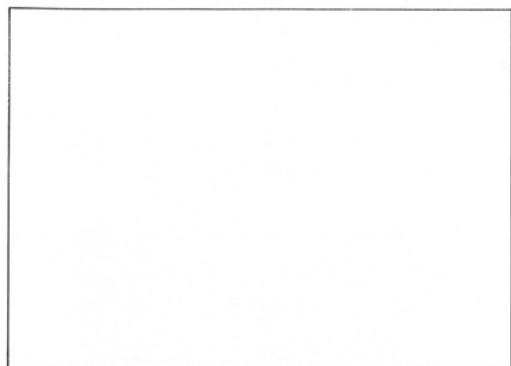
六二 砲列布置
(聖戰美術展) 南政善



信原栗 (展術美戰聖) 圖闘戰廟庸居 九五



助之伊 裕 (展術美戰聖) 略攻安臨 七六



圖之和協民軍古蒙 八六
三省澤深 (展術美戰聖)



介之孝村田 (展術美戰聖) 橋溝蘆 九六



郎三本宮 (展術美戰聖) 圖擊攻苑南 三六



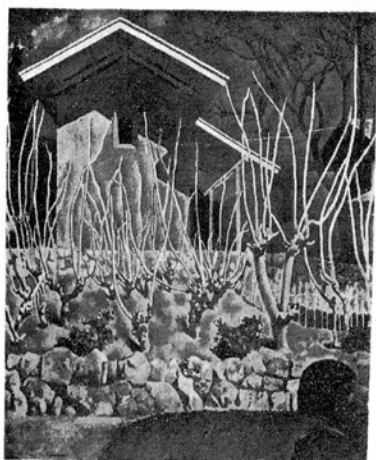
吉潤井向 (展術美戰聖) 機待 四六



圖戰奮隊部鎮北るけに戦ンハンモノ 五六
一佳串居 (展術美戰聖)



六六 古北口總攻撃
(聖戰美術展) 藤田嗣治



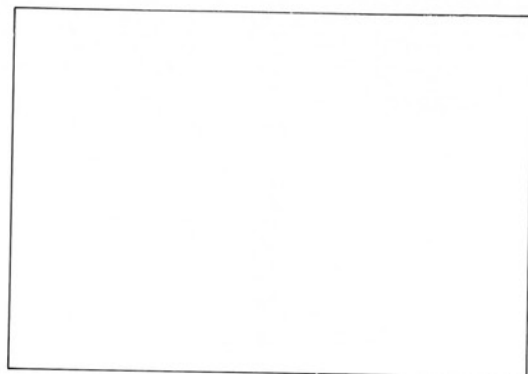
七四 桑園（二科展） 大澤昌助



七〇 蒙疆機械化部隊
（聖戦美術展） 中村研一



七五 白い花（二科展） 島崎鶏二



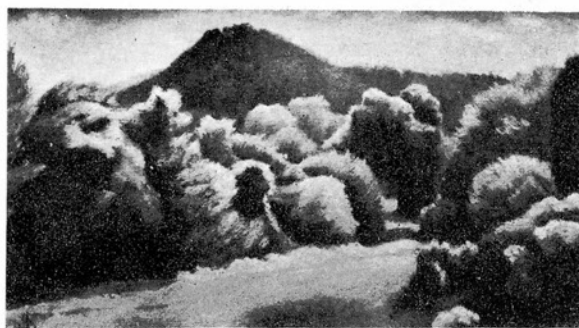
郎一佐中田（展術美戦聖）進轉一七



スシアオの野戦 二七
良士子日本山（展術美戦聖）



七六 待機（二科展） 宮本三郎



七三 三笠山（二科展） 濱田葆光



八一 扇 (二科展)

東郷青児



郎太重田黒 (展科二) 丹 牡 二八



八三 蘭印の生活 (二科展)

山尾薰明



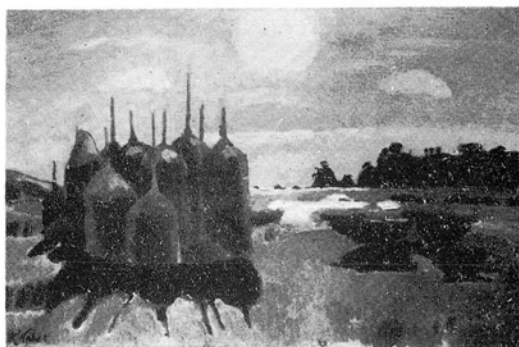
彦 國 川 早 (展科二) 場牧の夏 七七



郎三得宗正 (展科二) 松馴磯 八七



三 謙 田 岡 (展科二) 森 九七



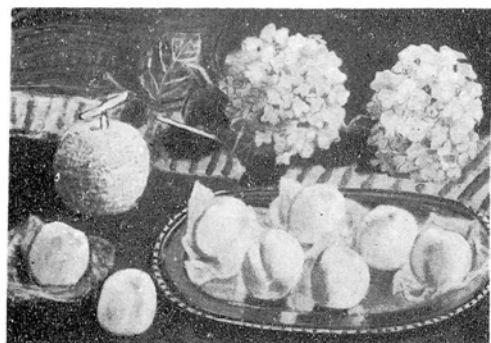
八〇 太陽の昇る海岸 (二科展) 鍋井克之



二弘本松 (展科二) 一キス・デンレゲ 七八



供子の道泉嶺岳子稻 四八
根 仁 間 野 (展科二)



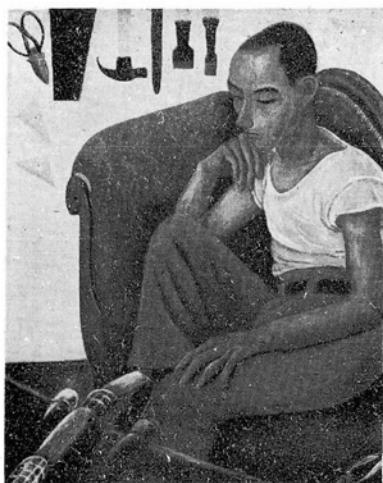
郎太信木鈴 (展科二) 物 静 八八



八五 菩薩の像(其二)(二科展) 中川 紀元



郎太徳岡高 (展科二) 邊 水 九八



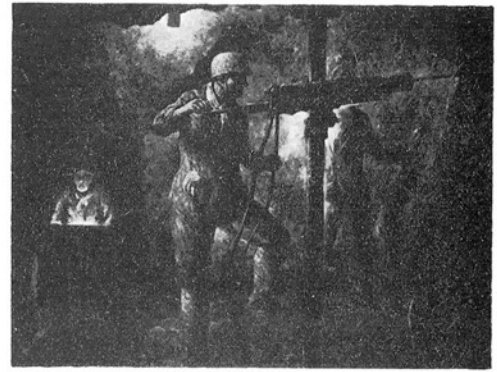
八六 生活三題の内(學修)
(二科展) 北川 民次



九〇 甘 藍
(二科展) 坂本繁二郎



九四 影(蘇州上空にて)
(航空美術展) 向井潤吉



吉 潤 井 向 (展科二) 々人の底坑 一九



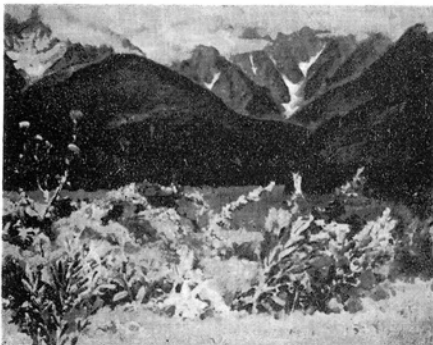
展術美空航會室九 五九



九二 少年航空兵
(航空美術展) 北野萬平



馬 生 島 有 (展會水一) 語物妹姉三 六九



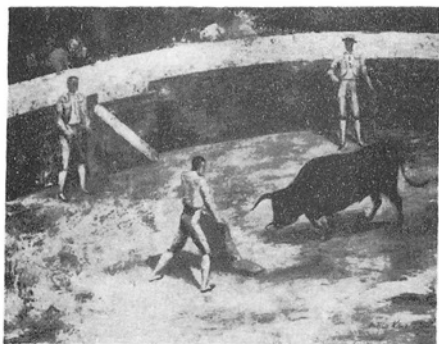
九七 白馬岳みち
(二水會展) 中村善策



九三 一機還へらず(航空美術展) 山本日子士良



謙義下木 (展會水一) 景風湖中山 〇〇一



男三三野高 (展會水一)(C)牛闘 一〇一



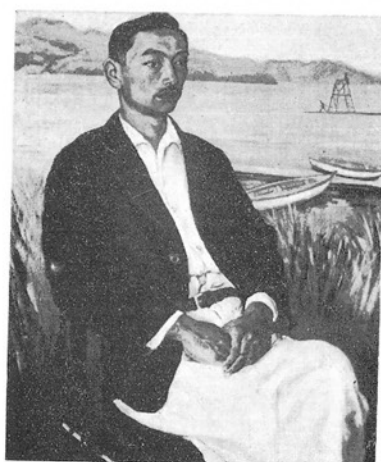
一 範井坂 (展派作制新) 曉の洲 二〇一



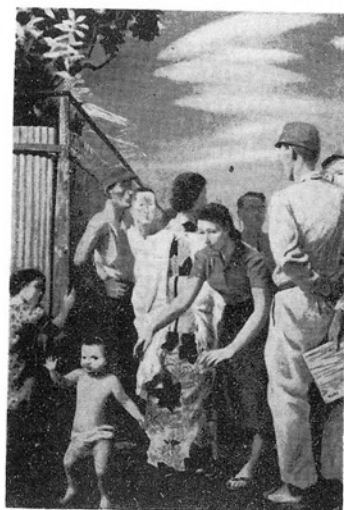
一〇四 雨あがりの街
(新制作派展) 小松益喜



九八 温泉場 (一水會展) 池部 鈞



九九 野尻湖を監視する土屋さん
(一水會展) 安宅 虎雄



一〇三 隣組の人々 (新制作派展) 鈴木 誠



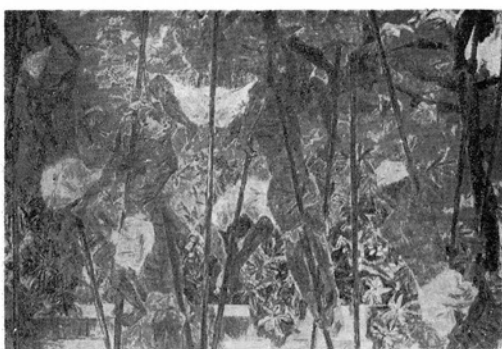
一〇九 椅子に倚る女（新制作派展）
中西利雄



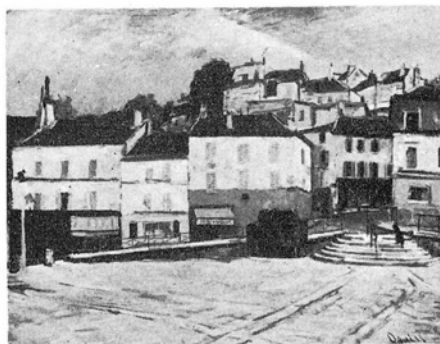
一一〇 空（新制作派展）
内田巖



一二一 子供（新制作派展）
脇田和



康田三（展派作制新）棒登攀 五〇一



德高須萩（展派作制新）場廣の町 六〇一



義正勢伊（展派作制新）達夫漁 七〇一



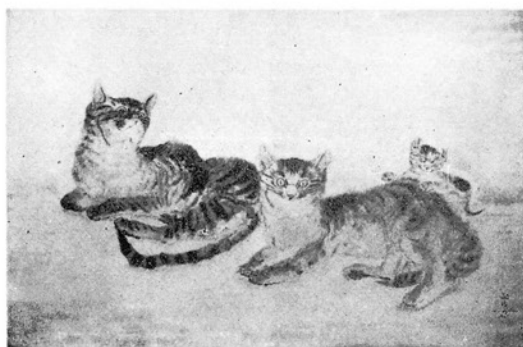
一〇八 安陸前線
（新制作派展）佐藤敬



郎一弦熊猪 (展派作制新) 達供子の埠江長 五一五



一一六 子供と静物
(新制作派展) 伊藤 健二



治 嗣 田 藤 (展回巡印佛) 猫 七一七



一一八 熱河喇叭廟
(佛印巡回展) 石井 柏亭



一二二 人物A (新制作派展) 小磯 良平



一二三 修理固成 (新制作派展) 内田 武夫



一二四 室内 (新制作派展) 三岸 節子



一二〇 レストランの一隅(個展) 關口俊吾



郎太源絲小 (展回巡印佛) 祥瑞 九一一



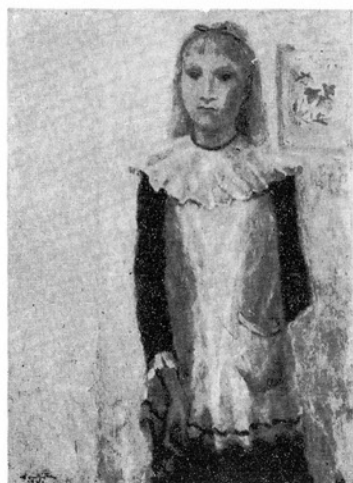
一二四 華甕上の静物(文展) 辻 永



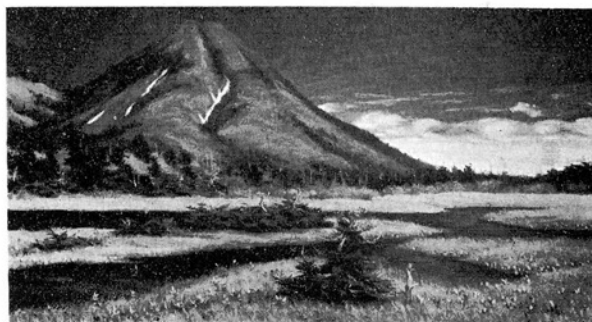
亭 柏 井 石 (展文) 外城陽朝 一二一



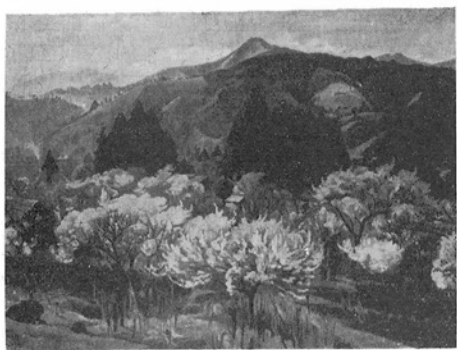
一二三 少女像(文展) 山下新太郎



一二五 少女(文展) 藤田嗣治



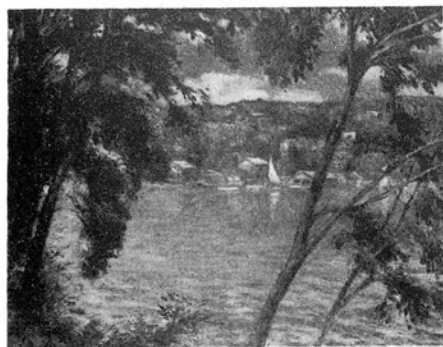
一二三 初夏の八甲田山 (文展) 足立源一郎



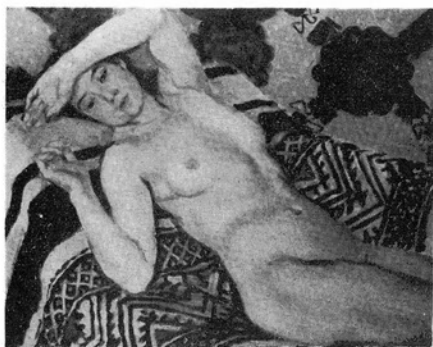
三 英 瀬 奥 (展文) 日麗村山 九二一



一三〇 静思(文展) 中澤弘光



一三一 湖畔朝晴(文展) 田邊至



一三二 裸婦(文展) 長谷川昇



一二六 霜鬢(文展) 南政善



一二七 婦人像(文展) 寺内萬治郎



一二八 マンドリン(文展) 白瀧幾之助



一三七 N 嬢像 (文展)

木下孝則



三三一 霧の湖畔 (文展) 山本 鼎



一三八 秋苑 (文展)

胡桃澤源一



一三四 齊唱 (文展)

小磯良平



五三一 川 (文展) 川 修 二



一三九 座像 (文展)

中村研一



一三六 月 (文展)

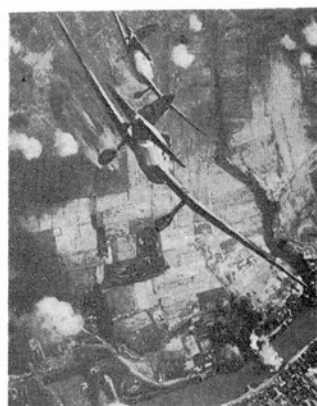
南 蕉 造



ろくざ 五四一
藏 勝 見 里 (展會林霜)



像のんさT長館書岡 二四一
夫 武 邊 渡 (展文)



撃爆下降急 ○四一
博 田 吉 (展文)



一四六 椿 (霜林會展) 林 重 義



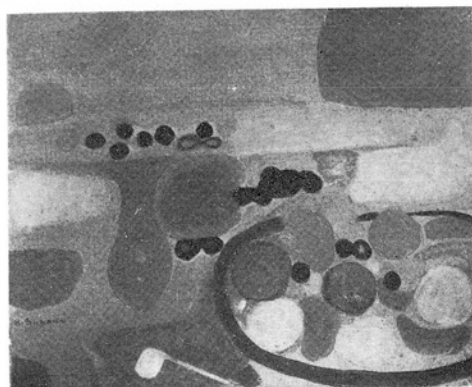
るま集女 三四一
二 琢 村 中 (展文)



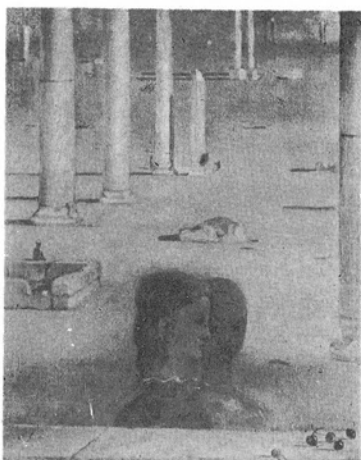
憩小 一四一
三 悌 藤 伊 (展文)



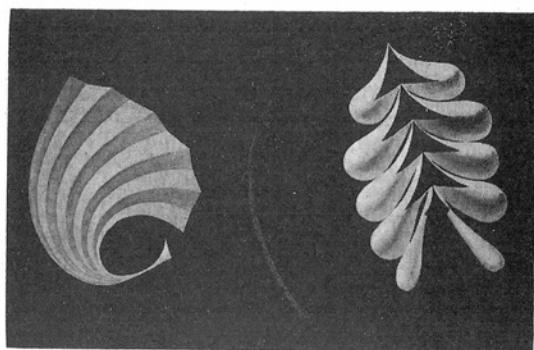
念 一 宮 曾 (展會林霜) 秋麥 七四一



一四四 靜物(個展) 菅 野 圭 介



一五一 ローマの子供
(美術文化小品展) 井上長三郎



郎太本岡 (展個) シアボルトンコ 八四一



一五二 現代日本
(泰國憲法祭記念博日本館壁畫) 橋本徹郎



る歸に國靖靈英 九四一
舟萬岡花 (展院術美愛忠)



二 白い壺 (國畫會展) ブブノワ



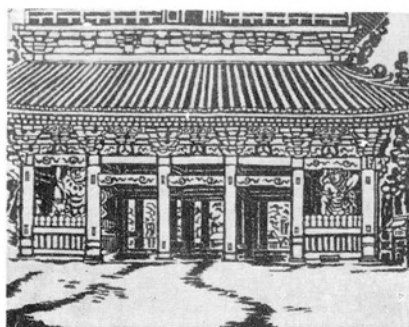
飛雄海南 〇五一
郎三崎尾 (展盟聯術美本日新)



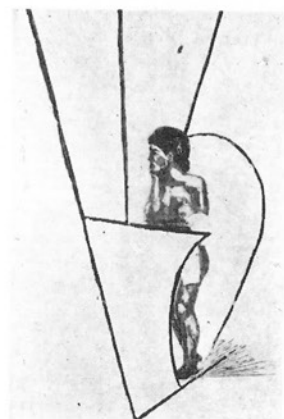
一 古道具屋
(國畫會展) 川西英



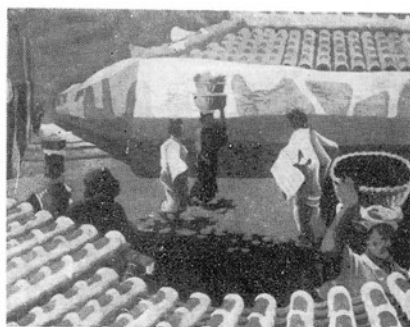
功 志 方 棟 (展會畫國)(左) 風屏畫版「像人神女男舞門」頌金檀浮閣 三



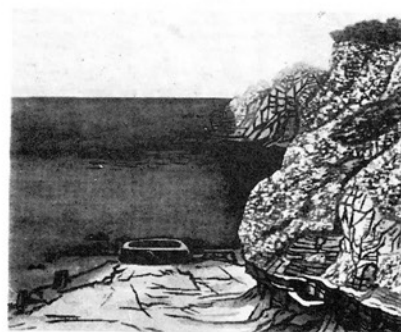
五 高野大門
(國畫會展) 平塚運一



四 少女(國畫會展) 恩地孝四郎



六 南の國(文展) 前田藤四郎



郎鉢木澤下 (展畫版) 江 楓 七

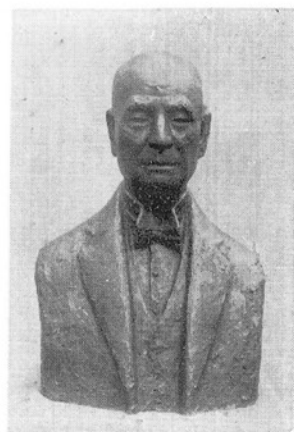


九 赤い手袋(版畫展) 前川千帆



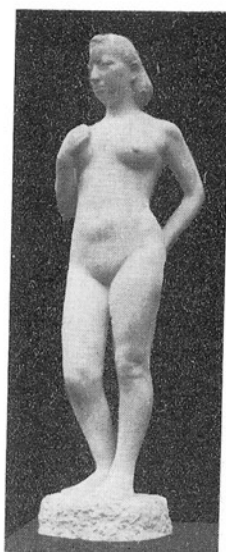
八 爐邊清談(版畫展) 石井鶴三

一 加藤先生（塊人社展） 安藤 照



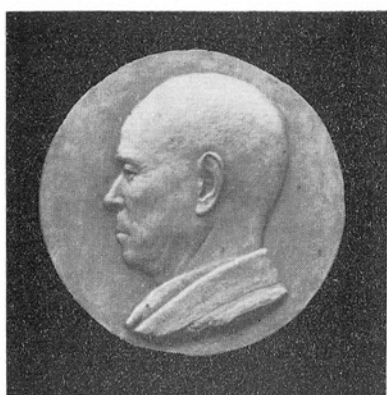
二 立像（塊人社展）

河内山賢祐



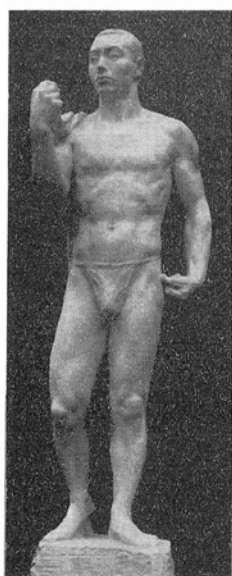
三 A博士像（構造社展）

齋藤素巖



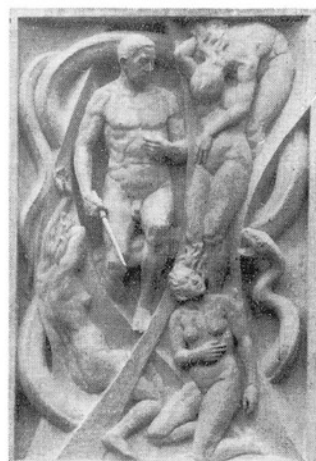
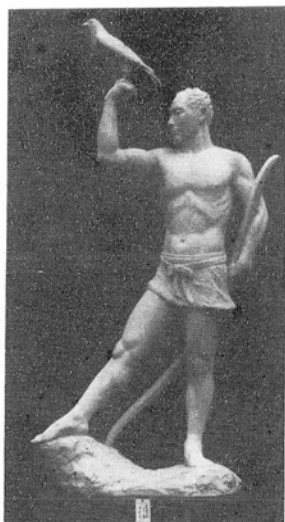
六 男習作（構造社展）

佐藤仁宗



五 建國の賦焉（構造社展）

中野五一



雄公村野（展社造構）風旋 四

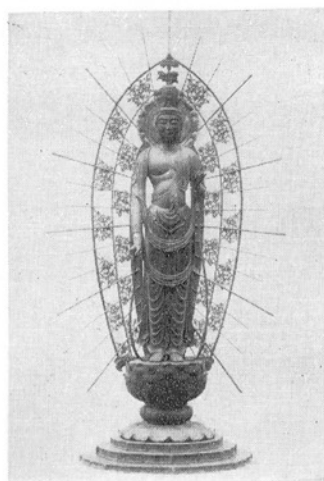
八 傷つきたる鳥人（正統木彫家協會展）

三木宗策



（展會協家彫木統正）女乙の野士佐高 七
廣 晴 田 澤

九 佛像（未完）（東邦彫塑院展） 高橋英吉



一二 かど出（東邦彫塑院展） 羽下修三



一三 明治の政雄（東邦彫塑院展） 北村西望



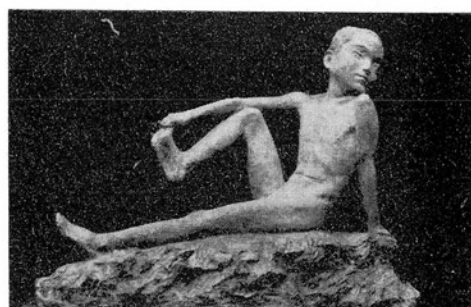
一〇 Y嬢（東邦彫塑院展） 長谷川榮作



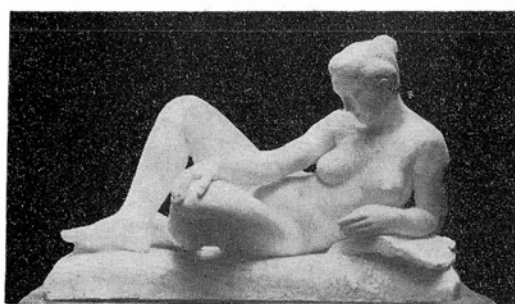
一四 帶（東邦彫塑院展） 北村治禧



（展會協家刻彫本日）像座 五一
樹茂嶽大

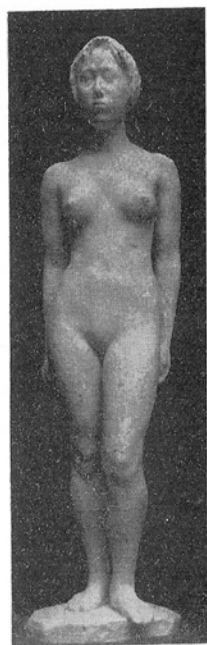


（展院塑彫邦東）もどこの日る或 一一
迪滋地有

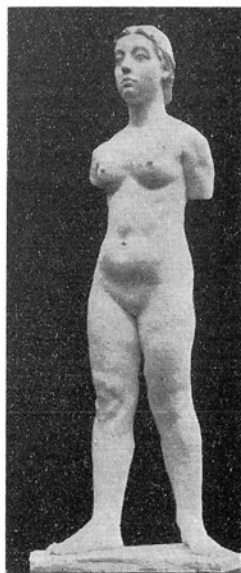


彌辰領國（展會協家刻彫本日）性女 六一

一七 習作A (日本彫刻家協會展) 中村 七十



一八 トルソー (直土會展) 曹 圭 奉



一九 首 (直土會展) 今村輝久晃



二〇 楯 (國旗掲揚塔彫刻) (九元社展) 森 大 造



二一 一心協力 (九元社展) 石塚貞男



二二 閑月居像 (國風彫塑會展) 日 名 子 實 三



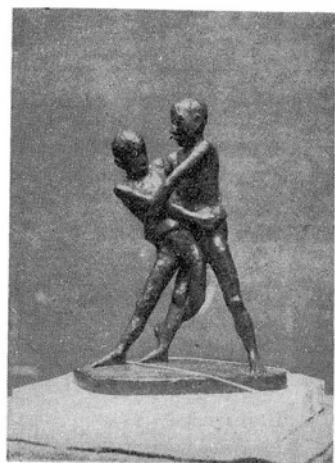
二三 月讀 (國風彫塑會展) 石川 確 治



二四 建設 (部分試作) (國風彫塑會展) 名久井十九三



二五 兒童角力(院展) 石井鶴三



二六 鷹(院展) 岡村進



二七 女の顔(院展) 山本豊市



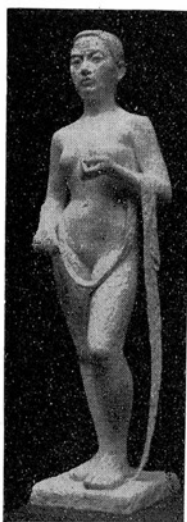
二八 夏のあした(院展) 辻 晉堂



二九 水町氏像(院展) 保田龍門



三一 布を持つ女(院展) 村田徳次郎



三二 草薙劍(院展) 中村直人



三三 鹿(院展) 安原 菴



三八 航空科學頭(國土を護る部分草稿)
(二科展) 渡邊義和



三六 家族(二科展) 笠置季男



中田 楠平 (展院) 翁軒鑽 三三



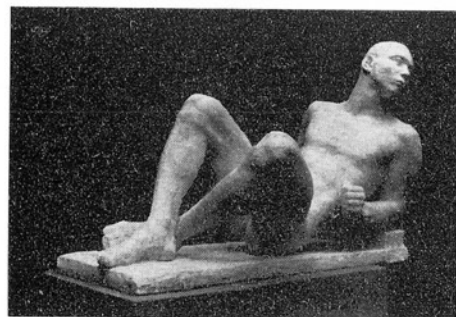
業隆野長 (展科二) 造鍛 九三



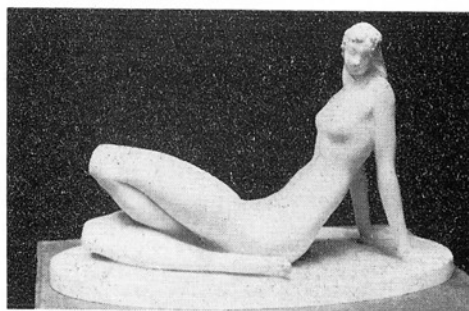
三七 東郷大將バルチック艦隊を脱む(未完)
(二科展) 泉二勝磨



三四 東天紅(賣受女)(二科展)
松村外次郎



(展會協派作制新) 年青 ○四
良忠藤佐



郎五小漫渡故 (展科二) 女だんすや 五三

四一 胸像(新制作派展)

舟越保武



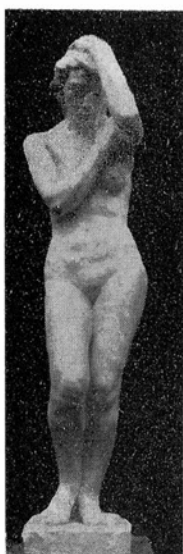
四四 端坐(新制作派展)

本郷新



四七 默(文展)

建昌覺三



四二 裸婦「淵」(新制作派展)

山内壯夫



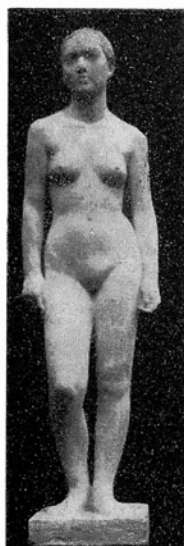
四五 座像(文展)

小室達



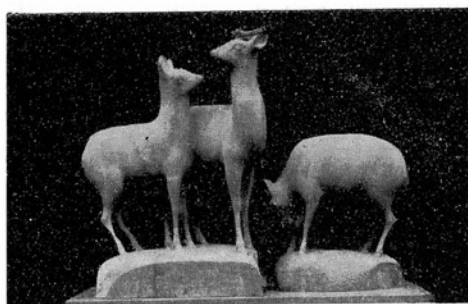
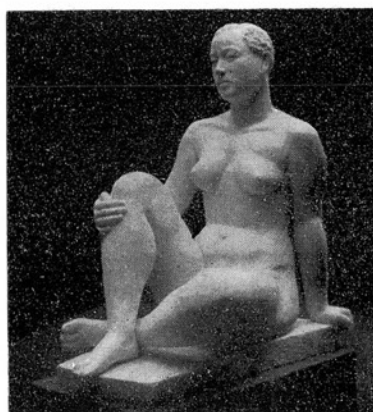
四八 大地(文展)

渡邊徹



四三 裸婦(新制作派展)

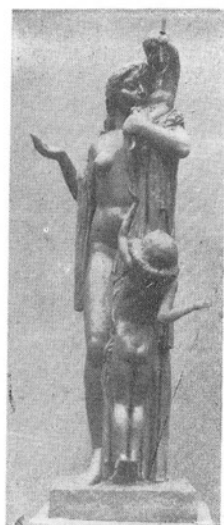
早川魏一郎



藏駒鳥大 (展文)麓山六四

四九 日本刀(文展)

寺畑助之亟



五二 坐像(文展) 藤澤古實



五四 コタンのアイヌ
(文展) 加藤顯清



五〇 江川太郎左衛門像(文展)

水船六洲



五三 建國(文展)

山崎朝雲



五五 葵上(文展)

畑正吉

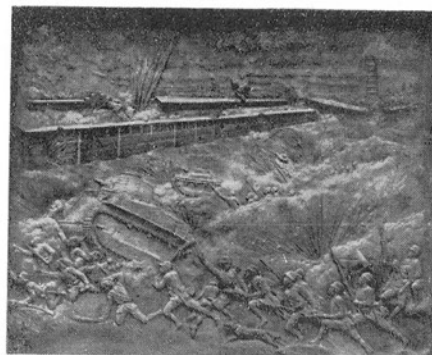


五六 祖國防衛(文展) 梁川剛一



夫文倉朝 (展文) 蹄の起再 一五

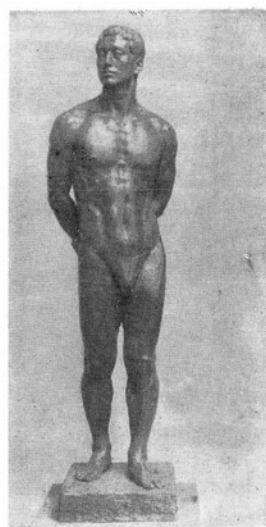
五七 白壁の家附近の戦闘
(文展) 小倉右一郎



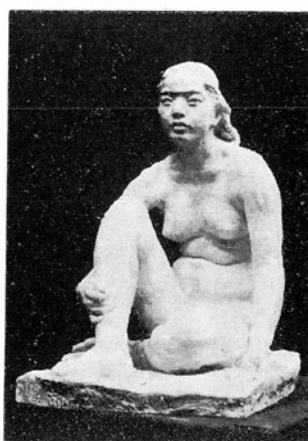
五八 正眼の構(文展) 雨宮治郎



五九 立てる男(文展) 進藤武松



六二 座せる女(文展) 建昌大夢



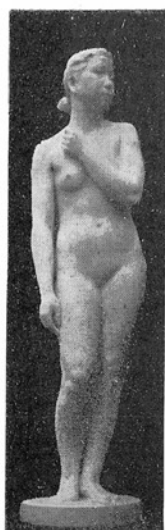
六一 たばこ(文展) 松浦良



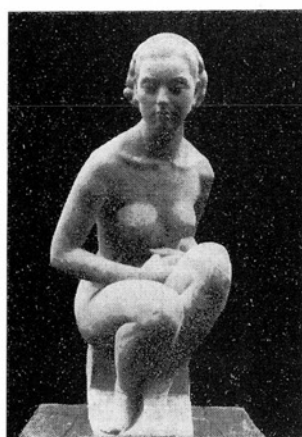
六〇 二千六百年の作
(文展) 開發芳光



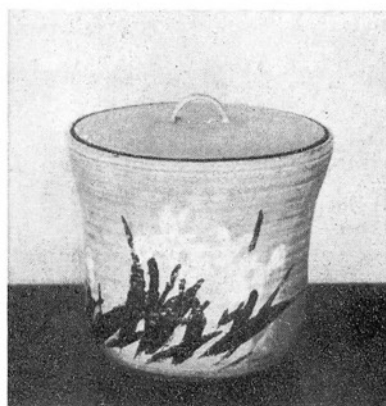
六三 希望(文展) 兒島正典



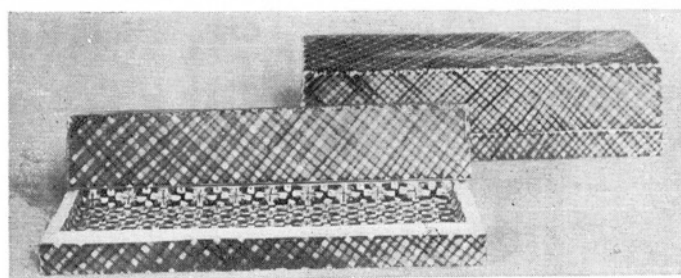
六四 腰かけた裸婦(文展) 藤井浩祐



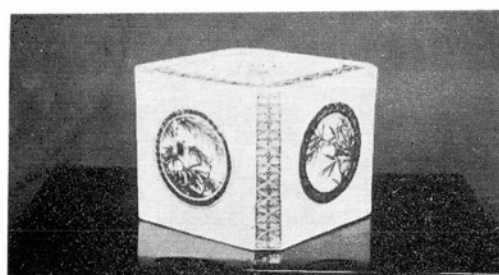
一 初夏水指（京都市美術展）
清水六兵衛



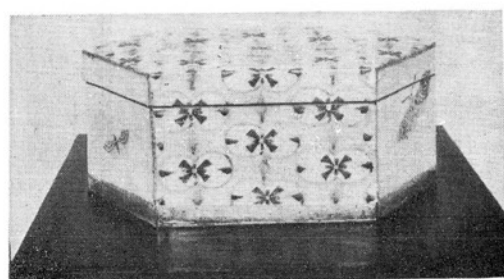
二 草花文花瓶（個展）
清水正太郎



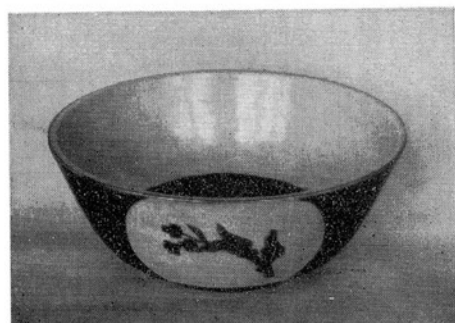
三 飾箱（展文）
富本靈吉



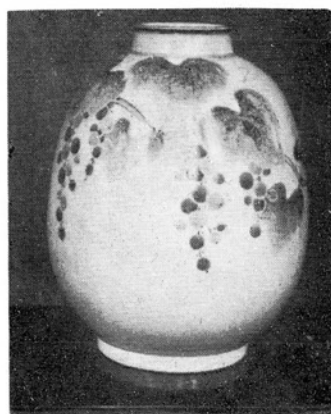
四 五色華水指（展文）
楠部彌弼



五 彩色方箱（展文）
新開邦太郎



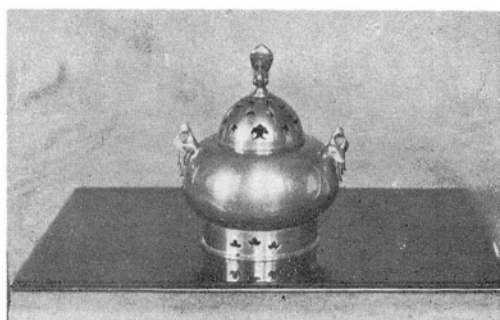
六 菜之花大鉢（展文）
德力孫三郎



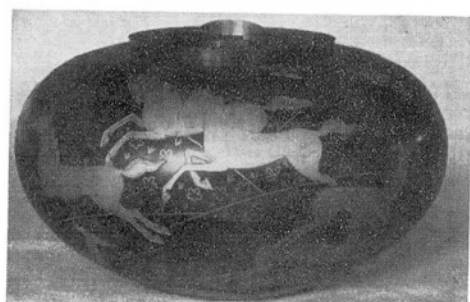
七 磁器葡萄花瓶（文展）
山陶東伊



鹿千原北 (展文) 壺銅黃 一一



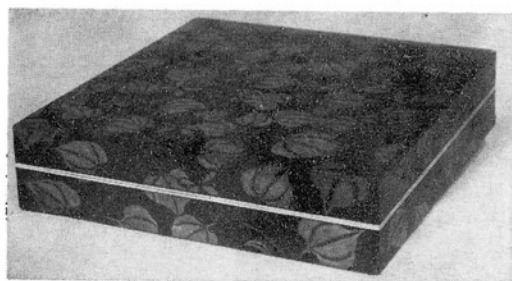
眞秀取香 (展文) 爐香鈕鳳 八



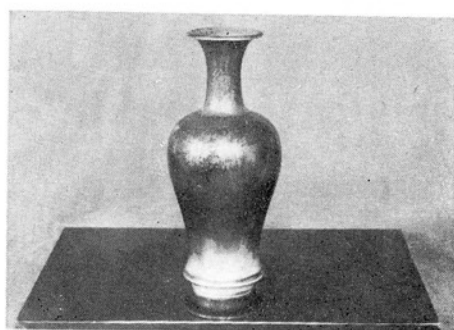
郎太幸鴨 (展文) 壺 二一



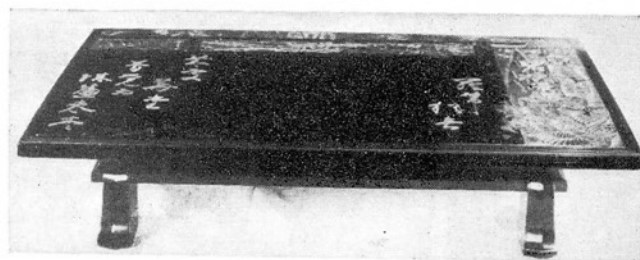
九 彫金花蝶文花器(文展) 二橋美術



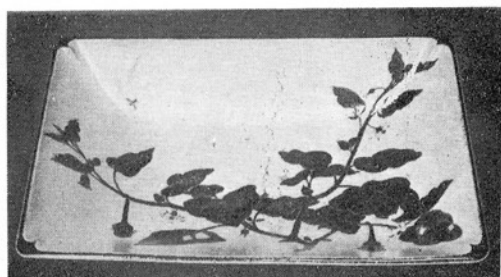
甫秀合河 (展文) 宮飾文草藥 三一



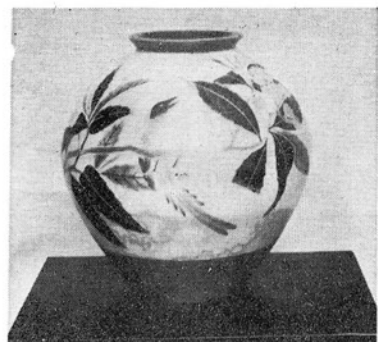
山波谷板 (展文) 瓶花磁變窯 〇一



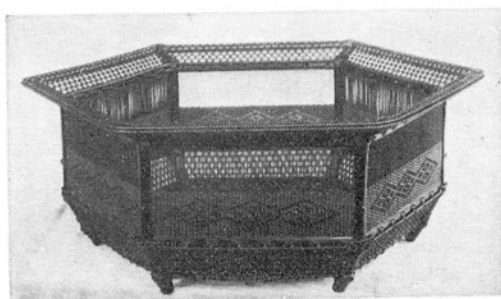
六權田松 (展文) 卓の鶯器漆 四一



清 木 鈴 (展文) 鉢大圖之子茄 八一



瓶花圖杞枇藥鹽 五一
光 嘉 野 森 (展文)



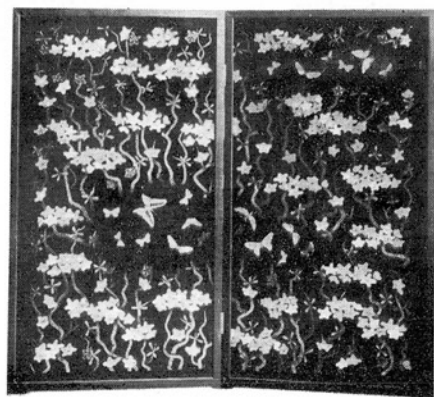
齋玕琅塚飯 (展文) 斗 炭 竹 九一



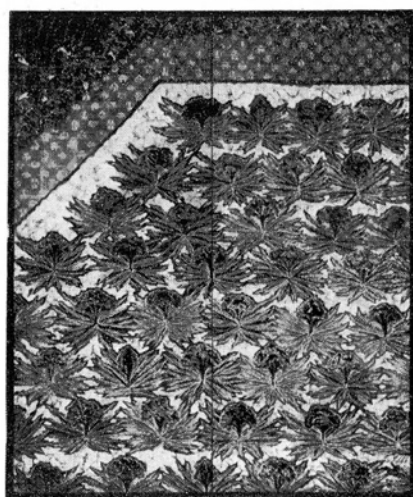
瓶花耳魚連三 六一
曇 安 本 山 (展文)



水 紫 角 六 (展文) 和平器漆 〇二



二一 木瓜圖屏風(文展) 高橋節郎



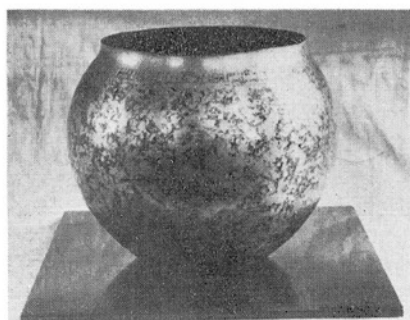
風屏折枚二色染園花 七一
洞 霞 井 櫻 (展文)



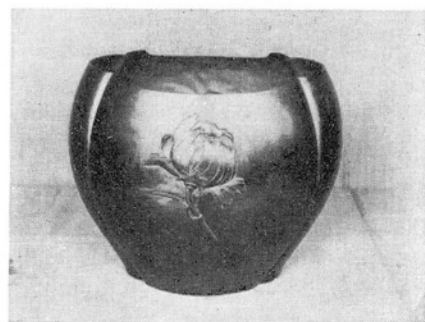
箱手繪蒔漆樂歲萬秋千 六二
眞 隆 澤 梅 (展文)



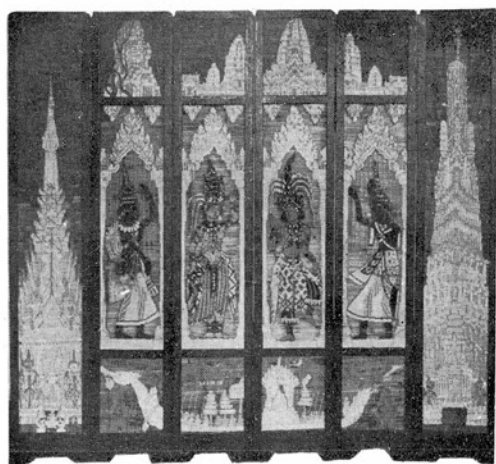
二三
獅子文鍍金香爐
(文展) 清水南山



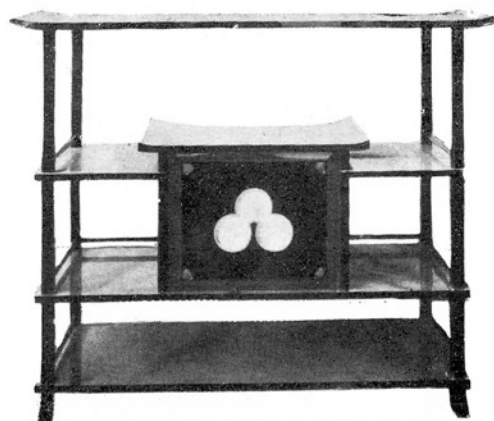
雄 龍 田 寺 (展文) 壺紋葉銅銀 七二



宏 宜 藤 伊 (展文) 器花銅鑄 三二



華 清 鹿 山 (展文) 風屏姫舞簾織 八二



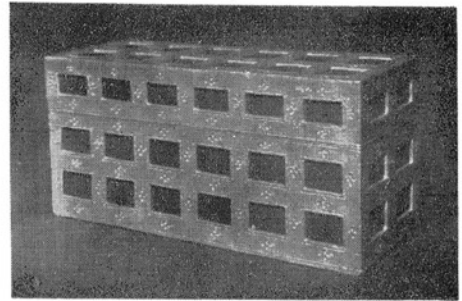
哉 宗 畑 多 (展文) 棚漆髹 四二



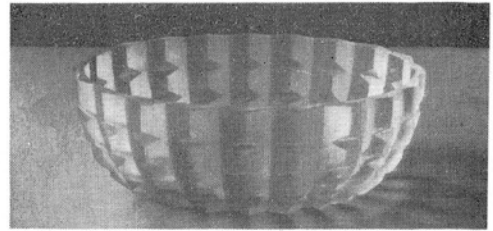
華 薺 間 本 (展文) 机文器漆禽遊條柳 五二



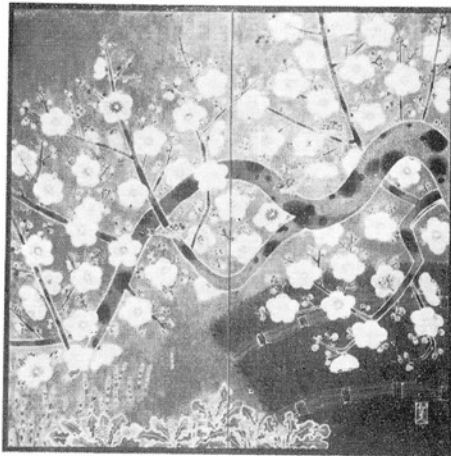
三三 染付鐵繪花ノ圖花瓶
(文展) 岡本爲治



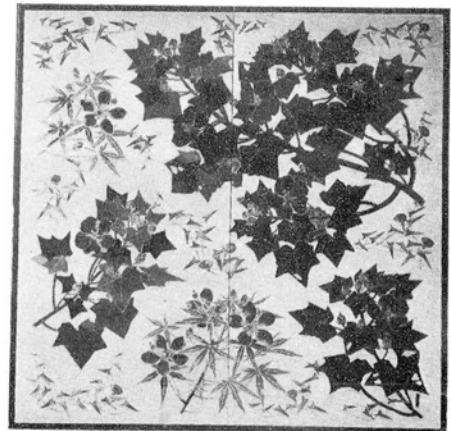
箱華錫鑄染朱麻嵌象蟲玉 九二
樹直原 (展文)



三 鑽務各 (展文) 鉢子硝 ○三



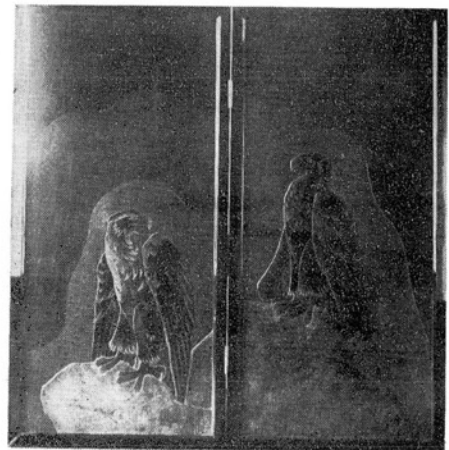
三四 和染梅之屏風(文展) 木村和一



三一 初秋屏風(文展) 渡邊春男



三五 黒白の群鶉繡屏風(文展)
鹿島英二



三二 漆「休翼」屏風(文展) 山崎覺太郎

三六 善隣譜染屏風(文展)

稻垣稔次郎



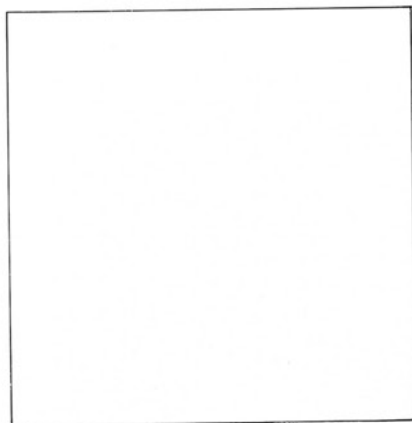
三七 染松藤友禪二曲屏風

(文展) 廣川松五郎



三八 杉之圖和染二枚折屏風

(文展) 般若侑弘

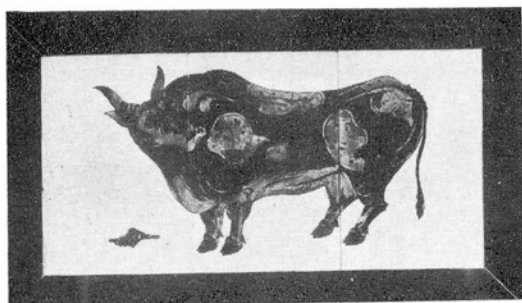


三九 南庭出現の管公眞紙朝像

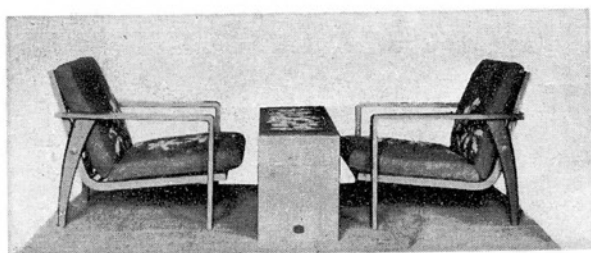
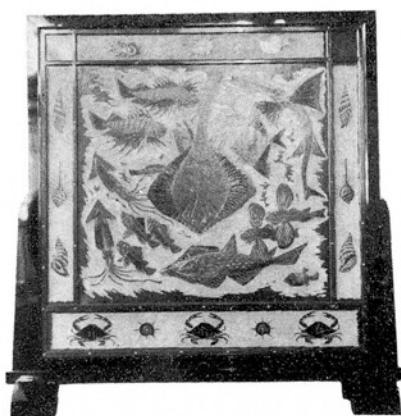
(文展) 鹿兒島壽藏



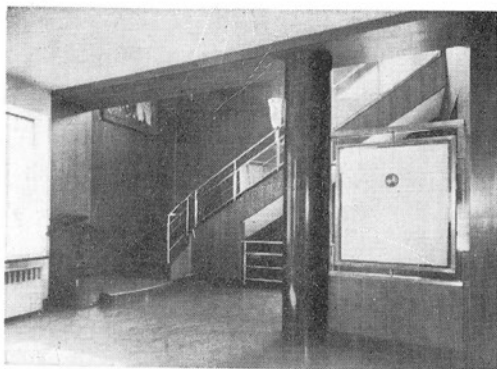
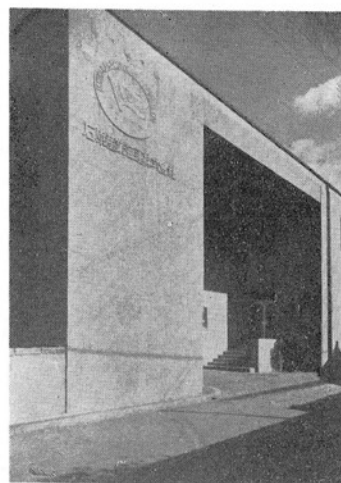
ルネパ飾装面壁(牛)久悠 ○四
郎次塔出北 (展文)



四一 海漆皮衝立(文展) 吉田源十郎



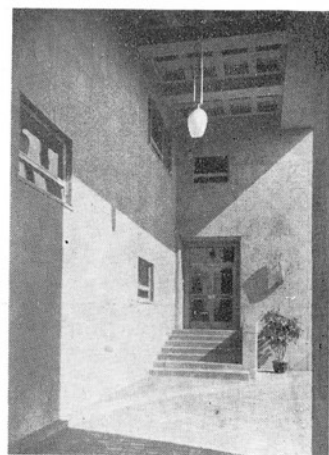
周 重 坪 大 (展文) トッセ具家 二四



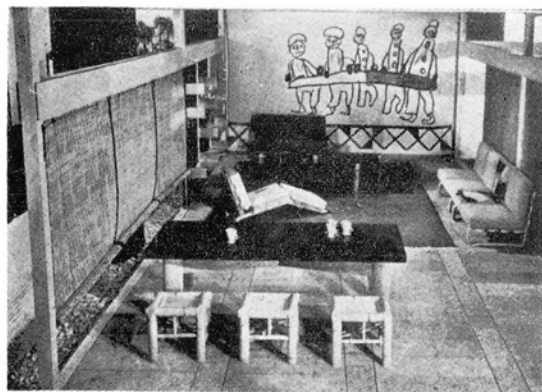
ルーホ關玄 同三



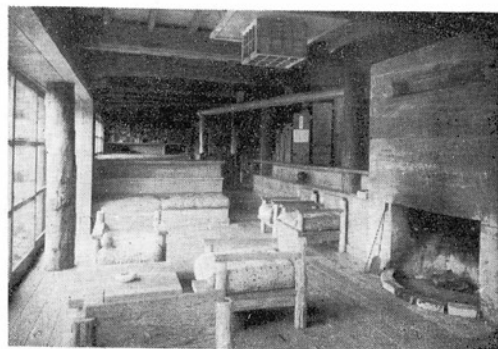
圖面斷同四



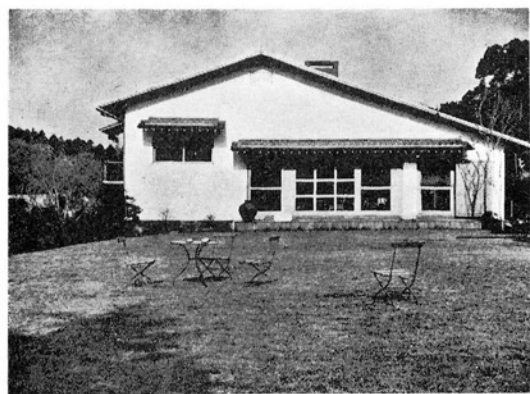
面正關玄 同二



間居たねかを堂食 展品作創史女ンアリベ 五
(ルヨニ誌築建新 影撮エツンレフ・ルーハ)



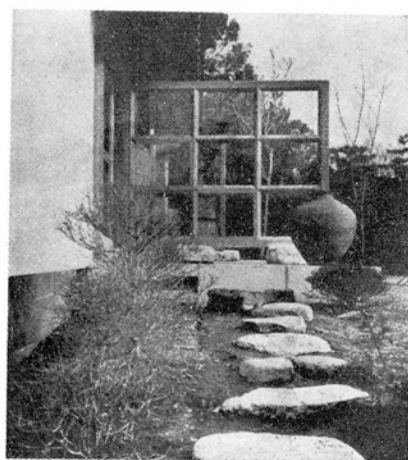
計設健浦市 室話談 家の山頭龍光日 六
(眞寫社世界築建)



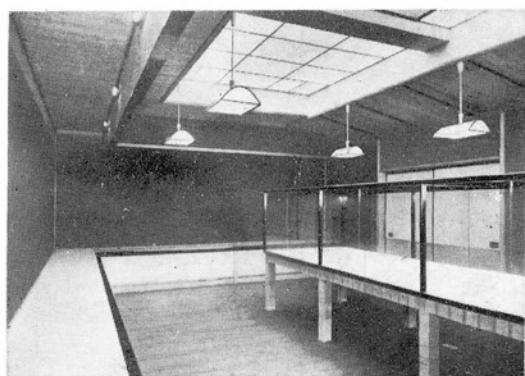
計設所究研築建三準倉坂 居住小本日一 〇一
(ルヨニ誌築建新 影撮エツンレフ・ルーハ)



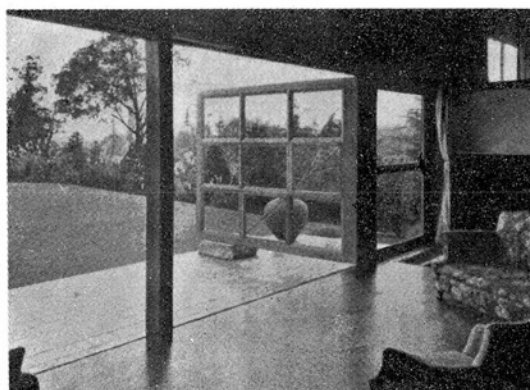
面正庫文一第 庫文明陽都京 七
計設所務事築建腰竹・部谷長
(眞寫社築建新)



同 一一



室列陳庫文同八

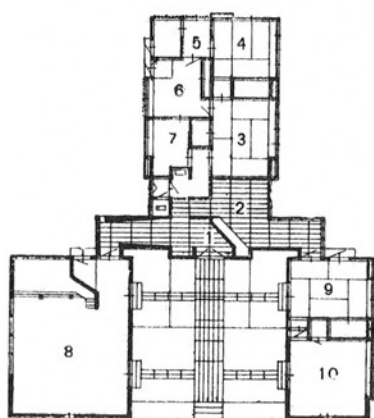


同 二一



九同

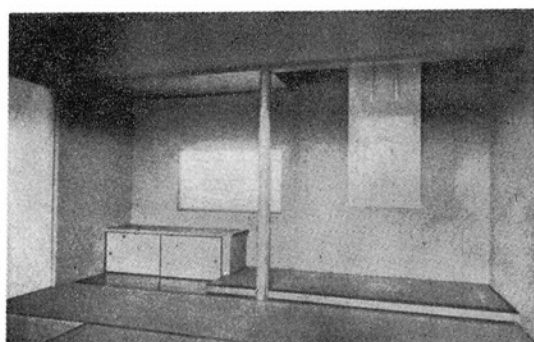
第二竝第一文庫外觀



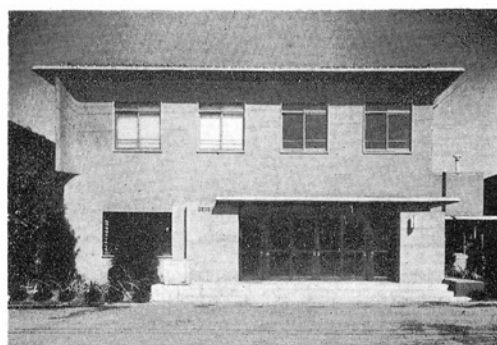
圖面平同四一



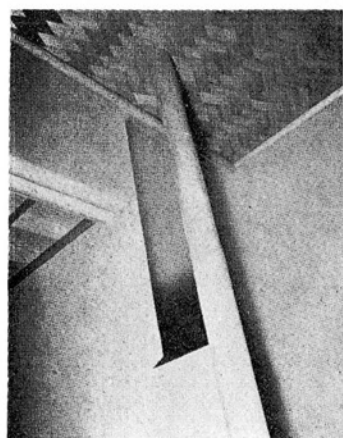
ドーサアフ エリトア氏井名 三一
(眞寫社築建新)計設雄定島川



計設八十五田吉 間客上階 邸木青 七一
(ルヨニ誌築建新)

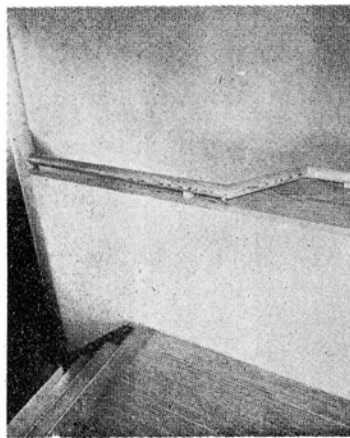


計設組水清社會式株 店商次鏡川谷長 五一
(眞寫社築建新)



井天口昇段階 同 九一

(ルヨニ誌築建新)



臺膳配小 同 八一



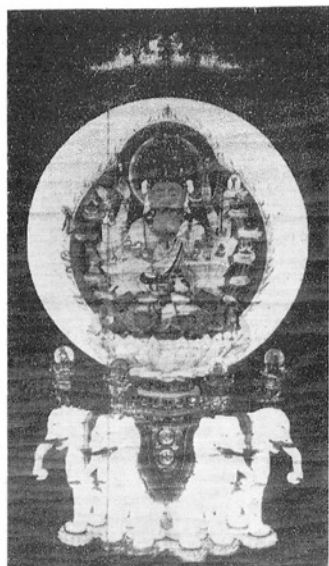
觀外側南 邸氏某 六一
計設所務事築建野村
(ルヨニ誌築建新)

一 大日金輪像



醍醐寺藏

二 普賢延命像



觀智院藏

三 火羅圖



教王護國寺藏

四 仁王經法本尊像(東方)



教王護國寺藏

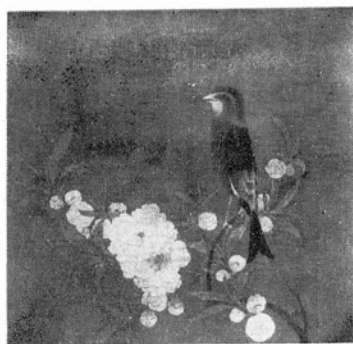


五 過去現在因經殘闕 前山宏平藏

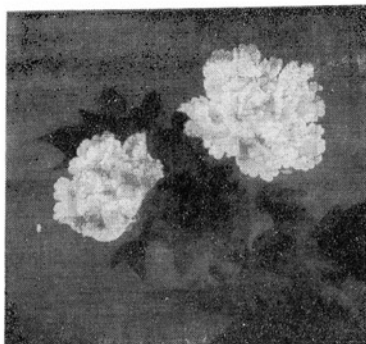


十六 王經 長尾欽彌藏

七 桃花小禽圖 原壽枝藏



八 紅白芙蓉圖(白)子爵福岡孝紹藏



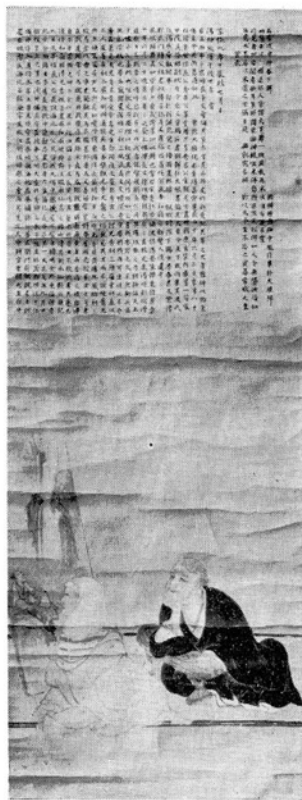
九 騎獅文殊菩薩像納入造像關係文書ノ内 前山宏平藏



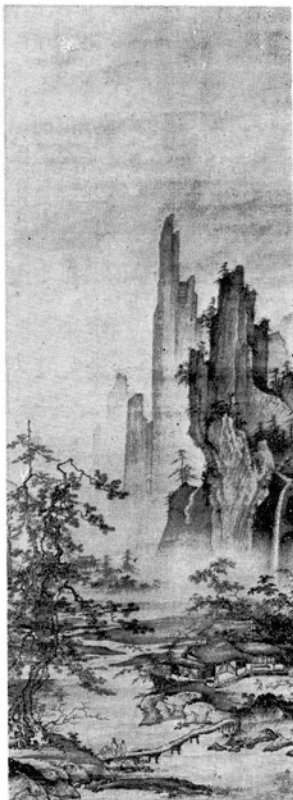
一〇 觀菩薩經冊子 前山宏平藏



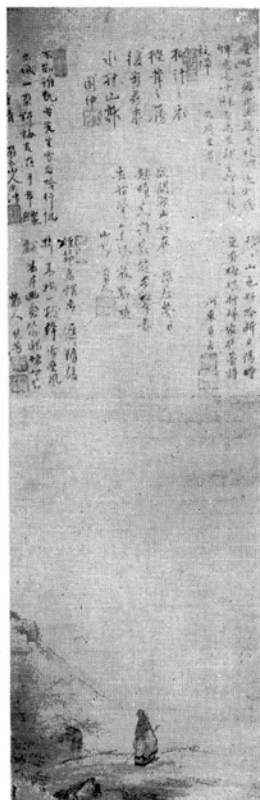
一一 海北友松夫妻像(海北友雪筆)



一二 山水圖(狩野正信筆)



一三 高士探梅圖





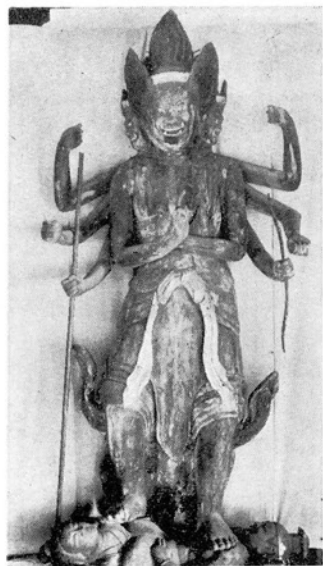
一六 吉祥天像 清雲寺藏



一五 白光神像 高山寺藏



一四 善妙神像 高山寺藏



一九 降三世明王像 明通寺藏



一八 大日如來像 妙樂寺藏



一七 聖觀音像 延曆寺藏



二二 維摩居士像 青龍寺藏



二一 不動明王像(快慶作) 三寶院藏



二〇 聖觀音像 願興寺藏

二三 埴輪鷹狩男子像



松原正業藏

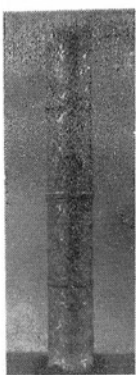
二八 飛青磁花瓶



男爵 鴻池善右衛門藏

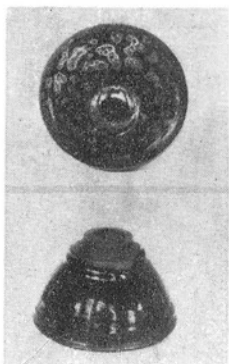
二四 金錯狩獵文銅筒

國(美術學校保管)



二六 曜變天目茶碗

男爵 岩崎小彌太藏



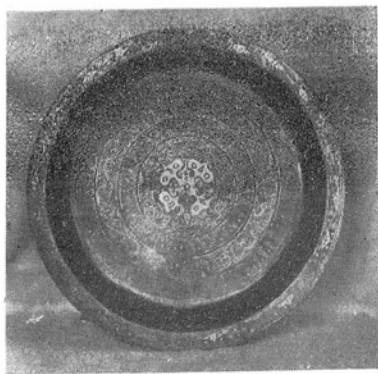
二九 笹散蒔繪鏡匣

土師神社藏



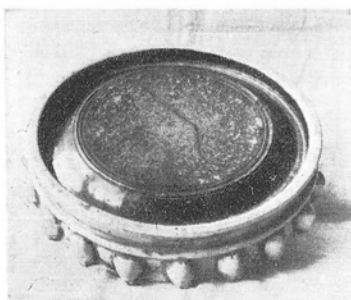
二五 金錯鳥獸雲文盤

侯爵 細川護立藏



二七 青白磁圓硯

土師神社藏

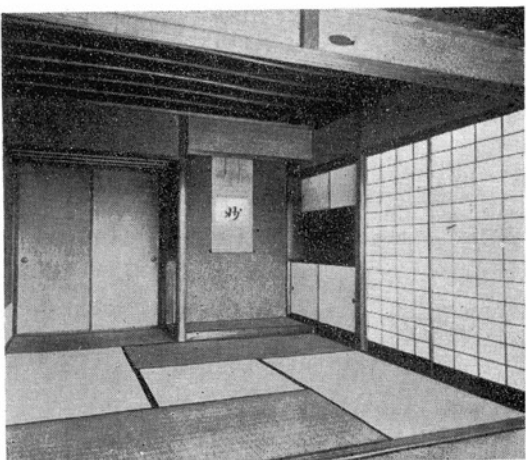


三〇 笹散双雀鏡

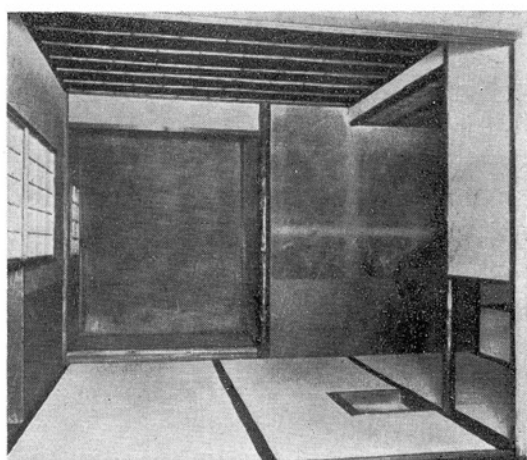
土師神社藏



三一 向月亭



三二 聚光院閑隠席



三三 長野神社本殿



三四 金剛寺食堂



三五 天満宮本殿



三六 那谷寺本堂大悲閣



三七 福山城天守、本丸御門



三八 松山城天守





(去逝日三月四)郎孟子鹿 二



(去逝日三十月三)雲瑞本山 一



(去逝日七十二月八)山春岡木八 五



(去逝日八十二月七)郎次延崎田 四



(去逝日二十二月六)一功藤佐 三



(去逝日九十二月二十)康 立足 七



(去逝日五十月二十)山東永宮 六

附

錄

國寶保存會

國寶保存法

昭和四年三月二十八日
法律第十七號

第一條 建造物、寶物其ノ他ノ物件ニシ

テ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト爲
ルベキモノハ主務大臣國寶保存會ニ諮

問シ之ヲ國寶トシテ指定スルコトヲ得

第二條 主務大臣前條ノ規定ニ依ル指定
ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ

第三條 國寶ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコ
トヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケタ

第四條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルト
キハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ維

持修理ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 主務大臣前二條ノ規定ニ依ル許
可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ

第六條 國寶ノ所有者ニ付變更アリタル
トキハ命令ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨ

リ主務大臣ニ届出ヲ爲スベシ國寶滅失
又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第七條 國寶ノ所有者ハ主務大臣ノ命令
ニ依リ一年以内ノ期間ヲ限リ帝室、官立

又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ國
寶ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭

祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ
其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキ

ハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ命令ニ對シテ不服アル者ハ訴願
ヲ爲スコトヲ得

第八條 前條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ出陳
シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ

依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付ス

第九條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタ
ル國寶其ノ出陳中滅失又ハ毀損シタル

トキハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ
其ノ所有者ニ對シ通常生ズベキ損害ヲ

補償ス但シ不可抗力ニ因リタル場合ハ
此ノ限ニ在ラズ

前項ノ損害補償額ハ主務大臣之ヲ決定
ス其ノ決定ニ對シテ不服アル者ハ決定

通知ノ日ヨリ三月内ニ通常裁判所ニ出
訴スルコトヲ得

第十條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタ
ル國寶ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更ア

リタルトキハ新所有者ハ當該國寶ニ關
シ本法ニ規定スル舊所有者ノ權利義務

ヲ承繼ス

第十一條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依
リ必要アルトキハ主務大臣國寶保存會

ニ諮問シ國寶ノ指定解除ヲ爲スコトヲ
得

主務大臣前項ノ規定ニ依ル指定解除ヲ
爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告

示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第十二條 神社又ハ寺院(佛堂ヲ含ム以
下同ジ)ノ所有ニ屬スル國寶ハ神社ニ

在リテハ神職(官國幣社ニ在リテハ宮
司、府縣郷社ニ在リテハ社司、村社以

理ス但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ別ニ管
理者ヲ定ムルコトヲ得

第十三條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル
國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差

押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可
ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ

限ニ在ラズ

主務大臣前項ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サ
ントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベ

シ

主務大臣ノ許可ヲ受ケズシテ神社又ハ
寺院ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ又ハ

擔保ニ供シタルトキハ之ヲ無効トス

第十四條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬ス
ル國寶ヲ維持修理スルコト能ハザルト

キハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ニ
對シ補助金ヲ交付スルコトヲ得

特ニ必要アルトキハ神社又ハ寺院以外
ノモノノ所有ニ屬スル國寶ニ付前項ノ

規定ヲ準用ス

第十五條 補助金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ交
付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ精算ノ

上剩餘アルトキハ之ヲ還付セシムルコ
トヲ得

第十六條 補助金及補給金トシテ國庫ヨ
リ支出スベキ金額ハ毎年度十五萬圓以

上二十萬圓以下トス

前項ノ金額ノ外特ニ必要アルトキハ豫
算ノ定ムル所ニ依リ臨時ニ補助金又ハ

補給金ヲ支出スルコトヲ得

第十七條 國寶保存會ノ組織及權限ニ關
スル事項ハ本法ニ規定スルモノノ外勅

令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル
國寶ノ管理ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ

之ヲ定ム

第十九條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ關シ
テハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ

得

第二十條 主務大臣ノ許可ナクシテ國寶
ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ

懲役若ハ禁錮又ハ二千圓以下ノ罰金ニ
處ス

第二十一條 國寶ヲ損壞、毀棄又ハ隱匿
シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又

ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ國寶自己ノ所有ニ係ルトキハ二
年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下

ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 第四條ノ規定ニ違反シ許可
ヲ受クベキ者之ヲ受ケズシテ國寶ノ現

狀ヲ變更シタルトキハ五百圓以下ノ過
料ニ處ス

第二十三條 第六條ノ規定ニ違反シ届出
ヲ爲サザル者ハ百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十四條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳
シタル國寶ノ管理者又ハ神社若ハ寺院

ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理者怠慢ニ因
リ其ノ管理スル國寶ヲ滅失又ハ毀損ス

ルニ至ラシメタルトキハ五百圓以下ノ
過料ニ處ス

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條
乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定ス

ル過料ニ付之ヲ準用ス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

(昭和四年勅令第百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス

古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス古社寺保存法ニ依リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日勅令 第一百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス

前項ノ管理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノトス返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨

ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ

第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依ル同意ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付滅失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國ガ國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附則 本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)明治三十年勅令第四百四十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日 文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ登錄ス

第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ寫眞ヲ添付ス

- 一 建造物ノ類ニ付テハ
- 二 名稱及所在地
- 三 所有者ノ氏名(名稱)及住所
- 四 員數
- 五 構造及形式
- 六 大サ
- 六 創建及沿革

七 其ノ他參考トナルベキ事項

- 一 名稱
- 二 所有者ノ氏名(名稱)及住所
- 三 種類
- 四 員數
- 五 品質
- 六 形狀
- 七 法量
- 八 作者及傳來
- 九 其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由竝ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 國寶ノ名稱及員數
- 二 輸出又ハ移出ノ期間
- 三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地
- 四 荷造運搬ノ方法
- 五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法
- 六 保險ノ方法
- 七 模寫模造等ニ關スル約束アラバ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由竝ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

- 二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖竝ニ工事擔當者ノ氏名(名稱)
- 三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先
- 四 著手ノ時期及竣成期限
- 第六條 國寶ノ現狀變更ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞竝ニ圖面ヲ添ヘ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 國寶ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況竝ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ト引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタル

トキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依

リテ支給スベキ補給金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陣ノ命ズル都度之ヲ定ム

前項ノ補給金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依

ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ申請スベシ

一 國寶ノ名稱及員數

二 國寶ヲ出陣シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地

三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由

竝ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキ

ハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登錄ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規

定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬ス

ル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 處分ノ方法

三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ

四 處分ノ相手方ノ氏名(名稱)及住所

五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬ス

ル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 擔保ノ期間

三 擔保權者ノ氏名(名稱)及住所

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受

ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ

依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數

二 維持修理ニ要スル工費豫算、設計

仕様並ニ計畫圖及寫眞

三 著手ノ時期及竣成期限

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ

事項

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫

ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ

其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計

仕様又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕様並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ

文部大臣必要ト認ムルトキハ前項ノ規

定ニ拘ラズ設計仕様ノ變更ヲ命ズル事ヲ得

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者

ハ其ノ國寶ノ維持修理竣リタルトキヨリ二月内ニ實施仕様書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付

ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬ス

ル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬

スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陣シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 搬出ノ期間

三 搬出先ノ場所及其ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬

スル國寶ヲ撰寫模造シ又ハ撰寫模造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 撰寫模造ノ期間

三 撰寫模造ノ方法

四 撰寫模造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、

寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出す書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八

國寶保存會・重要美術品等調査委員會

條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス
國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得
第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

〔會長〕 侯爵細川護立〔委員〕 武内義雄、三矢富松、飯沼一省、横河民輔、常盤大定、神津伯、新納忠之介、芝萬盛、渡部信、福井利吉郎、瀧精一、徳富猪一郎、土屋純一、溝口順次郎、奥田誠一、伊東忠太、辻善之助、藤島亥治郎、新村出、山田洋次郎、原田淑人、古宇田實、

上野直昭、山田孝雄、梅原末治、香取秀治郎、黒板勝美、藤懸靜也、田中豐藏、阿原謙藏〔臨時委員〕 岸熊吉〔幹事〕 松下寛一、丸尾彰三郎、大岡實

重要美術品等調査委員會

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律

法律

昭和八年四月一日
法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラルル物件（國寶ヲ除ク）ヲ輸出又ハ移出セントスル者ハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、製作後五十年ヲ經ザルモノ及輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリタルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケタル占有者ハ其ノ認定アリタルコトヲ知りタルモノト推定ス

第三條 主務大臣第一條ノ規定ニ依リ許可ノ申請アリタル場合ニ於テ許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又ハ前條ノ規定ニ依ル認定ヲ取消スベシ

第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ規定ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付變更アリタル場合ノ届出ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律施行規則
昭和八年四月一日
文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號（以下單ニ法ト稱ス）第二條ノ規定ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如シ
一 繪畫
二 彫刻
三 建造物
四 文書
五 典籍
六 書蹟
七 刀劍
八 工藝品
九 考古學資料

第二條 重要美術品等ノ所有者、管理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ依リ認定（以下單ニ認定ト稱ス）ノ前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受ケントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申請スベシ
一 名稱
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所

- 三 種類
四 員數
五 品質
六 形狀
七 法量
八 作者及傳來

前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第四條 法第二條ノ規定ニ依ル認定物件

(以下單ニ認定物件ト稱ス) ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 認定物件ノ名稱及員數
二 輸出又ハ移出ノ期間
三 輸出又ハ移出港
四 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

五 荷造運搬ノ方法
六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第五條 認定物件ノ輸出又ハ移出ノ許可

ヲ受ケタル者當該物件ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第六條 認定物件ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更

ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件ヲ取得シタル者ハ當該物件ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ
認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シ

キ現狀變更アリタルトキハ所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ認定物件ノ名稱及員數ヲ具シ滅失、毀損又ハ現狀變更ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 認定物件ガ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタル

トキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

法第三條ノ規定ニ依ル認定取消ノ外認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ

現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル認定取消アリタルトキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

附 則

本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等調査委員會規程

昭八四年四月十一日
文部省訓令第九號

改正 昭和十七年三月十九日
文部省訓令第六號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ重

要美術品等ノ保存ニ關スル法律(以下單ニ法ト稱ス)第一條ノ規定ニ依リ輸出及移出ノ許可並ニ法第二條ノ規定ニ依リ認定(以下單ニ認定ト稱ス)及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依屬シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要

美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

重要美術品等調査委員會職員
(會長)侯爵淺野長武(委員)岩橋小彌太
辻善之助、神津伯、原田淑人、天沼俊一
角南隆、和田英作、黒板勝美、柴田常恵
伊東忠太、大熊喜邦、中村直勝、男爵尾
崎海盛、秋山光夫、香取秀治郎、脇本十
九郎、田中豐藏、奥田誠一、佐々木信綱
藤縣靜也、三矢宮松、關保之助、梅原末
治、石渡信太郎、阿原謙藏(臨時委員)吉
野富雄、北原大輔(幹事)青戸精一、丸尾
彰三郎、大岡貢(書記)中島孜

帝室技藝員

帝室技藝員ノ制度ハ明治二十三年十月我が皇室におかせられて、明治維新以來藝術的に衰退し經濟的に困窮してゐた當時の我が美術界振興の思召しから制定せられたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰がるべき大家を、特にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せしめ任命せられるものである。

(帝室技藝員銓衡委員)清水澄、大谷正男、瀧精一、候廣幡忠隆、候細川護立

拜命年月

日本畫	川合 玉堂	大正六年六月
同	横山 大觀	昭和六年六月
同	橋本 關雪	同九年十二月
同	安田 靱彦	同
同	菊池 契月	同
同	洋畫 藤島 武二	同
同	和洋 利田 英作	同

彫刻 山崎 朝雲 同
工藝 板谷 波山 同
同 香取 秀眞 同
同 清水 龜藏 同

帝國藝術院

帝國藝術院官制

昭和十二年六月二十四日
勅令 第一一八十八號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ
屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資
スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要
ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必
要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項
ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ
事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ
得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八
十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊
歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請
ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名ス
ル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部
內ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ
依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
第八條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部
內ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣ノ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國
美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザ
ルトキハ夫々帝國藝術院長又ハ帝國藝術
院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院 長 清水 澄
會 員 (五十番順)
朝倉 文夫 荒木悌二郎(十畝)
有島壬生馬(生馬) 石井 滿吉(柏亭)
板谷 嘉七(波山) 伊東 忠太
上村 常子(松園) 梅原龍三郎
梅若万三郎 多 忠龍
尾上 八郎(柴舟) 大熊 喜邦
香取秀治郎(秀眞) 鍋本 健一(清方)
河井 又平(醇茗) 川合芳三郎(玉堂)
川端昇太郎(龍子) 菊池 寛
菊池 完爾(契月) 北村 西望
清水六兵衛 窪田 通治(空穂)
幸田 成行(露伴) 幸田 延
國分 高胤(青屋) 小杉國太郎(放庵)
小林 茂(古徑) 小林 萬吾
小室貞次郎(翠雲) 齋藤 茂吉
齋藤 知雄(素嚴) 佐佐木信綱
佐藤 清藏 志賀 直哉
島崎 春樹(藤村) 清水 龜藏

高濱 清(虛子) 谷崎潤一郎
千葉 胤明 津田 信夫
徳田 末雄(秋聲) 徳富猪一郎(蘇峰)
宮本 憲吉 内藤 伸
中澤 弘光 中村 不折
西山卯三郎(翠嶂) 橋本 關一(關雪)
平櫛倬太郎(田中) 藤井 浩祐
藤島 武二 藤田 嗣治
豐 時義 寶生朝太郎
前田 廉造(青邨) 正宗 忠夫(白鳥)
松林 篤(桂月) 眞山 彬
南 薫造 三宅雄二郎(雪嶺)
武者小路實篤 安井曾太郎
安田新三郎(靱彦) 山崎 朝雲
山下新太郎 山本 勇造(有三)
結城 貞松(素明) 横山 秀磨(大親)
六角注多良(紫水) 和田 英作
和田 三造

主 事 文部書記官 松下 寛一

文部省美術展覽會

文部省美術展覽會ハ、明治四十年制定
された美術審査委員會官制に基き同年第
一回を開催、爾來毎年開催して十二回に
及んだが、大正八年同官制を廢止して帝
國美術院規程を制定、同年以後帝國美術
院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十
五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改
組し新に帝國美術院官制を制定、同十一
年春第一回帝國美術院展覽會を開催した
が繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年
文部省美術展覽會を開催、同十二年六月
帝國美術院を廢止して帝國藝術院官制が

公布されるに及び、展覽會は舊の如く文
部省の主催として同年第一回展覽會を開
催、以後繼續することとなつた。

文部省美術展覽會規則

昭和十二年九月十一日
文部省告示第三百十九號
昭和十三年八月三十一日
文部省告示第三百三號

第一章 總 則

第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定
ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場
會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左
ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、パステ
ル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキ
モノトス

前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ
各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ専門技
術ニ依ル作品ニ限り無鑑査ニテ陳列ス
ルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製
作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノ
トス

一 帝國藝術院會員

二 文部省美術展覽會審査員

三 無鑑査ト認メラレタル者

第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑
査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス

第五條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理

スル爲審査員長及審査員ヲ置ク
審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ

審査員ハ文部大臣之ヲ依屬ス

第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列ス
ベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀
ナルモノヲ選定ス

第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ
依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス
審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ任命ス
審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ

第二章 出 品

第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シ
タルモノニ限ル

故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相続人ニ
於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者
ト實利製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキ
ハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキ
ハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト
爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏
名ヲ附記スルコトヲ得

第十條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付各
部共一點トス

第十一條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同
一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベ
キモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖
モ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作
品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一
點ト看做ス

第十三條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ
各號ニ依ル

一 第一部ハ縱十尺横七尺以内(裝飾
設備ヲ含ム)トス

二 第二部ハ五十號以内トス

三 第三部ハ制限ナシ

四 第四部ハ立體ニ在リテハ六尺平方
以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノトシ其
ノ他ニ在リテハ縱六尺横六尺以内
(裝飾設備ヲ含ム)トス

第十四條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年展
覽會開催ノ都度之ヲ公告ス

第十五條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品ス
ルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上ヲ經タルモノ
二 既ニ帝國美術院美術展覽會及文部
省美術展覽會ニ陳列シタルコトアル
モノ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ
第十六條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セ
ントスル者ハ金一圓ノ手数料ヲ納入ス
ベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アル
モ之ヲ還付セズ

第十七條 出品セントスル者ハ所定書式
ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ提
出スベシ故人ノ作品ヲ出品セントスル
トキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏
名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル
紙片ヲ裏面ニ貼附スベシ

第十八條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受理
シタルトキハ直チニ受領書ヲ交付ス

第十九條 受理シタル作品ハ撤回スルコ
トヲ得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タル
トキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十條 第一部第二部ノ作品ハ額面ト
爲シ裱縁ヲ附ス等出品人ニ於テ適當ノ
裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十一條 出品人ハ陳列品ノ位置、配
列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十二條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ
出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル
出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其
ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十三條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ
充分ノ注意ヲ爲スト雖モ紛失、毀損、
其ノ他ノ損害ニ對シ一切責任ニ任ゼズ

第二十四條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品
人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クル
ニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作
品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキ
ハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受
クベシ

文部省ハ作品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之
ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査
第二十五條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員
長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ
特選ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十七條 鑑査及審査ノ結果ハ審査員
主任ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第二十八條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ
異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出
第二十九條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ

其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開
會後五日間陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハ
ズ

第三十條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ
代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベシ

第三十一條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルト
キハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ
得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上ト
ス 前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金
ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ抛
棄シタルモノト看做ス但シ抛棄シタル
手附ハ當該出品人ノ所得トス

第三十二條 第三十條ニ依ル代金及第三
十一條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終了
後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十三條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ
作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十四條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價
ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ
届出ヅベシ

第三十五條 出品人ニ於テ作品及代金受
領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ
其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅ
ベシ

第三十六條 陳列品ハ展覽會終了後三日
以内ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ文部
省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列スルコトニ決定シタル
作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ
經過シタル後十日以内ニ出品人ニ於
テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十八條 陳列品中賣約済ノモノハ展覽會終了後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十九條 展覽會終了後陳列品ノ搬出

運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀 覽

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九

時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊

ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

貿易局工藝品輸出振興展覽會

從來開催され來つた商工省工藝展覽會は昭和十三年度第二十五回を重ね、又貿易局輸出工藝展覽會は第六回まで繼續されたが、十四年度より兩者を合併し新に貿易局工藝品輸出振興展覽會として第一回を開くことになつた。

貿易局工藝品輸出振興展覽會規程

昭和十四年八月二十五日
商工省告示第二百七號

昭和十六年
商工省告示三百六十五號改正

第一章 總 則

第一條 工藝品ノ輸出振興ヲ圖ル爲毎年

一回貿易局工藝品輸出振興展覽會ヲ開ク

前項ノ展覽會ノ會期、會場其ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第一條ノ二 本會ニ左ノ二部ヲ置ク

第一部 機械の工藝品

第二部 手工の工藝品

第二條 出品物ハ工藝品ニシテ自己ノ製造若ハ加工シタルモノ又ハ自己ノ爲製造若ハ加工セシモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ鑑査ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導又ハ研究ノ機關（學校ヲ除ク）ノ出品ニ係ルモノ

二 審査委員又ハ本會、工藝展覽會若ハ貿易局輸出工藝展覽會ノ審査委員タリシ者ノ出品ニ係ルモノ

三 本會ニ於テ商工大臣賞ヲ授與セラレタルコトアル者ノ出品ニシテ當該褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノ

四 貿易局輸出工藝圖案展覽會ニ於テ一等賞、二等賞又ハ三等賞ヲ授與セラレタル圖案ヲ試作シタルモノ

五 審査委員ノ推薦ニ係ルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費

用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外ハ其ノ責ニ任ゼズ

第六條 本會ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ模寫スルコトヲ得ズ

本會ハ出品物ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出 品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 本會、工藝展覽會、貿易局輸出工藝展覽會、其ノ他博覽會、共進會又ハ展覽會（本會ニ對スル出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開ク展覽會ヲ除ク）ニ陳列セラレタルコトアルモノ

二 風教ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ出品申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ

出品申込書ノ差出期間及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領證ヲ交付ス

第十條 鑑査ニ不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ十日ヲ經ルモ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ會期中之ヲ搬出スルコトヲ得ズ

第三章 鑑査及審査

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノトス但シ第三條第一號乃至第四號ニ該當スルモノニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十四條 鑑査及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一人ヲ命ズ

審査委員長ハ鑑査及審査ノ事務ヲ統理シ其ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工大臣ニ報告ス

第十六條 出品物鑑査ノ結果ハ之ヲ出品人ニ通知ス

第十七條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 褒 賞

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物ノ出品人ニ對シ褒賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ四等級トス

一等賞
二等賞
三等賞
褒 狀

第二十條 第十八條ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二十一條 第十八條ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ノ中特ニ優等ト認メタル出品物ノ出品人一人ニ對シ褒賞又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與スルコトアルベシ

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 外國ニ於ケル陳列會

第二十三條 商工大臣ハ審査委員ニ諮リ陳列品ノ一部ヲ選定シ政府又ハ其ノ指定スル團體ガ外國ニ於テ開催シ又ハ參加スル陳列會展覽會又ハ博覽會ニ本會會期終了後出品人ヲシテ出陳セシムルモノトス

第二十四條 出品人ハ前條ノ出陳ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ本會會期終了後政府ニ於テ之ヲ保管スル場合ノ外政府ノ指定スル團體ニ之ヲ引渡スモノトス

第二十六條 第二十三條ノ陳列會展覽會又ハ博覽會ノ名稱、開催地其ノ他陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ關シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第六章 雜則

第二十七條 陳列品ハ非賣品及第二十三條ニ依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ陳列品ノ賣買契約ヲ爲サントストキハ本會ノ承認ヲ受クベシ

第二十八條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上トス
手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルト

貿易局輸出工藝圖案展覽會

キハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該出品人ノ所得トス

第二十九條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

(附屬様式) 以下略

貿易局輸出工藝圖案展覽會

昭利十四年四月
商工省告示第八十二號

第一章 總則

第一條 輸出工藝品圖案ノ改善進步ヲ圖ル爲毎年一回貿易局輸出工藝圖案展覽會ヲ開ク

本會ニ左ノ二部ヲ置ク

第一部 一般輸出工藝品圖案

第二部 特定地向輸出工藝品圖案

展覽會ノ會期會場其他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ輸出工藝品圖案ニシテ自己ノ考案シタルモノ又ハ自己ノ爲考案セシメタルモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限り之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ鑑査ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官立ノ指導又ハ研究機關(學校ヲ除ク)ノ出品ニ係ルモノ
二 審査委員又ハ審査委員タリシ者ノ出品ニ係ルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失毀損汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ其ノ責ニ任ゼズ

第六條 本會ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ摸寫スルコトヲ得ズ

本會ハ出品物ヲ撮影若ハ摸寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 本會其ノ他博覽會、共進會又ハ展覽會ニ陳列セラレタルコトノアルモノ(但シ本會ニ對スル出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開ク展覽會、品評會ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ)

二 風教ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ出品申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ

出品申込書ノ差出期間及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領證ヲ交付ス

第十條 鑑査ニ不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ二十日ヲ經ルモ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ開會中ニ搬出スルコトヲ得ズ

第十三條 鑑査及審査

第十四條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベシモノトス但シ第三條各號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十五條 鑑査及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十六條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一名ヲ命ズ

第十七條 審査委員長ハ鑑査及審査ノ事務ヲ統理シ其ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工大臣ニ報告ス

第十八條 出品物鑑査ノ結果ハ之ヲ出品人ニ通知ス

第十九條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 褒賞及協贊賞

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物ノ考案者ニ對シ褒賞ヲ授與ス

前項ノ考案者ガ出品人ニ非ザル場合ニ於テハ其ノ出品人ニ協贊賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ四等級トス

一 等賞

二 等賞

三 等賞

褒賞

第二十條 第十八條第一項ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス

九

第二十一條 第十八條第一項ノ規定ニ依

リ褒賞ヲ受ケタル者ノ中特ニ優等ト認

メタル出品物ノ考案者一人ニ對シ褒賞

又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與スルコ

トアルベシ

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十三條 第十八條第一項ノ規定ニヨ

リ一等賞、二等賞又ハ三等賞ヲ授與セ

ラレタル者ハ當該圖案ヲ試作シ之ヲ貿

易局長官ノ指定スル展覽會ニ出品スベ

シ

前項ノ考案者ニシテ前項ノ出品ヲ爲サ

ザルモノハ貿易局長官ニ其ノ指定スル

期日迄ニ事由ヲ具シ其ノ旨届出ツベシ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テ考案者出

品ヲ爲サザルモノト認メタルトキハ貿

易局長官ノ指定スル者ニ當該圖案ヲ試

作セシメ之ヲ展覽會ニ出品セシムルコ

トアルベシ

前項ノ場合ニ於テハ考案者又ハ出品人

ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條及前條第一項ニ

於テ考案者トアルハ考案者出品人ニ非

ザル場合ニ於テハ之ヲ當該圖案ノ出品

人トス

第五章 雜 則

第二十六條 陳列品ハ非賣品及第十八條

ノ規定ニ依ル受賞(一等賞、二等賞又

ハ三等賞ニ限ル)ニ係ルモノノ外購買

ノ申込ニ應ズルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取

扱フ

第二十七條 陳列品ヲ購買セントスル者

ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附

金ヲ支拂フベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上ト

ス

手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後

十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルト

キハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看

做シ當該賣主ノ所得トス

第二十八條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ

本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベ

シ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易

局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベ

シ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントス

ルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證

ヲ差出スベシ

(附屬様式) 以下省略

美術研究所

東京市下谷區上野公園

電 下 谷 三 四 八 七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きそ

の遺産を以て開始されたもので、昭和五

年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行

人より建物、諸設備及事業の一切を政府

に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國

美術院附屬として設置した。昭和十年六

目的は美術に關する事項の學術的調査研

究に在り、傍ら美術に關する研究資料を

蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんと

し、又調査研究の結果を出版、展覽、講

演等に依つて發表せんとするものである。

現在著手しつゝある事業は大略次の

如くである。

一、研究資料蒐集

美術品の寫眞其の他の複製、模寫模造

等の標本、圖書雜誌其の他の資料

一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査

研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東

洋美術家辭典、美術關係史料、美術關

係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本

美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法

及材料に關する調査研究

一、刊行物頒布

「美術研究」隔月發行、「日本美術年鑑」

「日本美術資料」毎年一回刊行、其の他

隨時「美術研究資料」、「研究報告」を

刊行頒布する。

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作

品を陳列して(定時毎週木曜日午後)

に公開する。

〔所長事務取扱〕田中豐藏〔所員〕田澤坦

隈元謙次郎〔助手〕中川千咲、河北倫明、

黒川光朝〔書記〕今岡孝康〔囑託〕田中喜

作、菅沼貞三、大給近清、中根勝、岩淵

幸左衛門、渡邊一、梅津次郎、白畑よし

石澤正男、丸尾彰三郎、富永惣一、望月

信成、福井利吉郎、兒島喜久雄、山田智

三郎、須賀利雄、筒崎謙齋、吉川逸治、

守中裕幸、大串純夫、秋山光利、根本新

助、小山富士夫

美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百十八號

改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ

屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌

ル

第二條 (削除)

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員 專任三人 奏任

助手 專任三人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之

ヲ補ス

所長ハ文部大臣ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌ル

第五條 所員ハ所長ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌

ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ

従事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ
從事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東京美術學校

東京市下谷區上野公園
電下谷八〇二〇—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、文部省専門學務局長濱尾新が學校長事務取扱を命ぜられ、同十二年二月授業を開始した。同二十三年濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教授が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年和田英作これに代り、次いで同十一年には芝田徹心學校長に任ぜられ、同十五年澤田源一學校長に任ぜられた。

本校の學科を本科（豫科、研究科を置く）と師範科（研究科を置く）とに分ける。尚選科、聽講生の設置あり。

（本科）日本畫科、油畫科、彫刻科（塑造部、木彫部）工藝科（圖案部、彫金部、鍛金部、鑄金部、漆工部）及び建築科に分つ。修業年限四年。入學資格豫科修了者、授業料年額八十圓。在學中特定の學科目を修了したる者に中等教員無試験檢定の特典あり。

（豫科）修業年限一年。入學資格中學校四年修了者、高等學校尋常科修了者、高等

等學校高等科入學資格試驗合格者。授業料年額八十圓。實技及學科の入學試験を行ふ。檢定料五圓。

（師範科）修業年限四年。入學資格中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學試験を行ふ。檢定料五圓。

（研究科）實技、學術の二部に分つ。修業年限三年以内。入學資格、實技は本校卒業後二年を経過せず且卒業成績八十點以上の者、學術は本校卒業業者。授業料年額五十圓。

（選科）本科入學資格を有せざる者にして本科各科の實技のみを學習せんとする者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せず。授業料年額八十圓

（聽講生）生徒以外の者にして本校に於て教授する學科目中一科若くは數科を選び學習せんとする者は教授上差支なき場合に限り考査の上出席を許可す。聽講料一學年間一科目に付二十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十七年四月一日に於ける各科豫科及師範科一年の生徒數は左の如くである。

〔日本畫科〕 二〇名〔油畫科〕 三四名
〔彫刻科〕 塑造部一五名、木彫部七名
〔工藝科〕 圖案部一四名、彫金部三名、鍛金部三名、鑄金部六名、漆工部八名
〔建築科〕 七名〔師範科〕 二二名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展觀を試み、何れも生徒學習の參考に

東京美術學校—東京高等工藝學校

資する。

〔校長〕澤田源一〔名譽教授〕和田英作
〔教授〕藤島武二、結城貞松、森井健介、多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小林萬吾、津田信夫、清水龜藏、朝倉文夫、北村西望、南薰造、和田三造、香取秀治郎、石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉勝樹、海野清、關野金太郎、高村豐周、廣川松五郎、松田義之〔生徒主事〕佐々木卓、森田龜之助、多賀谷健吉、北村西望、南薰造〔事務官〕北浦大介〔助教〕松垣龜雄、水谷武彦、松田權六、山田廉、岡四郎、森田武、山崎覺太郎、金澤庸治、常岡文龜、伊原宇三郎、丸山義雄、西田正秋、入谷昇、羽下修三、深瀬嘉臣、内藤春治、八田辰之助、羽野禎三、磯矢陽

工藝技術講習所

東京美術學校内

昭和十五年十月十四日勅令第七百六十九號を以て官制を公布、差當り東京美術學校に於て授業を行ふ。

工藝技術講習所官制

第一條 工藝技術講習所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ工藝ニ關スル技術ノ教授ヲ掌ル

第二條 工藝技術講習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長	教授	助教	助手
專任二人	專任二人	專任三人	專任二人
奏任	奏任	判任	判任

書記 專任一人 判任

第三條 所長ハ文部部内ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授及助教ハ生徒ノ教育ヲ掌ル

第五條 助手ハ教授又ハ助教ノ指揮ヲ承ケ授業及實習ノ補助ニ從事ス

第六條 書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第七條 所長ハ文部大臣ノ許可ヲ得テ講師ヲ囑託シ授業ヲ擔任セシムルコトヲ得

〔所長〕澤田源一〔教授〕津田信夫、森田武

東京高等工藝學校

東京市芝區新芝町
電三田一一五六—八

本校は大正十年十二月の設立に係り、松岡壽初代の校長に任ぜられ翌十一年開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造、同十六年鈴木京平が校長に任ぜられて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科、造型工藝部金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科（寫真部を含む）に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝

別科を設置す。

尙昭和十二年十月一日より工業學校實習指導員養成科を設置した。

(本科) 修業年限三年。入學資格中學卒又は専檢合格者。授業料年額八十圓。

(研究生) 修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業生。授業料年額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内。入學資格工業學校、中學校卒業生は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

(聽講生) 聽講料一學科一學期十圓

(木材工藝別科) 修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業生、又は中學校卒業生(作業科工作修得) 授業料年額五十圓。

(工業學校實習指導員養成科) 修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經歷を有する者。學資は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。

本科生徒數

工藝圖案科	六二名
造型工藝部	一九名
金屬工藝科	七九名
精密機械科	二一九名
木材工藝科	七四名
印刷工藝科	六三名
寫真部	三〇名
木材工藝別科	二九名
工業學校實習指導員養成科	三三名
(校長) 鈴木京平	

(生徒主事) 教授 近藤春文(工藝圖案科) 教授 宮下孝雄、築島棟吉、杉山豊

桔(造型工藝部) 教授 畑正吉、寺畑助之丞(金屬工藝科) 教授 豊田勝秋、益田

森治(精密機械科) 教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本字一、長谷川一郎(木材

工藝科) 教授 木槍想一、西海幸一郎、野村茂治(印刷工藝科) 教授 鎌田彌壽

治、伊東亮次、岡利亮(寫真部) 教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、久米福衛(木材工藝別科) 教授 木槍想一、築

島棟吉(共通學科) 教授 江崎歡藏、岡田桶次郎、和田香苗、馬場秋次郎、村尾力太郎

京都高等工藝學校

京都市左京區松ヶ崎御所海道町
電上五七、五〇〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴巻鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任せられ現在に至る。

(學科) 色染科、機械科、圖案科、窯業科を置く。尙昭和十四年四月より精密機械科、人造纖維科の二學科を新設した。

(本科) 修業年限三年。入學資格中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料年額八十圓。

(研究生) 本校又は他の實業專門學校卒業生が既修の學科目を更に研究しようとする場合詮議の上二箇年以内在學を許可されるもの。授業料年額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内。授業料一

科目に付年額十圓。

(校長) 村上宇一(名譽教授) 中澤岩太會田龍雄(教授) 村上宇一、本野精吾、古城鴻一、霜島正三郎、小島幸三郎、目

賀田廉一、山上操、藤野清久、向井寛三郎、田中隆吉、平岡尙、青武雄、荒木長

治、湯淺南海男、山田隆、高辻幸之助、鳴智恵人、河村正義、藤田畔二、青木一

郎、淺尾健次、鹿野治助、菊池武勝、齋藤義一、脇村利一郎、立入明、實藤玄、町田誠之

本科生徒數

色染科	七九名
機械科	八四名
圖案科	一〇一名
窯業科	八四名
精密機械科	一七四名
人造纖維科	九一名

京都市立繪畫專門學校

京都市東山區今熊野日
吉町 電祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校令」據り日本畫及圖案ヲ攻究セントスル者又ハ圖畫教員ヲラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施ス」ことを目的とする。

初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舎を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

(學科) 日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

(豫科) 修業年限日本畫科二年。圖案科一年。入學資格中學卒、専檢合格者。授業料年額(市内) 五十五圓(市外) 七十二圓五十錢

(本科) 修業年限日本畫科、圖案科共三年。入學資格同校豫科修了者。授業料豫科に同じ。

(研究科) 在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の專門學校卒業生。授業料年額(市内) 四十五圓(市外) 六十二圓五十錢

(豫科) 入學資格高等小學卒業生及之と同等以上の學力を有する者。授業料年額四十圓(京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢)

(校長) 中井宗太郎(教授) 入江波光、宇田萩郎、案本一洋、中村大三郎、石崎光瑤、柳原繁峰、宇都谷誠太郎、塩津眞二、加藤一雄

京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日
吉町 電祇園一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舎を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要な

る技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科、漆工科の四科とし修業年限を五箇年とす。入學資格は國民學校初等科卒とし、授業料は京都市内在住者は一箇年四十五圓其の他は六十圓五十錢である。

〔校長〕中井宗太郎〔實習科受持〕〔繪畫科〕入江波光、勝田哲、登内微笑、西村卓三、多田敬一、小宮信一、辻宇佐雄前田萩郎、猪原大華〔圖案科〕千熊宇平山鹿清華、田村春曉、山田江秀、片山行雄、丸毛又三郎、田ノ口青晃、太田喜二郎〔彫刻科〕松田尙之、矢野判三、北村西望、太田喜二郎

工藝指導所

東京市豊島區西巢鴨一丁目 電大塚六三—五
〔關西支所〕 大阪市西區江ノ子島上ノ町 電土佐堀六六—八
〔仙臺支所〕 仙臺市二十人町 通電 三七六〇

本所は商工省所管に屬し、我國固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」目的を以て昭和三年設置された。當初商工省内に假事務所を設け、同年十一月仙臺市に建築中の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始したが、其の後事業の進展に伴ひ東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に本所出張員事務所を設け當時所員を駐在せしむる事となつた。昭和十二年八月には官制の改正に依り、「木工及金屬工品」を「工藝品」に改め職員を増員し、必要と認められる

工藝指導所

地に支所を置き事務を分掌せしむることとなつた。

尙輸出工藝雜貨改善に關する調査研究並に關西支所設置準備事務取扱の爲大阪府工業獎勵館内に當所出張員事務所を設け昭和十四年一月より事務を開始しつゝ、あつたが、同年八月大阪府江の子島に關西支所を設置され、昭和十五年十一月には職員を増員と共に、商工省告示を以て工藝指導所本所を東京市に移轉、又仙臺市に東北支所を設置された。東京本所は企画部、研究部、指導部、庶務課の三部一課を置き、關西東北兩支所と共に三位一體となり一層本邦産業工藝の積極的改善指導に邁進、現在に至つた。

業務一般

一 調査研究

主として内外工藝情況に關する基礎的調査、工藝品の原材料・技術・意匠工具・機械に關する技術的調査、國內市場商品・生産・需要現況の調査、内外優良參考品の蒐集

二 試験研究

工藝品の基礎的改善のために必要なる一切の技術的研究、市販賣品改善に必要な各種試験並びに實驗試作研究

三 研究試驗

研究試驗實驗に必要な各種モデルの試作、その結果に基づき各種工藝品を試作し、工業的生産のために規範的原型を提供す

四

講習、講演、審査査その他の實地指導、當所の指導方針、試験研究、調査

の結果に基づき、講習、講演會を開催し又は申請により地方講習、講演會又は審査査のため職員を派遣し、實地指導をなす

五 地方工業化促進

當所の研究、試作の成果が工藝品の改善發達に對し、基礎的一般的なる場合は全國的普及を圖り、又特殊又は地方的なるものを目標とせる場合は、當該指導機關に移讓實施を促し全國的指導及全國的地方工業化を圖る。

六 製作加工圖案調製應需

依頼により工藝品の製作加工、又は意匠圖案の調製に應じ、又當所の研究に基く試作品及圖案の配布をなす。

七

製品、圖案、參考品の貸與及展示、本所の研究、試作、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し、或は展覽會、博覽會に出品す

八

傳習生及研究生の養成全國斯業の發達向上、近代化を目的とし、工藝各方面の業者及び子弟並に工業從業者に對し實務に必要な技術及び知識を短期間に修得せしむ

九

質疑應答工藝品の原材料、技術、工具、設備意匠、傾向その他工藝に關する質問に對し、口答又は文書を以て應答、業者を啓發指導す

一〇

設備貸與當業者の試験研究又は製品加工のため申請あるときは當所作業に支障なき限り、設備を貸與、便宜を圖る

一 刊行物の頒布

本所の試験研究及び調査に基き月刊「工藝ニュース」を編輯、その他不定期に「工藝資料」をまた年刊として年報を發行、各關係方面に頒布す

二 各方面との聯絡

地方各指導機關其の他關係諸方面との聯絡を圖つて、研究試驗其の他の重複、不統制を避けしめ、又各方面の力を集衆して指導計畫の綜合的效果的立案を圖る

一三 一般指導發達

適切なる方法に於て一般大衆の工藝への關心を鼓吹し、又工藝知識の普及、趣味の涵養を計り、以て工藝的水準の高揚を期すると同時に海外に我が工藝の特質、長所の宣傳啓蒙に當り、以て彼等の認識理解を深むるに努む

工藝指導所官制

昭和十五年十一月十九日勅令七百七十號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

一 工藝品ニ關スル試験及研究

二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 工藝品製作ニ關スル傳習及講習

四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品並ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル

工藝指導所—陶磁器試験所

ル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ
原型ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要
アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作
竝ニ其ノ意匠圖案及其ノ原型ノ調製ノ
依頼ニ應スル事ヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任 十一人 奏任

屬 專任 三人 判任

技手 專任 十六人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承
ケ所務ヲ掌理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌
ル

第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從
事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ
從事ス

第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工
藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分
掌セシムルコトヲ得

附則 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工省内臨時職員設置制抜萃

昭和十七年勅令第
四百六十八號改正

第二十條 不足物資ノ補填ニ關スル事務
ニ從事セシムル爲工藝指導所ニ左ノ職
員ヲ置ク

技師 專任二人

屬 專任一人

技手 專任五人

同所處務規程抜萃

第一條 工藝指導所ニ企畫部、研究部、
指導部及庶務課ヲ置ク

第二條 企畫部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝技術改善ニ關スル計畫ノ設定
ニ關スル事項

二、内外工藝狀況ノ調査及資料ノ蒐集
ニ關スル事項

三、工藝ニ關スル研究機關トノ連絡ニ
關スル事項

第三條 研究部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝品ニ關スル基礎的試験及研究
ニ關スル事項

二、工藝品ノ意匠圖案ノ調製及其ノ原
型ノ製作ニ關スル事項

三、工藝品ノ製作ニ關スル事項

四、工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
ニ關スル事項

第四條 指導部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、試験研究ノ爲製作シタル工藝品並
ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル
其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ原型
ノ配布ニ關スル事項

二、工藝品ノ製作ニ關スル實施指導ニ
關スル事項

三、工藝品ニ關スル講習及講演並ニ工
藝品ニ關スル展示會ニ關スル事項

四、傳習生ノ養成ニ關スル事項

第五條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
(以下略)

第六條 工藝指導所支所ニテ所長ヲ置ク

支所長ハ所長ノ指揮監督ヲ承ケ支所全
般ノ事務ヲ處理ス

第七條 所長處務細則又ハ支所ノ處務規
程ヲ設クルトキハ商工大臣ニ報告スベ
シ、之ヲ變更スルトキ又同ジ

第八條 所長試験又ハ鑑定ノ成績書ヲ作
製スルトキハ其ノ擔任者ト共ニ之ニ署
名又ハ捺印スヘシ

第九條 所長ハ毎年事業ノ成績ヲ商工大
臣ニ報告スヘシ

職員

東京

(技師) 所長・國井喜太郎、齋藤信治、
寺坂毅(屬) 阿久津保太郎(技師) 中山
修三、小池新二、福岡健太郎、西川友武
藤井左内、渡邊金三郎(兼任技師) 谷内
治橋、小森弘業(屬) 利久徳治郎

關西 支所

(技師) 支所長・豊口克平、八井孝二
(兼任技師) 杉本俊三(屬) 東海林榮
東北 支所

(技師) 支所長・松崎福三郎、安倍郁二
(屬) 苦米地竹次郎

陶磁器試験所

京都市伏見區深草正覺町
電話 祇園 一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並に
その輸出増進を圖る爲の國立研究指導機
關である。大正八年京都市より、元京都
市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業
の一切を政府に寄附移管し、時の農商務
省所管としたもので後に商工省の所管と

なり現在に至つて居る。而して昭和八年
度、政府に於て國策として工藝振興に關
する經費を新に支出することになつた
が、この際偶々瀬戸市に計畫された市立
窯業試験所の土地、建物その他諸設備一
切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器
試験所瀬戸試験場として當所に於て經營
することになつた。

陶磁器試験所官制

大正八年四月五日
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理
ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 陶磁器ニ關スル試験及研究

二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及
加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試験研究成
績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合
ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコ
トヲ得

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任一〇人 奏任

屬 專任二人 判任

技手 專任一人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工
大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部、第四部、瀬戸試験場及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第四部ニ於テハ特殊陶磁器ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得

一、同所製品配付及受託製作規則拔萃

一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケンツル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一、品種及數量

二、代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三、引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程拔萃

一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ

一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス 一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試験場

瀬戸市西茨町
電瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

陶磁器試験所職員

(技師) 所長・秋月透、瀬戸試験場長・中根俊雄、磯松嶺造、水町利三郎、藤井兼壽、澤村滋郎、梶崎千代利、三津木力保野福田郎(屬) 滑川正雄、渡邊嘉昭

帝室博物館

東京市下谷區上野公園
電下谷六、一九九〇、四六〇一

同館の創立は明治五年正院に於ける博覽會事務局の設置に始まり、其後同局を博物館と改稱し内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省へ移管となり、事務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天産の五部を設け、三十三年現稱に改められた。天産部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年從來の歴史課、美術課を廢し列品課に改め、別に學藝課を新設した。陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興興業會の復興大工事が七年を閲して昭和十二年に竣工し、同年獻上せられ、同十三年十一月開館された。建物ハ地上二階、地下二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶器、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙本館開館と共に從來の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能果すことになつた。

又構内には公爵九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公爵記念館及應舉館がある。前者はもと東京赤坂なる九條公爵邸内の前公爵道實の居室で、昭和九年道秀が宮内省に前公爵の記念として獻納した。總坪凡そ四十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の間の通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の著色四季樓閣山水圖が描かれこれはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間に松梅笹稚松が、二の間に蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。

又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一晴雨天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代の遺構で、扉

に四天王を、内部壁板に般若十六善神を
畫き、石臺には十六善神の彫刻がある。

〔總長〕渡部信〔事務官〕藤井宇多治郎

〔鑑査官〕溝口禎次郎、秋山光夫、三條

西公正、石田茂作、矢島恭介、小林剛、

野間清六、鷹巢豐治、運實重康〔御用掛〕

溝口三郎〔鑑査官補〕高橋勇、高橋直一

尾崎元春、田中作太郎、金森邇、關根龍

雄、堀江知彦、近藤市太郎、藤岡了一、

岡田讓、藏田藏、松下隆章、神林淳雄、澁

江二郎、守田公夫、岡田敬男〔顧問〕男

爵郷誠之助、清水澄、澤田源一、羽田享、

菊池豐三郎、飯沼一省、阿原謙藏、池内

宏、侯爵徳川義親、侯爵細川護立、侯爵

前田利爲、加藤正治、子爵岡部長景、松

本俊一、瀧精一、伊東忠太、黒板勝美、

男爵大倉喜七郎、男爵團伊能、杉榮三郎、

大橋新太郎、横河民輔〔學藝委員〕奥田

誠一、藤懸靜也、香取秀治郎、關保之助、

入田整三、吉野富雄

〔觀覽日〕一月三日より十二月廿五日迄

午前九時より午後四時迄、但し季節により

多少伸縮す。〔觀覽料〕大人十錢、小人

五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人

三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料。

帝室博物館官制

大正十年十月六日皇室令第十四號
改正大正十三、十四年、昭和十三年第八號

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ

屬シ古今ノ美術品ヲ蒐集シテ公衆ノ觀

覽ニ供シ兼テ美術ノ發達ニ資スル事業

ヲ行フ所トス

第二條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ

置ク

第三條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク

總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬

技手

第四條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及

正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員

ヲ監督ス

第五條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務

ヲ分掌ス

第六條 鑑査官ハ專任九人奏任トス美術

品ノ鑑査解說陳列及保存ノ事ヲ分掌ス

第七條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助

ク

第八條 屬ハ判任トス庶務ニ從事ス

第九條 技手ハ判任トス技術ニ從事ス

第十條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク

館長ハ事務官ヲ以テ充ツ館務ヲ掌理シ

所部職員ヲ監督ス

帝室博物館顧問

昭和十三年十一月七日
宮内省令第八號

宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク

顧問ハ帝室博物館ニ關スル重要ナル事

項ニ付宮内大臣ノ諮問ニ應ス

顧問ハ二十五人以上以内トシ宮内大臣ノ奏

請ニ依リ之ヲ命ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル

爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ

定ムル所ニ依ル

第二條 寺社其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄

託セムトスルトキハ寄託期間ヲ定メ書

面ヲ以テ帝室博物館總長又ハ奈良帝室

博物館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新

セムトスルトキ亦同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領

シタルトキハ附錄様式ノ受託證書ヲ交

付シ返還スルトキハ之ヲ引換フヘシ

受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書

ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押捺ス

第四條 受託物ハ受託期間内ト雖モ之ヲ

返還スルコトアルヘシ

受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ

因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三

十日ヲ限リ之ヲ返還スルコトアルヘシ

前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得

サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコト

ヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月

ニ社寺交附金ヲ交附ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル

荷造費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之

ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル寄託物

ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限り寄

託者ノ申出ニ限リ帝室博物館ニ於テ其

ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコ

トアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託

物ノ修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場

所ニ於テ之ヲ行フモノトシ帝室博物館

總長〔奈良帝室博物館ニ在リテハ同館

長〕之ヲ監督ス

前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該

社寺帝室博物館總長〔奈良帝室博物館

ニ在リテハ同館長〕ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管

ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗

力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキ

ハ此ノ限ニ在ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大

臣ノ認可ヲ經テ帝室博物館總長之ヲ定

ム

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳センコ

トヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出

ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキ

ハ其ノ品名形狀傳來等ヲ詳記シ且略圖

ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出陳ヲ承認シタルトキハ

物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任

ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失

毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ

支辨スヘシ

第五條 出品ヲ摸寫模造若ハ撮影センコ

トヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ

得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品

集合全體ノ形狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニ

アラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモ

ノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕

ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス

預期間ノ計算法ハ現品ノ領收カ六月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ受預シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書ノ表面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ若ハ本館ノ都合ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セサル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

恩賜京都博物館

京都市東山區大和路通七條上ル 電報局五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。廿五年工事に着手し廿八年竣工、三十年五月開館した。其の後官制改革により京都帝室博物館と改稱。大正十三年今上陛下の御成婚に際し思召を以て宮内省より京都市に下賜され、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬する事となつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供してゐる。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して左の如く部門を別けて居る。歴史部(一)、圖書二部、古代遺品 三、祭祀宗教關係品 四、武器 五、禮式風俗關係品 六、貨幣、度量衡、信印)美術部(一、繪畫 二、書蹟 三、彫刻 四、建築) 美術工藝部(一、金屬品 二、窯製器 三、漆製品 四、織繡品 五、玉石甲角竹木品 六、紙革品 七、寫眞並圖繪)。現在の列品點數三千百三十四點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又年に數度特別展覽會又講演會等を開催する。

陳列館は九百十二坪、敷地總坪一萬六千二百坪、館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、講演會場に充ててゐる。

〔館長〕則包末廣(學藝委員) 猪熊淺磨 小山源治、猪熊信男、加藤修、源豐宗、水町利三郎、明石國助、植中直右郎(主事) 棚田嘉藏(鑑査員) 松木聰二郎、土居次義、神田松之助、景山耕四郎

(觀覽日) 一月五日より十二月二十五日迄。(觀覽料) 大人二十錢、小人十錢(特別觀覽料) 一人一點一圓、團體(二十人以上) 大人一人十錢、小人五錢

大禮記念京都美術館

京都市左京區岡崎公園 電上六七〇〇、七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉るため京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市並に同館主催の美術展覽會を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。尙十五年七月より明治以降の新美術品の陳列を開始し、毎月陳列品替を行ふ。本館は二階建鐵筋混凝土造にして建坪千四百八坪延坪二千八百三十二坪。

〔館長〕事務取扱・大石右一(顧問) 飯田新七(評議員) 西山卯三郎、太田喜二郎、植田壽藏、清水六兵衛、菊地完爾、中井宗太郎、安田耕之助(主事) 川村泰

敏(囑託) 岡部三郎、瀬木忠夫、川口知雄

同館規則拔萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供シ其ノ他斯道獎勵ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス

第二項 臨時ニ特別美術展覽會ヲ開催シ美術品及美術工藝品ノ陳列ヲナス第三項 一定ノ期間ニ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館陳列室ノ使用ヲ許可ス

第四項 右ノ外美術獎勵ノタメ美術品及美術工藝品ニ關スル參考資料ノ展觀ヲ爲シ美術關係圖書ノ閱讀機關ヲ設ケ又講演會映寫會等ヲ開ク

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供ス本館ハ一定ノ期間ヲ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルヘシ

第七條 本館ニ評議員若干人ヲ置ク、評議員ハ識見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委嘱ス

第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモノトス

第十條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十

五日迄毎日左ノ時間中開館スル但シ時
宜ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコト
アルベシ

一月、二月、三月、十月、十一月、
十二月、午前九時ヨリ午後四時マデ
四月、九月、午前八時ヨリ午後四時
マデ 五月、六月、七月、八月、午
前八時ヨリ午後五時三十分マデ

大阪市立美術館

大阪府天王寺區茶臼山町天王寺公
園内電天王寺六〇〇、六一〇一

古美術品の常設展観と一般美術展の展
観場としての設備を兼ね、昭和十一年五
月落成。同月帝展作品の陳列を以て開館
し、古美術の常設展観は同年九月より正
式に開館した。建物は鐵筋混凝土造、三
階建て地階を加へ、建坪一二二二坪、延
坪三八五五坪。陳列室、展覽會室、講堂
圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の
蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、
美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展
観し、展覽會室及講堂は一般美術展並美
術講演會、講習會等の開催希望者に貸館
し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の圖書
を規定に従ひ一般の閱覽に供する。

〔館長〕上野直昭〔主事〕高津満、望月
信成〔學藝員〕小林太市郎、藤井源一
片山喜之、前田泰治〔囑託〕廣瀬治兵
衛、上田令吉、堂谷憲男

奈良帝國博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せら
れ同二十八年四月開館。三十三年官制の
改革と共に現稱に改められた。陳列品は
古社寺所有の國寶等にして政府の命令出
陳に依るもの、及社寺、個人その他より
の寄託による古美術品を蒐めて居る。概
して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古
より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列され
てゐる。出陳物を美術品、歴史品、美術
工藝品及書蹟の四部門に分ち、彫刻繪畫
等の美術品は各室別、時代參考順に陳列
し歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚
陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、
第一室より第三室まで彫刻、第四室より
第七室迄工藝品、第八室は歴史品、第九
室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の
順に陳列し、此中第一室より第八室に至
る彫刻歴史及工藝品は六月、十二月に定
期の陳列替を行ひ、第九室以降の繪畫、
書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙毎月第一、
第三土曜日の午後陳列品に即しての解
說的講座が開かれる。官制、社寺寶物受
託規程等は帝室博物館の項參照。

〔館長〕宮野安〔御用掛〕大宮武磨〔鑑
査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕
中村雅真、新納忠之介、梅原末治
〔觀覽日〕自一月三日至十二月二十五日
〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福
宮内 電光化門六六一

大正四年、施政五週年記念朝鮮物產共
進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構
内に新築した美術館を中心とし、同構内
の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開
館。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併
用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時
代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の
古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の
書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘
品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料
約一萬四千七百餘點が蒐集されてゐる。

猶ほ大正十五年慶尙北道慶州邑に慶州分
館を、昭和十四年忠清南道扶餘邑に扶餘
分館を開設し、夫々新羅、百濟の遺品を
主とする蒐集並びに陳列を行つてゐる。
〔主任〕有光數一〔觀覽日〕月曜日、大祭祝
日の翌日、自十二月二十六日至一月三日
の間を除き毎日開館〔觀覽料〕一人十錢、
引率者を有する學校生徒並軍人は無料

李王家美術館

京城府貞洞町五
電光化門七五

朝鮮に於ける美術獎勵の思召を體し、
昭和八年德壽宮を公開し宮内の石造殿を
改裝して日本近代美術の陳列館とし、日
本畫、洋畫、彫刻、工藝品を陳列したが、
更に朝鮮の古美術をも一堂に陳列すべき
美術館建設の適切なを認め昭和十一年
八月新館の工事に着手、同十三年竣工、
同六月開館した。新館は近世復興式の三
階建て、從來昌慶苑内にあつた舊李王家
博物館の藏品中、陶磁器、工藝品、繪畫

彫像、古瓦など朝鮮の古美術品を陳列し
てゐる。上記の石造殿並新館を李王家美
術館と總稱する。

〔館長〕葛城末治〔屬〕主任 平田武夫
李揆弼〔技手〕高橋喜太郎〔囑託〕李海
善〔委員〕黑板勝美、和田英作、工藤壯
平、澤田源一、川合芳三郎、山崎朝雲、
香取秀治郎〔評議員〕藤田亮策、鮎貝房
之進、金容鎮、黒田幹一、奥平武彦、伊
東樹雄

〔觀覽日〕自一月四日至十二月二十八日
〔觀覽料〕德壽宮大人十錢、小人五錢、
美術館同上

美術家團體一覽 (五十音順)

ア行

愛知縣工藝協會 名古屋市西區御幸

本町一丁目、愛知縣商工館内

縣下工藝の振興を圖り、意匠圖案の調査研究、展覽會の開催、宣傳等を行ふ。

〔總裁〕愛知縣知事〔會長〕西南廣吉

愛知社〔綜合〕 東京市瀧野川區田端町六一二、朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家を以て組織。毎年公募展開催。

〔會員〕〔日本畫〕川崎小虎、服部有恒、清水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門〔洋畫〕山本鼎、渡邊正太郎、水野義正〔彫塑〕毛利教武、加藤顯正、朝蔭其明〔工藝〕藤井達吉、長野堉志

青丹會〔洋〕 東京市品川區大井庚塚町四八三二、田坂乾方、電大森二八五一

昭和七年文化學院美術科卒業生を以て組織。同人展開催。

〔會員〕千葉明、千頭清策、近岡善次郎等十一名

青森縣工藝協會 弘前市百石町三六電四七

縣下工藝の振興を圖り、弘前地方の工藝品製作者、販賣者等を以て組織。年一回藝技展覽會開催。

〔會長〕橋本良雄〔理事〕奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎〔會員〕九十餘名

秋田美術會〔綜合〕 東京市世田谷區

代田一ノ七六、福田豐四郎方

昭和三年、故平福百穂を中心として、秋田縣出身の在京美術家有志を以て組織した。年一回東京及秋田市に展覽會開催。會員六十四名

石川縣工藝獎勵會展覽會 石川縣廳内經濟部商工水産課

縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會開催。引續き東京、大阪其他樞要の地に陳列會を開く。會員二百餘名。

〔會長〕石川縣知事

石川縣美術協會〔綜合〕 石川縣廳内學務部

昭和十四年田邊孝次を創立委員長として創立。郷土に於ける美術、工藝の向上を計り、綜合展を開催す。

〔總裁〕侯爵前田利爲〔會長〕石川縣知事

石川縣輸出工藝振興會 金澤市泉旭町一丁目

昭和九年創立。縣下輸出工藝の振興を目的とし輸出工藝品關係者に依り組織せらる。見本製作の獎勵、販路擴張等の事業をなす。

〔會長〕石川縣知事〔副會長〕中川剛毅〔幹事〕千田專平、高田利守、淺野廉、能波清二

一軌社〔洋〕 東京市豊島區池袋二ノ九四三、桑原實方

舊スクラム社改稱。昭和八年度東美校師範科卒業生により組織。同人相互の研究機關。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑原實、榛葉嘉一郎、森繁

一水會〔洋〕 東京市澁谷區千駄谷五ノ九〇二、木下孝則方

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」、同會を創立した。同十二年十二月東京府美術館に第一回公募展を開催し、爾後毎年繼續してゐる。十七年第六回。

〔會員〕有島生馬、池部鈞、石井柏亭、木下孝則、木下義謙、小山敬三、碓伊之助、安井曾太郎、山下新太郎、高野三三男、中村善策、田崎廣助、安宅虎雄

茨城縣美術展覽會〔日、洋、工〕水戸市南町いばらき新聞社内 電水戸五〇、三〇四、三三二

大正十二年創立。いばらき新聞社の主催。

主なる會員、横山大觀、飛田周山、永田春水、五島耕畝、齋藤隆三、熊岡美彦、板谷波山、海野清、磯崎美亞等。

〔會長〕いばらき新聞社長〔顧問〕茨城縣知事

會員八十名

上野會 東京市麻布區飯倉町三ノ一

九、田澤良夫方 電赤坂四七八六

昭和十五年創立、東京市内の日刊新聞社に屬し多年美術記事を擔當、又は擔當しつゝある記者を以て組織する。

〔會員〕外狩素心菴、遠山孝、金子義男、高原四郎、高澤初風、田澤良夫、青柳隆治、坂崎坦、廣瀬滋六、山口久吉、小谷四郎、宮川謙一

鳥城會〔日、洋〕 京都市岡崎法勝寺町一八、柴原希祥方

昭和二年創立、岡山縣出身京都在住畫家を以て組織。毎月研究會を開く。

〔常任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田英次、會員三十餘名

愛媛美術工藝協會 松山市愛媛縣商品陳列所 電四四五

愛媛縣在住並出身の美術及工藝家を以て組織。縣下の美術及工藝の振興を圖り綜合展を開催す。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部長

越後工藝美術會〔工〕 東京市瀧野川區西ヶ原町三三、小澤天來方 電王子三七一〔呼〕

舊來の越佐美術會を解消し、新に新潟縣出身の工藝家を以て結成した。昭和十五年一月創立。

〔會員〕小澤天來、小川友衛、小川英風、龜倉蒲舟、山本光次、市橋雅堂、原直樹、堀如眞、山本白蠟、齋藤玉城、清水辰雄、入山白翁、富樫光成、吉田醇一郎、高井白陽、佐藤陽雲、森三樹、武樋貞波留、

岩手美術工藝協會 盛岡市岩手縣工業試驗場内 電五一

昭和八年創立。縣下美術工藝の振興を圖り研究の助成、及展覽會指導を事業とし特に郷土古民藝の現代的再生に努む。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部長

篠原淑子、廣川松五郎、岡とよ子、原宗治、小野爲郎、渡邊無涯

大分縣工藝協會 大分市舞鶴町大分縣工業試驗場内 電三三一

昭和十年四月創立。翌年三月第一回展
十三年三月第二回展開催。研究会、講習會の開催、作品集刊行等を行ふ。

〔會長〕大分縣經濟部長
大分縣美術協會（綜合）大分市荷揚町縣文化會館内

昭和十二年石丸優三を中心として創立。縣下美術の向上を圖り、春秋二回展覽會開催。

〔會長〕松本古村、會員約二〇〇名。
大阪繪畫會（洋、版）大阪市南區大寶寺町六〇、川島方

昭和十三年五月創立、同人展を開催、又大阪新美術家同盟に加盟。

〔會員〕赤松大祐、入江令一、今竹七郎岡本誠、片山一子、川島昇太郎、河野重軌、田川登三、谷福太郎、南平

大阪工藝振興展覽會 大阪市西區江之子島、大阪府工業獎勵館内 電土佐堀七九〇、七九一

昭和十四年三月、大阪府下の工藝關係諸團體の聯合により創設。毎年春季には美術工藝展を、秋季には産業工藝及圖案展を開催する。同年第一回展開催。

〔審查員〕津田信夫、廣川松五郎、松田權六、岩田藤七、杉田禾堂、中島豐次、黑岩淡哉、山本篤園、島野三秋、安原祥窓、根筒忠録

大阪湊人會（工） 大阪市住吉區北畠

東一ノ二四
昭和十五年秋大阪在住の漆藝家を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕小澤裕、川合漆仙、川端近左、川口虛舟、橋外波、安原祥窓、越田尾山三砂良哉、島野三秋、森田誠之助

〔顧問〕柴崎風卿
大阪女人社（日） 大阪市天王寺區上汐町六丁目、藤枝春月方

大阪の婦人日本畫家により組織され、毎年大阪に於て「大阪女流畫家展」を公募により開催し、昭和十七年第九回展に及ぶ。

〔同人〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃融紅翹、大江更園、村岡小丘、矢島玉女松本華洋、福田芳穂、小松華影、木谷千種、四夷星乃、嶋成園

大阪新美術家同盟（洋、彫） 大阪市東區深江中三丁目七、田川寛一方

關西に於ける各美術團體の合同展開催を目的とす。

（現在參加團體）核眞美術協會、關西水彩畫協會、新畫人集團、大阪繪畫會、大阪彫塑會、阪神彫塑家協會

〔委員〕木村孝三、藤田金之助、米良道博、難波架空像、田川寛一、池島勘治郎青野馬佐奈、桂龍雄、寺田清四郎、川島昇太郎、岡本誠、田川覺三、宮島久七、白石正義、唐木政一、大西金次郎、森島包光、河口正勝、妹尾健太郎、河合芳男

大阪彫刻家聯盟 大阪市北區新川崎町一、宮島久七方

昭和十六年四月創立。大阪を中心とす

る彫刻家の團體で、大阪彫刻會、大阪彫塑會、大阪木彫作家協會、彫光會の會員を始め、無所屬の作家を以て組織する。會員相互の連絡を圖ると共に對外的の交渉機關たらしめる。

〔委員長〕黑岩淡哉〔委員〕岩田千虎、井上重四郎、大栗和七、横田文夫、田中圭水、津田鳳雲、仲眞弘、上田曉、保田龍門、山野長江、佐伯量良、宮島久七、美濃村松雲、白石正義、清水要、日高政法

大阪彫塑會 大阪市北區新川崎町一宮島久七方

昭和六年洋畫團體Z I G Z A Gの彫刻部として成立。翌年獨立して大阪附近の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成。同八年より大阪新美術家同盟展に加盟。同十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

〔會員〕白石正義、宮島久七、木下正彦金森勝太郎、木下幹、日高政法、三澤賢三、清水要、西村利作、小柴利幸

大阪日本畫家報國會 大阪市西區南堀江通二丁目二八電櫻川七二〇一

學國の傳統に則り、美術文化の職域に滅私奉公せんと昭和十六年十二月結成。

〔理事長〕矢野橋村〔理事〕福岡青嵐、中村貞以、矢野鐵山、幸松春浦、赤松雲嶺、青木大乗、生田花朝〔主事〕高山辰三、岩本一成〔顧問〕白川朋吉、菅橋彦北野恆富、須磨對水、岡本大更、山口艸平、久保田翠桐、湯川松堂、水野燕青、

岡田雪窓〔評議員〕若干名
大阪美術懇話會 大阪市東區大手前之町、大阪府情報部内

昭和十四年二月、大阪情報部の勸奨により阪神を中心とする美術家が相集り同會を結成した。趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全うせんとする」にあり、之に必要な事業を行ふ。

〔評議員〕矢野橋村、北野恆富、菅橋彦庭園耕山、福岡青嵐、中村貞以、山口艸平、赤松雲嶺、幸松春浦、矢野鐵山、須磨對水、岡枝金三、鍋井克之、赤松麟作松本銳次、藤堂奎三郎、永瀬義郎、岡部晋、青木大乗、小西謙三、古家新、齋藤清二郎、上田曉、保田龍門、中島豐次

〔監事〕庭山耕園、齋藤清二郎
大阪美術展覽會（日） 大阪市東區高麗橋、三越大阪支店內

大阪三越が主催となり、毎春一回開催する日本畫の公募展。昭和十七年三月第二十八回展開催。

〔鑑査委員〕西山翠嶺、堂本印象、中村大三郎、宇田萩郷、山口華楊、矢野橋村福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹園、菅橋彦

大阪府工藝協會 大阪市東區大手前之町、大阪府廳商工第二課内

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、産業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」

發行。

〔名譽會長〕大阪府知事〔名譽副會長〕大阪府經濟部長〔理事長〕商工第二課長會員三百五十餘名。

旺玄社〔洋〕 東京市大森區堤方町二四、水戸範雄方

牧野虎雄を主宰者とする洋畫家の團體。昭和八年より毎春東京府美術館に公募展を開催、出品種目は油繪、水彩、素描、パステル、版畫等。

〔特別評議員〕川村貞四郎、東久世秀雄森田龜之助〔評議員〕牧野虎雄、岩井彌一郎、橋作治郎、三好俊一〔同人〕市村雄造、新野歡一、遠山陽子、千木良富士川城國司、田邊嘉重、村瀬眞治、梅澤照司、松本茂雄、深澤省三、藤村はつゑ、小林喜代吉、小林榮、小林猶治郎、佐藤文雄、樹下行雄、水戸範雄、東久世小六野村豐子、村尾榮、皆見鶴三、青山襄、梅野順三、保科米三

〔社友〕十九名。

岡崎美術展覽會〔日、洋〕 岡崎市立圖書館内電六五〇

岡崎市の美術の發達を圖り、大正十二年設立。昭和二年繪畫部と工藝部は分離し岡崎美術展を創設。十七年第二十一回展開催。

〔會長〕岡崎市長

【力行】

佳都美村〔工〕 京都市上京區小山初音町、會見延藏方

明治四十二年神坂雪佳を中心に設立された佳都美會の後身、隨時作品發表をなす。

す。

〔村員〕伊東陶山、伊東翠靈、岩村哲齋岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松壽、江馬長閑、鈴木表朗、三木表悦、魚野自醒、奥村霞城、清水六兵衛、溝口安太郎、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔事務理事〕會見延藏

香川縣工藝美術綜合展覽會〔綜合〕

香川縣商工獎勵館内縣下の工藝並に美術の發達を圖るを目的とし、豫算の範圍内に於て毎年五月公募展を高松三越で開催す。昭和十三年第五回展に至る。

香川縣漆藝會

高松市花ノ宮町、香川縣工業試驗場内 電三九〇二

昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の輸出向漆器講習修了者を以て組織。同試驗場指導の下に輸出向一般工藝品の研究をなす。同十二年八月第二回漆藝展開催。

〔會長〕香川縣工業試驗場長〔會員〕二十餘名。

華畝美術協會〔洋〕

京都市烏丸通上立賣上ル、太田喜二郎方電西陣五九六〇昭和十一年創立。舊稱爾步美術協會。年一回公募展を開く。同年京都美術館に第一回展開催。

〔會員〕伴庄兵衛、太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、坪井一男、赤松麟作、新井完、安藤義茂、南業行、森脇忠、霜島正三郎、會友二十一名

華陽會〔彫〕 東京市本郷區駒込神明町三四一、後藤良方 電駒込一一五五

昭和八年後藤良社中により組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會開催。

塊藝會〔彫〕 名古屋市西區臺所町三ノ一、石田方

〔會員〕十名

塊人社〔彫〕 澁谷區代々木初臺町五

九四、安藤照方 電四谷四六三八昭和十四年春、主線美術協會が解消したので、同會の彫刻部は舊稱「塊人社」に復歸した。公募展を開催する。

〔同人〕泉谷喜一郎、長谷川塊記、堀江越、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尚之、小室達河内山賢祐、岸崎猪之助、安藤照、荒居德亮、三澤寛〔社友〕十名

各人社〔綜合〕 京都市押小路富小路角、岡本庄三方

昭和六年結成。藝術一般の研究及會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會開催。

〔會員〕〔日本畫〕辻村宗太郎、中村敏郎赤松稜一、芝正雄、白岩佑三郎〔洋畫〕仲千代二、安田謙、藤井勇、德永王樹〔版畫〕稻垣耕四郎〔彫塑〕岡本庄三、吉川常雄、吉田徹示、中村三郎〔工藝〕天野六郎助

革丙會〔日〕 東京市本郷區弓町一ノ

二六、棚田眞楠方

明治四十年故小堀綱音門下に依りて組織。大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。

的とす。

〔會員〕磯田長秋、岩田豐磨、太田天洋川崎小虎、川船水棹、棚田眞楠、山川永雅、安田毅彦、小山榮達、小堀安雄、森戸果香、永井幾麻、眞野滿、羽石光志、川邊菊二郎〔幹事〕棚田眞楠

學校美術協會 東京市荒川区日暮里町三ノ一九六 電根岸一〇三〇

昭和二年設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の發達を側面より助成するを以て目的とし、圖書の刊行、教材用具の研究製作供給、本邦圖畫手工の海外紹介等の事業を行ふ。

〔會長〕岸邊福雄〔常務理事〕後藤福次郎〔理事〕板倉贊治、山本鼎、霜田靜志赤津隆助、石谷辰治郎

關西水彩畫協會 大阪市住吉區萬代東二丁目三三、桂雄雄方

昭和十年關西在住の水彩畫家十二名を以て組織。年一回大阪、神戸、京都に於て作品展開催。十七年第八回展。

〔會員〕桂龍雄、青野馬左奈、池島勘治郎、前車博資、中谷武雄、吉倉三郎、田中丘人、福井逸郎、江本兼次、宮本宗一、青山岩松、中川隆史、筑井辰之助

〔會友〕五名〔研究會員〕一三〇名

きつ、き會 東京市淀橋區西落合一ノ六一 平塚運一方

鬼面社(洋) 東京市淀橋區下落合一ノ五四〇、大久保方、電大塚四〇三七

昭和十四年組織。大久保作次郎を中心とする會で、同人展を開く。

〔會員〕大久保作次郎、足立眞一郎、飯守好雄等十八名。

岐阜社(日) 岐阜市大宮町二、杉山方

岐阜縣下郷土美術の向上を目的とする公募展。昭和十四年六月岐阜市に第四回展を開催した。

〔同人〕長谷川朝風、川田虚舟、横山春溪、杉山祥司

九夏會(洋) 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四、土屋義郎方

昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年第一回展開催。

〔會員〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、土屋義郎、藤堂李三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三郎、利田茂一、新沼杏一、原精一

九元社(彫) 東京市世田谷區玉川奥澤町二ノ一四九 森方 電田園調布三一八〇

昭和八年創立。昭和二年より八年までの東美校卒業生有志が結成せる木彫研究團體。十七年七月第八回展を東京府美術館に開催。

〔會員〕森大造、高橋泰藏、中野四郎、村井辰夫、鈴木三郎助、長沼孝三、紺谷英儀、石塚貞男、江上正男

九室會(洋) 東京事務所 品川區西大崎一ノ二五 原田直康方 大阪事務所 蘆屋市樋の口新田七四三、吉原方

昭和十三年九月創立。二科會の主として第九室を中心とする新傾向作家の親睦を圖り、併せて各自の研究に資する。毎年春季東京に展覽會開催。

〔會員〕青木壽、新井ふみ子、藤田金之助、原田直康、稻田徳生、稻垣志行、井上覺造、石丸一、伊藤久三郎、伊藤研之桂ユキ子、村田實史雄、中野淑子、浪江勘次郎、難波架空像、小川貞彦、岡田オカイン、高井貞二、栃木宗三郎、山口長男、山路眞護、山本敬輔、山本直武、吉原治良、松本俊介、村田耕、平松豊彦、戸川串田、山形稔三、西原照子、北島達夫、橋本徹郎、二宮榮一郎、能間弘、野尻三郎、鈴木進平、田中君子

九州沖繩各縣聯合工藝試作品展覽會 別府市濱海海岸、大分縣殖産館内 電別府二五九

九州沖繩各縣聯合のものと毎夏公募展を開催。昭和十七年第九回展を長崎市に開催した。

京都工藝院 京都市東山區五條坂五丁目 電祇園六九八

昭和十二年一月創立。京都に於ける工藝の八團體、五條會、陶藝協會、綵工會仲更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、蒼潤社、工友園が京都工藝の革新進歩を宣言して大同團結した工藝の綜合團體。其の結成に伴ひ右諸團體は解消された。同年京都美術館に第一回展を、十三年第二

回展を、京都及東京の兩市に開催。〔常任理事〕山鹿清華、清水正太郎

〔會員〕〔陶藝部〕伊東翠壺、井上憲吾、井上素明、八田蘇谷、堀岡道仙、中條昇岡本爲治、桶谷定一、涌波蘇隆、小倉千尋、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、瀧本蘇嶺、高木鳳子、谷口道仙、中村昌夫、中村幸節、村井瓶生、草加春陽、山澤松篁、國領素夫、寺池旬候、福井榮印、淺見與志三、中谷小太郎、清水正太郎、北村祥鳳、清水祥次、北村陽山、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、清風與平、萬代正一、小華利忠雄、宮川香齋、菊地熊市、勝尾青龍洞、東野春生、高木岩華、杉本正、河原金吾、清水六兵衛、林沐爾、野本正光、林圓山、宮本香齋、諏訪蘇山

〔染織部〕石田玉英、今西良夫、今村冠峰、岩崎眞也、八田泰造、長佐川文平、馬場笛山、小合友之助、川瀬茂次、太田光嶺、龜山善博、横山芙明、田中初雄、田中貞造、中村鵬生、長村華城、村田春緑、安武聖果、山崎茶平、山鹿清華、前田良三、福村健、佐野多景夫、岸本景泰、皆川月華、島田勝四郎、服部好雅、加納白干、宇野善三、山田誠一、伊藤逸平、山本孝甫

〔漆藝部〕井上彦之助、岩村貞雄、井上金花、番浦省吾、戸島光阿彌、堂本漆軒、奥村究果、止原清、山田豊、迎田嘉亭、水田平一郎、鈴木貞路、山岸表壽、山田一哲、清水美泉、板倉未到、尾園成章、山野井益四郎、森元伊造、平山閑水、平石孝、森富義典、松室重信、大藏甲子竹中微風、西澤玉舟、湯淺華曉

〔金工〕

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕安藤狂四郎〔副會長〕加賀屋朝藏、竹上藤次郎、評議員四十一名、會員五百名

京都染織藝術協會(工) 京都市左京區岡崎北御所町三七、山鹿清華方

昭和十五年八月創立。染織刺繍藝術の昂揚を目的とし作品研究及目的達成の爲諸種の事業を行ひ、展覽會を開催す。

〔會員〕岸本景泰、皆川月華、小合友之助、稻垣稔次郎、中村鵬生、山鹿清華、等京都作家四十三名

京都日本漆畫家聯盟(工) 京都市左京區淨土寺西田町一二、戸島方 電上局七九二五

京都漆藝院を解消して昭和十七年八月結成、濃漆畫、淡漆畫、工藝の三部を設けて、日本獨特の漆藝の研究普及に務む。

〔顧問〕六角紫水〔委員長〕戸島光阿彌

〔常任委員〕松岡正雄、木村天紅、井上彦三郎、山路光市

京都裝飾藝術協會 京都府伏見桃山

木竹部) 今大路長光、高瀬好山、園保美永峰秀作、面屋庄三、野呂天調、田中保藤澤伸一、中野平一

京都工藝美術協會 京都府廳經濟部内

京都工藝界の各部門、各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進出を圖るを目的とす。毎春京都市及東京市に工藝展を開催、勸奨を爲して新進作家を世に紹介する。機關誌發行。

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕安藤狂四郎〔副會長〕加賀屋朝藏、竹上藤次郎、評議員四十一名、會員五百名

京都染織藝術協會(工) 京都市左京區岡崎北御所町三七、山鹿清華方

昭和十五年八月創立。染織刺繍藝術の昂揚を目的とし作品研究及目的達成の爲諸種の事業を行ひ、展覽會を開催す。

〔會員〕岸本景泰、皆川月華、小合友之助、稻垣稔次郎、中村鵬生、山鹿清華、等京都作家四十三名

京都日本漆畫家聯盟(工) 京都市左京區淨土寺西田町一二、戸島方 電上局七九二五

京都漆藝院を解消して昭和十七年八月結成、濃漆畫、淡漆畫、工藝の三部を設けて、日本獨特の漆藝の研究普及に務む。

〔顧問〕六角紫水〔委員長〕戸島光阿彌

〔常任委員〕松岡正雄、木村天紅、井上彦三郎、山路光市

京都裝飾藝術協會 京都府伏見桃山

木竹部) 今大路長光、高瀬好山、園保美永峰秀作、面屋庄三、野呂天調、田中保藤澤伸一、中野平一

京都工藝美術協會 京都府廳經濟部内

京都工藝界の各部門、各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進出を圖るを目的とす。毎春京都市及東京市に工藝展を開催、勸奨を爲して新進作家を世に紹介する。機關誌發行。

宗和園

昭和二年七月設立。織染緞及其他的裝飾藝術の向上普及を圖るを目的とす。作品展覧會、互評會、講演及出版等の事業をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕箸尾清、狩野秀峰、岸本登春、山田江秀、井田宣秋、小林文齋、吉田玉城、樫田光可、其他會員三十八名、顧問六名

京都彫塑家聯盟(彫) 京都市左京區修學院大井町一六、松田尙之方 電山端一〇八番

昭和十五年九月創立。京都府に居住する彫塑家を以て組織し、一、製作の自肅強制、二、製作に必要な物資の共同購入、三、鑄造部の設備、四、展覧會の開催を目的とす。

〔會員〕西川亨、徳力牧之助、大西三四助、岡本庄三、吉川常雄、田中源三、村井次郎、國安稻香、矢野判三、山本節郎、松田尙之、松尾薫、藤林重治、河野薰郎、若田政一、島津良藏、柴田利彦

京都陶磁器工業組合 京都市東山區五條通東大路東入 電祇園一二五〇、一〇三〇

昭和九年十二月設立認可。製品検査統制共同販賣、金融統制等の事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕淺見五郎助〔副理事長〕藤岡幸二、小川文齋、組合員七百十名

京都美術家クラブ 京都市河原町三條朝日新聞社京都支局内 電上七二〇〇
昭和十二年八月設立。京都在住の美術

家並評論家の親睦團體。毎月例會を開催

〔理事〕石崎光瑤、宇田萩耶、山口華揚、案本一洋、森守明、黒田重太郎、須田國太郎、松田尙之、清水正太郎、皆川月華

〔幹事〕櫻井義臣、佐久間義雄
行人社(洋) 東京市淀橋區東大久保一ノ三五七、岡田一馬方 電四谷九三七

昭和四年創立。年一回展覧會開催。
〔會員〕金原五郎、齋藤二男、安達貞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水船三洋、福原達朗、岡田一馬、小林榮

銀座美術協會(洋) 東京市京橋區銀座四丁目三和ビル 銀座聯合會事務所内

昭和十一年二月房野徳夫の發起にて創立。同年四月銀座聯合會後援の下に銀座通兩側商店ウィンドウに洋畫展開催。

〔會員〕井手坊也、房野徳夫、島津一郎、石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一、三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太郎、副島秀生、黒田頼綱、眞木小太郎、須田壽、千葉衛、笹岡了一

黒門會(洋) 東京市世田谷區北澤二ノ一九六、東郷方 電世田谷二四三一

有島生馬の恩顧を受けた洋畫家の有志が組織した會で、年一回展覧會を開く。

〔會員〕林俊衛、碓伊之助、岡田謙三、兒島善三郎、小山敬三、島崎雅二、中川紀元、海老原喜之助、東郷青兒

華嚴社(日) 東京市下谷區谷中坂町七九、田口勝三郎方
昭和四年、故小堀頼音、小杉未醒、荒井寛方等の主唱により栃木縣の出身在京

日本畫家有志を以て組織、隔年東京及郷土に展覧會を催し、後進の誘導に任ず。

〔理事〕石川宰三郎、田「勝三郎」〔會員〕小杉放庵、荒井寛方、松本泰水、福田浩湖、關谷雲嶺、小林草悅、武井晃陵、河内舟人、大貫鏡心

形象工藝美術會(工) 大阪府東成區勝山道八ノ四〇六

昭和十四年五月創立。工藝美術の向上を圖るを目的とし、工藝の作家及批評家を以て結成す。毎年展覧會開催の豫定。

〔會員〕今井千尋、羽原秋芳、中條義男、小澤裕、大國壽郎、河合壽成、川口虛舟、橋外波、田邊竹雲齋、津田禎二、根箭忠

綠、中島豐次、黒岩淡哉、山本笙園、安原祥鶴、深田駒吉、越田尾山、古賀藤々、小林美奈、會田裕宣、坂口宗義齋、柴崎

風岬、島野三秋、日比野近三、平松宏泰、杉田禾堂、中島義夫、芳武茂介、橋田裕年、八井孝二、西出宗雄、中條繁雄、大塚文吉、翁チトセ、高松敬子、辻正雄、中村貞雄、能守安太郎、朝倉祥景、龜山

竹司、佐藤壽惠雄、宮澤均、宮本忠平、柴野知聖、清水小菊、樋口壽光、森田誠之助

經緯工藝美術會(工) 東京市中野區昭和通り二ノ七、辻方

昭和十三年辻光典主宰の下に東京美術學校工藝科出身者を以て組織す、同人展開催。

〔會員〕辻光典、吉田丈夫、染川鐵之助、篠井欽治、美輪智一、田澤清美
乾坤社(日) 大阪府外枚方町御殿山

電二六二

昭和十四年秋、大阪、東京に第一回の公募展を開催した。十七年第四回展。
〔同人〕矢野橋村、矢野鐵山、小松均
〔社友〕三十二名

園外美術院(日) 大阪府池田市満壽美六五二、瀧秋方方

昭和十四年十月瀧秋方を責任者として創立。あらゆる流派を超越し野逸性ある作家と共に新日本畫の確立を期する。同十五年より毎年大阪及び東京に公募展開催。昭和十八年園外社を現名に改む。

〔顧問〕小杉放庵〔主宰〕瀧秋方〔會員〕渡邊大虛、八百谷大樹、草刈樵谷、荒川晃雲、河野華崖〔社僚、社友〕二十一

人
建築學會 東京市京橋區銀座西三ノ一 電京橋一二三二、一二三八

明治十九年創立。社団法人組織。建築に關する學術技藝の攻究發達を圖るを目的とす、月刊「建築雜誌」、其他圖書の刊行、建築に關する調査研究、講演會、展覧會の開催等を行ふ。

〔會長〕內藤多仲〔會員〕一萬三千名
現代工藝作家協會(工) 東京市品川區上大崎長者九二六一、大隅爲三方

昭和十五年創立。新人の發見、新素材の研究獎勵、我が國固有技法の保存等を趣旨とす。同年十一月、日本橋高島屋に公募による第一回展開催。出品者は會員の推薦によるもの、鑑査合格者等である。

〔顧問〕侯爵細川護立、子爵岡部長景
〔會長〕川崎克〔常任理事〕大隅爲三、

森田龜之助、評議員二十五名、名譽會員十三名、會員七十餘名

現代美術展覽會(日、洋) 東京市中野區野方町二ノ一二六八、現代美術協會

内 電中野三五一一七

現代美術協會主催公募。昭和十七年六月東京府美術館に第四回公募展を開催。

〔同會第四回展審査員〕(第一部) 奥村土牛、金島桂華、中村岳陵、山口逢春、福田平八郎、宇田萩郎、小野竹喬、堅山南風、田中咄哉州、森白甫(第二部) 金山平三、安井曾太郎、牧野虎雄、川島理一郎、曾宮一念

古伊賀復興會(工) 東京市品川區下大崎一ノ九四、川崎方 電大崎一〇五〇

大正十年三月發會。古伊賀焼の復興を目的とす。展覽會を開催。

〔會長〕川崎克 〔互陽會(洋)〕 東京市澁谷區若木町三二 土屋實方

昭和十三年創立。春陽會系作家を以て組織し、毎秋同人展を開く。同年十二月銀座資生堂に第一回展開催。

〔會員〕中谷泰、土屋實、二見利節、高木勇次、藤野龍、角南松生、伊川鷹治

興亞造形文化聯盟(假事務所) 東京市麹町區丸の内九ビル二階日本輸出藝聯合會内電丸の内五三三七二

日華兩國に於ける工藝、建築其の他の造形運動の連絡提携を圖り以て中華民國の造形文化を指導し、延て東亞共榮圈生活文化の建設に資せんと昭和十七年十月設立。日華造形文化に關する紹介、斡旋

交換並びに講演會、展覽會等の開催、その他中華民國造形文化の調査、研究、保護、振興等に關する諸種の事業を行ふ。

〔會長〕藤山愛一郎〔副會長〕嚴家熾、股同(理事長) 高村豐周〔副理事長〕大森光彦、孫從(常務理事) 小池新二、杉浦齊、沈立、寺畑助之丞、(理事) 山脇巖、村岡景夫、藤島亥治郎、吉田源十郎、佐藤武夫、山崎覺太郎、齋藤信治、大山廣光、内藤泰治、田澤嘉一郎、王右之、汪紉熙(監事) 清水孝平、新田寄利雄、胡敬修

興亞美術聯盟(洋) 東京市目黒區原町一三五、齋藤種臣方(中支事務所) 中支那上海施高塔路四達路新四達邸一號

田代博方 昭和十四年結成。繪畫を通して善隣友好の實を擧げることとする。

〔會員〕齋藤種臣、倉垣辰夫、小川智、池邊一夫、清水七太郎、衛天霖(北支)、深澤省三(蒙疆)、田代博(中支)

工華社(工) 東京市小石川區宮下町六〇、深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小柳今朝一、湯川豐、島崎正二郎、下暢

工畫會(工) 京都市中京區錦藥師新町西入、梅原榮二路方 電本局一三二三

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織し、工畫の創作に努む。毎年一回以上展覽會開催。

〔會員〕小合友之助、横山英明、中村鶴生、梅原榮二路、山田泰三、麻田辨次、佐藤久吉、平尾周史

工藝技術官協會 商工省企業局内

昭和十三年五月、從來の圖案技術官協會と木漆金工技術官協會とを合併して、新に同協會を創立した。廣く我邦工藝産業の改善發達を企圖し、各方面の調査研究と會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員百二十一名。

工藝濟々會(工) 東京市澁野川區田端町四三八、香取方

大正十四年創立。隨時展覽會開催。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水飯塚琅玕齋、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、鹿島英二、河面冬山、桂光泰、堆朱楊成、海野清、梅澤隆眞、山本安晏、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

工藝美術作家協會(工) 東京市下谷區谷中眞島町一、平出敏方

昭和十五年十月創立。

會員は「一、舊帝展又ハ文展第四部ニ一回以上入選シ且ツ現在ニ於テ各種工藝美術展覽會ニ自己ノ製作ヲ發表シツツアルモノ。二、前項ニ準スル作家ニシテ本會委員會ノ承認ヲ經タルモノ。」

下記の事業を行ふ。一、國策を基調トスル工藝美術ノ全般的的研究並ニ實行。一、工藝美術各般ニ付當該官廳へ建議又ハ諮問ニ對スル答申。一、製作資材等に付關係官廳トノ連絡。一、研究事項ニ付各専門機關トノ聯絡。一、官設展覽會ヘノ積極的參加。一、新人作家への援助育成。一、新材料及ヒ新技術ノ研究紹介指導。一、特殊技術保存ニ關スル調査及研究。一、輸出工藝品トノ折衝。一、工藝美術振興ニ關スル講演及出版。」

〔會長〕澤田源一(顧問) 永井浩、本田弘人、牧崎雄、長谷川公一、香取秀眞、板谷波山、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、清水六兵衛、六角紫水、委員四十餘名。

工藝美術批評家協會 東京市京橋區銀座西五ノ三、大野法律事務所内 電銀座一三四七

昭和十三年創立。「嚴正なる工藝美術批評の確立を期して研究會を開きパンフレットを發行す」。

〔會員〕大山廣光、大島隆一、柴崎風岬光風會(洋、工) 東京市大森區田調布四ノ二一六、清水良雄方 電田調布二二〇八

明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の團體。春季洋畫及び圖案工藝の公募展を開催。昭和十七年二月二十九回展を東京府美術館に開いた。

〔會員〕石川欽一郎、石橋武助、池上浩石川滋彦、井手坊也、伊藏悌三、岩崎勝平、伊藤四郎、岩船修三、服部亮英、橋口康雄、星野正三、遠山清、土佐林豐夫、太田三郎、大野隆雄、緒方亮平、大澤海藏、小川智、大河内信敬、和田香苗、和田清、梶原貫五、河井清一、川合修二、角野判治郎、花嚴巖、栢森義、川端實、吉田苞、武内鶴之助、田中實一、田村一

極的參加。一、新人作家への援助育成。一、新材料及ヒ新技術ノ研究紹介指導。一、特殊技術保存ニ關スル調査及研究。一、輸出工藝品トノ折衝。一、工藝美術振興ニ關スル講演及出版。」

〔會長〕澤田源一(顧問) 永井浩、本田弘人、牧崎雄、長谷川公一、香取秀眞、板谷波山、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、清水六兵衛、六角紫水、委員四十餘名。

工藝美術批評家協會 東京市京橋區銀座西五ノ三、大野法律事務所内 電銀座一三四七

昭和十三年創立。「嚴正なる工藝美術批評の確立を期して研究會を開きパンフレットを發行す」。

〔會員〕大山廣光、大島隆一、柴崎風岬光風會(洋、工) 東京市大森區田調布四ノ二一六、清水良雄方 電田調布二二〇八

明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の團體。春季洋畫及び圖案工藝の公募展を開催。昭和十七年二月二十九回展を東京府美術館に開いた。

〔會員〕石川欽一郎、石橋武助、池上浩石川滋彦、井手坊也、伊藏悌三、岩崎勝平、伊藤四郎、岩船修三、服部亮英、橋口康雄、星野正三、遠山清、土佐林豐夫、太田三郎、大野隆雄、緒方亮平、大澤海藏、小川智、大河内信敬、和田香苗、和田清、梶原貫五、河井清一、川合修二、角野判治郎、花嚴巖、栢森義、川端實、吉田苞、武内鶴之助、田中實一、田村一

極的參加。一、新人作家への援助育成。一、新材料及ヒ新技術ノ研究紹介指導。一、特殊技術保存ニ關スル調査及研究。一、輸出工藝品トノ折衝。一、工藝美術振興ニ關スル講演及出版。」

〔會長〕澤田源一(顧問) 永井浩、本田弘人、牧崎雄、長谷川公一、香取秀眞、板谷波山、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、清水六兵衛、六角紫水、委員四十餘名。

工藝美術批評家協會 東京市京橋區銀座西五ノ三、大野法律事務所内 電銀座一三四七

昭和十三年創立。「嚴正なる工藝美術批評の確立を期して研究會を開きパンフレットを發行す」。

男、相馬其一、辻永、中澤弘光、中村研一、中田滿雄、長原坦、上野正之助、黒田頼綱、山形駒太郎、山喜多二郎太、山崎坤象、山下忠平、岩猛彦、牧野司郎、藤岡俊一郎、小林萬吾、小林鐘吉、小林眞二、小寺健吉、小絲源太郎、江藤純平、寺内萬治郎、跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑右衛門、鮫島利久、鬼頭鍋三郎、清原重以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野卯三郎、水上信雄、清水良雄、島野重之、新道繁、白川一郎、市ノ木慶治、森山肇、杉浦非水、鈴木榮二郎、杉村惇、須田廻太、西山眞一、高宮一榮、中尾達、益山雅衛、木村八郎、白石隆一、本儀信、森田元子、戸塚

太郎、關山金市
高知縣工藝協會 高知市丸之内、高知縣商工課
縣下工藝の綜合的發展を圖るを目的とし、工藝品の研究指導、展覽會、講演會の開催、他展への出品販路斡旋等を行ふ。
會員九十名
〔會長〕縣經濟部長菅野一郎〔副會長〕商工課長寺川喜代治、山本輝美
浩然社(日) 東京市中野區榮町通二ノ二、高橋慶伸方
荒井寛方門下に依り組織。毎月研究會を開く。昭和八年第一回展開催、十三年六月第六回に至る。

野田九浦の塾、居仁洞の改稱。昭和十七年五月獻納畫展開催。
公主會(日) 東京府北多摩郡狹江村岩戸一三一九、河口樂土方
藝術奉公を實踐する信念の下に河口樂土が主宰して設立。昭和十七年七月二十八日創立。會員八名。
構造社(彫) 東京市世田谷區下代田町二一九、中野方
立體藝術の發表及研究を目的として大正十五年發會、昭和二年より毎年東京府美術館に於て展覽會を開催。昭和十七年は第十五回展であつた。昭和三年より同十年まで繪畫部を設置してゐたが、その後は純粹の彫刻團體となつてゐる。

賀明吟、小川流水、今井雅邦〔會員〕三十九名
國畫院(日) 東京市豊島區巢鴨五ノ一四一、吉村忠夫方
昭和十年九月故松岡映丘盟主となつて設立。同十三年松岡映丘逝去するに及び國畫院研究會を結成、展覽會は随時開催とし、研究團體として存続することとなつた。

〔會友〕池田快三、妹尾壽信、伊藤應、九孝三郎、岡田又三郎、小田忠、大富隼雄、渡邊武夫、數見定一、反町博彦、高橋道雄、田中義夫、高木春太郎、巽勇、辻光典、中谷ミキ、中上川蝶子、黒田久美子、山中清一郎、藤井芳子、藤彦右衛門、藤江理三郎、藤本東一良、小林貞三、足立眞一郎、神保和幸、白井次郎、森棟澄子、瀬戸千代三、斧山萬次郎、鈴木三五郎、古屋浩藏、山村孝太郎、金子德衛、齋藤齋、永田精二
神戸實用新美術協會 神戸市神戸區榮町通五ノ三〇、關山金市方
昭和七年五月創立。舊稱神戸創作圖案協會。商業美術の向上と研究とを目的とす。

〔指導者〕荒井寛方〔幹事長〕高橋慶伸〔幹事〕笹沼寛祐、座間素賢、菊池公明、鈴木三朝、三藤耕寛、廣原浩晴〔會員〕石澤孝輔、磯部白鳩、今田青宏、西木爲雄、常盤大空、大西郷島、渡邊明洋、神田好司、瀧澤直七、田中茂雄、深見月光塚本政子、中村泰泥、山下浩素、仙田青也、關口眞緒、木村光甫、井出岳水、中川博汀、佐藤一風、河内舟人、時田南風、六川水聲、松本渡、赤松惠園女、田山正臣、黒崎慧美
皇國會(日) 東京市目黒區下目黒四ノ八四二、安原喜明方
昭和十四年結成。窯業工藝の進展を期す。

〔顧問〕板谷波山〔會員〕板谷梅樹、各務鐵三、安原喜明、宮之原謙
煌土社(日) 東京市杉並區上高井戸町五ノ一八九〇、野田九浦方
野田九浦の塾、居仁洞の改稱。昭和十七年五月獻納畫展開催。
公主會(日) 東京府北多摩郡狹江村岩戸一三一九、河口樂土方
藝術奉公を實踐する信念の下に河口樂土が主宰して設立。昭和十七年七月二十八日創立。會員八名。
構造社(彫) 東京市世田谷區下代田町二一九、中野方
立體藝術の發表及研究を目的として大正十五年發會、昭和二年より毎年東京府美術館に於て展覽會を開催。昭和十七年は第十五回展であつた。昭和三年より同十年まで繪畫部を設置してゐたが、その後は純粹の彫刻團體となつてゐる。

〔會員〕河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤精一、齋藤素巖、進藤武松、柚月芳、宮地寅彦〔會友〕星野健一、小口節三、森本清水、井手則雄、原田新八郎、清田清也、瀬戸園治、堤達男、佐野信雄、瀧川美一
曠技會(彫) 東京市淀橋區十二社四二〇、吉田宗齋方
東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。
〔委員長〕吉田宗齋〔顧問〕中山昇民、森田藻己、藤田景雲、篠秀一、石坂錦一〔代行委員〕竹内土生、菊地親章、吉田尙秋、内田祐康〔委員〕安藤文雅、安藤綠山、松田道直、田中秀行、堀志光、平

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳

〔會友〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳

〔會友〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳

〔會友〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳

院會員に任命、同年六月川島理一郎は同會を脱退した。同十二年四月從來の會員會友制を同人制に改む。尙第十四回展には寫眞部を新設し、鑑査には福原信三、野島康三の兩名が當つた。同十四年彫刻部は同會を結束離脱し、清水多嘉示を除いて他の全員が新制作派に合流した。依つて同會は彫刻部を解消した。

〔同人〕(繪畫部) 青山義雄、池邊貞喜、梅原龍三郎、大森啓助、大谷房吉、仰木茂、仰木ゲルト、大淵武夫、柏木俊一、河野通勢、久保守、庫田毅、佐藤哲三、佐藤豐吾、清水多嘉示、立石鐵臣、土田文雄、辻愛造、椿貞雄、杉本健吉、中村博、野島照正、長谷川春子、平塚運一、藤田太郎、別府貫一郎、眞垣武勝、益田義信、宮田重雄、宮坂勝、村上嚴、馬越樹太郎、山田正、山村誠、山脇信徳、山下品藏、香月泰男、中村鐵(版畫部)恩地孝四郎、川西英、平塚運一、ブノワ、棟方志功(工藝部)石井恒、仰木ゲルト、奥村博史、富本憲吉、北出塔次郎、内藤四郎、福田力三郎、山永光市、國畫工藝協會 東京市瀧野川區中里町三三六、矢部連兆方

國畫會の工藝部同人が組織する研究會〔會長〕富本憲吉〔役員〕奥村博史、山永光市、内藤四郎、矢部連兆、福田力三郎、德力孫三郎、北出塔次郎、平野利太郎、稻垣稔次郎
國際人形協會 東京市品川區南品川三ノ一五一七 電高輪六四七〇
昭和十一年十一月發會。日本人形の國

際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。
〔理事〕有坂與太郎、横山正三、成舞平兵衛
國風畫會(日) 東京市杉並區天沼二丁目三一

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。
〔會頭〕子爵入江爲守(幹事) 岩田豐磨
〔會員〕安田毅彦、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、公文蘆淵、兒玉輝彦
國風彫塑會(彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、石川方 電駒込二六九七

「民族彫塑の創造と建設」を目標とする同會は、元第三部會が昭和十五年十一月改稱せるもので、十七年九月第八回國風彫塑會展を開催、今日に到る。
〔會員〕石川確治、濱田三郎、向山峽路、早乙女龜次、日名子實三、鈴木賢二、永原廣、名久井十九三〔會友〕新關國臣、大木芳朗、田村辰治、瀧川藤一郎、成田政男、石塚裕康
國民總力朝鮮美術家協會 京城府蓬萊町一ノ五四
昭和十六年二月創立。美術を通じて内鮮一體の實を擧ぐべく、展覽會、講演會機關紙發行等を行ふ。

〔會長〕總督府學務局長眞崎長年〔顧問〕軍部總督府より若干名〔理事長〕總督府學務局社會教育課長桂瑞淳〔理事〕江口敬四郎、戸張幸男、遠田運雄、大橋實等十八名、會員二百五十名
國民美術協會 東京市丸之内、明治生命館マープル内
大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫(日本畫、洋畫)彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に互る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。
〔理事〕小倉右一郎、黒田鵬心、小寺健吉、菅原榮藏、津田信夫、西澤富畝
國民美術研究所 東京市小石川區小日向水道町五三 電大塚六〇六八
昭和十六年八月創立。美術に關する出版、講演展覽會開催等を行ふ。
〔理事長〕芳川起〔理事〕高木紀重、高田俊郎〔評議員〕浦崎永錫、中山貞夫、大山廣光

國策宣傳美術教育協會 東京市淺草區芝崎町二ノ三、淺草女子商業學校内電根岸五九二
舊稱全國商業美術教育協會。昭和十一年全國商業學校百一校の聯合に依つて設立。事業として年一回展覽會を開催、會報を發行し、又商業美術に關する教材の交換、頒布等を行ふ。
〔會長〕伯爵松平賴壽〔副會長〕小林愛雄、安藤弘〔理事〕九名

〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

早苗會(日) 京都市釜座二條下ル、三宅鳳白方
故山元春舉の遺業を繼承す。年一回展覽會を開催し、又月次研究會、講演會を開く。(昭和十八年二月解散)
〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

國策宣傳美術教育協會 東京市淺草區芝崎町二ノ三、淺草女子商業學校内電根岸五九二
舊稱全國商業美術教育協會。昭和十一年全國商業學校百一校の聯合に依つて設立。事業として年一回展覽會を開催、會報を發行し、又商業美術に關する教材の交換、頒布等を行ふ。
〔會長〕伯爵松平賴壽〔副會長〕小林愛雄、安藤弘〔理事〕九名

〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

〔參見〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、柴田曉葉、古谷一晃〔常議員〕林文塘、貴道草衣、堀江春輝、齋藤紫山、武田鼓葉、佐々木泰華〔幹事〕案本一洋、勝田哲、三宅鳳白、中野草雲〔編輯部〕前田賢〔會計〕齋内一秀〔研究會委員〕高木富三、谷口英雄
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長

國際人形協會 東京市品川區南品川三ノ一五一七 電高輪六四七〇
昭和十一年十一月發會。日本人形の國

際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。
〔理事〕有坂與太郎、横山正三、成舞平兵衛
國風畫會(日) 東京市杉並區天沼二丁目三一

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。
〔會頭〕子爵入江爲守(幹事) 岩田豐磨
〔會員〕安田毅彦、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、公文蘆淵、兒玉輝彦
國風彫塑會(彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、石川方 電駒込二六九七

「民族彫塑の創造と建設」を目標とする同會は、元第三部會が昭和十五年十一月改稱せるもので、十七年九月第八回國風彫塑會展を開催、今日に到る。
〔會員〕石川確治、濱田三郎、向山峽路、早乙女龜次、日名子實三、鈴木賢二、永原廣、名久井十九三〔會友〕新關國臣、大木芳朗、田村辰治、瀧川藤一郎、成田政男、石塚裕康
國民總力朝鮮美術家協會 京城府蓬萊町一ノ五四
昭和十六年二月創立。美術を通じて内鮮一體の實を擧ぐべく、展覽會、講演會機關紙發行等を行ふ。

〔會長〕總督府學務局長眞崎長年〔顧問〕軍部總督府より若干名〔理事長〕總督府學務局社會教育課長桂瑞淳〔理事〕江口敬四郎、戸張幸男、遠田運雄、大橋實等十八名、會員二百五十名
國民美術協會 東京市丸之内、明治生命館マープル内
大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫(日本畫、洋畫)彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に互る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。
〔理事〕小倉右一郎、黒田鵬心、小寺健吉、菅原榮藏、津田信夫、西澤富畝
國民美術研究所 東京市小石川區小日向水道町五三 電大塚六〇六八
昭和十六年八月創立。美術に關する出版、講演展覽會開催等を行ふ。
〔理事長〕芳川起〔理事〕高木紀重、高田俊郎〔評議員〕浦崎永錫、中山貞夫、大山廣光

佐賀美術協會(綜合) 佐賀市興賀町

精町、山口亮一方

大正三年久米桂一郎、岡田三郎助を指導者として、佐賀縣出身の美術同好者に依り組織。郷土美術の啓蒙を趣旨とす。

年一回公募展開催。會員三十八名

皐月會(工) 東京市豊島區駒込三ノ

三九九、山本安曇方

昭和十一年第一回展開催。十四年第四回展開催。會員の新作を発表する。

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅玕齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光春、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞

山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

彩交會(日) 名古屋市熱田區玉ノ井

町八二、石川英風方

大正十年創立。舊名愛土社。名古屋市在住及同市出身にして京都に在住する京都繪畫專門學校卒業生を以て組織。

〔會員〕織田杏逸、和田青雨、石川英風、淺井正臣、大岩聚星等三十餘名

埼玉縣工藝協會 埼玉縣廳商工課

昭和九年七月創立。縣下工藝的產業の發達を圖り業者約三十名を以て組織。展示會、講習會の開催、出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。

〔會長〕經濟部長

催青會 東京市澁谷區代々木上原町

一一一、山崎省三方

昭和十三年二月創立。同人展を開催す。

〔會員〕池田榮一、石井了介、渡邊進、

金井正、谷とし子、高濱虎喜、津谷鹿市、中西義男、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉、三澤正三

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利

三谷十糸子、菊池隆志、高橋周桑、江崎孝坪、寺島榮明

讚岐美術協會(日、洋) 高松市兵庫町、古木堂本店内 電二七〇一

昭和四年創立。地方美術の向上發達を圖る。毎年一回公募展を開催し、講習會寫生會等を行ふ。昭和十二年二月高松三越に第八回展開催。

〔會員〕井川敬逸、小西光雄、高橋正三、谷口國介、神内正芳、岡田秀雄、黒田純二、小川誠一、高木靜雄、高尾雄次、中村重幸、本多一郎、藤田四郎、河部基一、平井成成

三春會(洋) 東京市本郷區森川町四二、野崎方

昭和三年度東美校洋畫科卒業生を以て組織。十六年五月東京府美術館に第八回展開催。

〔會員〕岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝好、二宮不二磨、和佐良顯、大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太

郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、松原勝、福島順之助、小松原義則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清三都工美會(工) 大阪府住吉區北畠

東一ノ二四、汎工藝社内

昭和十五年四月創立。東京、京都、大阪の三大都市に在住する工藝家を以て組織し、汎工藝社主宰紫崎風岬が會の運用を計り、年一回展覽會を開く。

〔賛助員〕板谷波山、香取秀眞、津田信夫、沼田一雅、清水六兵衛、山鹿清華、戸島光阿彌〔會員〕五十餘名

山南會(日) 京都市上京區小山下初音町一六、高橋方

故土田麥選の門下が昭和十四年十一月結成した會で、十七年第三回展開催。

〔會員〕伊藤草白、稻田麥楓、原田美智惠、德力富吉郎、築地徹三、千地秀弘、萩原涌石、恩田耕作、川勝一止、高橋太三郎、丸岡比呂史、松山政春、松本晃光、福田豐四郎、小松均、小柳泰然、江龍白峯、木村楊照、清水洵平、山林文子、吹田草牧

珣々會(日) 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部

高島屋美術部主催。昭和十七年第八回展開催。

〔會員〕西山翠嶂、錦木清方、菊池契月、緒城素明、上村松園、小杉放庵

産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六 電戎一九四、七五一

京阪神地方を中心とし、産業工藝に関する調査、指導獎勵、海外紹介を行ふ。機關誌「産業工藝」の編輯をなす。

〔主事〕上田儀一

産業振興運動廣告作品展覽會 大阪府北區堂島、大阪毎日新聞社事業部内

大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十六年春東京及大阪に第十回展を開催。

燦木社(日) 東京市板橋區中村町三ノ六二二、東谷桃園方

大正十五年五月創立。東美校圖書師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織、年一回展覽會開催。昭和十七年四月第十七回展〔會員〕穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣龜夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、山田武、石井進、志津輝雄、永山利男、大橋太郎、川合清四元莊(洋) 東京市淀橋區東大久保

一ノ三五七、鈴木繪畫研究所内

昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。十七年第五回展を開く。

〔莊首〕鈴木千久馬〔同人〕會員辰雄、安藤信哉、新道繁、外十三名

四行會(洋) 東京市豊島區池袋四ノ四四五、齋藤福藏方 電大塚二五〇一

獨立展所屬の作家四名を以て組織。展覽會を開催する。

〔會員〕竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、宮樫寅平

滋賀縣工藝協會 滋賀縣經濟部商工課内

縣下工藝の發達を圖り、展示會其他を行ふ。

〔會長〕縣經濟部長

滋賀圖案會 大津市東浦、縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織。縣内の物産及工藝品の意匠圖案の向上を計るため展覽會、講演會の開催、現地指導觀察旅行等をなす。

〔會員〕深澤和美、村瀬眞治、新井武治、廣瀬義景、坪井明、藤田幸助、松宮寛明、井口俊夫

自由學園工藝研究所 東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立。工藝品の創作並に發表をなす。十三年五月以降自由學園北京生活學校に於て中國少女を指導し、工藝品の製作を行ふ。

時習園(工) 京都市東山區五條橋東四丁目、淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案の創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎

〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宜秋、平井香秋、櫻田光可、平野泰三、西澤玉舟、楠田應泉

七絃會(日) 東京市日本橋、三越美術部内

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、昭和十七年十一月第十三回展開催。

〔會員〕鍋木清方、小林古徑、菊池契月、安田叔彦、前田青邨〔物故會員〕平福百穂、速水御舟、土田麥遷、西村五雲

七彩會(洋) 東京市大森區馬込町東三ノ八二二、長谷川泰子方

昭和十一年一月結成。各派七名の女流洋畫家の組織する會。毎年、東京、大阪に展覽會開催。

〔會員〕橋本はな、藤川榮子、三岸節子、佐伯米子、遠山陽子、鳥あふひ、長谷川泰子

七人社(圖) 東京市牛込區東五軒町二、岸秀雄方 電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名にて發企、昭和元年東京三越に第一回創作ボスター展開催。圖案、商業美術、挿繪等をなす。

〔會員〕岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田德郎、野依健、前島誠一

七洋美術會(洋) 東京市蒲田區仲蒲田三ノ九、三木辰夫方 電蒲田二七五六

文部省航海練習所の練習船に便乘した畫家を以て組織する。海洋美術の研究、普及を目的とする。

〔會員〕竹内英雄、内堀勉、北川民次、三木辰夫、中西次郎、松下義晴、宮下仁

靜岡縣工藝協會 靜岡市追手町、靜岡縣商工課内

昭和九年設立。縣下工藝の發達を圖り、工藝に關する調査研究、展覽會、講演會等を行ふ。

〔會長〕靜岡縣經濟部長

靜岡縣美術協會(綜合) 靜岡市綠町

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年靜岡縣出身並在住美術家を以て組織。年一回靜岡市に於て繪畫、彫刻、工藝の公募展を開催。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕尾崎元次郎

〔常任幹事〕原川和雄

〔第四回展審査員〕牧野虎雄、石川欽一郎、中村岳陵、澤田晴廣、芹澤銈介

實在工藝美術會 東京市本郷區駒込林町一五五、高村豐周方 電駒込一一八二

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向にあきたらず、「工藝の實在性」に新境地を開拓するを目的とす。十一年度より春季公募展秋季同人展開催。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤泰治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謙也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎〔會友〕磯矢阿伎良、西村敏彦、大坪重周、金丸重嶺、武樋貞波、中村董一、山脇敏子、山脇道子、松崎福三郎、深瀬嘉臣、小畑雅吉、清水巖、森羅一郎、八井孝二、渡邊泰男、山本壽會田裕宜

芝浦工藝會 東京市芝區西芝浦一、東京高等工藝學校内

東京高等工藝學校出身者及び同校關係者

〔會長〕鈴木京平〔副會長〕鎌田彌壽治

〔幹事長〕杉山豐楫、會員二四五〇名

支部二十ヶ所

島根縣工藝協會 松江市殿町、島根縣物産獎勵館内 電四四五

昭和九年七月創立。同縣の工藝振興を計り縣内の工藝家、圖案家及販賣業者を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研究、展覽會、競技會の開催又は助成、内外展への出品斡旋等を行ふ。

〔總裁〕島根縣知事

下萌會(日) 東京市牛込區若宮町二九、川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生により組織、毎月一回定期研究會を開催し、又臨時展覽會を催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本麥水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤馨浦、古屋正壽、磯部草丘、石渡風古

朱玄會(洋) 東京府下武藏野町吉祥寺本南二四〇五、栗原信方

二科會の宮本三郎、田村孝之介、栗原信の三名により組織、同人展を開く。

朱弦會(日) 東京市世田ヶ谷區代田二ノ七六三、川船水掉方

故小堀鞆音の門下が組織する革三會の會員の一部を以て結成する。大和繪の研究、國史畫の檢討を目的とし、展覽會を開く。

〔會員〕安田叔彦、川崎小虎、川船水掉、磯田長秋、小堀安雄、森戸果香、眞野清

羽石光志

朱葉會(洋) 東京市淀橋區下落合一ノ五四〇、大久保方 電大塚四〇三七

大正七年創立。年一回公募展を開く。

〔會員〕土肥正枝、達山陽子、大久保百合子、大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、谷島豐子、谷貞子、八星三代、秋元松子、宮崎美喜、平岩夏子、一本微子

徳川禮子、仰木ゲルト、黒瀬雅子山口葉子、櫻井その子、下田愛子、友田みね子、小野信子、尾關梅子、渡部百合子、中山時子、村井靜江、藤川榮子、藤江志津、安藤孝子、佐藤敦子、佐伯米子

本間瀬鉦子、島あふひ、岡本みち子〔會友〕七名

聚工會(工) 東京市豊島區雜司ヶ谷町一ノ三四七、磯矢阿伎良方 電牛込二三四

昭和八年解散の凸凹會々員を中心に昭和十年六月結成。工藝各科作家の集團、相互の研究並親睦機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中武雄、多田茂吉、宮井健平、三好弘、清水巖、森羅一郎〔地方會員〕八井孝二、大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清一、安部郁二、高見九藏、山本達次〔客員〕安藤春治

十年社(日) 東京市淀橋區下落合四ノ一六八八、石田粧春方

大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。展覽會開催。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井墨江、平岩三陽、石田粧春、小野踏青、品

山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴一花村晃歎、中村青以、榎本千花俊、遠藤敦三

春光會(洋) 西宮市神樂町四一、伊藤慶之助方

春陽會、新興美術展の出品者にして、伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集團昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會開催。會員四十五名

春虹會(日) 東京市日本橋、三越美術部氣付

三越の主催で昭和十年京都在住の畫家十餘名を以て組織。毎春東京、大阪の三越に展覽會開催。同十六年第七回展開催

〔會員〕板倉星光、石崎光瑤、西山翠嶂堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、金島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、宇田萩郎、上村松園、山口華楊、窓本一洋、福田平八郎、神原榮峰、菊池契月、三宅風白、三木翠山

春臺美術會(洋) 東京市麻布區網代町一ノ十號、内藤康方 電三田四七八五

大正十年本郷研究所有志に依り赤海社繪畫展が組織され、同十三年迄四回の展覽會を開いたが、同十四年之を解散し改めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三郎助を副會長に片多徳郎を推して同年より毎春一回展覽會を開催。昭和五年「春臺美術展覽會」と改稱。昭和十四年九月岡田會長逝去に依り組織を改め同十七年一月公募展として第十七回展開催。

〔顧問〕和田三造、辻永〔賛助〕中村研一、太田三郎〔委員〕石川滋彦、緒方亮

平、和田清、内藤康、江藤純平、有岡一郎、笹鹿彪、鬼頭鍋三郎、宮本恒平、關口隆嗣

春泥社(日) 京都市富小路二條南、福村方

昭和十二年五月結成。關西の婦人日本畫團體。同十三年九月京都大丸に第二回展開催。

〔會員〕生田花朝、丹羽阿樹子、大日三世子、梶原緋佐子、藤本園子、小松華影、秋野不矩、木谷千種、三谷十糸子、廣田多津

春陽會(洋) 東京市杉並區和田本町八三二、木村莊八方 電中野四二四七

大正九年秋、藝術の自由を唱へて日本美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員を迎へて同會を創立した。發會に際し

「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設し十二年迄續いた。昭和十年帝院改組に際し、同會はその試案を提出したが結局新帝展の機構は會の理想に一致せず、其の年不参加を聲明した。

〔會長〕村上宇一〔總務〕霜島之彦〔顧問〕中澤岩太

加、同翌年長谷川昇、岡本一平が之に續いた。同十三年當局より文展審査員參加の交渉あり、官展機構に關する豫ての會の意見である綜合案に近い故を以て、中川、木村を審査員に送り爾後協賛の方針を持して居る。同會自營の春季展には變化はない。十七年第二十回展。

〔會員〕足立源一郎、石井鶴三、伊藤慶之助、今岡啓司、岡鹿之助、加山四郎、川端彌之助、木村莊八、國盛義篤、倉田三郎、栗田雄、小穴隆一、小林徳三郎、小杉放庵、田中善之助、高田力藏、鳥海青兒、中川一政、長谷川潔、前田藤四郎、水谷清、森田勝、横堀角次郎、若山爲三

〔會友〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、兼平英示、木下公男、齋藤清二郎、眞田久吉、柴田恕夫、高木勇次、田中壽太郎、田川勤次、土屋義郎、津田正則、藤堂奎三郎、中谷泰、新沼杏一、南條一夫、原精一、二見利節、本莊越、楊佐三郎、吉田達磨、和田歳一

如水畫談會 東京市神田區一ツ橋、如水會館内

昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織。岸浪百軒居を講師とする。會員八十名

昭和工藝協會 京都市岡崎公園、京都市商品陳列館内

昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十八名を以て組織。毎年京都及東京に於て展覽會を開催。

〔會長〕村上宇一〔總務〕霜島之彦〔顧問〕中澤岩太

昭和工藝美術展覽會 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部内

昭和九年創立。舊帝展系作家の集團。作品發表、新古工藝美術の研究等をなす。

同年高島屋に於て第一回展を開催、以後毎年展覽會を開く。

昭和みつゑ會 横濱市神奈川區岡野町一三一、藝能教育研究所内 電神奈川六二五

昭和十年十二月創立。水彩畫の展覽會講演會を開催す。

〔主なる會員〕桂龍雄、青野馬佐奈、東本春水、古川弘、藤田薰、石野隆、芹生政夫

上社會(洋) 東京市豊島區駒込一ノ二八、藤岡一方

昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織。昭和十七年第十五回展開催。

〔會員〕林炳東、張秋海、顏水龍、金貞探、譚連登、都相鳳、池田幸太郎、石井清夫、猪熊弦一郎、荻野映彦、染木照、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山爽、高嶋功、瀧波恒雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高德、山口長男、太刀川英次郎

農鳥社(日) 京都市上京區北野紅梅町、山口華楊方

明治四十五年創立の西村五雲、農鳥社

は昭和十三年九月五雲の逝去により解散

同年十一月六日舊學生の總意に依り新たに農鳥社を結成し、山口華楊、前田萩郎、西村卓三の三名が總務となつた。研究會展覽會等を行ふ。同人七十五名

新關西美術協會(洋) 大阪府南區南炭屋町四九、池島勘治郎方 電南九一八

關西に於ける獨立美術協會系の團體で昭和十七年十月に公募第二回展を開催した。

〔常任理事〕小出三郎、豐藤勇、森有村

新京美術院東京分室 東京市大森區馬込東一丁目一三一八

滿洲國新京特別市の助成美術機關たる新京美術院の分室で、研究生の指導養成に當る。昭和十六年開室。新京美術院の職員は〔院長〕川端龍子〔主事〕和泉德一〔研究員〕鶴田吾郎、坂口一草、横川毅一郎〔助手〕木村鹿之介〔舍監〕黑沼勇太郎〔庶務〕濱出青松〔學生監〕丸山忠夫

新古典美術協會(洋、彫、工) 東京市世田谷區玉川奥澤町一ノ一一九、金子九平次方

昭和十一年設立。舊稱新古典派協會。洋畫、彫刻、工藝の公募展を開催す。

〔會員〕金子九平次、蜂須賀年子、土方久功、土田實、松田候三、森川鏑〔客員〕森口多里、成田重郎

新畫會(日) 京都市左京區銀閣寺前橋本關雪方 電上四六〇

大正八年橋本關雪門下に依り組織。其後一時解散したが、昭和十年橋本關雪の

帝國美術院會員に任命を機とし、有志の發起に依り再興された。昭和十一年十一月、京都大丸に第一回展開催。以來引續き開催。

〔指導者〕橋本關雪〔會員〕橋崎鐵香、榎崎朱雀、三津川光胖、小笠原彌、川田虛舟、宮瀬泉城、竹林愛作、竹内貞觀、高安龍雲、後藤杏鳥、石塚仙堂、仙波久榮、稻垣錦莊、木村杏園、伊藤逸峰、襟文峰、淺野鶴汀、小林直衛

〔幹事〕木村杏園、仙波久榮

新構造社(洋、彫、工) 東京府下小金井町四四八、三村英一方

昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の計畫的なる違犯行動と認め、彫刻部會員を退會者なりとして決議し新に會規を制定して同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。同十一年七月寺畑助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱、更に工藝部を新設した。同十五年寺畑助之丞外六名が退會。十七年第十六回展開催。

〔會員〕(繪畫部)足立重興、内田正男、内島親晴、改井德寛、倉本七郎、神山恒多比羅榮一、上田重正、三村英一、北澤博生、市川兼治、山本好信、本田勇市、小田原龍生(彫刻部工藝部)岡登けい子、スエタケ・タツ、高野直一、宇佐美弘業

〔會友〕八名〔代表〕三村英一

新興岐阜美術院(日) 岐阜市梅林(小鹽邸内) 電二七六〇

純正日本美術の向上の爲、岐阜在住の畫人を集めて設立。創立、昭和十六年六月。春秋二回公募展を行ふ。十七年五月第二回展開催。

〔顧問〕川崎小虎、水田竹園〔同人〕小鹽美州、小島紫光、杉山祥司〔客員〕大橋翠石、加藤榮三

新興美術協會 東京市豊島區堀内町三〇 電大塚二五一八

昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖書、工作及び作業科教育の擴充を圖り臨時、會報及研究パンフレット等を發行する。

〔理事長〕石野隆

新興美術院(日) 東京市下谷區竹町九五、芝垣興生方

昭和十二年、日本美術院を脱退せる元院友十二名を以て結成した。昭和十七年三月第五回公募展開催。

〔同人〕茨木杉風、保章良朔、吉田澄舟、田中案山子、小林三季、小林渠居、鬼原素俊、芝垣興生、森山夢笑〔準同人〕岡田魚降森、竝木瑞穂、福島秀行、眞島元枝

〔同友〕十六名

新興美術協會(洋) 大阪府旭區新森小路南一丁目一一九、藤堂李三郎方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。關西洋畫の發達を期し一派に偏せず、特色ある作家を迎ふるを趣旨とす。毎年一回公募展を、大阪を中心として開催する。昭和十七年大阪市立美術館に於て第十一回展を開催した。

〔會員〕田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勲次、三木朋太郎、末下公男、若山爲三、藤堂李三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田歳一、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、永瀬義郎、會友十三名

新自然派協會(洋) 東京市目黒區中目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基主宰にて創立。十七年第九回同人展開催。

〔主幹〕小城基〔顧問〕荒城季夫、川路柳虹、黒田鵬心、森口多里、田邊孝次、外山卯三郎、會員其他四十餘名

新制作派協會(洋、彫) 東京市世田谷區世田谷四ノ六三六 伊勢方

昭和十一年七月、第二部會が文展に參加するに及び、從來帝院の獨立帝展の解消を主張し來れる猪熊弦一郎、内田巖佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は同會を離脱、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名とともに同會を設立した。同十四年七月國畫會の彫刻部と合同した。同十七年東京府美術館に於て第七回公募展を開催す。

〔會員〕(繪畫部) 猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、三岸節子、萩須高德、坂井範一、伊藤繼郎、小松益喜、内田武夫、今村俊夫(彫刻部) 本郷新、吉田芳夫、柳原義達、山内壯夫、舟越保武、明田川孝、佐藤忠良、菊池一雄、早川魏一郎

新揮畫家集團 東京市板橋區板橋一ノ二五二七、渡邊太刀雄方

昭和十四年冬創立。研究會を開催し、春秋二回展覽會を開く。

〔同人〕渡邊太刀雄、加藤一志、桂木謙輔、筒井直衛、直木久蓉、木原芳樹、京川敦美、結束菊彌

新彫塑協會 東京市世田谷區野澤町一ノ二四一、元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下、早川魏一郎(後に脱退)、太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川勇造の藝術的主張を継ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別した。同會は年一回公募展を開催し又海外作家の紹介に努める。十一年六月第二回展開催。

〔同人〕飯島三四二、岩田清平、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武、岡本庄三

新燈社(日、洋) 兵庫縣芦屋市芦屋岸ノ下七二、山田皓齋方 電吉屋四二五九

大正十一年創立。毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十七年第二十回展に及ぶ。

〔名譽同人〕青木大乗〔同人〕北村種三、寺田六華、葛浦大悦、山田皓齋、沖中陽明〔幹部〕三十五名

新日本美術聯盟 東京市京橋區木挽町五ノ一、オリオン社内 電銀座四〇八八、五三八四

昭和十五年十一月創立。「我國戰時下の

精神面を積極化し、皇國の風土、民族の特質に由來する独自の新美術形態を確立し、新體制の文化的翼とならんとする。展覽會、講演會の開催、機關誌發行等を行ふ。

〔理事長〕鱧利彦〔常任理事〕河越虎之進、中村新次郎、尾崎三郎、鶴丸照彦、葛見安治郎、兒玉徹、佐藤章、淺野薰、芳賀俊、入江弘〔理事〕坪井甚吉、赤塚時雄、田澤八甲、笹野松夫、小室孝雄、池田永一路、沼田城佳、勝岡田武夫、谷口午二、新居廣治、福田左都夫、加賀山啓二、村田元、喜入巖、渡邊八洲夫、井口奈保江、加藤新〔顧問〕武藤夜舟、中井宗太郎

新日本洋畫協會 獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究生有志の組織する作品發表機關、昭和十年九月第一回展開催。十六年第八回展開催。會員約二十名。

新版畫會(版) 東京市蒲田區蓮沼二ノ二一、旭方

昭和十五年十一月創立。展覽會を開く。

〔會員〕旭泰宏、森田路一、大宮昇、前川千帆、畦地梅太郎、奥山儀八郎、鷹山字一、前田政雄、三木辰夫

新美術家協會(洋) 東京市世田谷區世田谷四ノ五〇四、松本方 電世田谷三九三一

昭和四年設立の鉦人社を同七年改稱せるもの。年一回東京府美術館に同人展を開く。昭和十七年第十四回展。

〔會員〕伊藤久三郎、服部正一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎、桑原實、大澤昌助、高田誠、田中忠雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、中村善策、中村琢二、山尾薰明、荻野正雄、松本弘二、田邊三重松、瀧川太郎、寺田竹雄、古家新、藤井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉、宮川仁、新海覺雄、清水刀根、玉澤潤一、小野藤一郎、西阪修、小出卓二、榎倉省吾

新美術人協會(日) 東京市板橋區常盤臺一ノ二〇、岩崎輝方

昭和九年東京、京都の同志十七名により新日本畫研究會を結成、新時代の日本繪畫樹立を盟約し、展覽會を開き十二年第三回展に及ぶ。十三年二月同會々員により新美術人協會を設立、「新時代と共に成長する作家の協力を求むる」公募制を採用、十七年五月第五回展開催に至る。

〔會員〕岩崎輝、海老原南爽、大石哲路、神田禎之、久保田善太郎、酒井亞人、島田良祐、柴田安子、福田豊四郎、藤田隆治、藤田復生、間宮正、米田莞爾、吉岡堅二、堀文子、柴山光台

新壁畫協會 東京市目黒區下目黒三ノ五六七 電大崎三八三三

新壁畫の研究團體。

〔顧問〕小林源太郎、渡邊泰次〔會員〕川邊實、有田秀夫、池澤賢、込山俊男、高柳博也、森哉一、山崎穰

新浪漫派美術協會 東京市荏原區戸越町四七〇、佐田勝方

昭和十四年六月、日本畫、油繪、立體

寫眞等の青年作家を以て組織した。展覧會を開く。

〔顧問〕福澤一郎、瀧口修造〔同人〕三十餘名

水彩聯盟(洋) 東京市豊島區池袋三ノ一三六、荒谷直之介方

水彩畫專門の會で、昭和十五年十二月第一回の同人展を開催した。

〔會員〕荒谷直之介、春日部たすく、小堀進、小山良修、荻野康兒、齋藤大、渡部菊二、山中仁太郎

寸土社(洋) 兵庫縣寶塚區内米谷和田正節方

洋畫研究團體。昭和八年より略毎年大阪に作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、井上富三、原崎吾一、和田正節、鍋本順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、安藤金一郎、木下公男、樋口治、森島忠夫、鈴木總作

〔常任幹事〕和田正節

瀬戸作陶會(工) 瀬戸市東南町一七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統的工藝の再興を趣旨とす。毎年東京及瀬戸に於て展覧會を開催す。

〔會長〕水野憲吾〔同人〕大江文象、加藤績、瀧川七郎、栗本儀三雄、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、永野壽山、加藤英一、水野壽三三、鈴木八郎〔會友〕五名

瀬戸市陶藝協會(工) 瀬戸市役所産業課内 電二四〇〇

昭和十一年創立。同市の陶工並贊助者を以て組織。事業として陶藝に關する研究、郷土工藝資料の調査、展覧會、講演

會の開催、他への出品斡旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕水野憲吾〔理事長〕齋藤元男

正統木彫家協會(彫) 東京市世田谷區玉川田園調布二ノ七二六、澤田晴廣方

昭和十五年五月結成した。木彫の藝術研究、公募展の開催を目的とす。十七年第二回展開催。

〔會員〕澤田晴廣、三木宗策、西村雅之、阿井瑞幸橋、本高昇、本田德義、長澤幸夫、圓錐勝二、西山如桐、和田金剛、宗像庄一郎、佐藤靜司〔會友〕十餘名

世紀美術創作協會(日) 京都市左京區下鴨森ヶ前町二六、戸田北遙方

昭和十五年九月創立。京都及び大阪に於て展覧會を開催す。

〔同人〕今尾景春、戸田北遙、大高爲山、奥村紅穂、寺田蘆秋、佐藤空鳴、宮尾光峯

生活工藝聯盟 東京市芝區西芝浦一

東京高等工藝學校内

同校卒業の有志を以て組織し、生活工藝に關する研究、發表等を行ふ。

〔幹事〕杉山豊祐、西川友武、豐口克平、山崎幸雄、岩村朝彦、磯村卓郎、石井華一、鈴木太郎、伊藤米次郎、齋藤四郎、山口正城、古關弘之、大泉博一郎

井井會(日) 東京市麴町區六番町六

ノ一 宮崎政近方 電九段二七四七

井南居宮崎政近の主催する新作日本畫展。昭和十三年三月第一回展開催、以後毎春開催。

生産意匠聯盟 大阪府浪速區惠美須町二ノ一四六、上田儀一方 電戎一九四七五一

昭和十四年五月創立。「意匠的研究を中心として實用工藝の新しい展開を促しその科學的生産化と輸出商品化を圖るを以て目的とし研究製作とその發表を事業の樞軸として活動す」。

〔會員〕跡部勇、近藤桂二、加藤清澄、中山正人、須藤雅路、幸尾作次郎、上田儀一、柏崎榮助、小池岩太郎、松岡武夫、須田幸治、上田健一、安永良徳、村井次郎、鈴木正道、小松榮、西野弘、久野久生、産美術協會 東京市麴町區有樂町一丁目四番地 日本産業同志會内 電銀座三八九六

美術を通じて勤勞者の生活に創造の温床を與へんと大政翼賛會並に大日本産業報國會の後援によつて昭和十七年十一月結成。勤勞者に對する美術指導その他の事業を行ふ。

〔顧問〕高田元三郎、高村光太郎、吉阪俊藏、〔理事長〕桐原葆見〔理事〕足達義雄、伊原宇三郎、今井俊介、今泉篤男、大下正男、椎貝日郎、志賀健次郎、清水多嘉示、清水登之、須田國太郎、戸川行男、中山巍、山口久吉、山本豐市〔評議員〕桐原葆見、高橋健二、野津謙、根上耕造、藤村利常、菅井準一、上田久七、金子義男、黒崎貞治郎

青丘會(日) 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部内

高島屋美術部主催。昭和十七年第七回展開催。

〔會員〕德岡神泉、山口華楊、奥村土牛、小倉遊龜、太田聰雨、吉岡堅二、福田豐四郎、山本丘人、上村松篁

青衿會(日) 東京市大森區池上本町一一 伊東深水方 電池上二二二

伊東深水、山川秀峰を中心とする人物畫の研究發表團體。

青松會(日) 大阪府南區日本橋三丁目、大阪松坂屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、堂本印象、德岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村丘陵、宇田萩郎、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、案本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃市

青樹社(日) 名古屋市外守山町文化村、横山方 電守山一一四

舊稱白曜會。毎月研究會を開き、初夏に大展覽會、秋に小品展開催。

〔同人〕横山龍生、安藤美鑑、宮坂一義、鳥谷自然、我妻碧宇、加藤辰明

青驥社(日) 東京市淀橋區下落合三丁目一五〇一、岩田秀雄方

昭和十三年四月創立。日本畫の研究團體。十七年第三回展を開く。

〔同人〕石井了介、岩田秀雄、大山華環等十一名

青土社(彫) 京都市左京區修學院大林町一六、松田尚之方

昭和十三年創立。京都在住の彫刻家を以て組織し、毎年春秋二季に展覽會を開

催す。

〔會員〕德岡神泉、山口華楊、奥村土牛、小倉遊龜、太田聰雨、吉岡堅二、福田豐四郎、山本丘人、上村松篁

青衿會(日) 東京市大森區池上本町一一 伊東深水方 電池上二二二

伊東深水、山川秀峰を中心とする人物畫の研究發表團體。

青松會(日) 大阪府南區日本橋三丁目、大阪松坂屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

く。

〔會員〕松尾薫、松田尚之、徳力牧之助
田中源三、柴田和彦、山本節郎、岡本庄
三、若田政一、伊勢保三、加藤春平、矢
野判三、丸山政次、西川亨、吉川常雄、
久保駒太郎

青龍社（日） 東京市大森區新井宿四
ノ一〇五三 電大森三〇一二

昭和三三年川端龍子日本美術院を脱退す
るに及び、龍子及び其御形塾員の制作發
表の機關として同四年六月同社を創立。
同年東京府美術館に第一回展を開催同十
七年第十四回展に至る。尙秋期本展覽會
に對して毎年「春の青龍社展」を開催す。

春期展は秋期展に於ける入選者を出品資
格者として、鑑別の上陳列す。豫て「健
剛なる會場藝術」を唱へ、且つ在野團體
としての主張を明瞭にすべく官展には參
加しない。

〔主宰〕川端龍子〔社人〕川端龍子、坂
口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豐
〔社友〕安西啓明、小島鼎子、木村鹿之
介、佐藤木草、市野亭、時田直善、利谷
双樹、濱出青松、森省三〔社子〕松宮左
京、坂平安、奥田正一、結城天童、岡部
健一郎、大塚榮治、菱田幾久、渡邊不二
根、河野正長、佐藤正一、鈴木茂子、里
見公起、上條靜光、直江義泰、内池星子
鍛冶海雪、小川茂麻呂、龜井藤兵衛、沼
野匡志、林榮太郎、琴塚英一、佐々木邦
彦、丸山峻、依田青霞、高山晴雄、中川
佐風路、吉野新生

清光會（日、洋、彫） 東京市日本橋
區江戸橋二ノ八松慶ビル 座右寶刊行會
内

昭和三八年四月創立。東京、大阪に展覧
會を開催す。十七年七月第九回展開催。

〔會員〕小林吉徑、安田毅彦、梅原龍三
郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤清藏
高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎
清流會（日） 東京市澁谷區圓山町四
櫻井霞洞方

會員は錦木清方の門下門井掬水、榎本
千花俊、寺島繁明、櫻井霞洞の四名。同
人展開催。

響我會（日） 京都市御幸町三條下ル
大正十年水田竹園門下を以て組織。年
一回展覽會を開催す。

〔會長〕水田竹園〔評議員〕水田硯山、
安田半岡、幸松泰浦〔幹事〕栗田槐山、
會員七十餘名

齊々會（彫） 東京市板橋區練馬南町
一ノ三四七一 眞鍋忠行方
東美校彫刻科の最近の卒業生を以て組
織。昭和十三年第三回展開催。

〔會員〕岩井藤吉、伊藤三子雄、井上信
道、石橋史郎、堀田巖美、渡邊一八大、
高橋英吉、山内晴臣、眞鍋忠行、佐伯留
守夫

染織技術官協會 商工省化學局内
昭和五年六月創立。各府縣主任染織技
術官、地方染織關係試驗場並講習所の場
長及所長並染織關係技術官を以て組織。

染織工業の改良發達を圖る爲必要な調
査研究をなし、供せて會員相互の業務上
の連絡並に親睦を圖るを目的とす。會員

百二十名
染織刺繍作家協會 東京市赤坂區青
山南町四ノ一大槻一雄方

染色、織物、刺繍の研究を目的として
昭和三年創立。展覽會を開く。

〔常務委員〕山形駒太郎、齋藤五百枝、
木村和一、大槻一雄、遠藤順治
関人社（日） 東京市品川區大井倉田
町三四一九濱倉清光方

伊東深水の朗峯畫塾々生有志に依り組
織。昭和十二年五月第一回展開催。

〔會員〕池田輝治、濱倉清光、津村新太
郎、植草保二郎、福山美都夫、遠藤輝可
佐伯春虹、澤井一三郎、鈴木康之

全關西美術協會 大阪市住吉區天王
寺町三〇七三塚口正一方
舊關西關西洋畫協會。全關西洋畫界の
綜合展開催を目的として設立。昭和二年
より毎春公募展開催。昭和十七年第十六
回展開催。

〔特別會員〕濱田稔光、國枝金三、黒田
重太郎、鍋井克之、横井禮市
〔會員〕古家新、小野藤一郎、高岡徳太
郎、田川寛一、渡邊逸三、岩崎重雄、
藤井二郎、小出三郎、中村眞、西阪修、
津田周平、伊谷賢藏、塚口正一、石丸一
錦義一郎、小出卓二、辻愛造、福島金一
郎、西村五郎、榎倉省吾、石井元、伊庭
傳治郎、田村孝之介、早川國彦、山本直
治、松本銳次、伊藤龍郎、飯田清毅、米
良道博、池島勘治郎、玉澤潤一

全日本産業美術聯盟 東京市牛込區
東五軒町二 電牛込四二七

昭和十一年十月創立。各種商業美術家
の團體を以て結成す。

〔委員長〕杉浦非水〔常任委員〕多田北
島、山名文雄、岸秀雄〔加盟團體〕H・
L圖案研究會、N・Cデザイン研究會、
構圖社、七人社、養生堂廣告美術研究會
新圖案協會、中央圖案家集團、實用版畫
美術協會、東京廣告美術家俱樂部、東京
印刷美術家集團、東京包裝美術協會、銀
座産業美術研究會、北海道商業美術家協
會、靜岡商業美術協會、大阪商業美術協
會、關西廣告美術協會、商業美術聯盟、
新廣告美術作家同盟、日本新美術家協會
神戸創作圖案協會、廣島商業美術家協會
北九州商業美術家聯盟、長崎商業美術協
會、熊本ボスター研究會、

全日本彫塑家聯盟〔事務所〕東京市
澁野川區上中里七二北村西望方〔故銅配
給部〕東京市澁野川區上中里一七二小
倉右一郎方

舊稱日本彫塑家聯盟。昭和十三年九月
物資動員に基く青銅使用禁止に對する策
を講ずるため、新に彫刻十四團體により
組織、翌十四年當局より銅使用許可を受
けたが、同十六年八月銅鐵回收運動のた
め再び禁止となりしを以て、當局と接衝
同九月故銅使用の許可を受けた。

〔加盟團體〕文展第三部作家協會、東邦
彫塑院、構造社、日本美術彫刻部、瀧
野川彫刻研究所、日本彫刻家協會、日本
木彫會、日本美術協會彫刻部、九元社、
新構造社、朝倉塾、太平洋畫會彫刻部、
塊人社、新制作派協會彫塑部、國風彫塑

會、二科會彫塑部、直土會、正統木彫家協會

梳風會(日) 東京市荒川區白暮里町九ノ一二四

故島崎柳場の棚々亭樂門下一同により組織、大正二年以來臨時展覽會を開いた。

〔幹事〕清田柳莊、木島柳鶴、石川綠南

高橋樵塙、仲村真壽

疎酌會(日) 大阪府池田市清壽美六五二瀧秋方

昭和十三年九月創立。毎年春秋二回展覽會を開催する。

〔會員〕生田花朝、内田稻葉、梶川眞人、草刈樵谷、小松均、菅橋彦、菅江白華、岡田桂二、立松玉泉、瀧秋方、津田青楓、西田逸堂、宮本頌、矢野鐵山

楚人社(洋) 札幌市北七條西五丁目能勢眞美方 電一六七六

昭和六年創立。主として札幌在住の洋畫家を以て組織する。同十二年五月第四回展開催。

〔同人〕今田敬一、繁野三郎、能勢眞美、久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尚、本間紹夫〔社員〕十六名

双台社(洋) 東京市荒川區日暮里九丁目一〇三五 石井柏亭方 電駒込四七三

石井柏亭に師事する畫家を以て昭和十六年五月創立、毎春府美術館に展覽會を開催す。十七年第二回展。

〔會長〕石井柏亭〔評議員〕赤城泰舒、中川紀元、平塚運一、望月省三〔委員〕二十名〔同人〕百十四名

神團會(洋) 大阪市浪速區西關谷町一ノ八黒田方 電戎三〇一八

大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一、和田歳一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所を經營したが昭和八年

NIGAG と共に大阪新美術家同盟を創立、以後同展に参加したが、十二年一月同展を脱退した。同十三年十一月第九回展開催。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本銳次、前田藤四郎、田川寛一、田川勸次、和田歳一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎、西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信

草芽會(工) 京都市東山區山科竹花塚本方 電山科一一五

昭和五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。工藝各種の研究團體。八年東京に於て第一回展開催。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鏡太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄

造形美術學會 東京市京橋區西八丁堀一ノ二 電京橋二三五九

横川毅一郎を主事として昭和十五年一月創立。現代美術研究部、美術史學研究部の二部を設け、美術文北諸般の研究發表を行ふ。

創元會(洋) 東京市世田谷區世田谷三ノ二四四五 須田方

昭和十五年十二月創立。美術本來の精神に徹し、我が國文化の向上發展に寄與する。十七年第二回展覽會を開催す。

〔會員〕阿以田治修、飯島一、牛島憲之、榎戸庄衛、園城寺昇、大貫松三、金澤重治、小柴錦侍、鈴木千久馬、須田壽中野利高、野口良一、樋口一郎、山下大五郎〔會友〕十五名

創元美術協會(日、洋) 臺北市京町一ノ三八古川義光方

昭和十三年創立。文展、二科、獨立等各派の出品者を以て組織す。十五年第一回展開催。

〔會員〕古川義光、久保田明之、飯田實雄、蒲地薫、宮田彌一郎、横田太郎、吉見庄助、秋本好春、名島貢、有川武夫、小田部三平、大賀湘雲、宮田金彌、染浦三郎

創造美術協會(洋) 堺市甲斐町西四丁目一六 玉澤方

昭和十年創立。舊稱セクション・ゲール。毎秋大阪市立美術館に於て會員の作品發表展を開催す。十七年六月東京展開催。

〔會員〕上島龍、河野通紀、小島大輔、小島詰治、小林武夫、下高原龍巳、高須操、高橋進、玉澤潤一、田村譽志那、永田順彌、西阪修、長谷川初女、堀澤好一、花谷時子

蒼原會(洋) 東京市神田區淡路町二ノ一一 水谷景房方 電神田一三二五

大正十一年日本水彩畫會研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等が創立した東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫専門の研究團體。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、小山良修、水谷景房、丸山東美男、松田寅重、中西利雄、野口健司、岡田正二、齋藤大、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、荒谷直之介、岡田節男、野澤潤二、相澤光朗、藤江志津、本多信彦、福田健夫

荻書社(日) 京都市左京區下鴨中河原町七一 池田遙邨方 電上六六六〇

昭和九年創立。竹内竹枝會内の研究團體で、月例研究會展覽會等を開催する。

〔會員〕池田遙邨、稻葉春生、川口吳川、加藤清彬、川本參江、山本朝光、小松華影、小豆島甘兆、柴原希祥

造型彫刻家協會 東京市豊島區要町二ノ二六 山内壯夫方

昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。展覽會に際しては主題の美術性を強調し、又、毎回外國作家の作品を紹介する。

〔會員〕芥川永、明田川孝、川口信彦、佐藤邦輔、清水要、武内收太、谷本整映、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、尾島積二、佐藤忠良、舟越保武、吉田芳夫、昆野恒、稻田健四

造型版畫協會 東京市京橋區入舟町三ノ一三 矢野桂一方

昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。十七年四月公募展により第六回展開催。

〔會員〕清水正博、柴秀夫、小野忠重、

水船六洲、末木東留、矢田桂一、宇治山哲平、畑野織藏、齋藤清、武井愛之助、東一雄

【夕刊】

太平洋畫會（洋、彫） 東京市下谷區

谷中眞島町一 電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱、第一回展を上野公園第五號館に開催した。同三十七年に洋畫研究所を開設、昭和四年に太平洋美術學校と改稱した。昭和十七年第三十八回公募展に至る。

〔會員〕 淺井眞、相曾秀之助、江崎寛友

布施信太郎、藤坂太郎、布施悌次郎、平澤定治、堀進二、星野二彦、石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、井口勇、今里龍生、金子保、木原二郎、北島吾次平、桑重儀一、小宮宗太郎、丸山曉霞、前田眞一、三上知治、光安浩行、水戸敬之助、永地秀太、中村不折、中野桂樹、野田半三、中田恭一、能見三三、岡村一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜巖、佐々貴義雄、齋藤俊雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、山下繁雄、清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、等々力巳吉、戸津文雄、玉井力藏、渡部春也、内田泉水、吉田博、吉田ふじを、安田豊、吉原甲藏

〔會友〕 有川武夫、福王誠、畑本一夫、堀潔、本郷惇、市原達夫、河本一夫、海

洲正太郎、小泉秀松、小坂健三、國澤和衛、小林森次、久保進、三輪捨三郎、名鳥貢、小倉一雄、坂本不二、鳥添鶴雄、鈴木貞司、鈴木隆、田村政四郎、田原利一、恒石敬磨、平尾良秀、早川芳彦

大潮會（日、洋） 東京市豊島區駒込

三ノ四〇三 浦崎永錫方

全國中等學校の圖畫教育關係者の作品的主張を明かにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として、毎年秋季に日本畫洋畫の公募展を開く。十七年東京府美術館に第七回展を開催した。

〔會長〕 小村捷治（當任理事） 浦崎永錫

〔理事〕 多賀谷健吉（評議員） 岩佐新、

大下正男、垣見宣修、松垣鑑雄、藤本留三、杉山司七、三浦直政

大光會（洋） 大阪府住吉區王子町一

丁目三六 胡桃澤方

東光會の大阪支部として昭和十五年一月結成。齋藤興里指導の下に洋畫の研究發表を行ふ。會員八十餘名。

大稻會（日） 名古屋市中區上前津五

森村宜方 電中二四八

昭和十五年創立。故森村宜稻の門下を以て創立。大和繪の研究を行ふ。

〔會員〕 服部有恒、林雲鳳、小寺禮三、喜多村光穂、森村宜永

大東亞美術協會 東京市麹町區丸ノ内

三ノ六仲通四號館六號 山口内 電丸ノ内五〇〇六

アジア民族文化の昂揚を圖る爲、日本の傳統的特質を共榮國諸國に紹介すると共に、共榮國內諸方の美術、工藝等を紹

來して、東亞文化交歡を致さんと昭和十七年八月設立。法人組織で展覽會その他の事業を行ふ。十七年九月第一回大東亞共榮國美術展覽會を東京府美術館に於て開催した。

〔會長〕 有馬頼寧（副會長） 菊地門也

大東南宗院（日） 東京市麹町區三番

町七番地

繪畫藝術によつて日滿華三國間の完全なる理解握手に達する道程を築かうと、昭和十六年八月小室翠雲等の南畫人によつて設立。南畫道の傳統精神を以て、聊か大東亞共榮國確立の爲めの藝術的奉仕に當らんと希ふものである」と趣旨末尾にある。毎年一回日滿華三國の重要都市に於て展覽會を開催する。其の他勤皇志士の事蹟顯彰並に遺墨展等を開き、又學藝研究所を設置して東洋文化藝術の徹底闡明を期する。

〔顧問〕 若槻禮次郎、久原房之助、町田忠治、青木信光、國分青崖、小川平吉、八田嘉明、金光庸夫、小泉又次郎（贊助員） 岡部長景外二十一名（院人） 心印畫塾一七三名、心印畫塾京都支部一八名、青莖社七七名、乾坤社一〇七名、興亞南畫院三一名、墨雲社三四名、日本南畫研究會五八名、日本南畫松聲會八四名、無所屬四名、公士會三名、熊本之部二〇名、朝鮮之部二名、滿洲國一名、中華民國四名（北京）一名（上海）（委員長） 小室翠雲（幹事長） 岩切重雄（企劃部） 河野桐谷、石川誠、古淵啞草（經理部） 峰村北山、高島祥光、高須芝山（聯絡部） 安

田半圃、栗飯原大醒子、降祺篁岳、河口樂土（宣傳部） 福田浩湖、關谷雲崖、小山居泉、横内大明（研究部） 河野桐谷、橋田永芳、石川誠、萩田東嶺、古淵啞草

〔主事〕 石塚彰吾

大日美術院（日）（東京事務所） 東京市本郷區西片町一〇 結城素明方 電小

石川一五七三（大阪事務所） 大阪府天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

昭和十二年三月創立。在來の流派系統を超越して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作研究を趣旨とす。十七年第五回公募展を開く。

〔同人〕 結城素明、川崎小虎、青木大乗、常岡文龜（院僚） 加藤榮三、菅澤幸司、藤森青雲、山田中吾、加藤英純、是永伸一、平口勝男、東山魁夷、菖蒲大悅、寺田六華、長嶺雅男、菊澤榮一、沖中陽明、池田尙之、山田皓齋

大日本鑛業協會 東京市京橋區銀座

西四丁目五ノ六號 銀座商館第四階 電

京橋五五一九

明治二十五年創立。社團法人。本邦鑛業の發達を圖り、雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。京都、大阪を初め各處に支部を設く。

〔理事長〕 黒田泰造（理事） 十四名（監事） 二名

大日本航空美術協會 東京市芝區田

安町一丁目三ノ一 大日本飛行協會内

昭和十六年五月創立。航空思想の發達

を計り、公募展の開催其他の諸事業を行ふ。同年九月第一回展開催。

〔會長〕堀丈夫〔理事長〕中村恒夫〔理事〕伊東深水、畠山錦成、島海青兒、太田聰雨、渡邊義知、加藤顯清、勝田哲、吉岡堅二、吉村忠夫、田村孝之介、名井萬龜、中村岳陵、中村恒夫、中村節也、中野和高等、中山巖、向井潤吉、上村松篁、野口彌太郎、國盛義篤、栗原信、山口蓬春、前田萩郎、藤田嗣治、福田平八郎、福田豊四郎、小磯良平、澤田晴廣、北川民次、木村莊八、木下孝則、宮本三郎、水谷清、清水登之、鈴木千久馬

大日本海洋美術協會〔洋、日〕東京市澁谷區原宿三ノ二四九 海軍協會内電青山二七七一、二七七二

昭和十二年五月海軍記念日を機として

海軍協會主催、海軍省後援の下に在京洋畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越に海洋美術展が開催され、同年六月海洋美術會の創立を見た。昭和十六年二月その組織を擴充し、大日本海洋美術協會と改めた。毎年海軍記念日を中心として、海軍協會と共同主催、海軍省後援のもとに海洋に關係の深い展覽會を開催する。

〔洋畫〕石井柏亭、石川寅治、長谷川昇、奥瀬英三、田邊至、中澤弘光、中村研一、永地秀太、山下新太郎、小林萬吾、權藤種男、北連藏、南薰造、御厨純一、三上知治、三國久、清水良雄

〔日本畫〕伊東深水、石本光郎、川端龍子、簗木清方、川崎小虎、吉岡堅二、野田九浦、久保田金僊、安田靉彦、矢澤弦

月、松林桂月、町田曲江、新井勝利、坂口一草、結城素明

大美展〔日、洋〕大阪府北河内郡枚方町御殿山、大阪美術學校内

大阪美術學校日本畫並西洋畫部卒業生全員を會員とす。昭和三年より毎年一回展覽會開催。

〔會長〕矢野橋村〔役員〕齋藤與里、福岡青嵐

大日本工藝會 東京市麹町區丸ノ内

丸ビル日本輸出工藝聯合會内電丸ノ内五三七二、六〇八五一六

藝術保存又は技術保存を要する工藝品等の生産、販賣、輸出について、時局に即應した総合的指導を行ふため、商工省の幹旋により全國工藝團體を一丸として昭和十八年一月設立。

〔會長〕吉野信次〔理事長〕國井喜太郎

〔理事〕豐田雅孝、阿原謙藏、松村光磨、安藤狂四郎、羽生雅則、辻謹吾、古屋惣太郎、黒田鴻五、大島永明、關屋延之助、藤山愛一郎、日野厚〔監事〕水野徳右衛門

大輪畫院〔日〕東京市目黒區上目黒八ノ五三八 電澁谷三三四四

昭和十三年六月創立。小林彦三郎主宰し、主として明朗美術聯盟の舊同人に依り結成す。春秋二回展覽會を開催し、秋季展は公募に依る。毎月研究會を開催。

〔同人〕主宰・小林彦三郎、楠奉白光、立脇奉山、佐々木順〔院友〕廣井陵雲、西之坂水勢、篠田忠康〔準院友〕四名

〔會員〕十七名

體漆工房〔工〕東京市四谷區永住町

二 電四谷八〇四九〔呼出〕

昭和十三年五月創立。漆工、乾漆の立體的工藝品製作研究を目的とす。

〔顧問〕和田英作、和田三造、畑正吉、六角紫水

〔主事〕大槻二雄〔漆工主任〕河面冬山

第一美術協會〔洋〕東京市澁野川區田端町四五五 三國久方

昭和四年創立。毎年初夏、洋畫の公募展を開く。十七年第十四回展開催。

〔會員〕濱地清松、石川重信、河邊梅村、黒越正二、三國久、御厨純一、三木辰夫、松見吉彦、松坂康、中原實、佐野忠吉、鈴木巖、高橋亮、山田篤、山口美勇、吉澤廉三郎、谷井喜三郎、宇田川榮三郎、高橋賢一郎〔會友〕荒木菊次、袴田恒男、長谷川富三郎、川口精六、小島三郎、照木廣一、土岐浩藏、横山群、山樹寅二郎、木下正治、木村捷司、中野うめよ、三室美晴、中島喜美、星野勝次郎

高松工藝協會 高松市市役所内

昭和七年五月創立。高松市の各工藝團體を綜合せるもので、展覽會、販路調査他への出品斡旋等を行ふ。

〔會長〕高松市長

鍛金協會〔工〕東京市下谷區谷中眞鳥町一

鍛金工藝作家を以て組織す。展覽會、其他を開催す。

〔會長〕石田英一〔委員〕二十二名、正會員九十一名

團樂社 東京市板橋區常盤臺一ノ二

九 西澤童寶文化研究所内 電板橋一二

〇一

少國民に關係ある題材の繪畫發表、人形玩具の研究發表をなす。紀元二六〇〇年創立。年一回展覽會を開催。

〔會員〕西澤笛畝、牧野司郎、梅岡玉葩、外十八名

筑前美術會〔綜合〕東京市麻布區櫻田町二八、薄拙太郎方

筑前出身作家により昭和八年結成、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。毎年展覽會開催。

〔顧問〕山崎朝雲、和田三造

竹立會〔日〕京都市右京區嵯峨神明町二一山本紅雲方 電嵯峨三六

竹内栖鳳門の竹内竹枝會内の研究團體

昭和十二年七月大阪三越に第一回展開催

〔同人〕山本紅雲、青木生冲、岩周集、中田晃陽、小森綠光、伊藤石華

中部水彩畫會 名古屋市中區區洲原町六ノ二八 東本春水方

昭和十二年創立。年一回公募による水彩展を開く。十三年十二月名古屋美術館に第一回展開催。昭和十五年十一月紀元二千六百年奉祝展開催。

〔公募展鑑査委員〕横井禮市、北川民次、早川國彦、石野隆、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、東本春水

中部日本商業美術聯盟 名古屋市中區御幸本町通一丁目 愛知縣商工館内

電本二一五六

昭和十一年創立。中部各縣に於ける商業美術關係諸機關を以て組織。商業美術の發達を圖るため展覽會、講習會等を開

く

く。十二年愛知縣商工館に第二回展開催
〔加盟團體〕岐阜縣商業美術協會、滋賀
圖案會、富山商業美術協會、福井商業美
術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美
術協會、三重縣觀光協會、新潟商業美術
協會

忠愛美術院（日、洋、彫） 府下保谷

町東伏見五六五 木寺方

昭和十六年八月創立された會で十七年
七月第二回展を開いた。

〔總裁〕中島今朝吾〔院長〕花岡萬舟
〔同人〕二十三名

朝鮮南畫院 京城府竝木町二四

大正三年創立。舊稱朝鮮木石南畫會。

朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とす。

本部及支部を設置し之に加盟する者を院
友となし、年一回院友の出品による展覽
會を開催す。昭和十一年十九回展に至り

十四年第二十回展開催。院友六百餘名。

〔主幹〕久保田天南〔幹事〕江原如水、
伊藤天達、大森天蔚、今井天澄、今澤天

洲

直土會（彫） 東京市澁野川區田端町

三六二 建昌研究所内 電駒込一四〇一

建昌大夢の門下を以て組織す。昭和十
七年第二回公募展開催。

〔會員〕服部仁郎、林謙三、大須賀力、

渡邊弘行、黒田嘉治、倉澤興世、山根八

春、山本稚彦、安達貫一、毛利教武、杉

浦藤太郎、伊藤芳雄、長谷川正雄、分都

順治、中野昂、安田周三郎、江川治、酒

見恒、木下繁、木内五郎、三木凱歌、明

珍勝友、峯孝、白井謙二郎、廣井吉之助

杉本三郎〔會友〕石渡清三郎、富岡泰、

片岡環、小松彌六、小林南龍、坂上正秋

北地莞爾、宮本光庸、今村輝久晃、建昌

覺造、田淵勝章、曹圭奉、長島利雄、野

口晴朗、荒木瑠子、佐野文夫、木村石斧

福田弘之、服部不二之、クルト・ドレ-

ベス、篠田弘

朝陽社（日） 東京市板橋區常盤臺一

ノ二九、西澤方 電板橋二一〇一

西澤笛畝の門下を以て結成し、毎年一

回展覽會を開く。

〔會員〕酒井白澄、坂倉半徑、杉原笛

邨、牧野大成等十一名。

〔贊助〕西澤笛畝

沈爾留（彫） 東京市目黒區自由ヶ丘

二七二 林是方

東美校彫刻科製造部の卒業生に依り、

昭和二年發會。毎春展覽會を開く。

〔同人〕長谷川正雄、林是、大須賀力、

奥田勝、黒田嘉治、佐土哲二、喜田三五

三木凱歌

圖案家協會 京都市伏見區桃山町宗

和園 澤田宗山方 電伏見六〇二

大正十一年創立。京都在住の圖案家を

以て結成。展覽會、研究會等を催す。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕澤田宗山、山

鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰

福岡玉保〔正會員〕百六十五名

圖書教育獎勵會 東京市下谷區櫻木

町二 電根岸三五六三

出版、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕結城素明〔理事長〕岩田徳太郎

〔理事〕澤田源一、加藤賢

帝國工藝會 東京市芝區西芝浦一丁

目 東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業

化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事

業として生産業者、販賣業者、美術工藝

實並に科學者の聯絡提携に努め、産業工

藝の状況を調査研究し、又地方特産工藝

品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月

雜誌「帝國工藝」發行。（事變中休刊）

〔副會長〕鶴見左吉雄〔顧問〕伯爵牧野

伸顯、〔常務理事〕安田祿造、和田嘉

衛

天地會（洋） 東京市世田谷區世田谷

一ノ九一八 岡常次方

奏橋洋畫研究所の末期の出身者を以て

組織す。恩師黒田清輝の遺徳を追慕し、

相互の研鑽に努む。同人展を開く。

富山縣工藝協會 高岡市中川、富山

縣工業試驗場内 電七一九

昭和四年創立。縣内の工藝家、販賣業

者其他を以て組織。工藝の發達、販路擴

張を目的とし、毎年縣下及東京、大阪に

展覽會を開催し、臨時講習會、講演會等

を開く。

〔會長〕富山縣商工水産課長〔副會長〕

縣工業試驗場長〔常務理事〕縣商工水産

課主事、富山市商工獎勵館長、高岡市商

工獎勵館長

東叡會 東京市麹町區四番町八 市

喜山義夫方 電九段三七五四

東京府美術館の借館に就て協議すべく

昭和九年組織された。

〔加盟團體〕一水會、白日會、二科會、

日本寫真會、日本美術院、日本水彩畫會

日本畫院、東光會、東京表裝飾組合、獨

立美術協會、讀畫會、東邦彫塑院、直土

會、旺玄社、太平洋畫會、第一美術協會

第三部會、泰東書道院、南畫聯盟、構造

社、光風會、國畫會、明則美術聯盟、上

社會、塊人會、春陽會、春臺美術會、新

制作派協會、新構造社、新美術家協會、

新美術人協會、實在工藝美術會、表裝同

人會、青龍社、正統木彫會

〔理事〕市喜山義夫、垣見泰山、藤本韶

三〔評議員〕石井柏亭、富田溫一郎、田

口省吾、東根徳夫、望月省三、熊岡美彦

香取重吉、兒島善三郎、湯原柳畝、小林

喜代治、石川寅治、濱地清松、石川確治

福田浩湖、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍

三郎、狩野晃行、藤岡一、安藤照、木村

莊八、笹鹿彪、内田巖、三村英一、酒井

亮吉、福田豐四郎、高村豐周、栗山弘三

郎、川端龍子、北村西望、建昌大夢、澤

田晴廣、野田九浦

東海美術協會（綜合） 名古屋市區

御幸本町 愛知縣商工館内

明治四十三年創立。美術及び美術工藝

の振興を圖るを目的とし、會内に東洋畫

西洋畫、彫塑、工藝の四部を置く。毎年

協會展を開催の傍、文展への出品の獎勵

並に之に關する各種の事務の取扱、研究

會、講演會の開催をなす。昭和十六年四

月第三十回を開く。

〔會頭〕岡谷惣助〔副會頭〕宮部鈴三郎

〔評議員〕石河有鄰、小林松仙、菊地香

三、原田隆諦〔主事〕大矢梅太郎、黒田

忠議、岡田良右衛門〔正會員〕（東洋畫）六十一名（洋畫）二十名（彫塑）一名

（工藝）一名

東京鑄金會（工） 東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號

明治三十六年創立。主として東京在住の鑄金家を以て組織し、毎秋展覽會を開催する。

〔會長〕香取重吉〔副會長〕渡邊長男

〔幹事〕山本安曇、香取正彦、北原三佳

山本純民、梅村豊舟〔評議員〕丸谷端堂

小野田晴正、長野埜志、山口淨雄、渡邊紫鳳、林萬壽人、山本自燭、根來實三、會田富康、加藤龍雄、原直樹、川利曉雲、高橋樂翠、村井美正、木村庄太郎

東京表具工業組合 東京市淺草區淺草橋一ノ三 香取重吉方 電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表装師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。年一同東京府美術館に表装展を開催。前表装師組合と稱したが、昭和十七年改稱して同年五月第一回を開く。

〔代表者〕香取重吉〔委員長〕寺内新太郎〔委員〕小川久雄、中村豊、安藤初太郎、根岸福太郎

東京府工藝協會 東京府經濟部總務課内 電丸ノ内一八一—一九〇

美術的工藝品の輸出轉換に努め、輸出向工藝品の高級化を圖り、新興工藝品の調査研究をなすとともに相互の連絡、工

藝品の輸出振興事業等を行ふ目的で、昭和十五年九月創立。

〔會長〕東京府知事〔副會長〕東京府經濟部長〔理事長〕經濟部總務課長

東京みつる會（洋） 東京市淀橋區下落合三ノ一七二七 佐藤平太郎方

昭和二年春創立。水彩畫の研究及び同趣味の擴充、展覽會、講習會等をなす。

〔總務〕佐藤平太郎、會員二十七名、會友十三名

東光會（洋） 東京市淀橋區戸塚町二ノ一二 電牛込一四四一

昭和七年、橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤與里の六名に依り結成。毎年春季に公募展を開き昭和十七年第十回に至る。尙十一年創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は退會。

〔會員〕齋藤與里、熊岡美彦、岡見富雄、渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章、小早川篤四郎、水船三洋、園部晋生、胡桃澤源人、平通武男、岩下三四、正田二郎、森田茂、石本秀雄、江藤哲、田代順七、松岡正直、辻利平、河原修平、家永麒三郎、河井達海〔會友〕山本清、松岡正、大和田富子、三田村榮、小貫綾子、松本富太郎、松居均、安達良雄、福井芳郎、西寺鐵舟、八藤勲人、鹽津誠一、藤田慎治、熊岡正夫、大寄丹次郎、野澤寛徳、富士子、山本貞子、井手祐子、清原武則、後藤愛彦、川本浩三、廣本森雄、西川高次、石田勝重、大平敬次郎、大木茂、山本日子士良、水野一好、山形光壽

村田宏治、高橋雅子

東暉會（日） 東京市澁谷區向山町一〇二 吉田方 電高輪三六五八

從來東美校出身有志の日本畫家が相互の親睦の爲、毎月懇話會を開催し來つたが、昭和十二年六月、新に東暉會と命名、結成した。邦畫壇の進展に寄與せんとするものである。

〔會員〕岩田正巳、服部有恆、畑山錦成、橋本明治、川崎小虎、狩野光雅、加藤榮三、吉田秋光、吉村忠夫、常岡文龜、根上富治、永田春水、村島西一、野口謙次郎、矢澤弦月、山本丘人、小泉勝爾、榎本千花俊、穴山勝堂、廣島晃甫、望月春江、杉山寧

東靈會（綜合） 奈良市雜司町、新納忠之介方 電三七五

昭和五年四月發會。奈良在住東美校出身並に奈良在住美術家有志の懇親並研究團體。毎年春季同人の展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕（日本畫）富田一昭、立野雪郷、谷山介春（洋畫）小野藤一郎、中村義夫、小松原義則、奥山堤（彫刻）新納忠之介、吉川政治、奥田勝、菅原安男、竹林薫

（金工）後藤年彦（漆工）幸王好太郎、北村久造、北村久齊（圖案）岸熊吉（染織）井上清一

東土會（彫） 東京市本郷區駒込神明町三四一後藤良方 電駒込一一五五

昭和六年創立。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊帝展出品者を以て組織臨時作品展開催。

〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豊、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東北美術展覽會（日、洋） 仙臺市三番丁、河北新報社内 電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催展覽會を同八年より河北新報社が引き繼いだもので、仙臺市に年一回日本畫洋畫の公募展を開催する。

〔會長〕河北新報社長 一力次郎〔副會長〕同副社長 一力五郎

東北北海道工藝協會 仙臺市二十人町通一〇、商工省工藝指導所内、電三七六〇—三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東北工藝の産業的發達を圖るを目的とし、事業として工藝品並意匠圖案の指導、販路擴張、競技會、展覽會の開催、各種工藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔名譽會長〕國井喜太郎〔理事長〕松崎福三郎〔常任理事〕苦米地竹次郎〔常任幹事〕樋浦守治

東陽會 東京市豊島區巢鴨六ノ一二九〇 宮尾方

宮尾しげを、岡本一平、北澤樂天、麻生豐其他の漫畫家を以て組織する。昭和十七年四月第二回展開催。

等迎會（洋） 東京市淀橋區角管三ノ一七八 長屋男方

大正十一年度東美校洋畫科出身者を以

て組織。隨時展覽會開催。

〔會員〕飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、三田康、三谷浩三、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻花會(工) 東京市杉並區久我山三ノ一三 三田村自芳方

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとす。臨時展覽會開催。

〔會員〕三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶水、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、山浦等

濤友會(洋) 東京市豊島區池袋二ノ九七〇 日高方

昭和十一年春結成。二科出品者の洋畫研究團體。

〔會員〕木崎轍、小堀進、桑原實、荻野康兒、日高健泰、財保、百足達六、中野亨、川合喜三郎、北島達夫、増田英一、森繁、山田順治(賛助) 藤田嗣治、野間仁根、北川民次

同人會 東京市神田區東神田二ノ四 栗山弘三郎方 電浪花一七一六

表装師の團體で、毎年展覽會を開催。

〔同人〕稻本金次郎、石井勇、星野常吉、大阪泰三、岡村辰雄、宇田川孝太郎、栗山弘三郎、山越廉三、安見三郎(會友) 十四名

同調會(日) 東京市板橋區常盤臺一ノ一〇號 岩崎方

昭和十三年度東美校日本畫科卒業生を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕岩崎鐸、池澤賢、石田一郎、河原丈夫、川本壽一、加藤英純、神田禎之、米澤裕二、土田幸一郎、村尾博仁、野嶋清一、黒田哲二、山崎民士、小池平四郎、佐藤正衛、三浦真一、宮川澄康、白尾嚴理、澁谷保三

堂本畫塾東丘社(日) 京都市東山區八坂東大路西小松町二 堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本印象の主宰する畫塾。昭和十三年六月第一回東丘社展を京都美術館に開催す。塾員七十三名。毎年展覽會開催。尙同塾には三樹會、春風會、如月會等があり、臨時展覽會を開催す。

童心文化美術協會 東京市中野區野方町一ノ七三三 西原方

昭和十六年一月創立。兒童のための繪本、玩具、演劇等に於ける美術文化の健全なる進歩を圖る。

〔幹事〕脇田利、大石哲路、齋藤長三、中尾彰、寺田竹雄、西原比呂志、山下大五郎、宇田川種治

童寶美術院 東京市澁谷區櫻丘町五電澁谷一九一七

昭和五年創立。人形藝術並に童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、展覽會、出版等を行ふ。

〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、豊泉益三

西澤笛畝、山田德兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫(顧問) 子爵岡部長景

童林社(洋、彫) 東京市澁谷區原宿一ノ六三 佐藤邦輔方

昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科の入學者により組織。毎年展覽會を開催す

〔會員〕五十餘名

德島縣工藝協會 德島市中前川町、德島縣工業試驗場内 電二八五三

昭和十二年創立。工藝品製造者、販賣者等を以て組織し、同縣の木材及其他の工藝の發達を圖る。事業として各種の調査、指導、印刷物の刊行、展覽會、講演會の開催、助成等をなし、輸出工藝の振興に努む。同十四年六月第一回展開催。正會員六十餘名。

獨立美術協會(洋) 蒲田區東六郷四丁目三一ノ八 鈴木保德方

昭和五年十一月二科會の兒島善三郎、里見勝藏、林重義等十一名、及び三岸好太郎、福澤一郎、高島達四郎を發起人と

して創立。同六年より東京府美術館に公募展を開催、大阪、京都、名古屋、福岡臺北等に地方展を催して居る。又自治制の研究を現在京都に設く。同十七年第十二回展開催。會員には種々移動ありしも現在は左の通り。

〔會員〕居串佳一、海老原喜之助、川口軌外、菊池精二、熊谷登久平、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、齋藤長三、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保德、須田國太郎、高島達四郎、田中佐一郎、中間册

夫、中村節也、中山巍、野口彌太郎、林武、藤岡一、松島一郎(會友) 今西中通泰有村、樋口加六、池田金之助、富樫寅平、佐藤英雄、中尾彰、青柳暢夫、菅野圭介、鳥居敏、赤星孝、大野五郎、加藤陽、小出三郎、佐川敏子、島村三七雄、志村計介、竹中三郎、常安靜人、豊藤勇山道榮助、綠川廣太郎、今井憲一、宇根元警

讀畫會(日) 東京市本郷區動坂町三二七 湯原方 電駒込五三三

明治四十年荒木寛畝を主宰として設立。寛畝の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催、昭和十七年第三十五回展に及ぶ。

栃木縣美術協會(洋) 栃木縣鹿沼町下材木町 吉村勇方 東京市淺草區馬道町二ノ五、文挾勝方

栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體。昭和十年宇都宮市に於て第一回公募展開催。

巴會(日) 東京市本郷區駒込東片町三〇 鹽崎逸陵方

故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の作家を以て組織す。十七年第六回展開催。

〔客員〕飛田周山(會員) 野田九浦、矢澤玄月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸陵、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田馨谷、中上大至良、奈良裕功

七日會(工) 東京市豊島區駒込三ノ三九九 山本方

工藝の研究團體で、昭和五年創立した

が、十四年末事情により「先づ解散、十五年一月再組織した。

〔會員〕林萬壽人、渡邊紫鳳、香取正彦、高野松山、桂信春、長野埜志、海野建夫、山本安曇、山本純民、山本自燭、丸谷端堂、藤本長邦、會田富康、北原三佳

名古屋工藝協會(工) 名古屋役所産業局内

名古屋市の工藝家及斯界關係者を以て組織。調査、出版、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕三樹樹三〔副會長〕中川貞三、〔顧問〕藤井達吉、津田信夫、板谷波山

〔理事長〕藤本鐵男

名古屋美術聯盟 名古屋役所内

昭和十一年創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を圖り展覽會、講習會等開催の外美術獎勵に關する諸事業を行ふ。

〔會長〕(市長)縣忍〔評議員〕川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤廉、鬼頭鍋三郎、毛利敦武、長野埜志、狩野梅齋、朝蔭其明、小川鴻城、横山龍生、織田香逸、淺井正臣、石川英風、朝見香城、岩佐古香、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鎌、石井國義、杉本健吉、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、加藤忠三郎、原田隆諦、佐藤空鳴、加藤華仙、橋本良介、石田清、野水信吉、森本啓史

奈良縣美術協會 奈良市公園内奈良縣立商工館

縣下美術界の向上發展を期して奈良縣在住及び出身の美術家を以て組織。昭和

十八年一月創立。

〔會長〕奈良縣知事〔理事〕(繪畫第一部)立野雪郷(繪畫第二部)濱田葆光、中村義夫、山下繁雄(彫塑部)新納忠之助(工藝部)井上清一、北村久齋

奈良洋畫會 奈良市法連佐保川町會根緒雅方

昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。例年五月に公募展、十月に同人展開催。夏季洋畫講習會を開く。昭和十三年度は事變の爲公募展開催を中止した。

〔同人〕若山爲三、飯田衛、笠松春彦、森永春雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、謙田史彦、吉澤健二、會根緒雅、御宮地保、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣工藝美術協會 長野縣廳商工課内

長野縣在住並に出身の關係者を集めて本縣工藝美術の進歩發展を圖るため、展覽會、表彰、指導、調査研究、販路斡旋等々の事業を行ふ。昭和十五年三月創立。

〔名譽會長〕今井五介〔會長〕長野縣知事〔常任理事〕長野縣商工課長

長野縣農美生産組合聯合會(工) 長野縣廳經濟部農水産課内 電長野四三〇一

縣下農村工藝品生産團體により組織。各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並に斡旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕經濟部農水産課長〔副會長經濟部副主任〕江島次郎、中村實

南畫聯盟(日) (東京事務所) 東京市麹町區四番町 小室方 電九段六二〇

(京都市事務所) 京都市新町北大路上小柳北通西入、白倉二峰方 電西陣三二一四

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌十月に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究會、公募展を開催する。

〔顧問〕小室翠雲〔幹事〕岡田晴峰。白倉二峰、人見少華、福田浩湖〔委員〕關谷雲嶺、大栗旌衍、荒居翠湖、高須芝山、横内大明、村岡應東、小川千麿、須藤國郎、降旗箕岳、鷹野樗亭、木内一榮、馬來田愛岳、峰村北山、宮原柳櫻、渡邊黃華、松野自得、久保田玉堂、小山居泉、佐々木喜堂、高橋暉山、横山松雲、高島祥光、栗飯原大醒子〔會員〕七十七名

南紀美術會(日、洋、彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 建昌大夢方 電駒込一四〇一

大正八年紀州出身の美術家により結成。年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕建昌大夢〔幹事〕後藤光行、木下繁、三木凱歌、中川藤次郎、會員二十九名。

南洋美術協會(洋) 東京市麹町區永田町、南洋廳内

昭和十六年七月發會。南洋に遊歴せし作家三十餘名を以て組織す。同月三越に第一回展開催。

〔會長〕小林萬吾〔常任理事〕堀田清治、笹鹿彪〔理事〕和田香苗、山崎坤象、布施信太郎

二科會(洋、彫) 東京市四谷區愛住町一三ノ一 電四谷四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會)爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年兒島善三郎、里見勝藏、友友七名は退會し、獨立美術協會を創立した。昭和十年會員石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有馬生馬、藤川勇造の五名新帝國美術院會員に任命さるゝ、や同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その功勞を謝して名譽會員に推薦し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する旨を聲明した。同十二年石井柏亭、有馬生馬、山下新太郎、安井會太郎等は名譽會員を辭退、十六年藤田嗣治も藝術院會員に就任するに及び離脱した。毎秋東京に展覽會を開催し、引續き京都、大阪、福岡、名古屋等に於て臨時地方展を開催する。同十七年九月第二十

九回展に及ぶ。

(繪畫部)〔評議員會員〕熊谷守一、北川民次、栗原信、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、中川紀元、鍋井克之、野間仁

根、岡田謙三、島崎鶴二、鈴木信太郎、東郷青兒、山口省吾、高岡德太郎、吉井淳二、横井禮市、黒田重太郎、國枝金三、濱田稔光、田村孝之介、坂本繁二郎（在外）國吉康雄、齋藤豐作（普通會員）伊藤久三郎、松本弘二、酒井亮吉、峰岸義服部正一郎、伊谷賢藏、錦義一郎、松井正、藤井二郎、古家新、福島金一郎、吉原治良、小林喜一郎、田中忠雄、榎倉省吾、小出卓二、柏原覺太郎（會友）椎塚猪知雄、岡部邦香、早川國彦、藤川榮子、橋本徹郎、加治屋隆二、桂ユキ子、大澤昌助、寺田竹雄、山尾薰明、安部治郎吉村田資史雄、野村守夫、鶴田宏、篠原來介、山本不二夫、松本俊介、高井貞二、佐野繁次郎、北島達夫、丹下富士男、神保俊子、清水刀根、藪野正雄、尾澤辰夫飯田清毅、伊庭傳治郎、松村綾子、津田周平、浪江勘治郎、山本直治、加藤敏子米良道博、井上覺造、田邊三重松、原勝四郎、旭亮弘、佐藤吉五郎、伊藤研之、坂宗一（彫塑部）（評議員）笠置季男、松村外次郎、泉二勝磨、水野欣三郎、渡邊義知、上田曉（會友）後藤一彦、柳田昌、川崎榮一、三浦舜太郎、中堀正孝、野水信吉、河合芳男、乘松巖、長野隆業

二科西人社（洋、彫） 福岡市大名町八七 青木壽方

昭和九年十一月創立。九州出身の二科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體で、十七年第八回展開催。

廿四人會（洋） 東京市中野區櫻山一 樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるもので獨立展出品者の親睦團體。隨時作品展開催。

（會員）樋口加六、岡部文之助、法充昌雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、清水鍊徳、坪内節太郎、森有村、浦久保義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

新潟縣輸出工藝振興會 新潟縣經濟部商工課内
舊來の新潟縣工藝協會を改組して昭和十四年四月設立した。工藝品の調査研究講習會、展覽會の開催、作品の宣傳、幹旋其他を行ふ。

（總裁）新潟縣知事 正會員三七〇名
贊助會員二二一名
西山畫塾青甲社（日） 京都市東山八坂塔前 小川翠村方

大正十二年西山翠峰門下を以つて創立
每月研究會、年一回展覽會開催。

（幹事）福田翠光（副幹事）水野深艸、本庄陶苑（研究會主事）澤宏毅（學藝部主事）樋口富麻呂（評議員）山ノ内信一外十四名（常議員）堂本印象外九名

日東美術院（日） 東京市大森區堤方町九〇七 岡部香峰方

美術に於ける壁國精神の發揚、日本畫の海外進出等を目的として昭和十五年創立した。公募展を開催す。

（會員）岡部香峰、川口春波（院友）西村南北、渡邊示光、島海龍海、山城象二

郎、松野皓晟、大町宰世、竹下茂樹等十四名
日本油繪會（洋） 東京市世田ヶ谷區赤堤町一ノ一九七 福田方

昭和十六年創立。主として一水會出品中堅作家を以て組織。年一回發表展を開催する。

（會員）鈴木良三、瀧川太朗、林鶴雄、福田新生、矢崎重信、石川眞五郎、末松勇、能勢眞美、大月源二、矢野雄藏
日本醫家美術協會（洋） 東京市神田區三崎町二ノ二〇 醫事公論社内

醫師にして美術を愛好する人々により組織。昭和十七年五月展覽會を開催す。日本漆繪協會 東京市麻布區今井町二五 三木義榮方

昭和十一年設立。漆繪及漆工藝の新生開拓を目的とす。毎年春季に會員展、臨時試作展を開催する。十二年四月第一回展開催。

（會員）片山佳吉、横井弘三、太齋春夫、大村素峰、松岡素峰、三木義榮、森山珪秀
日本エツチング作家協會 東京市麴町區麴町一ノ三、日本エツチング研究所内 電九段五一四

昭和十五年十二月西田武雄を中心に結成。エツチングの研究、普及を圖り十七年第三回展を開催した。

（會長）田邊至（會員）西田武雄、今純三、曾我尾武治、松田義之、關野準一郎、中井平三郎、神原浩、内田進久、田中進高羽敏、武藤完一、中田幾久治

日本カトリック美術協會 東京市小石川區小日向臺町二ノ二七 湯川方
昭和四年創立。カトリック信徒の美術家及び美術愛好者を以て組織。「日本精神による基督教美術の研究創作發表」及「海外同種團體との交渉機關」。昭和十二年マニラに於て展覽會を開催した。

（會員）長谷川路可、小倉和一郎、木村圭三、佐田好陽、小關君子、岡山聖虛、佐々木松次郎、古屋清

日本畫院（日） 東京市本郷區駒込千駄木町五九、望月春江方、電駒込二六四七
昭和十三年東京の文展系日本畫壇有志に依り結成。「現下の日本畫壇の趨勢に鑑み、之を横斷的に結束するの要を痛感し茲に日本畫院の成立を見るに至る。吾等は協力以て清澄なる畫壇の先驅者たらんとす。」と聲明した。公募展を開催す。

（同人）岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、吉岡堅二、常岡文龜、根上富治、野田九浦、矢澤弦月、松本麥水、福田豐四郎、小泉勝爾、穴山勝堂、飛田周山、望月春江

日本畫家報國會 東京市本郷區駒込千駄木町五九 望月春江方 電駒込二六四七

文化興隆、國民精神宣揚を目的とし、藝術員會員（日本畫）文展無鑑査、院展同人、青龍社々人等を集めて、昭和十七年三月結成。同三月第一事業として軍用機獻納作品展覽會を日本橋三越に於て開催。

（會員）一九〇名

日本玩具協會 東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町二ノ一〇八〇

昭和三年設立。玩具産業の發達を圖り玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤信敬、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木槍恕一、鈴木豐次郎

日本建築士會 東京市京橋區銀座西三ノ一建築會館七階 電京橋六二〇（近畿支部）大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階日本建築協會內（名古屋支部）名古屋市中區南大津通安田生命館佐藤四郎建築事務所內（上海支部）中華民國上海市狄思威路五〇二號

大正三年創立。昭和三年社團法人設立認可。建築の設計監理に關する業務の改善進歩を圖り建築の發達に資するを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行。

〔會長〕石原信之
日本工藝美術會（東京）東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號（關西）大阪市住吉區住吉町一三〇〇 柴崎方

大正十五年創立。工藝の作家、鑑賞家評論家を以て組織せる綜合團體。毎年一回展覽會を開催す。

〔常務委員〕岩田藤七、大島隆一、吉田源十郎、津田信夫、内藤春治

日本工作文化聯盟 東京市麴町區內幸町二ノ三 幸ビル內、電銀座三三八三

昭和十一年十二月九日發會、本會は科學、藝術其他工作文化に關與する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して「一、様式建築より生活建築へ」「二、有閑工藝より目的工藝へ」「三、低俗製品より價值製品へ」なる指標の下に建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので次の如き項目を事業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等をなす。（イ）研究（一、住の基本問題の研究、二、都市及農村計畫に關する研究、三、史的生活文化財の研究）（ロ）指導（一、住に關する工業製品の指導、二、建築生産の指導、三、工場の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批判横討）（ハ）普及（一、生活文化に關する知識の普及、二、健全なる工作文化財の普及）

〔會長〕伯爵黑田清〔理事長〕岸田日出刀〔理事〕堀口拾巳、佐藤武夫、關重廣、小池新二〔幹事〕市浦健、關野克（特別會員）澤島英太郎、鈴木道次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、坂倉準三、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島亥治郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、吉田鐵郎

日本挿繪畫家協會 東京市淀橋區下落合四ノ二一一 林唯一方

挿繪俱樂部を解消して新に組織した會で展覽會研究會の開催、出版等を行ふ。

〔名譽會長〕鏑木清方〔會長〕石井鶴三〔委員長〕林唯一〔委員〕岩田孝太郎、石井泰治、富田千秋、鴨下晃湖、吉田貫三郎、玉井德太郎、田代光、向井潤吉、

野村俊彦、野口昂明、松野一夫、木村莊八、宮本三郎〔書記長〕鈴木御水、會員六十八名、客員三十六名

〔日本山岳畫協會（洋）〕東京市杉並區上荻窪二ノ八七 末光鐵方

昭和十一年創立。山岳に關する繪畫の發表を行ふ。十七年第七回展。

〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、英木猪之吉、石井鶴三、武井眞澄、吉田博、末光鐵、内野猛、中村善策、山川勇一郎、山下品藏、上田敏雄、河越虎之進、宮田熊雄、榎谷徹藏

〔顧問〕小島島水、藤木九三

日本刺繡院（工） 京都市東山區山科御陵原西町四〇

昭和十五年一月創立。刺繡工藝の發達を目的とす。展覽會を開催す。

〔會員〕長谷川文平、長村華城、岡村土佐生、由井康陽、村田春綠、山田誠一、福村健、酒井榮一、小林由松、清水順造、柴田儀藏〔參與〕箸尾清

日本漆藝院 東京市芝區西久保巴町一五 岩瀧方 電芝六九八

昭和十一年結成。本邦獨自の漆藝の發展を圖るため從來の漆藝家の小黨分離の幣を打破して協力邁進せんとす。毎春三越に公募展を開き、同十七年第六回展開催。

〔同人〕石井青士、本間葵華、富樫光成、河面冬山、河合秀甫、勝田靜璋、吉田醇一郎、横越自入、高井白陽、高野松山、多畑宗哉、堆木楊成、梅澤隆眞、太田自適、大村素峯、岡本昇三、山永光甫、松

田權六、福澤健一、結城哲雄、三田村自芳、莊司芳眞、森川紫山、守屋松亭、六角頼雄、中川哲哉、船本汀、香丸耕堂、室瀬春二、〔贊助員〕六角紫水、渡邊素舟

日本漆工會 東京市神田區鍛冶町一六ノ二

財團法人、明治二十三年小川松民、柴田是眞、川邊一朝、池田泰眞、白山松哉、田邊源助等二十四名の發企により設立。

品川彌次郎子初代會頭となり、二代には田中光顯伯宮內大臣現職のまゝ、就任最も力を會勢に致した。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一

時其開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。日本特有の蒔繪並に漆に關する傳統保存及進歩を圖り、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の獎勵及其生産調査、圖書標本類の蒐集、展覽會講演會開催等をなす。

〔理事長〕手塚千代吉〔理事〕吉野富雄、松田權六、山崎尙三郎、大井眞雄

日本女子美術院（日、洋）東京市淀橋區西大久保二ノ二五三 電四谷六三二五

昭和十六年二月創立。日本畫、洋畫の公募展を開く。

〔主幹〕垣見泰山〔幹事〕伊藤鈴子、石田重子、石井克枝、西丸小園、陳進、尾形奈美、渡邊玉花、春日井細香、水井勝子、江崎照、宮内英子

日本水彩畫會 東京市本郷區駒込神

明町七二 望月省三方

故大下藤次郎、故丸山曉霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立、毎春公募展開催、昭和十七年第二十九回展に至る。

〔總務〕石井柏亭、石川欽一郎、石井鶴三、眞野紀太郎、南薫造、中澤弘光、相田直彦、赤城泰舒、平井武雄、小山周次、望月省三、富田温一郎、板倉贊治、水野以文、石川達三、石川菊村、石川新一、市原義夫、山崎政太郎、草野米子

〔會員〕百十九名〔會友〕十五名
日本彫金會〔工〕 東京市本郷區駒込動坂町三二七 海野清方

明治中期に結成された日本金工協會が大正の末に解散され、その中の彫金家が金聲會を創立、其の後彫金會と改稱したが昭和九年會規を改め現在の日本彫金會となした。展覽會を開く。

〔會長〕清水龜藏〔委員長〕海野清
日本彫刻家協會〔彫〕 東京市目黒區自由ヶ丘二七七 林是方

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體昭和十七年東京府美術館に第六回公募展を開催。

〔會員〕岩田滿平、林是、坂東文夫、大川達一、大獄茂樹、奥田勝、加藤顯清、片山義郎、高澤七郎、武次郎、畝村直久、野々村一男、倉持芳、小柴利孝、明石順吉、雨田光平、金谷不二彦、三坂耿一郎

小寺昌三、菅沼五郎〔會友〕伊室正次、國領辰彌、高田進六、北地莞爾、來家末治、陳夏雨、北古賀一郎、川瀬永治、佛子泰夫、石田清、丹羽康晴、黃清孝、橋本次郎

日本圖書工作協會 東京市世田谷區上馬町三ノ一〇五〇 三尾方 電世田谷二八七八

全國中等學校圖書、手工、作業科教員有志を以て組織し、本部を東京に、支部を各府縣に置き會員相互の親睦を圖ると共に前記學科の振興に資するを以て目的とす。毎月雜誌「造形教育」發行。

〔會長〕伯爵平田榮二〔理事長〕三尾興喜藏〔理事〕關口晚三郎、松岡正雄、麻生隆秀、三浦直政、橋本興家、高橋重雄
日本圖書手工協會 東京市神田區駿河臺二ノ五 伯爵平田榮二方

昭和六年設立。主として中等學校の圖書手工科並作業科の教職員を以て組織。東京に本部を置き各府縣に支部を設く。技能科教育の振興、同科教員の地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會展覽會等に於ける援助、同科教員的人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす。

〔會頭〕伯爵平田榮二
日本陶藝研究會 東京市大森區田園調布三ノ四六〇、小倉雅道方

昭和十四年舊東陶會系の有志に依り組織。隔月研究會を、毎年公募展を開催す〔會員〕長谷川怒、星野國太郎、土肥刀泉、塗師淡齋、小倉雅道、大森光彦、小

川雄平、唐杉榮四、加藤閑陸、横山朝陽、竹内蘭山、松島一夫、小柳今朝一、湯山青厓、水野清一、鈴木禾丈子

日本陶磁彫刻作家協會 東京市世田谷區赤堤町二ノ四六九 小川雄平方 電松澤三八九七

陶磁彫刻を専門とする會で昭和十五年十二月創立。

〔會長〕沼田一雅〔監事〕長谷川怒、三澤寛〔理事〕小川雄平、加藤顯清、小室達、雨宮治郎、伊奈辰次郎、山崎彌一、高山泰造、久保駒太郎、眞鍋知道、船津英治、木村好雄、寺内信平

日本陶彫協會〔工〕 京都市東山區大和路五條下ル二丁目東入ル海屋町六〇 高山泰造方 東京市世田谷區赤堤町二丁目四六九 小川雄平方

昭和十一年創立。沼田一雅の指導の下に彫刻陶器に關する研究を行ふ。展覽會を開催す。

〔同人〕沼田一雅、石田來之助、長谷川怒、土淵道禪、小川雄平、加藤顯清、吉川常雄、高山泰造、津田芳太郎、中村健治、武藤太郎、久保駒太郎、山本正年、山本一夫、八木一夫、眞鍋知道、船津英治、寺前皓介、淺見賢一、關本昇

日本人形作家聯盟 東京市小石川區久堅町二七 野口方

昭和十五年創立。傳統的人形美術の發達を圖り、作品展、調査出版、海外紹介輸出斡旋等の事業を行ふ。〔委員〕鹿兒島壽藏、黒川多加詩、小島與一、佐久間珉市、佐野光輝、中川光一

野口光彦、山川亨造、山本壽、綿貫萌春、猪谷泰峯

日本人形美術院 東京市下谷區上野櫻木町五四 平田方 電下谷九二

白澤會、日本人形社を経て昭和十六年十一月創設。我國人形美術の保護と育成を目的とす。同年十一月第一回展を開催。

〔同人〕岡本玉水、平田郷陽、外に會員十一名
日本版畫協會 東京府北多摩郡狹江村岩戸四六六 下澤方

大正七年創立の日本創作版畫協會が、昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組せるもの、十七年第十一回公募展開催。尙文部省、外務省の後援で、歐米各地に國際的版畫展を開催した。

〔副會長〕山本鼎〔會務委員〕石井鶴三、前川千帆、恩地孝四郎、平塚運一、栗田雄、清宮彬、逸見享、山口進、畦地梅太郎、柿原俊男、前田政雄、深澤素一、稻垣知雄、小泉癸巳男、下澤木鉢郎、田坂乾、關野準一郎、根本霞外、佐々木孔

日本美術院〔日、彫〕 東京市下谷區谷中上三崎町五二 電下谷二五一〇
明治三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際しての二大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め

雜誌「日本美術」を發行。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同

人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當りしは横山大観、下村観山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其の中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を聲明し、横山大観、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平櫛田中、佐藤朝山、藤井浩祐の八名が會員に就任した。十一年二月第一回帝展に参加す。六月新任平生文相の試案提示されるに及び、同院出身の會員は(藤井浩祐を除く)他の八會員と共に、同試案を改組の趣旨を没却せるものとなし、當局不信任を聲明して會員を辭任した。同年近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名脱退、十二年三月院友の集團として院友俱樂部が結成されたが同年十二名の院友が脱退した。十七年第二十九回展開催。

〔同人〕(繪畫部) 横山大観、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、中村岳陵、荒井寛方、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、北野恆富、眞道黎明、小林柯白、橋本永邦、郷倉千靉、堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、奥村土牛、小倉遊龜、田中青坪、太田聰南中村貞以、新井勝利、北澤映月(彫刻部) 平櫛田中、佐藤清藏、石井鶴三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃、山本豊市、中村直人、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、關谷充(院友)(繪畫部) 西村青歸、牛田鶴村、兒玉素光、石原春秋、野生司香雪、奥村澤山、大塚晃陵、橋本秀邦、黒田古郷、木下春、四田觀水、加藤洵綾、歸山千蒼、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅樹、中庭媛華、小島一露、並木瑞穂、眞道秋皓、藤井白映、鈴木大蔵、石本光太郎、柴宗廣、高橋萬年、中島清、小谷津任牛、村田泥牛、高橋周柔、上田畦草、高橋秀佳、高橋都哉、中島策刀、岡田壺中、川手青郷、鈴木鳥心、島田納郎、岡田隼雄、松永成路、宮崎東里、河村良孝半田鶴一、我妻碧字、丸儀太郎、宮田隆子、鶴飼節夫、横田仙草、花岡朝生、佐藤耕寛、冬木大丙、小林草悦、ハツ井舜圭、中澤一僑、新井勝利、對馬安正、佐野光穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹波半田泰至、鈴木主子、里内久則、安孫子荻聲、久保清子、中島萬木、鈴木三朝、菊池公明、柿沼宗居、岩田光壺、岡本彌

壽子、山口蒼輪、關暉明、岡茂以、長井亮、彌川伸二、三村石邦、佐々木京林、鈴木麻古等、小松均、片岡球子、上垣候鳥、山本大慈、狗卷南名雄、酒井とし、郷倉和子、鹽出英雄、後藤芳仙、館岡栗山、眞野滿、内田青薫、吉川朝衣、熊坂東夷、松坂冬佐、船田玉樹、吉田善彦、木村武夫、相原萬里子、長谷川朝風(彫刻部) 大橋敏男、松村秀太郎、杵谷精一寺瀬默山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田七郎、宮本理三郎、辻管堂、長濱虎雄、長谷川豊雄、岡村進、小林章、中平四郎、古藤正雄、土井要輔、河野正造、關長造、柏木康兵、加藤泰三武林與吉、小林貞吾、森豊一、櫻井祐一口眞一郎、菅原安男、小柳津三郎、板倉白龍

日本美術協會(綜合)

東京市下谷區

上野公園櫻ヶ岡 電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂ひ河瀬秀治等の同志會して美術品評會を開き翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮織仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年内務省博物館の開設せる第一回觀古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回(彫刻、工藝及書、篆刻)秋季二回(日本畫及華道)の四回に分ち展覽會を開催するのを例とする。昭和十一年度は第百回に相當せるを以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に於て

開催した。大正十四年組織を改めて財團法人とした。而して現在其組織は第一(繪畫)第二(書、篆刻)、第三(彫刻)第四(玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫品、木象嵌)、第五(彫金、鋲起、鋲金)第六(鑄金、鍛金)、第七(陶磁、七寶、彫玻璃)、第八(漆器、蒔繪)、第九(織物、刺繡)、第十(寫眞、製版)、第十一(華道、盆石、盤景)の十一部より成る。尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用する外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下

〔會頭〕

中田敬義、〔副會頭〕男爵東郷安(事務理事) 溝口積次郎(理事) 山崎朝雲、香取秀良、板谷波山、千葉胤明、大坪正義、今井英邦(監事) 杉山令吉(主事) 日種義太郎、評議員二十三名、委員顧問七名委員百五名、名譽會員十七名、特別會員二名、通常會員一千八十五名

日本美術雜誌協議會

東京市小石川區

關口駒井町三

美術雜誌編輯者と關係官廳との連絡機關にして、編輯其他の協議を行ふ。昭和十六年統合による八誌によつて結成。

〔會員〕 齋田元次郎、大下正男、藤森順三、藤本留三、佐久間善三郎、猪木卓爾山口寅夫、石川幸三郎

日本文人畫協會(日)

東京市小石川區

小日向臺町二ノ二九 渡邊雪峯方 電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、臨時

畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年上野公園日本美術協會に第一回公募展開催。

〔幹事〕中村不折、渡邊雪峰、中田雲暉、大久保楓閣、西丸小園、柚木玉郎〔評議員〕磯部羽州、伊藤紫雪、島田鶴亭、藤本翠園、辻香塙、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香雪、入澤華畦、寺山春龍、皆川桐蔭

日本壁畫會(日、洋、彫) 東京市澁谷區幡ヶ谷原町八〇〇 安田豊方

昭和十年結成。壁畫藝術の研究及作品發表、實際仕事の應需を目的とす。十七年第六回展開催。

〔會員〕鶴田吾郎、安田豊、布施信太郎、中村直人、島村三七雄、伊藤清永

日本漫畫會 東京市大森區南千束町四、小峰三四郎方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起原で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一刀、江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤樂天、寺内純一、小林克巳、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村利男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島阿保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造

森山三郎、安本亮山、山本奎兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤朗、澁谷三止朗

日本民藝協會 東京市芝區今入町一五 玉屋ビル 電銀座七六三四一六

工藝の健全なる向上顯揚に寄與する目的を以て大正十五年に創立した。調査、出版、研究會、展覽會開催等を行ふ。昭和六年雜誌「工藝」發行。同十二年日本民藝館設立。同十四年雜誌「月刊民藝」發行。

〔會長〕柳宗悦〔副會長〕河井寛次郎、濱田庄司〔常務理事〕淺野長量、式場隆三郎、村岡景夫〔理事〕芹澤銈介、外村吉之介、武内潔眞、壽岳文章、吉田璋也、淺沼喜實

日本木彫會 東京市淀橋區諏訪町二三〇、内藤方

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表の目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。十五年五月正統木彫家協會の結成により二つに分裂す同展は作品を公募せず會員にて互選の上陳列す。十七年第十回展開催。

〔幹部會務員〕内藤伸、佐々木大樹、中野桂樹、三國慶一〔會員〕森野圓象、山脇敏男、山口四郎、井口喜夫、大島駒藏、平澤信男、工藤敬三、西田明史、佐伯量良、外會友十三名、見學員二十名

日本輸出工藝聯合會 東京市麹町區丸ノ内二丁目九ビル二階 電丸ノ内五三

七二、六〇八五、六〇八六
社団法人、昭和八年創立。日本工藝の傳統を表現して且つ海外の用に即せる工藝品の海外販路を開拓す。内外に工藝的商品に關する陳列會を開催し、隨時輸出工藝に關する圖書を發行す。

〔會長〕川久保修吉〔事務理事〕水野徳右衛門〔理事〕谷内治橋、山崎覺太郎、長島喜三、梨谷了祐、中山修三、小泉丞井澤新〔監事〕伊藤藤二、日野厚

人形藝術院 東京市品川區南品川三ノ一五七一 電高輪六四七〇

人形の藝術的向上を計るを目的とし、年一回公募展を開く。昭和十二年三月東京白木屋に第二回展開催。

〔同人〕有坂與太郎、會員は定めず。

【八行】 巴人社(洋) 東京市下谷區上野櫻木町五〇 中山正義方

洋畫の研究團體。毎春同人展を開催する。會員十七名

業隱美術協會(綜合) 東京市目黒區原町一三五〇 江島信一方

昭和十一年五月創立。佐賀縣出身美術家により組織。年一回展覽會開催。

〔副會長〕田雜五郎〔幹事〕江島信一
白聖會(洋) 京都市東山區神宮道堀池町、山内善三郎方 電上二二五五
昭和二年九月關西美術院關係の同志を以て結成。昭和十三年十一月第十六回展開催。

〔會員〕柴田又太郎、藤井義晴、水清公子、戸島孚雄、井上賢三、山内善三郎、伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清毅、伊庭傳治郎、尾崎暢之助、永井朔夫、松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西倪太郎、竹内喜助、廣田延造、豐岡孝子

白御會(日) 京都市右京區嵯峨伊勢上町一〇 電嵯峨六七五
昭和十二年九月關西在住の日本美術院系作家に依り結成。毎月研究會を開き、春季に大阪、京都美術館に展覽會開催。

〔會員〕石丸大象、岩永蘇香、今井紫悅、粥川伸二、川本聰管、館岡栗山、中島菜刀、永友綠樓、上田英二、山田唐僊、山本大慈、佐野光穂、三宅順風、持田卓二、北澤映月、中島啓朝、栗田騎歌、津田榮子、濱孤嘯、高崎興、中河忠夫

白日會(洋、彫) 東京市下谷區清水町六、富田溫一郎方

大正十三年春組織。毎春東京府美術館に公募展を開き昭和十七年第十九回展に及ぶ。

〔會員〕(繪畫部) 中澤弘光、富田溫一郎、大久保喜一、間部時雄、相田直彦、篠原薫、伊藤清永、荻野康兒、小堀進、灰野管通、渡部菊二、長明、浮島弘行、川村精一郎、鈴木重成、島村三七雄、刑部人、廣本了、關口誠、山道榮助、古川弘、島田四郎、松平齊光、松平康南、佐藤功、大河内信秀、大石七鳳、坂江重雄、川口榮(彫刻部) 吉田三郎、木村珪二、笹野惠三、田島龜彦、岩崎良平、星野直弘、兒島正典、富田匠美〔客員〕三浦忠軒、三井高維、香山蒼、富岡東四郎、金

子日久連、高木背水、河津孝四〔會友〕

〔繪畫部〕渡邊柳次郎、岡崎金藏、栗林丈、兒玉道夫、朝田進、鈴木次郎、南登志、小泉馨二、飯島八郎、渡邊百合子

谷部正、山内邦義、門脇耕、川島實、結田信、松岡次賀、神田橋信夫、市原義夫

高橋隆比古、長澤昇、山岸富五郎、小島眞佐吉、古田芳雄、宮崎精一、草刈二郎

鹽澤祥悟、丸樹長三郎、藤江志津、江口賢一、畔上眞雄、阿部七郎、西山開二、金子富藏、前林章司、平松讓、尖戸章、三橋ふじ、大嶺正敏、安次嶺金正、三保義〔彫刻部〕西田信、荒卷茂、竹内貞次郎、坂手讓

白朝會〔洋〕東京市淀橋區下落合一ノ五四〇 杉本貞一方 電大塚六七二六

昭和九年秋舊帝展第二部審査員級有志により組織、毎年秋二回東京及大阪に於て展覽會を開く。十四年三月銀座青樹社に第五回展開催。

〔同人〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、柚木久太、杉本貞一

柏舟社〔日〕京都市右京區御室小松野町二五 梅原藤坡方 電西陣五二三

京都繪畫專門學校の同期出身者で、故土田夢僊に師事した者を以て組織す。會員は専ら柏舟社並に三三美術團展覽會に於て作品發表をなす。

〔會員〕伊藤仁三郎、梅原藤坡、要樹平澤田石民、新見虛舟、林司馬

璞友會〔日、彫〕〔東京〕下谷區谷中上三崎南町五二 日本美術院內〔京都〕

右京區嵯峨伊勢ノ上町一〇 佐野光穂方

昭和十六年二月創立。日本美術院院友有志の組織する研究發表の會。尙從來の院友俱樂部は社交機關としてのみ存置する。十七年第二回展開催。

原町樺工藝研究會〔工〕福島縣相馬郡原町、吉井樺家具製作所內

昭和五年創立。同地方の特産たる樺材による工藝品の改善、販路開拓を圖る。年二回展覽會開催。

〔會長〕吉井佐吉、會員三十八名

汎美術協會〔洋〕東京市麻布區霞町六、小林茂方 電赤坂四四二二

昭和八年創立。舊稱新興獨立美術協會「創作の自由と獨創」を尊重し、從來の有鑑査展制度を否定し、作品公募による無鑑査展を開催。

〔會員〕小林茂、丸野豐、鈴木清作、佐藤文彦、林靜子、八木秀晃、築比地正司津田昇宏、興水璋、牧島省三

阪神彫塑家協會 兵庫縣武庫郡本山村小路一二三、妹尾健太郎方、電御影五三一

昭和十一年創立。二科出品の彫塑家を以て結成。展覽會を開催す。

〔顧問〕上田曉〔會員〕織田久馬一、唐木政一、山根顯一、木村敏一、妹尾健太郎、河合芳男、大西金次郎、道下長七、辻合喜代太郎、西井龜治、伊藤清芳、長谷川雅司、松本章

斑丘社〔工〕東京市下谷區上野元黒門町六、神戸屋內 電下谷九八一

昭和五年度東美校工藝科入學者を以て組織する。展覽會開催。

〔同人〕鹿取一男、金田諒三、芳武茂介松原春男、寺井直次、下暢等三十五名

萬華鏡社 東京市澁野川區西ヶ原五四三 中郎蘭臺方

昭和五年創立。書、畫、篆刻、工藝等各作家の親睦團體。

〔會員〕一噌青水、鳥海鶴洞、鹿兒島二橋、竹原明風、中郎蘭臺、山田正平、江川碧潭、相原大樹、西川幹盒、小澤天來

横山善信、竹越眞三夫、村雲大機子、小泉繁、荒木柳城、澤田篁齋、北村明道

東京美術學校機演會 横濱市神奈川區松ヶ丘四九 三森達夫方

昭和十年五月創立。横濱在住若しくは出身の東美校卒業生、在校生、關係者を以て組織。親睦團體。展覽會を開催。

〔幹事〕三森達夫、會員九十二名

美術記者聯盟 東京府美術館內

昭和十四年三月美術雜誌記者が相互の連絡協力をもつて結成。

〔會員〕中川愛水、石川宰三郎、浦崎永錫、湯山昇、芳川赴、佐久間善三郎、中山貞夫、大山廣光、菊池芳一郎、高木紀重、猪木卓爾、藤森順三、齋田元次郎

〔幹事〕浦崎永錫、大山廣光

美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三、伊藤光秋方 電堀川二六八三

大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。

〔顧問〕白川朋吉〔同人〕伊藤光秋、伊

等鐵崖、今橋泰齋、市川鏡琅等十六名

美術懇話會 東京市下谷區上野公園美術研究所內 電下谷三三八七

昭和六年十一月、美術研究所内に創立「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健實なる發達に貢獻する」をもつて目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催。二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催。三、美術に關する出版を行ふ。昭和七年一月より十二年六月まで美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行したるほか、美術研究資料〔計四輯〕、美術懇話會叢書〔計二輯〕等を出版してゐる。

〔理事長〕藤原銀次郎〔理事〕二十五名〔常務理事〕五名〔會員〕百六十五名

美術創作家協會 東京市世田谷區下代田二六四、小松義雄方

昭和十二年創立の自由美術家協會を十五年七月現稱に改め從來の藝術的主張に一層努めることとなつた。公募展を開催

〔會員〕荒井龍男、濱口陽三、長谷川三郎、北尾淳一郎、小山昇、小松義雄、村井正誠、森芳雄、難波田龍起、中村眞、小野里利信、清野恒、植木茂、矢橋六郎

山口薫、山田光春、馬場顯三、文學洙、山口正城

〔會友〕朝妻金治郎、瑛九、平岡潤、劉永國、谷澤秀晃、田島二男、橋上菁兒、清水七太郎、李仲燮、和田喜一、鈴木重太郎、菊地稔

美術新協〔綜合〕東京市杉並區井萩

町二ノ一、

舊稱新興美術家協會。昭和十年七月創立。毎秋公募展を催す。十八年二月歷程美術協會、明興美術聯盟と合同。

〔同人〕 村井麗樹、榊原始更、玉村方久斗、五十嵐幸男、東宣正、井上秀雄、淺川藤治、杉本幸一郎、白井保泰、圓山信一、小林良曹、野澤武美、山田稔、大久保實雄、關謙二

〔會友〕 鈴木夢名子、菅野剛吉、村上枉夫、松竹正也、今井正、中靜杜六、森夜潮

美術團體聯盟 (假事務所) 東京市杉並區利田本町八三二 木村莊八方 電中野四二四七

美術團體相互間の連絡を圖る目的を以て左記九團體を役員團體として昭和十五年十一月創立した。尙其の後、別に七團體が加盟したが、國畫會のみは「組織を團體單位とせず作者個人單位とする」ことを主張、不参加となつた。

〔役員團體〕 一水會、二科會、東光會、獨立美術協會、旺玄社、太平洋畫會、光風會、春陽會、新制作派協會

〔加盟團體〕 白日會、日本版畫協會、日本水彩畫會、第一美術協會、春臺美術會美術創作家協會、美術文化協會

美術批評家協會 東京市麴町區麴町四丁目五、電九段一三五三

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。

〔會長〕 子爵吉川元光 (書記長) 柳亮 (事務長) 外山卯三郎 (會員) (東洋美術)

美術家團體一覽

小林剛、蓮實重康、土方定一 (西洋美術) 外山卯三郎、柳亮、今泉篤男 (建築) 佐藤武夫 (工業美術) 安田清 (裝飾美術)

藏田周忠 (商業美術) 原弘 (都市計畫美術) 石原憲治 (舞臺美術) 岡池公功 (舞踊) 蘆原英了 (映畫) 岩崎昶、三雲祥之助 (寫眞) 仲田定之助、中原實 (服飾) フランシシ・フエロディ (装幀) 庄司淺水 (ジャーナル・グラフィック) 三浦逸雄

美術文化協會 (綜合) 東京市本郷區動坂町三二七 福澤方

主として獨立、二科の所謂前衛派の新進が、さきに獨立を脱退した福澤一郎を中心に昭和十四年五月新に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文筆等各分野を網羅し、綜合的に前衛運動を爲さんとする。公募展を開催す。

〔同人〕 絲岡利三郎、坂坂勇、濱松小源太、長谷川宏、濱谷次郎、土井俊夫、小川原脩、大塚耕二、大口登、柿手泰三、吉井忠、米倉壽仁、高松甚二郎、高橋迪章、鷹山宇一、土屋幸夫、藪内正直、福澤一郎、古澤岩美、小牧源太郎、寺田政明、淺原清隆、阿部芳文、變光、麻生三郎、佐田勝、齋藤義重、北脇昇、森薨之、杉全直、井上長三郎、丸末位里、三水公平、吉加江清、藤沼朝保、渡邊武、金子英雄

美術問題研究會 東京市淀橋區下落合四ノ二〇七一 尾川方

昭和十五年十二月美術に關する諸問題を檢討する目的を以て設立す。現在美術評論にたつさはる者により組織。

〔會員〕 今泉篤男、蓮實重康、富永惣一

ヒーフ

外山卯三郎、千澤植治、大口理夫、奥平英雄、尾川多計、嘉門安雄、横川毅一郎 田中一松、瀧口修造、田近憲三、谷信一 田中信行、仲田勝之助、中井宗太郎、長島喜三、仲田定之助、村田良策、内山義郎、黒田鶴心、山際靖、山田智三郎、柳亮、摩意意善郎、小池新二、江川利彦、相良德三、荒城季夫、佐波甫、北川桃雄、金原省吾、水澤澄夫、三輪福松、土方定一、森口多里、森田龜之助、鈴木進、鈴木道夫、青柳正廣、新規矩雄、税所篤二、稻崎宗重、四宮潤一、鈴木仁一、坂崎坦植村鷹千代、兒島喜久雄、何初彦、大島隆一、勝原雅大

兵庫縣新美術聯盟 (綜合) 神戸市神戶區三宮町三ノ九二 電三宮三三五

昭和五年結成の兵庫縣美術家聯盟と大正十一年創立せる兵庫縣美術協會を合同し、昭和十七年一月同縣在住の美術家を網羅して本會を組織した。國策に順應し美術文化の發展向上を計ると共に、地方文化の創造發展に努むるを目的とし、展覽會研究會其他美術文化に關する事業を行ふ。

〔會長〕 大政翼賛會同縣支部長 (委員) 飯塚周悅、伊川寛、大石輝一、小磯良平、杉浦三郎、鈴木清一、立脇泰山、林重義、三木朋太郎、宮崎翠濤、元川嘉津美、森月城、山下摩耶、山本廣洋、八島遙雲、〔囑託〕 大塚銀次郎、會員一九〇名、贊助會員二四名

廣島縣工藝協會 廣島市猿樂町、縣產業獎勵館内 電一八三八、二六三〇

昭和六年設立。工藝産業の調査、意匠圖案の研究、販賣斡旋、展覽會開催等を行ふ。

廣島美術人協會 廣島市八丁堀福屋美術部内 (東京事務所) 東京市豊島區西巢鴨四ノ八八野村方

廣島地方に於て美術文化發展に寄與し技術的指導を目的とす。昭和十六年十一月第一回展開催。會員十名。

廣島縣美術協會 (日、洋、工) 廣島市猿樂町、縣產業獎勵館内 電一八三八 大正四年創立。美術及美術工藝の發達を圖るを目的とす。公募展を開催す。

〔副會長〕 原貫之助、長尾富太郎 (主事) 堀修

備前燒陶業組合 岡山縣和氣郡伊部町役場内

昭和九年伊部町の伊部燒業者を以て伊部陶業協會を組織。伊部燒の發達を圖り展示會開催、他展への出品斡旋、宣傳等をなす。

〔組合理事長〕 木村貫一、會員二十八名 伏虎美術協會 (洋) 東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ九〇二、木下孝則方

昭和十一年設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目的とす。毎春和歌山市に公募展開催。十二年五月第二回展開催。

〔會長〕 和歌山縣知事 (會員) 木下孝則、木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之助、岡部邦香、村井正誠

福井縣漆藝會 福井縣今立郡河和田村、小林作兵衛方

福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝

の研究並發表を行ふ。

〔名譽顧問〕根尾謙兒、山崎覺太郎〔會長〕小林作兵衛、會員七名

福井縣美術協會 福井市、福井縣商品陳列所内

大正十五年創立。福井縣出身並在住の美術家を以て組織。縣下美術及工藝の發達を圖り、毎年展覽會、講習會、講演會等開催の外他展への出品斡旋を行ふ。

〔會長〕根尾謙兒

福岡縣工藝協會 福岡市天神町、福岡縣産業獎勵館内

昭和十一年設立。縣下工藝産業の發達を圖り、工藝に關する調査、展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行ふ。〔福岡縣工藝展覽會〕は同協會員が主としてその中心となる。

〔會長〕福岡縣知事

福岡縣美術協會 福岡市天神町十七〔東京事務所〕豐島區巢鴨町五ノ一一四

一 吉村方

昭和十五年九月、福岡縣出身並に縣在住の美術家及同好者等を以て組織す。毎年福岡市に於て日本畫、洋畫、彫塑、工藝に互る作品展〔招待出品〕を開く。十七年十一月第三回展開催。

〔會長〕本間精〔副會長〕畑山四男美

〔第一回委員〕〔第一部〕阿部春峰、今中素友、水上泰生、吉村忠夫〔第二部〕

兒島善三郎、坂本繁二郎、辻永、中村研一、山喜多二郎太、吉田博、和田三造、

〔第三部〕津上昌平、富永朝堂、早川朝洋、山崎朝雲、安永良德〔第四部〕仰木

政齋、岡部達男、豐田勝秋

福岡美術會〔綜合〕 福岡市因幡町福岡市通俗博物館内 電一六七五

大正十二年創立。福岡縣出身並在住の美術家を以て組織。美術の向上に資する爲中央より二科、奉陽、獨立等の諸美術展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合展を開催する。

〔會長〕〔市長〕畑山四男美〔幹事〕齋藤鳴江、白石久三郎、安部勝三、富田賢四郎

〔會員〕八十三名

福島美術協會〔洋〕 福島市、市役所内

昭和五年設立。縣下美術の發達を目的として年一回福島市に於て公募展開催の他臨時講習會講演會等を開く。

〔總裁〕福島縣知事〔會長〕佐藤澤福陽美術會〔日〕 東京市本郷區駒込

林町七六、角田磐谷方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織。東京及び郷土に於て展覽會を開催す。十七年第十四回展。

〔會長〕勝田蕉琴〔理事〕荻生天泉、太

田秋民、酒井三良〔幹事〕角田磐石、石塚省三、渡邊浩年、酒井白澄、鴻巢一善

須田善二、湯上瑤、猪卷清明

扶桑會〔綜合〕 東京市世田谷區祖師谷町二丁目四六〇 電四七七

昭和十七年七月結成。同十二月第一回公募展開催。

〔會員〕今西洋〔陶〕、大野平吉、大石俊彦、片山健吉、角浩、高橋貞一郎、高橋

惟一、高林和作、山崎武郎、齋田喬、澤

田美喜子、岸田麗子、志村一男、東山沙智子〔以上油彩〕彌吉明〔染色〕里見宗次〔産業美術〕比田井小琴〔書道〕〔客

員〕金原省吾

文展三部作家協會〔彫〕 東京市荒川區日暮里町九ノ一〇九七 藤井浩祐方

舊文、帝展、文展に出品の彫塑家に於て所屬團體を持たぬ人々が合同し昭和十四年六月東京府美術館に第一回展を開催した。會員五十名。

〔幹事〕藤井浩祐、吉田三郎、長谷川善起、中川清、木村珪二、白井保春、長田平次、小野田高節、中川爲延

壁畫藝術協會 東京市京橋區銀座一丁目皆川ビル内、圖師建築事務所内

昭和十四年六月創立。〔建築と建築裝飾〕主として壁畫の綜合的研究並びに制作〕を目的とす。

〔會員〕今和次郎、岡田哲郎、佐藤次夫、圖師嘉彦、福田平八郎、本郷新、内田巖嘉門安雄

邦畫一如會〔日〕 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇三五 石井柏亭方

邦畫一如會〔日〕

昭和十五年十二月組織。同人展を開催す。

〔會員〕津田青楓、小杉放庵、石井柏亭、藤田嗣治、石井鶴三、鍋井克之、牧野虎雄、中川紀元、木村莊八、中川一政、東

郷青兒

邦畫教育研究會 東京市赤坂區新坂町四七 大貫銀心方

昭和十二年結成。東美校日本畫及び師範科出身の美術家により組織。研究會を開催す。

〔會長〕結城素明〔評議員〕川崎小虎、矢澤弦月、小泉勝樹、山田康、常岡文龜、多賀谷健吉、松田義之、松垣龜夫〔幹事〕狩野探道、大貫銀心、大島正記、白井剛夫、石田雅秋、松垣龜夫、淺野秀一、下田舜堂〔會員〕五十名

女子美術專門學校の師範科高等科日本畫部の昭和九年度卒業生有志を以て組織

十三三年六月第四回展開催。會員九名

報道美術協會 東京市芝區西芝浦一

東京高等工藝學校内 電三田一一五六

昭和十四年設立。東京高等工藝學校卒業生有志により組織。報道美術の研究並に實踐及び會員の自覺向上を目的とす。

年一回以上展覽會開催、同十五年東京及び大阪、京都、仙臺、京城に於て「國家總力戰ボスター展」を、十六年春「戦ふ獨伊壁新聞展」を開催す。年六回機關紙

「報道美術」發行。

〔會長〕宮下孝雄〔顧問〕鈴木京平、安田祿造、鎌田彌壽治、伊東亮次〔常任幹事〕片野一男、塚田政、大塚均、松本虎雄〔幹事〕大橋正、樋口渡、日置勝駿、山上謙一〔會員〕八十四名

北海道美術協會〔綜合〕 札幌市北四條西七丁目三

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回展に至る。毎夏

講習會を開く。

〔會長〕北海道長官 戸塚九一郎〔副會長〕北海道帝國大學總長 今祐〔理事〕荒瀧實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與一郎、鬼川俊藏、島崎貢、佐野四滿美、竹内武夫

北信工藝協會 各縣廳內
長野、新潟、富山、石川、福井の五縣を以て組織し、各縣廳内に事務所を置く毎年各縣の交代で、商工省輸出工藝展の出品を目的とする試作品展、一般工藝展の開催、其他の事業を行ふ。

北方美術協會（洋、彫） 小樽市山ノ上町四四 澁谷政雄方
昭和十年、小樽出身及在住の美術家（主として洋畫彫刻）に依り結成。毎年六月に公募展、秋に試作展を開催する。尙研究所を兼平英示方に設置し、又雜誌「北方美術」を刊行。

〔會員〕兼平英示、榊田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、澁谷政雄、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會（綜合） 東京市麹町區大手町二ノ二 日清ビル六二一號 電九之内一八七七
昭和八年創立。東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織。同人展開催。

〔會長〕伯爵前田利男〔副會長〕高廣三郎〔世話人〕佐々木大樹、郷倉千毅、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助、會員五十一名

墨雲社（日） 大阪府西區南堀江通三二二 赤松雲嶺方

美術家團體一覽

大正十一年、赤松雲嶺門下に依り組織。展覽會開催。

〔會員〕四十八名

墨人會俱樂部（日） 東京市世田谷區三宿町七一 電世田谷三七〇九（呼）
昭和十二年二月創立。十七年九月改組日本畫の團體で例月座談會を開催す。

〔會員〕津田青楓、中川一政、小杉放庵、渡邊大虛、横尾翠田、吉田登穀、田中咄哉州

墨洋會（日） 下谷區谷中眞島町一
太平洋畫會内 電下谷一七九二
太平洋畫會の會員で、日本畫を描く有志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕二十名

三重縣工藝協會 三重縣津市中茶屋町 三重縣廳商工課内
昭和九年創立。縣下の工藝品製造業者販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽會講演會の開催、取引上の紹介斡旋等を行ふ。

〔會長〕三重縣經濟部長 西岡廣吉、會員百七十名

明朗美術聯盟（日） 東京市板橋區練馬南町一ノ三四八五 狩野晃行方
昭和九年一月青龍社舊同人落合朗風、川口春波に依り結成。同年秋第一回展開催、同十二年盟首落合朗風逝去し、よつて川口春波が主宰となつたが、退會した。

程美術協會、美術新協と合同。

〔同人〕狩野晃行、木利村創爾郎、渡邊日向、東條光高〔盟友〕山下昌風、島田晃州、松本晃養、吉田錦穂〔盟員〕城野三藏、青柳定義、小川晃古、廣瀬大晃、内田光風、中野瑞草、稻田玉穂

木心會（彫） 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 吉田白嶺方 電駒込二六四〇
大正七年、吉田白嶺の指導により木心會研究所が設立された。昭和十一年第一回展を開催、爾後毎年東京及び大阪に同人展を開く。

〔會員〕松村外次郎、林是、高山九羊、小林貞吾、中村竹男、松原岳南、中村直人、長谷川豐雄、岡村進、藤井隆義

〔ヤ行〕
八ツ手會（工） 東京市中野區鷺ノ宮木村章平方
昭和十一年創立。彫刻家による工藝品の製作並發表の團體。同年七月第一回展開催。

〔同人〕林是、長谷川豐雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村章平

山梨美術協會（綜合） 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四 土屋義郎方 甲府市百石町 山梨日日新聞社内
昭和十一年結成。山梨縣出身並在住の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會を開く。昭和十五年第四回展を甲府市に開催。

〔會長〕山梨日日新聞社長 野口二郎
〔會員〕六十一名

山形縣美術家協會（綜合） 東京市下谷區谷中眞島町一 菊地華秋方 電五九七三
山形縣出身美術家よりなる綜合團體で昭和十五年三月創立。十七年十一月第二回展覽會を米澤市にて開催。

〔會員〕（日本畫）根上富治、菊地華秋、石山太柏、湯原柳畝、松田修坪、高島祥光（油繪）椿貞雄、土田文雄、鈴木亞夫、渡邊義一、新海覺雄、佐藤秀夫（彫刻）新海竹藏、小野田高節、熊谷幸太郎、櫻井祐一（工藝）結城哲雄、中川哲哉、中村元雄、會員總數約六十五名

幽興會（日） 東京市澁橋區上落合二ノ六四 古川北華方
昭和十一年創立。古川北華を中心とする集で、同人展を開く。十二年六月上野松坂屋に第二回展開催。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、正宗得三郎、牧野虎雄、錢瘦鐵、近藤浩一路、中川紀元、藤田嗣治

有秋會（日） 大阪府住吉區山坂町四丁目七
健全なる邦畫の向上發展を計るを以て目的とす。創立、昭和十六年三月。十七年九月第二回展開催。會員十一名

羊和會（工） 東京市小石川區宮下町八 森田一靜方
昭和六年、舊帝展第四部入選者を以て組織。金工藝の發達を圖るを目的として毎年日本橋三越に同人展を開催す。

〔顧問〕磯崎美亞、伊藤正見、石田英一、桂光春、海野清、北原千鹿、清水龜藏、

鈴木美彦〔會員〕磯崎美夫、大關勝盛、大木秀泰、長島正親、梅垣景山、山下春興、府川一信、小杉芳盛、有田利章、宮本猛、森田一靜、鈴木春盛、鶴飼康次

洋風版畫會 東京市澁野川區西ヶ原町三六一 渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエツチング及石版畫の團體。展覽會を開催す。

〔會員〕田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

橫濱美術協會〔日、洋、版〕 橫濱市中區弘明寺町三一〇 志村計介方 電長者町一二五七

昭和七年創立。橫濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織。年一回日本畫、洋畫版畫の公募展を開く。十三年第七回展を開催した。

〔會長〕橫濱市長〔會員〕五十九名〔無鑑査〕三名

〔ラ行〕

洛黨會〔工〕 京都市伏見區桃山宗和園

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ京都陶磁器作家の團體。展覽會、研究會等を催す。

〔會長〕澤田宗山〔幹事〕松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、堯部清

離騷社 東京市板橋區常盤臺一ノ二

九 西澤笛畝方 電板橋一二〇一

大正九年創立。會員の親睦團體。

〔幹事〕西澤笛畝、金井紫雲、石川昂水

飛田周山、田口黃葵、會員三十七名
陸軍美術協會〔日、洋、彫〕 東京市麹町區麹町三ノ一二 電九段一八七一

昭和十四年四月創立。主として戰役、事變に陸軍省報道部指導の下に従軍せる畫家及び彫刻家を以て組織す。會員の作品を通じて、軍事美術に關する獎勵普及を計り陸軍と協力して興亞國策に貢獻す

〔會長〕松井石根〔副會長〕藤島武二〔總務〕石井柏亭、橋本關雪、中澤弘光〔委員〕伊原宇三郎、栗原信、清水登之

中村研一、日名子實三、向井潤吉、吉岡堅二〔監事〕大野隆徳、鶴田吾郎〔幹事〕住喜代志〔會員〕松井石根、朝井閣右衛門、荒井陸男、荒木十畝、石井柏亭、一色五郎、伊原宇三郎、井上幸、今村嘉吉

江藤純平、榎倉省吾、大野隆徳、小野田元興、柏原覺太郎、川島理一郎、川崎小虎、川端龍子、熊岡美彦、栗原信、小磯良平、小早川秋聲、小林萬吾、五味清吉、佐々貴義雄、清水登之、清水良雄、眞道黎明、鈴木榮二郎、鈴木良三、關谷陽、高澤圭一、田中佐一郎、田村孝之介、高光一也、鶴田吾郎、手島實、等々

太、中村研一、中村直人、磯伊之助、橋本關雪、橋本八百二、長谷川榮作、長谷川泰子、日名子實三、福田豐四郎、藤島武二、深澤省三、福澤一郎、南薰造、南政善、宮島久七、宮本三郎、宮田重雄、三上知治、向井潤吉、矢野鐵山、吉岡堅二、橫江嘉純、吉田三郎、吉田博、吉村忠

夫、和田香苗、脇田和柳美會〔工〕 京都市伏見區桃山宗和園内

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會を催す。

〔理事〕澤田宗山〔理事〕泰藏六、吉田長泰、青木俊勝

聊娛會〔洋〕 東京市澁野川區下落合四ノ一六二三 大給近清方

大正八年創立。故黒田清輝子及南部利淳伯及び故小笠原長幹伯の發意に依り華族及び華族籍にありたる者を以て組織せる洋畫愛好者の團體で、毎年一回展覽會を開く。

〔代表者〕男爵徳川義恕〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名

緣巷會〔洋〕 東京市杉並區東荻町六九 神津方 電荻窪二四四三

神津港人が主宰する會で、公募展を開く。昭和十七年第四回展開催。

〔會員〕神津港人、村上誠、大澤左一、佐藤利平、内堀一男、平井爲成、鳥羽宗雄、小林三郎、上田久之、小林剛、本間勘次、久光茂、中森放子、廣田剛郎

緣人社〔彫〕 東京市下谷區谷中上三崎南町六〇 伊藤鉦次方

昭和八年度東美校彫刻科製造部卒業生を以て結成、毎年六月展覽會開催。

明田川孝、北青史
綠耀彫刻會〔彫〕 東京市豊島區千川町一ノ三一七〇 中野昂方

舊稱大東彫塑會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組織。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を翼賛せんとす。會員六十名

留加會〔洋〕 東京市目黒區下目黒四ノ一〇〇四 電大崎三五一四

昭和三年創立。文化學院美術部出身者有志を以て組織す。但し十六年三月會規を改め文化學院と絶縁した。展覽會を開催する。

〔會長〕石井柏亭〔總務〕岡見弟三〔會計〕鍋谷傳一郎

麗交會〔工〕 京都市中京區宮小路四條上ル、龍文堂安之介方

昭和十一年三月、東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名により結成。相互の研鑽を目的とす。

〔會員〕各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰三、海野建夫、信田洋、山本目燭、北原三佳、宮之原謙、(以上東京)伊東陶山、井田宜秋、龍文堂安之介、小川文齋、加藤宗巖、楠部彌式、淺見五郎助、道林俊正、平館會

歷程美術協會〔綜合〕 東京市世田谷區上馬町一ノ八六六 山岡方 京都市東山區五條坂六丁目 山崎方

昭和十三年六月創立。新日本畫の創作を趣旨とす。公募展覽會を開く。十八年二月明朗美術聯盟、美術新協と合同。

〔會員〕田口莊、山岡良文、蒔田皓成、

村山東吳、福井日出夫、山崎隆、松本一穂、丹生公男〔會友〕九名

連袖會〔洋〕 東京市牛込區市ヶ谷砂土原町一ノ二 久野方

昭和十二年安井會太郎の門下を以て組織。十七年第五回展を開く。

〔會員〕 奥田郁太郎、小野末、片多三吉金子博信、狩野壽一、高田誠、中村琢二

二宮雪夫、高見耿太郎、久野昌康、本郷惇、三浦俊輔、渡邊正太郎、渡邊宗一、

丸野豐司、菅野矢一

朗峯畫塾〔日〕 東京市大森區池上本町一八六

初め深水畫塾と稱す。日本畫の指導達成を旨とし、月一回研究會を開く。

〔主宰〕 伊東深水〔顧問〕 渡邊泰次、小林源太郎〔幹事〕 遠藤燦可、塾員約百名

六潮會〔日、洋〕 東京市目黒區大原町一六二 横川毅一郎方

昭和五年創立。展覽會を開く。

〔會員〕 中村岳陵、中川紀元、山口蓬泰

牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

六萌會〔洋〕 横濱市鶴見區東幸尾町一六〇七 鳥羽宗雄方

昭和八年度の美術學校出身者及び有志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕 鳥羽宗雄、橋原健三、中村新次郎、上田久之、小林三郎、小林剛、角浩東山紗智子

〔行〕

和光會〔工〕 東京市下谷區谷中天王寺二七 津田信夫方

昭和九年設立。同人展を開く。

〔會員〕 和田三造、津田信夫、沼田一雅高村豐周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村靖山、岩田藤七、香取秀眞、北原千鹿富本憲吉

定期刊行物一覽 (五十音順)

現代美術關係

一 般

畫 論 月刊、藤本詔三編輯、造形藝術社發行、世田谷區世田谷二ノ二〇七

七、二圓

國 畫 月刊、齋田元次郎編輯、塔影社發行、麴町區二番町一一番地ノ一、

電九段三三四〇、二圓

季 刊 美術 月刊、藤森順三編輯、美術評論社發行、大森區馬込町東一ノ一三三

一、二圓

國 民 美術 月刊、岩佐新編輯、國民美術社發行、四谷區新宿一丁目一二松岡ビ

ル、電四谷四四三二、一圓三〇錢

新 美 術 月刊、山本廣洋編輯、新美社發行、神戸市須磨區離宮前町二、一圓

月刊、大下正男編輯、春鳥會發行、小石川區關口駒井町三、電牛込

二〇四三、一圓六〇錢

生 活 美術 月刊、山口寅夫編輯、アトリエ社發行、牛込區西五軒町三四、電牛

込六五六二、一圓

日 本 美術 月刊、發行人石川幸三郎發行、荒城季夫編輯、美の國社發行、豐島

區雜司谷町七ノ九四七、電牛込七四二七、一圓三〇錢

定期刊行物一覽

美 術 新 報 旬刊、猪木卓爾編輯、日本美術新報社發行、麴町區九段一ノ一四、

電九段二七一五、五〇錢

美術文化新聞 週刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、蒲田區蓮沼町一〇

八、月一圓五〇錢

エツチング 月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ

三、電九段五一四、二五錢

南 畫 鑑 賞 月刊、小室翠雲主宰、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麴町區三番

町七、電九段六二〇、四〇錢

工 藝

月 刊 民 藝 月刊、日本民藝協會編、同所發行、芝區今入町一五玉屋ビル、電銀

座七六三四、五〇錢

工 藝 月刊、日本民藝協會編輯發行、芝區今入町一五玉屋ビル、電銀座七

六三四、二圓二〇錢

工 藝 ニ ュ ー ス 月刊、商工省工藝指導所編輯、工業調査協會發行、神田區旅籠町三

ノ四、三五錢

汎 工 藝 月刊、柴崎俊吉編輯、汎工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇

年四圓

輸 出 工 藝 隔月、池田美明編輯、日本輸出工藝聯合會發行、麴町區九ノ内二丁

目九ビル内、電九ノ内五三七二、六〇八五、六〇八六、三〇錢

建 築

- 建築雜誌 月刊、北村正雄編輯、建築學會發行、京橋區西銀座三ノ一、電京橋一二三二、一二三八、一圓
- 建築世界 月刊、鈴木增雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、八〇錢
- 住宅 月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢
- 新建築 月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二、八〇錢
- 日本建築士 月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館內、電京橋六二〇、四〇錢
- 教育 月刊、後藤福次郎編輯、圖書工作研究所發行、淺草區三筋町二ノ一、電淺草五一九〇、三〇錢
- 造形教育 舊「教育美術」「圖書と工作」「圖書室通信」合併改題、月刊、河井博編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館內、電九段一一六六、三〇錢
- 圖書と手工 月刊、三浦直政編輯、錦巷會發行、世田谷區田園調布二ノ七〇九、三〇錢
- 美術 月刊、圖書教育獎勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、二五錢
- 報告書類
- 大日本窯業協會雜誌 月刊、大日本窯業協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館內、電京橋五五一九
- 園報 年一回以上、松田義之編輯、東京美術學校報國團發行、非賣
- 博物館研究 月刊、棚橋源太郎編輯、社団法人日本博物館協會發行、下谷區上野公園東京科學博物館內、電下谷八二〇〇、八二〇一

古美術關係

美術

以可留我 年四回、佐伯啓造編輯、鶴故郷舎發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六

- 學藝史 八、電法隆寺四、每卷一圓五〇錢平均
- 美術史 鶴田潔編輯、木曜會發行、牛込區二十騎町三二、非賣
- 京都市美術青年會誌 月刊、脇本十九郎編輯、東京美術研究所發行、本郷區駒込千駄木町二三四、電駒込二四九五、五〇錢
- 建築史 中西勇太郎編輯、京都美術青年會發行、京都市御池寺町東入隔月、建築史研究會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一一、六〇錢
- 國華 月刊、瀧精一監修、村山長舉後援、名義人宮入松雄、國華社發行、麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五圓
- 國寶 月刊、矢野國太郎編輯、國寶社發行、麴町區平河町二ノ一一、電九段一九、五〇錢
- 史蹟と古美術 年十回、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西入、田住昇、電下一五七五（目下發行停止中）
- 史迹と美術 月刊、川勝政太郎編輯、一條書房發行、京都市中京區寺町九太町南入、四〇錢
- 書道 月刊、殿本真三編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ三、六〇錢
- 新風土記 月刊、日本郷土會編輯、國寶社發行、麴町區平河町二ノ一一、電九段一九、四五錢
- 清閑美術 隔月發行、鈴木直樹編輯、清閑舎發行、大阪市東區道修町四丁目月刊、遠藤敏夫編輯、兼發行、寶雲舎發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、電日本橋一九二六、二四五六、二〇八一、一圓
- 陶磁 月刊、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル二階、五〇錢
- 東美 年刊、鈴木榮之亮編輯、東京美術青年會發行、芝區新橋七ノ一二、東京美術會館內、非賣
- 東洋建築 月刊、相模書房發行、日本橋區通二丁目四日本橋ビル（休刊中）
- 東洋美術 四回、小川晴鳴編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良室博物館橫、電八七二、二圓（休刊）
- な の か 不定、香取正彦編輯、七日會發行、瀧野川區田端五〇〇
- 寧樂 不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市龍松院、二圓（休刊）
- 日本美術協會報告 年二回、日種義太郎編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣

美術研究 隔月發行、美術研究所編輯發行、下谷區上野公園美術研究所內、電

佛敎美術 不定、源豐宗編輯、佛敎美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四

瓶史 五、電上二〇四七、(休刊)

寶雲 年四回、西川一鶴編輯、去風洞發行、京都市左京區淨土寺馬場町一

大和志 二、二回五〇錢

夢殿 年二回、佐伯啓造編輯、船故郷會發行、奈良縣生駒郡法隆寺村法隆

林泉 寺二六八、電法隆寺四、四圓平均

月刊、重森三玲編輯、京都林泉協會發行、京都市左京區吉田下大路

町四五、四〇錢

考古學及歷史關係

貨幣 月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區荏原一ノ二九一、七

五錢

考古學雜誌 月刊、日本考古學會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一一、

五〇錢

國史學 年四回、國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學內、六〇

錢

國史回顧會紀要 國史回顧會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五大隈侯爵邸內

古代文化 月刊、日本古代文化學會發行、神田區岩本町三

四天王寺 月刊、出口常順編輯、四天王寺事務所發行、大阪市天王寺區元町、

三〇錢

史苑 年四回、立教大學史學會編輯發行、豐島區池袋三、七五錢

史學 年四回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室

史學研究 年四回、廣島史學研究會編輯、中文館書店發行、牛込區辨天町一七

史學雜誌 月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、五五錢

史觀 季刊、早稻田大學文學部岸畑久吉編輯、早稻田大學史學會發行、淀

定期刊行物一覽

史蹟名勝天然紀念物 月刊、武井貞賢編輯、史蹟名勝天然紀念物保存協會發行、麴町

區霞ヶ關三ノ四文部省宗教局保存課內

史潮 年四回、大塚史學會編輯、大塚史學會發行、小石川區大塚窪町東京

文理大內、八〇錢

史林 年四回、京都帝國大學文學部內史學研究會編輯、內外出版印刷株式

會社發行、京都市西洞院通七條南入、九〇錢

東方學報 (東京)年三回、東方文化學院編輯發行、小石川區大塚町五六ノ一五

定價不定

(京都)年四回、東方文化研究所編輯、內外出版印刷株式會社發行、

京都市西洞院通七條南入、二圓

東洋學報 年四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麴町區內幸町二ノ一、電銀

座四〇三九、一圓五〇錢

東洋史研究 年六回、京都帝國大學文學部陳列館內東洋史研究會編輯、藥文堂發

行京都市中京區寺町通丸太町南入

鴨台史報 大正大學史學會編輯發行、豐島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研

究室

立正史學 立正大學考古學研究會發行、品川區東大崎四丁目

龍谷史壇 龍谷大學史學、佛敎史學會編輯發行、京都市七條龍谷大學史學研究

室

歷史學研究 月刊、歷史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史地理 月刊、歷史文化研究會編輯發行、豐島區巢鴨七ノ一六九四

月刊、花見朝己編輯、日本歷史地理學會發行、神田區錦町三ノ二二

五〇錢

其他

思想 月刊、長田幹雄編輯、岩波書店發行、神田一ツ橋二ノ三、五〇錢

文化 月刊、大藏出版株式會社編輯發行、本鄉區本鄉三丁目、二〇錢

國際文化 月刊、東北帝國大學文學會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ

三、五〇錢

隔月刊、中村總六編輯、國際文化振興會發行、麴町區丸ノ內二丁目

一六明治生命館內、三〇錢

美術家及美術關係者名簿

凡 例

一、本名簿に載せた美術家及美術關係者の数は二五七八名である、わが國において美術家として社會的地位を有する人々を採録した。不備の點は次年度に補ひたい。

一、建築家は美術的見地から見た建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は氏名の頭文字の發音により五十音順に記載した。發音の同じ場合は字劃の少いものを先にし、頭文字の同じものは二字目の發音によりその發音の同じ場合は字劃の少いものを先にした。但し同字は訓音の異なるものも可成一箇所に集めた。

安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用ひた略語は大體左の通りである。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝
(漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (紃)刺繡 (木)木工
藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築 (學)學者 (文)文藝家
(批)美術批評家 (教)美術教育家 (記)美術記者 (帝院)帝國美術院 (帝院賞)
帝國美術院賞 (舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會及帝國美術院展覽會 (舊文展)舊
文部省美術展覽會 (文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回以降文部省美術
展覽會 (藝術院會員)帝國藝術院會員 (學士院會員)帝國學士院會員 (國寶委

員)國寶保存會委員 (重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員 (史蹟名勝委
員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員 (朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名
勝天然紀念物保存會委員 (東美校)東京美術學校 (日美校)日本美術學校 (女
美校)女子美術學校・女子美術專門學校 (東京高工藝校)東京高等工藝學校 (東
京高工校)東京高等工業學校 (美術院)日本美術院或は同研究所 (美術協會)日
本美術協會 (太平洋)太平洋畫會研究所或は太平洋美術學校 (川端校)川端畫學
校 (水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所 (本郷研)本郷繪畫研究所 (南畫院)
日本南畫院 (葵橋研)葵橋研究所 (京都美工校)京都市立美術工藝學校 (京都
繪專校)京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝校)京都高等工藝學校 (大阪美校)
大阪美術學校 (信濃橋研)信濃橋洋畫研究所 (自由畫壇)日本自由畫壇
一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (57~107 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.57-107)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十七年版

昭和十八年三月二十五日印刷
昭和十八年三月三十日發行

定價 九圓

東京市下谷區上野公園

著者兼發行者 美術研究所

東京市下谷區二長町一番地

印刷者 井上源之丞

東京市下谷區二長町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社

(東京二二二)

著作權所有

發賣所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波書店

振替口座東京二六二四〇番